
とある偽典の元始種子

清良 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある偽典の元始種子

【Nコード】

N6470U

【作者名】

清良 要

【あらすじ】

総人口230万人のうち8割が学生という、東京西部にある科学の街“学園都市”。そこで暮らす主人公・上条当麻は敵対してきた少女たち“アイテム”のメンバーと喫茶店を開く。そして、魔術世界の住人であるインデックスもそこで働くようになり……。

はじめまして、この作品は『とある魔術の禁書目録』とある科学の超電磁砲』を原作とした二次創作となります。主人公・上条当麻が両作品のストーリーをミックスしたものに介入していくといった感

じの内容になります。

それと、この作品タイトルの『とある○○』の『○○』は章が変わるごとにタイトルの方も変更します。なので、「あれ？こんな作品読んだ覚えがないぞ」となったときはタイトルの『元始種子』で同一作品と判断してください。

第一話 遭遇（前書き）

どうもはじめまして。魔法や能力物が書きたくて書いてみましたが、キャラの口調がわかりません。誤字脱字やキャラの口調がおかしいところがあるかもしれませんが、徐々に慣れていき後で書きなおしたいと思います。それではお願いします。

第一話 遭遇

「くそっ！ くそっ！ あーちくしょー、上条さんがなにしたってんですかー!?!」

ここは総人口230万人のうち8割が学生という、東京西部にある科学の街“学園都市”だ。そこで暮らす俺、上条^{かみじょう}当麻^{どうま}は今現在、必死に走っている。というのも、とある少女たちに追われているからだ。なぜ、こんなことになったのかは少し時を遡る――

――学校が終わってから放課後、クラスメイトの馬鹿共と遊んだその帰り。

「じゃあ、ボクはこっちやから。つつちー、カミヤんまたなー」

「おつかれー。また、明日にゃー」

「おう、また学校でな!」

そういつてクラスメイトの青髪ピアス、通称“青ピ”は手を振って自分の下宿しているパン屋のある方へ去っていき、俺と土御門^{つちみかど}元春^{もと}はそれを見送った。

別れた後、2人で雑談しながら歩いていると、家に食材がほとんどなくてスーパーに行って買わないといけないことを思い出した。

「悪い土御門。俺、食材買わないといけないんだった」

「ん？ そうか、じゃあ早いところ行った方がいいぜい。特売まで

時間もないしな」

言いながら携帯で現在の時刻を覚えてくる土御門。見るとたしかに、特売まであと30分といった時間だった。なら、少し急ぐかと思いいここで別れることにする。

「んじゃ、ちょっと急いで行ってくる。悪いが先に帰っててくれ。またな」

「またにゃー、おつかれー」

そういって、土御門とも別れ俺は少し駆け足でスーパーへ向かった。

寮からはかなり離れているが、毎日夕方に特別ご奉仕品を先着限定で売るスーパーがある。別にお金に困っているわけではないが、学生のうちからこういったお金の管理をしっかりしておいた方がいいと思っっているのも、俺もなるべく節約するためにそこを利用するようになっている。

「まあ、あと20分もあるし今日は大丈夫そうだな……ん？」

いいながらスーパーを目指していると、ガラの悪い男らが1人の女の子を囲んでいるのが見えた。

「まったく、男が女の子1人を囲んで恥ずかしくないのか？　ちょっと行くか」

囲まれている女の子を助けるため、俺は連中のもとへいく。
近付くと会話が聞えてくるが、どうやらナンパしているようだ。

「なあ、ヒマしてんだろ？ オレらとちょっと遊ぼうぜ」

「なんなら、メシ奢るからさ。楽しいことしたいだろ？」

「……………」

連中のうち何人かが話しかけているが、相手の女の子はボーっとして話を聞いていないみたいだ。だが、いつまでもそんな様子でいることに痺れを切らしたのか、男の1人が大声で怒鳴る。

「ちっ、いい加減黙ってないで、一緒にこい！」

そういつて女の子の腕を引っ張ろうとするので、急いで止めに入る。

「やめとけて。ナンパのつもりなら、相手にされてない時点で諦めろよな」

「ああ？ 誰だ、お前？ 関係ねえヤツは引っ込んでろ。それともお前がオレらの相手してくれんのか、ウニ頭クン？」

言いながら、男と仲間たちは俺の方を向いて拳をパキパキ鳴らしたりしている。ナンパ失敗の憂さ晴らしってことですかね…………って、こいつ俺の髪型をウニ頭って言ったな！？

「てめえ、人の髪型を馬鹿にしやがって！ 上等だ、まとめて相手してやらあ！」

「こっちこそ上等だ！ 5人相手に勝てると思うな、やつちまえ！」

いいながら、男たちは一斉に向かってきた。そして俺も、人の髪型を馬鹿にしたヤツらに制裁を加えるため迎え撃った。

「ぐはっ……っ、つええ」

俺に殴られ倒れながら最後の男がそういった。

「どうだ、次に人の髪型を馬鹿にしたらこれぐらいじゃ済まさないからな。わかったら、さっさといけ」

そういうと、チンピラ共は「ちくしょう…」といって走って逃げていった。これで当分ここでナンパしたりはしないだろう。そう思いながら、絡まれていた女の子に話しかける。

「おう、大丈夫だったか？ ゴメンな、助けるの遅くなって」

「大丈夫、気にしてない」

俺が話しかけるとジャージ姿の女の子はボーっとしながらもそう答えた。

「そっか、俺は上条当麻だ。また、なんかあったら遠慮なく言ってくれ。それじゃあ用事あるから行くけど、気を付けてな」

「私は滝壺^{たきつぼ} 理后^{りこう}。助けてくれてありがとう。またね、かみじょう」

言ってスーパーに向かうため別れることとする。まあ、余計な時間を過ごしたせいで特売は終わっているだろうが、地域のスーパーでも安いので他に行くよりは節約になる。

そう思って歩き始めようとすると、横から大きな声が聞えてきた。

「ああっ、こんなどこにいました！　って、その男は滝壺さんになにしてんですか。滝壺さんをナンパするとは超良い度胸してますね！」

そういつて、突然あらわれた短めのワンピースを着た女の子が走ってきたと思ったら、いきなり殴りかかってきた！？

「うお！？　危ないな！　ってか、上条さんはなにもしてませんことよ！」

避けながら、言うが相手の子は構わず拳をあてようと何度も殴りかかってくる。ってか、拳を振る度にブォンブォンいつてんですけど、どんな威力で殴る気ですか！？

「犯罪者が超よく言うセリフですね！　ってか、なんで避けるんですか！」

「いや、そんな音で振る拳に当たったら怪我するだろうが！」

会話をしながらも相手は拳を振り続け、俺は避け続けるという状態

が続く。

滝壺っていった子の知り合いみたいだし、誤解を解いて助けてくれると嬉しいですね。

「あー面倒だ！ いい加減にしなさいっての！」

「え！？ きゃあ！」

俺は相手の拳を右手で受け止めると、そのまま足払いをかけて相手を組み伏せる。もちろん、女の子に怪我をさせないように足から落ちるようにして、今も腕の関節を背中側でキメているだけだ。

「女の子がそんな乱暴なことばかりしちゃいけません！」

「くう、なんで私の拳を受けて無事なんですか？」

「ん？ ああ、能力使ってたのか。まあ、運が良かったってだけだろ。偶然だよ偶然」

そう言ってから関節をキメていた手を離して、相手を立たせる。

「じゃ、本当に行くから。またな、滝壺。この子の誤解を解いておいてくれ」

「わかった、まかせて」

「え？ 誤解ってなんのことですか？」

「大丈夫、あとできぬはたには説明する」

状況を理解できていないようだったが、絹旗と呼ばれた少女のことへの説明などは滝壺にまかせて俺はスーパーに向かった。

第一話 遭遇（後書き）

Word使って書いてるんですが話をどこで区切るか悩んだので、短めでたくさん投稿する方式でいきたいと思います。

第二話 アイテム

上条が去ったあと、滝壺と絹旗は自分たちの待ち合わせ場所に向かって歩いていった。

「で、滝壺さん。さっきの男は超ナンパじゃないんですか？」

「ちがう。かみじょうは、ナンパしてきた男を追い払ってくれたの」

「へえ、自分からやっかいごとに超首を突っ込むタイプなんですね。相当のお人好しなのか、偽善者なのかどっちですかね」

そう言って、絹旗きぬはた最愛さいあいは呆れたような顔をしている。だが、さっきのことを思い出したのか不思議そうな顔をして滝壺に話しかけた。

「そういえば、なんでさっきの男には私の能力が超効かなかったんでしょうね？ 加減はしてましたがちゃんと、オフエンスアーマー空素装甲を使ってたのに」

「わかんない。でも、ナンパしてきた相手の攻撃も手で弾いて消してたよ？ それに、かみじょうからはAIM拡散力場が感じられなかった。だから、なにかジャマーかキャンセラー的な能力なのかも」

滝壺がそういうと、再び「ふーむ…」と考え始める絹旗。だが、話しているうちに待ち合わせ場所に着いてしまった。

「まあ一応、麦野にも説明しておいた方がいいかもしれませんね。」

超ありえないと思いますが、あの男も暗部に関わりがあるかもしれませんから」

いいながら開いた自動ドアを通り、いつもの待ち合わせ場所であるファミレスの指定席である一番奥へ進んでいく。そこには既に2人の女子が座って待っていた。

「遅いわよ滝壺。あんま、手間かけさせんじゃないわよ」

「うん。ごめんね、むぎの」

声をかけてきた麦野^{むぎの} 沈利^{しずり}に謝ると、滝壺と絹旗は席に座る。そして、先に座っていたもう1人の女子、フレンダⅡセイヴェルンが遅れてきた2人に問いかける。

「結局、なんで遅れたって訳よ？」

「どうやら、ナンパされてたみたいです。まあ、見つけたときにはソイツらの代わりに超変な男がいたんですけどね」

「変な男？」

絹旗の言葉が気になったのか、麦野が聞き返す。

「はい。なんかの能力でしょうけど、こっちの能力を超無効化したんです。ねえ、滝壺さん？」

「うん。かみじょうは、ナンパしてきた相手の能力も消してた。AIM拡散力場もなかったから、ジャマーかキャンセラー系の能力だと思う」

そういうと、麦野は真剣な表情で携帯端末を取り出し何かを調べ始めた。

「どうしたって訳よ、麦野。」

「わかんないの？ レベル4の能力を無効化できるのほどの力なのよ？ でも、無効化能力なんてモノ聞いた事ないわ。そんな、この街で生きる能力者に対するジョーカーなのに、いままでなんの情報もないなんて異常でしょ」

説明しながらも操作を続ける麦野。滝壺を除く2人はその説明をきいて確かにこれが異常だという事に気付く。

暗部組織“アイテム”に所属している自分たち。たしかに、暗部でも下の方の組織だが、学園都市に7人しかいないレベル5の第四位・メルトダウナー原子崩しである麦野がいるこのグループにはそれなりの情報が入ってくる。しかし、無効化能力者など聞いた事もない。そう考えると、確かに異常なことである。

そんな事を思っている2人を放っておいて操作を続けるが情報が出てこない。だが、そういえば滝壺が名前をいていたことを思い出し、麦野は尋ねることにする。

「ねえ、滝壺。そいつの名前は？」

「え？ かみじょうとうまって言ってたよ」

「KAMIJOU TOMAっど。お、出た。なにになに……ああ？」

書庫にアクセスして検索してみると情報が出た。どうやら、上条当麻という高校生らしい。だが、その能力のところをみると驚きの情報が載っていた。

「かみじょうは何て能力なの？」

「あー、能力名なし。完全な無能力者^{レベル0}ってことになるわね」

「ええ！？」　でも、空素装甲の拳を片手で受け止めたんですよ？」

麦野の言葉が信じられず、絹旗は聞き返す。だが、麦野自身も納得していないようで操作を続けながら言う。

「レベル0ってことは、計測できない力なのか上層部どもが絡んでるのか？　ただの学生相手に？」

そういつて考えていると、横からフレンドが話しかけた。

「麦野、都市伝説のところに無効化能力者のことが載ってたって訳よ。えーっと、第三位の電撃を喰らっても無傷で逃げまくる男？？」

「あ？　都市伝説でしょ？　さすがに、レベル5の攻撃まで無効化できるんならソイツもレベル5に認定されてるはずよ」

「でも、目撃情報がかなり多いみたいよ？　結局、麦野が言ってた計測不能か上層部絡みってことじゃないの？」

そういつて、ケータイで都市伝説の目撃情報のページをみていくフレンド。それをきいて難しい顔をして麦野が考えていると、連絡用

のケータイに着信が入った。

「《ピッ!》　もしもし?」

『仕事よー。中の技術を外に出そうとしてる研究員の男がいるから、捕まえて取引先とかの情報を吐かせてちょうだい。最悪、殺して構わないけど、できるだけ生け捕りね。詳しいことは端末に送っておくわ』

「まあた、しょぼい仕事ね。ま、わかったわ…あ、そうだ。ねえ、上条当麻って男について調べてくんない?」

『上条当麻?　めんどくさいわね。まあ、気が向いたら端末に送っておくわ。じゃあね』

相手がそう言うのと電話がきれた。そして、直ぐに端末に仕事の詳細なデータが送られてくる。

「じゃあ、今日の8時から仕事だから。それまではアジトで待機ね、いくわよ」

そういって、麦野は席を立つと他のメンバーたちも続いて席をたち店を出ていった。

滝壺を助けたあとスーパーに行くと予想通り特売は終わっていた。しょうがないので、材料と半額になっていた総菜を買ってから寮に帰り食事などを済ませて今は休んでいる。

「ふう、7時半か課題も終わったしどうするかな。ちょっと遠いが飲み物を買うついでにコンビニで立ち読みでもしてくるかな」

そう決めると、部屋着からラフめな外着に着替えて財布とケータイを持ってコンビニへ向かうことにした。

現在の時刻は8時半をまわったところ。仕事の命令文に書いてた通り、外の人間に学園都市の技術を洩らそうとした男の取引現場を押さえた麦野たち。証人は1人いればいいので取引相手を殺すと、逃げ出した男を裏路地に追い詰めた。

「わ、わかった。なんでも話す、だから殺さないでくれ！」

「うわあ、超清々しいほどにヘタレですね」

「結局、自分の研究成果でもないもので小遣い稼ぎするようなセコイ男って訳よ」

絹旗とフレンダが必死に命乞いする男をみてそう言うと、後ろからついてきた滝壺も口を開く。

「あんまり、本当のこといっちゃ可哀想だよ」

「アンタが一番キツイこと言ってるけどね…で、オッサン。なるべく、生け捕りしろって言われてるんだけど、正直めんどくさいのよね。だから、死ね」

そう言うと、麦野は男に向けて手からレーザーのようなものを放つ。男は全く反応できずにそのまま熱量で溶けて死んでしまった。

「あちゃー、また原型も残ってないって訳よ」

「どうでもいいでしょ。終わったんだし帰るわよ」

そう言って裏路地を後にする麦野たち。だが、裏路地から出たところ
で思わぬ再会をすることになる。

第三話 幻想殺し

「あ、かみじょう」

コンビニで立ち読みした帰りに寮へ帰っていると横から急に話しかけられた。声のした方に顔を向けると、夕方に会ったジャージ姿の少女・滝壺と、絹旗と呼ばれていた少女に知らない女子が2人いた。

「ん？ よう、滝壺。また会ったな。こんな時間になにしてんだ？ 危ないから友達の人らも早めに帰った方がいいぞ」

「うん。いまから、帰るとこだから大丈夫」

「そっか、じゃあな」

そういつて別れて寮へ帰るため再び進み始めると、急に嫌な予感がしたのでそっちに振り返りながら右手を向けた。すると、レーザーが迫ってきており右手に当たるとそれは消え去った。

「っ！？ 危ねえな、急に何すんだ！」

攻撃してきた相手を見ると、4人の中で一番年上っぽい茶髪の子がこちらに手を向けていた。他の子がビックリした顔をしていることから、突発的な行動のようだ。そう思っていると、相手が口を開く。

「いやあ、絹旗たちの言ってる事が本当か確かめたくてね…で、お前なにもんだ？ レベル5の攻撃まで無効化するレベル0なんて聞いたことねえぞ」

最初は笑顔で話していたが、急に相手の雰囲気が変わる。発言が本
当なら序列はわからないがレベル5らしい。まあ、第3位の御坂^{みさか}
美琴^{みこと}の攻撃でも打ち消せるんだ。他の序列の能力だって打ち消せて
もおかしくない。

「ははは、なに言ってるんですか。こっちは善良な一般市民たるレ
ベル0の無能力者ですよ。超能力者のレベル5様の相手なんてでき
るわけではないじゃないですか」

「ははは」と愛想笑いしながらそう言うと、再び相手はレーザーを
放ってきた。

「うわっ!？」

「ゴチャゴチャくだらねえこと言ってるじゃねえよ。お前の能力
について話せて言ってるんだから、さっさと吐けば良いんだよ。ぶ
ち殺されてえのか？」

本当にやばい、相手の目がこれは脅しではないと言っている。なら
ば、俺がとるべき戦法は1つ。逃げるが勝ち!そう考えた瞬間に全
速力で相手が出てきたのとは違う裏路地に入り逃げることにする。

「っ!!　なに逃げてんだクソ野郎!」

「うるせえ、戦略的撤退っていうんだよ!」

「ちっ、絹旗お前はアイツを追え。私たちは車で逃げた方に向か
う」

「えー…わかりました。さっさと来てくださいね」

そういうと、俺に殴りかかってきた子が追いかけてくる。だが、ときどきゴミ箱とかを投げってくるのは止めて欲しい。

「そんなに走ると下着見えるぞ！」

「残念、そんなことは超わかってるので計算してギリギリ見えないう長さにしてあるんですよ」

「そうか、よ！」

逃げながら、こっちもゴミ箱を蹴り倒して相手の邪魔になるようにしてみる。だが、

「超甘いです！」

そう言ってゴミ箱を殴ってこっちに飛ばしてきた。急いで道を曲がって避ける。すると、相手の盛大な舌打ちが聞こえてくる。

「くそっ！　くそっ！　あーちくしょー、上条さんがなにしたいってんですかー！？」

「素直に能力のことを話せば超何もしませんよ」

「お前たちはプライバシーーってのを知らんのか！　なら、交換条件でお前らの電話番号とアドレスよこせ！」

「超お断りします」

そんな風に会話しながら逃げていると、路地を抜けて学区のはずれ

にある工場地帯に近いところに出てしまった。よく見ると、遠くからこっちに車が向かってきている。

「誘導されてたってことかよ」

「いまごろ、気付いても遅いですよ!」

「うんにゃ、人質がいればなんとかなる!」

相手も仲間が人質に取られてれば迂闊なことはしないだろう、そう思い急に反転して絹旗に近付く。そんな行動をまったく予想してなかったのか驚いた顔をしているが構わず攻撃する。

「そらよつと!」

「くう、無効化とは超反則です!」

殴りかかると、無効化されることを恐れてか後ろに逃げる絹旗。だが、バックステップは次への行動に移りづらい最も愚かな逃げ方だぜ!

「ほら、捕まえたつと!」

「ちよ、離しなさい!　こら、セクハラで超訴えますよ!」

腕をとって、再び関節をキメるとそんなことを言ってくる絹旗。だが五月蠅いので、地面に倒しておくことにする。

「痛っ!　なんで、地面に倒すんですか。ってか、背中に超乗らないでください!」

「やかましい。人質は黙ってろ」

地面に倒した絹旗の背中に座りながら車の到着を待つ。その間は右手で腕をキメ続けて騒ぐと少し捻って痛みを与える。何回かやると黙るようになり、そうなったところで車が到着した。

「遅かったな。あんまり遅いんで、新しい椅子を調達しちまったぞ」

「さっきと態度が随分違うじゃねえか。人質とってご機嫌か？」

車から降りてきたレベル5の女に話しかけると、相手も悪人的な笑顔で話しかけてきた。

「いや、椅子の感触が思いの外よくてな。それでご機嫌なだけだ。で、この椅子やるから逃がしてくれ。俺は戦いたくない」

「そんな話しに通じると思ってたのか？ ええ、イマジンブレイカー幻想殺しさんよ
お」

ニヤニヤしながら、相手は俺の能力名を言ってくる。ってか、俺の能力知ってるならなんでこんなことしてくんだ？

「名前知ってんなら、能力の方もわかってんだろ？ なら、もう良いじゃねえか。終わりにしてかえろうぜ」

「最初はそのつもりだったが、途中でお前の情報がきて気が変わったんだよ。人の能力ポンポン消すやつなんて生かしておけるわけないだろ。暗部なめてんのか？」

「聞かなかったことにしてやる。お互い会わなかった、無関係。これでいいだろ？　だから、後ろの金髪も銃を降ろせ。撃つならこっちも本気にならないといけないからな」

レベル5の後ろからこっちに向かって銃を構えている金髪の外国人にそういう。だが、相手は銃を降ろそうとしない。ならばとこっちも、絹旗の首を掴んで立たせる。

「ぐう…」

「ほら、仲間を殺したくないだろ？　諦めてさっさと帰れ」

そう言って、レベル5を睨むが相手は逆におかしそうな顔をしている。すると、急に笑い始めた。

「アーハッハ！　笑わせるじゃねえか、幻想殺し！　てめえの能力はバレてるんだよ。右手で触れた能力をキャンセルするだけだろうが。つまり、絹旗の能力を消すために右手の塞がってるお前なんて無能力者と変わらねえ！」

「…本当にそう言い切れるか？　自分の能力すら完全に把握できてないのに他人の能力がそれだけなんて、わかんねえだろ。だから、やめとけ。攻撃してきたらお前を殺す。これは脅しじゃねえ」

俺の言ったことが癪に障ったのか、鬼のような形相で手をこっちに向けてきた。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・確・定・ね。望み通り死にやがれえええええっ！」

相手はこっちに味方がいるにも関わらず怒りのままにレーザーを放ってきた。レベル5のくせに随分と感情的だな。まあ、ビリビリも似たようなもんだが。そう思いながら心の中に潜り幻想殺しで封印している能力を解放する。

「俺はその存在を許可しない：消えろ」

そう告げるだけで、迫っていたレーザーはそのまま消え去った。だが、相手はなにが起こったのか理解できていないようだ。なので、再起動を促すため次の行動に移る。

「対象を認識、存在を把握。：序列第4位・原子崩しの麦野沈利か。暗部組織“アイテム”のリーダーねえ。なら、俺みたいな表の人間に手を出しちゃまずいだろう？ まあ、もう遅いけどな」

「っ！？ お前がなんでそんな情報を知ってんだ？」

「対象複数指定、認識により存在を把握。：滝壺理后は聞いたが他は、絹旗最愛とフレンダⅡセイヴェルンか。ってか、危ないからお前の銃は没収だ」

「えっ！？ なにが起こったって訳よ！？」

突然、自分の持っていた銃が消えると今度は俺の手に握られているのを見て驚くフレンダ。ま、無効化能力としか思ってたかったら、こんな空間移動系みたいな真似されたら驚くわな。考えながら、手に持っている銃を絹旗のこめかみに当てる。

「さて、武器も手に入ったらし人質でも殺すか。警告を無視したの

はお前らのリーダーだ。怨むならあいつを怨んでくれ」

「ちょ、超笑えない冗談はやめてください。表の人間が人なんて殺せるわけッ」

「暗部の人間が死んだところで表には関係ないだろ？　なら、表の人間が殺したところで問題はないさ」

言ってることが事実だと分かると、絹旗は急に暴れ始めた。そんなにも死にたくないのだろうか、そう思いながら首を掴んでいる手に力を込めて大人しくさせる。だが、なにか言ってるようだ。

「い、いやです。超死にたくないです。ご、ゴメンなさい、助けて下さい」

「ダメだ、俺は引き金をひく。諦めろ」

そういつてから、「5・4・3」とカウントを取り始めると、麦野たちが絹旗を助けるために向かってきた。

「なにもんなんだよテメエはッ！！」

さっきよりも大きなレーザーを放ってくるが、絹旗が巻き込まれるとは考えないのか？　そう思いながら、再び消す。

「邪魔だ、消えろ」

そういうだけで、レーザーは消え去る。だが、その間にフレンダと滝壺が迫っていた。

「武器は銃だけじゃないって訳よ!」

「きぬはたを離して」

フレンダはスタンガンで、滝壺は素手で両サイドからの挟みうちできたがなんの問題もない。冷静に対処するだけだ。

「存在の肯定、雷を対象へ向け発現させる」

「きゃあ!」「ああっ!?!」

もう少しという所で急に俺の近くから電気が発生し2人を襲う。そんなものを避けれるはずもなく、2人は喰らってそのまま倒れる。

「待たせたな3・2・1」

「いやあっ!」

《ガチャン!》

「はい、おめでとう。弾は転移時に抜いてたんですよ」

「え? あ、ああ…」

絹旗を離しポケットから弾をバラバラと落とすと、離された絹旗はそのまま力なくペタンと地面に座り込んでしまった。すると、絹旗の下に水たまりができ始めた。

「あちゃー、そんな怖かったか。ゴメンな。ほら、着替えとタオルやるから車のところで着替えてこい」

能力発動中に避けれるわけもなく、麦野は爆発をくらって吹き飛び転がる。だが、諦めていないのか身体が止まると俺に向けレーザーを放ってきた。まあ、それも効かないんだが。

「転移っ」と

そう言って俺は麦野の放ったレーザーの射線から消え、ダメージを受けて立ち上がれない麦野の後ろに移動する。

「どこ見てんだ超能力者、俺はこっちだぞ？」

「なっ！？ ふざけやがってッ」

そういつて振り返ろうとした麦野の頭を勢いよく地面に押し付ける。

「があっ」

「口の聞き方に気をつけろ。死にたくないだろ？ ほら、今謝れば許してやるよ。じゃなきゃ、お前らはここで終わりだ」

「ちい…情けなんていらねえんだよ。さっさと殺せ！」

麦野がそう言う俺は溜め息をはき掴んでいた頭を離して、立ち上がる。そして、気を失っている滝壺とフレンドの元へ行き肩に担いで麦野に話しかける。

「寝てないで起きろー。上条さんは紳士なので女性を殺したりはしないんですよ。家に送ってあげるから、車に乗りなさい」

「…え？」

「ほらほら、タオルやるから顔拭けって。んで、車に乗れ。そして、転移で送ってやるから」

2人を担いだまま車に向かうと、着替えを終えていた絹旗がガタガタと震えていたが気にせず2人を乗せる。それが終わるといつまでも動かない麦野を転移させて車に乗せ、車ごとアジトに転移させた。

第四話 アイテム解散

転移させると、車から降りて再びフレンダと滝壺を担いでアジトへ向かう。だが、両手がふさがっているせいでドアが開けられないことに気付く。

「フウ…おい、絹旗。ドア開けてくれ。担いでるから、開けれないんだ」

「は、はい。…どうぞ」

「おう、サンキュー」

絹旗にドアを開けてもらうと、中を進んでいきリビングのソファに2人を寝かせ自分も座る。

「で、気は済んだか？ 過ぎた好奇心は身を滅ぼすぞ？」

「えっと、私たちのことは超殺さないんですか？」

「まあ、殺す理由もないしな。それに暗部でもないのに、この歳で人殺しにはなりたくないさ」

いいながら、俺はテーブルの上にコーヒーの入ったカップを発現させ、それを飲みながら答える。

「お前らもいるか？ コーヒーでも紅茶でも好きなの選んで良いぞ」

「え？　じゃあ、紅茶で…」

「…私も紅茶でいいわ」

「はいよ」

注文通り紅茶の入ったカップを2人の前に発現させると、大丈夫なのかといった感じに恐る恐る触っている。

「俺の出した服着てるくせに紅茶くらいで怖がるなよ」

「なっ！？　それは超あなたのせいじゃないですか！」

「はいはい：そうだ、2人も起こしておくか。おーい、滝壺ー」

そう言いながら、寝ている滝壺の頬を横に引っ張り、フレンドには口と鼻を塞ぐように水を球状に発現させる。すると、鼻で呼吸したときに水が入ったのか苦しそうにフレンドが目を覚ました。

「ぶはあっ！　って、なにこれ！？　どうnガボボ！？　ぶはあ！　ちよっ、やmバババ！？」

脱出しても追尾してフレンドの呼吸を阻害する水。本当に嫌なのか、立ちあがり部屋の中を走って逃げ始めた。まあ、拳銃なんて向けてきた罰だ。滝壺が起きるまで逃げとけ。

「ほれー、起きろー」

「んんー…はれ？　はんで、はみほうはいふほ？　ほれほ、はなひてほひい。（あれ？　なんで、かみじょうがいるの？　それと、

離して欲しい。」

「ん？ まあ、そもそも俺が運んできたからな。それより、攻撃して悪かったな。加減はしたが身体は大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

そういつて伸びをする滝壺をみて、身体に異常がないことを確認すると隣に座り話を始めることにする。

「じゃあ、話の「ちよつと！ これどうにかして欲しいって訳よ！」…ちっ」

言われたのでしようがなく消してやると、フレンドはハアハアと息を切らせて床に座り込んだ。だが、話するのに面倒なのでソファ―に転移させる。

「あれ？ どうしてソファ―に？？」

「俺が移動させたからだよ。で、お前らも何か飲むか？」

「私は冷たいお茶がいい」

「じゃあ、私はなんかジュース系がいいって訳よ」

注文を聞いて滝壺には麦茶を出し、フレンドにはヤシの実サイダーを「あいよ。」と言って出してやった。それを見て2人は不思議そうにしている。だが、普通に飲めるとわかると2人は口をつけた。

そうして、お茶をしているとコップをテーブルに置き、滝壺が話し

かけてきた。

「ねえ、かみじょうの幻想殺して無効化能力じゃないの？」

「なんだ、まだ気になるのか？」

「そりゃ、多重能力者デュアルスキルにしか超見えませんし。不思議に思わない方がおかしいと思いますよ」

紅茶に口をつけながら絹旗がそう言ってくる。すると、その横に座っている麦野も口を開いた。

「使って見せたのは無効化・精神系・空間移動・発電能力・原子崩し・発火能力・水流操作ぐらいかしら？ 2つでも脳への負担が大き過ぎて不可能と言われていたのに、能力のデパート状態ね。それに私と同威力の原子崩しを遠距離で発動しながら別の能力を使うなんて、完全にこっちより上の力じゃない」

「いや、能力としては1つだ。それでいろんなことができるってだけでな。つか、もうキレて攻撃してこないんだな」

「まあね。全力の攻撃も全く効かない上に、相手の能力もわからない。で、現在その相手に攻撃の意思がないならこっちもなにもしないわよ」

「最初からそうしてれば、おねんねしたり服を濡らしたり地面にキスしたりせずに済んだのにな」

そう言ってからコーヒーを飲む。カップから口を離し顔をあげると言われた者たちは額に青筋をつくってプルプルと震えている。

「ダメだよ、かみじょう。皆を怒らせるような言い方しちゃ」

「ん？ まあ、気にすんな。誰にも言わねえからさ。流石に、レベル5率いる暗部組織が1人のレベル0相手にボロクソにやられたと知られちゃ、仕事できなくなるだろうしな」

「超納得いきませんっ！　なんで、あなたが無能力者なんですか！」

俺の言葉がひっかったのかテーブルをバン！と叩いて立ち上がる絹旗。確かに、レベル0だが無能力者ではないしな。

「そりゃ、検査にひっかからないからだ。だって俺の力は超能力じゃねえからな」

「結局、意味が分からないのよ…」

「レベル5を超える力って…もしかして非公式に絶対能力者は存在してたの？」

麦野が考えてからそう問いかけてくる。

「レベル6？　いや、違うぞ。ついでに言うと、神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの《SYSTEM》でもないぜ。まあ、どのレベルにも当てはまらないし、原石とも違う力だから『世界を監視する者』^パとでも呼んでくれ」

「おぶざーばー？　それが能力名？」

「違うが、能力名も能力の正体も教えるつもりはない。『無効化能力者の幻想殺し』^{イマジンプレイカー}って思っていてくれ」

そんな説明で納得したわけではないだろうが、どれだけ聞いても答えは一緒だろうと思った4人の少女たちは聞く事を諦めた。そして俺は、ここで本題に入ることにする。

「こっからは、真面目な話だが冷静に聞いてくれ」

真剣な表情でそう言うと、聞いてた者たちも同じように緊張した面持ちになる。それを確認して口を開く。

「お前たちは暗部やめろ。実力も覚悟足りてないし、向いてねえよ。学校いつてる年齢なんだし奨学金で学校でも通って表の住人として生きろ」

「っ!？ 今日会ったばかりのテメェに、そんなこと言われる筋合いはねえんだよっ!」

「超余計なお世話です。あなたに私たちの何がわかるって言うんですか!」

「結局、そんな簡単にやめれるなら、誰も暗部なんかにいないって訳よ」

俺の言葉を聞いて怒ってくるアイテムのメンバーたち。だが、なにも簡単に言っているわけではない。

「…なら、アイテムは今日ここで潰す。言っておくが、現在のこの部屋では俺以外は能力を使えないぞ。そういう風にしたからな」

「起きた時から、A I M拡散力場が感じられなかったけどそういうことだったんだね」

「ちっ……何が目的だ」

「いや、単純にお前たちに暗部にいて欲しくないだけだ。言え簡単に抜ける方法もあるしな。お前らの上司に直接話を付けてもいい」

そういうと、ポカンとした表情になるメンバーたち。まあ、そりゃ機密に触れることの多い人間が簡単に普通の生活戻れるわけないしな。だが、俺の友人に言えばそんなのは一発で解決できるはずだ。

「証拠でも見せようか？ 普段、連絡に使う電話を貸してくれ」

「…ほら」

俺がいうと疑うような目でみながら麦野がケータイを投げてきたので、それを使いこいつらの上司にかける。

『ちよっと、アンタたちどこにいるのよ！ 仕事終わってから連絡もしないで急に消えるとかふざけてんの？』

「よう、アンタがこいつらの上司か？」

『ハア？ アンタ誰よ。誰だか知らないけど口の聞き方に気がつけなさい。こっちは理事会の人間よ。それより、原子崩したちに替わりなさい。下部組織の人間と話すことなんてないわ』

「ほう。言っておくが俺は総括理事の知り合いでな。お前こそ口の聞き方に気をつけろ。さもなくば、お前の周りのものを消していくぞ」

そう言うとき相手の女はゲラゲラと笑いながら、話をしてくる。

『ハン。誰も会ったことがないのに、そんなの信じられるわけにないでしょ！』

「警告はしたのにな。：椅子よ消えろ」

呟くと電話の向こうからガタガタという音と人の悲鳴が聞えた。

「次はその高そうな宝石のついた指輪でも消そうか？　なあ、言っておくがこれは生物にも有効なんだぜ？」

『な、な、なんなのよ！　アンタは！』

「序列0位の幻想殺しだ。アイテムは俺が貰う、二度と関わるな。関わればお前を消す。返事は『はい』か『YES』だ。さあ、答えろ」

『わ、わかったから。殺さないで、あいつらにも手を出さないからッ』

「そうか。用件はそれだけだ、じゃあな」

最後にそう言って電話を切ると、アイテムのメンバーは再びポカンとした表情になっていた。こんなに簡単に暗部と手を切れると思っていなかったのだろう。そう思っていると、滝壺が話しかけてくる。

「かみじょう。序列0位って本当？」

「いや、脅しのために言っただけでそんなのないぞ。でもまあ、これでお前たちは自由だ。簡単に済んだな」

「そうだね。ありがとう…って言うのかな？　でも、これからどうしよう」

滝壺がいうと他のメンバーも同じらしく、今後の方針に悩んでいる。

「結局、私たちって暗部以外に関わりなかったから、それがなくなるってやることがないって訳よ」

「なら、学校にでもいけば良いじゃねえか」

「いまさら、そんなところ行ってもって感じですね。ってか、こんなに簡単にいくとは超思ってませんでした」

いいながら、溜め息を吐いて下を向く絹旗。まあ、そうか…じゃあ。

「なら、仕事でもはじめるか。それとアイテムは壊滅して、メンバーは他の組織に引き取られていったってことにしよう」

「あー、何でも良いわ。あんた見てるといろいろ馬鹿らしくなってきたから」

麦野はそういうとダラけながらソファに深く座り込んだ。他のメンバーを見ると、同じように脱力したりしている。

「よし、なら組織名は“システム”にしよう。リーダーは俺で構成員はお前らな。『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』《SYSTEM》』にかけての名前だが、説明しなければ俺の力はそう見えるしな。それと、仕事だが普段は喫茶店でもやらないか？ 大き目の一軒家を買って一階を改造して店にするんだ。二階や空いてる部屋にお前らが住めば、セキュリティも完璧だ」

「うん、楽しそう。でも、かみじょうも一緒に住むの？」

「俺は自分の寮があるからそっちだ。じゃあ、そういうことでこれからヨロシクな！ 俺は総括理事に会ってシステムと店をやることを伝えてくるよ。詳しいことが決まったらまた連絡する。それじゃあ！」

そう言う俺は総括理事の元へ転移した。

第五話 システム結成

上条が姿を消した後も元・アイテムのメンバーはソファァで脱力していた。

「ハァ…結局、上条って何モンな訳よ？ 暗部抜けも簡単にさせるし、本当に総括理事と知り合いみたいだったし」

「知らないわよ。それにしても、システムねえ…：これでもレベル5として自分を化け物だと思ってきたけど。化け物っていうのは上条みたいなやつを言うのね。第1位が最強なら上条は災凶ってとこかしら？ どっちにしろアイツがいるだけで、とんでもない組織になりそうだわ」

フレンダの問いかけに麦野がテキトーに答える。そんな麦野も少し疲れた表情をしてだらけているが、新組織は別に嫌ではないようだ。

「お店楽しみだね。でも、誰が作ったりするのかな？」

「さあ？ でも、上条さんが超言いだしたんですし、あの人を作るんじゃないですか？」

「でも、かみじょうは学生だよ？ 放課後しかお店開かないのはまずいと思う」

そうやって話していると、全員の携帯にメールが届いた。知らないアドレスだったが件名には『件名…上条です！』と書いていた。

「早速、上条からのメールな訳よ…でも、なんでアドレス知って

るの?？」

「戦ったときに『対象を認識』とか超言って、名前とか知ってたからそんな時に一緒に知ったんじゃないですか?」

「メンタルアウトプライバシーもへったくれないわね。強さで言うとな第5位・心理掌握並みかしら」

「えっと『理事に言ったら店は第七学区に決まったぞ。メニューとか考えといてくれ。んじゃ、また明日!』：うーん、メニューかあ」

メールを読んで滝壺たちは喫茶店のメニューを考え始めた。疲れていたはずの彼女らの表情は、どこか楽しそうだった。

報告と許可を得るために俺は窓のないビルまで転移してきた。そこには筒状の水槽がありそこに向かって何本ものケーブルなどが伸びていた。

「おや? 今日はどうしたんだね、幻想殺し」

「親愛なる友人に会うのに理由が必要かアレイスターIIクロウリィ?」

「フフツ、私を友人と呼ぶのは君ぐらいだ。我が親友、上条当麻」
そうやって、水槽の中に逆さに浮く緑の手術衣を着た長髪の男“ア

レイスターIIクロウリー”は俺に笑いかけてくる。俺も笑顔で水槽に近付き話しかけた。

「アレイスター、実を言うと今日は報告と許可を貰いにきたんだ」

「フム。君が私に頼るようなことがあるのかね？」

「まあ、許可と言うより確認と思ってくれていい。まず、報告だが第4位率いる組織“アイテム”が接触してきた。そして、知っての通り戦闘しそれを撃退。その後、あいつらのアジトで上司を脅して手を切らせた」

報告を聞くとアレイスターは楽しそうに笑っている。なにかが気に入ったのだろうか？

「ああ、回線を通じて見ていたよ。しかし、いつ見ても君の元始^{オリ}種子には既存法則の外に在る力だという事を思い知らされる。存在に干渉し操る力：確かに、能力としてはそれだけが1つの能力と言われても納得できないだろう」

「それを知るのは俺らだけだから良いんだよ、あれを見た他の者は幻想殺しの力だと思っている。幻想殺しはその通り異能を消すか抑える力しかないのにな」

そうやって、2人で笑いあっていたが、まだ報告が残っているのでもちらを済ますことにする。

「でだ、アイテムは解散させ新たに俺の組織”システム”を作ることにした。メンバーは俺とアイテムの4人だがな。そして、拠点として喫茶店でも開いてメンバーはそこで仕事をしつつ、たまに学

園側や魔術側からの依頼でもこなそうと思う。暗部と完全に手を切らせたかったが、恨みを持つ者や因縁をつける者がいるからな。稀に暗部として動いてアイテムのメンバーは健在だと牽制するよ」

「神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの《SYSTEM》になぞらえて、システムと言っていたが君は”神ならぬ身にして天上の意思を託されしもの《RULER》”だろう？ それらを本気で目指そうとしている私たちにとってはとんだ皮肉だな」

「まあ、そういうな親友。俺はあの子たちの中を視たときに助けたいって思っちゃったんだよ。それに、第4位の暗部堕ちは上層部が仕組んだことだろ？ お前は指示してないみたいだけど、問題ないとして見逃したんだ。なら、助けようとするのも見逃すか、協力ぐらいしろ」

「フフツ、神浄討魔の君に言われれば言う事を聞くしかないな。それで、まだ何かあるのだろうか？」

笑って言うアレイスターが水中に浮かびながら手をかざすと、水中にモニターが現れた。それを操作しながら俺に続きを話すように言ってくる。

「ああ。他の暗部に『アイテムは突然介入してきた組織により壊滅され、メンバーは他の組織に引き取られた』って情報が流れるようにしてくれ。ついでにシステムのことも未確認の組織として名前だけ流してくれると助かる。リーダーはレベル不明の”イリユージョニスト幻術使い”らしいってのも加えてな。それと、どこかに良い家はないか？ デカイ一軒家を改造して店にしたいんだ」

「幻術使い？ 紛れもなく、現実のくせによく言う」

そういつてアレイスターはフフツと笑うと話を続ける。

「情報のリークに関しては了解した。そして、店の方だが学生の多い第七学区に土地を用意しよう、建物は君が出したまえ。なにかを建てている幕さえ張っていれば学園都市だ、1日で家ができて不思議に思わんさ」

「おう、サンキューな。でも、それだって疲れるんだぞ？　ようは空想を現実に変換するようなもんだ」

「そんな便利な力があるのだ、それぐらいの苦労は我慢したまえ。では、話はそれぐらいかな？」

操作をしていた手を止めモニターが消えると、視線をこちらに戻してアレイスターが話しかけてくる。

「ああ、ありがとう。話はそれぐらいだ。それじゃあ、またくるが俺らが知り合いつてことや、幻想殺し以外のことがばれないようにな」

「わかつている。では、店ができたら教えてくれ。偽体で行かせてもらう」

「はいよ、そんな時はサービスさせてもらうよ。んじゃな！」

そう言つて俺は窓のないビルを後にした。去ったあとに残った静かな空間でアレイスターは1人呟いた。

「フフツ、神の代行者が救済を始めたか。世界はどう変わってい

くのだろうな、親愛なる友人よ」

そう呟いたアレイスターに答える者はいなかった。そして、その夜のうちにアイテム壊滅の情報と謎の暗部組織・システムという存在がいるという情報が暗部に関わる者へ知れ渡ることになった。報告を受けたある組織では：

「ねえ、アイテムが壊滅させられたらしいわよ」

「ああ？ アイテムってーと、第4位のどこか。なんだ、第1位のクソ野郎にケンカでも売ったか？」

笑いながら答えるのは、序列第2位・未元物質ダークマターの垣根 提督かきね ていとく。彼の言葉にドレスの少女・心理定規メジャーハートは端末を操作しながら返事をする。

「どうやら他の組織にやられたみたい…暗部組織・システム？ 聞いたことないわね」

「そんな訳わかんねえヤツらにやられたのか？ なんだ、レベル5って言っても下のやつらはそんな雑魚なんだな」

「おかしいわね、情報が出てこない。なんとかわかったのが、システムのリーダーは幻術使いらしいってことね。でも、レベルも不明だし幻術使いなんて能力聞いた事もないわ」

心理定規がそういうと、垣根はソファアに座ったまま言い返した。

「能力なんざどうだっていい、オレをやれんのは第1位だけだ。それに幻だろうがなんだろうが、オレの未元物質に常識は通用しね

え」

「フフツ、そうね。でも、アイテムはメンバーは他の組織に引き取られたみたいだから、会うかもしれないわ。できればそこで情報を得たいわね」

言いながら心理定規は端末を操作するのをやめた。

そしてまた別の暗部に関わる者のところにも情報が届く。

「なに？ 第4位のチームが壊滅だど！？ あそこは高位能力者で構成されていたはず、一体どこの誰が…システム。リーダーはレベル不明の幻術使い？」

自宅の端末を操作しているのは、多角スパイの土御門元春。彼は学園都市だけでなく、魔術側のスパイとしても潜入している。そのため、暗部のさまざまな情報を日ごろからチェックしていたのだが、レベル5の組織が壊滅されたという情報は予想外だった。

「幻術使いについての情報がない。書庫にアクセスしても、幻術使いなどという能力はないと出ている。精神感應系の能力に独自の名称を付けているのかもしれないな。いや、魔術という可能性もある。これはアレイスターに聞いただすべきか？」

レベル5率いる高位能力者で構成されていたアイテム。それを壊滅させたというほどの力を持ちながら組織名とリーダーの能力以外の情報が得られず。また、その能力も書庫に未登録という事態。

いくら暗部とはいえ、ここまで情報が少ないのはおかしい。そう思い土御門はアレイスターのもとを訪れるため、案内人へ連絡をとることにした。

設定1（前書き）

オリジナル設定など含めたキャラ及び用語説明です。

設定1

上条 当麻《かみじょう とうま》

【強度】無能力者《レベル0》

【設定】高校1年生。この作品の主人公。原作と違い頭はそこそこ良い方で、お金にも困っていない。昔からトラブルに巻き込まれるので身体を鍛え上げている。アレイスター・クロウリーとは友達で、魔術についてもよく知っている。アイテムを解散させメンバーたちを引き取り新組織『システム』を結成した。

【能力】

幻想殺し《イマジンブレイカー》―右手

？右手で触れた異能の力を打ち消す能力。それが異能の力であれば、超能力・魔術問わず打ち消すことができる。効果範囲は基本的に右手首より先であるが、不特定多数・広範囲に渡るような異能の力、あるいはテレポートやテレパシーなど対象を「上条当麻」として右手を含んでしまう異能の力も無意識の内に無効化する。基本的に触った瞬間に打ち消すが、強力な異能に対しては打ち消すまでに時間がかかる（ただしこれを逆手にとって、対象を掴んだり反らすこともできる）。

神浄 討魔《かみじょう とうま》

【設定】上条当麻の真名解放した状態で、真名の能力を行使できるようになる。真名を解放する方法は簡単で、意識を潜らせ自身の心の中にある力（元始種子）を抑えている幻想殺しの力を一時的にはずすだけである。その力の強大さから『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの《SYSTEM》』や『絶対能力者《レベル6》』と思われることもあるが完全に別の存在である。上条はこのときの

自身を『神の力の代行者』としている。そして、超能力や原石などに当てはまらないので、「まあ、どのレベルにも当てはまらないし、原石とも違う力だから『世界を監視する者』^{オフザバー}とでも呼んでくれ」といつている。

【能力】

幻想殺し《イマジンブレイカー》―右手

？能力は変わらないが、元始種子を抑えていない間は意識すればオフにできる。

元始種子《オリジン》―左手

？上条当麻が普段は幻想殺しで封印している左手に宿る異能。幻想殺しのように手首より先のみに効果があるかは不明。その能力は『存在への干渉』。具体的な効果は存在の認識、肯定、否定。幻想殺しが“異能”という“正の力”に“調和”し“起点”に戻す力であるのに対し、元始種子は物質やエネルギーまたは力の向きなどの“存在”を認識すること、創り出すこと、消し去ることができる。このとき、対象に触れる必要なく遠距離であつても本人の意思で存在を認識していれば消去できる。

存在の認識

？一方通行のベクトル、御坂美琴の電磁波、禁書目録の魔力という一部の人間が見たり感じたりすることができ以外には機械で感知・観測するしかないモノが世界には存在する。それらを含めたあらゆるモノを理解できるようになる力。理解できるだけと思うかもしれないが、これは電子の世界ならば美琴を超え、魔術の世界では禁書目録を超える力である（ただし、情報を認識・感知するだけで操作などは特別できない）。彼女たちは自身の知識以上のことは理解できないが、これは自身の知識や感覚器官に関係なく認識できるし理解できるようになるのだ。なので、例えば一方通行がこの力を持つ

ていれば、どんな力も初見で対策がとれるだろう。この力の強みは認識や理解することのため、発動して意識すれば相手の記憶や思考を“知る”ことができることである。ただし、心理掌握のように操作や改変する力はなくただ“知る”ことができるだけである。

存在の肯定

？文字通り存在を肯定し、在る物として創り出すことができる力。ある意味、垣根帝督の未元物質に近いが、こちらは現実中存在するモノでも創り出すことができる。それに加えてエネルギーや力の向きであっても創れるため、一方通行と未元物質を合わせた上位互換的な能力だと思えばわかりやすいだろうか。勘違いしてはいけないのが、“作る”ではなく“創る”ということだ。作るというのはある物を使い新たな物や効果を生み出すというものだが、この力は完全な無から生み出すという“0を1にかえてしまえる力”にあたる。ただし、この力でも命を生み出すことはできない。それを行使した場合は魂のない生きた肉体（植物人間に近い）のみが生み出される。

存在の否定

？存在を否定し消し去る力。これは幻想殺しの上位互換的な能力にあたり、幻想殺しと違い異能とは関係ない物質やエネルギー・力の向きでさえも消し去ることができる。この能力の恐ろしい所は、生き物や人間の記憶などでも消し去ることができることだ。物質的な消去した相手の存在をさらに否定し「その人間が存在したことを消し去る」とすれば他人の記憶・写真・映像記録であってもなかったことにできる。ただし、この場合は存在の認識でいたことを証明する存在を認識するプロセスを経てから消去する必要がある。だが、これは「この怪我をなかったことに」や「誰誰の死をなかったことに」という“なかったことに”する能力ではない。あくまで物理的な消去にあたる。

【違い】

幻想殺し…3には－3を、1には－1を足す力。異能の発動前が1で発動したら5になる場合は、能力発動分である4を打ち消すため－4の力で発動前の1に戻すという力。しかし、打ち消せるのには限度がある。

存在の否定…相手が10でも100でも×0する力。よって、否定の場合は消す力に限度はない。

【能力の応用】

？A地点に存在している物・者を否定し、それらがB地点に存在することを肯定することで空間移動をすることができる。その際には、移動先を認識しそこに存在する物を否定しておく必要があるため、実際の能力の発動手順は「移動先の認識↓もともとA・B地点にあったもの（移動させるもの含む）へ存在の否定、移動先への存在の肯定」となる。これは実際の空間移動能力と違い、否定と肯定が同時に行われるため、タイムラグは存在しない。また、自分で運んでいるわけではないので、移動させる重量に制限もない。まわりから見れば同じだが、実際には空間移動ではなく空間に存在するモノの交換である。そのため、空間移動系の能力者が見れば原理が理解できずその異常性に驚くほど。

麦野 沈利《むぎの しずり》

【強度】超能力者《レベル5》

【設定】学校には行っていないが年齢的には高校1年生。暗部組織『アイテム』の元リーダー。プライドが高く自分の思い通りにならないと口が悪くなり攻撃的になるという困った性格。上条に引き取られ『システム』のメンバーになる。

【能力】

原子崩し《メルトダウナー》

？本来『粒子』又は『波形』のどちらかの性質を状況に応じて示す電子を、その二つの中間である『曖昧なまま』の状態に固定し、強制的に操ることができる。操った電子を白く輝く光線として放出し、絶大なる破壊を撒き散らす。正式な分類では粒機波形高速砲と呼ばれる。曖昧なまま固定された電子』は『粒子』にも『波形』にもなれないため、外部からの反応で動くことが無い「留まる」性質を持つようになる。この「留まる」性質により擬似的な「壁」となった『曖昧なまま固定された電子』を強制的に動かし、放たれた速度のまま対象を貫く特殊な電子線を高速で叩きつけることで、絶大なる破壊力を生み出す。四方八方へ同時に放つこともでき、それら一つ一つが金属すら紙のように容易く貫き溶解させる。収束や固定も可能で、かぎ爪の腕の様な形で放射することもできる。攻撃一辺倒ではなく、楯のように展開することで防御にも応用が可能。また、ロケットのように能力を放射することで、爆発から逃れる程の速度で高速回避をすることも出来る。

滝壺 理后《たきつば りこう》

【強度】大能力者《レベル4》

【設定】学校に通っていれば高校1年生。元『アイテム』のメンバー。ピンク色のジャージを着ていて普段から少しボーっとしている少女。ナンパされているところを上条に助けられたため、上条に好意的。上条の『システム』に所属。

【能力】

能力追跡《AIMストーカー》

？一度記録したAIM拡散力場の持ち主を、たとえば太陽系の外に出ても追い続け検索・補足出来る。基本的に探索用の能力だが、AI

M拡散力場に干渉して能力者の自分だけの現実を乱すことで、攻撃への応用も可能。全力で行えば相手の能力を乗っ取ることも出来る。

絹旗 最愛《きぬはた さいあい》

【強度】大能力者《レベル4》

【設定】学年的には中学2年生。元『アイテム』の最年少メンバー。見えそうで見えないぎりぎりの丈のワンピースを着たりする少女。口癖で『超』とよくいう。『アイテム』壊滅後は上条の『システム』に所属。

【能力】

窒素装甲《オフエンスアーマー》

？空気中の『窒素』を自在に操り、自動車を軽々と持ち上げ、動かすようなパワーや、直撃した磁力狙撃砲のスチール弾を逆に潰してしまう程の頑強さを発揮する。強力ではあるのだが「装甲」という名の通り、有効範囲が「掌から数センチ」と非常に狭い。そのため、この能力を使って物を殴ったり持ち上げたり投げたりする場合は、手も同時に動かして物から数センチの範囲に近づける必要がある、一見すると絹旗本人が怪力で物を殴ったり持ち上げたり投げたりしているように見える。

フレンダーセイヴェルン

【強度】強能力者《レベル3》

【設定】学校に行っていれば高校1年生。元『アイテム』のメンバー。金髪碧眼の外国人の少女。能力による戦闘よりも道具を駆使して戦うタイプ。『結局』や『って訳よ』というのが口癖。他のメンバーと同じく『システム』に所属するようになった。

【能力】

物体召喚《アポート》

？自分が決めた場所にストックしている物を自分の手元に転送して
くることが出来る能力。これは空間移動系の一種だが引き寄せるこ
とは出来ても送ることはできないというものである。倉庫ストックから自分
へというある意味決まった座標間の移動に限定しているため、移動
距離や質量に関係なく正確に転移させることができるという特徴が
ある。だが、それ以外の空間移動は近くのを移動させるにもか
なり疲労し正確さもほとんどないという欠点がある。これはフレン
ダ自身の自分だけの現実の確立が不十分なため、それさえできれ
ば、固定した座標間以外の空間移動も可能になると思われる。デス
クトップPCから自分の携帯にメールを送るイメージで能力を使っ
ている。

暗部組織『システム』

【設定】上条が新たに作った暗部組織で、リーダーは上条。メンバ
ーは元『アイテム』の4人。暗部組織だが、上条がアイテムのメン
バーを表の世界に戻してあげるために作ったもののため、殺しや汚
い仕事しないもよう。他の組織へはリーダーはレベル不明の『幻術
使い《イリユージョニスト》』という偽情報を流している。

設定1（後書き）

上条とフレンダの能力、アイテムメンバーの年齢はオリジナルです。

第六話 引っ越し

次の日に学校が終わると俺はアイテムのアジトを歩いて訪ねた。昨日は転移できたから気付かなかったが、結構距離があるんだな。

「おーい、上条だけど。みんないるかー？」

そう言ってドアを叩くと中からドアが開いた。

「結局、インターフォンがあるんだからそっちで呼んで欲しいって訳よ」

「ん？ これ繋がってたのか。悪いな、アジトだからそういうのは切られてるものだと思ったんだ」

「ちゃんと、繋がってるわよ。で、なんの用？」

最初は呆れたようなジト目でこっちを見ていたフレンドだが、そう言って普通に尋ねてきた。

「ああ、土地が用意できたから間取りや内装とかの相談をしようと思ってな」

「ふーん。まあ、あがるといいって訳よ」

そういって、フレンドのあとに続いてアジトに入ると昨日のリビングに通された。そこには、他のメンバーが座っていて紙に色々書いてなにかを相談しているようだ。

「よう。何書いてんだ？ 俺の暗殺計画か？」

「超違います。それにあなたって殺せるんですか？」

「まあ、弱点は普通にあるからな。殺そうと思えばいけると思うぞ？」

「…超信じられません」

そんなことを言ってジト目で見てくる絹旗。フレンダもだが俺をそんな目でみないで欲しい。心が傷つくじゃないか…なんてな。

「で、ホントは何を書いてるんだ？」

「アンタがメールでメニュー考えろって言ったんでしようが」

「そういや言ったな。で、考えたのか？」

麦野に言われて昨日のメールを思い出し言いながらソファアに座ると、滝壺が1枚の紙を見せてきた。それにはいくつもの料理名が書いていた。

「飲みものと軽食系が多いな。学生がメインの客になるからデザート系も充実させた方がよくないか？」

「そう思ったけど、かみじょうはケーキとか作れるの？ かみじょうが出来ないなら、私たちがじゃそこに書いてるのぐらいしか作れないよ」

「ふーん。まあ、レシピ用意してオープンまでに練習すればいいけ

るだろ。：それと、家の間取りや内装を相談しにきたんだ。リクエストあるか？」

聞かれるとメンバーたちは考え始めた。まあ、自分の家になるんだし悩むよな。すると、フレンドが最初に口を開いた。

「一番広い部屋が良いって訳よ！」

「何言ってるのフレンド。それは私のに決まってるでしょ」

「超ずるいです。私だって広い部屋が良いに決まってます」

「私は日当たりが良ければそれでいいよ」

ああ、こいつらには言っていなかったから、ある中で選ぶものだと思ってるのか。それを先に説明すれば良かった。

「すまん、先に言っておけばよかったな。いまあるのは土地だけなんだ。で、建物自体は俺が創り出すからリクエストがあれば言えっていったんだ。まあ、実際の土地はまだ俺も見えてないんだけどな」

「そうなんですか？　じゃあ、見てから決めるんでパパッと連れてってください」

「いや、今日は歩きだ。あの力はいま使えないからな。それに暮らすとこのまわりを見といた方が良さそうだろ？」

そういうと、めんどくさそうにしながらも納得したのか、メンバーたちは出かける準備を始めた。だが、1人だけ座ったままメニューの案を見ている滝壺に話しかける。

「お前は準備しないのか？」

「私はこのまま出られるから」

「ふーん。ジャージ以外の服は着ないのか？」

「パジャマとかは着るよ。でも、普段は動きやすいからこれでいいの」

そんなもんなのかと納得しながら、メンバーの準備が終わるのを待ち再び戻ってくると一緒にアジトを出た。

アジトを出てから結構歩き第七学区に来た。そして、ケータイに送られてきた地図を頼りに店の建設予定地を探すとデカイ幕で覆われた土地を見つけた。どうやらここのようだ。

「ふえー、思ったよりも超広い土地ですね」

「でも、この土地代ってアンタ持ちでしょ？ レベル0でよくそんな金あったわね」

「いや、総括理事からお前らと一緒にもらったんだ。でも、無効化以外の能力と総括理事と知り合いつてのは秘密な。言ったらお前らを認識して恥ずかしい過去をばらすから」

そう言うメンバーらが睨んできたが無視して幕の中に入ることに

した。中に入ってみると奥行きもかなりあることが分かり、アレイスターもノリノリだなと少し呆れてしまった。

「結局、広すぎて驚いたって訳よ」

「こんなに広いなら、かみじょうも一緒に住もうよ。楽しいよ？」

「いや、俺の寮もこの近くだぞ？ 歩いて15分って距離だ。こんな近いんだし、遊びに来ていいから家は別でいいだろ」

とりあえず、それで納得させると家をどうするかという話になった。まあ、徐々に創りかえることも可能なので、外観を創って中は部屋数と配置をだいたい決めるということにした。

幻想殺しの封印を解き元始種子を使えるよう心の中に潜っていく。そして、再び目を開けるとこれで準備完了だ。言われた外観のイメージを頭の中で作り、その存在を肯定する。能力の発現に詠唱のようなものはいらないが、敵に誤認させるためにわざわざ言うようにしている。

「…存在を肯定、発現せよ」

唱えて手を横に振ると、光が起きてイメージしていた家が創り出された。能力や飲み物を出したのを見ているはずなのに、メンバーたちは驚いているようだ。

「かみじょうの能力はなんでもできるの？」

「何でもできる訳じゃないさ。人を癒したり、自分の身体能力を上げることとかもできないぞ。それより、中に入れよ。細かいところ

も創るからさ」

「…何でもありすぎてツツコム気も起きないわ。アンタの本気なら非公式な序列0位でも納得できるもの」

疲れた表情で言いながら中に入る麦野に続いて俺たちも中に入った。

中に入ると広めの空間にカウンターだけが存在した。ここは店になる場所なのでならばカウンターも備え付けタイプにしようと決めたのだ。建物を創るときにこっそり水道・ガス・電気を繋げて使えるようにしたので、実は今日からでも暮らすことができる。

「こう見ると超広めな喫茶店ですよ。でも、材料とかインテリアはどうするんですか？」

「インテリアと食器は創ってもいいが、材料はちゃんと買うぞ。それにお前らの部屋に置く家具も最初に必要な分以外は自腹で買ってこい」

言いながら店内を歩きカウンターの奥にある入口から廊下を通り厨房の方へ入る。そこにはすでに一通りの調理家電などが揃っている。これはアレキスターに用意させたもので家を創るときに同時に転移させたのだ。配置は昨日の夜に参考にしようと調べておいたものに合わせてある。

「学園都市でも最新の本格的なプロ仕様のばっかりじゃない」

「プロ仕様って言ってもプロにしか使えないって意味じゃなく、素人でもプロのようになってコンセプトで作られてるから大丈夫だろう。面倒だろうが慣れるためにオープンまでは、自分たちの食事もここで作れ」

「でも、私たちの中でいろんな料理できるのは麦野だけなんです
が」

「そうなのか？ まあ、みんな強能力以上なんだし頑張れば覚えれるだろ。最初は麦野ともう1人がデザートを練習して、残りが軽食や定食の練習してメニューを作れるようにしよう。飲み物は食後やおやつ時に交代で練習だな」

「結局、私もやるって訳ね…めんどくさい」

ぶーぶー言うフrendaを無視して厨房を出ると、廊下を進み階段の手前のとこまでいく。階段の手前2mぐらいが住居としての玄関になっていてこっちにも扉がついている。そこで靴を脱ぎ今度は二階に上がった。階段を上るとすぐ近くにトイレがあり、その横のドアを開けると脱衣所がある。みんな感心しながらドアをあけて場所を確認している。

「うわっ!？ お風呂超広いって訳よ!」

「人の口調を超真似しないでください」

フrendaと絹旗はそんなやり取りをしながらバスタブに入ってみる。ってか、フrendaって俺と同じ年のくせに絹旗より精神年齢低くないか？そんなことを考えていると、2人で入ってもまだ余裕のある風呂をみて麦野が口をひらいた。

「こんな広いの久しぶりに見たわ…」

「なんでシャンプーとかはないのにアヒルのオモチャはあるの？」

「お約束だろ？　ちゃんと遊んでやれよ。それとそのアヒルは目がカメラになって《ジュツ》アヒル隊長オオおおお！？」

俺が冗談を言うのとアヒル隊長はレーザーで焼き鳥を超え蒸発してしまった。

「…てめえ、やって良いことと悪いことがあんだろうがっ！　アヒル隊長がなにしたらってんだ！」

「うっせえ！　アヒルじゃなくてテメエがくだらねえことするからだ！」

「新しいお風呂焦げちゃった…」

麦野が俺に反論して、滝壺はアヒル隊長が殺された現場がコゲたことを気にしている。くそ、誰も隊長の死を悼まないなんて…。そう思いながら、コゲた場所を消し去り新しく創って新品にしてやった。もちろん、アヒル隊長（カメラは最初からない）も創ったぜ。

「本当に便利だね、かみじょうの能力。でも、なんでAIM拡散力場がでないの？」

「言ってしまうえば神様の力だからな。超能力や魔術みたいにエネルギーを使ってるわけじゃないんだよ」

「魔術？」

「外の能力者のことだ。基本的に教会とかの関係者だが、こっちは違う法則で力を使う。紙に記号を書いて魔力を送るだけで通信ができるのかな」

そう説明すると感心した様子で「へえー」という滝壺。だが、年少組2人（絹旗、フレンダ）はあまり信じていないようだ。

「まあ、そのうち会う事もあるだろう。とりあえず、お前らの部屋にいくぞ」

言って、風呂場を出て廊下を通りそれぞれの私室を見ていく。基本的な広さは同じだが、窓の位置や形が違っている。これは本人らの注文に合わせたからだ。

「なにもないと広く感じるわね」

「いや、実際超広いですよ。こんなのにタダで住めるとは、学園都市中の低能力者がうらやましがりますね」

「上条。早速、ベッドを作って欲しいって訳よ」

麦野の部屋を見ると、自分の部屋をみていたフレンダが俺を呼んだのでそっちに行ってやることにする。だが、一応説明しておくか。

「フレンダ、誤解しているが俺の力は製作してるんじゃない、生み出しているんだ。だから、作文の方の作るじゃなくて、創造とかの方の創るだ」

「結局、音は一緒だからどっちでもいいって訳よ。それより、大きなお姫様ベッドが欲しいのよ」

「どっちでもいいとか言うなら段ボールでもひいてろ。そんなやつには創ってやらん」

「ぎゃー!? 嘘って訳よ。冗談だから創ってえ」

部屋を出ていこうとする俺の足に跳び付きすがってくるフレнда。本当に同じ年なのが信じられないんだが…。

「わかったから離せ。それと、具体的な大きさの指示やデザイン画像がないとわからん。参考資料を提出しろ」

「わかったって訳よ。携帯の画像でもいい？」

「別に問題ないけど、前のベッドはいいのか？ 引っ越しは転移でしてやるぞ？」

「使い慣れてるのも良いけど、ベッド自体は新しいフカフカな方がいいから、毛布とかだけ送って欲しいって訳よ」

そう言ってケータイで参考になるものを見せてきたフレндаの希望をきき、天蓋つきのベッドを創ってやった。フレндаは早速「ひゃほー!」と飛び込んで遊んでいたので、部屋をでてリビングに行くことにした。

「なんだ、自分の部屋はいいのか？」

「別にまだやること超ありませんからね。ソファアのあるこっちにいた方が良いです」

「んじゃ、一緒に前のアジト戻って引越しの準備しようぜ。いまは転移が使えるからな」

「じゃあ、私もお願いするわ。滝壺も来るでしょ？」

「うん。おねがい」

そういわれ、引越しの準備をするために前のアジトに戻ることにした。

「痛っ!？ 移動するなら先に言って欲しいって訳よ」

転移したことでソファアへ落下したフレンドが文句を言ってくる。

「まあ、調節もできたんだが面倒でな。いいから、引越しの準備してこい」

「結局、上条って私にだけ冷たい気がするんだけど…」

「お前は人に拳銃向けてきたり、スタンガンで攻撃しようしてきたからな。当然だろう？」

「麦野なんてレーザー向けたのに…」

「冗談だよ。我儘な妹を躰ける兄のようになってただけだ。なんかお前って同い年の俺や滝壺より精神年齢低いからな。これで可愛がってるつもりなんだぞ？」

説明すると喜んで良いのか微妙な表情で考えてるフレンダ。だが、面倒なので自室に轉移させ強制的に引越しの準備を始めさせた。そして、俺は1人で店に戻り靴を取りにいくとテーブルや椅子などを創りだし置いていった。

第七話 カミヤン病とは

そうやって店内の準備が一段落すると、麦野からメールがきて皆の準備が終わったようだ。なので、一度アイテムのアジトに戻り、それぞれの必要な物を部屋に転移させていった。

全員分が終わると、最後に滝壺と一緒に私室へ転移し家具をおいたりするのを手伝った。

「ありがとう、かみじょう。これで、今日からここに住めるね」

「まあな。店の準備も出来たし、足りない日用品や食材でも買ってきてメニューの練習でもするか？」

「うん。でも、どこで買い物するの？」

「店のは業務用ネット通販で仕入れするけど、自分らのはスーパーで良いな。ほら、お前と会ったところあるだろ？ あのと近くにあるんだ」

説明してもよくわからないようなので、まだ片付けの終わらない3人には出かけることを伝え行ってくることにした。ついでに外の幕を消してから元の幻想殺しに戻り歩いて出かけた。

「おーい、カミヤン！」

2人で歩いていると、前から金髪グラサン男の土御門と、エセ関西人の青髪ピアスが手を振ってきた。

「よう、お前らは今帰りか？」

「ちよっと、ゲーセンで新しいメイド格ゲーをやりについてたんだぜい」

「ロリ系のドジっ子キャラがボク的にツボやったね。ところでカミヤん、その子だね？ 紹介してーなー」

そう言って青ピが滝壺の方をみながら、ふにゃふにゃと気持ち悪い動きをしている。

「かみじょうの友達？」

「ああ、クラスメイトの土御門と青髪ピアス通称“青ピ”だ」

「そう。はじめまして、私は滝壺理后」

「滝壺ちゃんかあ、ごつつ可愛い子やね。ボクのことはフレンドリーに青ピって呼んでな」

「俺は土御門、よろしくにゃー。(滝壺理后だと？ 壊滅したという情報が入ったアイテムのメンバーがなぜ幻想殺しと一緒にいる？)」

自己紹介を終えると、2人が滝壺をいつまでもみているので話を進める。

「俺らは買い物にきたんだよ。滝壺はこのへんに引越してきたばかりで知らないから一緒にきたってわけだ」

「ところで、カミやんはどこでこの子と知り合ったんだにゃー？」

「どこってこの近くだぞ？ 昨日、ナンパされてたのを助けたんだ」

「またカミやん病か？ これは明日にでもみんなに報告ですたい。（偶然か？だが、まだ未確認のシステムという組織の情報もある。もしかしたら、暗部の滝壺と共にいたら幻想殺しも狙われるかもしれない。これはアレイスターに報告しておくか）」

また意味不明なことを言ってくる土御門に俺が呆れていると滝壺が質問してくる。

「カミやん病って？」

「それはな、カミやんが助けたことによって助けられた女子にフラグが立ってしまうという、怖ろしいものなんやで。滝壺ちゃんも気を付けなアカンよ？」

「やかましい、そんな嘘を教えるんじゃない。つか、買い物あるから俺らは行くぞ？」

いつまでもくだらない話をしていると帰りが遅くなるので、さっさと別れて買い物に行くことにする。

「おう。じゃあ、また学校でにゃー」

「滝壺ちゃんもまたな」

「うん、ばいばい」

そう言って別れると、俺らはスーパーで日用品とメニューに使う食材を買って帰ることにした。

「ただいま」

食料品などを買って帰り店に入ると、カウンターのところで3人は話をしていた。

「おかえりなさい。超遅かったですね」

「いや、言うほど遅くないだろ」

「むう、そういう意味で言ったんじゃないですよ。超は口癖なので気にしないでください」

俺のツツコミに律義に返す絹旗。親切なヤツだなと考えながら買ってきた食材を冷蔵庫に入れに行く。すると、他のメンバーもついてきたようだ。

「もう7時前だし、とりあえず食事にするか。今日は俺が作るけど明日からはお前らが練習がてら作ろうな」

「じゃあ、私が今日のコーヒー淹れたい」

「おう。じゃあ、それは滝壺に任せる。ヒマならお前らもデザートでも作っていいぞ。フルーツやアイスとかも一応買ってきたから、パフェとかなら作れるだろ。盛りつけられるよう、皮は皮むきでも使って剥いとけよ」

「じゃあ、ジャンボパフェを作るって訳よ！」

「私はいいわ。滝壺の隣で紅茶でも淹れることにする」

「実はアイス屋さんのあれを超使ってみたかったです」

そう言って、年少組はフルーツの皮を剥き始め、年長組（麦野、滝壺）はその作業を監督しながら包丁の使い方も教えていた。俺はそれを見ながら簡単な食事を作り、完成するとみんなで食べた。

食べ終わってから年長組とお茶をしていると、厨房の方から助けを求められた。なんでも、フルーツはテキトーに入れたから良いが、クリームとアイスが上手く盛りつけられないんだとか。

「アイス屋さんみたいに上手く丸くなりません…」

「クリームが塊みたいになるって訳よ…」

見てみると確かに途中まで丸くなりかけているアイスと、上手くライン状にできず塊になってフルーツの上にいるクリームがパフェのグラスに盛り付けられていた。

「アンタら不器用ねえ」

「大丈夫だよ、2人とも。私はそんな不器用な2人を応援してる」

「「うう…」」

「いや、あんまいじめるなよ…。でだ、アイスディッシャーは水につけてから使ったのか？」

「「へっ？　アイスディッシャー？？」」

俺の言葉を聞いてなんのことを言っているのか分からないという顔をする2人。まあ、料理したりしないなら器具の名前をしらなくてもしょうがないか。そう思い説明する。

「お前らがいうアイス屋さんの道具ってやつのことだ。アイスクリームディッシャーでも良いが、すくう道具のことをディッシャーと呼ぶ。話がそれたけど、それにアイスが付かないように水を軽くつけて思い切りすくうと…こんな感じに丸くなるんだ」

「「ほあ…」」」

実践して見せると感心する年少組2人。それを笑って見ながらすくったアイスを小さい容器に移し、ディッシャーを絹旗に返す。

「上手いもんね。バイトでもしてたの？」

「いや、使い方のコツとかは認識っていう裏技でわかるんだ。わかってても身体が動かないと意味ないが、そこらへんは普段から家

事やってるからな」

アイスにチョコソースをかけてスプーンを口にくわえながら、麦野に尋ねられことに返す。それを聞いていた年少組はさっきまでの感心した表情から一気にジト目へと変化していた。どうしてだ？

「結局、ズルしてたってことね。尊敬して損したって訳よ」

「上条さんは超ずるいです。能力が便利すぎます」

「まあ、ワンオフの天然物だからな。君たち量産品の養殖とは違うのだよ…って言っても、リスクはあるがな」

アイスを食べながらジト目で見てくる2人に苦笑して答えると、滝壺が質問してきた。

「リスクってなに？」

「ん？ それは秘密だ。昨日の今日で能力について教えるわけないだろ？ 教えて欲しければ、信頼を勝ち取ることだな。そんなときはお前らを仲間だって公に言っても良いし、命懸けで助けてだってやるさ」

「ふーん。じゃあ、がんばってお店やるね」

「おう。それと、暗部の仕事も一応やるからな。殺しとかはもうさせないが、そっちでも頑張ってくれ」

言いながらやる気を出している滝壺の頭を撫でてやると、どこことなく嬉しそうにしている。やっぱこうしていると年相応の普通の女の子

だよな。上層部が能力の有用性を基準に暗部に引きこんだようだが、自分らの都合で子供をコマのように使うなんて許せないぜ。

「…かみじょう、恥ずかしいんだけど」

「え？ ああ、悪い悪い。嫌だったか、ゴメンな」

「ううん、イヤじゃないよ。恥ずかしかっただけ」

そんなやりとりをしていると、どこか呆れた表情をした麦野が話しかけてきた。

「…アンタ、ナンパされてた滝壺を助けたって聞いたけど、いつもそんなことしてるの？」

「いつもじゃないが、困ってる人がいたら助けるのは当然だろ？」

「そういう性格なのね…。親切で言うておくけど、少し考えてから行動した方がいいわよ。じゃないと、将来女絡みで大変な思いするから」

「ははっ、生まれてこのかたほとんど女の子とお近づきになったこともない上条さんを、舐めちゃいけませんよ。フラグのフの字も立ったことないのにありえないぜ。まあ、気を付けるようにするよ。ありがたいな」

そう言っ、麦野の頭も撫でてやる。年上に見えたが一応同い年なんだから、問題ないよな？ そんな風に考えていると、年少組が「うわあ、素でここまで鈍い男なんて超初めてみました」や「これは気をつけた方が良いつて訳よ」と言ってきたが無視しておいた。つい

で、麦野は顔を赤くしつつも嫌がらなかったことを伝えておく。

第八話 痴漢は犯罪

そんな風に年少組のデザート作りを手伝ってやると、冷めたお茶とコーヒーを淹れ直しテーブル席で話をはじめることにした。

「さて、ここからは少し真面目な話とお店の話だ。まず、真面目な話からさせてもらうが、アイテムとシステムのことだ」

言いながらみんなの顔を見回すと、途端に表情を真剣な物にかえた。やはり暗部にいただけあって、そういった切り替えは早いのだろう。

「アイテムだが昨日言った通り、『アイテムは突然介入してきた組織により壊滅され、メンバーは他の組織に引き取られた』ということになっている。まあ、どこに引き取られたという情報は流していないがな。そして、介入した組織の名前は“システム”というレベル不明の幻術使い《イリュージョニスト》がリーダーの組織ということにしてある。いまごろ他の組織は躍起になって情報を集めているだろう。なんせ、レベル5率いる高位能力者で構成されていたチームが、急に存在が確認されたチームにやられたんだからな」

「でも、なんでわざわざウチ…って超いつてもシステムの方ですか。その情報を流したんですか？」

絹旗がパフェを食べながら真剣な表情で尋ねてくる。真剣な話をしているのに悪いが、表情と行動のギャップがすごいな…。なんて考えながら質問に答える。

「それは混乱させるためだ。何者か分からないヤツらがいれば、そっちに気を取られて壊滅直後のお前らへ報復しようとするやつら

が減るだろ？　まあ、お前らは怪我もないしそいつら程度なら撃退できるだろうが、なるべく戦わないでいいようにさ」

「けど、それだと情報を得るために接触してくる可能性もあるんじゃない？」

「そのための店でもあるんだ。まだわからないが、学生が頻繁に出入りする場所なら、暗部も大っぴらには手を出せない。なら、客として店に来てこっそり情報を貰おうとするはずさ。映画とかによくある情報屋みたいな感じにな」

説明すると感心しつつも呆れている様子の麦野。まあ、暗部を客にして利益を出すためにそこまで計算したって言ったようなもんだしな。

「結局、聞かれたらなんて答えれば良いって訳よ？」

「スタンプカードみたいなのを作る予定だから、それでスタンプ10個集めたら教えると言っても言っておけ」

「ええー、どこまで商売に結び付けてんですか。そんなの守る暗部なんて超いませんよ」

「やるからには利益出さないとって思うだろ？　絹旗がコスプレして接客するってんなら、暗部なんて速攻でボコって絹旗目当てに殺到する男子学生だけ相手するがな」

そういうと嫌そうな顔をする絹旗。まあ、いくら可愛いといっても年齢的に中学生の絹旗目当てで来るようなロリにコンな方はご来店願うから、そんなことにはならないけどな。そう思っていると滝壺

が口を開いた。

「かみじょうはコスプレして欲しいの？」

「え？ いや、コスプレはどっちでもいいかな。制服もエプロンだけ作って私服の上に着るってことにしようと思うし。ただ、季節行事とかのときはしたら楽しそうだな。なんてたってこんな可愛い子が4人もいるんだしな」

ハハッつと冗談ぽく笑いながらいうと、滝壺は顔を赤くし麦野・絹旗・フレンドからはジト目で見られた。上条さんがなにしたって言うんですか…。

「上条さんは超自重してください。もしも、なんかの間違いで勘違いおこしたらどうするんですか」

「ええー…いきなり自重とか言われても、上条さんもなんのことか分からないんですが」

「大丈夫だよかみじょう。そんな無自覚なかみじょうを私は応援してる」

「??？ まあ、サンキューな。俺もお前になにかあったら応援してやるよ」

よくわからないが、応援してくれるというのでお礼を言って笑っていると、他のメンバーの視線がキツくなったので話を進める。

「ま、暗部対策はそんな感じで行こう。強行手段に出た場合は迎撃して構わない。ただし、殺すな。家族や仲間に怨まれても困るし、

読み取ってそいつらの親玉ごと潰すからな」

「うわぁー…結局、上条もやるのがエグイって訳よ。なんでそれで表なの？」

「お前と違って心が清らかだからだろ」

そういうと、フレンダが「ムキー！！」と怒ってきたが普通に無視して話を続ける。

「それで、依頼の方はたまにだけ受けるよ。暗部でも魔術師でもな。もちろん内容は選ぶが、これはアイテムのメンバーは健在だってアピールのためだ。それで牽制になるだろうから面倒でも我慢してくれ」

俺の言葉を聞いたメンバーは真剣な表情に戻り頷いた。本当は完全に表に戻してやりたかったが、歴史改変レベルの存在消去は歪みを生むからな。我慢してもらうしかない。

で、そうしてシステムとして話を終わると、今度は店の話に移ることにする。まあ、店のサービスとかに関する話だ。

「じゃあ、今度は店の話だからリラックスして聞いてくれ。まず、一番重要な話だが店の名前はどうか？ お前らの家なんだし勝手に決めちゃまずいと思って相談するつもりだったんだ」

「私のかみじょうが考えたのなら、別に反対しないよ」

「まあ、私もあんまり変なのでなければ何でもいいわね」

滝壺と麦野はとくに意見がないようなので、年少組に意見を求めると絹旗が目を輝かせて口を開いた。

「ハイッ！ 喫茶・キャッツ 絹旗アウトー。後で職員室に来なさい。先生がお説教してあげます」 ええー…ってか、職員室ってどこですか。もしかして、上条さんの家とか？ そうだったら、さすがにドン引きです。超キモイです」

「ええー…なんで勝手に家に連れ込むことになって、しかもドン引きまでされるんですか。職員室なんて冗談なのに」

絹旗に一方的に貶されて心を痛めていると、フレンダが口を開いた。

「まあ結局、店長は上条なんだから組織と同じように店名も決めちゃえば良いって訳よ」

「うーん、そう言われると悩むな。んじゃ、ケールムかカエルムってのはどうだ？ 綴りは『C・A・E・L・U・M』だ。ラテン語で『天国』って意味だぞ。これには、お客様にとっての天国でありますようにって意味が込められてる。ま、楽園ってのも考えたがパラダイスの語源になったものとかで、音がイマイチだったんで天国にしたってわけだ。イヤか？」

本当はそれだけじゃなく、こいつらを闇から救いだし光射す場所へ連れ出すってことで、それをあらわす『LUKE』ってのも考えた。だが、何かバーみたいな名前だし言うのも恥ずかしいので、天国にしてみた。

そうやって反応をみると、みんなが口を開いた。

「こんな地獄行き決定の人間たちが店員なのに天国ねえ。ま、良
いんじゃない？ 読みのにはケールムの方が好みだわ」

「超言えてますね。でも、イヤじゃないんで賛成です。読みはど
っちでもいいです」

「私もいいよ。読みはかみじょうの好きにして」

「結局、地獄行きの私たちには皮肉たっぷりだけど賛成って訳よ。
読みは麦野と同じのでヨロシク！」

みんながそう言うので店名は『Caelum』に決定した。だが、
一つだけ言っておかなければならない。

「お前らが自分は地獄行きって思うのは勝手だが、それは俺が許
さない。昨日、暗部と手を切らせ俺の組織に入った時点でお前らの
命は俺のもんだ。だから、なにがあっても死なせねえし地獄にだっ
て行かせねえ。もし、地獄に行くのが決まってるって言うなら、俺
も行って閻魔をぶっ倒して天国に変えてやる。だから、お前らが地
獄行きって言うなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

そう言って右手を前にヒュッと突き出すと、みんなはポカーンとし
た表情になった。え？もしかして俺なんかしちゃった？

「プッ、アハハハハハ！ なにそれ本気で言ってるの？」

「会ったばかりで、流石にその口説き文句はないって訳よー」

麦野とフレンドが大笑いしながらそう言ってくると、絹旗と滝壺ま
で笑いながら口を開いた。

「どうします滝壺さん。上条さんは死んだ後も私たちと超一緒にいたいらしいですよ？」

「フフツ。いいよ、かみじょう。私たちのことちゃんと守ってね」

うう：上条さん的には冗談で言ったつもりはないのに、ネタだと思われてしまった。まあ、こいつらが笑っていられるなら、どんなことをしてでも守ってやるけどな。そう決意しながら笑顔で返事をする。

「まかせろっ、絶対に幸せにしてやる！」

「うわあ、守ってって言われたのに幸せにするとか言い始めた訳よ」

「アンタ、本気で私たちのこと狙ってるの？ さすがに全員同時攻略目指すようなクソ野郎は願い下げなんだけど」

「大丈夫。私はかみじょうがそんな鬼畜でも応援してる」

「いや、流石に部下としても店員としてもそれは超応援できないんですが」

なんだよお、せっかくカッコ良くキメようとしたのに、なんでそんないじめてくるだよお。つか、誰も狙ってねえよ。家族みたいな存在としてって意味なのになんでこいつら勘違いしてんだよ。

「うう、そんな事言ってくるやつは減給だ。とくに麦野とフレンド。お前ら笑い過ぎ、最初の月10%減給な」

「ええ！？ それは待って欲しいって訳よ！ それに給料なんて聞いてないんだけど！」

「つてか、私は補助金があるからお金はそこまでいらなだけでど」

「なんだと？ ならお前はオープンから一ヶ月はメイド服で仕事な」

フフンと勝ち誇りながら2人にそう言うのと、急に立ち上がった麦野に頭を掴まれてって！？

《ドゴン！》

「ぎゃあー！！」

「ちょーっと笑えない冗談が聞えた気がするんだけど、気のせいかにゃーん？」

「い、痛いって！ マジで体重かけて押し付けんのやめろって！ お前の体じッぎゃー！！ ゴメンなさい、言わないからマジで許してください！」

必死に謝ると麦野は舌打ちしながらもやっとな手を離してくれた。クソッ、幻想殺しじゃなければすぐに脱出できたのに…そう思っていると、他の3人が驚いた顔で見ていた。

「驚きました。上条さんにもダメージって超与えられるんですね」

「ん？ まあな。弱点は多いって言ったろ？」

「見るまでは超信じられませんよ…」

他の2人も同じように頷いている。まあ、説明してない俺が悪いのかと思い一応軽くだけ教えてやることにする。

「信用を勝ち取ることって言いながら、俺だけなにも教えないのは卑怯だからな。この際だし、少しでも能力について教えてやる。昨日、アジトでは否定したが俺はある種の多重能力者だ」

そういうと、メンバーはとても驚いた表情をする。まあ、学園都市では不可能と言われた存在だからな。

「じゃあ、どうして脳が破壊されないのよ？」

「言ったら、俺の力は天然なんだよ。ようは、均衡を保つために2つの力を宿して生まれたってわけだ。全ての能力の頂点に立つ力と、それすらも抑えることのできる力って風にな」

「じゃあ、かみじょうの幻想殺しって」

「ああ、抑止の力の方だ。能力の王を抑えることができるのに、その他の能力が効くわけないだろ？ お前らの力が効かないってのはそういうことだ。納得したか？ 言っておくが最初から知っていた総括理事以外には、お前らにしか話したことないんだからな。だれにも話すなよ」

釘をさしておく、メンバーたちは何故か少し嬉しそうな顔をしている。なんだ？ 弱みでも握ったつもりか？ などと考えていると、メンバーが口を開く。

「フフッ。会ったばかりの人間にそんな秘密を超話すなんて、上条さんは本当にお人好しなんですね」

「いやあ、この言い方はずるいって訳よ。こんな無条件に信頼されてると、さすがにこっちも裏切りづらいつていうか」

「大丈夫だよ、かみじょう。私はあなたを裏切らないから」

「その言い方だと私たちは裏切るみたいじゃない：こっちも秘密は守るわよ」

どうやら、俺が簡単にこいつらを信用していることや、そうやって信頼されていることを喜んでいるみたいだな。じゃあ、俺もなんだから嬉しいしさっきのは取り消しておくか。

「ハハッ、なんか俺も嬉しいからさっきのは取り消してやるよ。フレンダの給料の方は《ドゴン！》ぐはっ！」

「おーい、テメエの頭はどうなってんだ？ 試しに頭ん中でも開いて見てやろうか？ なあ？」

ちくしょう、いまならいけるからって調子に乗りやがって！ 触れてりゃお前だって能力が使えないくせに！

そう思いながら、頭を押さえつけられたまま、手を伸ばして麦野の腰らへんと思わしき場所を掴む。

「にやっ！？」

「ふふーん。これでお前だって能力が使えないだろう。俺はこのままでも能力の切り替えが出来るんだぜ？　これで俺の勝　「…かみじょう、私もお尻らへんを触るのは応援できない」　…へ？」

そう言われると、押さえつけられる力が弱まっていたので顔の向きを変えて自分の右手の掴んでいる先に視線を移す。するとそこには麦野沈利さんの形の良いヒップを掴んでいる自分の右手があった。これはマズイとすぐに気付き前に土御門たちに聞いた紳士的な痴漢の言い訳で切り抜ける作戦に移った。

「ハハッ、まったくいけない右手だ。魅力的な女性を見つけるとすぐに　「言いたいことはそれだけか？」　え？」

「遺言はそれだけで良いのかって聞いてんだよッ！」

「ヒイツ！？　すみません、許してください。もう二度とこのような真似はいたしません。あまりにも貴女様が魅力的なためこの右手めが粗相を働いたようですが、この命に誓いましてこのような間違いは二度と起こしませんので何卒ご容赦くださいませ、麦野様ッ！！」

「いいから死んでろッ！！」

そう言った麦野は逃げられない俺の頭めがけて全力の踵を振り下ろした。その断頭台が振り下ろされ意識を失う前、最後に俺が見たのは可愛らしい花の柄が刺繍された、高級そうな白色の下着だった…。

第九話 おやすみかみじょう

上条が麦野によって意識を刈り取られたあと、麦野は顔を赤くしたまま不機嫌そうに上へ行ってしまった。それを見送ったあと、残ったメンバーで洗いの物をして上条が起きるのを待っている。

「結局、麦野も恥ずかしかったって訳ね。まあ、汚い言葉使いしたりするけど、基本はお嬢様だし耐性なかったみたい」

「上条さんって超自分から、アクシデント招きこんでるような気がします。私たちもそのうち被害に遭うんでしょうね」

溜め息を吐きながら絹旗は食洗機で洗い終えた食器をとりだし、カウスター側の棚のところへ持っていく。すると、気を失っている上条を扇いでいた滝壺が口を開いた。

「かみじょうも、悪気はないんだし少し怒ったら許してあげようよ」

「滝壺さんって上条さんに甘くないですか？ 逆に上条さんも滝壺さんに超甘い感じですけど」

「それ私も思ったって訳よ。上条って滝壺狙いの？ それとも黒髪好きとか？」

「そういえば、私と麦野は茶色ですしフレンドは日本人ですら超ありませんもんね」

2人はいいながら滝壺と上条の座っているテーブルに戻ると、言わ

れた滝壺も聞き返す。

「2人はかみじょうのこと嫌い？」

「いや、嫌いではないですけど。好きって言えるほど超過ごしてませんし…」

「もしかして、滝壺は助けられて本気になったってわけ？」

「そうじゃないけど…。かみじょうは私たちに新しい居場所をくれようとしてくれるから」

そういつて俯く滝壺。言われてみれば、上条は敵として向かって行った自分たちのために動いていた。気付いてみると簡単なもので、きっと認識したときに自分らの過去などをみたのだろう。本当にプライバシーもあったものではない。だが、それで上条は自分たちのために何かしようと思ったのだろう。困った人を助けるのは当然と言ったぐらいだ、暗部ですぐ自分たちを見過ごせなかったんだと思う。

「はぁ…アンタって馬鹿なのかしら？ 結局、頼んでもないのに私らを暗部から救うつもりって訳ね」

「超おせっかいです。光にいたのに、会ったばかりの私たちのために闇にきてどうすんですか…。これじゃあ、頑張って超借りを返さないって思うじゃないですか」

溜め息を吐いたり苦笑しながら上条の顔をみて、口を開くフレンダと絹旗。だが、そういう2人の表情はどこか嬉しそうに見えた。そしてその理由がわかる滝壺もその様子をみて笑顔になっていた。

「じゃあ、そろそろ上に行こうか。悪いけどきぬはたは、起きないかみじょうを上に乗んでくれる？」

「え？ 良いですけど、どこに乗ぶんですか？ リビングのソファーだと麦野と超遭遇して、追い打ちかけてくる気がするんですが」言われた絹旗は右手に触れないよう気を付けながら、壱素装甲で上条を持ちあげると持ち方を調整してから滝壺に聞きかえした。すると、滝壺は上条の靴を脱がせ先に進みながら答える。

「私の部屋に予備の布団あるからそこでいいよ。客間みたいなところは後日インテリアとか置こうっていったから、寝られないし」

「ええっ！？ いや、さすがにそれは超ダメでしょう。フレンドのどこにしましょう。でかいベッド創ってもらってたんですし」

「なあ！？ それは困るって訳よ！ ほぼ初対面の男と新居の初夜を過ごせだなんて、断固拒否します！」

「初夜？ なんだ、フレンドは超その気じゃないですか。決定でいいですね。おめでとうございますフレンド」

そう言って住居側の玄関で靴を脱ぐと、階段をのぼっていく絹旗。その顔はニヤニヤととても楽しそうにしている。だが、言われたフレンドはなんとしても阻止しようと必死になる。

「そういう意味じゃないわよ！ それなら、一番年齢の低い絹旗の部屋にすれば良いって訳よ。私たち3人は上条と同年だから拙いけど、最愛ちゃんは中学生ですもんね。お兄ちゃんと一緒に寝れ

て良かったですねー」

「はあ！？ 年齢より身体の成長で考えたらどうですか？ 一番発達してないフレンダの方が超安全ですよ」

「ああ！ 人が気にしてる事を言うなんて：フン。結局、中学生にもなってお洩らししたらしい絹旗と一緒に上条までおねしょの被害に遭って可哀想になるって訳よ。じゃあ、しょうがないから子供じゃない私たちの誰かが面倒みるしかないって訳ね」

「ムッカー！ 元はと言えば拳銃を超奪われたフレンダのせいです！ 恐怖でしようがなかったとは言え、それを見られた男性に改めて会うの超恥ずかしかったんですよ！」

階段をあがった場所でそうやって騒いでいると、脱衣所のドアが開きパジャマに着替えた麦野があらわれた。

「ああ？ 何で騒いでるの？ しかも、絹旗は上条をお姫様抱っこしてるし：」

「起きないかみじょうを誰の部屋で寝かせるかって揉めてるの。最初は予備の布団あるから私の部屋にしようと思ったんだけど、きぬはたはお兄ちゃんに甘えたくて、フレンダは広いベッドはさみしいんだって」

「「ぜんぜん違います（って訳よ）！！」」

滝壺の言ったことに思わずツツコム年少組の2人。それを見ていた麦野は状況がよくわからず、めんどくさそうに口を開いた。

「あー、面倒だから滝壺の部屋にしときなさいよ。他の2人はまた泊まりにきてもらえばいいでしょ。ハイ、解散っと。お風呂入れたからアンタらもさっさと入りなさいよ」

それだけ言うと、麦野は自分の部屋にはいつてしまった。残された者の中で誤解されたままの2人はくやしそうな顔をしていたがしやうがないので、言われた通り滝壺の部屋に上条を運ぶことにした。

フレンダはいてもしやうがないので自室に戻り、部屋主の滝壺と上条を運んでいた絹旗だけが上条を寝かせる準備をしていた。

「よいしょっと：準備できたからいいよ、きぬはた」

「はい。：っと、でも本当に良いんですか？　もし夜中に起きたら、襲ってきたりするかもしれませんよ？」

滝壺が準備した布団に上条を寝かせると、本当に同じ部屋に寝かせていていいのかと確認する絹旗。だが、言われた滝壺はとくに気にした様子もなく、バスタオルや着替えを準備してお風呂に行く気満々だった。

「じゃあ、私はお風呂入ってくるから。遊んでもいいけど、起こさないようにね。それと、出るときは電気消していつてあげて」

「え？　は、はい。いつてらっしゃい」

とくに気にした様子もなく普通にお風呂へ向かった滝壺を思わず見

送ってしまった絹旗。冷静に考えても自分が普通で滝壺がズレているんだよなと一応確認してみる。

「うん。私は超普通です。……それにしても起きる気配ありませんねえ」

言いながら上条の顔を覗き込むように寝転がる絹旗。試しに頬を突いてみても、表情すら変えないで眠り続けている。

「まったく。最強なのにあんな普通の攻撃で超気絶するなんてどうなってんですか？ それに本気で私たちを闇から救うつもりなんですかね…」

「うーん…」

そう言って頬を突き続けていると、さすがに気になったのか寝ている表情を歪め嫌そうな顔をする上条。だが、それだけではなく障害を排除しようと寝がえりまでうった…絹旗を巻き込んで。

「え？ きゃあ！ ちょ、ちょっとなに考えてんですかッ、超離して下さい！」

上条の左に寝転がっていた絹旗は、半分上条にのしかかれるように胸に抱かれていた。咄嗟のことで腕を自分と上条の間に挟まれてしまい、おまけに幻想殺しが腰からお尻にかけて自分を抱きしめるように置かれているので、能力もつかえない状況である。そんなピンチのため絹旗はそうとう焦っていた。

「（ちよ、これどうやって抜ければいいんですか？ 起こしちゃダメって超言われましたし、能力も使えないから腕を外すことも

できないし：うう、これはかなりピンチです。なんとか滝壺さんに見られる前に脱出しなくては！」

滝壺が戻ってくるという時間内に脱出するため、ここで焦ってはいけないと冷静になろうとする絹旗。だが、

「（くう：寝息が顔にかかって全然冷静になれません。ってか、滝壺さんが出ていってから20分くらいは経ちましたよね？ てことは、最短であと10分で長ければ30分ぐらいでしょうか。なら、慎重に下から抜け出せば大丈夫なはず！」

そう考えモゾモゾと身体をさげて脱出を図る絹旗。思いの外強めに抱かれているせいでなかなか進まないが、少しずつ脱出できている気がする。しかし、ここでまたトラブルが発生する。

「ちょーッ！！　なんで服掴んでるんですかッ、ギリギリの丈でそんなのされたら超下着見えてますって！　コラ、本当に離してください。人がきたらマズイですからーッ」

《ガチャ》

「あれ、きぬはたまだ遊んで…た…の？　ゴメンね。《パタン》」

お風呂からあがり自分の部屋に戻った滝壺だったが、上条に抱かれながらパンツを思い切り見せている絹旗をみるとそのまま部屋を出ていってしまった。

「ぎゃー！！　待ってください！　誤解ですー、お願いですから超助けて下さいッ」

《ガチャ》

「本当に？ 私、邪魔じゃない？」

「邪魔じゃないですッ。むしろ、この状況を超どうにかして欲しいです！」

「わかった。少し待ってて」

そういうと滝壺はベッドの方へ行き何かを手に取り、上条たちの寝る布団の足側に立った。何をしているのか気になったが、抱きしめられているため見えない絹旗は尋ねることにする。

「滝壺さん、なにしてるんですか？」

「うん、ちょっと《カシャ！》：うん、よく撮れてる。あとできぬはたにも送るね」

「ちょッ！？ 下着見えてるのになんで撮ってんですか！ そんなデータ消してください。ってか、助けるのが先じゃないんですか！？」

「大丈夫だよ、きぬはた。私はそんなきぬはたを応援してる」

「いや、応援じゃなくて超実際に助けて下さいよ。右手のせいでは能力使えないんですって」

絹旗が必死に頼むと滝壺はやっと動き出し、とりあえず服を掴んでいる右手を離さした。その後、腕の方も移動させなんとか絹旗は脱出することができた。

「フウ…さっそくアクシデントに超巻き込まれるとは。本気で疲れましたよ」

「でも、あんまり嫌そうには見えなかったよ？」

「嫌というより恥ずかしいんですよ。ってか、この人は本当に寝てるんですか？ 超疑いたくなってきました」

「んー、試しになにかしてみれば？ おにいちゃんって呼んでみるとか」

「いや、私に妹属性はないですって。滝壺さんまでなに言ってるんですか…」

呆れたように絹旗がそういうと不思議そうな顔をする滝壺。それを見た絹旗はいちいち説明するのも面倒なので、気にせずお風呂にいくことにした。

「まあ、いいですけど。それじゃあ、私もお風呂入って寝ますね。滝壺さんも超気を付けてくださいよ。おやすみなさい」

「うん、おやすみきぬはた」

《パタン》

絹旗が部屋から出ていくと、滝壺は上条のポケットからこっそりケータイを取り出し先ほどの画像を赤外線で送った。それだけではなく、待ち受けにまで設定してから電源を切り自分の充電器にさして充電してあげることにした。

「フフツ。それじゃあ、おやすみかみじょう」

そういうと滝壺は部屋の電気を消してベッドに入った。

第十話 その幻想ぐとぶち殺す

次の日の朝。

「いってえー…：そーいや、麦野に蹴られたんだっけ。でもまあ、よく寝た気がする。つか、ここどこだ？　なんで俺、布団で寝てるの？？」

そうやって現状が理解できずまわりをみると、部屋のドアが開いた。

《ガチャ》

「あ、おはようかみじょう」

「あれ、滝壺？　あつ、ここ滝壺の部屋か。なんか見覚えがあるような、ないようになって思ってたんだ。おはよう。今何時だ？」

「今は6時過ぎだよ。学校まで時間あるならシャワー浴びてきたら？　その間にご飯作っておくし」

「ああ、悪いな。タオルとかはどれ使えば良い？」

「えっと、新しいのあるから出すね…：はい」

滝壺にタオルを受け取ると「サンキュ」と言っで部屋を出て風呂場へ向かった。

脱衣所のドアを開けようと思ったが、ここは女子4人が暮らす家だ。いつもの上条さんなら、不幸な出来事に出合うに違いない。そう思い開ける前にノックして声をかけた。

《コンコン》

『ハイ』

「上条だけど開けて大丈夫か？」

『えっ！？　ちよつと待っててくださいッ、超すぐ着替えますから！』

「いや、そんな急がなくていいぞ」

そう声をかけると絹旗が着替えるのをドアの前で待った。いやあ、本当に開けなくてよかったぜ。下手したら朝から空素パンチだもんな。そんなことを考えながら待っていると、ドアが開いた。

《ガチャ》

「ど、どうぞ」

「おう、急がせて悪いな。ん？　髪濡れてるけど、シャワー浴びてたのか？　だったら、髪乾かしてからでよかったのに」

「朝は走るようにしてるので、帰ったらシャワーを浴びるんです。上条さんもシャワーですか？」

「ああ。時間あるなら浴びてきたらどうだって言われてな」

「じゃあ、一回出るんで服は洗濯機に入れといてください。髪乾

かす前に急速洗濯乾燥してあげますから」

そういうと返事をする前に絹旗は出てしまった。まあ、そういうならお言葉に甘えると思いますかと考え、すぐに服を脱いで洗濯機に入れると、風呂場に入った。

《シャーー…》

自分で創っておいていうのもなんだが使いやすいな。その分、オリジナルブランドになってしまいうんだが、互換性はあるから俺がいないときに壊れても大丈夫だ。そんなことを考えていると、髪を乾かしている絹旗が話しかけてきた。

『上条さんはどこの学校なんですか？』

「ん？ 同じ第七学区にあるとある高校だぞ。学園都市きっての無個性平凡校だ」

そういうとドアの向こうからガクツという、ずっとこけたような音が聞えた気がした。

『とあるって…名前で言ってくださいよ。それに、それって超自慢することなんですか？』

「自慢するつもりはないが、クラスの馬鹿共とアホなことするのは楽しいかな」

『……そうですか。なら暗部には関わらない方が超良いんじゃないですか?』

「ま、普通はそうだな。でも、俺はお前らとも一緒にいたいんだよ。だから、普段は学生やって放課後とかはお前らと店をやる。そんで、システムのメンバーに手を出そうとするやつを潰すために、秘密裏に暗部としても動く。…結構、充実してると思わないか?」

俺が尋ねると、外から聞いていたドライヤーの音が消え、絹旗が間をおいて答えた。

『わかりません。最初はお店をやるって言われたのだって「何言ってるんだこの人?」って超思いました。でも、昨日の夜に手伝ってもらいながらパフェを作るのはすごく楽しかったです。だから…上条さんが諦めないって言うなら、私も一緒になってお店と暗部をやっていききたいと思います』

「…そうか。じゃあ、改めてよろしくなっ。最愛!」

『っ!?!? はい、当麻さん! じゃあ、洗濯も終わったんで私は行きます。下で朝食の準備してるんで、あとで超きてくださいね』

絹旗は嬉しそうにそういうと脱衣所から去っていった。俺もその様子に思わず笑顔になりながら、シャワーを終えて着替えてから下に向かう事にした。

着替えて下に降りると、厨房の方から作業をする音が聞えたのでそっちに顔を出す。

「おはよう…って、滝壺と最愛だけか。他の2人は？」

「あの2人はいつもお昼前に起きるんですよ。私はトレーニングで超起きてますが、滝壺さんも体調が悪い時はお昼からですね」

「ふーん、そっか」

話をききながら、朝食の準備を手伝うため台拭きを洗ってテーブルを拭いたりコップやお箸を並べていると2人が料理を持ってやってきた。すべて運び終わると、3人で席についた。

「「いただきます」」

そう言ってみんなで食べ始めるが、メニューは白身の焼き魚・ホウレン草のおひたし・味噌汁・漬物・白ご飯だ。ってか…なんで純和風？いや、滝壺のイメージに合ってるけど、若いからもう少し洋風なものもあると思ってたぜ。ま、和食は好きだから無問題だけどな。

「美味しいよ。料理できないって言ってたけど、これなら十分じゃないか。どっちが作ったんだ？」

「お味噌汁は私ですけど、他は滝壺さんですよ。当麻さんは和食超大丈夫でした？」

「ああ、日本の朝はやっぱり米・魚・味噌汁だよなっ！漬物とおひたしもあるから、余計に箸がすすむぜ！」

「フフッ。おかわりもあるんで沢山食べて下さいね」

笑って話ながらご飯を食べていると、滝壺がジッとこっちを見ていることに気付いた。

「どうしたんだ滝壺？ 食べないのか？」

「ううん。ただ、2人の呼び方が変わってたから気になって」

「ああ。別に深い意味はないけど、少し仲がよくなってな。それでさ」

いつてから、ご飯と味噌汁を食べる。だが、滝壺はまだあまり動いていないので、もしかしたらと尋ねてみる。

「お前も名前が良いならそう呼ぶぞ？」

「本当？ じゃあ私も、とうまって呼ぶ。良い？」

「いいぜ。じゃあ、改めてよろしくなっ。理后！」

「うん。よろしくね、とうま」

俺らがそうやって話していると、今度は最愛が「ムー…なんか、私のときと雰囲気が違う気がします」と言っている。誰も理后を取ったりしないのにな。そこらへんはまだ中学生なんだなと思いつつながら朝食を食べ終え。なぜか作ってくれていたお弁当を受け取り、俺は学校へむかった。

学校での昼休み。

「やっと終わったなあ」

「よっしゃー、飯食おうぜい。カミヤん」

4限の授業が終わり昼休みになると、青ピと土御門が弁当やパンを持って集まってきた。俺も今日は理后たちに作ってもらった弁当があるので、購買に走らずに済む。弁当を食べるためカバンから取り出すと、青ピが話しかけてきた。

「あれ？ カミヤんが弁当って珍しいなあ。節約でも始めたん？」

「いや、今日は理后たちが作ってくれたんだ」

「「…りこう…たち？」」

俺が弁当の理由を答えると青ピと土御門が、上手い具合にシンクロした。だが、2人は言った直後から身体を震わし始めた。

「カミヤん、貴様またフラグを立てたのか！ しかも、1日の間に呼び方が下の名前になっているだもツ、これは許しておけないやー！」

「さあ言うんや！ 一体何をどうして、ナニをしたからそんな下の名前で呼んでお弁当まで作ってくれたんか！」

「な、なんだよ急に。ってか、俺と理后たちはこれから仕事仲間

になる関係だぞ。俺、新しく喫茶店始めるんだ。んで、理後の他に3人いるんだけど、その子たちは店員ってわけだ」

「喫茶店？」

「おう、第七学区にな。住み込みで働く人をグループで募集して、それできたのが理后たちってわけだ。まあ、俺は寮生活のまんまだけどな。オープンしたらお前らもこいよ。レベルに応じて特典が違ってくるが、高レベルだからって優遇されるとかはないからさ」

住み込みで働く事やグループで募集した覚えもないが、同じ暗部の土御門に怪しまれないように、そういうと。青ピはなにやらブツブツ言い始めた。

「：地味系の滝壺ちゃんであのレベルやろ？ ってことは、それと別タイプで同じくらいレベルも期待できるか？ カミやんは、なんちゅう怖ろしいことを考えるんや。ボクを破産させるつもりかいな！」

「にゃー、ロリッ子いるのかにゃー？（4人グループだと？ 滝壺がいるということは、もしやアイテム全員が店員なのか！？ そんなやつらを知らずに雇うとは、幻想殺しは本当にトラブルに巻き込まれやすいんだな。まあ、暗部がまとめて1ヶ所にいるということがわかったのは、朗報だ）」

「ロリは知らんが3人は同じ年で、1人は中学生だ。でも、手を出すなよ。レベル5、レベル4が2人、レベル3と高位能力者ばかりだからな。その中学生なんてパンチで地面にクレーター作れるしな」

ハハッと冗談のように言うと、青ピは顔も青くしてブルブルと震えはじめた。

「いやいや、流石のボクでもそれは無理やで。いやでも、全力で甘えさすのも年上としての仕事なんか？　なら…いやでも…うーん」

「そんな無理に遊ぶことないにゃー。客として行って、いいお兄さんアピールした方が建設的だぜい」

「おお！　つつちー、それ名案や！　よーし、コーヒーに詳しいアダルトな男になるでえ」

「言っておくがレベル5は怖いお姉さん系だぞ。冗談で、お風呂場のオモチャの目がカメラになってるって言ったら、アヒル隊長をレーザーで溶かしてきたからな。お前らもあんま、はしやぎ過ぎないようにな」

そういつてもう一度冗談のようにハハッと笑うと、2人は本気で怖がっているらしく青い顔して抱き合って震えていた。まあ、冗談でもないのでフォローせず弁当を食べ始める。

「お、朝ごはんもメニューが違う。手間かかるのにちゃんとしてんなあ、今度お礼になにかやらないと。つーか、やっぱ女子の手作り弁当は男の憧れだよな！」

「それには同意するぜい。さらに言うなら、義理の妹の手作りだと言うこと無しですたい！」

「かぁー！　己ら、ボクにケンカ売っとんか！　人が残り物のパンを食べてるって言うのに、美味しそうな女子の手作り弁当を食べ

おって…もらったあ！」

「させん！」

飢えた野獣と化した青ピが俺の弁当を狙って跳びかかってきたので、弁当を持ったまま立ち上がり回し蹴りで撃退する。

「ゴフツ！」

《バタツ…》

思い切り蹴りを喰らった青ピは、教室の後ろまで吹き飛び動かなくなった。それを見ていた土御門が顔を引き攣らせながら口を開く。

「い、いやあ、いつみてもカミヤんの攻撃はすごい威力だにゃー。
（それに動きに無駄がないときてる。並みの人間どころか、暗部の人間にだけでなく、聖人クラスにだってそこそこ通用するぞ…）」

「そうか？ ま、鍛えてるからな。…と、そうだ土御門。舞夏の予定ってわかるか？ 空いてるときがあったら、店員たちに料理教えて欲しいんだが」

「人の妹を気易く呼び捨てにするなッ！ まあ、ある程度はわかるが、本人に聞いてもらった方が早いと思うぜよ」

「そっか。んじゃ、メールしておくかな…あれ、なんで電源切れてんだ？ 理后は普通に充電してくれたみたいだし、バッテリー切れてたのかな」

そう考えて、舞夏にメールするためにケータイの電源をいれる。いくら学園都市といっても、この電源が点くのだけは少し時間がかか

るんだよなあ。って、待ち受けが：

「なんじゃこりゃ！？　なんで待ち受けが変わってんだよ！　つか、なんで俺が最愛を抱きしめてんだ！？」

「ほほう：カミヤん。ボクにもちよーつと見せてみ。なっ！？　カミヤんが幼い女の子を抱きしめて服脱がしとるやて！？」

「なんだと！？　おのれ上条っ、ロリに興味ないと言っておきながら、なんてウラヤマけしからんことを！　俺にもその画像を見せろ！」

「そーだそーだ！　ついでに女子の手作り弁当よこせ！」

俺が驚いている間に復活した青ピが後ろから画像を盗み見ると、大声で誤解を生むようなことを叫びやがった。そして、それをきいたクラスのアホ共が同調して群がってきた。くそっ、誰だこんな悪戯したの！？　フレンダか麦野だな！　放課後に店に行ったらまず、問いただそうと心に決めると群がってきたヤツらの相手をするにする。

「やかましいっ、うちの従業員のこんな姿みせれるか！　…いいぜ、てめえら。俺の弁当や待ち受けを狙おうってんなら、その幻想ごとぶち殺す！」

そういつて、急いで弁当と携帯をしまおうと青ピをまず無拍子で殴り飛ばす。

「ええっ！？　ちょっ、幻想ごとして待って。ホンマに死ぬっがはっ！」

続いて、向かっていた男子2人の鳩尾めがけて抜き手を放ち、うずくまる前に蹴り飛ばして後ろのやつらを巻き込んで倒す。そして、視界の隅に映った土御門に振り返りざまリアットを決める。

「待てカミヤん！ 俺はなににもツグほっ！」

…どうやら巻き添えだったようだ。まあ、暗部だし大丈夫だろう。そう思いながら迫っていたやつらを裏拳でノックアウトし、再び立ち上がろうとするやつらの腹に膝蹴りをぶち込む。

最初は勢いで向かって来ていたやつらも、次々と仲間が倒されいくと戦意を失い逃げようとする。だが、俺はそいつらを逃がしたりはしない。足元に転がっていた青ピの足を掴むと、片手で持ち上げ逃げる背中に向かって投げる。掴んだら「ヤメッ、ホンマごめんなさい！ 許しッ」と言って暴れてたが、最後は投げてしまったので聞えなかった。あとでなんて言ったのか気が向いたら聞いてみよう。

そうやって、アホ共をあらかた片付けると教室には20近くの屍が転がっていた。俺はその光景に満足すると食べかけだった弁当を食べた。昼休みが終わると午後の授業を受け、俺はそのまま店に向かい晩御飯や食後のデザートに店で出す料理を作る練習をして自分の寮に帰ったのでしたと。

第十一話 トキワ（ダイ）に生息するL.V. 5の電気鼠（前書き）

キーワードにある通り時系列無視です。

第十一話 トキワ（ダイ）に生息するLv. 5の電気鼠

システムを結成し、喫茶店『Caelum《ケールム》』の準備を始めてから数週間が経った。メニューも季節物など以外はあらかじめ決まり、サービスもほとんど決まった。他所との差別化のため、強^{レベル}度、宗教、その他といったもので受けれるサービスに違いを持たそうということになった。表みたいにすると、

レベル0・1…商品2割引 ※限定メニュー除く

レベル2・3…大盛りへの変更無料サービス

レベル4・5…サイドメニュー1品無料 ※1品以上ご注文したお客様に限ります。

教師・研究者…特製スタミナメニューサービス

宗教関係者…裏メニュー1品無料サービス ※1品以上ご注文したお客様に限ります。

一般・外来…上記の中で好きな特典をお選びください。

といった感じだ。途中で変更するかもしれないが、当分はこれで行こうと思う。それに儲けるためというより、4人が表で生きていけるようにやるのが目的だから赤字にならなければ儲けは少な^{くてもいいんだ}。

それと途中、何度か土御門の義妹の土御門 舞夏^{つちみかど まいか}に教師として来てもらい、ドリンクとデザート^{デザート}の作り方を教えてもらった。繚乱家政女学校に在学していて、実地研修を許されているエリートメイド見習いからの厳しい試験もなんとか突破し、やっと店が開ける状態になった。だが、暗部としても活動するためパソコンの1つでも欲しいと思った俺はみんなに相談することにした。

「なあ、パソコンをこの家に置こうと思うんだが、そういうのに詳しいやつ知ってるか？」

「パソコン？ そんなの使えればいいんじゃないの？ 最新のでも買ってきなさいよ」

「馬鹿、暗部としても使うやつだぞ。そんな市販品使えるか」

簡単に言ってきた麦野にそういうと、額に青筋が浮かび上がったが無視して他のみんなの顔をみる。だが、とくに知り合いはいないらしくみんな首を横に振った。

「じゃあ、ちょっと釣ってみるか。少し準備してくるから待っててくれ」

みんなにそういうと、俺は準備するために厨房の方へむかった。

外の『近日オープン』と書いた看板の横に、前にコンビニのくじで偶然当たったカエルのストラップを割り箸に磔にし、下に焚火を模した爪楊枝と赤く塗ったビニールを置いてセット完了。これで待てればそのうちくるだろう。

ターゲットが来るまでテーブル席でお茶をしておくことにし、ソファー側に最愛・麦野・フレンドの順で座り、椅子側に理后・俺の順で座って待っていると、フレンドが話しかけてきた。

「ねえ、あれでなにが出来るって訳よ？」

「ん？ まあ、待ってろって。運が良ければ今日中には釣れるから」

「てか、当麻さんって超残酷ですね。あんな可愛いストラップを火あぶりの刑にするなんて…」

「なに言っただ、麦野なんて爆笑してただろうが。それに比べたら心を痛めながらも皆のためにやった俺は天使級の優しさだぜ」

ジト目で見てくる最愛にやれやれといった感じに返事をする、麦野とフレンドまでジト目でみてきた。まったく、こいつら上司を敬う気持ちを『ぎゃー！？』すっかりして、ケロヨン！！』心の中で考えていると外から声が聞えた。意外と早く釣れたなと思っていると、声の主が勢いよく店内に入ってきた。

「ちよつとつ、責任者を出しなさい！ ケロヨンにこんなことした悪魔と一緒に社員教育について説教してやるわ！」

「あ、超電磁砲^{レベルガン}って訳よ」

「ああ？　なんで第3位がくんのよ。つーか、目的ってこいつ？」

「すごいだろ？　常盤に生息してるレベル5のピ○チュウだぞ」

そう言ってメンバーの方を向いて笑うと、頭部を思い切り殴られた。

「いてえー！」

「なに馬鹿言っただのよ！　つーか、これやったのアンタ？　事

と次第によっちゃあ、許さないわよ!」

「お前に用があったから、設置したんだよ。お前それ好きだろ？前にコンビニのくじで当たったからやるよ」

「え？ あ、ありがとう。…って、そう言う事じゃないでしょ!」

本当のことを言ったのに超電磁砲ことレベル5・序列3位の御坂^{みさか}美琴^{みこと}は俺に向かって怒ってきた。まあ、怒りつつもしっかりストラップをポケットにしまう辺り、抜け目ないな。そう思っていると、俺以外のメンバーに気付いたのか急に険しい表情になる御坂。

「っ!？ …ちよっと、なんであんた達がコイツと一緒にいるのよ!」

「なんでって、当麻さんはウチらの上司ですし。ついでに言うと、ここは超私たちの家ですから」

「上司？ じゃあ、アンタも!？」「はい、ストップ。それ以上は言わない方が良いわよ第3位」

御坂がなにかを俺に向かって言おうとすると、麦野がそれを制した。

「勘違いしてるようだから言っておくけど、上司ってのはこの店の店長が上条だからよ。で、私たちはここで住み込みで働く店員ってわけ」

「組織はどうしたのよ？ 表に出てきたら一緒にいるコイツが狙われるじゃない」

「解散したわよ。というより、壊滅させられたって言った方が正しいかしら？」

「壊滅？　じゃあ、なんでメンバーと一緒にいるのよ。嘔吐いてんじゃないわよ！」

どうやら御坂とアイテム時代の麦野たちとの間になにかあったらしく、御坂はメンバーに対して敵意と警戒心をむき出しにして話している。だが、麦野の方は落ち着いた様子で御坂の言葉に返事をした。

「嘘じゃないわ。数週間前に目の前にいる男1人に全員やられたの。半分も本気出してないようなこの男にね」

「なっ!?!?　…本当なの？」

「ん？　まあ、本当だな。自分からきたくせに弱すぎて話にならなかったよ。そんで、暗部やめさせて俺が引き取ったんだ。つか、お前も暗部とか知ってたんだな」

コーヒーに口をつけながら言うと、言われた麦野は再び青筋をつくっていたが無視して御坂に話を振った。

「え？　…まあ、ちよつとね。でもやっぱりアンタ、いままで本気じゃなかったんじゃない！　勝負しろって言ってもテキトーに逃げなくせに、一体なんの用よ？」

「ああ。お前でんきタイプだろ？　パソコン作ってくれよ」

「でんきタイプって言うなっ。つか、パソコンなんて作れないわよ。発電能力だからって機械に強いわけじゃないのよ？」

「そうなのか？ ペルシャ絨毯のほつれ直しよりそういうのやれよ。カエルやって損したぜ。まあ、工作は楽しかったけどな」

そう言って再びコーヒーに口をつけると、後ろから殴られた。

「ブフツ！」

「汚なっ！ ちょっと、気をつけなさいよ第3位。正面にいるの私らのよ？」

「失礼なこと言うこいつが悪いのよ。ってか、あんなことした悪魔はアンタだったのね！ 表でなさい、教育してやるわ！」

「やめた方がいいと思うよ。とうまが本気でしたら誰も勝てないから」

俺が吹き出したせいで汚れたテーブルを拭きながら理后がそういうと、言われた御坂は不思議そうな顔をしている。つーか、こいつら俺の能力言うつもりじゃないだろうな？

「本気ってどれぐらいよ？」

「簡単に言うとは緞旗がチビるくらいって訳よ」

「はあ！？ なに言ってんですかッ、あれは当麻さんが拳銃で超撃ってきたからですよ！ てか、お客さんの前でそういうこと言わないでください！」

俺の強さを御坂が尋ねると、フレンダが軽いノリで答えた。だが、

それを言われた最愛は俺が誤解されるような言い方で反論した。こいつらちゃんと考えて話してるのか？

「え？ あんた、女の子に拳銃向けて撃ったの？ うわ、流石にひくわあ…」

「馬鹿たれ。その金髪の銃を奪って弾を抜いてから、最愛の頭に当てて引き金を引いただけだ。実際には撃ってない。それより、お前もヒマなら座れよ。飲み物とデザート出すからさ」

そう言うのと御坂はキョトンとした顔をして聞き返してきた。

「いいの？ オープンの準備してるんじゃないの？」

「いや、オープンはいつでもできるんだよ。ただ、その前にパソコンを手に入れたいから、オープンしてないだけだ。飲み物なにがいい？」

「じゃあ、ホットの紅茶」

「あいよ。んじゃ、理后手伝ってくれ」

注文を聞いて席を立つと、声をかけた理后は「わかった」と言っただけで来た。舞夏に合格点もらったが、教師役の舞夏と自分たち以外で初めてのお客のため、理后はわずかに緊張した様子で紅茶を淹れた。

昨日の夜にフレンダと麦野が作ったチーズケーキを出すと、恐る恐る御坂は口に運んだ。

「美味しい…これ、あんた達が作ったの？」

「そうですよ。当麻さんが連れてきた舞夏さんって人に指導されながら超練習したんです」

美味しいと言われたことにみんな安心し。御坂の質問に最愛が答えると少し驚いた表情になって御坂が聞き返す。

「舞夏？　って、土御門？」

「なんだ、知り合いだったのか。あいつは俺の友達の義妹なんだよ。で、料理めちゃくちゃ上手いから教えてもらったんだ」

「へえ…趣味の店だと思ったら、かなり本格的で驚いたわ。お茶もケーキも学舎の園内にあるお店と同じかそれ以上って感じよ」

御坂がそういうとフレンダも「結局、頑張ったかいがあったって訳よー」と嬉しそうにし、麦野も口には出さないが穏やかな表情をしていた。と、ここでパソコンのことを思い出し御坂にも一応聞いてみることにした。

「なあ、ピ○チュウ。お前の友達にパソコンに詳しい人っていないか？」

「…ピカ○ユウじゃないけど、1人いるわよ。少スキいてみようか？」

「本当か？ マジ助かるよ。んじゃ、頼むわ」

俺がお願いすると、御坂はケータイを取り出し誰かに電話をかけ始めた。つーか、さっきのストラップがすでに付けてある…。

「あ、初春さん？ ゴメンね、急に。ちょっと用があるんだけど今大丈夫？ うん、ありがとう。でね、知り合いにパソコンを作って欲しいってやつがいるんだけど、そういうの出来る？ え、予算？ 用途？ わかった、聞いてみるちよつと待ってね」

そういうと御坂は電話から耳をはなしてこっちを向いた。

「えっと、組むのはできるけど予算と用途によって変わってくるんだって。そこんどこどう？」

「予算かぁ。ま、2・30万くらいか？ 用途というよりコンセプトは『最強の突破力・防御力・スピード』だ！」

「なによそれ…まあ、伝えてみるわ」

予算とコンセプトを聞くと、御坂は再びケータイに耳を当てて話し始めた。

「もしもし？ えっと、予算は2・30万。用途をきいたらコンセプトは『最強の突破力・防御力・スピード』って言われたんだけど…余裕？ てか、なんか初春さんテンション高くない？ はぁ、予算ギリギリで夢のマシーンを組むと。まあ、使えればいいと思うけど。ハイ…うん…うん、えっと第七学区にある近日オープンで書いている喫茶店知ってる？ うん、そこだから。はい、はい」

電話を切ると、フウ…と息を吐いてから御坂が振り向いた。

「なんか、そんだけあれば余裕で自分の夢のマシンが組めるんだってさ。で、見積もり書をすぐに作って持ってくるってさ」

「持ってくるって今日か？ その人の予定とか大丈夫なのか？」

「風紀委員で支部にいるらしいけど、仕事なんてしてる場合じゃねえ状態になってるみたい」

「なんじゃそりゃ…」

御坂の知り合いの状態に呆れつつ、その見積もり書を持ってくる初春という人を待った。

第十一話 トキワ（ダイ）に生息するL.V. 5の電気鼠（後書き）

御坂とアイテムの4人は研究所防衛で既に知りあったという設定です。なので、この御坂は妹達の実験を知っています。

第十二話 です〇ーと

ケーキを食べ終えお茶だけで雑談していると、入り口が開き誰かが入ってきた。

「お姉様は本当にここにいて言ったんですの？」

「ええ、電話では近日オープンの喫茶店と言ってましたよ」

「でも、なんでオープン前の店に御坂さんがいるの？」

「さあ？ あの一、失礼しまーす」

そういつて、店に入ってきたのは3人の女子だった。どの子が初春だと思っていると、御坂が少し驚いた顔をして口を開いた。

「あれ？ 黒子と佐天さんも一緒だったの？」

「あ、御坂さん…って沢山の女性の中に1人男性が！？」

3人の中の髪の毛長い子が席に座ってる俺らの方をみて驚いている。

「ん？ 俺のことだよな。俺は上条当麻だ、一応この店長ってことになってる。自己紹介してもらっていいかな？」

「あ、はい。笹川中学1年の佐天涙子さてんるいこです」

「わたくしは常盤台中学1年の白井黒子しらぐろこですわ」

「はじめまして、佐天さんと同じ学校1年の初春飾利です」
ういはる かざり

自己紹介をすると黒髪ロングが佐天、ツインテールがですの、花飾りが初春というらしい。それに返すようにこっちのメンバーも自己紹介をすると、隣のテーブルに座ってもらいお茶とケーキを出した。

「うわっ、美味しい。学舎の園のお店みたい」

「確かにお茶も含め、同じかそれ以上のレベルですわね。普通の喫茶店とは思えませんか」

「これって上条さんたちが作ったんですか？」

「それはフレンダと麦野が作ったやつだが、俺らも作るぞ」

初春に尋ねられ答えると、初春と佐天は目を輝かせながら俺らを見てきた。なんだ？このぐらいの年代の子は料理ができる人間に憧れたりするのか？そう考えたがあえて聞かず、レベル別の特典や値段について聞いてみる。

「ちょっと意見が聞きたいんだが、この特典表の内容ってどう思う？」

そういって特典の草案表を見せると、御坂が口を開いた。

「んー、これだとバランス悪くないかしら？ 1品以上のところは2品以上にした方がいいと思うわ」

言われた意見をメモすると、今度は佐天が意見を言う。

「レベル2・3だけ弱くないですか？ デザートも大盛りに行けるとしても、小食の人にとっては特典受けられないことになりますし」

「そうですわね。それならまかない料理の小鉢かプチデザートが付けるとかの方がいいと思いますわ」

「おおっ、いいアイデアだ！ やるじゃないかですの、お前のアイデアでいかせてもらうよ」

「ですのって…わたくしのことですか？」

「ん？ そうだぞ。ありがとな、ですのとお前らのおかげで完成したよ」

そう言って、新しい表を書く。

レベル0・1…商品2割引 ※限定メニュー除く

レベル2・3…まかない小鉢かプチデザート1品サービス

レベル4・5…サイドメニュー1品無料 ※2品以上ご注文したお客様に限ります。

教師・研究者…特製スタミナメニューサービス

宗教関係者…裏メニュー1品無料サービス ※2品以上ご注文したお客様に限ります。

一般・外来…上記の中で好きな特典をお選びください。

オープンはこれで行くことになった。いやあ、良いのが決まって良かったなあ。そう思っていると、ですのが肩を震わせて立ち上がった。

「ちょっと、上条さんとおっしゃいましたわね？ わたくしの名

前は白井黒子。ですのじゃありませんの！」

「いや、さっき自己紹介されたから知ってるけど。ですの方が言いやすいだろ？」

「ムッカー！ そんなくだらない理由で勝手に呼ばないで欲しいですの！」

「大丈夫ですよ。私はそんなですのを応援してるから」

「ええっ！？ ちょっと、上条さんのせいで他の方まで呼ぶようになったじゃないですか！ どうにかしてくださいまし！」

理后にまでですのと呼ばれ、まさか他の人間にまで呼ばれると思っていなかったですのは驚いている。だが、俺はかまわず値段の話に移ることにした。

「そんなことより 「そんなことじゃありませんの！」 …まあいい話を進めるぞ。値段設定を見てほしいんだ。さっき出したようなケーキは300円ぐらいにしようと思ってるんだがどうだ？」

「ええ！？ そんなに安いんですか？ 同じくらいの味で学舎の園の店は1000円近くとってたりしますよ？」

「うわっ、超高いんですね。作る側に立ったから超言えますけど、それぼったくりじゃないですか？」

初春の意見をきいて最愛が答えるが、俺も同じことを思った。確かに良い材料を使っていたりするのもかもしれないが、ほとんどブランド価値で値段が上がっている気がする。まあ、安いと言われる分に

は問題ないので、値段はこのままでいくことにする。：さて、パソコンの話をする前に白い棒のようなモノを持って、俺に向かってこようとするのを佐天に止められているですのに話しかけるか。

「やめとけですの、俺はレベル0だが麦野はレベル5、最愛と理后はレベル4でフレンダはレベル3だ。手を出したら店員も黙っていないかもしれないぞ」

俺がそう告げると御坂を含めた4人は驚いた顔をした。まあ、こんな高位能力者ばっかの店は他にないからな。そう思っていると、麦野が楽しそうに口を開いた。

「言っておくけど、コイツだってレベル0だけど舐めない方がいいいわよ？ 私たち4人が同時にかかっても負けたんだから」

「「「なっ!？」」」

麦野の言葉に驚くですの達3人に、御坂が追い打ちをかけるように口を開いた。

「まあ、私も1回も勝ったことないしね。やるなら止めないけど、覚悟した方がいいわよ黒子」

「う：うう：では、せめて”ですの”ではなく”黒子”と呼んで欲しいですの」

「ん？ それぐらいならいいぞ。黒子だな」

「：ありがとうございますの」

落ち込んだ様子のまま俺にお礼を言ってきた黒子が席に座ると、さっそくパソコンの話をはじめめる。

「で、見積もり書ってどんな感じだ？」

「あ、はい。これです。一応、ディスプレイ・キーボード・マウスなども込みの値段になってます」

言いながら渡してきた紙を見ると、メモリがなんだとかファンがどうだとかいろいろ書いていてよく分からなかった。認識を使えば理解できるだろうが面倒なので通常状態で見ると初春に話しかける。

「…うん、わからん。とりあえず、学園都市中のセキュリティを突破できる攻撃力と、外からの攻撃にビクともせずむしろ相手に攻撃するプログラムも欲しいんだ。そういうのもできるか？」

「一応できますけど…何に使うんですか？ 用途によっては風紀ジャツ委員として取り締まらないといけないんですが」

「いろいろできた方が楽しいだろ？ それに書庫にハッキングして人の個人情報みるようなレベル5のピ〇チュウだっているんだぞ。それに比べたら、俺はそういう個人的な理由では使わないから大丈夫だよ」

そういうと、御坂が驚いた表情をした直後に二ラんできたが無視しておいた。言われた初春は少し考えると自分の夢のマシンとやらを組みたい欲求が勝ったのか、承諾してくれた。

「サンキューな。で、いつぐらいにできる？」

「パーツさえ買ってくれば、プログラム含めて2・3日でできま
すよ」

「早いな。んじゃ、買いに行くときは最愛を連れて行っていいぞ。
俺より力持ちだからな」

「なー!? 力持ちじゃ超ありませんよッ、私のは能力です!」

「結局、能力でも力持ちなのは変わらないって訳よ。頑張ってね、
絹旗」

「超イヤです。私だけとか納得いきません」

俺が仕事を頼むと拒否してくる絹旗。まったく、1人は嫌とかとん
だ甘えんぼだな。そう思い他にも行かせることにする。

「んじゃ、麦野とフレンダも貸してやるよ。3人で初春の買い物
手伝ってこい」

「はあ? なんで荷物持ちなのに、まず男のアンタがいかないの
よ。面倒だからいやよ、フレンダだけにしときなさい」

「お前も我儘だなあ。麦野とフレンダはほとんど家でゴロゴロし
てるだけなんだろう? 働けよニート」

「私はアンタがいないときに、ちゃんと食材の買い物に行ってる
わよ」

麦野はそう言って「フンッ」と機嫌を少し悪くする。んじゃあ、し
ようがないから俺と最愛とフレンダで行くか。

「わかった。じゃあ、ニートの代わりに俺が行ってくるよ。最愛とフレンドは強制な」

「「えー…」」

「やかましい。あんまり我儘言うとか創作激辛料理の試食担当にするぞ？ 途中で甘い物でも奢ってやるから我慢しろ」

そういうと渋々といった感じに2人は頷いた。よし、これでいけるな。

「で、いつなら空いてる？」

「風紀委員の仕事もあるので限定されますが、今度の休みの日もいいですか？」

「おう。じゃあ、その日に頼む」

「わかりました。それじゃあ、先に置く場所みせてもらっていいですか？ もしかしたら、余計に必要なものがあるかもしれないので」

「いいぞ。じゃあ、着いてきてくれ」

初春に言われパソコンを置く場所をみせるため、俺は立ち上がると他のやつらも一応気になるのか立ち上がりついてきた。

第十三話 システムのアジト（前書き）

あと何話か書いたらシステムメンバーと超電磁砲組のキャラ設定をのせますが、この話の上条さんは原作のヒーローな上条さんとは違います。初期の御坂に対する上条さんのノリとでも言いましょうか。そんな感じに誰に対してもそっけないです。

第十三話 システムのアジト

パソコンを置く場所へ案内するためにみんなでカウンターを通り廊下を移動すると、住居の方の扉のある玄関に着いた。

「なんで立ち止まるって訳よ？ 置き場なんて上条しか考えてないんだから早く案内してよ」

「いや、こっから行くんだよ。少し下がってろ」

俺は近くにいたフレンダたちに退くよう言うと、靴箱の奥にある隠しボタンを押した。すると、靴箱は《ゴゴゴッ》と音をたてながら左の二階へあがる階段の下のスペースに移動し、地下への階段があらわれた。準備ができたので振り返るとなぜか全員が驚いた顔をしている。どうしたんだ？

「なんだ馬鹿みたいな顔して？」

「なんだじゃないですよッ、こんなの超聞いてないです！」

「さすがにこんなのは予想してなかったかも。とうまはなんで秘密にしてたの？」

「秘密にしてた覚えはないが、こういうのって楽しいだろ？」

そういつて二カッと笑うとシステムのメンバーは溜め息を吐いた。なんだ、こういうの嫌いだったのか？なんて考えながら中学生メンバーをみると黒子だけが目を輝かせていた。

「黒子もこういうの好きなのか？」

「ハイッ。こういう無駄に好奇心を刺激されるものや、夢のある未来とかは大好きですわ！」

「ははっ、だよな。たく、他の連中は若いのに……純粋な心と身体なのは俺と黒子だけなんだな」

「ち、違うわよ。店員たちは知らないけど、私は驚いてただけよ！」

「はいはい。いいから下に行くぞー」

御坂がなにか言ってきたが、純粋な心を失ってしまったヤツには用がないため、目を輝かせている黒子を連れて先に進んだ。後ろから「ちょ、こら！ 無視すんじゃないわよ！」と聞えた気がしたが、逆に無視することにした。

そして階段を下りていくと、地下に行くといってもしよせんは店の地下なのですぐについた。まあ、本当の入口にだがな。そして、その入口の横にある機械にカードを通すと扉が開いた。

「は？ え、これが店の地下ですの？」

「そうだぞ。まあ、地上部より広いけどな」

黒子の質問に答える俺。だがまあ、初めて見たら驚くかもな。普通の喫茶店を営む民家の地下にどれくらい広いのかわからない基地が存在するんだから。広さ的には普通に大型の研究施設くらいはあったと思う。ガスや水道のパイプを避けるため数十メートル地下に創

ったが、近所の地下を全部ぶち抜いて創ったからな。ま、アレイスターもなにも言ってこないし問題はないのだろう。

「…なんなのこの店。というより上条さんってなにを目指してるんですか？」

「将来か？　まあ、明るい家庭を築けたらとは思ってるけど」

佐天に聞かれたので将来の希望を答えると、隣を歩いてキョロキョロと周りをみている黒子以外が疲れた表情をしている。原因がよく分からなかったので、考えるのをやめると黒子が突然消えて遠くに出現した。どうやら空間移動能力者だったらしい。自分を移動させるってことはレベル4だな。

「むっはー！　SFによくある医務室ですわ！」

「すごいだろ？　ロボットアニメの宇宙船をイメージしてつくったんだ。それに他には農業プラント、トレーニングルーム、会議室、大浴場、あと体育館ぐらいの大きさはある演習場なんかもあるぜ」

「アニメによくあるような個人部屋や独房みたいなのはありませんの？」

「あるに決まってんだろ？　細部までこだわるのが上条さんクオリティだぜ！」

そういうと走って戻ってきた黒子が手のひらを向けて腕をあげてきたので、イエイ！とハイタッチをした。やっぱりわかる人にはわかるんだなこの良さが。そう思っていると後ろを着いてくるメンバーが口を開く。

「なんであんたら通じ合ってるのよ…」

「とうまっでたまに変だよね」

「上条さんって、なんでパソコンより先にこんな地下施設つくったんでしょう？」

「結局、馬鹿って訳よ…」

「白井さん楽しそう…」

御坂、理后、初春、フレンダ、佐天と順に色々言ってたが、答えずに進むことにした。そして、目的の部屋に着いたのでここでもカード通し扉を開ける。そしてみんなで中にはいった。

「この部屋だぞ」

「…なんですかここ。指令室？」

「まだ、それっぽく作ってあるだけだ。心臓になるパソコンをいれればモニターとかも使えるようになる」

「うーん。いれますけど、雰囲気に合わせてるなら外装変えないといけないですね。そこらへんて気にします？」

「当たり前だろう？ 指令室でピンクや黄色のパソコンを使っていいのはヒロイン級の女性オペレーターだけだ。他のやつは支給品やオリジナルの無骨なカスタム機さ」

へん！と胸を張って言う。黒子がうんうん頷き、他の人間は初春に同情する視線を送った。つか、こいつら上司や年上に対して敬意なさすぎだろ。

「わかりました。じゃあ、ディスプレイとかはこのを使うので、本体と施設内の機械とを繋ぐネットワークを全力でつくります。メモリなどをかなり多くし、処理速度を上げるために並列演算できるようにしましょう」

「それで完成したらどこぐらいまでなら攻めれるんだ？」

「そうですね…使う人の能力によりますが、最大限に使えるのならツリーダイアグラム樹形図の設計者だって完全に乗っ取り、学園都市の全てのネットワークを掌握できるかもしれません」

「すごいな。よし、それで行こう。初春の肩書は技術部主任な。言っておくが総司令官は俺だからな。これだけは譲らないぜ！」

そうやって1枚のカードを渡すと、不思議そうな表情をして受け取る初春。だが、他の者も状況がわからないようなので説明しようとしたところ、黒子が口を開いた。

「いいですか皆さん。学園都市のアクセス権同様、こういった基地でも階級や肩書によって閲覧できる情報や入れる区画というのが存在しますの。ですから、そのカードは身分証であると同時に情報閲覧のキーと、この施設内の部屋の鍵になっているはずですよ」

「へえ、しらいは色々知ってるんだね」

「でも、それなら私たちは超もらってないんですが？」

「お前らは見習いスタートだからな、階級や肩書が欲しいならなんか頑張れよ。言っておくけど、御坂たちもだぞ」

最愛に説明してから振り返ってそういうと、言われた御坂たちが驚いた顔をしている。

「な、なんで私たちもなのよ？」

「なんでって…ここに入っただろ」

「入ったら強制入隊なんですか？」

「おいおい、仲間でもないやつが秘密基地に入って良いわけないだろ」

なにを馬鹿なことを聞くんだと佐天の質問に答えると、ポケットからカードを取り出して皆にも渡していく。

「ああ？ 実戦部隊？」

「私は索敵部隊ってかいてる」

「私のは工作部隊って書いてるって訳よ」

「私は麦野と同じ実戦部隊って超書いてます」

システムのメンバーが渡されたカードに書いているのを見ていくと、御坂たちも渡されたカードをみた。

「私は作戦部・オペレーター？」

「工作部隊ですよ」

「…実戦部隊」

佐天、黒子、御坂もカードを受け取ると喜んでいるようだ。いやあ、家ごと地下を創ると決めた時にわざわざ創ったかいたったぜ。まさか、こんなにも早くメンバーが増えるとは思ってなかったけどな。

「ちょっと、なんで私が実戦部隊なのよ。ていうより、誰と戦うのよ？」

「なんでって、レベル5で攻撃向きの能力だからだよ。戦うのは世界の悪とだし」

「あのお、ちなみに部隊って何種類あるんですか？」

「まず、大きく分けると作戦部・技術部・軍部・医療部の4つだ。そして、軍部はさらに実戦・索敵・工作に分かれる。あと、お前はオペレーターで女子だから自前の色つきパソコン使っているぞ」

教えてからそう伝えると、佐天は顔をひきつらせながら笑って「ありがとうございます」と言ってきた。そうやって話していると、急に後ろから襟を掴まれ引っ張られた。

「うおっ、誰だよ」

「ちょっと来なさいよ」

麦野はそう言いながら俺を引っ張り、部屋の外へ連れ出した。

「テメェふざけてんのか？　なに表の人間巻き込んでんだよ！」

ドアが閉まり少し離れた通路まで歩いたところで、麦野は壁を《バン！》と叩いて怒鳴ってきた。まあ、怒ってきた理由も理解できたので俺は冷静な表情のまま返す。

「ふざけてねえよ、ここは遊び場っぽく見せているがアジトだからな。渡したカードに細工がしてあって、システム用の作戦室には入れないようにしてある。だが、その他はあいつらを守るのが目的だ」

「…なんでよ？」

俺の返事をきくと、麦野はさっきまでの怒りの表情から普通の表情に戻り尋ねてくる。

「店員と客じゃねえ、プライベートで俺らと付き合うようになったからには暗部と関わることや狙われることもあるだろう。だから、ここに入れるようにしておけばいいって思ったんだ」

「なんで関わりがあつたり狙われるからって入れるようにしたのよ。意味分かんないわよ」

「ここは学園都市でも最先端の技術を集めてあってな。酸素の生

産・空気清浄機・自家発電、水の浄化装置もあるんだ。そして、こ
こは能力で壊せないし内部へのテレポートもまともに出来ない物質
で作ってある。物資も倉庫内に1年はゆうに過ごせる量を置いてあ
り、食料で足りない分は農業プラントで米や野菜は作れる。だから、
いざってときはここに隠れてもらうんだ」

「そういうこと…でも、あの部隊名は？」

「それも一応そのままの意味だ。民間人を巻き込みたくないが、
巻き込まれたからには自分らでもなにかやってもらう。見たところ、
御坂と黒子以外は戦闘向きじゃないだろう。だから、佐天と初春は
軍部以外のこの基地内での作業を担当してもらうってことだ」

そこまで説明すると一応納得したのか、「…わかったわ」と言っ
て部屋にもどって行った。俺も続いて部屋にもどると、心配した表情
で最愛たちが話しかけてきた。

「超どうしたんですか？」

「ん？ ああ、メンバーだけならともかく後からきた黒子も名前
で呼んでるのに、自分は名字で呼ばれてるのが気に喰わないって言
われてな。まったく、とんだヤキモチ焼きだぜ」

「ち、違うわよ！ てか、呼び方なんか気にしたことなかったっ
つーの」

「大丈夫だよむぎの、私はヤキモチ焼きのむぎのを応援してる」

「だから、違うっていつてんだろっがっ！」

顔を赤くしながら怒る麦野をからかうと、俺たちは上の店にもどるみんなを帰宅させ俺も自分の寮に帰った。その数日後、初春と一緒にパーツを買い集め、アジトの電脳戦の核たるパソコン・CORE^{コア}が誕生した。最初は名前を色々考えたが、核だしそのままコアで良いかという事で決まったのだった。

第十三話 システムのアジト（後書き）

アジトの設定は「窓のないビル」に普通の人間が生きるのに必要な機能と作戦室として利用するのに必要なものを加えた感じです。窓のないビルって核シェルターより強度のある素材でできていて、建物内で酸素を含む生活に必要なものの全てを生産できるらしいですからね。

第十四話 ある日のお茶会（前書き）

この話以降がエラーで投稿できなかった新しい話になります。

第十四話 ある日のお茶会

初春にアジトのメインパソコン・CコアOアRアEを組んでもらってから数日経った。特典や値段の設定はできたがそろそろ暗部として1度くらい動いておいた方が良さそうだと思う。まだ開店していない。まあ、もうすぐ夏休みだしそれから開店でもいいかなと少し思ったりもしている今日この頃。

だが、他の客がいないため落ち着いて飲食ができるからか御坂たち超電磁砲一派がたまにくるようになった。お茶やコーヒーはサービスしているが、料理やデザートは金を払ってくれるためシステムのやつらの接客の練習にもなるし別に気にしていないがな。そして今日も4人は集まっていた。

4人が雑談している横のテーブルで俺らメンバーもお茶をしていると、佐天が全員に向かって話し始めた。

「そう言えば幻想御手^{レベルアップ}って知ってます？」

「幻想御手？　なんですかそれ？」

「なんでも、それを使うと無能力者でも能力が使えるようになったり、能力者は能力が強くなったりするんだって」

初春に聞かれると、説明する佐天。だが、言い方的に実際に現物を知っているのではなく、ウワサかなにかで知ってるみたいだ。そう考えながら、うちのメンバーをみてみるとあまり興味がないのか「ふーん」といった表情をしている。

「てか、そんなの超使ってどうするんですか？」

「え？ 能力が使えたり、強くなったら嬉しくないですか？」

「私はある程度頭打ちだからね。フレンダだってレベル3だけ
パーソナルリアリティど、自分だけの現実が確立できてないだけだから使っても意味ない
のよ。だから今より強くなるには、出力よりも能力の幅を広げるぐ
らいしかないってわけ」

佐天の問いに、そう言い終わると紅茶に口をつける麦野。そういえ
ば、黒子は前に空間移動ってわかったけど、初春と佐天はなんの能
力なんだ？ そう思いきいてみることにした。

「そういや、初春と佐天はなんの能力者なんだ？」

「私はレベル1の定温保存サーマルハンドです。持ってるものの温度を一定に保
てるんですよ」

「へえ、人間魔法ビンか」

コーヒーを飲みながらそういうと、通路をはさんで隣に座っていた
初春が俺のことをポカポカ叩いてきたが痛くないので無視する。そ
うしていると理后が口を開いた。

「さてんは何の能力者なの？」

「あ、あたしですか？ あたしはその…無能力者です」

「なんだ俺と一緒に。んじゃ、初春もいれて低位能力者で仲良く
しようぜ」

「あんたはレベル5にも勝てる変態でしょうが…」

無能力者であることが恥ずかしいのか、少し暗い表情でいう佐天。彼女を元気づけるために仲良くしようと言ったら御坂が余計なことを言ってきた。努力でレベル5にまでなった御坂にはこういう能力コンプレックスは理解できないのかもな…。

「うるせえ、レベル5なんて変態集団だろうが」

「ちょっと、私まで第3位らと一緒にしないでよ」

「なに言ってるのよ、アンタなんて代表でしょうが。むしろ、私の方が一緒にして欲しくないわよ」

御坂がそう言うのとレベル5同士の間に火花が散ったような気がした。だが、みんな最近では慣れてきたのでかまわず話を続ける。

「結局、完全な無能力者って訳？」

「え？　そうですね、システムスキャン身体検査ではなんの能力とも…」

「ふーん。でも、完全な無能力者って超少ないんじゃないでしたっけ？　ってことは、わかってないだけでは？」

「そうだと良いんですが、今年の身体検査でもとくに変化はなかったです」

最愛たちに聞かれて答えるも、そういつて俯いてしまう佐天。学園都市では6割の学生が無能力者扱いを受けているが、その中でも強

度0で能力が判明している者もいる。そう考えると同じ無能力者でも能力が判明してないってのは自信を失うのかもしれないな。そんな風に思いながらその様子をみていると、理后が横から突いてきた。

「ん？ どうした理后」

「考えたんだけど、とうまだったらさてんの能力が分かるんじゃないの？」

「それ本当ですか！？ だったらお願いします、教えてください！」

理后がそう言うのと、聞えていたのか佐天が勢いよく顔をあげて立ち上がり俺に頼んできた。うーん、認識すれば分かるかもしれないが、いづれわかる事に能力使うのもなあ。つーか、理后も気を付けてくれ…。

「いや、わかんねえよ。そんな能力あったら今頃『システムスキャナ身体検査能力者』って名乗ってるぜ」

「そう…ですよね。すみません、急に大きな声出して」

そう言ってストンと席に腰を落とすと再び俯いてしまう佐天…しやあねえな。いつまでも暗くなられていても困るので、能力だけ見てすぐにもどることにする。

「対象を認識、存在の把握…レベル0の空力使エアロハンドいだな」

「…え？」

「だから、お前の能力は空力使いだって。これで満足か？ あとは知り合いにでも頼んで、空力使い用のカリキュラムでも受けてみるんだな」

「な、なんでそんなことわかるんですか！？ 上条さんレベル0だし、わからないって」

なぜ身体検査でもわからなかった自身の能力を俺がわかったのか驚く佐天。同じように俺の力を知らない他の3人も驚いてるようだ。ほらな、だからわからないって言って不審に思われないようにしたんだよ。ま、結局使ったのは俺の判断だからそれで理后を恨めしく思ったりはしないけど。と、そう考えていると、麦野が口を開く。

「……滝壺」

「うん。ごめんね、とうま」

「え、皆さんは上条さんについて何か知っていますの？」

「待つてよ。それよりアンタは無効化能力者でしょ？ なんで、他人の能力がわかるのよ？」

「うるせえ、ただの勘だよカ・ン。俺は身体検査でもオールゼロの値を出すまったくの無能力者だ」

麦野の様子からメンバー全員が俺の能力について知っていることがあると分かると、黒子と御坂が質問してきたので言う気はないとバツサリ斬り捨てる。だが、まだ納得していないようだ。しかし、言ってくる前にフレンドが佐天に話しかける。

「結局、能力があるかもしれないけどどうするって訳よ？」

「そ、そうですね。完全な無能力者って思ってたから、えっと、ヤバイわけわかんないかも」

「超落ち着いて下さい。知り合いや教師に空力使いについて尋ねてみれば良いんですよ」

俺の言ったことが本当かどうかわからないのに、信じてパニックになる佐天。だが、最愛が助言をしつつ適温のお茶を空のカップに注ぎ飲んで落ち着くようにいう。

「あ、ありがとうございます……フウ。そうですね、明日にでも先生に聞いてみます」

そういつて笑顔になる佐天。「でも、空力使いかぁ……」と嬉しそうにしている。これで一件落着と思っていたが、御坂がまだ俺を睨んでいた。しょうがないので俺はこういうときのために作っておいた、秘密兵器を厨房から持ってくることにした。

「なあ、喫茶店でバースデー系メニューもそのうち作ろうかって、ケーキに乗せる飾りを練習で作ったんだが出来をみてくれないか？」

「なっ!?!? ゲコ太!」

御坂は俺の秘密兵器『砂糖菓子人形ゲコ太』を見ると、高速で皿を奪っていった。そのあまりの速さに全員が驚いたがとりあえず感想をきく。

「お、おう……それで、出来の方はどうだ？」

「やるじゃない。これなら世のお子様も大満足よ」

「そ、そうか。んじゃ、味の方も試してくれよ」

「は？ なに言ってるの？ そんな残酷なことできるわけないじゃない。つまらない冗談言ってるんじゃないわよ」

そういうと御坂はゲコ太鑑賞にもどった。むしろ砂糖でできた食べ物相手に残酷とかお前の方が冗談言ってるじゃねえよと思ったが言わないでおく。

その後、帰る時間になっても見続けて動かない御坂を動かすため、参考にしたストラップをあげることで動くようになった。だが、そっちに気がいってる間に黒子の口に砂糖菓子人形を放り込みそのまま食べてしまうと、御坂が黒子の首を絞めて「出しなさいっ！！」と怒っていた。すまない黒子。

設定2（前書き）

本編とは関係ありませんが私が好きな禁書キャラはローラースチュアートです。髪の毛の長さから逆算すると最低でも30代になるという素敵な18歳（見た目だけ）です。

設定2

《システムメンバー》

上条当麻

【設定】暗部組織『システム』のリーダーにして、喫茶店『Caelum^{ケールム}』の店長。困っている人間がいれば助けるのが当たり前と思っているが、その割に知り合いにはそっけない態度をとったり相手の言葉をよくスルーしたりする男。だが、別に冷たいわけではなく仲間を傷つけようとする者には容赦しない。そのため上条をよく知る者は彼なりの甘え方なのだろうと思っている。

【所属部隊】総司令官

【得意料理】基本的にそこそこ美味しい物は作れるが得意と言うほどの物は存在しない。だが、強いてあげるならば焼きそばや炒飯など、ちゃっちゃと作れる休日の昼ごはんに出そうなメニューが得意。

麦野沈利

【設定】暗部組織『システム』のメンバー兼、喫茶店『Caelum^{ケールム}』の店員。現在は喫茶店『Caelum^{ケールム}』の二階に他のメンバーと一緒に住んでいる。暗部の依頼関係は上条が仕切っているため、仕事のない今はほのぼのと喫茶店の料理を作ったり普通に買い物したりして過ごしている。そのためアイテム時代に比べると性格は丸くなっている。

【所属部隊】軍部・実戦部隊

【得意料理】女性メンバー内では一番レパートリーが多かったが、得意料理はイタリアン。そのためパスタやピザは主に麦野が作っている。それと本人が紅茶派のため紅茶も淹れるのが上手い。

滝壺理后

【設定】暗部組織『システム』のメンバー兼、喫茶店『Caelum[△]』の店員。現在の住所は麦野の欄に書いた通り。ボーっとしているが、別に考えていないわけではなく雰囲気でそう見えるだけである。寝ぼけた上条が絹旗を抱きしめているのを写真に撮ったり、それを本人が寝ている間にケータイの待ち受けにするなど、実は悪戯好き。

【所属部隊】軍部・索敵部隊

【得意料理】脂っこい物があまり好きではないため和食好き。そう言った理由もあり和食が得意で、定食メニューをメインで担当。

絹旗最愛

【設定】暗部組織『システム』のメンバー兼、喫茶店『Caelum[△]』の店員。現在の住所は麦野の欄に書いた通り。初期の戦闘から数えると一番上条とじゃれあっている少女。年齢のわりに落ち着いていて礼儀正しいので上条にも可愛がられている。その分、上条との関わりが多いためか失禁やパンモロなど一番災難にもあっている。

【所属部隊】軍部・実戦部隊

【得意料理】これといって得意料理はないが、滝壺の手伝いをよくしていたので和食などは作り慣れている。店では注文されてから作

るデザートや滝壺と同じく定食系をメインに担当。

フレンダーⅡセイヴェルン

【設定】暗部組織『システム』のメンバー兼、喫茶店『Caelum^ム』の店員。現在の住所は麦野の欄に書いた通り。上条の前では軽いノリでいることが多いが、女性が多いとわりと落ち着いた年相応の雰囲気になりやすい少女。本人も別に意識していないので、無意識に甘えているのかもしれない。アジトの素材は中への空間移動はできないが、外への空間移動は可能なため武器庫を新しく倉庫^{ストック}として設定した。

【所属部隊】軍部・工作部隊

【得意料理】料理をほとんどしてこなかったため、舞夏に一番重点的に鍛えられた。その甲斐もあって結構美味しい物も作れるようになった。デザートと軽食、それと麦野のサポートを主に担当している。

《超電磁砲組》

御坂 美琴 《みさか みこと》

【強度】超能力者《レベル5》

【設定】常盤台中学2年。序列第3位の通称・常盤台のエース。不良にしつこく絡まれているところを上条が助けに入っただのが最初の出会い。しかし、失礼なこと言ってきた上条と不良らもまとめて電撃で一掃、だが攻撃を受けたはずなのに無傷なまま立っていた上条に興味を持ち以降は頻繁に勝負を挑んでいる。

【所属部隊】 軍部・実戦部隊

【能力】

超電磁砲《レールガン》

エレクトロマスタ

？本来の能力名は発電能力の電撃使いだがその頂点に立つため後になって変更されたもの。代名詞である超電磁砲^{レールガン}を始め、雷撃の槍や落雷などの強力な攻撃を操ることが可能。単純な電撃のみならず、強力な電磁波によるジャミングや電波傍受、磁力操作によってチェインソー状の砂鉄剣を形成したりもできる。また、周囲の金属製物質や砂鉄を集めて範囲展開することで盾を形成するなど、防御行動にも優れる。突出した戦闘力ばかりに眼が行きがちだが、電気信号の読み取りや操作も可能とし、電気錠やセキュリティの解除、携帯端末から書庫への進入、ネットを介した研究所器材の遠隔破壊、警備ロボの制御を奪っての遠隔操作、信号機トラブルを起こし交通渋滞を作るなどのクラッキングもできる。

白井 黒子《しらい くろこ》

【強度】 大能力者《レベル4》

ジャッジメント

【設定】 常盤台中学1年。風紀委員に所属している、御坂をお姉様と呼んで心酔している少女。初春とは風紀委員の同僚でその繋がりで佐天とも出会った。無駄に好奇心を刺激されるものや、夢のある未来が大好きなため上条と趣味が合う唯一の人間。

【所属部隊】 軍部・工作部隊

【能力】

空間移動《テレポート》

？自身や触れたものを瞬時に移動させる。距離・重さ・個数・発動条件などに制限があり、限界値は飛距離が最大81.5メートル、

質量が130・7キロ。テレポートの精度は転移させる物体の重量に関係なく、飛距離が限界値に近いほど甘くなる。加えて上記のとおり触れたものに限られるが、複数の物体を転移することも可能。触れたものしか飛ばせないため、箱の中身だけを移動させて取り出すといった芸当は無理だが、箱だけを飛ばして中身を残すといった応用なら可能。飛ばした先に障害物があつた場合、重なつた部分の物質を押しのかけて割り込むように転移するため、飛ばしたものは双方の硬さに関係なく障害物に刺さつた状態で出現する。例えばもういガラス1枚で、頑丈なビルの支柱を切断することさえ可能である。しかし、3次元から11次元への特殊変換を計算するため他の能力より脳への演算負荷が大きく、発動に時間がかかるし、痛みや動揺などで集中力が乱れるとすぐに使用不能になってしまう。

初春 飾利《ういはる かざり》

【強度】低能力者《レベル1》

【設定】柵川中学1年。黒子と同じく風紀委員に所属している少女。運動や超能力は強くないがコンピュータに異常に強い。風紀委員でもその能力を買われて、優秀なバックアップになっている。ちなみに、頭の花が天然か造花かは不明。

【所属部隊】技術部・主任

【能力】

定温保存《サーマルハンド》

？持っている物の温度を一定に保つことができる能力。触れる必要があるため、効果を使える物がかなり限られてくる。本来なら触れている物の温度を操作できる能力のため、空気を超高温にしたり相手の熱を一気に奪うなど攻撃的な能力としても使える可能性があつた。しかし、強度のわりに非常に高度な演算を必要とすること、初

春本人に相手を傷つけることができないなどの理由により、そのような効果は生まれなかったという可能性に満ちていた能力。

佐天 涙子《さてん るいこ》

【強度】無能力者《レベル0》

【設定】初春と同じ柵川中学に通う1年。噂話や都市伝説などが大好きで、ネットで調べては真実かどうかを確かめようとしたりしている。超能力への憧れで学園都市へきたため、強度に対してかなりのコンプレックスを持っている。

【所属部隊】作戦部・オペレーター

【能力】

空力使い《エアロハンド》

？空気の流れを操る、気流操作系能力。しかし、佐天は身体検査でシステムスキャンも能力が不明というレベルだったので、指先から葉っぱを揺らす程度の風を出すこともできない。

《その他》

喫茶店『Caelum《ケールム》』

【設定】第七学区にある上条たちシステムのメンバーが経営する喫茶店。全員が高校生以下のため趣味の店と思われそうだが、土御門舞夏の試験を突破したほど本格的な料理を提供するお店。いつでも開店できる状態だがまだ開店していない。二階は元アイテムメンバーの家になっている。

システムのアジト

ケールム

【設定】喫茶店『Caelum』の地下数十メートルに存在するシステムのアジト。本来のアジトとしての目的よりも、暗部である自分たちと深く関わることになる人間を守るために上条が創りだした施設。学園都市でも最先端の技術を集めてあり、酸素の生産・空気清浄機・自家発電機・水の浄化装置などが存在する。なお建物自体は能力で壊すことができず、内部へのテレポートもまともに出来ない物質で作ってある。これとよく似た建物がアレイスターの住んでいる『窓のないビル』だが、内部へのテレポートが不可能という点が大きく異なっている。物資も倉庫内に1年はゆうに過ごせる量を置いてあり、食料で足りない分は農業プラントで作物を育てることができるようになっていいる。

【施設】上条らの発言などにより存在が確認されている施設

医務室、指令室、農業プラント、トレーニングルーム、会議室、大浴場、演習場、倉庫、個人部屋、独房、フレンダの新倉庫（武器庫）

CORE《コア》

ケールム

【設定】喫茶店『Caelum』の地下にあるシステムのアジトのメインコンピュータ。超一流のハッカーである初春が全力で組んだオリジナルパソコンで、製作者の初春曰く「使う人の能力によりますが、最大限に使えるのなら樹形図ツリーダイアグラムの設計者だって完全に乗っ取り、学園都市の全てのネットワークを掌握できるかもしれません」とのこと。余談だが、あまりにオーバースペックを追求したため、初春でも1人では最大限に使うことはできないほど様々なことができる仕様になっている。

設定2（後書き）

ちなみに、この上条さんはホットのブラックコーヒー派です。「微糖？ ふざけてんのか、無糖オンリーに決まってるだろ」というぐらいブラックコーヒー派です。

第十五話 おでかけ

砂糖菓子人形・殺人未遂事件から数日後、俺は理后と一緒にセブンスミストにやってきた。ジャージがそろそろ暑くなってきたので、Tシャツを買いたいということのでついてきたのである。俺もそろそろ夏に向けての服が欲しかったので丁度よかった。

「どうかな、どうま？」

そう言いながら理后はレモン色のシャツを自分にあてて尋ねてくる。率直に言うとしても似合っているしメチャクチャ可愛い。普段はピンのジャージのイメージしかないけど、夏はTシャツで過ごすらしいからな。あまりファッションを気にしない理后だけに、シンプルなものでもかなり新鮮に思える。

そう思っているんだが、どうしても胸に視線がいつてしまう。普段はジャージ着てるから気付かなかったけど、理后ってスタイル良かったんだな。麦野もかなり大きい背の高さとかの比率で考えると、メンバー内では理后が一番大きいと思う。：おっと、イカンイカン。上条さんは紳士なのでキチンと服の感想を言うのですよ。

「い、良いんじゃないか？ 涼しそうだし色も似合ってるよ。けど、丈が気になるからもう1つ大きいサイズの方がいいと思うぜ」

「そう？ じゃあ、もう1つ大きいの買ってくるね。少し待って」

そうやって理后がシャツを持ってレジに向かったので、俺も待っている間テキトーに見て回る。すると、キョロキョロとまわりの様子

を伺っている怪しい人間がいた。そーっと近付きながら見ていると
そいつはシュバツと1枚のシャツを手にとって鏡の前に立ち自分に
あてた。

「……なにやってんだお前？」

「ひゃわっ！？ な、なんでアンタがここにいんのよ！」

「なんでって夏物を買いに来たんだが…お前それ着るのか？ 子
供用だから一番大きいのも、ヘソ見えるぞ」

「わ、わかってるわよ。でも、可愛かったから…」

少しショボンとしながら御坂は服を棚に戻すと、振り返って顔を上
げた。

「でも、なんで女性物の売り場にいるのよ？ もしかして、そっ
ち系の趣味でもあるの？」

「…いまんとこ、そんな趣味はないから安心しろ。元々、理後の
付き添いで来たんだ。で、理后がレジに行ってる間に見て回ってた
らぴ〇チュウゲットでちゅうってな」

「ゲットされてないわよ！ つーか、あんた常盤台の生徒にばっ
かあだ名付けて恨みでもあんの？」

「ないことないな。一晚中追い回されたりしたしさ」

意地悪くそう言うと、「ウツ…」と気まずそうな顔をする御坂。俺
は出会ったばかりのころ、御坂に勝負しろとしつこく追い回され

ていた。そして何度か一晚中追いかけることもあり、本人も流石に反省していたのだろう。まあ、年上に甘えたい盛りなんだろうと思って気にしてないがな。

「ハハッ、冗談だ。確かに疲れたりもするが、お前と遊ぶの自体は結構楽しいと思ってるよ」

「…本当？」

「こんなことで嘘言っでどうするんだ。それと常盤台の生徒って言ってもお前と黒子以外にはミサキチぐらいにしかあだ名は付けた事ねえよ」

不安げに尋ねてきた御坂に俺がそう言っていると、相手は「ミサキチ？」と聞き返してきた。だが、ちょうど理后がもどってきたので話を中断する。どうやら歩いてくる理后も御坂がいることに気付いたようだ。

「あれ？ みさかがいる」

「こんにちは、私も初春さんたちと買い物にきてたのよ。それなのに、この男が下着売り場で声かけて来てさ…」

「…とうま、それは流石にデリカシーがないよ」

「ちげえよ！ つーか、どこにあるかも知らねえよ！」

御坂が俺を陥れるために嘘をつくのと、理后に呆れた目で見られてしまった。ちくしょう、さっきの様子を動画に撮っておけば言い返せたのに惜しいことをした。

「フフッ、冗談よ。ごめんごめん」

「やっぱレベル5は性格破綻してるってマジなんだな。ようやくわかったぜ」

「違うわよ！ それに私だけは破綻してないからって、広告塔に使われてるでしょうがッ」

「それって比較的って意味だったと思うよ」

「ぐう…」

御坂が謝ってきたが俺が小さく復讐してみると、理后にまで言われて相手は何も言えなくなる…ざまあしろ。そんな風に思ったが、結構な時間立ち話していたことに気付いたので、俺は話をしてて大丈夫なのか尋ねた。

「それは良いけど、初春たちと来てんならそっち行かなくて良いのか？」

「あ、そうだった。じゃあ、私も行くわ。デートだからってやらしいことすんじゃないわよ。じゃあねっ」

そういうと御坂は手を振って小走りで去っていった。人ごみで御坂の姿が見えなくなると、俺たちも行くかと声をかけようと思ったが「デート…」と言って理后は顔を赤くしていた。御坂め余計なこと言っていていきやがって。

御坂は上条達と別れると初春たちを探した。初春と佐天は以前出会った子がいたので、その子に少し着いて行くといって別れたのだ。まあ、同じフロアにいるし、別れて行った方に向かえばすぐに見つけることができるだろう。

そう思いながら小走りで進んでいると、途中でカエルのぬいぐるみを持った男とすれ違った。ゲコ太やケロヨンを愛する者として、思わずブレーキしてそちらを見てしまう。

「（ゲコ太っ！？ …じゃないか。っーか全く似てないわ）」

男の持つてるぬいぐるみがお気に入りなのゲコ太かと思ったが、よく見ると大して可愛くないまったくの別物であった。足を止めてまで見たものが別物だと分かり落胆したが、御坂は気を取り直すと再び2人を探すため走って行った。そして、そのまま少し行くと佐天と初春がいた。

「やつほー、あの子は？」

「あ、御坂さん。あの子はトイレにいきましたよ」

御坂が尋ねた事に佐天が答えると、御坂も一緒に少女が戻るのを待つことにした。そうして話しながら待っていると、途中で初春のケータイに着信がきたので少し離れて電話に出る。

「《ピッ！》 はい、もしもs『初春ッ、今どこにいますの！！』 し、白井さんえっとあのサボってないですよ…?」

『そんなことより虚空爆破事件グラビトンの続報ですの！』

「え！？」

電話をかけてきたのは風紀委員の支部で仕事をしている白井からで、その電話の内容を聞いて驚く初春。白井の言った虚空爆破事件とは、学園都市で最近起こっている連続爆破事件である。

簡単に言えばアルミを爆弾にするような能力をつかい、ぬいぐるみや子供用の鞆等の警戒心をそぐ物に仕込んで爆発させるといったものだ。最初はゴミ箱内の空き缶を爆発させるというものだったが、最近では先に言った通り悪質な手口で、それを処理しようとした風紀委員から何人もの被害者を出している。

『衛星が重力子グラビトンの爆発的加速を観測しましてよ。近くの風紀委員を急行させています、あなたも速やかに現場に向かいなさい』

「そ、その観測地点は！？」

『第七学区のセブンスミストですわ！』

それをきいた初春は思わずガツポーズをした。なぜなら自分は今その場所にいるからだ。初春はそれを確認すると、話を続ける白井を無視して御坂たちに指示を出す。

「御坂さん、いま白井さんから電話があって虚空爆破事件の次の標的がここらしいんです。避難誘導に協力してください」

「っ！？ わかったわ」

御坂は初春に言われると、すぐに店員の元へ行き事情を説明して客の避難を開始した。

店側の協力もあり迅速に客の避難を完了すると、初春は繋がっていたケータイで避難が完了したことを白井に伝える。

「白井さん、いま避難が完了しま　『避難が終わったのなら、いますぐそこを離れなさい!』　え?」

『犯人のターゲットは観測地点にいる風紀委員ですの!　ですから今回の狙いはあなたですよ!』

焦った様子で初春に告げる白井。どういうわけか白井は犯人が風紀委員を狙って事件を起こしていると突き止めたみたいだ。だがそこに、先ほどまで一緒にいた少女がぬいぐるみを持って現れた。

「おねーちゃん、メガネのおにいちちゃんがおねーちゃんにわたしってって」

「っ!?!　あぶない!」

だがそれを見た瞬間、初春と御坂に嫌な予感が走った。そして、初春はすぐに少女へ近付くとぬいぐるみを遠くへ投げしゃがみこんだ。すると直後、予感通りぬいぐるみに変化が起こり始め急激に収縮していく。

「（くっ、もしいままでの事件の通りならこの距離では爆発に巻き込まれる。時間もないし、いっそ超電磁砲で！）」

そう思い御坂は超電磁砲を放つためポケットからコインを出しながら、初春たちを庇うように前にいく。……だが、

「しまった!？」

爆弾の迎撃を急ぎ走りながらコインを取り出したため、御坂の手からコインが抜け落ちてしまった。そして、新たなコインを取り出すのが間に合わず、その場にいた者たちはそのまま爆風に包まれた……。

第十五話 おでかけ（後書き）

この作品内の胸の大きさ順位

麦野＞理后＞＞佐天＞＞上条さん＞最愛＞御坂＞初春＞フレンド＞
黒子

これは胸囲ではなく胸の大きさです。上条さんが上位に入っているのは無駄のない細マツチョでも、胸筋がすごいからです。

第十六話　ぷれぜんと・ふぉー・ゆー（前書き）

この世界の上条さんは一級フラグ建築士ではありません。準二級ぐら
いです。

第十六話　ぷれぜんと・ふぉー・ゆー

ぬいぐるみが爆発する直前、御坂は超電磁砲を放つことに失敗しそのまま視界は爆風に包まれた。だが、爆発の轟音が聞えるのに対し衝撃はいつまでもこない。そして轟音が止み目を開けるとみんな無事でいた。

「あれ？　どうして…」

「怪我不いか？」

「っ！？　あんたどうして、それに…」

なぜ自分たちが無事なのか御坂が声のした方に視線を向けると、自分のさらに先に上条が立っていた。その足元をみると上条を避けるように爆風で焼け焦げた跡が広がっている。どうやら上条が爆風を防いでくれたようだ。それを確認してから続いて話しかけようとすると、上条の方が口を開いた。

「無事なら良いんだ。…理后、これ付けてくれ」

「わかった」

そう言って上条は、御坂たちの後ろの方に立っていた滝壺に近付き、月のチャームのついたネックレス渡した。御坂はそれを少ししか見れなかったが、お洒落でなかなか可愛いデザインに思えた。

そうして、言われた滝壺がそれを受け取り自分の首に付けるのを見ていると、つけてから少し待ち上条は落ち着いた様子で口を開き滝

壺に尋ねる。

「…いけるか？」

「うん、大丈夫。いく？」

「ああ。それじゃあ、御坂悪いがまたな」

「えっ、ちょっと待ちなさいよ！」

御坂は上条たちに待つように言うが、上条と滝壺はそのまま待たずに去っていった。そして置いていかれた御坂は、2人の姿が見えなくなるると急いで初春たちの無事を確認し、自分も途中で見かけた眼鏡の男を探すためその場を後にした。

爆風を防いだ後、俺と理后は急いで外へ向かっている。緊急時という事でエスカレーターが止まっているのでお姫様抱っこして階段を下りていると、理后が俺に話しかけてきた。

「とうま、このネックレスって」

「俺が能力で創り出した物質を加工した増幅器だ、体晶を使わせないために用意したんだぜ？ 増幅器って言ってもAIM拡散力場への干渉力を高めるようなもんだから、ほとんどお前専用だけだな」

「…ありがとう、大切にする」

そういうと理后は頬を染めながら自分の首にかかるネックレスを右手でぎゅっと握った。まあ、普段からつけてても問題ないデザインにしたけど、喜んでもらえたならよかった。そう思いながら犯人の居場所を尋ねる。

「で、どっちだ？」

「すぐ近くにいます。たぶん、自分の起こした爆発を見てたんだと思う」

真剣な表情で言う理后の言葉を聞きながらさっきのことを思い出す。急に店員が避難するように言ってきたのでなにがあったのか聞くと、警備員と風紀委員からの情報でセブンスミストがいま虚空爆破事件の標的になっているということだった。ならば、俺も犠牲者を出さないために必死で不審物を探し、さっきの場面に間一髪で間に合ったというわけだ。

どうにか間に合ったから誰も傷つかずに済んだが、あのままでは間違いなく重症者が出ていた。下手をすると死者まで出たかもしれない。そんな危険な犯罪者を野放しにはしておけないと、理后の能力でさっきの爆発に使われた能力のA I M拡散力場を辿ってもらっているのだ。そう考えているとようやく店の外に出たので、ゆっくり理后を下ろす。

「…とうま、こっちにいる。ゆっくり歩いてるみたい」

理后に言われ「ああ…」と短く答えついていく。移動する間に先ほどのことを何度も思い返し、そのたびに自分の中を怒りの感情が占めていくのがわかる。だが、これは俺個人の感情だ。だから…

「理后。こいつはシステムじゃなく、俺個人として排除する。能力なんて使うまでもねえ。だから、お前はただ見ていてくれ」

「わかった、気を付けてね」

心配してくれる理后に笑って返すと、少し入った路地に1人の学生の姿が見えた。俺は視線で理后に確認すると黙って頷き返してくる。犯人を特定すると、俺たちは気付かれないよう歩いて近付くことにした。

セブンスミスト近く、店員から避難するよういわれその直後に大きな爆発があった。たくさんの人がその爆発に驚き混乱している中、1人の学生は笑みを浮かべていた。

「（ククク、やったぞ！ どんどん力が強くなってる。だが、もっとだ。もっと）ふつとばしてやる！！」

「よう、随分ご機嫌じゃねえか。事件が起こったってのにどうした？」

「え？」

急に後ろから声をかけられた学生が振り返ったので、俺は相手の目をしっかりとみる。明らかに動揺して『どうしてバレた、相手は証拠を掴んでいるのか、どうやって排除すればいい』そういったいくつかの感情が容易に読み取れる。だから俺はさらに揺さぶりをかけ

ることにした。

「なに呆けてんだよ？ お前がさっきの爆破事件を起こしたんだろう？」

「な、なんの事だい？ ボクにはさっぱり」

「ハハッ、そうか。んじゃ、教えておいてやるよ、あの爆発での怪我人は…ゼロだ」

そう言うのと相手の男は驚愕しさらに動揺が広がる。まあ、外から見れば、あの爆発で間違いなく怪我人が出たと思うよな。そんな風に考えていると男は冷静さを失いながら叫ぶ。

「そ、そんな馬鹿な！ あの威力だぞッ、いまの僕の最大出力だつてのに！」

「うるせえよ、ぎゃーぎゃー喚くな。テメエの力は、このレベル0の俺に防がれる程度だったってだけじゃねえか」

「くっ、ふざけるなァッ！！」

俺の言葉に激昂した男はこっちに向けてスプーンを数個投げてきた。だが、それが収縮され始める前に俺はスタートを切っている。一気にトップスピードまで加速し、収縮中の物体を左手で男の方へと殴り飛ばす。

「なっ!?!」

まさか、爆破までのわずかな時間で返されると思っていなかった男

は、自分が巻き込まれないよう能力をキャンセルし、もう一度かけ直すしかない。だが、そんなことをする時間が惜しいのか、男は新たにアルミ製の道具を大量に取り出し、狙いもろくに付けずに投げてくる。

「なんなんだよッ、お前は！！ 僕の邪魔をするなあああ！！」

「邪魔だ？ 人の大切な仲間傷つけようとしておいて、無事で済むと思うなッ！」

叫びながら俺は狭い路地であることを利用し壁を蹴って走る。すると、男は驚きながらも爆発の範囲内であることに安心し、笑いながら爆発を起こしてきた。…だが、

「そんなもん、端の方を突っ切っていけば大してダメージはねえんだよ！」

そうしていける限界まで高さや距離を走った俺は、最後に強く壁を蹴り爆風の外側の方を顔などを守りながら突っ切っていく。それなりのダメージは負ったがかなりの軽傷だ。そんなことを考える余裕まである状態で着地すると相手は目の前にいた。

「ひいっ!？」

「歯あ食いしばれ爆弾魔！」

「がはっ!」

御坂たちを傷つけようとした男の顔面を怒りのまま思い切り殴ると、相手は踏ん張る事もできずに数メートル吹っ飛んだ。そして、その

まま吹っ飛んだ先にあつたポリバケツやごみ袋にぶつかって止まると、イラついた様子で何か言っている。

「クソッ、いつもそうだ。なにをやっても力にねじ伏せられる。お前みたいなのが悪いんだよ、風紀委員だってッ。力のあるヤツなんてのはみんなそうなんだろうが！！　僕だけが力を使ってなにが悪い、この街では能力が全てだ！！」

「よくわかってんじゃねえか。そう、この街では能力が全てだ：つまりお前には力を使うだけの資格も頭も足りなかったんだろう？弱者やそれを守る自分より強い者を怪我させるのは楽しかったか？　確かに今のお前は力を持つてるかもしれないねえ：けどな。得た力の使い道がこんなくだらねえんじゃ、どんな強い力得たって誰にも勝てねえんだよ、この無能野郎が！」

そういつてゴミの中で倒れている男の襟を掴むと持ち上げ無理矢理立たせる。

「ぐあっ」

「どうだ無能野郎。せつかく得た力をただの無能力者に踏みにじられる気分はッよ！」

「べあは！」

襟を掴まれ苦しそうにしている相手の顔面に頭突きをすると、相手の方から鈍い音がして鼻血をだした。鼻血が出るというのは相手の戦意を削ぐのにかなり有効だ。こいつもケンカ慣れなんてしていないのだろう、鼻血が出ていることに気付くと目に恐怖の色が浮かぶ。

「ご、ごベンばさい。も、もうひまへん」

「おいおい、ちゃんと話してくれよ。そんなんじゃ、なに言ってるのかわかんねえぞ！」

「がっはー!!」

掴んでた襟を捻り背負い投げの要領で地面に叩きつけると、相手は痛みで動けないでいる。だが、この程度で終わらす気はない。

「なに寝てんだ？ ほら、起きろよ」

「あアアああ!!」

投げられた痛みで地面から起き上がれないでいる男に近付き、肩を踏みつけ力を込めた。すると、ミシミシと骨が悲鳴をあげる感触が伝わってくる。だが、折れも外れもしない力加減で痛みのみを与え続けると、男は呻き声をあげ痛みに苦しんでいるようだ。けど、こんなんじゃぬるいよな？

「記念に腕の一本でもイっておくか？」

「ゴベンばさいゴベンばさいゴベンばさい!!」

俺が軽い調子で告げるだけで、男は泣きながら赦しを請うてきた。ははっ、なんだ自分が悪い事したってわかってんじゃねえか。なら、罰は受けないといけないよな？そう思って相手の腕に体重をかけはじめると、理后が声をかけてきた。

「っ!! …とうま、ストップ。みさかが近付いてきてる。まっ

すぐここに向かつてるみたい」

「……そうか。よかったなお前、御坂に感謝しろよ？ んじゃ、あいつが来る前に帰るか。行こうぜ、理后」

理后が能力で御坂の接近を感知したため、俺らは店に帰ることにする。だが、路地を進んで行こうとしたところで、ついてきていた理后が爆弾魔のところで立ち止まっていた。なにしてんだ？

「……よかったね、本気のとうまを相手にしないで済んで」

「へ？ へっ!？」

「じゃあね、さようなら」

理后が相手になにを言ったか聞えなかったが、相手が驚いているか怯えているかしている様子が見えた。俺は相手の様子が急変したことが気になったので、理后にどうしたのか聞いてみる。

「なんか怯えてるけどなに言ったんだ？」

「え？ ああ、今日のとうまは本気じゃないって言ったの」

「ふーん。お前も表に生きるんだから脅しとかやめような」

「わかった、気を付ける」

そんな風に俺たちは話をしながら御坂や風紀委員にバレないように、少し急いで路地から離れて帰っていった。その後、黒子達に聞いた話によると現場にきた御坂の通報によってボロボロの状態で発見さ

れた爆弾魔は保護されたい。それによって今回の騒動を巻き起こした虚空爆破事件は幕を閉じたのだった。

第十六話　ぷれぜんと・ふぉー・ゆー（後書き）

一応言っておきますが、この作品のヒロインは理后ではありません。
クーデレの上条さんです。

第十七話 干渉実験（前書き）

この作品の上条さんはまだ『不幸』って言ってないと思います。書き溜め分にも書いてないので、『不幸』って言わずに終るかもしれません。

第十七話 干渉実験

セブンスミストから帰ったあと俺は地下に来てCOREをいじっていた。爆弾魔を痛めつけたあとの帰り道に理后が言っていたことが気になったからだ。理后は今日のあの爆弾魔のAIM拡散力場を感じたとき不思議な感覚がしたと言った。それを詳しく聞いてみると、どうやらヤツ個人のAIM拡散力場に誰の物かわからない他の力場が干渉していたらしいのだ。

俺は幻想殺しを持っているからAIM拡散力場を発していないためそういうのは専門外だが、能力者が普段からまわりにAIM拡散力場を発していることはあっても、能力を使う際にまわりの力場が干渉してくると言うのは本来あり得ないことらしい。

「…ふーむ。調べただけじゃ力場についての概要や能力が起こる原理ぐらいしかわからんな。理后と麦野に実際にやって見せてもらうか」

そう決めると俺は2人を呼びに上へ向かった。

2人を探すと、玄関に全員の靴があったので家の方にいることがわかった。そして二階に上がりそのままりビングに行くと麦野がテレビをみていて、年少組はそれぞれ本かなにかを見ていた。

「なあ、麦野ちょっと手伝ってもらいたいことがあるんだ。一緒に地下に来てくれないか？」

「なにすんのよ？ 面倒なことないやよ」

「壁に向かってレーザーを撃つだけの簡単なお仕事です」

「なら自分もできるでしょ、1人でやりなさい」

そういうと麦野はテレビへと視線を戻した。すると、フローリングに寝そべって缶詰カタログを見ていたフレンドがそれを見て、「プッ、フラれたって訳よ」と笑ってきたので俺はまっすぐフレンドの元に行き背中座に座った。

「ぎゃっ!!」

「なあ、お前もう少し上司を敬うってこと覚えようぜ」

「いまはプライベートって訳よ！ つーか、重いー」

「プライベートなら何してもいいのか？ んじゃ、お前を逆さにして店の前に吊るしておこうか？ 下着丸見えだからみんな注目してくれるとおもうぞ」

「へ、ヘンタイ！？ 助けて絹旗ー」

フレンドは助けてもらおうと、麦野の隣で映画のパンフレットをみている最愛に呼びかけた。だが、最愛は視線をあげすらせずに答える。

「良かったですね、超人気者になれて。頑張ってくださいね」

「うう…結局、誰も助けてくれないって訳よお。麦野ー」

「五月蠅いわねえ。遊ぶなら自分の部屋で遊んでなさいよ」

「遊んでないしッ!？」

助けを求めた麦野に遊んでいると思われたフレンダは、半泣きで訴えかけるような表情を浮かべ言った。まあ、麦野に言われた通りここで遊んでもしょうがないので、フレンダの足を持って逆さ吊りにして立ち上がる…水色か。

「えっ、うわっ!？　ちょ、本気っ!？　やめてほしいって訳よ!」

「麦野が手伝ってくれないから遊んでるだけだろ？　俺じゃなくて麦野に文句言え」

「前に戦ったときも麦野に文句言えって言ってたけど、上条が悪いんだって訳よ!」

「はいはい、いいから下行こうぜ。少し遊んでやっからさ」

いつまでも逆さ吊りに持って歩くのは疲れるので、肩に担ぐように持ちかえるとそのまま下へ向かう。すると、麦野がテレビを消して立ちあがった。

「はあ…わかったわよ。で、なにすればいいの?」

「ん？　ああ、理后も連れて地下の演習場に行ってくれ。俺はこいつを吊るしてくるからさ」

「いや、さすがにやめてあげなさいよ…」

呆れた表情で麦野がそう言ってきたので、しょうがなくフrendaを床に置くと途端に麦野に抱きついて「ありがとう、ありがとう」と何度も言っていた。人望あるんだなあ…と思いながら、もう1人の手伝ってもらう相手呼びに彼女の私室へ麦野と向かう。

《コンコン》

「理后、俺だけど開けて大丈夫か？」

『どうぞー』

許可を貰ったのでドアを開き部屋に入ると、理后はベッドに寝転がっていた。別に寝るわけでもなく、ただ寝転がっているようにしか見えない理后に麦野が尋ねた。

「アンタなにしてたの？」

「なにもしてないよ。ただ、寝転がってただけ」

「別にいいけどもう少し…って、それどうしたの？」

声をかけられてベッドに座り直した理后に、言いかけていた麦野が何かに気付いて尋ねた。なにに対して言ったのか理后を見ながら考えてみるがよくわからない。すると、理后は首にかかっている俺のあげたネックレスを掴んで口を開いた。

「これ？　とうまに貰ったの」

「こいつに？　へえー」

麦野はネットレスが俺のあげたモノだとわかると、ニヤニヤしながらこっちを見てきた。しかも口が『ω』になってやがる。アイアンクロードタコ口にしてやろうかな？　そう思ったが一応理由を聞いてみることにした。

「……なにニヤニヤしてんだよ？」

「べっつにー」

「…まあ、いいか。それより理后少し手伝って欲しいことがあるんだ。一緒に地下にきてくれないか？」

「いいよ。なにするの？」

「実験さ」

理后に聞かれたことに悪戯っぽく笑って答えると、俺たち3人は地下の演習場へ向かった。

「本当にあったのねー」

地下の演習場に着き中に入ると麦野がそう言った。つーか、前に説明したのに信じてなかったのか？　基地なんだから戦闘訓練用にこういう施設もなきゃダメだろうが、と思ったが話が進まないのに進む。

「んじゃ、説明するぞ。今日はA I M拡散力場への干渉実験をしたいんだ。理后が言ってた能力者にまわりの力場が干渉するって状況を作って欲しい」

「そうしてどうなるのよ？」

「それを調べるのが実験の目的だよ」

理解力のない超能力者^{レベル5}にやれやれと言った表情でいうと、麦野は拳を握ってプルプルと身体を震わせながら「わ、わかってるわよ。フンッ」と横を向いて拗ねてしまった。少し可愛いと思ったがそれを無視し、理后に同じ状況を作り出せるか尋ねる。

「それで、似たような状況をつくって欲しいんだができるか？」

「たぶん、似せることはできると思う」

「じゃあ、頼む。それじゃあ麦野、お前は壁に向かって威力を抑えたレーザーを放ってくれ」

言われた麦野は機嫌を損ねたまま黙って壁の方を向き右手を構えた。構えた直後、右手が発光したかと思えばすぐに壁めがけてレーザーが放たれる。勿論それはそのまま壁にぶつかるが、レーザーを放ってもこの施設の壁などは、どんな能力でも壊せない強度になっているので問題ない。そして出力が安定してるのを目視で確認すると指示を出す。

「よし、麦野はいまの出力を維持してくれ。いまから理后が干渉するが無理に制御しようとしなくて、それに委ねて撃ち続ける」

「了解…って、滝壺あんた体晶無しでどうやって力使うのよ？」

「とうまのプレゼントが増幅器になってるの。だから、大丈夫」

「なーんだ、デートした記念じゃなかったのね。ま、いいわ。きなさい」

麦野に言われて理后は顔を少し赤くしたが、手を麦野に向けると真剣な表情になる。理后は小さく「いくよ」というと麦野のAIM拡散力場への干渉を始めた。

干渉を始めるとレーザーに変化が起こり始めた。最初は強くなったり弱くなったりしていたが、途中からまっすぐ撃たれていた狙いが上下左右とずれるようになった。また、その変化を過ぎて威力が上がった状態以外の変化をしなくなったとき理后が口を開いた。

「これ、この状態が一番近い」

「つーことは、犯人の力場に干渉した力場ってのは威力をあげる効果があるってことか？」

「それは分からない。でも、力場自体かその力場の元になったものに威力を上げる効果があるのは確かだと思う」

それを聞くと理后に礼を言い、実験終了のため麦野にも撃つのをやめさせた。実験を終え演習場を出ると俺たちはさっきの結果を考えるために指令室のCOREのところへと向かった。そして、指令室の前に着きカードを通してドアを開けると、俺は待機モードにしていたCOREを通常モードにして前に座り、調べ物を始めることに

する。

「なに調べてんのよ？」

「んー、簡単に言えばさっきの力場みたいに、能力にブースト効果を付ける能力があるかを調べてる」

「それで？」

「いやな、黒子から聞いたんだがあそこまで凶悪な事件はともかく、能力者による事件が急増しているらしいんだ。だが、驚くことに逮捕されたやつらの中に書庫に登録されているよりも、あきらかに強い能力を使っていた者が何人かいたんだと」

麦野たちにそう説明しながら書庫へとアクセスしていく。本来なら許可を得たアクセスキーでしか閲覧できないが初春の組んだプログラムでハッキングすれば一発だ。そして書庫内の能力の種類を見ながら続きを話す。

「んで、今回の犯人も調べてみればレベル2：おかしいだろう？周囲数メートルを爆風で焼き尽くし俺が助けに入らなきゃ御坂たちは重症になってたんだぜ？」

「それなら確かに威力はレベル3か4にいつてもおかしくないわね」

「だろ？ 書庫の登録ミスとも考えたが、大量にいるってんなら理由ありって考えた方が早い。だからさっきの実験で、もしかしたらブースト能力かなにかの影響で力を上げてるのかもって思ったんだ」

そういつて一覽をみていく。だが、ブースト効果のような能力は発見できなかった。

「書庫にブーストに使える能力なんて載ってねえな。理后みたいなA I M拡散力場に干渉するタイプとも考えたが、理后の力はほとんどワンオフだ。つまり、近いものはあってもここまで直接干渉して制御できるものは存在しねえ」

「それじゃあ、とうまは何でブースト効果を得たと思うの？」

「いや、そこまではまだ考えれてない。体晶みたいに意図的暴走を起して威力を上げるってのも考えたが、それこそあり得ないからな」

アイテム時代の理后は体晶という薬品を使い意図的に能力を暴走状態にしていた。それにより能力追跡の力を發揮していたのだが、普通の人間は即座に拒絶反応が出るためともに力を使い続けることなどできるわけがない。

ブースト能力者もおらず、その手掛かりになるものもない。どーすっかなあと椅子の背もたれに体重をかけてグルグル回っていると麦野が口を開いた。

「あれは？　ほら、佐天が言ってた幻想御手レベルアップとかいうの」

「っ！？　それだ！　ナイス麦野、愛してるぞ！」

麦野の言葉で幻想御手の話を思い出し、急いで調べ始める。もし、佐天の言ってた幻想御手というものが存在するのならば、確かに最

近の事件の犯人の能力の強さの説明がつく。だが、俺が調べてる後ろで2人がなにか話しているようだ。

「……なに睨んでるのよ」

「……別に」

「……さっきのこと？ あんなの冗談に決まってるでしょ？」

「別に気にしてないもん」

「はあ……あっそ。なら、睨んでくるんじゃないわよ」

……何故かわからんが、理后が麦野を睨んでるらしい。あいつでも怒ったりするんだな。いつもボーっとしてるイメージだから知らなかったよ。そう思いながら調べていると、幻想御手について書かれているページを見つけた。

「なになに……音楽ファイル？」

「見つけたのとうま？」

「いや、それについて書かれてるページを見つけただけだ。どうやら、幻想御手ってのは音楽ファイルらしい。だが、音楽を聴いて能力が上がるなんてありえるのか？」

「100%無いとは言い切れない。幻想御手はともかく催眠術で力が上がったりするって聞いたことあるでしょ？ そんな感じで脳のリミッターを解除するものだとなれば、ありえない話じゃないわ」

俺の質問に答える麦野。んー、確かにそういうのなら力は上がるかもしれない。だが、それだと出力だけ上がってしまうんじゃないか？そう思い訊いてみる。

「リミッター解除だとして、それだと制御はどうなる？ リミッター解除だけじゃ、出力しか上がらないだろう？」

「確かにそうね…」

「あれは？ テストメント 学習装置みたいに脳に作用して能力開発するとか」

「おっ、そっちの方が近いかな。だが、調べるにも現物を手に入れてみるしかないさそうだ。俺はこのまま探してみるからお前らはもうあがつていいぞ。ありがとな」

お礼を言って検索作業にもどると、麦野は「ほどほどにして休みなさいよ」と言い、理后は「じゃあ、お布団ひいておくから」と言っ
て指令室を出ていった。つか、泊まるって言ってないんだけど…
そう思ったが伝える相手はすでにいなかった。

第十七話 干渉実験（後書き）

この後、上条さんは滝壺の部屋にしようがなくなってます。泊らな
いで帰りましたが。

第十八話 幻想御手（前書き）

ここから数話くらいの長編になります。だいたい、5・6話くらいですかね？

第十八話 幻想御手

幻想御手の入手法を調べ始めてから数日が経った。元始種子の力を使えば即座に手に入れる方法がわかるだろうが、力を使い続ければ俺はいずれ死ぬ。以前、メンバーに俺の能力のリスクを訊かれたときは秘密と言ったが、あれは実際には言えないと言った方が正しい。言えばきつと使用を禁止されるからだ。

能力名『元始種子』^{オリジン} その力は命以外のものなら全てを創り出し、元始種子と幻想殺し以外のものなら全てを消せる。また、すでにこの世には存在しないものの情報だって知ることができる力だ。ま、そんな便利な力の代償は俺の寿命である。どういう違いがあるのか分からないが生物に対しての認識だけはリスク無し。だが、創造・消去・無機物への認識は使う度に寿命が減っていくのをこれまた自身の能力で理解してしまう。まったく嫌な能力だぜ。

そういった理由もあり、誰かの命の危機や誰かを救うためにならば俺は喜んで力を使うが、やはり長生きしたいのでそれ以外では使わないようにしている。そのため今回も地道に入手法を探っているがまったく成果なし。まあ、あるにはあったが高値で取引されているという情報だ。そんなことやってられるかと思いつながら学校から帰っていると御坂に出会った。

「爆弾魔が意識不明？」

「そう。なんか急に意識不明になって回復のためにいろいろ試してるけど、効果なし。つか、誰かさんがボコボコにしちゃったからねー」

「風紀委員へ通報したのお前だろ？ お前って最悪なやつだな」

「私じゃないわよッ！」

そう言って電気を飛ばしてきたので右手で打ち消す。まったく、感情と能力が一致して発動するのやめてほしいぜ。そう思いながらも自分が犯人を御坂だと思っているように話を続ける。

「んじゃ、誰がやったんだよ？ 黒子だって『お姉様の通報で行ってみれば、さすがに犯人に同情しましたわ』って言ってたぞ」

「だから、1発ぶん殴ってから通報しようと思ったら、裏路地のところでボロボロの状態の犯人を発見したの。つか、アンタと滝壺さんでしょ」

「なんで俺らがそんなことすんだよ？ メリットがないっつの」

「じゃあ、なんですぐに去っていったのよ？ 滝壺さんの能力で犯人を追ったんでしょ？」

そう尋ねながら隣を歩く俺を見上げてくる御坂。まあ、目の前でいろいろやってから去ったからな。そりゃ、ばれるか。だが、それでもシレっと嘘をついて逃れる。

「あの後、映画に行く予定だったんだよ。んで、事件に巻き込まれて遅れたから、間に合うように走ったってだけだ」

「なにすぐバレる嘘ついてんのよ。んじゃ、なんて映画？ 観たなら言えるでしょ？」

予想通り疑ってきた御坂。お前がそうやって訊いてくることも予想済みだぜ。そう考えながら御坂の問いに答える。

「えっと確か『ゲコ太・THE・ムービー』モナコカップでゲコゲコ』だったかな？」

「うそっ！？ あれみたの？ ねえ、どんなだった？ 私あれまだ観てないのよー」

「つーか、カエルがF1カー運転できるのに驚いたな。まあ、子供とかファミリーが多かったけど、子供向けアニメにしては面白かったぜ」

そういうと御坂は「うーん、もうすぐ終わっちゃうしなあ。早いとこ観に行かなきゃ」と言っている。フフン、お前の行動パターンなどお見通しだ。そのために、サバ缶を補充しに行く用事があるというフレンドを無理矢理つれて映画を観たからな。そんな風に、考えていると復活した御坂がバツと顔をあげてさらに尋ねてきた。まだ疑ってんのか：

「じゃ、じゃあ、観たって証拠みせなさいよ。観たなら景品もらってるはずだけど？」

「景品？ ああ、あのカエルがレーシングスーツ着てるストラップか。それならカバンに入れっぱなしだ…ほれ」

「きゃー、ケロヨンまでいる！？ なんで全2種で2個とも持ってるのよ！？」

俺がカバンからゲコ太とケロヨンがレーシングスーツを着ているス

トラップを出すと、御坂は半狂乱になりながら受け取り聞いてきた。面倒だが疑いを晴らすため、俺も素直に理由を答えることにする。

「なんでって、親切なファミリーの方がくれたんだよ。1つずつあれば良いからって」

「くう…なんて良い思いしてんのよ」

「良い思いつて…欲しいならやるぞ？」

「っ!？ 良いの？ ありがとう!！」

そう言う御坂はガバツと抱きついてきた。って、大通りでなんてことしてくんだよ。こんなところ知り合いに見られたら…「御坂さんッ、上条さん!!」急に呼ばれ声のした方を向くと涙を流している初春が立っていた。

「っ!？ どうしたの初春さん!」

「なにかあったのかっ？」

「さ、佐天さんが…」

その後、移動しながら事情を聞くと佐天が幻想御手を使用し意識不明になったらしい。話を聞いた俺たちは、そのまま佐天の家に向かい部屋の中で倒れていた佐天を病院へ運んだ。

3人で佐天を病院へ運ぶと、すぐに検査室に運ばれ最近の意識不明者と同じ症状だとわかると、同じ意識不明者ばかりの病棟へ運ばれた。そうして倒れた連絡を受けてこちらに向かうと言った黒子を待っている、数十分後にあらわれた。

「お姉様ッ、上条さん！ 佐天さんが倒れたって本当ですよ？」

「本当よ。初春さんに電話してきて途中で反応がなくなったんだって。3人で家にいってみれば、部屋の中で倒れてたわ」

「やはり、幻想御手がらみですよ？」

「そうみたい…」

そう言うのと御坂たちは悔しそうな顔をする。どうやらこいつらも幻想御手に辿り着いてたらしい。むしろ、既に手に入れて研究していたみたいだ。そう考えていると、黒子がキョロキョロとまわりを見渡して尋ねてきた。

「あの、初春はどこに？」

「初春なら木山とかいう人のところに行くっていつて出たぞ」

「なんか、自分が風邪をひいてたせいで対処が遅れたって思いつめてたわ。大丈夫かしら…」

「あのー、ちょっといいかい？」

俺たちが話していると、急に声をかけられたのでそっちを向く。振り返るとそこにはカエルに似た医者・冥土返しが立っていた。そし

ヘンキヤンセラ

て俺たちは案内されるまま彼の研究室へ向かった。

「幻想御手の患者の脳波に共通するパターンが見つかったんだよ？
人間の脳波は活動によって波が揺らぐんだね？」

冥土返しはそう説明しながらパソコンの画面にいろいろ表示させ、そのまま操作をしながら話は続ける。

「それを無理に正せば……まあ、人体の活動に大きな影響が出るだろうね？」

「つーことは、佐天たちは幻想御手で無理矢理に脳波いじられたってことか？」

「誰がそんなこと……」

冥土返しの言葉から理解したことを口に出すと、それを聞いた黒子は顎に手を当ててそういった。俺らの言葉を聞くと冥土返しは少し表情を暗くしながら話しかけてきた。

「僕は職業柄いろいろと新しいセキュリティを構築していてね？
その中に1つの人間の脳波をキーにするロックがあるんだね？
それに登録されている、ある人物の脳波が植物患者のものと同じなんだね？」

そう言って冥土返しがロックを解除して登録者の画面を表示すると、

御坂と黒子の表情が驚きに染まった。その画面に表示されている人物の名は

「木山^{きやま} 春生^{はるみ}…」

第十八話 幻想御手（後書き）

そういえば青ピの能力をどうしようか悩んでいます。ありがちだけど、第6位にするってのも良いかなと思っています。『変態的な能力の悪用がひどかったため、常に能力抑制のピアスを着けさせられている』みたいな設定で。まあ、戦闘には絡まないし活躍する予定もとくはないので設定とネタだけの第6位になります。

第十九話 多才能力者（前書き）

ヒーローのカッコイイ登場タイミングがわかりません。

第十九話 多才能力者

俺は登録者の名前を見ると御坂たちをおいてすぐに店に走った。御坂たちが驚いていたことから知り合いだったのだろう。ならば、初春が言ってた木山先生というのも同一人物だと思われる。だとしたら、その人物のもとへ向かった初春が危ない！

《ガチャ》

「あ、当麻さんいらっしや」「全員を指令室に集めろ！」 え？」

「初春が危ない。システムとして幻想御手事件に介入するッ」
レベルアップ

「はっ、ハイ！」

俺に言われた最愛はすぐに2階に上がり他のメンバーを呼びにいった。そしてその間に俺は地下の指令室に向かいCOREを起動した。コア起動して学園都市内の地図をスクリーンに表示しているとメンバーたちが入ってきた。

「ちょっと、初春が危ないってどういうこと？」

「それに、幻想御手事件ってなにって訳よ？」

部屋に入ってくるなり聞いてくる麦野とフレンド。俺はそっちを見ずに操作を続けながら説明する。

「幻想御手事件ってのは俺が呼んでるだけだ。幻想御手を使用したとみられる人間が意識不明になってるって話しきいてないか？」

「それがどうしたっていうんですか？」

「佐天がそれで意識不明になってな。俺もそれでさっきまで病院にいたんだが、初春がその幻想御手を作ったと思われる人物のもとに行ってるんだ」

「なんで、そんな危ない人のところに、ういはるは行ってるの？」

「都市側が幻想御手とその被害者の調査を依頼したのがそいつなんだよ」

俺は言いながら別のモニターを起動させ、そこにさっき病院でみた木山春生という人物の情報を表示する。

「こいつがその犯人と思われる人物だ。で、幻想御手つっののは脳波に干渉するものらしい。そして、被害者からは一定の脳波パターンが見つかった。普通の人間なら同じ脳波パターンなんてありえない」

「じゃあ、幻想御手ってのは複数の人間の脳波パターンを超同一にするモノってことですか？」

「そうなるな。しかし、それは目的のために同一にする必要があるってことだ」

そういうと麦野たちはふーんといった風に聞きながらその目的について考えてみる。だが、考えてもまったく分からなかったのか、フレンダが尋ねてきた。

「じゃあ、結局なにが目的って訳よ？」

「脳みそなんて言っちゃえば情報を処理するもんだ。パソコンでも電話でもいい。同一の規格に揃えられたそんな装置があるとすればどう使う？」

「…並列演算…ネットワークの構築？　でも、どうやってやるのよ」

「知らねえけど、人間の脳を使うからには電気信号なんだろうっ」

俺は言いながらキーを強く叩くと、スクリーンに表示されている地図に青い点が4つ表示される。1つは病院で他はどうやら移動しているようだ。それを見た理后が尋ねてくる。

「これって、みさかたち？」

「ああ、もしものときに使えればってカードに特殊マーカーを入れたいたんだ。お前らのにも入ってるから、常に持ち歩いとけ」

そういうとメンバーたちは自分のカードを入れている場所を確認する。最愛たちはポケット、麦野はポケットなどを叩いたあと「あ、部屋か…」と言った。オイ…。まあ、俺は元始種子で分かるからいいけど、他のメンバーしかいないとき分からないから気をつけろよ。そう思っていると麦野が口を開く。

「で、それが初春なのよ？　病院は佐天として、他は区別つかないじゃない」

「待ってる…ホラ」

少し操作すると、マーカーの横に名前が表示された。そしてついでに警備員アンチスキルの情報網にハッキングしどこかに検問をひいてないか表示させると、初春のマーカーの進む先にそれがあつた。

「結局、警備員もすでに動いてるって訳よ。このまま解決ね」

「…いや、同一の脳波パターンの話をしたろ？ それは木山のものが元になってるんだ。能力者が使えば威力が上がる。なら、元になった人間もネットワークに組み込まれなんらかの力を得ている可能性がある」

「じゃあ、能力者でもない超ただの警備員は…」

「まったく歯が立たない…どうするのとうま？」

心配そうな表情で聞いてくる理后。俺は笑いながら安心させるようにその頭を撫でる。

「ハハッ、心配すんな。そのためにお前らに集まってもらったんだ。いまからスクリーンに衛星からのライブ映像を出す。どうやらマーカー的に御坂が向かってるみたいだから俺たちは危なくなったら介入しよう。そんなときは俺の力で転移するから」

「アンタ1人でも解決できると思うけどねえ」

「言っただろ、俺の力はばれちゃいけないんだよ」

言ってくる麦野にそう答えると、麦野も笑いながら「はいはい」と言った。さて、どうなってるかなと映像を切りかえると信じられない光景が映っていた。

上条達が基地内で状況を見ている頃、御坂美琴はとある道路で戦っていた。木山春生を捕まえるため、警備員によっていまこの道路は封鎖されている。そのため、あとから向かってくる車が被害に遭う危険はない。だがしかし、すでにここにいる警備員のほとんどが木山的能力によってやられていた。

「驚いたわ、本当に能力が使えるのね。しかも…『多重能力者』デュアルスキル」
「！」

「その呼称は適切ではないな、私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う。言うなれば『多才能力者』マルチスキルだ」

そう言いながら木山が指を弾けば、道路の亀裂から衝撃波が起り御坂を狙う。だが、御坂もそれを回避し飛んでくる瓦礫を能力で弾きながら木山に向かっていく。

「呼び方なんてどうでもいいわよ。こっちがやる事に変わりはないんだからッ」

御坂は言いながら腕を振り木山に電撃を飛ばす。だが、電撃は木山に触れることなくバリアのようなもので外へと逃がされてしまった。その様子に驚いた御坂を見ながら木山は笑って話しかける。

「どうした。複数の能力を同時に使う事はできないと踏んでいたのかね？」

「いっ!?!」

言いながら木山は道路に衝撃を与え破壊し、自分ごと落下していく。そのことに驚きながらも御坂は急いで電気を使い磁力を起すと、鉄筋の入っている道路を支える柱にくつつくことで落下を回避した。

「(何て奴、自分を巻き込むのもおかまいなしに能力を使ってくる…)」

そう考えている間も木山は能力で水を操作し、水の弾丸を御坂に向けて撃ち放った。それに気付き急いで柱に吸着しながら走って逃げる御坂。そして、攻撃を回避しつつ弾丸の威力を見るため、当たった先に視線を送ると柱は当たった部位のまわりごと砕けていた。

「(さっすが『多才能力者』。能力の正体が分かんないやつだけでもやっかいなのに、状況に応じて自在に使い分けてくるなんて、反則だわ!)」

そんな風に考えながら電撃を飛ばすが、またしても木山を避けるように周りに逃げてしまう。さきほどの木山のセリフから、いくつかの能力を使って避雷針のようなものを作っているのだろうと御坂は推測する。そう思っていると、御坂の様子をみていた木山が口を開いた。

「…拍子抜けだな。超能力者^{レベル5}というのはこの程度のものなのか」

「ツ…まさか、電撃を攻略したぐらいで勝ったと思うな!」

そう言い放ち、御坂は鉄筋の入ったコンクリートを磁力で木山めが

けて飛ばす。だが

「…ふむ」

《バシン！》

木山は手からビームの剣のようなものを出し、コンクリート弾いた。そしてそのまま御坂が足場になっている柱に左手を向けると、指先からビームを出して柱の下部分をまるく消し飛ばした。それにより、まわりの壁と共にあることでくっついていた足場の外壁は支えを失い御坂とともに落下した。

「ぐッ…げほっげほっ」

「もう止めにしないか？ 私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する、誰も犠牲にはし「ふざけんじやないわよ！！」「…」

御坂は木山の『誰も犠牲にはしない』という言葉を叫んで遮る。そう相手は、自分たちの友人を意識不明にした、その親友を救えなかったともう1人の友人は自身を責めた…その姿を思い出しながら大声で叫ぶ。

「誰も犠牲にしない？ あれだけの人間を巻き込んでおいて、人の心を弄んでおいて…そんなもの、見過ごせるわけじゃないでしょうが！！」

自身の友達のことを想いながら叫ぶ御坂の言葉を聞いた木山は、白衣のポケットに入れていた手を出し頭をかきながら、溜め息を吐いて口を開いた。

「ヤレヤレ：超能力者^{レベル5}とはいえ所詮は世間知らずのお嬢様か。君たちが日常的に受けている能力開発：あれが安全で人道的なものだとも思っているのか？」

「っ!?!」

木山の言葉に驚く御坂。そんな様子をみながら木山は話を続ける。

「学園都市の上層部は、能力に関する重大な何かを隠している。それを知らずにこの街の教師たちは、学生の脳を日々開発してるんだよ。それがどんなに危険なことか分かるだろう？」

「なかなか面白そうな話ね：あんたを捕まえた後にゆっくりと：調べさせてもらおうわ!!」

そう言いながら御坂は木山に向けて磁力で作った砂鉄の刃をいくつも放つ。だがそれも、木山は片手を振り上げ地面を隆起させることで防いだ。

「調べるか：それも良いだろう。だが、それもここから無事に帰れたらの話だ」

木山はそういうと、近くに転がっていた空き缶を念力で持ち上げ御坂に向けて飛ばす。

木山の飛ばした空き缶は虚空爆破事件のように《ドゴンツ》という爆発を起こし御坂を襲う。起こした本人はその爆発で吹き飛んだ地面を見ながら視線をズラしていくと驚いた。あの至近距離での爆発を、御坂は周囲の鋼鉄や砂鉄を組み上げることで防いでいたからだ。そして、御坂は立ちあがり笑いながら言う。

「知ってる能力で助かったわ」

「…なら」

そういつて木山は周囲に落ちている物の中からゴミ箱を浮き上がらせると、中に入っている大量の缶を空中に放り投げる。1つで先ほどの威力、これほどの数ならその威力は計り知れないと、御坂の表情に焦りが浮かぶ。

「まさかそれ全部ッ」

「そんな即席の楯で耐えられるかな？」

「ハッ！ だったら、爆発前にふっ飛ばせば良いだけでしょーが！」

御坂はそう言いながら空中に浮く缶に電撃を当てて破壊していく。その凄さに木山も正攻法での攻略は不可能だと理解する。

「どうっ？ ざっとこんなもんよ。もうお終っ！？」

《ドゴーン！》

もうお終いと言いかけた御坂の後ろで空き缶が爆発した。そう、木山は正攻法による攻略が不可能だとわかると、空き缶の1つを空間移動させたのだ。

「正面が駄目なら捌め手に回るまで。もつとてこずるかと思って
いたが…意外に大した事はなかったな超能力者^{レベル5}」

軽く笑いながらそういう木山。あのとき周りには防ぐのに使えるような金属は存在せず、また在ったとしてもあきらかに間に合わないからだ。学園都市の頂点と言われるわりに大して苦戦もせず、倒せたことに思わず笑ってしまうのも無理はなかった。

「学園都市なめてんのか？」

そう、爆風で起こった

「この程度でやれてたら超苦労しませんよ」

土煙りのむこうに

「大丈夫みさか？」

新たに現れた

「結局、私たちはなにもしないけどね」

5人の人影を見るまでは：

「……さあ、ラウンド第二回戦といこうぜ」

第十九話 多才能力者（後書き）

動かす人数は3人ぐらいが一番書きやすいです。とくに上条さん・麦野・滝壺の組み合わせですね。2人だと上条さんとフレンドか麦野の組み合わせでしょうか。絹旗は人数がいると使いやすいキャラです。

そんなわけで実はシステムという5人もいるチームは動かしづらいです。そこに超電磁砲組も加わると初春と佐天が空気になります。なぜなら、絹旗と違い特徴がない敬語口調は書き分けができないから…。

第二十話 システム介入

御坂たちが戦っているころ、その映像を衛星回線を使ってリアルタイムで見ているシステムのアジトでは：

「なっ!？」 なんですかこの女、当麻さんと超同じ多重能力者！
デユアルスキル
?」

「馬鹿、そんなことあるわけないでしょ!」

「でも、それ以外考えられないって訳よ…」

御坂と木山の戦いをみて驚くメンバーたち、そりゃ俺も驚いてんだ他のみんなはもっと驚くよな。どう見ても木山は複数の能力を使っている。だが、映像からではそれ以上の情報は得られない、音声も聞えれば何かわかるかもしれないのに。そう思っていると、そこで理后が口を開いた。

「：おかしい。あの人から爆弾魔のAIM拡散力場を感じる」

「どういう意味だ?」

「滝壺は記憶した力場なら、地球上のどこにしようが感知できるのよ」

「うん。だから、距離があるからあの人^の力場を記憶するのは無理だけど、なぜかあの人から爆弾魔の力場を感じるの」

真剣な表情で伝えてくる理后。もしそれが本当ならあの多重能力者

にしか見えない力も説明がつく。つまり

「あいつは幻想御手を超利用した人間の能力を使ってるってことですな」

「結局、わかったところで多重能力者には違いなんて訳よ」

「いや、本当の多重能力者じゃないならやりようはある」

そうやって俺は元始種子の力を使いどうすればハッキングできるかを知っていく。俺は次々と頭の中に流れてくる情報を処理し、そのまま普段では考えられないスピードでキーを叩いていると、みんなが驚いた表情で見ている。

「とうま…力使ってる？」

「ああ、ツリーダイアグラムの設計者に強制アクセスして目を潰そうと思ってな」

「ちょッ、ホントにできるの？」

麦野や他のみんなも、たった1台のパソコンで本当にそんなことができるか信じられないようだ。だが、世界最強のスペックを誇るCOREと今の俺の力ならそれは不可能じゃない！

「防壁突破…攻性プログラム感知…ダミー情報によって回避完了」

「うわっ、なんか超言い始めたって訳よ」

「だから、人の口調を超真似しないでください！」

俺を排除しようと次々とプログラムがやってくるが、それらを全て破壊ないし囹を使ってかわしていく。それらが続けるとついに最後の防壁にやってきた。最後の防壁はかなりやかいで専用のキーが無ければ毎秒ごとに暗号形式が変わる数百の暗号キーを解除していかなくてはならない。それも世界中の文字を使った暗号キーだ、世界中のスパコンを使ってもいけるかどうか……

「けど、俺にとってそんなものは存在しないに等しい！ 消えろ！」

俺がそう言うとその防壁は簡単に消え去り、すぐに侵入してまたさきほどの防壁を創りだした。後ろで画面を見ていたメンバーたちは、なにをやっているのかすら理解できていないだろう。だが、1つ理解できたことがある。それは

「とうまってプログラムの世界にも能力使えるんだね。ケータイのロックとかも簡単に解除できちゃうんだ……いやだなあ」

「物理的だけじゃなく、情報の世界の鍵でも消せるって超乙女の敵ですね」

「プライバシー無視とか最低って訳よ」

「……下衆が」

「お前ら酷くねっ！？ 自分のためでもあるけど、お前らが表で活動してんのバレばれないように目を潰してダメー情報置いてきたんだぞ！」

自身の能力がばれないようにしただけでなく、こいつらが表だって活動しているのが都市側にばれないようにしたのにこの仕打ち。さすが暗部、俺の心を容易く破壊していく。だが、この世界にも天使は存在した。

「うそだよ。とうまになら：見られてもいいよ？」

「ぐはっ！！ 理后、そういう青少年には刺激の強い冗談はダメだろ！」

「ケータイのことだよ？ 何のことだと思ったの？」

言いながら可愛く首をかしげる理后。これは素で言ってるな：ちくしょう！ そうだよ、理后はケータイの話しかしてなかったよ！ でもな：高校男子って人種は女の子が恥ずかしそうに言ってきたら意識するの！ 意識するんです意識しちまうです、三段活用！

そう思っている、理后以外の女性陣にはわかってもらえず汚物を見るような目で見てくる：くそう。あの純粋な最愛にこんな目で見られることになるとは。青ピじゃないとこんなの楽しめねえぞ。

そんなことを思っている間にダミーではない自分たちにのみ送らせている衛星の映像から、御坂がピンチなのがわかった。あんな全力で電撃を放ち缶を潰していれば、とっさに爆発寸前の缶をテレポートされたら回避も防御もできないだろう。そう考え、電撃がやんだ瞬間に向かうことにする。

「お前ら、電撃がやんだら転移するぞ。移動したらたぶん、すぐに爆風に包まれるだろう。だから、転移したらその場から動くな、俺が守ってやる」

真剣な表情になりそういと、みんなも先ほどのふざけた態度から一気に暗部の顔へ姿を変える。メンバーは映像から御坂の電撃がやむタイミングを待つ。すると少しして……やんだ。

「いくぞ：転移！」

そう言った瞬間、俺たちは先ほどまで見ていた戦場に降り立つ。俺は着地すると、事前に感知していた缶の出現する方向に右手を構えた。俺たちが現れるのと同時にだったのだろう。右手を構えた時にはすでに爆発が起こっていた。

「ちい、ギリギリセーフか。危なかったぜ」

「な、どうしてアンタたちが！？ それにどうやって：」

「いいから黙ってる。面白いもんみれるからよ」

自分たちの周りだけ避ける爆風のなかで、突然現れた俺たちに驚く御坂。だが、喋っていると面白いものを見逃すので黙らせる。そうして、幻想殺しで耐えていると爆発がおさまった。爆風がやみ、その煙がはれるのを待っていると、そこから女性の声が聞えた。

「正面が駄目なら搦め手に回るまで。もつとてこずるかと思っていたが：意外に大した事はなかったな超能力者^{レベル5}」

軽く笑いながらそういう木山。まあ、あのタイミングじゃ防げたとは思えねえよな。学園都市最強の1人を倒せたことに思わず笑ってしまうのも無理はねえよ。だがな、

「学園都市なめてんのか？」

相手を見下すように言い放つ麦野。

「この程度でやれてたら超苦労しませんよ」

フード付きのベストのポケットに手を入れたまま呆れたように言う最愛。

「大丈夫みさか？」

爆風を避けるためかしやがんでいた御坂に手を貸す理后。

「結局、私たちはなにもしてないけどね」

頭の後ろで手を組み軽いノリで話すフレンド。

「……さあ、だいにラウンド第二回戦といこうぜ」

そういつて右手を突き出す俺。そう、役者が揃った瞬間だった。

確実にやったと思った爆発の中から突然現れた俺達をみて、木山は驚愕の表情を浮かべた。なので俺はいつも通り揺さぶりをかけていく。

「どうしたよ、先生？ さっきまでの余裕はどうした？」

「な、なんだ君たちはっ。一体どこから現れたんだ！」

予想外の事態に驚く木山。だが、能力を使うものがそんなに動揺してちゃダメだろ？ そんな風に考えながら俺は仲間に指示を出す。

「最愛、フレンダ。2人は上に行って初春の救助。および、警備員の救出だ。瓦礫にはさまれてるような人や、救急車がくるのに邪魔なものをどけろ」

「わかったって訳よ」

「超了解です」

2人は返事をするすぐに上へあげる非常階段の方へと走っていった。続いて残りのメンバーにも指示を出す。

「理后、あいつは記憶するな。何人分かわからないがかなり多くの人間の能力を得てるだろう。そんなのを見たらお前がどうにかなっちまう。だから、お前は攻撃の予兆があったらそれを逸らすことだけ考えろ」

「わかった」

「麦野。お前は迫ってきた物や相手が浮かせた物の迎撃のみだ。じゃないと、相手が死にしまう」

そういうと、麦野は軽く舌打ちをしたが「了解」と短く言った。さて、どうやって倒そうかねえ。とりあえず、揺さぶりをかけ続けるか。

「なあ、先生。諦めた方がいいぞ。ここにいる麦野は序列4位のレベル5。んで、こっちの理后と上に行った最愛はレベル4だ。ついでに金髪のフレンダはレベル3。だが、あいつは倉庫ストックにあるものもなんでも自分の元へ転送できる。そう：戦車だつてなあ？」

「くっ：統括理事会が動く前に片を付けなければならない。邪魔する者は何人だろうと叩いて潰す！」

「：そうか。麦野、理后さっきの命令は待ってろ。少し1人で相手するわ」

俺は相手の言葉を聞きメンバーに手を出さないように言う。そういうと2人は理由も聞かずに後ろに離れてくれた。だが、メンバーでもない御坂はそんなことを聞くわけもなく、突っかかって来る。

「ちょっと、アンタ急にきてなに言ってるのよ！ 無効化しかできな「御坂：少し黙ってろ」っ!？」

真剣な声でそういうと、いつもの雰囲気との違いに驚き数歩下がる御坂。理后はそんな御坂を連れて後ろに下がってくれた。サンキュ、

これで相手ができるぜ。…そう思っていると木山が話しかけてきた。

「高位能力者の仲間をさげて、1人で相手をするつもりか？ 余程自分の力に自信があるようだな…」

「いや、そんなものはねえよ。ただ、理由ありの人間から話も聞かずに闘り合いたくなかっただけだ」

「聞いたところで理解できんさっ！」

木山はそう叫んで近くの地面を槍のように変えて、俺に放ってくる。だが、そんなぐらいいじゃ先端を避けて踏めば動くだけの地面だぜ！

「ほらよっと！」

「曲芸師かキミは！？ なら、水の礫はどう捌く！」

地面の槍が効かないとわかったら、今度は腕を振って水の弾丸を何発も飛ばしてきた。けど、それだって避けられないことはないし、避けきれないなら右手で潰す！

「どうした先生っ、こんなシャワーじゃ涼めねえぞ！」

「ば、馬鹿な！？ コンクリートを砕くんだぞ、拳で防げるようなものじゃないッ。キミの能力は肉体強化か！」

「うんにゃ、システムスキャン身体検査じゃオールゼロの無能力者だ」

「白々しい嘘をっ」

木山はそういうと近くにある瓦礫から鉄筋を抜き出し、包囲するよう俺に向かわせる。だが、全てを違う動きで動かしているわけじゃない。一面を突破出来ればっ！？地面が隆起してくるだっ。

「能力は複数同時に使えるのだよ。来る前に見ておかなかったのかい？」

「ああ、見てたよ。でも、生で見た先生があんまり美人なもので、すっかり忘れてただけだっ」

俺は言い終わると地面を右手で殴り、隆起して捕えようしてくるのをキャンセルさせる。それを見ていた木山の表情は驚きに染まるが、俺は急いで右手を盾にして鉄筋の包囲網も抜けだす。それを見ていた木山はなぜか笑っていた。

「フフツ、不思議な力だ。こっちの能力演算は続行しているのに、能力だけが強制で解除される…肉体強化かと思えばこの力。本当に何者なんだっ！」

そう言って水や瓦礫など大量の物体を宙に浮かせると、木山は一斉に俺に向けて撃ってきた。流石の俺もこんなの右手だけじゃ処理できねえ。だから、肉を切らせて骨を断つ、耐えて耐えて耐えまくって木山の元へ行っちゃる！

「さーてね、先生の連絡先を教えてくださいなら少しぐらい教えてやってもいいけど？」

「戦闘中に女性を口説くのがキミの趣味か？」

「軽口叩いて相手を揺さぶってるだけだ！ うおおおおおお！」

！
」

「っ！？ 馬鹿なっ、避けも守りもせずに突っ込むなんて死ぬ気か！？」

「待ってろ、すぐそっち行つてやるッ」

俺の行動は予想外だったのだろう、無数の弾丸を顔や身体に受けながらも走るスピードを緩めないことに戸惑っている。木山は「くっ」と言つてビームを俺の近くに放ってきたが、そんなもの当たらなければ礫が増えた程度の効果しかない。

しかし、今のビームでわかった。やっぱこいつは直接殺すことを避けている。なら、こいつは根っからの悪人じゃないっ。ここで一気に加速して木山のもとへゆく。

「くう…どうして邪魔をするんだっ！」

「邪魔してんじゃねえ、アンタに理由を聞きたいだけだ！」

言いながら地面を強く蹴って進み木山へ接近する。だが、木山も能力を使って攻撃しながら後ろを下がる。しかし、こんな足場の悪いところをまともに歩いた事などなかったのだろう。瓦礫の1つに足をとられバランスを崩した。俺はその隙を見逃さない。

「捕まえたっ！」

「なっ！？ クソッ、能力が使えない！」

「…話してもらうぜ、先生」

右手で相手の腕を掴みながら、そう話しかける。必死に腕をほどこうとしてくるが、それでも鍛えてるんでな。握力は成人男性の平均の倍はあるぜ。木山は腕を振りほどけないとわかると、大人しくなりポツポツと話し始めた。

「……『暴走能力の法則解析用誘爆実験』という、能力者のA I M拡散力場を刺激して暴走の条件を探るものがあつたんだ。私の教え子たちを、意識も戻らぬ使い捨てのモルモットにしてねッ」

そういつて顔を上げた木山の表情は怒り・後悔・無念さなど様々な感情が見えた。俺は抵抗をやめた木山を掴んでいた腕を離し話の続きを聞く。

「人体実験つーなら、なんで警備員に言わねえ？」

「23回…あの子達の恢復手段かいふくを探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の使用を申請して却下された回数だ。統括理事会がグルなんだ、警備員が動くわけがない」

「でも、だからってこんなことしちまつ　「君になにがわかるっ
!!」　っ!?!」

木山は数歩離れて腕を振り地面を隆起させたが、急に頭をおさえると能力が不発に終わる。どうやら、力の使い過ぎみたいだな。そう考えている間も木山は話を続ける。

「あんな悲劇は二度と繰り返させはしない。そのためなら、私は何だってする。この街の全てを敵に回してもッ止まる訳にはいかな

いんだっ!!」

「…そうか（対象の認識、存在を把握）」

木山がそこまで思うようになった理由みせてもらうため、存在の認識を使う。そうして、相手の記憶を読み込んでいると木山の様子に異変が。

「っ!？　ぐっ、がッ…これは…ネットワークの…暴走？」

「っ!？　どうした!」

俺が彼女の事故の記憶を理解していると、さっきまで話していた木山が急に苦しみ出した。何が起こったのかわからないが急いで駆け寄ると、彼女はなにか言っている。

「いや…これはAIMの…」
虚数学区

そういつて倒れた木山からエネルギー体のようなものが現れたッ。急いで離れると、それはなにかの形を成していく。あの姿はまるで…

「胎児…?」

《ギャアアアアアアアッ》

第二十話 システム介入（後書き）

あ、上条さんは幻想殺ししか使っていないだけで、アジトからずっと
元始種子状態です。

第二十一話 幻想猛獣

上条達がそんなことをしてるころ、上に行った絹旗たちは：

「あ、あれ、なにして訳よ!？」

「そんなの私が超知るわけじゃないですか。いいから、初春を起こしますよ」

階段をのぼりボロボロになった道路を移動していると、下から謎の雄叫びが聞えた。驚いて下をみると、上条の前に人の形を成す前の胎児のようなものがいた。だが、その胎児は普通ではない。何故なら空中に浮き頭の上には輪っかのようなものがある。何よりおかしいのは、背中から光る触手のようなものが何本も出ているのだ。

「うげろー、なんか見てるだけで気持ち悪いって訳よ」

「はいはい。っと、初春、初春！ 超起きて下さい！」

車の中で気を失っている初春を発見すると、絹旗はドアを開けシートベルトを外してから初春を起こす。何度か揺らしていると目を覚ました。

「う、うーん…あれ？ 絹旗さんにフレンダさん。なんでいるんですか？」

「良いから安全なところに逃げるわよ。結局、下もヤバいって訳だけど」

「じゃあ、防御力のある私が先導するんで超ついてきて下さい」

初春が目覚ますと、2人は急いでこの場を離れるようにする。途中上条の命令通り、倒れている警備員を救助したり、横転した車を起したりして行く。だが、そうやってる間にあの化け物が浮上してきていた。

「なっ!？　なんで超飛んでるんですか？」

「は、早く逃げましょう!」

「結局、逃げるってどこへ逃げるって訳よ!？」

「くぅ…しっかり、超つかまってください」

そういうと、絹旗は2人を両脇に抱え道路から飛び下りた…2人の返事を聞かずに。

「「きゃーっ!!!」」

「着地します!」

《ズドン!》

数十メートルの高さから落下したにもかかわらず、絹旗には怪我ひとつなかった。窒素装甲を展開して衝撃を殺したからである。だが、その衝撃をもろに受けた地面はクレーターのようになっていた。

絹旗は無事に着地したことを確認すると、2人を離して急いで麦野たちのところへ向かおうとする。だが、初春は走り始めようとしたそのとき、近くに人が倒れてることに気付いた。

「っ！？ 木山先生！」

「木山ってーと、あの戦ってた相手ですね。当麻さんたちに超えられたんでしょうか？」

「その割には怪我してないけど？」

3人が近くで話していると、その声が聞えたのか木山は頭が痛むのか右手で押さえながら目を覚めました。

「う、うーん。ぐっ…あれはどうなった？」

「木山先生っ！」

「君は…」

「目を覚ましたなら移動しますよ。ここはまだ超危険です」

絹旗はそういうと、木山を連れて道路の柱の陰になっているところへ移動した。そして、戦いの全てを見ていたわけではなかったシステムの2人はあれがなにかを木山に尋ねると、彼女は話し始めた。

「虚数学区？」

「ああ……」

「あれって超都市伝説じゃなかったんですか？」

絹旗は木山の言葉を聞いても信じられず思わず聞き返してしまう。

だが、他の2人も同じように思っているようだ。

「巷に流れる噂と実体はまったく違ったわけだがね。虚数学区とはA I M拡散力場の集合体だったんだ。アレもおそらく原理は同じだろう。A I M拡散力場でできた：そうだな、『^{A I Mバースト}幻想猛獣』とでも呼んでおこうか」

木山の説明によると、あれは幻想御手を利用した約一万人の学生の力場が触媒となり生まれたらしい。そして今なお学園都市のA I M拡散力場を取りこんで成長しようとしているという。

「そんなものに自我があるとは考えにくいが、ネットワークの核であった私の感情に影響されて暴走しているのかもしれない」

「結局、どうすればアレを止めれるって訳よ？」

「それを私に聞くのかい？　今の私が何を言っても君らは信用できなっ！？」

話しながら顔をあげると、木山の目の前に黙って木山を見つめる初春の顔があった。なぜそんなことをしているのか驚きながら不思議に思っていると、初春は笑って口を開いた。

「いいえ。木山先生は嘘はつきませんから」

その言葉を聞いた木山は、今の初春に重なるように過去の教え子たちとさきほどの少年の姿を思い出した。そして苦笑しながら答える。

「……本当に、根拠もなく人を信用する人間が多くて困る。預けた物はまだ持っているかい？　アレは『幻想御手』ネットワークが

産んだ怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない。試してみる価値はあるだろう」

「ありがとうございますっ!!」

そういうと、初春はかけだして行った。だが、絹旗とフレンダはその場に残って木山をジッと見降ろしている。木山はこの2人はまだなにか知りたいのだろうかと思い尋ねてみた。

「…まだなにかあるのかね？」

「下でのことは通信で超聞いてました。樹形図の設計者なら、うちで使えますよ」

「っ!?! どういうことだ? 私をからかって 「結局、上条の力って訳よ」 …上条?」

絹旗の言葉に驚いたが、どうみてもただの学生にしか見えない彼女たちの言ってる事を、木山は冗談とは思えなかった。だが、それを遮るように言ったフレンダの話に聞きなれない名前があったので思わず聞き返す。

「上条当麻、うちの店長です。初春にパソコンを作ってもらったときに、『技量によっては樹形図の設計者だって掌握できる』って言われたんですが超冗談だと思ってました」

自分で言いながら苦笑している絹旗。そして、絹旗の言う事聞き同じく苦笑しながら口を開くフレンダ。

「結局、それは本当で上条はくる直前にハッキングに成功したっ

て訳よ。だから、ここでの私たちの活動は学園側に感知されないってわけ」

「そ、そんな馬鹿なっ！ いったい、いくつのプロテクトがあると思ってるんだ！ それに最大の防壁プログラム・天界ヘヴンズゲートの門をどうやってッ」

「消しましたよ。文字通り」

あまりのことに驚く木山。自分だってそれなりの学者だ、プログラムに關してもいろいろと作るうちに理解できるようになっていった。そして、使用申請が通らずハッキングして使用することも考えたこともある。だが、セキュリティの高さをアピールするため都市側が公開しているプログラムの見本すら、まったく言っていないほどプロテクトが解除できなかったのだ。あんなもの普通の人間どころか世界中のコンピュータを使ってキーを解読させようとも不可能だろう。

だが、この子達の言うその男はそれを成功させたというのだ。それはすなわちこの世の全てのコンピュータへアクセスできることにほかならない。いったいどうやってッ。そう思っていた木山に絹旗が話しかける。

「第七学区にある喫茶店・『Caelum』ケールムです。気が向いたらきてください」

「ほ、本当に樹形図の設計者が使えるのか？」

「それは上条に訊いてもらわないとわからないって訳よ。でも、使わないでも上条か滝壺ならその子らに会えば何かわかるかもね」

2人はそういうと木山をおいて、初春の後を追った。その去っていく背中を見ながら木山は1人苦笑し呟いた。

「…上条当麻、あの少年か？ フフツ、つくづく不思議な男だ」

そのころ幻想猛獣を相手にしている上条たちは…

「ちっ、なによあれは！ 上条を相手にしてるみたいよッ」

「バカ野郎、麦野。失礼なことやってんじゃねえよ！ 上条さんみたいな爽やかな少年を、あんなエクトプラズムみたいなのと一緒にすんな！」

攻撃してもすぐに再生し、オマケに向こうからの攻撃は木山と同じく多才能力なのだ。同じく多重能力者としての俺と戦ったことのある麦野がそう思っても無理はない。だが、こっちとしても納得できないモノがある。相手からの電撃を打ち消しながら、そう言ってる御坂たちも攻撃しながら話しかけてくる。

「どっちでもいいから、なんか倒す方法ないのツ？」

「どっちでも良くねえよ！ なら、お前のことこれからカエルパンツ姫って呼ぶからな！」

「な、なに言ってんのよ！ つーか、それセクハラじゃないって！？」

攻撃を回避しながら話していたが、急に相手の背中から腕が伸びてきた。御坂は咄嗟の事で間に合わないと思い腕でガード構えるが、それは横から飛んできたレーザーで焼き払われた。

「ボーっとしてんじゃないわよ！ イチャつくなら後にしなさいっ」

「あ、ありがとう…って、イチャついてなんかいいわよっ！」

助けられたお礼を言いながら、御坂は幻想猛獣へ電撃の槍を飛ばす。先ほどから何度もやって光る触手を焼き切っているが、効果は薄いようだ。どうするかな…と考えていると、後ろから大声で話しかけられた。

「なにやってんだお前ら！ 学生はさっさと逃げろ！」

「ん？ 警備員か。先生たちこそ逃げてください。危ないですよー！」

「馬鹿こというなっ、学生をおいて逃げれる訳ないだろう！」

そういつて警備員の人たちは幻想猛獣に向かって銃を連射する。だが、あいては能力でバリアのようなものを張っているのか効果はない。それをみて警備員の一人がなにかを取り出した。

「試作品だが持ってきたいて正解だったぜ。跡形もなく消しとばしゃ、くたばんだろ！」

警備員はそういつて大型の銃を構えて幻想猛獣に向かって撃つと、

大型の口径から特大の銃弾が飛び相手に直撃した。警備員たちはそれを見て喜んでいゐる。だが、終わったにしては様子がおかしい。敵から感じていた妙なプレッシャーが消えていないのだ。俺は、このままでは危険だと思い安心して喜んでる警備員たちのもとへ急いだ。

「よっしや命中！」

「やったか？」

「あ、あの気を付けてください。こういうパターンって大抵……」

女性の警備員がそう言ったところで、警備員たちめがけ爆発と光の触手がせまった。

「きゃあっ！」

「うわあ！？」

警備員たちは思わず目を背けてしまう。そのまま攻撃が届くのを待っているといつまでも衝撃はこなかった。その理由を知ろうと目をあけると、目の前に右手を構えて身体を触手に貫かれている少年が立っていた。

「ガフツ：はあ、大丈夫ですか先生？」

「お、お前なにしてんだ！」

「酷い怪我ッ、すぐに治療しないと！」

何とかギリギリで攻撃を防ぐと、後ろにいた警備員の先生たちが俺の心配をしてきた。まあ、結構痛いけどな、死にはしないさ。そう思いさっきの爆発で大きくなった化け物と戦うため、麦野たちの戦う方へ戻ろうとした。

「馬鹿野郎ッ、そんな怪我で動くんじゃないねえ一番重症なんだぞ！」

「うるせえ、仲間が戦ってるんだよ。：お前らは向こうの女の子を手伝ってやれ。今、俺の仲間と一緒に上へ向かってる。そいつの持ってるものを使えば、こいつの暴走は止まるかもしれないねえ」

「わ、わかったから、君も「さっさといけ！　：レベル5が2人とレベル4までいるんだ。負けないさ」」

そう言って走り出す俺を止める者は誰もいなかった。俺はそのまま戦線に復帰するが、俺の様子をみた理后が声をあげる。

「っ！？　とうまダメっ！　あなたは戻って！」

「大丈夫だ、まだやれる」

「そんな怪我で動いたら死んじゃう！」

理后はそう言ってくるが俺は無視して敵の攻撃を右手で消し去る。

そして、そのまま相手の元へ走り込むと左手で本体を殴り付けた。
すると突然、頭の中に情報が流れ込んでくる。

「ぐう…なんだこれ……」

「上条ッ!?　ちっ、滝壺あんたは上条連れて離れときなさい。
超電磁砲少し手伝って」

「く…麦野、気をつけろ。向こうにあんのは原子力実験炉だ」

そう伝え「わかった」という返事を聞くと、俺は理后に付き添われながら離れた。さっき、あいつを殴ったときから頭の中に何かが流れ込んでくる。

『どんなに努力しても、能力というたった1つの才能ですべて打ち碎かれる…』

……なんだこれ

『あんなに可愛がってあげたのに、能力で抜かれたらすぐに離れていった…』

……誰かの記憶?

『能力があるって言われて嬉しかった。でも、それを確かめるた

めに使ったバチが当たったのかな?』

……佐天っ!?

「とうまっ!!」

「っ!?! 理后?」

何かをみていた俺は理后の声で起こされた。どうやらあいつを殴ったときに幻想御手を使用した者の記憶が流れ込んできたらしい。左手で殴って良かった、右手だったら多分これに気付かずに倒してしまっていただろう。

気付けたらなら、やることは1つ。幻想御手の治療用プログラムは初春たちがなんとかしてくれる。だから、俺たちはあいつをぶっ倒してみんなを叩き起こす!

「手伝ってくれ理后。あいつを殴ったときに幻想御手を使ったやつらの記憶が流れ込んできたんだ。あいつら、能力ってものにこだわって大切なもん忘れてんだよ」

「∴大切なものって?」

「自分を信じるってことさ。だから、甘えたやつらを叩き起こす。そんでもってついでに背中をおしてやらあ!」

俺がそう言って幻想猛獣に向かって右手を突き出すと、それみた理后はキョトンとしてからフツツと笑った。

「わかった。でも、怪我してるんだからちよつとだけだよ？」

「ああ、ちゃっちゃと終わらすっ。理后は治療用プログラムが起動したら、あいつのA I M拡散力場を丁寧にはどいていってくれ。この戦いの記憶がなるべく残るようにな」

「難しいことを簡単に言う。…でも、わかった。がんばる」

そうして俺たちは倒すために再び幻想猛獣のもとへ向かった。

第二十二話 幻想御手事件・終幕（前書き）

幻想御手編はこれで終了です。

第二十二話 幻想御手事件・終幕

「きゃっ！」

治療用プログラムを起動させるため上へ向かっていた初春だが、階段をのぼっている途中に幻想猛獣の攻撃の流れ弾が自分の少し先へ着弾した。その衝撃で吹き飛ばされ階段から落下すると思われたが、初春は誰かに受け止められた。

「…ふう、超大丈夫ですか？ あんまり先に行かれると、あなたを守れて命令が果たせないんですが」

「き、絹旗さん。ありがとうございます、大丈夫です」

「なら、さっさとあがった方が良いつて訳よ。ここじゃ、いざつてとき逃げれないから」

絹旗に階段に降ろされ、フレنداにそう言われると初春は力強く頷いて上を目指す。途中、流れ弾が飛んできそうになるが、少し前で逸れたりしていた。気になって走りながら遠くを見ると、見ていることに気付いたのか滝壺が手を振っている。どうやらこっちへの攻撃を逸らして援護してくれるようだ。それに手を振り返すと滝壺は敵の方をむいた。

「滝壺さんが超援護してくれています。どうやらこっちの目的がわかってるみたいですね」

「結局、上条の仕業って訳よ。なんでもわかるのね、あいつ」

2人が走りながらそう話していると、聞いていた初春も話に加わる。

「上条さんってそんなにすごいんですか？」

「まあ、私たちの上司だしね」

「そう言えば初春。あなたの作ったCOREコアですが、本当に樹形ツリ図ダイアグラムの設計者にハッキングできましたよ」

自分の事でもないのにフフンと勝ち誇ったように言うフレンダを無視して、絹旗が初春にそういうと初春はバランスを崩し思わずこけそうになる。慌てて2人は初春を支えると、再び走り始めた。

「え、本当について試したんですか!？」

「そうですよ？　ここでの戦闘がばれないようにって超くる直前に当麻さんが」

絹旗の話聞き、大変だあと慌てる初春。なにをそんなに慌てるんだと思ったが、放置して話をすすめることにした。

「まあ、それで衛星の目を1つ奪っちゃったって訳よ。さすがは技術部主任の作ったマシーンね」

「そ、そんなっ。私は頼まれたから組んだだけでッ」

「どうやって作ったかとか書いた紙に、製作者として超名前書いてたじゃないですか。心配しないでですすでに共犯ですって。当麻さんも超わかって名前書かせたって言っていましたよ」

「あ、あんまりですっ。私は風紀委員なのにそんな犯罪行為」「諦めるって訳よ」　　「そんなぁー」

確かに最強のスペックを目指しノリノリで作ったことは認める。完成した後、「記念だし製作者として名前書いといてくれよ」と上条から言われ、少しテレながらも設計図に名前を書いておいたのも自分だ。だが、その裏に犯罪の共犯にするためという思惑があるとはあんまりではないか。初春はそのことで半泣きになりながらも走る。

「結局、嬉し泣きって訳？」

「…騙された悲しみと、乗せられて作ったことへの後悔と、今後の自分の心配の涙です」

「最悪、うちの地下に隠れてれば超バレませんよ」

「…お気遣いありがとうございます」

そんな風に軽口を叩きながら走ると、ようやく上の道路についた。あとは警備員アンチスキルの車に積んである機材でも使えば、治療用プログラムを使用者に聴かせてネットワークを破壊できる。そう思ったとき向こうから流れ弾が飛んでくるのが見えた。滝壺も自分たちに向かっていないため逸らしていないが、あの方向にはっ!?

「警備員の車がっ!？」

「くう…超間に合いません!」

「どきなさいっ!」

前を走る2人にそう叫ぶと、フレンダはロケットランチャーを物体アポ召喚で呼び出し、すぐに標準をつけて撃った。

《ドゴン!》という凄まじい音と、幻想猛獣の攻撃を迎撃した爆発の衝撃がおさまると初春と絹旗は視線をあげる。そこには無事なままの姿の車両があった。

「す、すごいです。フレンダさん」

「結局、射撃は得意って訳よ」

「初めて超活躍したの見た気がします」

「絹旗、あんたあとで屋上ね」

そんなやり取りをしていると、上条に言われて初春たちを守りにきた警備員が慌ててのぼってきた。どうやら、先ほどの爆発を心配したらしい。だが、無事なことを確認するとすぐに車両へ行き治療用プログラムを学園都市中に流す手配をしてくれた。

少しの間待っていると、警備員の無線には意識不明者の脳波が安定したという報告が入り。治療用プログラムが成功したことがわかった。そう、これでは上条達が幻想猛獣を倒すだけ。

初春たちが治療用プログラムの送信するため頑張っている頃、幻想

猛獣と戦っている俺らは苦戦していた。

「ちいっ、防衛戦ってのはやりにくいわね！」

「あんたの能力が大雑把すぎるのよ。私みたいに状況に合わせた使い方しないと」

幻想猛獣の触手をレーザーで焼き切りながら麦野が言うと、御坂がそれに答えながら相手の放とうとする水弾を雷で破壊していく。確かに麦野のレーザーによる攻撃は威力があるため殲滅には向くが、細かい戦闘や周りに被害を出さないように戦うのは難しい…だが、

「言ってくれるわね第3位、なら見せてやろうじゃないっ」

そういうと麦野は右手を横に構えて、普段レーザーとして放ってる力を円盤のように出現させた。それを振りかぶって投げると、敵の触手をつぎつぎ斬っていく。しかも、ただ投げただけでなくその後もある程度操作できるようだ。

「すげえな麦野。それってあのフリー」「それ以上言ったら殺す」
「ゴメンなさい…」

「へえ、レーザーと違って操作もできるんだ。やるじゃない、なら私だって！」

御坂は麦野に対抗するように、地面に向かって手を構えると黒い刃が多数出現した。あれは確か、砂鉄の刃。振動させることでなんでもスパスパ斬っちゃまう怖い技だ。それを何個も出すと幻想猛獣に向かって刃が走っていった。それを受けた幻想猛獣はバシバシ斬られていく。

「これでどうよ!」

「……斬った先からくつついてるぞ」

「なあっ!? 反則すぎるでしょ!」

麦野と御坂の攻撃を受けても、敵はすぐに再生したりくつついたりする。そのせいでこちらは消耗していくばかりだ。初春たちが上手くやってくれば再生できなくなるはずなのに……。そう思っている
と、御坂が敵の触手に足を取られてしまう。

「御坂っ!?!」

「くっ…このおおおお!!」

掴まれた御坂はそれを逆手にとって相手の全身に電撃を送る。すると、さすがに効いたのか相手は黒コゲになって停止した。

「ふう…これで終わりかしら?」

「流石にこれじゃ無理でしょ、結構本気でやったし」

「まだだっ!?!」

突然聞えてきた声で敵の方を向くと、幻想猛獣は触手を放ち御坂を打った。

「きゃあ!」

「御坂っ！ クソ、どうなってんだッ。理后、御坂を頼む」

打たれて地面にぶつかったショックで気を失ったのだろう。ぐったりと倒れたまま動かない御坂を理后にまかせ、敵の攻撃がそっちにいかないよう防いでいく。すると、木山がゆっくりと歩いてきた。

「『^{レベルアップバー}幻想御手』のアンインストールが完了するまで持ちこたえるんだ。そうすれば、再生できなくなる」

「簡単に言ってくれるねえっ」

言いながら俺は幻想猛獣をはさんで麦野の反対の位置に走る。麦野も俺の意図に気付いたのか距離を稼いで構える。そして、俺が反対側に立つと先ほどまでより強力なレーザーを放った。

「なっ！？ ^{レベル5}超能力者の攻撃まで受けれるのかッ」

「結構、全力なんだけど余裕そうね！」

「部下の全力ぐらい受け止めてやらないとなッ」

麦野の攻撃を余裕で受けている俺に木山は驚いているが、麦野と俺は軽口を叩きながら笑っている。レーザーによって身体の下半分を吹き飛ばされた幻想猛獣だが、ぐちゅぐちゅと気持ち悪い音をさせながら再び再生を始めた。こりゃ面倒だなと思っているところで、突然その再生はとまった。

「アンインストールが完了した！」

「なら、もう再生しないってことよね。どうする、リーダー？」

「んじゃ、御坂も気を失ってることだし。ちよっくら本気みせてやろうか？」

「なら、私は滝壺たちのところで休んでるわ。これでも疲れてるの」

そういうと麦野は気を失ってる御坂を寝かせている理后の元まで歩いていった。だが、木山は戦力であるレベル5が2人とも抜けて驚いてるみたいだな。

「な、なぜ戦力のレベル5が抜けて君が残るんだ。君は無効化能力者なのだろうっ」

「いいから、先生も下がってろって。巻き込んじゃうぞ？ 理后、そろそろ始めるぞ」

そう言いながら木山を理后たちのところへ転移させる。なぜ、自分が急に移動したのか理解できてないみたいだ。ま、いちいち説明するつもりはないけどな。

「発現せよ、鋼鉄の槍！」

そう言い放つと、俺の上らへんの空間からいくつもの鋼鉄の槍が現れる。そのまま狙いをいくつつかけると、腕を振って全弾発射した。

《ギアアアアアアアアア！！》

「どうした？ いっちよ前に痛がつてんのか？ なら、追加だ。対象に向け発現、その名称は“ガトリング・レールガン連射式・超電磁砲”！！」

手を前に構えながら言うと、俺の周囲に光が現れる。そのまま手を軽く振ると幻想猛獣めがけて超電磁砲が《バシユン、バシユン》と連続で放たれ始めた。発射音のわりに威力が高く喰らった敵の身体は次々と弾け飛ぶ。友達ながらこんなのを人に撃ってきた御坂が怖ろしいと思っていると、その戦いをみてた後ろの連中は好き勝手言ってる。

「な、本物の多重能力者……!？」
デュアルスキル

「そんなチンケもんじゃないわよ。世界のバグってやつね」

「……なんでみさかの技」

聞えてるつつーの。なにが世界のバグだよ、そんなん異能全てがそうだろうが。そう思っても言い返さずに、弱っていく幻想猛獣が苦し紛れに放とうと空中に出現させた氷の槍を見て、それを破壊する力を発現させる。

「対象を破壊せよ、風の刃!」

俺が唱えて腕を振ると、それに合わせて圧縮された空気による風の刃が発生する。発現した風の刃は詠唱通り俺を狙って飛んできていた氷の槍と衝突し相殺し合う。幻想猛獣も自分の能力が効かないとわかったのか、新たに自分の身体から腕を生やし俺めがけて伸ばしてきた。

「俺の転移は瞬間移動なんだぜ? そんなの当たる訳がない」

言いながら、次々伸ばされてくる腕を転移で避け続ける。後ろの方で見えている3人には分身しているように見えているかもしれないな。

そう思いながら、瀕死の幻想猛獣に止めをさすため核を探すと……あった。

「…じゃあ、そろそろ楽になろうぜ。お前らは自分を信じればなんだってできるし、なんにだってなれる。だからいまは、この幻想をぶち殺す！」

終わりにするため核に向かって空気を固めた一直線の道を創って走り、俺はその核を全力の右手で打ち抜いた。そうして、幻想猛獣は核を打ち抜かれると、そのまま灰になるようにサラサラと消えていった。これで佐天たちもきつと目を覚ますだろう。

戦闘終了後、御坂も目を覚まし上に行ったみんなとも合流して休んでいるとどうやって倒したのか聞かれた。面倒だったので、「お前が倒れたすぐあとに、初春たちの治療用プログラムが効果を発揮して幻想御手のアンインストールができたんだ。んで、再生しなくなったところを麦野がズドンと」言ったら悔しそうな顔をしていた。

それから少し経つと、通報を受けた警備員の増員がやってきて木山を連れて行こうとしたので、俺は少し話をさせてもらおうと連れていくのを待ってもらった。

「で、なにかようかね？」

「いや、伝えて置きたくてな。お前の生徒だが、あれは助けることができる」

俺がそういった瞬間、木山の顔が驚きに変わる。だが、相手がなにか言う前に続けて話す。

「そもそも、あれは『暴走能力の法則解析用誘爆実験』すらも隠れ蓑にした、木原きはら 幻生げんせいの能力体結晶・通称“体晶”の投与実験だ。だから、お前の教え子はいまも暴走状態でA I M拡散力場によるネットワークを経由した1つの集合意識となっている。その原因もある程度、推測できるから恢復かいふくは可能だ」

「ほ、本当か？　だが、な、なぜ君があの子たちや実験のことを……まさか、読心能力サイコメトリーまで使えるのかっ!？」

「まあ、全然違うが効果は似たようなもんか。すまん、勝手に見させてもらった。だが、お前の願いは叶えてやれる。だから、すぐに戻ってこい」

そういつて俺が頭を撫でると、彼女は急に抱きついてきてお礼を言いながら泣き続けた。他の人も話は聞いていなかったが、その様子だけ遠くから見えていたらしくジト目でみられたのはここだけの話。そして、泣きやんだあと木山が警備員の車に乗る直前に声をかけてきた。

「そうだ、君はいま携帯電話を持っているか？」

「ん？　あるけど。ほれ」

そうやって渡すと、木山はボタンをいくつも押して操作を終えると返してきた。そして笑顔で口を開く。

「ほら、私の連絡先だ。もちろん、仕事用ではなくプライベート

用の方だぞ。戦っているときに知りたがっていただろう?」

「えっ!? いや、あれは、そのっ」

「まあ、当分は会えないと思うが、好きに連絡してくるといい。君のためなら時間をつくろう。ではな」

そういうと、木山は警備員に連れられ去っていった。この場に微妙な空気もとい女性陣の俺への冷たい視線という置き土産をおいていきながら。

「アンタ戦闘中になにやってんの?」

「…はい」

御坂が冷たい視線で俺を見ながらそう言ってくる。

「デメエ、私らに手を出すなってそういうことか?」

「…いえ、けっしてそんなことは」

麦野が額に青筋をつくりながら俺を睨んで言う。

「私たちを上へいかせたのも超そういうことでしたか」

「…適材適所の指示であります」

「結局、ナンパが上条の適所って訳ね」

「…俺は数に入れてません」

最愛とフレンダがゴミを見るような視線で見ながら俺にいう。

「人を共犯にしといて最低です」

「俺も必死に戦ったんだぜ？」

COREのことも根に持ってるのかツーンと俺から顔を背けて言ってくる初春。

「……ちっ」

「え、おい理后。理后？ 理后さーん！！」

舌打ちすると俺の方を全く見ずに去っていく理后。ちくしょう、理后のやつが一番心に響くぞ。なんでこんな目に上条さんが合わないといけないんですか！？ 腹に穴あけてまで……穴？ 忘れてた。俺、腹から背中にかけて穴あいてたんだ。ははっ、血が足りねえ……バタン！ 》

「なに倒れてんのよ？」

「戦闘がんばったアピールですか？ 超姑息ですね」

「結局、上条は上条だったって訳よ」

「そんなことしても許してあげませんから」

「放っておいて帰りましょ」

そういうと、麦野・最愛・フレンダ・初春・御坂は帰るために歩いていった。クソッ、あいつら絶対に許さん。この恨み絶対に忘れないからな。そう考えていた俺は、庇った警備員たちによって意識を朦朧とさせ倒れている状態を発見され、病院へ運びこまれると入院することになった。

意識が回復してから聞いた話だと、警備員が気付いた時には身体が冷たくなり始めていたらしい。だが、助けてくれた恩人を死なすものかと、病院への搬送中も必死の処置をしてくれたおかげで冥土返しも俺を助けられたとか。

ついでに、これもあとで聞いた話だが。俺が重傷であること思い出し理后が急いで戻ってきたらしい。その戻る途中で俺を見捨てていったヤツらに事情を説明すると、ヤツらも途端に青い顔になったそう。うだ。まあ、戻った時には俺は病院に搬送され緊急手術を受けていたので、急いで病院にかけつけたやつらは気が気じゃなかったそう。可哀想だが見捨ててった罰だな。

そういうわけで、多少の怪我をしたり女性陣の信頼を失ったりはしたものの、みんな無事に幻想御手事件を解決することができたのだった。

第二十二話 幻想御手事件・終幕（後書き）

黒子：原作ならラストに登場しますが、この人数のところに来てもなっでことで病院に直行します。

第二十三話 ミサキチ（前書き）

上条さんが元始種子というチート能力があるのに、それを使わず怪我をしたのは、「寿命が減るより、怪我の方がマシ」と考えたからです。

それと入院フラグのためでもあります。騒動のあとに上条さんが入院してるとなぜか「ああ、日常だな」と感じますので。

第二十三話 ミサキチ

『^{レベルアップ}幻想御手事件』の解決から約一週間が経った。初めて暗部組織・システムとして介入したのが表の事件というのはあれだと言うが、改めてメンバーたちが優秀だという事がわかった。普段はふざけているフレンドも咄嗟に武器を^{アポルト}物体召喚で呼び出し対象を破壊するという活躍をみせ、つくづくすごいやつらだと思い知らされたぜ。

そうそう、幻想御手を使ったことで意識不明になっていた者たちはその日のうちに目を覚ました。佐天もみんなが病院に来た時には目を覚ましていたそうだ。今回の件で本当に空力^{エアロハント}使いということがわかったわけだが。能力は幻想御手を使用する前の状態に戻り、使えなくなってしまったという。だが彼女は、「使えることがわかったし、暗闇の中から助けてくれた人のためにも頑張りたい」といつてやる気をみせていた。なので、もう大丈夫だろうと思う。

そんなこんなで夏休みを目前に控えながらも、身体を貫かれ入院し始め1週間。実は俺はシステムのメンバーにも、御坂と初春にも会っていない。なぜなら、あいつらは俺をおいて帰ったからだ。そんな薄情なヤツらとは一週間会いたくないと面会を断った。なので、いままでのことは冥土^{ヘンキヤンセラ}返しや黒子と佐天から聞いた情報だ。まあ、もうすぐで一週間なのでそろそろ会ってもいいかなと思っていると、誰かが部屋にやってきた。

《コンコン》

「ん？ どうぞー」

「失礼しまーす。先輩が、入院したって聞いてきちゃいましたあ」

「よ、よう。久しぶりだな、ミサキチ…」

ノックしてきた相手を部屋に招き入れると、相手は常盤台の女王こと
と序列5位・心理掌握メンタルアウトの食蜂しょくほう 操みさき祈のりだった。2年生にして女王と呼ばれるのはすごいけど、金髪巨乳ニーソで俺にとってはアホの子に
しか思えない性格の持ち主だ。心や記憶を改変できるという能力らしいが、幻想殺しイマジンプレイカーを持つ俺には効果がないらしくそんなことをされたことはない。

「あの、先輩？ お怪我の方は大丈夫ですか？」

「まあな、腹から背中にかけて貫通したぐらいだから大丈夫だ」

「え？ ええっ！？ 貫通したぐらいって、大丈夫の基準おかしいですよー！！」

俺の言葉に驚きながらわたわたといった感じに手を振り、そう言ってくるミサキチ。つーか、これが素だっていうんだからお嬢様ってのは怖ろしいぜ。どんな環境で育ったらこういう面白い子に育つんだろうな？ そう思いながらミサキチに答える。

「まあ、上条さん基準だから気にすんな。それより、ミサキチは1人できたのか？」

「はい。本当はついてこようとする子が何人もいたんですケドお、私も先輩に会いに行くのは1人が良いって遠慮してもらったんです」

「そっか。ま、なんにもないけど、とりあえず椅子に座れよ」

「はあい」

そういつて素直に座るミサキチ。けど、こいつを相手にして疲れるのはなにも性格的なものだけじゃない。むしろ、口調とかはともかく性格は素直な良い子なのだ。だが、問題はこの子の体型とファッションにある。

ただでさえ麦野並みに発育が良いのに、いつもお気に入り星柄のななめがけのカバンを持ち歩いている。その肩紐が谷間に喰い込み胸を強調するのだ。精神衛生上とてもよろしくない。そうして視線が胸に行かないよう気を付けているとミサキチが話しかけてきた。

「ところで先輩。今回はどうして怪我したんですか？」

「ああ、警備員アンチスキルの先生らをかばってさ。ニュースにはなっていないだろうが変なのと戦ってな、爆発と触手の槍がきたから爆発しか防げなかったんだ」

「なんですかそれえ、学生を守る人が学生に守られてちゃ意味ないじゃないですかあ」

「そう言ってやるな、先生らは能力使えないのに身体はって助けしてくれるんだぞ？ それなら、こっちだって危ないときは助けてやらなくちゃ」

ミサキチはそれを聞くと理解はできるが納得はできないといった表情をした。こいつ精神系の能力者なのに考えがすぐ顔に出るんだもん。そうやって面白いやつだと思いつながら頭を撫でると、ミサキチは少し慌てた。

「せ、先輩！？ な、なんで頭撫でるんですかあ？」

「ん？ お前が素直で面白いからだよ。それに超能力者だからこういう事って、あんまりされたことないだろ？」

「あ、あんまり子供扱いしないでください。私、先輩と2つしか違わないんですよ？」

「それでも年下なんだから、甘えとけて」

撫でながら笑ってそう言うのと、ミサキチは「もお…」と恥ずかしそうにしながらも抵抗しなかった。ははっ、知り合いの中で一番素直だから小さな子供を相手にしてるみたいで癒されるぜ。そうして、撫でるのをやめるとミサキチが尋ねてきた。

「そういえばあ、あのドアにかかった札ってなんですか？」

「札？ ああ、あれは薄情者たちの面会を断ってたやつだ。もういいから外して持ってきてくれ」

お願いすると、ミサキチは「はい」といって取りに行ってくれた。取ってきてくれた札にはこう書いてある。

むぎのん	L V 5
電気鼠	L V 5
ジャージ	L V 4
超怪力	L V 4
フレンダ	L V 3
魔法ビン	L V 1

以上の人間（？）の入室を禁ずる。 上条

という風にな。佐天から聞いた話には理后がジャージ以外の服装ならジャージじゃないといって来ようとしたが、あだ名だから関係ないと伝えろと言ったら落ち込んだらしい。それとなぜ自分だけ本名なのかと地味に傷ついた金髪もいたそう。だ。ざまあみろ。

「薄情者ってその人たち、なにかしたんですか？」

「逆だ、倒れた俺を放っておいたんだよ。さすがに傷ついたぜ」

「なっ、どこの誰ですか先輩にそんなコトしたのお！ 私の感情の移植力で恐怖を味あわせてやります！」

急にそうって立ち上がると、ミサキチはカバンからリモコンを取り出してやる気を見せた。つか、レベル5のそんな攻撃喰らったら一生もののトラウマだろう。やめてやれよ…

「いや、友達だからそれはしなくていいよ。あれだって反省しろって意味でかけてたんだし」

「でも、その人たちって怪我した先輩を助けなかったんでしょお？ そんな人たち許せません！」

「俺が気にしてないんだから良いんだって。そんなことしたら怒るぞ」

「っ！？ し、しないですう。ですから、嫌いにならないでくださいっ」

そんな風に、俺の言葉をきいて半泣きになりながら頼んでくるミサキチ。ふーむ、なにやらたまにこうやって嫌わないでって言うてるんだよな。やっぱ、心が読めるから人の感情ってのに敏感なのか？まあ、中身はまだ中学2年生だからしょうがないか。そう考えると俺は安心させるように頭を撫でてやることにする。

「嫌いになんてならねえよ。けど、友達に能力使うのはやめてくれ。そういうのは冗談でも嫌な気分になるからな」

「は、はい。じゃあ、あのお：もう少し頭を撫でてもらっていいですか？」

「ははっ、全然構わねえよ」

そうしてミサキチの願いをきき少しの間、俺は頭を撫でてやった。撫でてる最中に「はう」とか「ふふっ」とか聞えるのは少し恐かったが、まあ喜んでいいるのならよかったぜ。そんな感じでその後も俺たちは2人で楽しく話をした。

ミサキチがお見舞いに来てくれて話をしていると、廊下の方が騒がしくなったのに気付いた。どうやら何人もの女子が廊下で話をしているらしい。

『さすがに、上条さんももう怒ってないと思いますよ』

『でも、本物の怪我人に「超姑息」とか「そんなことしても」って言ってたって訳よ?』

『『うう…』』

『フレンドさん、初春たちをあんまりイジメないでくださいまし…』

聞えた話の内容と名前から、システムのメンバーと超電磁砲組がやってきたらしい。まあ、札はミサキチに外してもらったから今日から入ってきてもらって構わない。

『あ、札がなくなってる。とうま許してくれたのかな?』

『わかんないけど、ちゃんと謝れば許してくれると思うわ』

『うん。とうま、入るよ?』

そういうとドアを開けシステムのメンバーと超電磁砲組が入ってきた。一週間ぶりに会うやつらは心配そうな顔で入ってきた後、俺の顔をみるとホッとした表情をみせた。だが、ベッドの横に座ってる人物をみると表情が固まった。…なんか不味い予感。

「な、なんでアンタがいるのよっ!」

「常盤台の生徒?」

「誰よあんた?」

御坂・理后・麦野がそういうとミサキチは気にした様子もなく答え

た。

「なんでって当麻先輩のお見舞いですケドお」

そういうとミサキチはつまらないものを見るように入ったきた人間を見た後、俺に視線を戻した。だが、自己紹介をしなかったため、ミサキチが誰かわからない初春が口を開く。

「御坂さんと白井さんはこの人を知ってるんですか？」

「……この方は常盤台の女王。超能力者^{レベル5}の心理掌握^{メンタルアウト}こと食蜂操析さんですわ」

黒子が説明すると途端に驚くメンバーたち。まあ、レベル5がそのへんにいるって思わないだろうからな。そんな風に思っていると、ミサキチが話しかけてきた。

「先輩、この人たち誰ですか？」

「さっきの札に書いてたやつらと、黒子と佐天だ。俺の友達だぞ」

「ああ、電気鼠って御坂さんのことだったんだあ」

そういつてクスクス笑うミサキチ、言われた御坂はややスパークイングしてる。けど、雰囲気的に御坂たちと仲良くないのかもな。ま、立ってるのもなんだし座らせよう……と思ったが、ミサキチをいれて9人なんて人数の椅子あるわけないだろう。そう思いどこか座れるところに行こう話しかける。

「病室だと狭いからどこか座れるところ行かないか？」

「上にラウンジみたいなのが超あったと思います」

「じゃあ、そこ　私は当麻先輩がいればそれでいいんですケドお　…まあ、俺も移動するからさ」

移動したくないと言ってくるミサキチの頭をそういつて撫でると、ミサキチは「わかりましたあ」と言って嬉しそうにした。だが、他の方には不評らしく強い視線で睨んできた。なんでだよ…そう思っている、突然ドアが開いた。

「にゃー、邪魔するぜい。お見舞いに…」

「カミヤーん、元気しとる…」

「（なにこの修羅場っ!?!）」「」

入ってきたのはクラスメイトの青ピと土御門だった。この空気に耐えられなくなりそうだった俺には救いの神に見える。固まってるようだが、丁度いいし道連れにする。

「おっ、よう青ピに土御門。いまから移動するところだったんだ。お前らもこいよ」

「えっ。いやあ、今日は顔見にきただけにゃー」

「そうそう、ボクもそんな長居するつもりは」

「ははっ、ジュースぐらい奢るって。んじゃ、いこうぜ」

2人もこの雰囲気気付いたようで帰りがついていたが、俺は相手の話を聞かずに2人をラウンジまで連行してやった。

第二十三話 ミサキチ（後書き）

アニメと小説しか知らない方に言っておきますと、食蜂操柝はオリキャラではなく公式の心理掌握の名前です。灰村キヨタカさんのサイトにもデザインがあるので是非みてみてください。

設定画では「貴方の精神操^{ハート}っちゃうゾ☆」となかなかユニークなキャラで、禁書目録では未登場ですが超電磁砲の漫画ではすでに登場しています。

公式でもほとんど出ていないため、それっぽい口調をしてはいませんが年齢含めてオリキャラ状態です。

第二十四話 ラウンジでのお茶会 その1 (前書き)

結局、青ピはオリ能力にしました。能力を考えるのって楽しいですね。

第二十四話 ラウンジでのお茶会 その1

病室をあとにし病院のラウンジにて、俺たちは長机に机を挟んでシステムと中学生組に分かれて、ほぼ年齢順に座っている。土御門と青ピは並ぶのを嫌がったため上座に座っている。席順はこんな感じ。

土御門 青ピ

俺――ミサキチ

麦野――御坂

理后――黒子

フレンド――佐天

最愛――初春

全員のジュースを用意し席についたところで青ピが口を開いた。この空気で先陣切るとかすごいなコイツ。

「は、はじめまして。ボクはカミやんのクラスメイトの青ピいます。良かったら、自己紹介して欲しいなあ。カミやんとの関係も含めて」

「お、俺は土御門。青ピと同じくカミやんのクラスメイトで寮ではお隣さんだにゃー（なんというプレッシャーだ。この一帯だけ空気の重さが違うッ）」

青ピと土御門が頑張って話を始めてくれたから、場の空気が動き始めた。やはり、この2人を連れて来て正解だったか。そう思っていると、麦野が口を開いた。

「麦野沈利。レベル5の原子崩し。メルトダウナー上条との関係は…つか、上条の所有物」

「ブフォッ、お、おい麦野…」

「滝壺理后。レベル4の能力追跡。AIMストーカー同じくとうまの所有物」

「理后まで…」

麦野がえらく誤解を招くようなことだったので訂正させようとする
と、理后まで同じことを言い始めた。しかも、いつもはジャージの
上着に隠れてるネックレスを出して。

「フレンダーセイヴェルン。レベル3の物体召喚。アポート上条の所有物
って訳よ」

「絹旗最愛。レベル4の窒素装甲。オフエンスアーマー私も当麻さんの超所有物です」

「う、初春飾利です。レベル1の定温保存で、上条さんの…共犯
？」

なんだよ共犯って。つか、最愛の年齢で俺の所有物って言ったら、
俺が犯罪者みたいじゃねえか。そう思っ
ていても、自己紹介は続く。

「佐天涙子です。レベル0の空力使い。エアロハンド上条さんには命懸けで助
けてもらいました」

「白井黒子ですの。レベル4の空間移動。テレポート上条さんとは濃厚なお
付き合いをさせていただいてますわ」

「ブッ!! げほげほ…黒子ッ、お前へんな言い方すんな!」

黒子まで誤解を招く言い方をしてきたので、注意すると意味ありげにクスクスと笑ってきやがった。そして、なにやら悩んだような表情の御坂の番になった。

「御坂美琴。レベル5の超電磁砲^{レベルガン}。私はこいつの……わかんない」

「よく遊ぶし親友とかで良いんじゃないか?」

「親友? いいの?」

「お前がイヤじゃなけりゃな」

「ううん、嬉しい:」

そう言って少し顔を赤くしながら喜ぶ御坂。だが、なぜか理后からは舌打ちをされ、麦野からは足を踏まれた。そうして最後の1人、ミサキチの番だ。

「食蜂操祈。レベル5の心理掌握^{メンタルアウツ}。先輩の彼女でーす☆」

「「「はあっ!?!」」」」

「ミサキチさーん、嘘つかないでくださいーい。上条さんは彼女いない歴〓年齢ですよー」

「じゃあ、終止符打っちゃいます? 私、先輩ならあ…ていうか、ミサキチじゃなくて操祈って呼んでくださいって言ってるじゃないですかあ」

冗談を言ってみんなを驚かすミサキチ改め操析に、はいはいまた今度ねと言って話を進める。正直この人数で話がまとまるとは思えないがな。そうしていると、御坂が話しかけてきた。

「てか、なんであんたら知り合いなのよ？ 接点がわからないんだけど？」

「まあ、お前に会う少し前に会ったんだ。だから、クラスメイト除けばこん中じゃ一番付き合い長いな」

「フフーン、体調崩して能力が暴走してた私を当麻先輩が助けてくれたのよお。先輩は病院まで私を連れて行ってくれて、眠るまで手を握っててくれたわあ」

そういつて操析は出会ったときの事を思い出しているのか、嬉しそうにわらった。まあ、あの時は街中でしゃがみこんで「うるさいうるさいうるさい」って言ってたからな。読心能力が暴走してるんだと思って、右手で触って聞えないようにしたんだ。

「お前、俺が触ったとき驚いた顔してたよな」

「だって、五月蠅かった声が突然やんだんですもん。それでビツクリして手を払ったらまた聞え出して、先輩の力なんだってわかりましたよお」

「ま、なんにしても無事で良かったけどな」

はははっと笑っていると、他のメンバーの視線が突き刺さる。思わず視線を逸らすと、隣の土御門が話しかけてきた。

「つーか、カミヤん。レベル5の知り合いつくるのはいいが、女性ばかりコレクションしてどうするつもりぜよ？」

「なに言っただ。もう2人知り合いにレベル5がいるが、そいつらは男だぞ？」

「「「ええっ!？」」「」」

土御門に言われ、上条さんが女たらしと思われてはいけないと思い訂正する。すると、聞いたメンバーらは再び驚いたようだ。そして、みんながやや落ち着きを取り戻すと理后が聞いてきた。

「とうま、もう2人の知り合いって？」

「1人は第7位の削板そぎいた軍覇ぐんはだよ。前にしつこく中学生をナンパしてた不良をボコってたら『弱い者イジメとは根性が足らん!』とか言ってきたな。まあ、逆にボコボコにしてやったが」

そういつて吹き出して少なくなったコーヒーに口をつける。こいつらのせいで100円をほとんど無駄にしたなと思っていると、今度は麦野が口を開き尋ねてきた。

「第7位って能力不明のデタラメなやつでしょ? 車にひかれても掠り傷とかってやつをどうやって倒したのよ?」

「まず、『この根性の速さは捉えきれまいっ!!』って言ってきたから右手で張り倒してな、驚いてたから倒れてる相手を右手で掴んで頭突きしたり、膝蹴りしたりしまくったんだ。んで、最後に最愛とフレンダにやったみたいの上に座って負けを認めさせたってわ

けだ。まあ、不良をボコった事情を説明したら謝ってきたけどな」

「というより、絹旗さんとフレンドさんになにしてるんですの…」

「この前はパンツ全開で逆さ吊りにされそうになったって訳よ…」

「「「うわあ……」」」

麦野に軍覇の攻略法を教えていると、黒子が突っ込みをいれてきた。それにフレンドが答えたせいで、システム以外の女性陣に変な目でみられたじゃないか。まあ、操析だけは気にしてないみたいだな。

「ま、まあ、仲が良いのは良いことぜよ（第7位もだと？ 残り
は第1位、第2位、第6位：最強・暗部・情報無しの3人と誰でも
問題ありのメンバーだが、一体誰だ？ 幻想殺しは5人ものレベル
5を手懐けているのか。クソッ、システムなんて冗談とは思え
ない暗部集団の情報だってあるというのに…）」

「それで最後の知り合いのレベル5って誰なんですか？」

「なに言ってんだ、目の前にいるだろうが」

佐天に聞かれたのでというと、みんな頭にハテナマークを浮かべている。あれ、土御門も知らなかったのかな？ そう思いながら、理解できていないみんなに説明する。

「ほら、青ピのことだよ。こいつ第6位だぞ？」

「なっ、なんで知ってんねん！？ ボクそなん言ったことなかったやろ！」

いままで隠してきたつもりなのか言われて動揺する青ピ。他のみんなもかなり驚いているようだ。とくに土御門なんて口を開けてあんぐりしてる…本当に知らなかったんだな。そう思いながら青ピの質問に答えることにする。

「なんでって、お前のピアスをデザインして加工したの俺だぞ？」

「なー！？ 己がこの忌々しいモノ作ったんか！ デザインと着け心地はエエけど、これのせいでボクは能力使えなくなったんやでッ」

「いや、新型の道具のデザイン募集してたから選考用のデザイン送ったんだよ。んで、通ったから研究所に行ったら、お前の写真見せられてコイツに似合うデザインで作ってやってくれて言われたんだ。だから、装置そのものは俺が作ったんじゃない。ま、おかげで数百万の稼ぎになったし良いバイトだったけどな」

言ってハハッと笑ってからコップに口を付けるが空だった。なので、席をたち空のコップを捨て、新しくコーラを買って席に戻る。すると、青ピがまだイライラした様子でなにかいっていた。

「くそっ、可愛い研究員のお姉さんが渡してきたからつけたけど、それが間違いやったわ…」

「そもそも、お前が能力を悪用してたんだろ？ 自業自得じゃねえか。それに能力の暴走も抑えられるし悪い事ばっかじゃないって」

椅子をひき俺が座り直しながらそう言うが、青ピは「くそお」と本当に悔しがっている。こいつは本当に…。そう考えながら呆れた目

で見ているとフレンダが話しかけてきた。

「それで、青ピはどんな能力って訳よ？」

「たしか、『覗き盗撮』^{ビーピング}とかそんな感じだった気が」「全然ちゃうわッ、人を犯罪者みたいに言うなや!!」「…冗談だよ」

俺が青ピの能力名を捏造すると、青ピは立ち上がり目をカッと開いて怒ってきた。こいつも目開けられたんだな。などと失礼なことを考えていると復活した土御門が青ピに話しかける。

「そんなに怒るなら自分で言ったらどうにゃー? (クソッ、アレイスターめ。このことを知っていながら隠していたな。ならば、こちら勝手に情報を集めさせてもらおう)」

「いや…でも…。ホンマは誰にもバレてると思わんかったんよ、都市側も情報だけ隠して放置しとるしな。だから、能力教えていいもんかどうか…」

「能力名『視覚支配』^{イーヴィルアイ} 視覚特化型の能力で、視力強化・目の質変化・透視・視界共有・視界ジャックなどの力があり、諜報活動に優れている…だったか? 俺の言ったのと大して変わらないだろうが」

「…なんでそこまで知ってんねん。はぁ…、この短時間でカミヤんが何者かわからんくなってきたわ」

言ってガックリと肩を落とす青ピ。ついでに、青ピの言葉に年少組や超電磁砲組がウンウンと頷いている。こんな平凡な高校生つかまえて何言ってたんだか。

「ま、そういう訳で第1位と第2位以外は知り合いだな。つか、お前らもこれではとんどの超能力者^{レベル5}と顔見知りになったんだぞ？ 良かったな」

「そんな単純に考えられるとこホンマ羨ましいわあ。で、カミヤん。この中で本命はだれなん？」

先ほどの空気が消えたと思い青ピが呆れながらも冗談のようにそう言った瞬間、この場の空気が音をたて凍った気がした。

第二十四話 ラウンジでのお茶会 その1（後書き）

自分が作品内で書いてるオリ能力（？）ですが、タイトルになってる『元始種子』以外は設定こみで使ってもらって構いません。どうぞどこかで見たことあるような物ばかりですから。まあ、一応使う前に「このアイデアいただきます！」と感想に書いてもらえると嬉しいですよ。それと、「能力名の元ネタは？」とかも聞かれたら答えますので、遠慮せず聞いてください。

第二十五話 ラウンジでのお茶会 その2（前書き）

システムのメンバーで一番内面的変化が少ないのが絹旗です。次点で、フレンダ：と言いたいですが、フレンダは幻想御手後は年相応の雰囲気に変化していきます。だって中学生組と禁書目録がいるから心身共に上条みたいな年上側が必要になってくるんです。口調も少し「って訳よ」が減ります。

第二十五話 ラウンジでのお茶会 その2

青ピが笑いながら俺に本命は誰だと聞いてくると、途端にこの場の空気が逆戻りした気がした。なんだってんだ一体？

「本命って何の話だよ？」

「い、いやな。こんなに可愛い子ばつかと知り合いなら、誰か狙ってる子がいるんじゃないかなあ……って」

「別に狙ってる奴なんていないぞ？ みんな仲のいい友達さ。こいつらと一緒にいるのは楽しいから当分、彼女はいらないしな」

はははっと笑って言いながらみんなの方を向くと、誰ひとりとして1ミリたりとも笑っていなかった。どういことだと青ピと土御門の方を見ると2人は青ざめた顔で口パクで何か言っている。こ・のみ・を・い・え？ 好みって女性のか？ そう思いながら指示通りいつてみる。

「好みのタイプは寮の管理人のお姉さん。代理も可って言うってるけど、それは冗談だしなあ。まあ、頼ってくれるタイプの子かな。そういう意味では御坂や最愛みたいに、年上としてでも甘えてくれるのは嬉しいぜ」

そういうと御坂と最愛は「「うう……」と恥ずかしそうにしている。ま、後輩もいるし人前で言うのは悪かったかな。そう思っていると操析が俺の方を見て尋ねてきた。

「じゃあ、私も先輩に甘えてもいいですかあ？」

「いいけど、甘えると我儘は違うからな。そこんところは良識にまかせろぞ」

「はあい。それじゃあ、今度いつしよに遊んでほしいです」

「いいぞ、そんなときは新しいカバンでも買うか？　それいつも使ってるだろ？」

俺は操析の星柄のカバンを指差しながらいうと、操析はカバンを机の上においた。御坂と黒子はそのカバンをちゃんと見たことがなかったのか興味深そうにみている。すると、カバンを見ていた御坂が急に俺に向かって話しかけてきた。

「それ、あんたがあげたモノだったの？」

「操析が退院した後、初めて遊んだときにな。そんなときの記念にあってあげたらずっと持つてゐたいだな」

「ずっと、ブランド物しか持つてなかった女王が、急に可愛いカバンを使い始めたって騒動になったのは上条さんが原因でしたのね」

そう言って呆れたような表情をする黒子。つか、騒動なんかになつてたのか…恐るべしお嬢様学校常盤台だな。まあ、海外の女優さんの着てた服が話題になるってのと似たようなもんか。そう思っていると、操析がカバンを撫でながら口を開く。

「んー、カバンはこれでいいです、先輩に初めてもらったものですから。それと白井さんだっけえ？　可愛いケド、これもちゃんと

したブランド物なのよ？」

「そうなんですか？ 私にはそれほど高い物に見えませんが」

言いながら操析のカバンをよく観察する黒子。まあ、見た目は若い女の子が持つような派手めの柄だからな。そんな一般的なブランド品に比べたら高そうには見えなくてもしょうがない。

「俺がよくいく外の物を扱ってる店のだ。職人の手造りで、素材も丈夫だし造りも丁寧だから長く使えるんだぜ？ 値段的には5ケタくらいだけだな」

そういうと飲み物を飲みながら話を聞いていた佐天たちは驚いたのか咳き込んだ。同じく驚いた表情で土御門と青ピも固まっている。みんなのリアクションを見ながら、こいつら今日は驚いてばっかだなあ。と思っていると、咳き込んだため軽く涙目になっている初春が口を開いた。

「5ケタって数万ってことですよ？ 私にパソコンのこと言ってきたときも現金でポンと買ってましたけど、上条さんってレベル0なのに金銭感覚おかしくないですか？」

「必要なところには金使ってるだけだ。他は質素なもんだぞ？ 食事は安いスーパーで食材買って自炊だしな」

「それでも、彼女でもない人へのプレゼントに数万するモノって……同じレベル0なのに私と全然違う」

佐天が俺と自分の金銭感覚の違いにショックを受けているが、そもそも中学生と高校生で年齢が違うし、なにより向こうは女子だ。服

でもなんでも金がかかるだろう。それじゃあ、金の使い方の違いが出てもしょうがないな。そう思ったところで青ピが再起動して話し始める。

「つつちー、これがボクラとカミやんの違いちゃうかな…」

「節約してるけど、プレゼントにはドドンと金使うとこかにゃー？
確かに真似出来んぜよ」

「別に高級品をやってるわけじゃない、本人に似合うものを作ってるんだ。だから、良い物がなければ手作りだってするぞ」

それを聞いた女性陣は「へえー」と感心している。実際に理后にやったものは、媒体になるモノがあればそれに力だけ付けるとかでも良かった。だが、どうせなら似合うものの方が良いと思って素材を出して全部作ったんだ。こうみえて上条さんは細かい工作とかが大好きなんだぜ？…なんて考えている間に操析が続きを話します。

「じゃあ、そのデートのときはあ、手作りの指輪が欲しいです」

「作れると思うが、リングサイズはどうするんだ？ 首からチェーンに通すならチェーンもやるけど」

俺がリングサイズを訊くと、操析はレース入りの手袋を外して左手を見せてきた。どの指にすれば良いんだ？

「先輩、薬指用でお願いします。将来も使うと思うんで、これを機に覚えてくださいねえ？」

「気に入ったら、また注文してくんのか？ いいけど、デザイン

とかも考えないとな」

そういつて操祈の手を取りフニフニと触って指の形を確かめていたら、急に横から頭を叩かれた。

《バシン》

「痛っ、なにすんだ麦野」

「馬鹿、なに左手薬指の指輪作ろうとしてんのよ。なんの指か分かってんの？」

左手薬指？ ああ、結婚指輪とかって意味か。けど、大丈夫だろ。操祈に似合うものとは言っても、そういうデザインにはしないしな。つーか、最近だとナンパ避けやファッションで左手薬指に指輪をする人間もいるだろ。そう考えながら麦野に答える。

「ファッションだろ？ 気にするなよ」

「それ以前に、こいつは手袋してるからデザインの意味ないわよ。大方、ウチの生徒に左手薬指に指輪を付けてるって見せつけたいのね」

「ふーん。まあ、そういう背伸びしたい年頃なんだろ？ 可愛いじゃねえか」

御坂に言われたがそう答え、左手の指の確認作業を再開するとみんなに溜め息を吐かれた。なんだよ、こいつらなにが不満なんだよ……。あ、そうだ忘れてた。

「そういえば操祈。俺、新しく喫茶店始めるんだよ。従業員は俺

含めて横に並ぶ5人だ。味には自信あるから開店したらお前も遊びに来いよ」

そういつて横に座る麦野たちを指差しながら伝えると、操析は少しだけそつちに視線を送ってから俺の方に向き直り話しかけてくる。

「先輩も作るんですかあ？」

「ああ、普通に作るぞ」

そう伝えると「なら、いきますう」と嬉しそうに言った。なんだ、俺の作った物が食いたいとは変わったやつだな。まあ、レベル5だし変わってるのが普通なんだが。そんな風に考えながら、店の場所などを伝え開店日が決まったら教えると伝えると、今日は帰るということでラウンジでの話し合いはお開きになった。

それと帰る前に俺を見捨てていったやつらはちゃんと謝ってきた。最初からそこまで怒っていないと伝えると、安心して帰っていった。俺もあと少しで退院できるし、そしたらいいよ開店だな。なんて考えながら今日もいそいそと暗部に流すシステムのメンバー情報を考えるのだった。

ラウンジでの話し合いが終わった後、とある窓の無いビルにて：

「⁵ どういうことだ、アレイスター。幻想殺しがほとんどの超能力^{レベル}者を味方につけているなど、報告にはなかったぞッ」

土御門は病院での話で、上条が第1位と第2位以外のレベル5と面識があり、なおかつ友好的な関係を築いていることを知った。だが、監視をするように言われていたにも関わらず、事前にその報告がされていなかった理由をアレイスターに問い正す。

「ふむ、そうなのかね？ それは私も知らなかったよ」

「白々しい嘘を吐くなっ。元アイテムの者だけでなく、他のレベル5までいるのであれば監視を続けるのは不可能だ。とくに、滝壺理后・初春飾利・御坂美琴・食蜂操祈の4人が問題すぎる。AIM拡散力場のスペシャリスト、学園都市最強クラスのハッカー、電磁波によってリーダーのようにまわりを知覚できる第3位、精神系最強の能力を持つ第5位。あんな者がいてどうやってやれというんだ」

魔術と科学それぞれの世界の組織に所属し、多角スパイをしている土御門。以前から様々な組織にいたためスパイとして活動することには慣れているし、それなりの実力はあると自負している。だが、監視対象のまわりが監視やスパイを暴く事に関して科学の世界のトップばかりで固められてはどうしようもない。

「それすらも騙すのが君の仕事だろう？ なに、幻想殺しの友人として振舞っていればばれまい」

「プラン達成のために、やつの活動を監視しろといったのはお前だぞ？ どうして、イレギュラーな事態の戦場付近に友人がいるんだ。そんなもの元アイテムのメンバーでなくともすぐに怪しむさ」

「ならば、彼1人が戦場に向かうように仕向ければいいだろう」

そういつて、土御門の言葉に何の問題もないとばかりに答えるアレ

イスター。確かに間違っていないが、そんな単純なことではない。むしろ、そんなことをしていれば根回し中に事態が収束するだろう。そんなことはアレイスターも理解しているだろうが、言わないところをみると出来る範囲でばれないようにしてみせろという事なのだろう。一体どれだけの労力を割けばいいのかと思わず、舌打ちをする土御門。

「ちっ…それと、もういくつか話がある。まず、元・アイテムのメンバーの話だ。あいつらは他の組織に引き取られたそうだが、現在はどこに所属している？ それによってはやつらを幻想殺しから離す必要があるぞ」

「所属は知らない。それらを把握する前にどこかに奪われたからな。大方、壊滅の話聞いた理事会の人間が、すぐさま自分のお抱えの組織にしたのだろう。まったく、狸が多くて困る」

「…アイテム以外として活動してる様子は？」

「それもないな。把握しきれていないというより、活動事態がまだという感じだ」

アレイスターの言葉に一応の納得をみせる土御門。確かに、現在システムという謎の組織に関する情報を持っているのは、実際に戦った元アイテムのメンバーだけだ。そんなメンバーに今の段階で仕事をさせれば、情報を求めに来た組織の人間とぶつかることになる。そういった事態を避けるため、いまは普通に暮らしているのだろう。…本当にアレイスターが所属を知らないのならばな。

「では次だ。そのアイテムを潰したとされる組織・システムの情報はないか？ 最近になって組織のメンバーらの情報とされるもの

が出回っているが、情報ソースがないので確かめることができないんだ」

「いや、ないな。私もその情報とやらは見ただが本当だとすれば怖ろしいものだ。なんせ、レベル4と3ばかりで構成される、能力者集団だからな。中にはレベル5にしたいくらいの能力もあった」

「情報ソースどころか書庫バンクにも載っていないが、実際にあり得そうな能力ばかりだ。すべてを嘘と考えるのは危険だろう。まあ、そのせいで暗部はいまだ混乱だがな」

自分で言いながら苦笑する土御門。危険と思ったところで組織の実態すら把握できていないのに、どう対処しろというのだ。それに加えて面白がって勝手に自分の考えた能力の情報まで流すものが現れている始末。こんなことでは、いつまでもシステムの情報に辿り着く事はできないだろう。もし本当にシステムという組織があるのなら、きつとここまで予測して情報を流したに違いない。全て向こうの思惑通りというわけだ。

「それとイギリス清教の方から、禁書目録がこちらの方へ逃げて来ているという情報も入っている。もしそれが幻想殺しと出会えば、やつも魔術の世界に関わることになるだろう。そうなったとき両陣営のバランスを破壊する存在を魔術師共が放っておくと思うか？」

「……思わないな。だが、やつらでは手出しできんさ。それこそ神を崇めているなら尚のことな」

「ん？ どういう意味だ。あれは原石の中でも希少な能力というだけの話ではなかったのか？」

魔術側は上条に手を出してくるだろうと思いつながらも、含みを持たせた言い方をして問題ないというアレイスター。だが、幻想殺しは能力が希少なだけの、ただの原石だと聞かされていた土御門は思わず聞き返す。そして、聞かれたアレイスターは少しの間を置いて口を開いた。

「…あれは原石などではない。原石とは環境によって力を発現した能力者のことだが、幻想殺しは紛れもなく生まれ持った異能。そのため、どちらかといえば聖人の方がまだ近い」

「しかし、母体の中というのも1つ環境だろう？ それならば原石と「たとえ人工母体だろうが、彼は幻想殺しを持って生まれてきたさ」…なに？」

「あれは最初から神に選ばれ力を授けられた存在なのだよ。つまりは、神の代理人。神を崇めている者が、たとえ代理人であろうと神を利用すると思うか？ まあ、イギリス清教のあの女や力を持ち勘違いしたローマ正教ならば利用しようとするだろうが、他の者ではおいそれと手を出すことはできぬさ」

言いながら楽しそうに笑うアレイスター。確かにそれが本当ならば十字教徒では手を出せないだろう。もし手を出せば、自分が反逆の徒である異端者として処刑される可能性がある。確かにバランスを崩す要因だが異能を打ち消すだけの者を、そこまでリスクを負って手に入れようとする者はいないだろうと土御門も考える。だが、

「やつが神に選ばれた者だどうやって証明する？ 異能を打ち消すだけでは、到底信じられないぞ」

「それはあれの真の力をみれば信じざるを得ないさ。真の力が解

放されればそれこそ世界を敵に回しても勝利できるだろう」

「なっ!？」

簡単に言ってきたアレイスターの言葉に驚く土御門。現在、学園都市最強の一方通行ですら魔術の世界も含めば上位にギリギリ入る程度の扱いだ。それなのに世界単位で相手をして勝つとは一体どれだけの強さなのか。真実ならば神に選ばれた者として認めざるを得ないだろう。

「お前はプランと言って、そんなものを目覚めさせようというのか! そんな存在がいると分かれば力を恐れた人間が戦争を起こすぞッ」

「そんなことをさせないためのプランだ。恐れるのは突然強大な力を持った者が現れるからだろう? ならば、ステージを用意して段階的に解放するまでさ。…さて、話はそれぐらいかな? 今後も彼の監視を頼んだぞ」

「待て、話はまだッ《シュンッ》」

まだ話は終わっていないと続けようとした土御門。だが、水槽の中でアレイスターは画面を操作すると、すぐに案内人がきて土御門を連れていってしまった。そうして、誰もいなくなった場所でアレイスターは一人呟いた。

「親愛なる友人は仲間と共に動き始めたようだが、魔術師との出会いはなにを生み出すのだろうか。フフッ…」

第二十五話 ラウンジでのお茶会 その2 (後書き)

アレイスターと土御門は書いて楽しいです。前にアレイスターを書いた時も最後に意味あげなと言ってましたが、「さーて次回の〇〇はあ？」って感じに、今後はどうなるんだろうねって言ってるだけで深い意味はないです。

設定3（前書き）

実はいままで一回も言っていなかったことがあります。上条さんの能力は元始種子^{オリジン}ですが、タイトルは『とある世界の元始種子^{ジ・オリジン}』です。まあ、語呂の関係で『ジ・』って付けただけです。

設定3

《人物情報》

青髪ピアス

【強度】超能力者《レベル5》

【設定】高校1年生。上条当麻と同じ高校に通う、序列第6位・視¹覚支配¹。なぜレベル5なのに学園都市きつての平凡校に通っているのかというと、能力こそすごいものの研究価値や能力研究の応用が生み出す利益が見込めないため、上層部に見逃されているからである。口調はエセ関西弁で、好みの守備範囲が異常にひろい。

また、付けているピアスは学園都市が付けさせた制御装置で、普段は能力が使えないようになっていて。付けさせた理由は「どこかに雇われ諜報活動できないように」と「女性から覗きの被害報告が多数あったため」である。ピアスを外すことはできるが、外せばそれが都市側に伝わるようになっていて。それが分かれると監視の人間が頻繁に様子を見に来るようになるため、いまの生活ができなくなる。そんなことになれば転校せざるを得なくなり小萌先生が泣いてしまうため大人しくつけている。

だが制御装置も悪いことばかりではない。昔、能力が暴走し多数の生物の視覚情報を見てしまったことがあり。当時はあまりの情報量の多さに脳が耐えられず気を失った。そういう経緯もあり学園都市側からの干渉がなくなったあとも、そのようなことが起きないようにする安全装置の役割もある。

【能力】

視覚支配《イーヴィルアイ》

？元ネタ…魔眼・邪眼のevil eyeから。簡単に言えば視覚特化型の能力で、大きく分けると視力強化・目の質変化・透視・視界共有・視界ジャック、ができる。

自身の視力を一時的に数倍にしたり、他人の視界を自分も見ることができるといふ能力。そういった意味で諜報活動には向いているが、視覚という情報量の多いものを脳内で処理するのでかなり複雑な演算をする必要がある。

視力強化

？距離なら最大で2キロ先に置いてある文庫本の字も見えるようになり、細かい物を見るなら顕微鏡いらすという状態になれる。ただし、最大の力を使えば能力使用後は一時的に視力が低下する、視界がぼやけるなどの症状になる。

目の質変化

？暗闇、水中、霧の中などの環境によって目の質を変えることで、日中のようなクリアな視界を保つことができる。これは制御装置無しならオートで設定変更するようにできる。そのため、暗闇でクリアな視界状態にしているときに閃光弾をくらって余計にダメージを負うことなどなく、即座に調整してノーダメージでいられるなどができる。

透視

？箱の中の物を箱を開けずに見るなど、遮蔽物を無視して見ることができる。本来はありえないものの見方なので一番演算力を使う。ちなみに、この力と他の能力は併用可能だがさらに負担が増えるのであまり多用・長時間の使用はできない。

視界共有

？他の生物の见えているものを見ることが出来る。ただし、最低で

も体長2センチはある生物に限定される。これを使っているときは脳に直接映像が流れてくるので、自分の見ているものと像が重なってみえたりはしない。ちなみに、この能力を使える対象は自分が肉眼で確認した相手のみに限定される。この力を使い相手の見ているものを見ることで相手の狙いを予測することが可能。そのため、戦っている相手には読心能力や予知能力に見えたりする。

視界ジャック

？これは視界共有の応用で他人の視界を奪える能力であり、視覚支配にとって唯一の攻撃的な使い方である。能力としては、相手の視界をジャックしてる間だけゼロにしたり、他人の視界を無理矢理見せることなどができる。

土御門 元春《つちみかど もとはる》

【強度】無能力者《レベル0》

【設定】高校1年生。上条当麻のクラスメイトで、寮ではお隣さん。魔術師であり能力者で、学園都市・イギリス清教などから依頼を請けている多角スパイである。アレイスターからは幻想殺しの監視を命じられているが、実はそれは魔術側に上条は異能を打ち消す幻想殺しを持っているだけと流させるためアレイスターが用意したフェイクである。普段は猫ボイス・エセ土佐弁で、喋り口調が軽いことこの上ない。舞夏という義妹がいて、それ関係になると本気で怒ったりもする。あだ名はシスコン軍曹。能力開発を受けたため魔術はほとんど使えなくなった（身体が耐えられないため）が、陰陽博士として最高位であり、特に風水を得意とする天才魔術師でもある。

【能力】

肉体再生《オートリバーズ》

？文字通り肉体的損傷を回復させるが、治癒速度・効果は大した事

は無い。せいぜい破れた血管を応急処置したり、長時間かけて瀕死の重傷から復帰する程度。本来なら能力者が魔術を使えば死ぬ危険があるが、土御門はこの能力のおかげでわずかに使えている。ただし、一発で死にいたる危険がある物は使えない。

食蜂 操析《しょくほう みさき》

【強度】超能力者《レベル5》

【設定】常盤台中学2年。序列第5位の通称・常盤台の女王。体調不良で能力が暴走し、街中で読心の制御がきかなくなっていたところを上条に助けられたのが出会い。背中まである長い金髪に、麦野クラスの巨乳、同じレース柄の入った手袋とニーソを装備している。いつも上条にもらった星柄のカバンを持っている。助けてくれただけで品や能力使用時に使うリモコンが入っている。助けてくれただけでなく、自分を普通の女の子として扱ってくれる上条に惚れているが、相手には軽く流されている。

【能力】

心理掌握《メンタルアウト》

？学園都市最高の精神系能力。記憶の読心・人格の洗脳・念話・想いの消去・意志の増幅・思考の再現・感情の移植などなど 精神に関する事ならなんでもできる能力。能力使用時にリモコンを操作するが、別になくても能力の使用は可能。ただ単に、リモコンを操作することで自分の能力使用のイメージを具体的にしているだけである。ちなみに上条・御坂・滝壺に対しては、幻想殺し・電磁バリア・AIM拡散力場を操れるなどの理由により能力が妨げられるため干渉出来ない。

《その他》

暗部向けシステム情報

【設定】上条が他の暗部に向けて発信している情報。システムに関する情報がないため、他の暗部が必死になって情報を集めているのを逆手にとり、いろんなメンバーの情報を考えて発信している。

別に全てが嘘というわけではなく、上条自身が自由性の高すぎる元始種子の能力に方向性を決めてすぐに使えるようにという事で、こんな能力の使い方もできるというのを能力名にしてあげている。ただし、それすらもリーダーの幻術使いの能力では？という情報も流しているので、実際はノリノリで遊んでいるだけと思われる。

最近のお気に入り「システムとは少人数の暗部組織ではなく大人数の暗部集団と思われる」というデマを流すことで、考えるときは他のメンバーの意見も聞いてるため「僕達の考えた最強の能力者集団」を考える遊びと化している。

【メンバー情報一覧】

・リーダー…推定レベル4…幻術使い《イリュージョニスト》

上？幻術により五感を支配するという能力者。例えば幻術で攻撃し、喰らった相手の痛覚を刺激しさらに怪我した幻覚を見せることで本当にダメージを受けていると思わせるなど、精神的に追い詰め相手の体力を削る戦法をとる。そのような効果から、実際は脳に作用する精神系能力と思われる。

・推定レベル4…座標変換《エリアコンバージョン》

上？レベル5の能力ですら、触れずにテレポートさせるという空間移動系の能力者。継続的なテレポートも可能でそれにより川などの水を転移させ続ければ相手をその場に釘づけにできたりもする。

・推定レベル4…電磁加速《ソニックボルト》

上？自身に微弱な電気を纏う事で、脳が信号を送るのと同時にその動きを実践できるという人間の反応速度を超えた体術で戦う能力者。ただし能力の関係上、纏っている間は暗闇では薄ぼんやりと発光して見える。他にも、磁力を利用し地中の金属との反発力で瞬間的な加速を起し高速戦闘も可能。体術がメインなだけで普通の電撃使いとしての力も使え、第3位には劣るが超電磁砲を放つ事も可能。

・推定レベル3…振動伝達《ショックノイズ》

絹？触れた物の振動を操作する能力。それにより声などで音の弾丸を作り攻撃したり、相手に気付かれないうちに超音波を叩きつけ平衡感覚を狂わせたりする。また、この力は防御にも使え、空気を振動させることで伝って動く電撃を弾くことや、炎の燃焼を阻害することも可能。体術としては相手の骨に振動を伝えダメージを蓄積させる戦法をとる。

・推定レベル3…行動予測《フォーカースト》

上？読心能力か予知能力と思われる力。相手の動きを読んでいるのか多対一でも格闘では一方的に攻撃を続ける。たとえ遠距離から攻撃したとしても完璧に回避や防御をとるため、予知能力者である説が濃厚。

・推定レベル4…重力掌握《グラヴィティマニピュレーション》

フ？重力を自在に操作する能力。相手に重力をかけて動けなくしたり、攻撃の瞬間だけ自身に重力をかけることで攻撃の威力をあげる事ができる。また、局地的な使い方をすれば疑似ブラックホールを生み出して相手の能力攻撃を吸い込むこともできる。その応用なのか引力と斥力も操作可能なようで、飛行する姿もみられている。

・推定レベル4…熱量操作《テンプチャーハンド》

滝？触れている物の温度を操作する能力で、これを利用し発火能力と温度を奪い凍らせる氷結能力を有する。2つを使って霧や陽炎、また水蒸気爆発を起こすなど応用力と攻撃力はかなり高い。（定温保存の能力を戦闘に特化させたもの。）

・推定レベル3…動物愛護《トリマー》

麦？テレパスを通じて動物たちとの意思疎通がはかれ、使役することができる能力。人を除く哺乳類・鳥類・魚類・爬虫類などが対象で、虫は対象外である。小型の動物を使つての諜報活動がメインだが、動物に相手を攻撃させて戦う事もできる。能力の副産物か動物に好かれる。

・推定レベル3…砂塵操作《クイックサンド》

フ？砂を操る能力。砂を固めて槍のようにしたり、盾のようにして攻撃を防ぐこともできる。御坂の使う砂鉄の刃のような使い方をし、岩だけでなくガラスやプラスチックでも砕いて砂のようにすればそれも使う事ができる。

・推定レベル4…変幻自在《カメレオンカラー》

絹？肉体変化系の能力で、直接肌に触ったことのある相手と見た目と声がそっくりになる能力。見た目と声以外は元の人間のままなので、筋力・視力・重さなどは変わらない（身長はコピー後の姿になるため、大人の筋力を持つ小学生になれたりする）。ただし、コピーした相手の異能を使う事や技能を真似することはできない。その欠点を補うために本人がコピー相手の癖などを事前調査し、友人にもばれないレベルで演じている。

・推定レベル3…液体粘土《ジェリーワーク》

滝？水流操作の一種。水を操るだけでなく、水の硬さも変化させる

ことができる能力で、粘土のようにして形を作りその後硬さを最大にすれば岩を砕く鈍器作るといったこともできる。よく使う技は大量の水を異物を含んだ状態で粘土状にして超圧縮し、それをまた水に戻すことで爆発させる炸裂弾。

・推定レベル3…血液流動《ブラッドフロウ》

滝？自身の血液や触れた血液を操作する能力。怪我をしても血液を増産し、傷口の血液を凝固させて塞ぐことができるなど医療向けの力。戦闘用に使うのならば、血を水流操作系の能力のように扱ったりして戦うほか、相手の傷口に触ればそこから体内の血の流れを操作して殺す事もできる。

・推定レベル4…能力封じー《A I Mディプライヴァー》

上？A I M拡散力場に干渉し、相手の能力を一時的に使用できないようにする力。能力追跡のように感知することはできないが、その分ジャマーとしての能力が高い。その威力は相手との距離に応じて変化し、近ければ近いほど効果が強くなるため格闘戦に持ち込むことが多い。超能力者クラスになれば全力で抵抗すればジャミングされた状態でも能力が使えるが、全く制御できない状態での使用になるため、暴走で自滅する危険がある。それと、この力はジャマーであってキャンセラーではないため、既に発生した能力を打ち消したりはできない。（力場に干渉し多少狙いをずらすことは可能）

・推定レベル3…影絵遊び《シルエットマスター》

絹？水流操作などのように影を自在に操る能力。影を実体化して攻撃や防御に使う以外にも、自分に影を貼りつけることで他の影内に隠れることもできる。影と言っているが、夜のような闇でも同じように力を使え、逆に昼間のような影の少ない時間は能力に制限がかかる。ちなみに、影の濃さと力は関係ないので、それを利用して薄い影でばれないように攻撃したりもできる。

・推定レベル4…火焰術師《フレイムジャグラー》

フ？普通に炎を放つだけでなく、複数の火球を放ったり剣のように形作り使うことができる能力。この能力が高位能力だとされる点はその能力の使い方よりも、炎の温度設定の自由さにある。下は触れなくても火傷しない殺菌のみできる程度から、上は鉄を一瞬で溶かす超高熱の炎をレーザーのように放つたりと形状変化と温度変化の多様性が特徴。火傷しない炎で翼を作り、そこから普通の炎を噴射することで飛行も可能。

・推定レベル3…植物弄り《ガーデナー》

麦？植物を操ること・植物を成長させること・新たな品種を作り出すことができる能力。種や葉っぱがあれば水や土が無くてもそこから蔓を出したり花を咲かせたりできる。本来ならせいぜい数十センチの高さにしかならない植物でも、操れば数メートルの高さにできるなど、かなり異常な能力。ただし、そういった急成長・異常成長させた植物は操作が解かれるとすぐに枯れてしまう。そして、新たな品種を生み出す場合、元になる植物を操作して作り出すので、同じ見た目でも『毒のないトリカブト』『甘いトウガラシ』『強い毒性のあるリンゴ』などを作することも可能。

・推定レベル4…記憶媒体《コピーカード》

上？カードを作りだし、そのカードに他者の能力を記憶させ使用できる能力。カードはポンポン作りだすことができるが、記憶させるためにはその能力を当て続けなければならない。能力の使用可能時間は記憶時間の十分の一で最大使用時間は10分。カードを使用するにはカードを握りつぶせばいいだけである。そのため、カードがあれば誰でも使用できる。カードの大きさは縦16・5センチ、横7センチと少し大きめ。そのサイズは変更できず、記憶した能力の名前と使用可能時間がカードに記載される。記憶方法の特性上使え

る能力は限られるが、空間移動などは移動させた距離の十分の一の距離を移動できるなど十分の一の制約内で使えるものもある。

設定3（後書き）

今回書いた能力は今後、上条さんが使ったり使わなかったりするものです。

いままでは「発現せよ、炎！」って感じでやってましたが、それよりも「発動、幻術使い！」の方がいちいちフェイクのために言うだけの詠唱をする必要がないですし、「あいつは幻術使いか」って相手もコロっと騙せるので今後はこれメインでいきます。イメージは状況に応じてフォーム・フォルム・モードを変えるヒーロー的な感じです。

一応言っておきますと、誰が考えた能力かというのは？の前に書いています。考えるのに参加したメンバーはシステムのみです。やっぱり、暗部関係ですから。

第二十六話 白いシスターさん（前書き）

インデックス好きのみなさん、お待たせしました。今回からインデックス編が始まります。まあ、インデックスは上条当麻争奪戦ヘエントリーさせてませんけど。

第二十六話 白いシスターさん

病院でのお茶会（？）からまた数日が経った。あのあとも、システムのメンバーや超電磁砲組がよくお見舞いにきてくれた。奇跡的に臓器へのダメージはなかったので、腹と背中への傷が少しでも早く治るようベッドで安静を言い渡されていた俺は、彼女らのおかげで退屈せずにすんだ。そのおかげもあってか怪我は順調に治り一昨日退院できたってわけだ。

そして昨日に終業式があり、今日からは待ちに待った夏休み。もう少し遅かったら終業式にも出れず夏休みの最初を病院で過ごすところだったけど、無事に夏休みを迎えられ天気もいいし店に行く前に布団でも干すかなとベランダへ行くドアをあけた。だがそこには、すでに布団が干してあった……ハテ？他所のがひっかかったのか？そう思い見ていると、布団が動いた。

「お…」

「お？」

「おなかへった」

え？これ、人間だったの？つか、人んちのベランダに干されておきながら「おなかへった」はないだろう。そう思っていると、その人間は再び話しかけてきた。

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

「それで？」

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいなあ」

そういつて、干されていた人間。よくみるとシスターさんはにっこりと笑った。俺もそれに満面の笑みで返すと、その隣に自分の布団を干して網戸を閉めた。

「え、ちょ、ちょっと！ 普通、そこでスルーしたりするかな！？」

「やかましい、自分の星に帰れ。ここは地球と言う俺ら人類と他の動植物たちの星なんだよ。お前みたいなの、干されてる状態で飯をねだる不思議ちゃんの星ではない」

「私だって地球人だよ！」

「そうか、なら異文化ってただけだな。自分の国に帰りなさい、ハウス！」

俺は布団モドキと会話しながら飯を作っていると、布団モドキは「ムッカー！」と言って、ベランダに乗り込み網戸をあけて入ってこようとした。なので、俺はすかさず言う。

「靴を脱がんか愚か者ッ！！」

「っ！？ は、はい！」

すると、布団モドキ改めシスターはイソイソと靴を脱ぎちゃんと揃えてから部屋に入ってきた。

「ほら、そっちに洗面所あるから手を洗ってこい。そしたら、その布きんを濡らしてテーブルを拭け」

「わ、わかったんだよ」

指示を出すと、シスターはトテトテと駆け足で洗面所に向かい手洗いうがいをして戻ってきた。次に言われた通り布きんを濡らすとテーブルを拭きに行ったので、俺も作ってた飯を皿に盛り付けご飯とみそ汁をよそって、お盆にのせるとテーブルに運んだ。

「ほれ、自分の前に皿とかをおけ」

「う、うん」

「そうだ。お前、箸は使えるのか？」

「ハシ？ んー、使えないけど頑張って食べるよ」

そう言ったシスターに少し待っとけというと、俺は台所からスプーンとフォークを持ってきた。今日の朝食のメニューは出し巻き卵、ホウレン草とウインナーの炒め物、きゅうりの漬物、油揚げと大根の味噌汁、紅サケ、白ご飯という日本の朝食といったメニューだ。だがまあ、使えないハシよりは食べやすいだろうと思って持ってきた。

「ほれ。無理に使うより、見栄えは悪くても使える食器で食った方が行儀良いぞ」

「あ、ありがとう。食べていい？」

「ああ、そのために作ったからな。ただ、室内では帽子を取れ」

「ッ！！ いただきます！」

許可を出すと急いで帽子を脱ぎ、とても嬉しそうな顔で食べ始めた。いったい、どれだけの間食食べてなかったんだという勢いで食べる様子に少し驚いたが、「おいしいおいしい」と目の端に涙の粒を作りながら食べるのを見て、何も言わず俺も食べることにした。

朝食を食べてからお茶を出し、その間に食器を洗い終わると、俺も自分の分とシスターのおかわりの分のお茶をいれてテーブルにもどった。

「んで、自己紹介といこうか。俺は上条当麻。この部屋の住人だ」

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ？」

「目次？」

「見ての通り教会の者です、ここ重要。あ、バチカンじゃなくてイギリス清教の方だね」

ふーん、と興味なさげにお茶をすすっていると、インデックスはさっきの俺の疑問に答えた。

「あ、目次じゃなくてインデックス禁書目録のことなんだけど。魔法名ならD

ed ic a t u s 5 4 5 《献身的な子羊は強者の知識を守る》だね」

「ああ、魔術師か…へえ。なんで干されてたんだよ？」

「別に干されてたわけじゃないんだよ？ 落ちちゃったんだ。ホントは屋上から屋上に飛び移るつもりだったんだけど」

屋上から飛び移るつもりだった？ つーことは、数メートル落下したにもかかわらず怪我してないってことか。んじゃ、服が霊装なのか防衛術式でも使ったんだな。アクシデントで触れないよう、右手に手袋はめとくか。そう思い、机のところから黒い手袋を出しはめておく。インデックスはそれを不思議そうな顔で見ていたが、席に戻ると構わず話し始めた。

「それで、なんでそんな危ない事したんだ？ 下手すりゃ死んでるぞ？」

「追われてたからね。それしか逃げ道がなかったんだよ」

「追われるってなにだよ？」

「何にだろうね？ 薔薇十字か黄金夜明か。その手の集団だと思うけど、連中名前に意味を見出すような人たちじゃないから」

そういってお茶を飲むインデックス。つーか、なんで狙われてるんだ？ それに禁書目録って聞いた事あった気がするんだけどなあ。

「それで、お前はなんで狙われてるんだ？」

「私の持つてる10万3000冊の魔道書。それが連中、“魔術

キャバル

マジック

結社”の狙いだと思う」

10万3000冊の魔道書…ああ、思いだした。あれだ、インデックスって魔道図書館のことか。ふうん、この子がねえ。そう思っていると、インデックスがぶすーとした表情で尋ねてきた。

「あのさあ、キミあんまり信じてないでしょ？」

「ん？ いや、信じてるぞ」

「嘘だよっ、その顔は絶対信じてないもん！ 魔術はちゃんと存在するんだよッ」

インデックスはそうやって俺が信じてないと言ってくる。まあ、軽くしか話聞いてないから、そう思われたりしたんだろう。全く失礼なやつだ、これがデフォルトだったっの。

「んじゃ、なんで俺が疑うんだよ？」

「信じてないって顔に書いてあるもん。いいよ、証拠みせてあげるから」

そういうとインデックスは台所まで行きなにかを取って戻ってきた。なにを持っているのかと思えば包丁だった。

「この服は『歩く教会』といって『教会』として必要最低限な要素だけ詰め込んだ、服の形をした教会なの。だから、銃で撃とうが包丁で刺そうが大丈夫なんだよ」

「へえ…」

「だから、ホラ。刺してみたって」

そう言うといンデックスは俺に包丁を無理矢理握らせてきた。はあ：信じるも何も最初から知ってるし、さっき「ああ、魔術師か」って言っただろうが。だけど、これをやらないといンデックスは満足しないようなので包丁を持ち直すと、ゆっくり顔に近づけていく。

「っ!？ ふ、服って言ってるのになんで顔に近づけてくるのかなッ？ 女の子の顔に刃物向けるとか信じられないかも!」

「ああ、悪い悪い。まさか、顔や手みたいに外に出てる部分には有効なんて思わなくてな。案外、弱点多いじゃん」

「むきー!!」

俺に言われると、悔しそうな顔をして床をゴロゴロと転がるインデックス。こいつ何歳なんだろう……。なんて考えていると、転がる事に飽きたのかインデックスは立ち上がり先ほど脱いだ帽子を被り始めた。

「帽子なんて被ってどうしたんだよ?」

「出てくんだよ。ここにいと、いつ敵が来るか分からないし。ごはんありがとう、美味しかったよ」

そういつてベランダから靴を取ってくると、笑いながらドアに手をかけて外に出て行こうとするインデックス。けど、そんな追われるようなヤツを1人で行かせられる訳ないだろうッ。

「待てよっ、お前どこか行くあてはあるのか？」

「大丈夫、教会まで行けば匿ってもらえるはずだから」

「教会なんかこの街にはねえよ……はあ、いくとこないならウチの店にこい。そこなら安全だから」

俺がそういうとインデックスはキョトンとした顔になり、すぐに困ったような表情になる。

「だ、だめだよ。あなたは信じてないかもしれないけど、追手の魔術師って言うのはかなりのやり手なんだよ。普通の学生にしか見えないあなたじゃ、襲われたら全く太刀打ちできないで殺されちゃうッ」

「魔術師がどうした、この街は学園都市って能力者がゴロゴロいるんだ。かなりのやり手でもウチの従業員にすら勝てねえよ」

「ち、力はあっても魔術を知らない人じゃ魔術による特殊な攻撃を防いだりできないよ。だからっ」

「ゴチャゴチャうるせえ、飯食ったんだからこっちの言う事も少しは聞きやがれ」

そう言われると俯くインデックス。まあ、いくら危険に巻き込むかもしれないからって、ご飯だけもらってさようならって訳にはいかないもんな。そうして俺は飯の恩から黙って言う事をきかないといけないインデックスを連れて店へ向かった。

第二十六話 白いシスターさん（後書き）

インデックス編が終われば一回更新ストップして、もう1つ書いてる方を再開し始めたいと思っています。

第二十七話 シスターとシステム（前書き）

当麻「俺は、生きる！ 生きて秋沙と添い遂げる！」

って、パロネタを考えましたが、まず書かないのでここだけでってことで。

第二十七話 シスターとシステム

「ケールム
Caelum？」

インデックスは店の前に着くなりそういった。まあ、魔術師ならラテン語ぐらいやるもんな。実際、魔法名はラテン語十重複防止数字3ケタだしさ。そう思いながら、鍵を開け店の建物を見上げているインデックスに中に入るよう促す。

「そう、お客にとって天国でありますようにって意味で付けた名前だ。とりあえず入れよ、店員にも紹介しておくから」

「わかったんだよ、お邪魔します」

そういつて俺に続くようにインデックスは中に入った。中に入ると、10時過ぎということもあり最愛が朝食の洗い物をしていた。

「あ、当麻さんおはようございます。あれ？ 後ろの人は超誰ですか？」

「私はインデックスなんだよ。とうまが匿ってくれるっていうからきたの」

「へえ、私は絹旗最愛です。でも、インデックスって本名じゃないですね？」

「一応、名前なんだよ。でも、私はここ1年ぐらいの記憶しかないから本名はわからないの」

インデックスが俯きながらそういうと最愛は不思議そうな顔をした。だが、暗部にいたこともあって理由ありの人間との付き合い方を知ってたらしく、深く事情を聞こうとはしなかった。まあ、俺も記憶がないなんて初めて聞いたから驚いたけどな。そして俺は、最愛にみんなを地下に呼んでくれるよう頼むとインデックスを連れて地下の基地に向かった。

地下への入り口を見た時もインデックスは驚いていたが、地下の本当の入口にいくと以前ここにきたシステムと超電磁砲組のメンバーらと同じく、信じられないという顔をした。

「ここ本当に地下なの？」

「間違いなく店の地下だぞ。それとここは人間が生活する上で必要なものは、全て作れるようになってる。まあ、食べ物栽培しないといけないけど、電気と水はもちろん空気と疑似太陽光まであるからずっと隠れておく事もできるぞ」

そういうとインデックスはキョロキョロしながら中を進んだ。そして、俺らはメンバーが来るのを待ったためとりあえず指令室で座っていると、4人が部屋に入ってきた。そして最初に入ってきた麦野が口を開く。

「呼ばれたから来たけどなんの用よ？」

「ああ、お前らにこいつを紹介しようと思ってな」

「はじめまして、インデックスっていうんだよ」

「誰って訳よ？ シスターさん？」

「うん、イギリス清教所属のシスターだよ。さいあいは聞いたけど、他の人の名前も教えてほしいかも」

フレンダに言われたことに笑顔で答え、逆にメンバーにも自己紹介を頼むインデックス。麦野たちもインデックスが何者かよくわかっていないようだが、とりあえず自己紹介をすませることにした。

「私は麦野沈利。ここの2階に住んでる店員よ」

「私は滝壺理后、同じくここに住んでる。よろしくね、インデックス」

笑顔で理后が挨拶すると、インデックスも笑顔で「よろしくなんだよ、りこう」といった。そして最後にフレンダが自己紹介する。

「フレンダⅡセイヴェルン。私もここに住んでる店員って訳よ」

「とうま、さいあい、しずり、りこう、フレンダ。うん、みんな覚えてたんだよ」

「…よし、自己紹介が済んだわけだが、言っておくといつは前に言ってた魔術師だ」

みんなにそう説明すると、俺が魔術を信じていないと思っていたインデックスは俺が魔術師を知っていたことにやや驚いた顔をしたが「正確には私には魔力がないから、みんながイメージする魔法は使えないけどね」と補足した。すると、「ふーん」と言ったりアクシヨンを取るメンバーたち。興味がないのか、信じてないのかわからないが。まあ、オカルトとかを真っ向から否定しないだけいいか。

「それでとうま。なんで、インデックスを匿うの？」

「なんでもこいつは魔術結社に追われているらしい。こいつの頭の中にある10万3000冊の魔道書を狙ってな」

「頭の中の魔道書？」

「ああ。こいつは世界中の魔道書、つまり魔術や魔術に関係するものについて書かれ封印指定されてるような本を全て暗記してるんだ。その魔道書にもいろいろ種類があるが、オリジン原典と呼ばれるものになると、それ1冊でも手に入れて書かれていることを使えば、レベル5とだって戦える物も存在するんだぞ」

フレンダに聞かれ答えるとみんなが驚いた顔をする。まあ、1冊の本に書かれていることをできるだけで学園都市最強のやつらと戦えるってんだから、そりゃ驚きもするわな。だが、みんなは俺が考えてるのと違う意味で驚いていたことが次の発言でわかった。

「な、なんでとうまはそんなにこっちの事情を知ってるの？ 家ではあんなに信じてないって顔してたのにおかしいかも」

「なんでって…そんなおかしいか？ 元々、魔術師の知り合いがいたからだし、魔術というものが存在すると知ったら調べて対策を取ろうとするのが普通だろ？」

「それにしても超軽いノリで話しますね」

「まあ、俺は魔神だろうが、幻想殺しがあればぶっ倒せるからな」

そういうとインデックスは再び驚いた顔になり、他の者は「魔神？」と言葉が理解できない様子になる。インデックスはそれを見てみんなに説明を始めた。

「魔神っていうのはね。みんなの知ってる『魔界の神』とか『悪魔の神』つまり邪神的なものじゃなくて、『魔術を極めすぎて、神様の領域にまで足を突っ込んでしまった人間』のことなんだよ」

「なんか、私らの『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』の考え方に似てるわね」

「意味は近いが全くの別物だ。魔術の世界にはそれにあたる言葉として他のモノが存在する。だから、魔神を俺らの知ってる言葉に置き直すなら仙人とかマンガとかの大魔道師って方が近いだろう」

言う度に感心している様子のメンバーたち。そして、俺が説明するたびに「うゝー」と睨んでくるインデックス。なにが不満なんだこいつは…。

「とうまはちょっとおかしいかも、あきらかに知りすぎてるんだよ！ 私たちは魔術というものが存在することを隠したりはしないけど、その中身は隠すの。なのに双方の言葉の意味や互換性まで理解してるなんて普通じゃないんだよっ」

「結局、上条に普通を求めても無駄って訳よ」

「とうまは非常識だからね。インデックスもそのうち慣れるよ」

フレンダと理后がインデックスの言葉に答えるが、最近無理后まで俺をぞんざいに扱うようになってきた気がする。そろそろ、能力に

頼らない戦闘法として体術の基礎を教えようと思ってたし、良い機会だから少しいじめようかなあ……。そう思ったが、話が進まないでインデックスの話に戻る。

「まあ、話は逸れたがインデックスはその頭の中の本を狙われていろんな魔術師に追われてるんだ。だから、ここで匿ってやろうってわけ。その間はここで植物の世話でもしてもらおうかな？」

「そうは言っても、いつまでも匿ってられないでしょ？ 仲間とかに連絡はとれないの？」

「うーん。たぶん、そうすると仲間の組織の人が狙われると思う。この服は“歩く教会”って言うんだけど、どんな攻撃でも傷つかない鉄壁の服なの。でも、それだけ強力なものだから今も探查魔術にひっかかってるんだよ」

「じゃあ、インデックスを狙った敵が超ここに攻めてくるってことじゃないですか！」

インデックスの話から敵に居場所がバレているため、この店は現在進行形で標的になっていることに気付く最愛。だが、この上条さんを舐めてもらっては困る。

「それは今、解除されてる。この中は外からの探查とかが通らないようになってるからな。だから、敵も店で見失ったと焦っているところだろう」

「へえ、そこまで考えてるのね。結局、上条はここを要塞にするつもりって訳？」

「つもりもなにも最初から基地って言うてるだろうが。外からの攻撃を一切通さず、完全に自給自足できるんだぞ。食料が生産できるようになれば、外が減んでも生き残れるぜ」

そう説明すると案の定、メンバーたちに呆れた顔で見られたのでCOREをたちあげる。初春が処理速度も追及してくれたから、つけたりすぐ使えるんだよな。そして、みんながなにをしているのか後ろから見ってくるので、前のスクリーンに映像を映す。すると、スクリーンには店の外が映っていた。

「うわっ、なにこれ！？ 外が映ってるんだよ！」

「インデックスはテレビとか知らないの？」

「テレビ？ 名前しか知らないんだよ。テレビってなに？」

「簡単に言えばいろんな映像を映す機械よ。それで、これは店の外にある隠しカメラでまわりを映してるってとこね」

魔道図書館といわれるのに科学方面の知識には疎いのか、インデックスがテレビについて尋ねると、麦野が答えてやった。前から思ってたけど、麦野ってわりと面倒見いいよな。そんなことを考えながら店のまわりを見ていると、背の高い赤髪の男が映った。キョロキョロしていかにも怪しい。それにまわりにペタペタと紙を貼って近所迷惑だろ。そう思っているとインデックスが口を開いた。

「あっ、私を追ってた魔術師ッ！ きっと、歩く教会の気配がなくなっただけから来たんだ。それに何か貼ってるのは多分、魔術の媒体だとおもう。いざとなったら攻撃してくるつもりなんだよ！」

「あんな紙みたいので攻撃できるの？」

「うん。魔術ってのは歌や動作だけでも意味をつけることで発動できるからね。紙とかに書いて発動するのはメジャーなんだよ」

インデックスの説明に感心しながら、スクリーンに視線を戻す麦野。そして、俺はインデックスの方に視線を向けると彼女は不安そうな顔をしている。ま、ずっと狙われてたらしやうがないか。

「じゃあ、ちょっと行って追っ払ってくるわ。インデックスはここにいろ。他のやつはついてこい、魔術師との戦い方を教えてやる」

「っ!？ 危ないよっ、ああ見えてかなりの使い手なんだよ？ そんな遊び半分で行ったらやられちゃうッ」

「心配すんな、俺に魔術は効かない。この右手はな？ あらゆる異能を消し去ることができるんだ。だから、間違ってお前に触れないように手袋をしたってわけだ」

説明しても信じていないのか、心配そうな顔をやめないインデックス。それなら安心させるためにみんなの力も教えておくか。

「インデックス。ここ学園都市では、能力者はその強さによって0から5までのレベルでランク分けされるんだ。中でもレベル5ってのは一人で軍隊と対等に戦える程の力を持って、この街に7人しか存在しない。そのうちの1人がウチの麦野なんだよ」

そういうと麦野の方を見て驚いた表情をするインデックス。そして、俺はそのまま続ける。

「だから、いくらアイツが強くてこっちの負けは絶対ないんだよ。だから、心配すんな。戻ってきたらお昼作ってやるから、映画気分でスクリーン見て待ってろ」

「……怪我したりしない？」

「ああ。多少は汚れるかもしれないが、コケたくらいの怪我しかしねえよ。だから、安心してみてろ。すぐ、戻ってくる」

「…わかった。約束だよ？　ちゃんと、怪我しないで戻って来てね」

「ああ。んじゃ、あとでな」

そういうと俺たちは指令室を出て上へあがると、下の地下基地の入り口を閉めて店の外へ出た。

第二十七話 シスターとシステム（後書き）

インデックスが登場したことにより、滝壺との書き分けが面倒なことに。いえ、一般のキャラを呼ぶ時は滝壺は苗字、インデックスは名前を平仮名表記で良いんです。しかし、この滝壺は上条さんを名前で呼んでいるのでね：被ると、唯一の違いである「かも」「なんだよ」を滝壺が使わないようにしなくては。

第二十八話 魔術師との戦い方（前書き）

店の近所で戦うことになったため、スプリンクラーは使えません。

第二十八話 魔術師との戦い方

店の外に出る前、戦闘が始まる前に俺から少し離れておけと全員に伝えると俺たちは外に出た。店から出ると少し離れたところでペタペタとルーンを貼り続けている赤毛の魔術師を見つける。

「おい、人の店の近所でなにやってんだよ？」

「うん？ 別にこれと言ってなにもしないけど？ 強いて言うならある物を回収、保護する準備だよ」

「ある物？ なにをだよ。ゴミの回収は正式な業者がやってるから間にあってるぞ。つーことで、店の前から消えてくれ。不審者が現れるなんてウワサがたったら客が来なくなっちまう」

俺がそういうと赤髪の男はペタペタと紙を貼る作業をやめて立ち上がった。つーか、でかいな。2メートルくらいあんじゃないか？ そう思っていると、男は煙草を口から離し煙を吐いてから話し始める。

「白々しいね。あれの身に付けている歩く教会…ああ、服のことなんだが。その反応が消えたのがこの店なんだよ。ってことは、あれを現在所持してるのは君たちなんだろう？ どうやって、反応を消したかはわからないが、そんなことはどうでもいい。あれを返してくれないかい？ ああ、金が欲しいって言うなら少しくらいは払おう。拾ってくれた礼さ」

「あれ？ あれってインデックスのことを言ってるのか？ ……
テメエ、人を物みたいに言いやがって、一体何様だッ！！」

インデックスを物呼ばわりするクソ野郎に怒鳴ると男は気にした様子もなく、ニヤニヤと笑いながら口を開く。

「ステイルⅡマグヌスと名乗りたいが、ここはFortis93
1《我が名が最強である理由をここに証明する》と言っておこうかな」

「ああ？　なんだそりゃ、名乗るなら普通に名乗りやがれ、魔術師ッ」

そういつて俺は、相手に自分はインデックスの話により魔術師の存在は知っているが、詳しくは知らないという風に思わせる。こうすれば大概の魔術師は相手の実力を低く見てくるからな。その分、クソ野郎を殴りやすくなるってもんだけ。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな？　僕達魔術師って生き物は、何でも魔術を使う時には真名を名乗ってはいけないそうさ。古い因習だから僕には理解できないんだけどね。“Fortis”日本語では強者といった意味か。ま、語源はどうだっていい。重要なのはこの名を名乗りあげた事でね、僕達の間では、魔術を使う魔法名というよりも、むしろ――」

男はそこまで言って間を少しあけるとニヤリと笑って続きを言った。

「――殺し名かな？」

「っ!?!」

「炎よ」

ステイルⅡマグヌスと名乗った男はそう言って煙草を投げ捨てるときに、空中に火でラインをひき炎を起してきた。クソッ、戦い方を見せるつったのにいきなり攻撃してくるやつがあるか！そう思い、その炎を蹴り消す。弱い炎なんて散らせば終わりだからな。

「いいか、お前ら。魔術師との戦い方ってのを見せてやる」

「ほう、魔法名も知らない素人が面白いことを言うね。なら、僕にも教えて貰おうじゃないか」

「いいぜ。なら、お前には特別に実戦で教えてやる」

言いながら、両手の拳を構えファイティングポーズをとる。ステイルはまだ油断しているのか、最初の攻撃以降は何もしてこない。たぶん、こっちが動くのを待っているのだろう。ならっ！

「レッスンその1、これは基本だが相手を観察しろ。それにより相手が術主体なのか、体術も使えるかがわかる。まあ、こいつはひよろいから術主体のインテリ野郎ってことだ。だが、体術も使えるヤツは手ごわいからな。気をつけろよ！」

「人に向かってひよろいとは随分失礼じゃないか。なら、そのインテリ野郎の攻撃で死にたまえ！ 巨人に苦痛の贈り物をッ」

そう唱えるとステイルの手には巨大な炎剣が現れ、俺に振り降ろしてきた。インテリだけあって威力はまあまあだな。そんな風に考えながら授業を続ける。

「レッスンその2、インテリの場合は攻撃手段が多い。だが、本人の身体能力が哀しいほどにないので、このようにカウンターを入

れることができるッ」

「なっ！？　ぐはあっ」

相手の炎剣をサイドステップでかわし、剣を振り降ろして隙だらけの顔面に回し蹴りを入れる。男も予想外だったのか、思いつきくらってくれたぜ。まあ、授業が終わってしまうので威力は加減したかな。メンバーの方を見ると、麦野は大笑い、フレンダと最愛はポカーン、理后は…手を振ってきた。

「ぐう、まさかそんな姑息な手を使うとはね。男として正面から戦おうとは思わないのかい？」

「馬鹿たれ、殺し名を名乗ってにおいて姑息もなにもあるか。お前は殺し合いをするやつに、いちいち次は顔狙うとか言ってもらわないと戦えないのか？」

「そんなわけがないだろうッ！」

言いながらステイルは両手に炎剣を出して斬りかかってくる。まあ、避けるのは簡単だが、それでも近くにいれば暑い。なので、一度距離をとる。そのときは必死に後ろに跳んで逃げたと思わせるために、後方にジャンプすると一度しゃがみ、ひそかに石をひろう。だが、相手はそれを隙だと誤認して笑いながら斬ってきた。

「ご苦労さま、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ1000回やったって勝てないってことだよ」

《ザシュン！》

男は斬りかかってきてそれが地面に当たり弾けると、満足そうな顔を浮かべていた。まあ、こんな温度で斬れば焼ける前に溶けるからな。避けたとも思えないタイミングなら、斬った手ごたえもなく地面に当たるのが普通なんだろう。けど、俺は普通にわきに逃げてるんだけどな。そう考えながら、相手のこめかみに石をぶつける。

「痛っ」

「どこみてんだアホ。レッスンその3、ちゃんと殺したか確認するまでは油断するな、と教わらなかったのか？」

「なっ、どうやって逃げたんだ！？　そうか、お前はこの街の空間移動という能力者だな？」

「なに勘違いしてんだ。俺は普通にわきに避けただけだぞ？　お前は剣が大振り過ぎるんだよ」

やれやれというジェスチャーを付けながらいうと、相手は額に青筋を浮かべる。この程度の実力でかなりの使い手とはインデックスも冗談キツイぜ。そう思っていると、相手はなにか呟いている。

「灰は灰に――塵は塵に――吸血殺しの紅十字ッ！」

ステイルが唱えると先ほどとは違う、右手には紅蓮の炎剣、左手には青白く燃える炎剣があらわれ、それを大ハサミのように水平に振ってきた。つか、伸びてくるしっ！？　そう思ったときには辺り一面を強大な炎の爆発が包んだ。

男は大爆発を起こしたあとに何も残っていないのを確認すると、遠くで戦いを見ていた麦野たちの方へ振り返った。

「さて、失礼な男は死んだ。だが、僕は女性に手を上げたくないんだ。黙ってインデックスを引き渡してくれないかな？」

「寝言は寝て言えエセ神父」

「超お断りします」

「やれやれ、この国は女性までこんな風に下品なのかい？」

麦野と最愛がステイルの言う事を拒否すると、頭に手をあて呆れたようにステイルはそういった。

「君らの知り合いの男と同じような目には遭いたくないだろう？なら、そのままインデックスの回収を邪魔しないでくれ。そうすれば君たちに危害はくわえない」

「結局、女の子を物扱いするやつの言う事なんて信じられないって訳よ」

「うん。それにとうまは別にどうもなっていないしね」

「なにを言ってるんだい？あの男は跡形もなく消え去ったじゃないか」

そういつてハハッと笑うステイル。こいつは本当に油断ばっかして

るな。ちゃんと塀の上までみろっての！

「ぐはぁ！」

「レッスンその3で言っただろうが。ちゃんと殺したか確認するまでは油断するな。塀の上までみろよな」

「くっ…人が手加減していれば、調子に乗って。ちょこまかと逃げるな、極東のサルがっ！」

「サルでもいいから本気で来い。こっちは普通に体術しか使っていないぞ？」

塀の上に咄嗟に逃げて隠れたあと、殺したと勘違いしたクソ野郎の背中めがけとび蹴りをくらわしてやった。すると、男は面白いように前に吹き飛んだぜ。そして、文句を言ってきたので挑発すると、男は真剣な表情になり詠唱を始めた。

「――世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの」「レッスンその4、詠唱中に敵を討て！」
っ！？　　「ぐはぁ！」

敵の目の前でのにきに詠唱を始めた馬鹿が、気持ちよく詠唱してる途中に俺は殴りかかった。相手もまさか本気でこいと言った直後に不意打ちしてくると思わなかったのだろう。とても驚いた表情をして俺に殴り飛ばされた。だが、俺は倒れた相手の襟を掴み無理矢理立たせる。

「おらッ、タイマン一対一で詠唱なんて待つわけないだろうが！」

「ひ、ひきょぐはっ！」

「まだ、そんなこと言ってるのか！ 学習しねえ野郎だなッ」

「ガハッ」

無理矢理立たせて得意の膝蹴りを腹にお見舞いすると、まだこのエセ神父は甘いことを言ってきたので殴り地面に転がす。そして、麦野たちに聞えるように説明する。

「魔術ってのは俺らの能力とは違って準備が必要なんだ。だから、魔法陣を描いたり詠唱をしようとしたら全力で妨害しろ。それと、その妨害が間に合わなかったとしても媒介を破壊すれば威力が落ちたり発動が止まったりするからな、よく覚えておけ」

「くっ、素人だと思って油断していたよ。インデックスめ、随分と無関係の人間に入れ知恵したようだね」

「関係ねえよ。俺は最初から魔術についてある程度知ってたからな。こんな科学の街の学生が知ってるとは思わないで、勝手に油断したお前のミスだ。さあ、おしゃべりはこれぐらいにして立てよ。テメエのことをまだまだぶん殴らなきゃいけないからな」

「フッ、やれるもんならやってみろッ。炎よ！」

そういつてステイルは立ち上がりながら俺に向かって炎弾を飛ばしてくる。だが、俺はこいつを能力を使わずぶん殴り続けるって決めたんだ。だから、こんなものはフットワークでかわしてやる！

「どこ狙ってんだ魔術師っ、全然あたらねえぞっと！」

「くう、速さだけはあるじゃないか。だが、こっちもインデックスを他の連中に捕まる前に保護しなければならんだ！ 巨人に苦痛の贈り物をッ」

「ちいッ：だからってあんな女の子を、よってたかって追いかけてまわして恥ずかしくねえのか！ お前の姿を見ただけで震えてたんだぞ！」

「っぐう！！」

ステイルの炎剣をバックステップでかわしてから、急接近し回し蹴りを放つ。相手もそれを腕でガードしてきたがガードごと吹っ飛ばす。だが、相手は吹き飛ばされながら何か言っている。まさかっ！？

「……世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ——それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり——それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり——その名は炎、その役は剣——顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ——殺れ“魔女狩りの王《イノケンティウス》”！！」

「くそっ：吹き飛ばされながら詠唱とは根性あるじゃねえか。だが、こっちにしてみれば最悪な状況ってやつだな」

相手は俺にガードごと吹き飛ばされると詠唱を始め、ついにそれを完了すると、目の前には炎の巨人が現れた。大量にルーンを貼ってるってことはそれを破壊しないかぎり消えないのだろう。さて、能力もなしにどうすっかな。そう思っていると立ち上がったステイルが口を開いた。

「君にどう思われようが関係ない、僕はあの子を連れていくだけだ。そして、それを邪魔するのであれば誰であろうと排除するッ。死ね、能力者！」

「ちくしょう、ペタペタと貼りまくりやがって。なら、自分で燃やしてろ！」

言いながら塀の上へ飛び乗り魔女狩りの王の攻撃を避ける。その余波でルーンを書いていた紙が燃えたが見た目には影響がない。よっぽど大量に貼ったんだろうな…。

「無様に逃げてどうしたんだい？ それと、ルーンはその程度消えたとしても大丈夫な量を用意している。だから安心して諦めてくれ」

「なら、直接お前を狙うだけだ。やれッ、お前たち！」

「なにっ!？」

俺の声に反応して相手はすぐに麦野たちの方を向く。だが、麦野たちは全く動いていないどころか、店の椅子を持ち出して座って観戦していた。ステイルもこれが罠だと気付いて俺の方に向き直るがもう遅い。俺はすでに塀から降りて目の前にきていた。

「つーかまえた。覚悟しろ魔術師、インデックスの痛みを思い知れッ！」

「ぐはあっ!！」

インデックスに恐怖を与えてきたツケを払わせるため、渾身の一撃

を顔面に叩きこむと男は吹き飛びそのまま動かなくなった。せつかく出した魔女狩りの王も、活躍する前に術者が気を失ったため消えていった。

「フウ…さて、この場に存在する数多のルーンよ、消えろ」

言いながら腕を振ると、ステイルの貼ったルーンは全て消え去った。まったく、準備をするのは良いが住民の事も考えろっての。そう思っていると、メンバーらが近付いてきた。

「魔術って初めてみたけど、超能力とは違って面倒なのね。まあ、その分最後の炎のオートマトンみたいな特殊な使い方もできるんじゃないけど」

「そうだな、それとこいつは炎しか使ってなかったが別に電撃や風みみたいに複数の能力を使う事もできる。そこらへんはゲームの世界と同じだな」

「へえ、超便利ですね。なら、私も魔術ってのを使えるようにしたいです」

俺の説明を聞いて魔術に興味を持ち始める最愛。確かに言ってみれば多重能力者デュアルスキルみたいだからな。けど、開発を受けた者では使えないことを説明する。

「いや、この街の能力者は無理だ。魔術ってのは元々、才能ある者に凡人が対抗するために作られたものでな。そのため、開発を受けた能力者が使えば身体に負担がかかり血管が破裂したりするぞ」

説明すると「うう…それは超嫌です」と青い顔をしながら言う最愛。

まあ、便利なものほどちゃんとルールが存在するってことだな。そう思いながら、ステイルを肩に担いで店に向かう。すると、理后が尋ねてきた。

「とうま、その人をどうするの？」

「地下の独房に入れておく。ついでにコイツの所属する魔術結社がどこかとかの情報も引き出したいしな」

「結局、上条が認識すれば早いんじゃないの？ そんなの捕まえておくメリットがないって訳よ」

「いざってときのカードになるかもしれないだろ。使えなきや警備員に連れて行ってもらうから良いんだよ。それより、お前ら椅子を片付けろ」

俺に言われると「はい」と素直に片付けにいくメンバーたち。そして、俺が店に入ろうとしたらフレンドが扉を開けてくれたので頭を撫でてやった。少し顔を赤くしながら嬉しそうにするフレンドを見て、やけに素直だったり気を利かせてくれたりするなあと思った。

：あ、この前の俺が入院したことまだ気にしてんのかな？ そう考えながら地下に行き、ステイルをパンツ一丁にして独房に入れておいた。一応、アレイスターが着てるのよりは普通っぽい手術着みたいなのを置いておいたので目を覚ませば着替えるだろう。

第二十八話 魔術師との戦い方（後書き）

実は上条さん、初めて独房を使えて喜んでいます。

第二十九話 赤毛神父の脅し方（前書き）

一応言っておくと、上条さんは家からずっと右手に手袋つけたままです。なので、インデックスのサービスシーンはありません。ごめんなさい。

第二十九話 赤毛神父の脅し方

追手の魔術師ステイルⅡマグヌスをぶっとばし独房に放り込んだ後、俺たちはインデックスを待たせていた指令室に戻ってきた。スクリーンで外の映像を見ていたがカメラアングルは操作しないと固定されたままなので、インデックスは吸血殺しの紅十字を放たれたとき俺が消えて死んだと思ったそうさ。

「本当に心配したんだよ！」

「悪い悪い。ま、結構余裕で勝てたの見てただろ？ そんなわけで、追手がきても追い払うから安心して今後のことを考えてろよ。衣食住は仕事さえすれば保障してやるからさ」

「んー、わかった。私はなにをすればいいのかな？」

インデックスに聞かれ、そーだなあと考え始める。最初は地下の農業プラントで植物でも育ててもらおうかと思ったが、いつまでもいるわけではないので長期の仕事は任せられない。んじゃ、とりあえず掃除だな。そう思い話しかける。

「じゃあ、朝と夜の2回店の掃除をしてくれ。床の掃き掃除とテーブルの拭き掃除だ。それと3日に1回は椅子も水ぶきしてくれ」

「うん、わかった。最初はやり方とか聞いてもいいかな？」

「ああ、わからなかったら誰にでもきいてくれ。オススメは麦野だぞ、面倒見がいいんだ」

「勝手に人のこと薦めないでよ…。まあ、少しぐらいは教えるけど」

「ありがとうなんだよ、しずり！」

そういうとインデックスは嬉しそうに麦野に抱きついた。抱きつかれた麦野は驚きめんどくさそうにしていたが、無理矢理はがしたりはしなかった。やっぱ、お姉さん系だよな。そう思ったところで時計を見るとお昼の時間なので店にもどることにした。

「んじゃ、良い時間だし昼にしようぜ。今日は誰が作るんだ？」

「ああ、私だわ。いつもどおりパスタで良いでしょ？」

聞かれたみんなも頷くと、「結局、私も手伝うって訳よ」とついていったフレンダと麦野が料理を作ってる間に俺たちもテーブルや食器の準備をして待つ。ついでに、準備しているときに麺を茹でようとしていた麦野にインデックスには2人前用意してやってくれと頼んでおいたのは秘密だ。

「はい、どうぞ」

みんなで席について待っていると、麦野とフレンダがお盆に皿を乗っけてもってきた。全員の前に皿を置くと2人も席につく。すると、インデックスが目キラキラさせているのに気づいたので、すぐに許可を出してやる。

「よし、食べていいぞ」

「いただきますなんだよ！」

そういうと一気に食べ始めるインデックス。その様子をみてメンバーは驚いてキョトンとしていたが、苦笑しながら頷くとみんなも事情を察したのか食べ始めた。今日のメニューはスパゲッティで作ったトマトとナスの入ったボロネーゼ。俺はパスタの中でもスパゲッティのボロネーゼが一番好きなので嬉しい。

「とっても美味しいんだよッ、しずりは良いお嫁さんになるね！」

「わかったから、口にモノ入ってる状態で喋るんじゃないわよ。まったく」

食べながら楽しそうに話すインデックスを、呆れた顔をしながらも笑って見る麦野。それすらも楽しいのかインデックスはさらに笑顔になっている。安心して誰かと食事できるなんて逃亡中はなかったんだろうな…。そう考えていると、その様子をみていた最愛が口を開く。

「なんか、超お母さんと娘って感じですね」

「むぎのとっても似合ってるよ」

「結局、旦那は誰って訳よ？ 私、相手が上条だったら麦野をあげれないんだけど」

「安心しろ、きっと40ぐらいのナイスミドルな英国紳士だ」

俺達がそうやって笑いながら話をしていると、麦野がプルプル震えながら額に青筋を浮かべている。ああ、からかいすぎたかも…。

「よし、一列に並べ。まとめて貫いてやるよ」

「ハハッ、娘の前だからって照れなくて良いんだぞ？」 《ジュッ

≫ あつッ!？」

「すごい、しずりの指からビームが出たんだよ」

「どっちかというとレーザーですよ。まあ、いまのが麦野の能力です。威力は超抑えてますけどね」

最愛に説明され「へえー」と感心しながら麦野の指をペタペタと触るインデックス。つかそれより、腕を焼かれた上条さんの心配しろよ。こいつら本気で俺を敬う気ゼロだろ。そう思っていると、理后が氷入りの水のコップを腕に当ててきた。

「大丈夫とうま？」

「ありがとう、理后。お前だけだよ、俺の心配してくれるのは。みんなより、給料多めにしといてやるからな」

ご飯を食べ終えたので頭を撫でながら言うと、少し顔を赤くしながら理后が尋ねてきた。

「それは別にいいけど、お給料っていくらなの？」

「保険とかは都市側が強制でいれてくるから必要ないし、手取りだと最愛22万・フレンダ10円・理后24万・麦野500円くらいでいいだろ。インデックスも1週間やれば5000円くらいやるからな。頑張れよ」

「なっ!?! 差別しすぎだって訳よ! 内訳の説明を要求しますッ」

「基準が最愛の22万、俺への気遣いで給料アップしたのが理后の24万、お前らは俺を敬う気ゼロだからテキトーにつけた。これで理解できたか?」

そういうと「ムキー!」と怒ってくるフレンド、逆に呆れた表情をする麦野に、お金がもらえると聞いて喜ぶインデックス。こいつら面白いなあ。

「さすがに10円とか500円は超可哀想ですよ」

「馬鹿だな最愛。世間では財布の紐を握ってるやつが一番強いし偉いんだぞ? これは当たり前のことだ」

「うう…10円じゃ生きていけないって訳よ」

「まあ、冗談だ。基本はみんな22万だよ、んで別の仕事とかによつてボーナスに違いが出るって感じた。まあ、インデックス以外は開店してから払うことになるから、初任給はまだ先だな」

食器を片づけながら説明すると、安心した表情をみせるフレンド。やっぱ、リアクションはコイツが一番面白いなあ。年長組と最愛は落ち着いてて面白みに欠けるんだよ。その点、フレンドと黒子は良い反応みせてくれるから、からかい甲斐があるな。そう思いながら食器を流しに置く、そーいや独房にクソ野郎をいれておいたの思ひ出した。

「悪い。俺、赤毛に尋問してくるから片付けしといてくれないか

「？」

「わかったけど、なにすんのよ？」

「ああ、テキトーに口割らせるよ。ついでにインデックスもついてきてくれ」

「わかったんだよ」

みんなにそう言う俺とインデックスは地下の独房へ向かった。

地下の独房に行くと赤毛が手術着を着て、ベッドに腰かけていた。ミネラルウォーターとかは置いていたので、大丈夫そうだな。

「よう、調子はどうだ？」

「ああ、おかげ様で最悪な気分だね。良ければそこを開けてくれないか？　そうすれば、お礼として炎剣で焼き切ってあげるよ」

「見ろインデックス、動物が檻の中で騒いでるぞ。エサやってみるか？」

「え、遠慮するんだよ」

俺が尋ねるとそう言って、首を振るインデックス。檻の中の動物も俺の言葉をきいて喜んでいいのか、額に血管を浮かび上がっている。

まあ、このままでは話が進まないのでも色々聞く事にする。

「んで、お前はどこの魔術結社なんだ？」

「なんで僕がそんなこと言わないといけないんだい？ たとえ拷問されても話す気はないよ」

「ふーん…インデックス、帽子とれ」

そういうと、意味が分からないのか「??」と頭の上にハテナマークを浮かべながらも、言われた通り帽子をとってこっちを見上げてくるインデックス。俺はその頭を撫でてから額に向けデコピンをした。

「いたっ。ちょっと、とうま酷いんだよ。帽子とれってそのためだったの？」

「ゴメンなインデックス。こいつが口を割るまではお前を傷つけないといけないんだよ」

言いながら、もう一度デコピンをする。

「イタッ。本当にやめて欲しいかも、私だって怒るよ!」

「ゴメンな、本当はこんな事したくないんだけど赤毛が話さないっていうから」

「いいなふあら、ふおうをひっふあるのやめてほふいんだよ!（言いながら、頬を引っ張るのやめてほしいんだよ!）」

ムニムニとしたインデックスの頬を横に引っ張ると怒ってくるインデックス。まあ、お返しにと攻撃してきたら歩く教会に蹴りをかまして遠くへやればお互いにダメージなしで済むから構わず続けていると、赤毛がプルプルと震えている。

ああ、やっぱコイツはインデックスが弱点だったか。なんか、「君にどう思われようが関係ない、僕はあの子を連れていくだけだ。そして、それを邪魔するのであれば誰であろうと排除するッ」って言うたときの言い方が気になってたんだよな。そう思い返していると、赤毛が話しかけていた。

「き、君の国では少女にそんなことをするのが普通なのかい？や、やめたまえ、嫌がってるじゃないか」

「いやあ、俺も嫌なんだけどお前が喋らないからさあ。こうやって、服以外のところへダメージ与えてるってわけだ」

「ぐ…やめ…くるし…」

今度はインデックスの首を掴み上に持ち上げる。当然、人を持ち上げるような強い力で首を掴まれ、床から足が離れていては逃れることもできない。首を掴んでる俺の手を必死にはずそうとインデックスもがくが、そんなことで外せるほど弱い力じゃない。さあ、どうでる魔術師？

「や、やめろっ！ その子を殺す気かッ、お前はその子を守っていたんじゃないのか!？」

「お前が情報を吐けばいいだけだ。こっちとしてはコイツが死んだところで、狙われる危険が低くなるだけだからな。少し良心が痛

むぐらいで、大したダメージじゃないんだよ」

「わかった、言うからその子を離せッ！」

「…お利口さん」

床に降ろすと掴んでいた手を離しインデックスを解放してやる。解放されたインデックスは咳き込みながら、掴まれていた喉をおさえ、少し涙目になっている。赤毛への嫌がらせついでとばかりに抱きしめて撫でてやろう。

「ゴメンなインデックス、苦しかったろう？」

「わぷっ…事情はわかったけど、事前に説明が欲しかったかも。本当に苦しかったんだから」

「離れろ、貴様！ その子に触るんじゃない！」

「お前には関係ないだろ？ なあ、インデックス。今日は一緒に寝ような」

「っ！？ くそ、絶対に殺すッ。お前だけは何があっても殺してやるからな！ ありとあらゆる拷問でもって、最後は生きたまま虫どもに食わせてやるっ」

独房の檻に掴まり必死の形相で怒鳴ってくる赤毛の神父ステイルⅡ。マグヌスの様子を見ながら笑っていると、インデックスに呆れた目で見られてしまった。まあ、冗談はこれくらいにして話を進めよう。と、その前に…

「インデックス、上から飲み物もらってきてくれ。俺はブラックのコーヒー。赤毛もなにか飲むか？ インデックスが淹れてくれるぞ」

「ちっ：じゃあ、ミルクティーで」

「はいよ。んじゃ、こいつにはミルクティーを淹れてやってくれ。紅茶の淹れ方は麦野に教えてもらうといいぞ。あとは自分の飲み物と好きにお菓子をもってきていいから」

「わかった、少し待っててね」

言おうと、インデックスはトテトテと走っていった。さて、戻ってくる前に少し話をするか。立っているのも疲れるので、壁から簡易椅子とテーブルを引っ張り出す。やっぱ、こういうギミックがないとな。そう思いながら、独房の方を向いて話しかける。

「単刀直入に訊くが、お前はインデックスと同じ所属の者だな？」

「っ！？ ……どうしてそう思うんだい？」

「あいつはここ1年の記憶しかないって言ってたからな。なら、さっきのインデックスを心配する様子から、記憶を失う前の仲間だと思っただけだ」

「最初からわかってて、あんな真似をしたってわけか：ま、正解だよ。イギリス清教・必要悪の教会の者さ」
ネセサリウス

この程度バレても問題ないといったノリで答えるスタイル。つか、それなら最初から言えっつの。そう思いながら、独房の近くに置い

であるカゴからステイルの服を出し、ポケットを漁る。なにをしているんだ？という目で見てくるが、構わず続け目的のものを発見すると独房の中へ、ライターと煙草の箱を投げ入れる。

「ほれ、灰皿は洗面台のところにある」

「…感謝しとくよ」

そういうとステイルはベッドから立ち上がり、洗面台までいき灰皿を持って再びベッドに座る。そのまま、灰皿を枕元の台に置くとすぐに煙草を取り出し、火をつけ吸い始めた。

「フウ…でも、いいのかい？　僕は煙草があるだけでも魔術を使えるんだよ？」

「この施設は異能の力だろうが隕石の衝突だろうが、効かないし壊れない。試してもいいが、疲れるだけだから止めといった方がいいぞ」

「一般の人間がそんな物を持つてるとは、この街はとんでもないな…」

「お前みたいな変態ストーカーから逃げる人を守るためにどの家庭の地下にも標準装備だ。英国みたいに伝統や街並みを大切するやつらには分からない感覚だろうがな」

そんな風に嘘言って驚く相手の様子を楽しみながら足を組んで座り直すと、俺たちはインデックスが戻ってくるのを待った。

第二十九話 赤毛神父の脅し方（後書き）

この上条さんは原作みたいにインデックスに過保護じゃありません。自分の身を守るためなら、怪我しないように気をつけますが歩く教会に向けて攻撃したりします。

第三十話 ステイルの好み（前書き）

タイトルは内容をあらわすと言いましたが、けっこうテキトーです。

第三十話 ステイルの好み

インデックスを待っていると、遠くからカチャカチャという音が聞えてきた。どうやらインデックスがやっと戻ってきたようだ。音のする方を向くとお盆の上にカップを3つ、ティーポットを1つ、特大のパフェを1つ乗っけている…。

「おまたせなんだよ」

「お前、お茶菓子って意味で言ったのにデザート持ってくるやつがあるか」

「ふえ？　だって、好きなのって持ってこいって言われたって伝えたら、なにが良いか訊かれたんだよ」

言いながらテーブルの上にお盆を置いて、既にコーヒーの注がれているカップを俺に。残り2つのカップにはポットから紅茶を注いで、ミルクを入れ混ぜるインデックス。

「それでオススメを聞いて出されたのがこれなんだよ」

「そうかい、誰だ甘やかしたの…。まあいい、そこの赤毛にも飲み物やれ」

「…はい」

「…ありがとう」

俺に言われてカップをステイルに渡すインデックス。やはり、まだ

追われていたときのことであって、普通に接することはできないみたいだ。対するステイルも少し哀しそうな顔をしながらも、怯えさせないようにゆっくりとカップを受け取った。そして、2人が座るのを待ってから話し始める。

「で、インデックス。お前が来る前に話をきいていたんだが、どうやらコイツはお前のことが好きでストーキングしていたらしい」

「ブフォッ、ゲホッゲホッ。勝手なことを言うな！　いつ僕がそんなことを言ったッ」

インデックスに淹れてもらった紅茶を見て少し笑顔になりながら口をつけた瞬間を狙っていると、案の定ステイルは吹き出した。まったく、好きな子が淹れてくれたんだから気管に入れてでも飲み干せよな。だらしない……と、そう思ったが、抗議してきたステイルにちゃんと答えてやることとする。

「ついさつきじゃないか。オマケにインデックスに抱きついたとき、どんな匂いがしたかも聞いてきたな」

「うー…そういうのは本人に聞かせないで欲しいかも」

「違う、インデックスっ。その男が話を捏造してるんだ！　それに僕が尊敬する女性はエリザベス一世で、好みのタイプは聖女マルタだ」

必死に誤解を解こうとするステイル。だが、インデックスは紅茶のカップに口をつけながら嫌そうな目でステイルを見る。つーか、エリザベス1世と聖女マルタって…

「前者は処女信仰と思えるが、好きなタイプが爬虫類に首輪つけて歩くような女とは変わったやつだなお前……」

「なっ、人を馬鹿にしているのか！ 今の発言を撤回しろ、聖女マルタを変人みたいに言うなっ」

「まあ、安心しろ。インデックスはちゃんと処女だから……今日のうちには」

「っ！？ 離れるインデックス！ その男の近くにいたら犯されるぞッ。ええい、炎よ！ クソッ、忌々しい檻め……早く逃げろ、インデックス！」

急に取り乱して煙草の火を使って、魔術の炎を俺に向けて放つてくるステイル。だが、炎は檻に当たるとそのまま弾けるように消えてしまう。でも、急に取り乱して本当にどうしたんだろうな？ そう思っていると、パフェを食べ始めたインデックスが話しかけてくる。

「とうま遊んでるでしょ……」

「別に。こんなのと遊ぶくらいだったら、フレンダで遊んだ方がよっぽど楽しいぜ」

「フレンダとじゃなく、フレンダでって言ったことにはあえて突っ込まないんだよ」

「あら、寂しい」

軽いノリで答えるとコーヒーに口をつけて、檻を破ろうと必死に頑張るステイルの雄姿をこの目に焼き付ける。いやあ、頑張ってる人

間の姿ってのは素晴らしいね。いかに無駄なことでもさ。そう考えてるうちに、ステイルはバテたのか肩で息をしながらベッドに戻った。それを確認すると真面目な顔になり話を始める。

「でだ、インデックス。こいつはイギリス清教・必要悪の教会の者だそうだ。お前もそうなんだろう？」

「え？ う、うん。なんで分かったの？」

「こいつに聞いたからな。戦ってる時の様子がおかしいから、もしかしたらお前が記憶を失う前の仲間だったんじゃないかと思ったわけさ」

言うのと驚いた表情をするインデックス。だが、こいつが本当に同じ所属の魔術師かどうかは信じれていないみたいだ。ま、それが普通だし賢い生き方だな。無条件に信用するなんてよっぽどのお人好しだぜ。

「まあ、少しの間はいろいろ話をきいて本物かどうか確かめればいいさ。あと、お前にこいつへ食事を運ぶ仕事を言い渡す。一応、なにが食べたいかとか聞いてやれよ。捕虜は丁重に扱わないといけないからな」

「いつ運べばいいの？」

「まあ、日に3回で8時・1時・6時ぐらいで良いんじゃないかな？」

俺がそう答えるとインデックスは「わかった、」と頷いた。まあ、どういった理由で記憶喪失になったのかわからないが、元同僚と敵

でいるのはキツイだろうからな。少しでも誤解を解いて昔の關係に戻れるようにしてやらないと。そう考えながら、再びステイルの服を漁ってケータイを見つけたので独房の中に投げ入れる。

「時間と日付くらい知りたいだろ？ 外との連絡はとれないが、まあそれは我慢しろ。お前の仲間がきたらどうかしてやるから」

「フン、僕の仲間がきたら君なんてすぐにボロ雑巾みたいにされるさ。なんてったって、あいつは聖人だからね」

「成人？ お前も未成年じゃないだろ、なに言ってるんだ」

「そっちの意味じゃないッ、聖なる人で聖人だ。世界に20人とない神の力の一端をその身に宿し、行使できる者のことだよ。それと僕は14歳だ」

ステイルはニヤリと笑いながらそう説明してきた。まあ、俺も本当は聖人について知ってたんだけどな。こいつの言ってる事が本当ならこりゃ面倒だわ。けど…

「勝てない訳じゃないさ、力の一端程度が相手ならな」

「…どういう意味だい？ まさか君も聖人だなんて冗談はよしてくれよ。科学の街にそんなやつが存在する訳ないからね」

「いや、聖人じゃねえよ。けど、力を持っただけの人間になら負けないって話だ」

そういうとステイルは馬鹿にしたように鼻で笑ってきた。俺の言ったことが聖人の実力を知らないモノと思われたんだろう。ま、事実

知らないがな。そんな風に考えているとインデックスも心配そうな顔でこちらをみていた。

「…とうま、もしこの魔術師の「ステイル」マグヌスだ、そう呼んでやれ」え？ う、うん。ステイルの言う事が本当なら、とうまじゃ勝てないよ。たぶん、この都市最強の7人の1人のしずりでも無理だと思う」

「勝手に決め付けるな。俺はどんなやつが相手でも勝てないと思ったことはないし、事実負けしたこともない。そんなことを考えてる暇があれば、どうやって生き残るかを考えてきたからな。お前らはとくに理由もなく大人たちから殺されそうになったことあるか？」

インデックスの言葉にそう返すとインデックスは「え？」と聞き返し、ステイルもなんの話だとかこちらを見ているので話を続ける。

「この街にくる前の話だ、幼稚園を卒園してここに来るまでの間、俺はいろんな人間に殺されそうになった。『近くにいれば不幸になるから』と言われてな。不幸な少年として、疫病神みたいにテレビに撮られたこともあったっけ。まあ、そんな感じで包丁で刺されたり、階段から突き落とされたりいろいろあった」

言いながら自分でも苦笑してしまう。聞いている2人もなんの冗談だと思っっているだろう。魔術という現代でオカルトとして扱われるものに関わってるからこそ、近くにいれば不幸になるなんてあり得ない理由で傷つけられる意味がわからないと。

「俺は生きるために必死だったよ、普通に道を歩くにも警戒してさ。もし、あの曲がり角から武器を持った大人がきたらこう逃げよう、あそこの塀から何か投げられるかもしれないから咄嗟に避けれ

るようにしようってな。両親もそんなオカルトめいたものから守るために、俺をこの科学の街に送ってくれた。だが、その幼少のころの生き方は俺の中にまだある。だから、相手がどんなに強くても諦めないし、決して屈しない。聖人がなんだ、お前らが勝てないっていうならその幻想をぶっ殺してやるよ」

そういつて心配そうにこっちを見ていたインデックスの頭を笑顔で撫でてやる。すると、俺の話をきいて辛そうな表情になっていたが、向こうも俺の表情に気付き「へへっ」と笑い返してきた。

「とうまは強いんだね…」

「馬鹿、不屈に関しては世界最強だぞ」

2人で笑いあっていると、独房の中で煙草の煙を吐きながらステイルが話しかけてきた。

「フウ…イチャつくなら他所でやってほしいが、妙に戦い慣れている理由が少しわかったよ」

「お前の敗因はそれ以前の問題だろ。油断と敵戦力の分析不足、そのせいで咄嗟の対応や逃走ルート確保ってな具合のものが全部抜け落ちてただろうが」

「一般の学生にそんな歴戦の戦士みたいなのがいてたまるか。君が特殊で僕はハズレをひいたってただけだ」

負け惜しみを言うてくるステイル。あくまで今回のことは不運で片付ける気にいるらしい。全部お前の油断からくるものだったの。

「だから、ダメなんだよ。俺と一緒に4人いたろ？ あいつらは学園都市の元・暗部で普通に人だって殺してるんだぞ？ いまは俺に負けて店員やってるけど、この街は学生でもそんなの平気でいるさ」

「なっ!？ 本当か？ どうみたって一般人だぞ？」

「本当だって。ま、ここまで戦力が整ってる店は他にないが、普通に学生もしてる暗部はたくさんいる。だから、この街では小さい子供相手でも外と同じ感覚で接しちゃいけないんだよ」

そう告げるとステイルは「本当になんて街だ…」と疲れた様子で呆けている。ざまあみろ、幼稚園の子どもでも開発うけて能力持つてるようなところが、普通なわけないだろうが。こいつはエージェントのくせに自分の常識にばかり囚われているな。そんなんじゃ風紀委員にも勝てねえよ。

「ま、そんなわけでお前は少し反省してろ。俺たちはもう上に行くからな」

「……せいぜい、牢屋での生活を楽しませてもらうよ」

「そりゃ、好きな子にご飯運んでもらえるもんな」

「なっ!？ 君は僕の言ってた事をきいてたのか!」

「はいはい、んじやなー」

いまだになにか言ってるステイルを放っておいて、俺とインデックスは食器を持ってそのまま上に戻っていった。上に戻ると、インデ

ックスをあいつの食事運搬係にしたこと、あいつがインデックスが記憶を失う前の同僚だったこと、もう1人仲間がいてそいつは聖人という超能力者^{レベル5}でも相手するのがキツイやつだということを伝えた。なので、俺の不在時にきたら急いで地下に隠れるように言っておいた。

第三十話 ステイルの好み（後書き）

ステイルが捕まったため、神裂は1人で活動するはめに。

第三十一話 夕食とお喋り（前書き）

日常の一コマ的な話のときはタイトルに悩みます。

第三十一話 夕食とお喋り

インデックスと出会ってから3日が経った。店の方はインデックスがいることや、魔術師に狙われる危険があるためいまだに開店できずにいる。せっかくの稼ぎ時だけど、事情が事情だししょうがねえよな。そんな風に考えながら今は最愛と一緒に夕食を作っている。

「なんか、2人分増えただけでも超違いますね」

「2人分って言っても実質3人分だからな。インデックスは動かすによくあんだけ食べれるもんだ」

「いえ、今日は当麻さんがくるまでは、下のトレーニングルームのプールで遊んでたんですよ。お昼になったので水着のまま神父に食事運ばせたら超吹き出していました」

笑いながら言ってくる最愛の言葉をきくと、場面が容易に想像できた。あいつ、紳士ぶってるけど耐性無しのムツリだろ絶対。そう考えながらシチューをまぜ続ける。今日の夕食は自家製パンとビーフシチューだ。付け合わせのポテトサラダは最愛が担当してくれている。

「とうまー、まだ焼けないのー？」

「音が鳴るまで待ってろ、どうせならちゃんと焼けたのが食べたいだろ？」

「わかった。なら、食器の準備をしとくんだよ」

言ってコップやパンを入れるバスケットの準備をするインデックス。なぜ、インデックスが焼けるのを待ってるかというと、ヒマならやってみるかとパン作り体験をさせてやったからだ。サポートしながらやったから生地はちゃんとできた。んで、自分で形を作らせてそれが上手く焼けるか気にしてるってとこだな。

「超気にしてますね」

「お前らも最初にケーキ作ったりしてるときは、似たようなもんだったぞ」

「え？ いやいや、さすがにあんな超子供みたいじゃなかったはずです」

「……現実はときに残酷だよな」

インデックスの様子を見て笑っていた最愛にそう告げると、「ムー」と頬を膨らませてしまった。なんで拗ねるんだよ……。そう思っていると最愛が話しかけてくる。

「当麻さんってたまに超優しくないですよ。少しくらい気を遣ってくれてもいいのに」

「俺は基本的に自分にしか優しくないからな。お前らにはおこぼれの愛情しかやらんのだよ」

ハハハッと笑いながらシチューの味見をして完成したと思っていると、最愛が手を止めてこっちを見ていた……。どうしたんだ？

「それって恋人にもですか？」

「んー、それはどうだろうな。できてみないとわからんが」

「私は恋人には超優しくしてもらいたいです」

「なら、そういう相手を見つuckerんだな。俺のような男にひっかかっちゃダメだぞ」

鍋の火を消し最愛の頭を撫でながら言うと、再び「ムー」と拗ねてしまった。思春期の女子の気持ちはよくわからんな。なんて考えながら、焼き上がった音がしたのでオーブンを開けてパンの様子を確かめる。よく焼けていることを確認すると、鉄板をオーブンから取り出しインデックスを呼ぶ。

「インデックスー、焼けたぞー」

「本当！？ みせてー」

「鉄板が熱いから気をつけろよ。ほれ、パンはトングでバスケットに入れる」

言って、インデックスにトングを渡すと目を輝かせながら自分で作ったパンを見ている。初めての経験だったが上手く焼けて「うわぁー」ととても嬉しそうだ。

「ねえねえ、ステイルに焼きたてをあげたいから先に持っていていい？」

「ああ、シチューもできてるからいいぞ。サラダはどうだ？」

「もう少しで超できますから、先に準備しててください」

「はぁーい」

インデックスは言われると小さいバスケットに布をひいてパンを入れ始めた。あれから、この短い間でこいつはスタイルとも普通に話せるようになり、向こうも懐かしいのか穏やかな表情で話している。まあ、同僚なのもなんとなく信じられるようになって、いまでも友達に自分の作った物を見せたいといった感じだろう。

「こっちも超できました。皿に盛り付けたんで、持って行って良いですよ」

「ありがとう！　じゃあ、渡してくるねっ」

言うインデックスはお盆に食器をのせて厨房から出ていった。やれやれ、元仲間とは言え自分を狙っていた者を簡単に信用できるとは才能なのかねえ……。同じ事考えていたのか、最愛もやれやれといった表情でインデックスの出でいった方を見ていた。さて、んじや自分たちの分を用意するかな。

「最愛、あいつらを呼んできてくれ」

「わかりました」

返事をする最愛は他のメンバーを呼びに2階へと向かった。そして、俺は人数分の食事を器に盛り付け始める。少ししてからメンバーが降りて来て食器を運び終わると、インデックスも戻ってきたので俺たちは揃って夕食をとった。

食事を終え、いまはみんなで食後のお茶をしている。だが、インデックスは今日はステイルと一緒にお茶すると言って、ティーポットやお茶菓子を持って地下へ降りていったので不在である。そうしてお茶をしていると麦野が口を開いた。

「元同僚って言うっても、あの子も急に信頼しすぎじゃない？」

「結局、嘘の可能性もあるって訳よ」

フレンドも同じことを思ってたらしく麦野の言葉に同意する。まあ、元暗部の人間でなくともここは疑うよな。だが、意外にも理后がそれに反論した。

「大丈夫だと思うよ。インデックスと接するとき少し哀しそうにしてたけど、ステイルは怖がらせないように気を付けてたから」

「ですね。どんだけ大切にしてんですかってくらい、超気を遣ってました」

理后と同じく食事の運搬について行ったことのある最愛も同じように思ったみたいだ。麦野とフレンドは先の戦闘以外でステイルに会っていないため、話を聞いてもいまいち信じられないようだがな。

「まあ、元同僚って言うより、あれは好きな子に対する接し方だろ。からかったら必死に否定してきたぞ」

「え？　とうまって人の恋愛感情とか気付けたの？」

「質問の意味がわからないが、そういうのには鋭いと自負してるぜ」

理後の質問に答えてフンスと胸を張ると、途端にメンバーらにジト目で見られた。どうしたんだ、と思っているとメンバーらが口を開く。

「超ダウトです」

「冗談キツイって訳よ」

「そんなとうまは、応援できない」

最愛とフрендаだけでなく理後にまで言われ、どういうことか考えてみるがよくわからない。なので、唯一何も言ってこなかった麦野に尋ねてみた。

「なあ、こいつら何の話をしてるんだ？」

「私に聞くんじゃないわよ。…まあ、あんたは恋愛感情に鋭くないって言いたいんでしょ」

「女子に比べると鈍いかもしれないが、男子にしては鋭い方だろ？」

「それはないってだけ言っておいてあげる。あとは自分で考えなさい」

麦野はそういうと紅茶のカップに口を付けた。ふむ…この俺が鈍い

とな。まあ、こいつらでも冗談言うんだな。冗談なんてフрендаし
か言わないから驚いたぜ。そう考えながら、コーヒーを飲み干す。

「ふう…次からはもう少しわかりやすい冗談で頼むぜ」

「ええーなんか、言い始めたってわけよ」

「おいおい、日本語で喋ってくれよ金髪」

「いや、日本語で喋ってるし…。つか、金髪っていうな」

俺がウィットに富んだジョークを返すと、フрендаは即座に突っ込
んできた。しかし、突っ込みに勢いが足りないな。なので、もう少
し続けてみることにする。

「ハハッ、名前で呼べだなんて急に大胆だな」

「はあ……最初に会ったときから、名前で呼んでたのは上条の方
って訳よ」

俺の相手が疲れたのかテーブルに突っ伏しながら溜め息を吐き、呆
れた表情で答えるフренда……ん？最初から名前で？

「ああ、そういうフрендаが名前か。名字で呼んでる感覚だった
ぜ」

「えー…さすがにその事実は聞きたくなかったのよ」

「まあ、こっちが名前で呼んでるのに、お前は名字で呼んでくる
んだからお互い様だろ」

「じゃあ、これからは当麻って呼ぶって訳よ」

「いいぜ、愛情込めて呼んでくれよな」

言いながら正面でテーブルに突っ伏してるフレンドの頭を撫でる。すると、突っ伏してる状態から少し顔をあげて、頬を赤くしながら上目使いでフレンドがこっちを見てきた。

「と、当麻…」

「なんだ、フレンド？」

「う…恥じらってる風に呼んでみたのに、逆に優しく返されるとなんか少し恥ずかしいって訳よ。その優しい顔やめてえ」

その様子を笑って見ながら頭を撫で続けると、フレンドはさらに「うー…」と恥ずかしそうにした。なんか、今日は珍しくフレンドが可愛く思えるぞ。まあ、いつも可愛いのは可愛いんだが、今日は年相応な雰囲気ってやつだな。いいじゃないか、グッジョブ！なんて考えてると、他のメンバーがジト目で見ていることに気付いた…。

「イチャつくなら部屋でやれよ」

「私たちがいること超忘れてましたよね」

「あ、しらい？ここにロリコンがいるから風紀委員を」「まてーい！フレンドは麦野とお前と同じ年だろ！」…でも、とうまはよく年下に見えるって」

ケータイを耳にあて、通報するフリをする理后に思わず突っ込みながら言う、逆に聞き返された。いや、まあ確かに言ってるけど精神年齢の話しであって顔つきとかは年相応に見えてるっつの。心の中で少し疲れながら、それをそのまま伝える。

「それは精神年齢の話しな。普段から顔つきは同い年に見えるし、真面目なときは年相応にしか見えねえよ。逆に最愛は落ち着いた雰囲気だが、まだ顔に幼さが残ってるから中学生としてしか見てないしな」

「へえー。じゃあ、インデックスはどう見てるのよ？」

「あいつは俺らの中間ぐらいだろ？ 14・5歳ってとこだし、御坂や黒子を相手するときと同じノリだ」

そういうとフムフムといった感じに頷くメンバーたち。まあ、俺がどういふ感じで接してるかなんて聞いても別に面白くないだろうけどな。そんな風にしてその後もシステム・超電磁砲組・ミサキチを1人1人をどう見ているか聞かれ、お茶の時間が終わった。沢山質問され俺も疲れたので、地下のインデックスにも帰ることを伝えると俺は店を出た。

第三十一話 夕食とお喋り（後書き）

次回予告…上条さんの着メロ判明

……オリジナル設定ですけどね。

第三十二話 聖人（前書き）

今後は作品としてのメインヒロインを絞っていかうかなって思っています。他の作者さんと被らない方がいいかなあとか思ってみたり。

第三十二話 聖人

「フンフフフーン フフフフフーン フフフフフフフフフーン
」

店からの帰り道、俺はヒマなので歌いながら歩いている。そういや、病院で本を読みながら鼻歌で歌ってたら御坂になんて曲か聞かれたっけ。俺の着メロでもある *fripSide* の『*only my rail gun*』って曲と教えてやったら「ふえっ!？」と顔を赤くして驚いていたが、どうしたんだろうな？

なんて考えながら歩いていると、まわりの様子がおかしいことに気付いた。いくらこの時間っていても夏休みにこんなに静かなのはおかしい。これはまさか…

「人払いの魔術か？」

「よくわかりましたね」

急に声のした方を見ると、そこには長い髪をポニーテールに括り、Tシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、腰のウエスタンベルトには刀を差した変な格好の女が立っていた。向こうは刀に手をかけたまま、こちらに歩いてきて口を開いた。

「神浄の討魔ですか…良い真名です」

「名を褒められたなら、ありがとうって言っとこうか。アンタの名は？」

「神裂^{かんざき} 火織^{かおり}と申します」

俺が名を尋ねると、相手は神裂と名乗った。つーか、真名の話するなら十字教のくせに神を裂いちゃダメだろ……。なんて、考えながら目の前の変な女に話しかける。

「で、人払いまでしてなんか用か？ ナンパだとしたら、生憎、露出狂はお断りなんだが」

「なっ！？ 失礼な、この服装は魔術的意味があるだけで、私の趣味じゃありませんッ」

「神様もそんなエロい格好で、お祈りされちゃたまないよな」

やれやれという風に返すと相手はプルプルと肩を震わせている。なんだ、魔術師ってのはみんな我慢弱いのか？ すぐ挑発に乗ってる気がするんだが。しかし、スタイルに比べると我慢強かったのか相手はグツと堪え話し始めた。

「ふうー…さて、できればもう1つの名を名乗る前に禁書目録の保護をしたいのですが。それと、あなた方が捕えた同僚も返して頂けるとありがたいです」

「…断ると言ったら？」

「仕方ありません」

言うとは神裂はスウ…と緩やかに構えて刀を抜き放ったッ。ワザなのかその斬撃は俺を避けるようにして、周りの物に切り傷を作った。

《ズドンッ》

「わっとなぁ…てめえ、器物損壊だぞ！」

近くに建っていた風力発電の風車にも斬撃が当たっていたのだろう。支柱の中ごろからバツサリと斬られそのまま風車は俺の方に倒れてきた。こいつ実は服のことを言ったの根に持つてるな？そう思いながら言うのと、相手は無視して自分の目的を話してくる。

「もう一度問います。彼女を保護したいのですが」

「また保護か？ 勝手なことやってんじゃ《ザシュンッ》ぐあッ…」

俺が拒否するとすぐにまた斬撃を放ってくる神裂。今度は直接当たってきたため、俺はその斬撃を喰らい後ろに飛ばされてしまう。ちくしょう、普通より長い刀にしたってリーチ長すぎだろっ。それに一回の攻撃で七つの斬撃が飛んでるのが見えたぞ。そう考えながら、立ち上がる。

「ほう、まだ立ち上がりますか」

《ザシュンッ》

再び、俺に向けて斬撃を放ってくる神裂。だが、一振りの刀で七つの斬撃なんて起こせるわけがねえ。だとすれば、異能の力なら俺の幻想殺しで破れる！そう思い斬撃を右手で掴んだ。

「なっ!？」

掴んだ瞬間思わず驚きの声をあげる俺。なぜなら、右手で掴めば破壊できるはずの斬撃を掴むと、逆に俺の右手が斬られたからだ。ク

ソッ、騙されたぜ…。

「痛ッ……お前それ、魔術じゃなかったのか」

言いながら相手を見てそのトリックに気付いた。刀を抜く動作はフエイク、本当は手元で複数のワイヤーを操っていたのだ。そんなものまともに掴んだからそりゃ、手もイカレるぜ。

「あなたとステイルの戦闘は見ていました。能力があるのかは不明でしたが、戦い慣れているので最初から近付かせない方法で攻めさせてもらいました。忠告しておきますが、私の七天七刀は飾りではありませんよ。七閃をくぐり抜けた先には、真説の『唯閃』が待っています」

そう言うのと神裂は、顔の横で再び刀を抜く構えになりながら続ける。

「なにより、私はまだ魔法名を名乗ってすらいません」

「うるせえっ!」

「名乗らせないでください」

俺が相手の言う事を遮るように殴りかかると、神裂は余裕を崩さずにかわして蹴りを放ってくる。だが、俺もそれを単純に喰らうほど馬鹿じゃない、攻撃を喰らう瞬間に相手に手を伸ばし、さらに咄嗟に身体を浮かせる。すると、ある程度のダメージは負うが、ほとんど吹っ飛ぶ方に威力を持っていかせることができるのだ。

「てえ……へへ、腹出していると冷えるぞ?」

「……攻撃されてるときに、人のシャツの結び目をほどくとは器用ですね」

そう言っ、俺にほどこれたシャツを結び直しながら答える神裂。まあ、本当はベルトを掴んだりしても良かったんだが、それだと吹き飛ばないからな。楽なシャツの方にしたってわけだ。

「今度はちゃんと結んどけよ？　その方がほどき甲斐があるからな」

「女性の服を何度も触るのは失礼ですよ？」

「女性というには若すぎるだろっ」

言いながら地面を蹴って接近する。今度は回避しやすいようにステップを浅くしながら走る、相手もその変化に気付いたようだが関係ないとはかりに七閃を放ってきた。

「ぐっ…おらあ！」

「七閃っ」

「なっ！？　うわっ！」

最初の七閃に耐えながら殴りかかると、神裂は至近距離でまた七閃を放ってくる。そんな至近距離の攻撃をかわせる訳もなく俺はモロに攻撃を受け地面に倒されてしまう。予想よりも深い傷を負いその痛みで動けないでいると、ゆっくりと神裂が近付いてきた。

「もう十分でしょう。あなたがインデックスにそこまでする理由

「はいはらずです」

「へっ、最初に服装の話をしてるとき反応の方が似合ってるぜ？
いまのアンタはすぐつまらなそうだ。なんでお前はこんなところで戦ってるんだ？　そんだけの力があるなら、俺を無視して店を襲う事だってできたはずだ。それをしないってことは分かってたんだろ、自分のしてることがおかしいって。記憶のないあいつを追い回して
「私だって！」……」

「……私だってこんなことはしたくないですよ。でも、こうでもない
ないとあの子はこの世界で生きていけないんです」

俺の言葉をきいて辛そうな顔をしながら話す神裂。こいつだって自分らのしてることがおかしいって気付いてる。だが、それはインデックスのためだと言って話を続けてくる。

「私はあの子と同じ『必要悪の教会』ネセサリウスの者です。インデックスは私の同僚にして大切な親友なのです……」

「なら、どうしてそれをさっさと言わない！　それに完全記憶能力を持ってるのに記憶喪失なのもおかしい、あいつに何があったんだッ」

「あの子の記憶は私たちが消しました……この手で」

「なっ!？」

神裂の言ってる事が理解できない。仲間なのに記憶を消しただと？
どうして親友の記憶を消すなんてしたんだ……。そう思っていると、神裂は話しを続けた。

「あの子は完全記憶能力によって10万3000冊の魔道書を覚えていたので、そのことに脳の85%の容量を使っています。そのため、忘れることが出来ないインデックスが普通に暮らしていくには、残りの15%の記憶を毎年消してあげるしかない。……彼女はそのままでは脳がパンクを起し、死んでしまうんですッ」

グツと辛そうな表情をして言い切る神裂。けど、そんなこと納得できる訳がない。

「…その話が本当だとして、期限はいつだ？」

「もって3日かと」

神裂の答えを聞いて確信する。期限が具体的に決まっていることから、インデックスが死ぬとすれば何か仕掛けられているんだと。そもそも脳の情報ってのは思い出と知識じゃ入る場所が違う。それに脳の85%を占めてるだなんてどうしてわかるんだ。機械のメモリじゃないんだぞ？ つーことは、コイツは騙されてるってことだ。

「あなたがどれだけ彼女を想っても、記憶を失えば彼女の目にはこう映るはずです。『10万3000冊の魔道書を狙う敵』あんな目で見られるくらいならいっそ…」

「……最初から敵として憎まれた方がマシってか？ テメェらのくだらねえ都合で勝手なこと言ってんじゃねえっ。何遍忘れても、その度に友達になればいいだろうが！」

そう言った俺の言葉を聞いて神裂の様子が変わる。少し俯くと顔をあげた瞬間に攻撃してきた。

「あなたに何がわかるっていうんですかッ」

言って神裂は鞘で俺を薙ぎ払う。それをかわすとさらに攻撃を繰り出し続ける。

「私がどんな気持ちであの子の記憶を奪って、ステイルがどんな想いであの子を見ていたかつ」

俺は避け続け体勢を崩したところを蹴られて壁にぶつかる。そして神裂はそのまま俺の喉を鞘で突き、壁に押し付けてきた。

「ぐっ…」

「インデックスは返してもらいます」

言いながら鋭い視線を向けてくる神裂。こいつは確かに強え、前に2人が聖人には勝てないって言ってたのも頷ける。けどなあ、騙されてるこいつらのためにも俺は負けられないッ。

「……名乗れ魔術師、ここからは本気で行く。聖人だろうが関係ねえ、お前に勝てないってその幻想をぶっ殺してやるよ」

第三十二話 聖人（後書き）

かなり先の話ですが、自動書記との戦いのあと上条さんの記憶どうしようかな……と悩んだりしてます。言っておきますと、脳を破壊されて「前の脳を創りだし、壊れた脳と交換するぜっ！」はできません。腕や臓器はまだできても、脳はブラックボックス過ぎて無理です。

そんな万能能力なら「世界から悲しみと悪意を消し去ってやる！」とか実行してすぐに話終わりますし。

第三十三話 能力解放（前書き）

『七閃』は『ななせん』と読みます。

第三十三話 能力解放

神裂火織は驚いていた、これだけ痛めつけたにも関わらず目の前の少年の目からは闘志が全く失われていないことに。だが、その驚きはまだ続く。

「……名乗れ魔術師、ここからは本気で行く。聖人だろうが関係ねえ、お前に勝てないってその幻想をぶっ殺してやるよ」

「…その身体でまだ戦う気ですか？」

そう問いかけるも上条は鞘を掴んだまま俯いて動かない。いや、何かを言っている？

「能力解放……ソニックボルト電磁加速、フォーカースト行動予測ッ！！」

「なっ!？」

言った瞬間に上条の身体が薄く発光を始め、神裂は急いで鞘を掴んでいる相手の腕を振り払い距離をとる。どんな能力かはわからないが、先ほどの本気で行くというのははったりではなかったようだ。どんな攻撃をしてきても対処できるよう、注意していると相手は傷口を触りなにかし始めた。

「（…自分の血を顔に？）」

「……さあ、始めようか。だがまずは、名乗ってもらうぞ。後で本気じゃなかったと言われたら困るからな」

「その怪我で相手をするだけでも勝ち目はありません。その上、まだ「うるせえ、さっさと名乗れ」……名乗らせたからには覚悟してください、Salvare000《救われぬ者に救いの手を》！」

神裂は自らの魔法名を名乗ると、すぐに少年に向かって七閃を放つ。そう、あの怪我ではもうこの攻撃を避けることすらできない。ならば、せめて苦しまないようすぐに殺すことにしたのだ。だが、その予想は裏切られる。

「遅い」

「なっ!？」

「まずは右腕ッ」

上条は七閃が当たると思ったときには信じられない加速でそこから離れ、その勢いのまま目の前に迫っていた。それだけでなく、ワイヤーを操る腕を直接狙ってきたので、すぐさま蹴りで迎撃に移る。

「甘いですっ」

「それはお前だろう?」

「っ!？ がっ!！」

迎撃のため蹴りを放つと上条はそれを予測していたのかのように、かわして逆に顎を蹴りあげてきた。聖人である自分を、容易く宙に浮かせるほどの威力に神裂は驚くが相手の攻撃はまだ続く。

「お前にだけは絶対に負けない」

「ぐあっ」

上条は、宙に浮き動けない状態の神裂のベルトを掴みダメージが逃げないようにすると、そのまま渾身の右手を鳩尾に叩きこむ。神裂も攻撃を喰らう直前、咄嗟に力を入れたがまるで効果がなく肺の中の空気をすべて吐き出してしまう。そして、そのまま転がり相手の方を見るとすぐにこちらに迫っていた。

「ぐっ…七閃っ!!」

「もうそんな物、当たらねえよ」

「ちっ、それならば…炎よ!」

向かってくる上条に向けもう一度七閃を放つが、相手の言う通り全てのワイヤーを回避される。ならば、戦法を変え魔術で攻撃する。即興で放った技だが、ステイルの炎剣よりも威力のある炎が上条襲う。

「そっちが飛び道具でこようがこっちには効かねえ、はあああッ!!」

「電撃っ!?　　そうか、あの発光は電気を纏って…ネタが分かればそれまでです。死になさい、科学の街の電撃使い!」

神裂の放った炎が当たると思うと、身体が発光が強くなり電撃で相殺しながら突っ込んでくる上条。だが、それにより上条の能力が電撃使用であると理解し、電気では防げない地の槍を放つ。さらに、

相手が逃げれぬよう周囲を七閃の刃で囲む。そうして、これで決まりだと思っていればワイヤーに異変が起こった。

「なっ!?! 引っ張られるッ」

「それだけじゃねえ、持ってる后感電するぜ!」

「くっ」

そう、貫かれると思っていると上条は宙に浮き両手でワイヤーをひき寄せ始めた。それだけでなく、ワイヤーを伝って電撃を送ってきたのだ。このままでは拙いと思いつくが、神裂はワイヤーから手を離す。攻撃を喰らわぬよう距離をとっていると、神裂は相手のしたことに気付いた。上条は攻撃が来る前に僅かな時間、磁力で宙に逃げそのまま鋼鉄でできたワイヤーをひき寄せたのだ。

「（能力の使い方が上手い、その上体術までも聖痕解放時の私と互角。これではステイルが最初から本気で挑んでも勝ち目はなかったですね）」

「戦闘中に考え事か?」

「っ!?!? はっ!?!」

「甘いつてーの!」

ワイヤーから手を離し、距離をとっていると上条はすぐにその距離を詰めていた。言われてすぐに集中し蹴りを放つと、相手も同じく蹴りを放ってきた。

「ぐあっ（私が押し負けたっ!?!）」

「聖人ってのも大した事ねえな!」

「がっ」

お互いの蹴りがぶつかったとき、神裂は相手が吹き飛ぶと思っていた。だが、実際に押し負け体勢を崩されたのは自分の方だった。そのうえ、相手は体勢を崩した隙を見逃さず続けて蹴りを放ち、神裂の頭部を捉え蹴り飛ばす。神裂は攻撃を受け地面を転がりながらも考えていた。

「（どうみてもただの学生にしか見えない少年が、私と正面からぶつかって押し勝つなんておかしい。電気を纏い動きがよくなっただけとは思えない…まさかっ!?!）」

神裂を蹴り飛ばし、相手の次の動きを認識を使って読み込んでいると、神裂が俺のからくり気付いたようだ。

「最初に血を顔に塗ったのはっ」

「やっと気付いたか。昔の神官は獣の血を顔に塗り紋様を描いたそう。そう、処刑をするときにな。俺はそれを真似ただけだ」

「魔術の素人だと思って油断しました。聖人の弱点である処刑を体現するために、自身を処刑の執行官に見立てるとは」

そう、俺は聖人を相手にすると聞いた時から作戦を考えていた。その1つが顔に描いた紋様。これ自体には何の魔術的意味もないが、それをする事で自身に処刑の執行官というシンボルを打ち込んだのだ。

神裂は聖人として強力な力を受け継ぐ一方で、処刑と刺殺に弱いという神の子の弱点も受け継いでしまっている。そんな弱点を持つて以上、執行官のシンボルを持つ俺の物理攻撃は全て大ダメージで訳だ。それに加え電磁加速ソニックボルトを使ってる俺は聖人並みの反射神経を持ち、認識によって相手の思考を読み続けているから攻撃は全て予測できる。だから、対聖人の白兵戦に関して俺は絶対に負けない。

「さあ、立てよ魔術師。そんなもんじゃねえだろ？」

「その余裕を崩してみせますっ、はあ！！」

俺に言われ神裂はすぐに起き上がると、一気に距離をつめて刀で斬りかかってきた。左から右上へと抜刀術による斬り払い。だが、そんなものはすでに読んでいる。神裂がこっちにくる前に身をかがめ、相手の踏み込みの足に向かって足払いをかける。その蹴りは見事に直撃した。

「ぐっ、それでも！」

「効かねえって言ってるだろ！」

「がっ!？」

俺の足払いの蹴りを喰らってもなんとか耐えた神裂は、そのまま刀の軌道をしゃがんでる俺の方に変えてきた。だが、それもまた認識

で読めていたので、磁力の反発を使った裏拳で刀を弾きながら逆の腕の肘を相手の腹に決める。それを喰らうと神裂はまた後方に飛ばされる。まあ、刀を落とさないだけすごいがな。

「がはっ、はあはあ…本当に何者ですか。攻撃の威力は処刑の効果でも、聖人の動きを凌駕するなんて普通では考えられません」

「テメエの都合で友達を見捨てるような人間に負けるわけねえだろッ」

「くッ」

攻撃を喰らい刀を使って立ち上がった神裂に答えると、言いながら俺は神裂に接近する。

「そりゃ、親友に敵として見られる気持ちなんて、俺にはわかんねえよ。けどな…こんだけの力があって、いろんな人間を救えるっていうのになんで友達を救う事を諦めちゃうんだよ！」

「どんなに助けたいと望んでも、その方法がないんですっ。親友1人救えない…なら、敵と思われてでも彼女の命だけは救おうということの何がいけないんですか！」

俺の拳を避けると蹴りを放ってくる神裂。俺もそれをかわすと今度は刀で追撃してくるので、それを蹴りで逸らしてカウンターで拳を放つ。お互いにすれすれの攻防だが、わずかにでも当てている俺の方が押している。

「いけなくはねえよ。けどな、あいつを助けるためにやれることは全部やったって言えるのかよ！ 魔術だけじゃねえ、科学の力だ

ってなんだって使ってもあいつを助ける方法を探したのか！」

「っ…それは」

「してねえなら、いつちよ前に救うとか言ってるな。お前らは結局自分可愛さにあいつを見捨てたんだよ。そんなやつが優しいあいつに近付くんじゃねえ！」

「があっ!!」

動揺して一瞬の隙をみせた神裂に右の拳を放つとすぐに鞘でガードしてきた。だが、そんな咄嗟のガードで防げるほど軽い一撃ではない。ガードされてもそのまま体重を乗せた拳を振り抜きガードごと殴り飛ばす。攻撃を受けた神裂は咄嗟にガードしただけなので、踏ん張りが効かず殴られた勢いのまま地面を転がった。

「拳が軽すぎるぜ魔術師。…ああ、『Salvare』ても、自分を救ってくれて意味だったのか。なら、その弱さも領ける」

「はあ…はあ…ぐっ、そんなわけっ、ないでしょう。『神からも見捨てられた人達すら救ってみせる』そのための魔法名です」

「…言ってる事とやってる事が違うだろ。インデックスを救う事を諦め、見捨てたのはお前だ。だからお前は黙ってみてろ、俺がこの手で救いがあることを教えてやる」

「…いいでしょう。ならば、その覚悟が偽りでないと証明しなさい。最後に必殺の一撃で終わらせます」

言うど相手はゆっくりと立ち上がり、刀に手を添え抜刀の構えにな

った…っ！？こんなところでそんなもん放ったら街が崩壊するぞ！思考を読んでいたため相手の次の行動がわかった俺はすぐにさっきのワイヤーを集めて、磁力で球状にする。間に合えよ！

「いきます…唯閃ッ！！」

「うおおお！！ 超電磁砲^{レールガン}ッ！！」

本来なら御坂ほどの威力は出せないが、ワイヤーを集めゲーセンのコインよりデカイ弾を作れると、それを全力で神裂に向けて撃った。弾の大きさもあり普段の御坂よりは強い超電磁砲を放つと、すぐに唯閃に向けて幻想殺しを構える。

「ぐうつ…」

「がはっ」

幻想殺しでなんとか受け止められているが、最初の七閃でダメージを負っていた右手は攻撃の勢いをともに受け血を流す。だが、その威力で大きく後ろに移動させられるも数十メートル後方でやっと止まった。右手の感覚がほとんどないが一時的なものだと思い、そのまま歩いて神裂の様子を見に行く。加減無し威力を込めたため音速の3倍どころじゃない速度の弾丸を喰らった神裂はそのまま吹っ飛び気絶していた。まあ、これは能力の攻撃だから聖人としての防御力が働いて無事みたいだな。だが、服が破けて危険な状態になっているため、服をてきとーに出して着せる。

「ふう…なんとか勝てたな。まあ、家に運ぶのもあれだしこいつも独房にいれとくか」

そう決めると、顔を拭いてから転がっている刀を持ち神裂を肩に担いで一緒に店の前まで転移した。

第三十三話 能力解放（後書き）

今回はオリジナル設定が多すぎましたね。説明しておくとは行動予測は能力付加ではなく、元始種子の認識を使い続けてるだけです。人間相手なので寿命は減りません。

それと能力解放と言ってますが、それはノリです。実際は元始種子発動中という期間限定の能力者化といった方が近いかと。元始種子を解いたら幻想殺しが出てくるので、それで能力者化もキャンセルされます。

第三十四話 神裂収容（前書き）

現在、この作品で登場しセリフがあつた女性は登場順に『滝壺・絹旗・麦野・フレンダ・心理定規・御坂・白井・初春・佐天・木山・食蜂（心理掌握）・インデックス・神裂』くらいですかね？

にじファンでそれぞれの単語で検索すると、アイテム勢がかなり少なめでした。とくにヒロインとして扱われてる作品となるともう……。

まあ、この作品もヒロインは上条さんなんですけどね。そのパートナーが誰になるかは未定です。ただ、1人だけ恋人ではないけど重要な立ち位置になるのは決まっています。

第三十四話 神裂収容

「よつと……まだ、起きてっかな？」

神裂との戦いを終え店の前に転移し着地すると、ポケットから鍵を出して玄関の方にまわる。そして、神裂を落とさないよう注意しながら鍵を開けてドアを開けると中に入った。中に入ると0時前ということもあり、家中がシーンとしている。

「んー、静かだし寝てんのかな？ ま、いいか。そのまま地下に行こう」

そうして、靴箱の奥のボタンを押して入口が出るのを待っているとドアを開ける音がして誰かが上から降りてきた。眠そうに目をこすりながら、ペタペタとスリッパの音をさせて降りて来たのはパジャマ姿のフレンドだった。

「インデックス、こんな時間に出て来て……っ！？」 当麻酷い怪我ッ、どうしたのよ！？」

「ああ、魔術師が襲ってきたから戦ったんだ。んで、独房に入れたきたんだけど、起しちまったか？」

どうやらフレンドは地下への入り口を開くため靴箱を移動させた音で、インデックスが起きてきたと思ったみたいだ。別に上に振動が伝わるようにはしてないし、基本的に個人の私室は結構な防音機能があるため聞えないはずなんだけどな。まあ、トイレにでも丁度起きてきたところだったのだろう。そんな風に考えていると、フレンドが慌てた様子で答える。

「そんなことより、治療しないとっ。待ってて、包帯とか持つてくるから」

「それなら地下に持つてきてくれ。先にこいつ入れてくるから」

俺がそう言うのと、フレンドはわかったと言って上へ走っていった。つーか、あいつも焦ると普通の口調になるんだな。そんなことを考えながら俺は神裂を落とさないよう担ぎ直すと、地下の独房を目指して歩いた。

地下に行った際、インデックスを起してはいけないと、個人部屋の前を通らないルートで独房の方へ歩いていると、その音で目が覚めたのか身体を起しながらスタイルが声を出した。

「こんな時間に誰だい？　もう日付がかわっ！？　神裂ッ！！」

「うるせえ、気を失ってるだけだから安心しろ」

同僚がぐったりとして俺に担がれているの見て飛び起きるスタイル。俺は、心配そうにして檻の方まで駆け寄ってきたスタイルにそう言いながら独房の前を通ると、そのまま横の独房の扉にカードを通して開ける。

とりあえず、身体が汚れているのでベッドに寝かせるのは拙いだろうと、床にクッションを出しそこに頭を置いて寝かせた。そして、
ジェリーワーク
フレイムジャグラー
液体粘土と火焰術師を使って身体をキレイにしてやったところで、フ

レンダが走ってやってきた。

「当麻っ、これ包帯とか持ってきた！」

「さんきゅ。でも、先にこいつの着替え頼めるか？ 流石に男の俺が服脱がすのはマズイからさ。下着以外は髪の新も外してこの手術着に着替えさせてくれ」

俺にそう言われると、フレンドは俺が出ていく前にちゃっちゃんと脱がせにかかった。危ないな…相手だって年頃の娘なんだから、同じ女として気を遣ってやれよ。そう思いながらそっちを見ないようにして刀を手に持ち牢から出る。すると、ステイルが話しかけてきた。

「いったいどうやったんだ、神裂になにをしたっ！」

「普通に戦ったんだよ。まあ、結構苦戦したが勝てない程じゃなかったぜ」

「相手は聖人だぞッ、まともにやって勝てるわけがないだろう！」

「聖人っていつでも人間だろ？ つーか、神の子程度で俺に勝てる訳ないだろうが」

言いながら、椅子を引っ張り出し疲れたので腰掛ける。ふう…さすがに血を流してる状態で体術メインでいくのはまずかったな。けど、聖人相手に一番効くのは処刑の体現だったししょうがないか。そう考えている間もステイルはギャーギャー言ってるが、それは1人の行動で黙ることになる。

《ガチャ》

「結局、うるさいって訳よ。それ以上騒ぐなら撃つわよ？ 当麻は怪我してるの、わかったら静かにして」

「っ！？ ……わかった」

フレンドは神裂の着替えをすぐ終わらせると牢屋の鍵を閉め、銃を物体召喚で転送してステイルを黙らせた。ステイルも銃を向けられた恐怖よりも、フレンドの雰囲気により思わず言う事をきく。つか、こええ…なんかフレンドさんの雰囲気がいつもと違うんですけど。そう思っていると、フレンドが俺の服を脱がせてきた。

「お、おい。なにしてんだよ」

「服着てたら包帯巻けないでしょ。まったく、退院したばかりでどうして、こんな怪我するって訳よ」

「まあ、相手の話を聞いてたりしたらな。結局、勘違いしてる大馬鹿野郎ってわかったから、ちゃんと戦って勝ったけど」

「こんな怪我するぐらいなら最初から戦って。心配する方の気持ちもちよつとは考えてよ…」

言いながら身体を拭き消毒をして包帯を巻き始めるフレンド。言われるまで気付かなかったが、こいつらにも心配かけてたんだ。この前の戦いからすぐにこんな怪我してるし、悪いことしちまった。そう考え頭を撫でながら謝る。

「ゴメンな」

「また、こんなことになったら許さないから」

「ははっ、了解」

そう言っただけはフレンダの治療が終わるのを待った。キッチンと消毒もしたし包帯もきれいに巻けているので、このままでもいいと思っただけ「結局、応急処置だからちゃんと明日とかに病院へ連れてくつて訳よ」と言われた。面倒だが心配かけたってのもあり、ここは素直に聞く事にした。まあ、収監も治療も終えたので帰るかなと思っただけフレンダに声をかけられる。

「どこいくつもりって訳よ？」

「どこって、寮に帰るに決まってるだろ」

「はあ？ その怪我で帰すわけないでしょ。今日は泊まっていこうように、わかった？」

「いや、だいじょ「わかった？」…ああ」

大丈夫だと言おうとすると、ズイッと顔を近づけて強い視線を向けてきたフレンダ。これは絶対に帰してくれないなと思い、諦めて泊まることにした……はあ。

「んじゃ、地下の部屋にでも泊まるよ。手当してくれてありがとな、おやすみ」

「馬鹿、怪我人を放っておけるわけないでしょ。上いくわよ」

「上ってどこで寝るんだよ？ もう、理后は寝ちゃってるから予備の布団も借りれないだろ？」

「はあ：なら、私のベッド半分貸すからそこで寝ればいいわ。ただし、変なことしたら身体に穴開けるから」

そういつて先にすたすと進んで行くフレнда。つか、それなら最初から他の場所で：いや、怪我人を目の届く範囲に置いておくのが目的か。なら、理后には悪いが起して布団を借りるというのは：いや、それもダメだ。理后もフレндаみたいに怪我を見れば怒ってくるはず。うーん、でも同じ布団は倫理的にまずいだろう。なんて考えながらフレндаのあとをついて行くといつの間にか部屋の前に来ていた。

「さあ、入って。一応、外に音が聞えたりはしないけど、みんな寝てるから静かにね」

「：なあ、やっぱ年頃の男女が同じ布団はマズイって。俺は大丈夫だから今日は帰るよ」

「なら、私がそっちに泊まるだけって訳よ」

「いや、それじゃあ意味ないっていうかさ」

なんだかなあ、フレндаってもっとおふざけキャラだろ？それなのに幻想御手事件からなんか年相応の落ち着きを持つちゃってるんだよ。そりゃ、前と今ではどっちがいいかと聞かれたら、どっちもフレндаだろ？と答えるので気にしてないが、変に頑固になられると困るんだよな。そう考えているとフレндаがベッドに入っていき口を開く。

「じゃあ、当麻はそっち側ね。本当に変なことしたら怒るから」

「しないって。つか、心配なら他で寝かせ」却下」：はいはい」
言いながら俺はフレンダのベッドに入り隣で寝ることにする。もち
ろん、手を出す気なんてさらさらないが、変に意識してもマズイの
でさっさと意識を手放すことにし「おやすみ」と言って俺は眠りに
ついた。

第三十四話 神裂収容（後書き）

上条・フレンダ「スヤ…スヤ…」

滝壺・絹旗・麦野「……」

第三十五話 一夜明けて（前書き）

上条・フレンダ「キャッキャッ♪」

御坂「……」バチバチッ

食蜂「……」カチャ↑リモコン準備音

禁書「モグモグ」

すみません、とくに意味はないです。

次はデルタフォース2人とアレイスターにでも見せましようかね。

第三十五話 一夜明けて

上条が神裂を倒した次の日の朝……

「あれ？ 洗濯機の音がする。きぬはたでも起きてるのかな？」

平常時なら6時台に起きているが、世間では夏休みという事で7時過ぎという時間に起きた滝壺。着替えを済まし、顔を洗いに行こうと洗面所に向かうと洗濯機を動かしている音が聞えてきた。この時間に起きているのは絹旗ぐらいのため、トレーニングで着ていたものでも洗っているのだろうと考えそのまま向かうと中から声が聞えてくる。

「ほんとにゴメンな」

「別に洗えば済むから気にしてないって訳よ」

「（とうまとフレンダ？）」

ドアに近付くと声の主は上条とフレンダであることがわかった。だが、昨日はお茶した後に帰ったはずの上条がなぜこんな早い時間に来ているのか。そして、なぜフレンダに謝っているのが気になったのでもう少し話を聞く事にする。

「でも、結構シートについちまったぞ？ そういうのって普通に洗剤で洗って落ちるか分かんないし」

「だから、私がいいって言ってるの。それに当麻を泊めると決めた時点で、血が出るのなんてわかってたわよ」

「（泊めた？ それに血って……）」

2人の会話から上条がこの時間にいるのは、フレンダの部屋に泊まったからだということがわかった。だが、なぜ部屋に泊まっただけでシーツに血が？ そう思っていると、近くの部屋のドアが開き絹旗が出てきた。

「あれ？ 滝壺さん、おはようございます。そんなところで超なに
してるんですか？」

「静かに。中にとうまとフレンダがいるの」

「当麻さんとフレンダが？」

滝壺に言われ絹旗も一緒になって洗面所のドアの前に行き聞き耳を立てると、中の2人は洗濯が終わるのを待っているのか話を続ける。

「でも、当麻ってかなり鍛えてるのね。昨日の夜、身体をみたとき驚いたって訳よ」

「まあ、いろいろと厄介事に巻き込まれるんでな。昔から身体は
けっこう鍛えてるんだ」

「だから、寝てる私のことも簡単に持ち上げたりできたのねえ」

雰囲氣的に和やかに話しているが、外で聞いている2人はなんのこ
とだか訳がわからない。そもそも、帰ったはずの上条がフレンダの
部屋に泊まっていた時点でおかしいのだが、それよりも身体をみた
だの、シーツに血がつき朝っぱらから2人で洗っているなど、おか

しい点が多すぎるのだ。そのため、状況を把握しようとするのだが話を聞くと余計に分からなくなっていくという悪循環。そうしていると、今度は上条が口を開いた。

「そうそう、まだ血出てるか？」

「んー、まだ少しだけね。それに少し熱も持ってる感じ」

「そっか。まあ、結構激しく動いたからな」

「あーあ、当麻がもっと考えてたらシート洗わないで済んだのになあー」

「悪い悪い……つか、そもそもお前が俺と一緒に寝ろって言うてきたんだろうが」

少し呆れたような言い方をするもハハッと楽しそうに笑う上条。フレンドも同じように楽しそうに笑っているが、やはり外の2人は真逆の心情である。そして、状況に耐えられなくなった絹旗は、滝壺に焦ったように尋ねる。

「ちょっと、どうして帰ったはずの当麻さんがフレンドのところに泊まって、しかも超一緒に寝たなんてことになってるんですか！」

「わかんない。それにシートに血がついたり、身体をみたって……」

「ええっ!?! それってフレンドだけ大人になっちゃったてことですか? ど、どうするんですか。こんなこと麦野に超バレたら「ん? どうしたのよ、あんたたち」ヒィっ!?!」

滝壺と絹旗がドアの前で静かに話をしていると、珍しく早起した麦野が部屋から出てきて2人に話しかけてきた。だが、絹旗たちにとってはいま一番起きたりしてほしくなかった人物である。

本人は無自覚かもしれないが、上条が他の女と仲良くしていると機嫌が悪くなる麦野。それがもし、フレンダと一線を越えたという話を知ったらどうなるか分からない。これは自分のためにも急いで別の場所へ連れていかなくてはと絹旗は決意する。

「ちょ、超おはようございます。珍しいですね、麦野がこの時間に起きるなんて」

「まあ、ちよつとね。やけにすつきりと目覚めちゃったから、二度寝するのもどうかと思って起きてきたのよ」

「そ、そうですか。じゃあ、朝食の用意をするんで部屋カリビングで待っててください。できたら呼びますから」

「わかった。でも、その前に顔とか洗っちゃうわ」

そういつて麦野は洗面所のドアを開けて中に入ろうとする。だが、中にはまだ上条とフレンダがいるため、そんな場面には遭わせるわけにはいかないと絹旗はそれを阻止する。

「ま、待ってください。先に来ていたのは滝壺さんなので、麦野はそのあとでお願いします」

「はあ？ あんたらドアの前で遊んでただけでしょ。訳わかんない事言ってるじゃないわよ」

「あぁっ、まだダメです!!」

そんな絹旗の必死の制止を無視して麦野がドアを開けると、中には洗濯機からシーツを取り出す上条とフレンダの姿があった。そして、急にドアが開いた事で振り返った2人と、ドアの前にいた者たちの視線が合う。そうして、お互いに数秒の間停止していると麦野が口を開いた。

「……あんたら朝からなにしてんの？」

「なにしてシーツを洗ってたんだよ。俺が汚しちゃったからな」

麦野の質問に答える上条。だが、その答えをきいて新たに生まれた質問を麦野はぶつける。

「なんでフレンダもいるのよ？」

「だって、汚れたのは私のベッドのシーツだもの」

「え？　上条がなんであんたのシーツを汚すのよ？」

「それは昨日、当麻が私の部屋に泊まってベッドで寝たからって訳よ」

その答えを聞いて今度はキョトンとする麦野。先に2人の会話を立ち聞きしていた滝壺と絹旗も、実際に本人らの口で上条がフレンダの部屋に泊まっていたことを聞くと、「あぁ、やっぱり……」と思ってしまう。そして、キョトンとしていた麦野がプルプルと身体を震わせながら、口を開く。

「なにつて血とかいろいろだな」

「え、麦野それはなんか私が誤解されて「オ・シ・オ・キ・か・く・て・い・ね」ええっ!？」

麦野は叫ぶと洗濯機の前に立つ2人に向けてレーザーを放ってきた。咄嗟のことでフレンダが動けないでいるとすぐに上条が動きそれを包帯の巻かれた右手で防いだ。防がれると麦野はすぐに格闘に切り替えて上条に殴りかかる。だが、

麦野の拳が上条に届こうとしたとき、その場に乾いた銃声が響いた。みな驚いて音のする方を見ると真剣な顔をしたフレンドが銃を天井に向けて立っている。まわりに弾痕がないことから空砲だったようだ。そんな風に確認しているとフレンドが口を開いた。

いわれて麦野だけでなく滝壺と絹旗も上条の方を見ると、いままで気付かなかつたが白いシャツだと思つていたのは上半身を覆い尽く

す包帯で。ところどころに血が滲んでいるものだった。そして、麦野の攻撃を防いだ右手も、レーザーで焼かれた包帯の下にどうやったらこうまでなるのかというボロボロになった状態で見えている。

「……顔とか洗ったら、下で説明しなさい」

麦野はそういうと上条の横を通り洗面台で顔を洗い始め、他の者もその様子をみると各々の支度を始めた。

第三十五話 一夜明けて（後書き）

この小説は一応R15タグはついてますが、R18タグはついてません。つまりそういうことです。一夜の間に2人になにがあったのか……そこはみなさんの脳内補完でお願いします。

まあ、最後に麦野が言った通り次回に説明がありますが。

第三十六話 昨夜の顛末（前書き）

朝からなに下品な内容が出る話しをUPしてるんだと思われるかもしれない。しかし、言い訳させてもらうと。自分が執筆してるのは基本的に0時以降です。つまり深夜のテンションなのですよ。

第三十六話 昨夜の顛末

麦野に言われて全員が準備を終えると、とりあえず飲み物だけ用意して全員が席に着いた。いつもなら俺は椅子側で隣には理后や麦野が座るのだが。今回はなぜか俺とフレンドがソファ側、向かいの椅子側に俺らから見て左から麦野・最愛・理后が座っている。みな真剣な表情で誰も口を開かないでいると麦野が口を開いた。

「……で、あんたらヤツたの？」

「「「ブフォッ!!」」」

いきなりすごい事を言われ思わず俺とフレンドと最愛は吹き出す。理后は吹き出しはしなかったものの顔を赤くして恥ずかしそうだ。つか、女の子がヤツたとか言っちゃいけません! そう思い口を開く。

「朝から下品なこと言うな!　つか、そんなことするわけないだろうがっ」

「ふーん。それにしてもフレンドの顔つきが昨日と違うんだけど?」

「え、本当?　私、なんか違う?」

言われてこっちに聞いてくるフレンド。っておい、このタイミングで俺に聞いてきたら本当に一線越えちゃったみたいだろうが。本人はそれに気付いていないようで、顔をペタペタと触っている。そして、他の女性陣は俺を汚い物を見るような侮蔑の視線でみてきた。

「馬鹿、そんなリアクションとったら本当に一線越えたみたいだろうが」

「え!？　ち、違う。私、本当になにもっ」

「はあ…わかったわよ。でも、顔つきが違うってのは本当。なんか幼さが抜けた感じ？」

動揺するフレンダに対し、呆れたようにいう麦野。言われて俺も見ているが違いが分からない。本人も自覚がないようで頭の上にハテナマークを浮かべて首をかしげている。すると、最愛たちが話しかけてきた。

「ああ、なんかわかります。さっき麦野を止めた時も超そうでしたが、どことなく雰囲気が」

「フレンダ、大人になった？」

「ホントに違うってえ。だって私、はじめでは結婚してからって…」

理后に聞かれて恥ずかしそうにゴニョゴニョ言うフレンダ。なんかいま、こいつのことすげえ乙女だなって思ったわ。思わず和みながら頭を撫でていると、対面に座る方達から睨まれたので話を始める。

「あー、誤解のないように言っておくと、シートが汚れたのは俺の血でだ。で、俺が起きた時にフレンダも起きて血がついてる事に気付いて洗ってた。わかったか？」

「わかりましたけど、2人の会話が超紛らわしいんですよ。今朝の行動も含めると誤解してもしようがないと思います」

自分で言いながら恥ずかしそうにする最愛。つーか、最近の中学生はませてんだな。まあ、そういった知識をちゃんと教えてることも取れるんだが。なんて、考えてると麦野が最愛らに尋ねる。

「紛らわしいってどんなこと言ってたのよ？」

「ダイジェストで言うとうまが『血出てるか？』って聞いて、フレンダが『んー、まだ少しだけね。それに少し熱も持ってる感じ』って答えたの。さらに、とうまは『そっか。まあ、結構激しく動いたからな』って笑いながら言うとフレンダも『あーあ、当麻がもつと考えてたらシート洗わないで済んだのになあー』って。それで止めにとうまが『悪い悪い：つーか、そもそもお前が俺と一緒に寝ろって言ってきたんだろが』って。朝からシート洗ってこんな会話したら勘違いしない方がおかしいと思う」

麦野の質問に答えながら理后は俺たちをジト目で見てくる。まあ、言われてみれば……結構、危険な会話かもしれないが、ちゃんと解説しておこうと思う。

「解説させてもらうと、血が出てるかってのは俺の身体の話だ。次、フレンダ」

「はいはい。それで包帯から血が滲んでたから、まだ少し出てるって答えたの。それと、熱ってのは傷のあった場所を包帯越しに触ったって訳よ。はい、次」

「んで、激しく動いたってのは傷ができてから戦闘が本格的に始まったからだ。怪我を無視して体術でやりあったからな」

「結局、その話を聞いてたから。ちゃんと考えて戦ってたら、血も出ないでシャツ汚れなかったのにーって言った訳よ」

「まあ、最後のはそのままの意味だがな。地下の部屋で寝るって言ったのに、怪我人を目の届く場所に置いておくって感じでベッドに連れてかれたんだ」

お互いの言ったことを解説すると、フムフムと納得する最愛。俺が怪我を無視したと言ったら厳しい視線を送ってきた理后。そして、テーブルに肘をつきその手の平に顎を置いて呆れたような目でこっちを見てくる麦野。……最後おかしくないか？そう思っていると、麦野が口を開く。

「なんか、今のあんたたちの掛け合いが仲良さ過ぎて気持ち悪かったわ」

「失礼なことやってんじゃないよ！ お前がきくから理后がダイジェストで言って、それを俺らが解説したんだろうがっ」

「だって、実際に思ったんだからしょうがないでしょ。それに結局、フレンドがあんたをベッドに誘ったのは本当だったじゃない。警備員とか風紀委員に言えばアウトよ」

麦野が言うのと恥ずかしそうに「うー」と唸っているフレンド。まあ、確かにそうだが、意味が違うのにやらしく言う必要はないだろう。最後まで必死に説得しなかった俺も悪かったので、もうこの話は終わらせて昨日の戦闘の話始める。

「さて、昨日の戦闘の話だが相手は前に言ってた聖人だった。そいつはいまステイルの隣の独房に入れてあるが、かなり強かったよ。確かにありゃ人間じゃ勝てないと思ったぜ」

「あんたにそこまで言わせるってどんだけ強いんだよ…」

話を聞いて驚くよりも強さの度合いに呆れる麦野。まあ、その聖人について説明も入れながら話を続ける。

「そもそも、聖人ってのは神の力の一端を宿すことのできる存在なんだ。だから、身体能力がケタ違いだし、魔術もバカスカ撃てる。おまけに俺とは反対で幸運とかの加護みたいなのもついている。だから、まず普通の人間じゃ勝てないんだ」

「へえー。でも、とうまだって神様の力使えて同じじゃないの？」

「まあ、そうなんだが。俺の場合は聖人と違って神様の力しか使えないんだ。だから、この身体はあくまで人間のレベルを超えられないんだよ」

理後の質問に答えるがみんなあまり理解できていないようだ。説明するにはテレズマとかの話しもあるんだが、できるだけ簡単に解説する。

「えーと、聖人も同じように人の身体なんだが、あいつらはテレズマっていう途轍もないエネルギーをその身に宿してるんだ。そのエネルギーによってやつらは身体能力や五感を強化してる。だから、素手で岩を破壊したり、50メートルを2秒かからず走ったりも余裕でできるんだ。まあ、魔術もそのエネルギー量が半端ないから圧

倒的なレベルで使えるってわけだな」

そこまではいいか？と、まわりをみると全員が頷く。聖人について理解できたならと、今度は俺の話に移る。

「んで、俺は神の能力を持ってるだけでエネルギーは持ってないんだ。だから、この身体は普通の人間レベルのままってわけ。ついでに言うと、冥土返しにお墨付きをもらえるくらい俺の身体は凡人そのものらしい。だから、麦野や御坂みたいに常人より優れた運動性能を持ってるやつが俺と同じくらい鍛えてたら簡単に負けるぜ」

「でも、当麻さんって体術でも超強かった印象があるんですが？」

「…ああ、それこそ本当に血を吐くほど鍛えたからな。それがいやらなきや誰も救えないし、自分自身も生きていられなかったんだ」

昔を思い出すように言うと妙にしんみりしてしまう。他のメンバーは俺の過去について知らないだろうから、不思議に思ってるだろうな。思った通り最愛とフレンダは何のことだろうと俺を見てきたし、麦野と理后は…どうやらなんとなく察してたようだ。もしかして、インデックスが話したのか？と、思っているとその本人が現れた。

「み、みんな！ 大変なんだよ、私を追ってたもう1人の魔術師が牢屋に増えて…どうしたのとうまっ!？」

「おはよう、インデックス。怪我のことだったら、昨日の夜に魔術師と戦ったんだ。言ってた通り勝てないなんて幻想ぶっ殺してやったぜ」

「っ!？ どうやって？ 相手は聖人なのに勝てるわけないんだよ！」

慌てるように言いながらトテトテと走ってくるインデックス。少し思ったんだが、こいつはなんで走る音が他の人間と違う擬音になるんだろうな？なんて考えてると、インデックスの問いに理后が答えた。

「私は聖人がどれくらい強いかわからないけど、とうまだったら誰にだって勝てるんだよ？」

「そ、そういうことじゃなくって。普通の人間じゃ「こいつは普通じゃないの」え？」

理后の言葉を信頼から言ってると思ったインデックスはそういう感情論の問題ではないと、反論しようとするが麦野によってそれは遮られた。そして、急に言われたインデックスが聞き返すと麦野が口を開いた。

「あんたの言う普通ってなに？ 私ら日本人にとっては当たり前のことでも、そっちの国だと非常識って思われることってあるわよね？ それと同じで、そもそも一般人にとっては能力者も十分普通じゃないのよ。そして、その能力者にとっても普通じゃない人間も存在するってわけ。聖人ってのがいくら強くても、能力者のカテゴリー内に入ってるようじゃこいつには勝てないのよ」

麦野がテーブルについた手に顎をのせながら楽しそうにそう言った。一応、信頼してくれてるんだろうけど、なんか俺がメチャクチャ非常識な存在って言われてるみたいで複雑な気分だぜ。そして私らって言うけど、フレンダは日本人じゃないがな。そうして思ってる間、

麦野に言われたインデックスは「むー」と言い返せないけど納得できないように手を上下に振ってバタバタと足踏みをしてる。

「まあ、そんな話をしててもしょうがないから、朝食にしよう。今日は増えた方の朝食も作ってやってくれ」

「朝ごはんも食べるとか久しぶりだわ。絹旗、今日の朝食ってなに？」

「今日はこの前買った紅鯡ですよ。本当は起きてきた麦野のお昼にする予定でしたが、朝からでもいいですよね？」

「全然OKよ。滝壺、いつも通りよろしくね♪」

「わかった。急いで作るね」

朝から好物の鯡が食べれると分かって上機嫌な麦野は、和食が得意な理後に料理を頼むとテンション高く自分の部屋にもどっていった。それを見ながら理后と最愛はみんなの朝食の用意にとりかかり、俺とフレンダとインデックスがこの場に残った。

第三十六話 昨夜の顛末（後書き）

上条・フレンダ「アハハッ♪」

青ピ・土御門「……」ブチッ↑堪忍袋の緒が切れた音
アレイスター「フッ…」ゴゴゴゴッ！

→このシリーズ(?)はこれで終わりです。次からは普通に書きま
す。

第三十七話 朝食ができるまで（前書き）

朝食を待つ間のほのぼのとしたひと時です。

第三十七話 朝食ができるまで

朝食ができる間、俺とフレンダとインデックスがこの場に残っているようにすると。先ほどよりは落ち着いたインデックスが話しかけてきた。

「どうまって何者なの？ 前は異能を無効化する右手を持つとしか言っていなかったんだよ」

「知りたいか？ 俺はな……フレンダの嫁だ」

《ゴンッ》 《ガタン》 《ザックン》 《パリーン》

真面目な雰囲気聞いてきたインデックスに小粋なジョークで返すと、フレンダがテーブルに顔をぶつけ、2階の方からなにか音がし、厨房の方から野菜をバツリ切った音と食器が割れる音が聞えた。ついでに言うインデックスも昔のコントのノリでずっとけている。こいつはリアクションが多彩だなあと思っていると、カウンターの奥の入り口から理后が包丁を持ったまま現れた。ああ、野菜を切った音は理后だったのか。そう思っていると、理后が口を開く。

「……ねえ、いまの話って本当？」

「ははっ、単なる「冗談でもいい事と超悪い事があるって知ってますか？ まさか、いまのが冗談だなんていいませんよね？」
…最愛？」

俺が冗談だと言おうとしたら、理后の後ろから現れた最愛によって言葉が遮られる。2人ともやや俯いているため前髪で表情が見えないが、雰囲気のごとく怖い。そう思っていると、上にいたはず

の麦野まで現れた。

「あちゃー、さっき私らになんでもないとか言っておきながら、やっぱお前らそういう関係だったか」

「ち、違うって訳よ。い、いまのは当麻が勝手に「関係ねえよ！
！ カアンケイねエェんだよオオオ！！」ヒィっ！？ と、当麻助
けてッ」

「俺、この戦いが終わったら朝食食うんだ…」

「現実逃避してる場合じゃないって訳よ！ つーか、死亡フラグ
立てんなっ」

「…：僕はね、外国の湖の近くに土地を買って。そこに白い小さな家を建てるんだ。そこでは、大好きな人と一緒に暮らして、毎日釣りをしたり畑で植物を育てるんだよ。季節によっていろんな野菜を育て、春には色とりどりの花を咲かせてね。それから「とうま五月蠅い」はい…」

俺が死ぬ間際に将来の夢を語っていると、それを理後の有無を言わせぬ迫力ある一言で黙らされた。後ろにはガクガクと震えながら俺の背に隠れるフレンダ。そして、向こうには原子崩しを発射寸前の麦野が見えている。ああ、なんであんな冗談言っただらう。そう心の中で悔みながらインデックスに語りかける。

「なあ、インデックス。お前を守れなくてゴメンな」

「っ！？ とうま、諦めちゃダメだよ！」

「じゃあな、インデックス」

「シネエ エえ ええ ええ ええ ええ！」

「とうまつ 歩く教会ガードッ!!」
ええ!?

話してる間にカウンターの奥から麦野が攻撃してきたため、俺はすぐになにか言いかけていたインデックスを俺たちの前に引き寄せ盾にした。盾にされ背中に原子崩しのレーザーを受け続けているインデックスは状況が理解できないようだ。

まあ、説明するなら「お前を守れなくてゴメンな（盾にさせてもらうよ）」ってことだったんだ。いやあ、怪我してるから幻想殺しを使うのがキツくてな。包帯を巻き直して、さらにインデックスが起きてきた時点でポケットから手袋を出し着けておいてよかったぜ。なんて考えていると、フレンドがフウ…と言ってから話し始めた。

「フウ：インデックスがいて良かったって訳よ」

「…普通、女の子を盾にするかなあ？
痛くないけど、背中側からぐいぐい押されてる感はあるんだよ？」

「弱きを助けろってのが主の教えだろ？」

「それはそうだけど、この場合はとうまの自業自得かも」

ジト目をしながら俺にそういうインデックス。いや、そういうけどな。俺は冗談を言っただけなんだぜ？それが殺されそうになるってどういうことだよ。きっと街中の人は、俺じゃなくおかしいのは向こうだって言うはずだ。そうしてると、安全が確保されたため余裕

の出てきたフレンダが話しかけてきた。

「はあ…当麻が悪いのよ？　ただでさえ、みんなから一線を越えたって誤解されてたのに、あんな冗談言って。巻き込まれた私はいい迷惑って訳よ」

「とととうまっ、それは一体どういう事かなっ？　そんな人たちはシスターとして守ることはできないんだよ！」

「…あいつらが想像力豊かってだけだ。っーか、麦野も頑張るな。何分くらい経った？」

「わかんないけど、2分くらいは撃ち続けてるって訳よ」

「よし。フレンダ、閃光弾投げろ」

俺が指示を出すと面倒そうにしながらもフレンダは閃光弾を物体召喚し、レーザーの射線とは別のところに投げた。直後にシュパッ！と音がし、強い閃光が店内を染める。さすがにそんなのを喰らっては麦野も攻撃を続けることはできず、レーザーが止まった。

「麦野ー、冷静になったかあ？」

「…一応ね。あんたの冗談は質が悪いわ」

「嫁って言った時点で突っ込みいれるなら分かるけど、攻撃されるのはおかしいだろ。それにお前よく2階で聞えたな」

「…だって、超能力者だし^{レベル5}」

「いや、超関係ないです。まあ、当麻さんもこんな冗談やめてくださいね。滝壺さんも包丁持って危ないですし」

麦野のよくわからない理屈に的確に突っ込む最愛。自分もさっきまで暗黒面に堕ちてたくせに、急に冷静になりやがって。まあ、落ち着いたなら良かったけどな。そう思っていると、理后が厨房に戻りながら何か言い残していく。

「…フренда。私、負けないから」

「え？ ええっ！？ 違っ、私は別にッ」

なんかの勝負の話だろうが、理后の言葉を聞いて驚いているフренда。なんかよく分からないが、まあ、トラブルにならないように言うておくか。

「お前らなんか勝負してたのか？ あんま、ケンカになるようなのはやめとけよ」

「とうま、それ本気で言ってるの？ りこうたちも苦労してるんだね……」

「なんか私、とぼっちりばかりだって訳よ」

そういつて落ち込みながらテーブルに突っ伏すフренда。もしかして、もともとフрендаはその勝負に参加してなかったのか？ インデックスの話の意味は分からないが、フрендаの話しのうにそうなんだろうと予想する。そうすると今度は、インデックスがテーブルをまわってフрендаの元へ行き背中をポンポンと叩き励ましている。

「まあ、悩みは聞くからいつでも相談するといいんだよ」

「ありがとうインデックス。そして、謝れ当麻」

「シーツのことか？ ホント、悪かったよ」

「：インデックス。私、いまなら当麻を撃っても神様が許してくれる気がするの」

「許してくれると思うけど、今度はりこうとしずりがやってくるんだよ。だから、オススメはしないかも」

インデックスがそういうとフレンダはさらに落ち込んで、テーブルにぐでーっとなった。行儀が悪いと思ったが、まあ朝食ができるまではいいかと放っておくことにして料理の完成を待った。それから少しして準備ができると、インデックスに地下の2人に朝食を届けさせてから、みんなで朝食を食べた。

第三十七話 朝食ができるまで（後書き）

『フレンダ強制参戦ッ』って感じですね。

第三十八話 騙されていた魔術師たち（前書き）

1話を約3000文字から5000文字程度にするようにしています。そのせいで、よく中途半端なところで話が途切れます。なので本当は半分ぐらいの話数で済むはずなんです。が、それを変えると極端に長い話と短い話って差ができるので変える予定はありません。

第三十八話 騙されていた魔術師たち

みんなで朝食を食べて、食器を洗い終わると全員で地下にきた。インデックスを追っていた魔術師であるステイルⅡマグヌスと神裂火織と話をするためだ。あいつらは教会の上のやつらに騙されていたことがわかったからな。一度、COREでインターネットから人間の記憶についての説明の検索し、それを印刷すると独房のところまでやってきた。

「神裂、怪我の方は大丈夫か？」

「ええ、回復魔術も使って治療したので問題ありません」

「悪かったな。いくら焦ってたとは言え、人に向かって全力で超イルガン電磁砲を撃つのはまずかったよ」

「こちらこそ力を抑える余裕がなかったにしろ、街中で唯閃を放ってしまい申し訳ありませんでした。街はどうなりましたか？」

「街は無事だよ。俺が打ち消しておいたからな」

心配そうに尋ねてくる神裂に笑って答えると、ホッとしたのか相手も笑顔になった。まあ、他のメンバーとインデックスはその話を聞いても「唯閃？」とか「超電磁砲？」と言っているが、構わず続ける。……と、思ったが赤毛が話しかけてきた。

「神裂、君は一般人を相手に唯閃を放ったのか？」

「ええ。恥ずかしい話ですが、こちらも一切手加減していただける

状況ではありませんでしたから」

冷静に答える神裂に、「あれは一对一の戦闘で使用するようなものじゃないだろう……」と呆れているステイル。まあ、抜刀術ではあるけど一面を更地にできるような技だったしな。ステイルの言ってる事も理解できる。だが、それに対し神裂が反論した。

「貴方もマジメに戦ってる上条当麻を相手にすればわかりますよ。間違いなく一般人のカテゴリーには入りませんから」

「確かに戦い慣れているが、体術程度ならその辺の軍人と大差ないレベルだろう？　どうして負けたんだ？」

「だから、それがまず勘違いなのです。彼は聖痕を解放している私の動きについてくるどころか、凌駕してきましたよ。そのどころが一般人ですか、それならこの世に聖人なんて存在していません」

それを聞いて再び驚くステイル。こいつらには俺らがいないときに勝手に情報のやりとりをしてはいけないと言っておいた。カメラもあるし、マイクで音が拾えるからあとでこちらの情報について会話していたことがわかれば、インデックスの安全は保証しないと言っ
てな。

まあ、実際はこういうリアクションが見たくて言っただけでカメラもマイクもない。いやあ、やっぱ言っておいてよかったぜ。ステイルの驚きっぷりがすごく笑える。そう思っていると、神裂が話しかけてきた。

「あの、最後に貴方は超電磁砲という技を使っていましたか、貴方が学園都市の序列3位の超電磁砲だったのですか？　事前の情報

では超電磁砲は女性とのことでしたが」

「ああ、ありゃ超電磁砲って技を使っただけだ。第3位は友達だが、ちゃんと女の子だぞ」

「そうでしたか。ちなみに貴方の序列は？　あの強さなら相当上のはずですが」

「んー、ハッキリ言うレベル0の中でもぶっちぎりで最下位クラスだ。だから、230万人中230万位って言ってもおかしくないんだが」

言った瞬間にまさかと言った表情で驚く魔術師3人：って、なんでインデックスまで驚いてるんだ？まあ、確かにそんな人間に勝てるほどこいつらは甘くないしな。けど、“公式”の結果で言えばそれが現実だ。こいつらは学園都市最弱の俺に負けたということになる。

「馬鹿も休み休み言え。そんな人間が聖人に勝てるわけがないだろうッ」

「当麻さんの言ってる事は超本当ですよ。私たちの中で当麻さんだけ、公式では無能力者ですから」

「しかしっ……公式？」

「あんたたちは学園都市を甘く見過ぎてたってことよ。おめでとう、230万分の1の災凶に当たって」

聞き返す神裂にそういつて笑顔で答える麦野。こいつ、こういう言い回しとか好きだよな。圧倒的な優位とか好きだし、完敗して尚且

つ状況が理解できてない相手ってのがお気に召したのかねえ？そう考えているとフレンダが話しかけてきた。

「それはいいけど、先に目的を済ませた方が良いいって訳よ」

「ああ、そうだな。んじゃ、これだと話しづらいからお前らの牢屋の仕切りを檻に変えるぞ」

そういつて俺は2人の入っている牢屋の間の壁にあるボタンを押して、牢屋内の仕切りの壁を檻状態にする。こうして顔が見えた方が牢屋内同士でも話しやすいと思うからな。そして、俺たちは牢屋前の通路の壁から簡易椅子を引っ張り出して座る。並びは牢屋の方を向いてる状態で『最愛・フレンダ・理后・俺・麦野・インデックス』だ。さて、なにから話すかな…。

「あー、こっちの話を始める前にお前らの話から始めてくれ。インデックスを保護してどうするつもりだったか。そして、その処置をしなければならぬ理由も合わせてな」

「……はい。私たちはインデックスと同じイギリス清教“必要悪^{ネセサ}の教会”の人間です。インデックスを追っていたのは保護も勿論ありませんが、貴女にある処置をしなければならなかったからです」

俺に言われて静かに話し始めた神裂。インデックスも自分がなぜ追われていたのかを知るために、真剣な表情で聞いている。そして、神裂の言葉に理后が聞き返す。

「ある処置って？」

「記憶の消去だよ。僕達は君を保護したあと、魔術によって記憶

……いや、思い出と言った方が正しいかな？ それを消すつもりだったんだ」

「じゃあ、私がこの1年の記憶しかないのってッ」

「はい、私たちがこの手で記憶を消したからです」

インデックスの言葉にグツと拳を握りしめながら答える神裂。隣ではステイルもやや俯きながら煙草を吸っている。2人の様子をみてからインデックスは静かに尋ねた。

「……どうして私の記憶を消したの？」

「君を死なせないためさ。君は10万3000冊の本の内容を覚えていて。それによって脳の85%の容量を使ってしまったっているんだ。だから、完全記憶能力を持っているため忘れることができない君の記憶を僕達で消して、脳がパンクしないようにしてたんだよ」

「その周期は約1年。前回消したときから考えると、いつ体調を崩してもおかしくないのです。私たちは貴女を死なせたくないんです。ですから……」

神裂たちの話をきいて辛そうにするインデックス。同じようにそれを告げた本人たちも辛そうだ。まあ、死なせないためとは言え、友達の記憶を消すなんてキツくないわけないもんな。そうやってそいつらの気持ちを考えながら見ていると、対照的にシステムのメンバーたちは何の話だという表情をしている。まあ、当然だわな。そう思っていると、最愛がまず口を開いた。

「あのー、それ超本気で言ってるんですか？」

「こんなこと冗談で言える訳ないだろうッ!! わかったなら早くここから出して、処置をさせてくれ。苦しみ出す前にやらないとっ」

「いや、真剣に言ってる所悪いけど。結局、ありえないって訳よ」

最愛に聞かれて声を荒げてきたスタイルに対し、冷静に返すフレンド。今度は言われた向こうが何の話だという表情になっている。つか、向こうは脳医学だけでなく記憶の種類とかっていうモノについても学ばないのか? そう思っていると、神裂が聞き返してきた。

「あの、話が見えないのですが、どういう意味ですか?」

「ツツコミ所が多すぎるから、簡単などこから言うと。例えば、10万3000冊の本を丸暗記してたとしても、それで記憶を消さなきゃ生きられないなんてありえないのよ」

「そ、そんな馬鹿なっ。実際にインデックスはいままで苦しんできましたんですよ?」

「記憶っていうのは簡単に言うと、知識と思い出に分けられるの。それぞれで記憶の保存場所は違ってるから、いくら知識を詰め込んだところで脳全体の85%を占めるなんてあり得ないんだよ?」

麦野の言葉が信じられず、過去に見たインデックスの様子を話してくる神裂。だが、今度は理后が記憶というものについて説明すると、途端に言葉を失うスタイルと神裂。そこで俺は印刷してきた、記憶の種類について書かれた物と脳の記憶分野について書かれた物を2

人に渡すと2人は読み始め「……そんな馬鹿な」としきりに驚いている。2人は読み終わるまで待っていると、手元の紙を見ながらステイルが尋ねてきた。

「……ここに書いてある事は本当なのか？」

「いろんなことを調べて、一番基本的なことをおさえてると思っただやつを印刷してきた。専門知識が無くても、わかりやすいようにってな。だから、それは全部本当のことだ」

「くっ……なら、どうしてインデックスは苦しんでいたんだッ」

「魔術で首輪でも付けておいたんじゃないんですか？ いざってときに処分できるように。組織には超よくあることですよ」

最愛に言われて2人もその可能性を容易に想像できたのか、なにも言えないでいる。そりゃ、そんなもののために、自分たちの大切な人の記憶を奪い続けてたんだからなにも言えないわな。

「まったく無知は罪ってのは本当だよ。お前らが最後まで諦めずに調べていれば、インデックスは記憶を奪われずに済んだものを」

「と、とうま言い過ぎだよ。この2人だって私のために「いや、彼の言う通りだ」え？」

「ははっ、なにが君を守るだ。僕は君を傷つけていただけじゃないかッ!!」

ステイルはそういつて《ダンッ!》と強く地面を殴った。神裂も同じ気持ちなのだろう、強く握りしめた拳から血が垂れている。確か

に途中で諦め、ならば命だけは助けようと覚悟したのはある意味こいつらの強さだ。しかし、そんな間違った覚悟をさせるに至ったのはイギリス清教のやつらが仕組んだことなのだろう。目の前で弱っていく大切な人を見せられれば、焦って考えの幅も狭まる。教会側も汚えこと考えやがるぜ……。

第三十八話 騙されていた魔術師たち（後書き）

少し進んではすぐとまる

第三十九話 呪印発見（前書き）

この作品には「はじめようぜ、魔術師！」はありません。

第三十九話 呪印発見

自分たちのしてきたことが間違いだったことを知り、俯いている魔術師2人を見ていると。神裂が顔をあげて話しかけてきた。

「……あの、こんなことを頼むのは虫のいい話ですが。私にもインデックスの首輪を探すことや消すことを手伝わせてもらえませんか？」

「僕からも頼む。魔術による首輪というからには呪印の類だろう。呪印やルーンならば僕の専門だ、頼む手伝わせてくれっ」

「断る。神裂には戦ったときに言ったが、お前らは自分が傷つく事を恐れてインデックスを見捨てたんだ。そんなやつらにコイツを救う事なんてできないし、なによりさせない」

戦闘時にすでに言っていた神裂はやはりダメかという悔しそうな表情をして押し黙るが、ステイルは逆に俺の言葉を聞いて声を荒げてきた。

「くっ……しかし、君たちは魔術に対し全くの素人だっ。そんな君たち何ができる！ 口ではそうやって言っても何もできないだ」「ステイル、その考えは間違っています」…なに？」

「他の方とはかく、上条当麻は魔術に対しそれなりの知識を持っています。その証拠に彼は私との戦闘で聖人の弱点をついてきましたから」

「そんなのはインデックスに聞い「私は教えてないよ」…本当か

い？」

「うん、神に誓って言える。とうまは私たちの世界についてかなり知ってるし、言葉自体の意味も深く理解してるよ」

そういつて、ステイルの問いに真剣な表情で答えるインデックス。流石のステイルも、そこまで言ったインデックスの言葉を疑う事はできず口をつぐんだ。そして場が静かになったところで神裂が再び口を開いた。

「それで、どうやってインデックスに刻まれた呪印を見つけるんですか？ 私たちならある程度は探査魔術で調べることもできますが、電撃使いである貴方では魔術を使う事は勿論、調べることに適しているとも思えないのですが。他の方がそのような能力を持っているのですか？」

「ん？ ああ」

落ち着いた雰囲気だが、心配そうな表情の神裂がそう尋ねてきたので俺が答えようとすると、隣に座っていた理后が急に話しかけてきた。

「どうまってみさかと同じ能力ばかり使ってるけど、お揃いが好きなの？」

「は？ 急になに言ってるんだ。っーか、お揃いって何の事だよ？」

「だって、幻想猛獣のときも使ってたし、最初に私たちと戦ったときも使ってたもん。それで今回もこの人と戦うときに超電磁砲とか使ったんでしょ？」

「……いや、別に誰かとお揃いで能力選んだりしねえよ。そんなこと言ったら、よく使ってる認識は操祈とお揃いだし、同じくらい使ってる転移は黒子とフレンド：は際どいが系統的にはお揃いって言えるぜ？」

俺がそういうとゆっくりと振り返りフレンドの方を見る理后。急に名前を言われ尚且つジッと見られているフレンドは、緊張した様子で身構えチラチラとこちらを見てくる。なんだ？自分に話を振るなってか？まあ、話が進まないで俺がよく御坂と同じ能力を使う理由を説明してやるか。

「一応、言っておくとな、電撃を多用するのは単純に使い勝手が良いからだ。速さと応用力が他の能力に比べてかなり高いからな。まあ、それは序列みたらわかりやすいだろう？」

「うん、むぎの上」

「滝壺。あんた、もう少し言葉選びなさいよ…」

「そんなことはどうでもいいが《バシッ》痛ッ…ちくしょう。まあ、そういった理由でよく電撃を使ってるってわけだ。その分、俺じゃ使えない能力を持ってるお前は頼りにしてるんだぜ？　こんな説明だが、わかったか？」

言いながら頭を撫でると理后は少し嬉しそうにしながら、「うん」と言って頷いた。そして、急に叩いてきた麦野への復讐として、あいつが寝るときに抱いているぬいぐるみを後で吊るしてやろう心に決める。そんなことを考えながら、置いてきぼりを喰らっている魔術師2人に向き直り話を再開する。

「で、呪印の見つけ方だったな？」

「はい。できなければ、そこだけこちらでやりますが」

「いや、大丈夫だ。インデックスここにこい」

呼ぶとインデックスは椅子から立ち上がり、麦野の前を通過して俺の正面に立った。さて、認識を使うんだが……歩く教会ってそういうの阻害したりしないよな？まあ、こっちは神の力なんだし大丈夫だと思うが、念のため言っておくか。

「よし、それじゃあインデックス。念のため脱げ《グシャっ》ぎゃー！？」

「ふざけてんのか、テメェ」

「とうまって本当に子供が好きなの？ 私、そんなとうまは応援できない」

「滝壺、それって間接的に私のことも馬鹿にしてるってわけよね？」

「いや、でもインデックスとフレндаだと、胸はインデックスの方が超微妙にマシな気がします」

俺が調べるために脱げと言った瞬間、両サイドから拳が飛んできた。麦野は普段からよく攻撃してくるためまだわかるが、理后が殴ってくるのは予想外だったぜ。つか、最愛はフレндаがいじけるようなこと言うなよ。フレндаだって立派に年頃の女の子なんだぜ？望

みは薄いが、まだまだ今後の成長が見込めるはずだったの。と、まあ攻撃で痛みながらもそんなことを考えていると、魔術師2人もなにやら慌てている。

「逃げろインデックス。そいつは治療と称してやらしいことをしてくるぞっ」

「ま、まさか私の着替えも貴方がっ!？」

「急に脱げは流石にデリカシー以前の問題かも…」

くそ、魔術師共も好き勝手言いやがる。こいつら地中深くに一回転移させてみようかな？本気でそんな考えが頭をよぎりながら顔面に喰らったダメージから復活すると、誤解を解くため口を開く。

「冗談言ってるじゃねえよっ。こっちは調べるときに歩く教会の力が邪魔になるかもって思ってたただけだ。断じて、下心などない!」

「じゃあ、超質問です。インデックスとその牢屋の女性ではどっちが良いですか？」

「……いや、露出狂は流石の俺も「うるっせえんだよ、ド素人が!!」ええー…いまの俺がキレられるとこか？」

最愛に質問され素直に答えると、神裂が急にキレてきた。てか、こいつキレると口悪いな。麦野もだが、歳のわりに大人びてると口が悪くなりやすいのかな？なんて考えながら、立ってこっちをジト目で見ているインデックスの帽子を脱がせ、頭に手を置く。よし、認識開始。

「対象を認識、存在を把握……」

「とうま何言ってるの？」

「結局、いまは静かになって訳よ」

俺が何をしているのか分からないインデックスは尋ねてくるが、現在集中してインデックスの存在を知覚している俺は答えられない。それがわかったのか、フレンダが代わりに答えてくれた。そのことに心の中で感謝しつつインデックスの中まで意識を送る。すると、途中で黒ずんだデカイ塊みたいな存在を見つけた。これってもしかして…

「この黒いのって、もしかして魔道書か？」

「っ！？ ダメとうまつ、それを見たらとうまが壊れちゃうッ！」

「いや、見ても俺は大丈夫だけどかなりあるな。へえ……」

「先に呪印とかいうの探さないよ。魔道書とかいうのは後で見たらいいでしょ」

「あー、勘違いしてるけど、これは見てるんじゃないって知っててんだ。で、ええと…わかった」

俺が脳内の魔道書の記憶を発見したと思ったインデックスが、頭を掴んでいる俺の手を離そうとしてきた。だが俺はそれを無視してがっしり掴んで知っていくと、呪印の場所がようやくわかった。でも、

場所が複数あるな。元始種子は節約したいし、まずは命にかかわるやつを幻想殺しで破壊するか。そう決めるとインデックスを解放して立ち上がる。すると、解放されたインデックスが怒ってきた。

「なんで、そんな危ないことするの！ 頭の中を見るなんて聞いてたら、そんなの絶対させなかったんだよっ……普通は見ただけでも死んじゃったりするんだよ？ 助けてくれるのは嬉しいけど、そんな危ないことはしないでほしいかも」

「まあ、無事なんだし気にすんな。そんなことより、場所わかったぜ」

「……どこにあったんですか？」

俺が心配してきたインデックスの頭を撫でながら、呪印を発見したという心配そうに神裂が尋ねてきた。まあ、教えるのはいいがそんなときこいつらはどうしようかな？ 近くで見せておけばいいか。そう考えて呪印の場所を伝えることにする。

「命にかかわるのは喉のところにあるやつだ。これは簡単に破壊できるから、この後にでもやっちゃおうか」

「そのとき僕らはどうしてるんだい？」

「神裂はちゃんと服着るなら来てもいいぞ。ステイルは年上への言葉使いがなってないからダメだ」

言われたステイルはなんか文句言ってるが無視して、洗濯してカゴに入れておいた神裂の服を取り出す。だが…

「あちゃー、すごいや超電磁砲の直撃受けたんだっけ。えっと…
けっこうパンクだけど着るか？」

「…それなら、この手術着の方がマシかと」

「だよな。あとで俺の服持ってくるからそれでも良いか？」

「はい。わざわざすみません」

そういつてペコッと頭を下げてくる神裂。まあ、俺が余裕なくて本気で攻撃してしまい服破ったんだしそれくらい当然させてもらうさ。ってことで、俺は一度帰ることになるな。どっちにしろ自分の服もボロボロだから着替ええないといけないし、1人で行くのもあれだから誰かについてきてもらおう。そう思いみんなに声をかける。

「つーわけで、1回帰るけど1人で歩くのも暇だし、だれか1人くらい一緒にこないか？　ちなみにインデックス以外な、お前は安全のために留守番だ」

「えー、私だってもう1回とうまの家に遊びに行きたいかも」

我儘を言ってくるインデックスにお前はまた今度なといって、大人しくさせるとメンバーの方を向く。すると、メンバーたちが口を開いた。

「それなら私がついて行きます。能力的に怪我してる当麻さんを超守りやすいですから」

「私も行きたい。とうままだ遊びに行かせてくれてないもん」

「そーいうことなら私も行きたいって訳よ。当麻の家のベッドの下を調べるの」

「ああ、そういうのなら楽しそうだわ。今度そのネタを第3位たちに教えてやってもいいし」

「……じゃあ、今回は一番年少の最愛をつれていくよ。お前らは昼飯食っておいてくれ」

俺がそういうとショボンとする理后。フレンダと麦野は面白そうなことができなくなって、少しつまらないという顔をしている。前者はわかるけど後者2人はなんか間違ってたんだろ。つーか、男子のベッドの下になに期待してんだ。なんて考えながら、俺たちは上に行き俺と最愛は俺の寮へ、他のメンバーは昼食の準備にかかった。

第三十九話 呪印発見（後書き）

前書きでも書きましたが、「はじめようぜ、魔術師！」はありません。

むしろ、「てめえらは黙って見てろ、俺がやる！」状態です。

まあ、その自動書記戦もあと2・3話後です。

第四十話 一時帰宅（前書き）

PCで閲覧されている方、見ていただけましたか？

そう、目次の下にタイトルのロゴを表示したのです。他の作者様がやっていたので真似しただけですけどね。

もし、自分もやりたいという作者様がいらしたら感想かメッセージでお知らせください。タイトルロゴの作り方から説明しますから。

第四十話 一時帰宅

さすがに上半身が包帯で覆っただけって服装じゃ拙かろうと思い。昨日、とりあえずで出し神裂に着せたシャツを包帯の上から羽織ると、最愛を連れて自分の寮にもどった。ドアの前につくと鍵をあけて中にはいる。

「おじゃましまーす」

「ははっ、お前なら別にそんなお客みたいな言い方しないでいいんだぞ。手を洗うならそっちが洗面所になってる。かかってるタオルはキレイなヤツだから安心して使ってくれ」

「わかりました。じゃあ、手を洗ってる間にベッドの下とか片付けておいてくださいね。麦野に超写メ撮ってくるように言われているので」

「期待するようなもんなんて、この家にねえつつの。まあ、ご希望に沿うように今度はお前らの写真でも隠しておこうか？」

「それはそれで複雑なので超やめてください」

そんな風に笑って話しながら最愛が洗面所に手を洗いに行ってる間に、俺は自分たちのお昼の準備をするため台所で手を洗ってから冷蔵庫を開ける。んー、神裂と戦って怪我したせいで向こうに泊まったから、ご飯が昨日のやつなんだよなあ。

まあ、学園都市の炊飯器はたとえ夏に電源を切っていても、数日は腐らないようになってるから安心だし炒飯でも作るか。それと中

華風の肉団子だな。酢を使うから夏の疲れも大丈夫って感じでさ。そうと決まればさっそく作り始める。

肉団子はできあいの物を使うため、絡めるタレにいれる野菜を切っているのがやってきた。俺が既に昼を作り始めていることに気付くと話しかけてくる。

「お昼は、なに作ってるんですか？」

「ご飯の関係で炒飯を作ることにした。んで、おかずに中華風の肉団子だぞ」

「なにか手伝うことありますか？」

「とくにないからテレビでも見て待っててくれ。まあ、ベッドの下とか探してもいいけどな」

ハハッと笑いながら言うのと、最愛もニヤッと悪戯っぽく笑って「超了解です。絶対見つけます」と言ってリビングの方へと向かった。探すのはいいが本当になんだけどな。あるとすれば、週刊マンガの最初の方のグラビアページくらいか。そんなことを考えながら野菜をいためて調味料を加えタレをつくる。

「見つかったかあ？」

「超ありません。まあ、強いて言うなら保険の教科書と、マンガのグラビアくらいでしょうか」

「隣の土御門なら、かなりマニアックなロリ物とか置いてるんだけどな。俺はそういうのは無駄な物と割り切ってるから興味ないん

だよ」

「むー、健全なのか不健全なのかわかりませんね。麦野には金髪の洋物がありましたと報告しておきましょうか…」

「馬鹿たれ。そんなことしたら、戻ったときにフレンドが蒸発させられてるかもしれないだろ。やめとけて」

そんな風に、勝手に人の趣味まで捏造して報告しようとする最愛に呆れながら諫める。馬鹿話をしながらも手を動かしているのも、肉団子を完成させ炒飯を炒めていると、最愛が台所に戻ってきた。

「当麻さんってなんで超急にフレンドと仲良くなったんですか？」

「なんでって…：最初から仲良かっただろ？」

「まあ、そう言えなくもなかったですけど。なんて言うか、今までは妹を超相手にしてるって感じだったんです」

少し考えてからそんな風に俺とフレンドの以前の距離感を言うてる最愛。俺も言われて以前の距離感とやらを思い出してみる。うーん…：水に追い掛けさせたり、段ボールでもひいて寝ろと言ったり、わざとソファアールより高い位置に転移させたり、逆さ吊りにしようとしたり、映画へ無理矢理連れてったくらいか？まわりにはそれが妹との付き合い方に見えるんだな。

「それなのに昨日と今日で超一気に仲の良い男女って感じで。まあ、フレンドが急に年相応になったというか、大人びたからそう見えるんですが」

「ふーん。まあ、俺は普通に接してるつもりだけどな。最愛がいう通り、あいつが大人びたってんならそれが理由じゃねえか？ 年相応になったなら羨みたいなことする必要ないからな」

「そんなもんですか？ なら、私が超大人っぽくなったらどんな対応するんです？」

「今と変わらないぞ、自然体で接するだけだ」

最愛の質問に答えながら完成した料理を器に盛ると、それを最愛に渡す。言われた最愛はどういった心境なのかよくわからないが、難しい表情になっている。うむむ…言葉を間違えたか？

「……あの、私も年下としてでなく対等な関係で接して欲しいんですが」

「んー、特別に年下扱いしたことないと思うが。今までの嫌だったか？」

「違いますけど。ずっと年下として扱われたら、今後も超そのままでの関係になってしまいますから」

「よく分からないが、そういうことなら気を付けるよ。それでいいか？」

言って笑いかけると、最愛も嬉しそうに「ハイ」と返事をした。そして、話が一段落したので洗った布巾でテーブルを拭くと、箸とスプーンを持ってきて最愛に料理を運んでもらった。2人とも準備を終えると席につきお昼を食べた。

お昼を食べ終わると、「作ってもらったので洗い物は私がやります」という最愛の申し出を受けた。そうして暇になった俺はその間に神裂にあげる服と自分の服を選んで着替える。ってか、マジバトルでお互いに服がボロボロになるとかこのマンガの話だよ…。そう思っていると、洗い物を終えた最愛が戻ってきた。

「服を選んでるんですか？」

「ああ、自分のはどれでもいいんだけどな。神裂は俺より背も高し、スタイルも良かっただろ？　だから、どれをやったもんかなあって悩んでたんだ」

「当麻さんも女性のスタイルとかチェックしてるんですね。超やらしいです…」

「神裂とか麦野くらいになればチェックしないでも分かるだろうが」

ジト目で見てきた最愛にやや呆れたように答えると、向こうも確かにと言って頷く。言う前に気付くだろ普通…と思ったが、そのまま服選びを続けて大きめのTシャツを1枚とりだした。ホントは寝るときにも使えるようになって、ゆったりめを選んで買ったんだが。結局まだ使っていないのでこれならば問題ないだろう。

「さて、服も着替えたし。これ持って店に戻るか」

「あ、待ってください。麦野に言われた写メをまだ撮ってないで

す」

「……それ必要か？」

「え、だって撮らないと麦野が超怒りますよ？」

そういつて首をかしげながら見てくる最愛。そんな事をいわれても無い物は無いし、捏造するにも隣人の物はマニアック過ぎて借りれない。つーか、借りた物で捏造すれば今後年下の最愛に近付くなど他のメンバーに言われるだろう。なぜなら、土御門はロリ系・義妹系が趣味だからな。さて、どうしたものかと考えていたら、最愛が家の中をパシヤパシヤと撮り始めた。

「……そんなので良いのか？」

「だって無いんならしょうがないじゃないですか。麦野も半分冗談だと思えますし、超家の中を撮っておけば大丈夫だと思います」

「さよけ…なら、テキトーに撮ってさっさと行くぞ」

パシヤパシヤと撮り続ける最愛にそう言うと、俺は出かけるために服を紙袋に入れて戸締りを始めた。それらが終わるころには最愛も十分だと思ったのか、撮影を終えて靴を履きに玄関へと向かう。さて、店に戻ればインデックスの解説だな。呪いの効果までは元始種子の節約のために見てないし、罨があるかもしれないから気を付けるでしょう。

店に戻る途中に暑いし少し冷たい物でも食べるかと、コンビニで2つにわけれるアイスを買って2人で1個ずつ食べながら歩くとやっと店についた。

「ふいー、ひゃっぱりちかいとはいへ。なふはひふいでふね（ふいー、やっぱり近いとはいえ。夏はキツイですね）」

「口に咥えたまま喋るなよ、引っこ抜いて食っちゃもうぞ？」

「はい。って、言っても超容器しかないですよ？」

そう言いながらも、俺に容器を渡してくる最愛。まあ、コンビニの袋に入れて捨ててやるかと思い、受け取って袋にしまう。そして、先を歩く最愛がドアを開けてくれたので俺も礼を言いながら中に入った。

「超ただいまですー」

「誰かいるかー？」

2人で言いながら中に進むと厨房にいたのかカウンターの奥から誰か出てきた。まあ、誰かっていってもインデックスなんだけどな。最初に入口のところからヒョコつと顔を見せて俺たちを確認すると、嬉しそうにトテトテと走ってきたのだ。

「とうまにさいあい、おかえりなんだよー」

「超ただいまです。他のみんなは上ですか？」

「うん。私は下の2人の食器を片づけてたから、厨房にいたんだ

けどね」

そういつて楽しそうに笑うインデックス。別に食器を片づけていたのが楽しいわけではない。自分を追っていたのが仲間で、しかも間違っていたとはいえ自分の命を助けようとしてくれていたのだ。記憶はなくともそういった人がいたというのは、今のインデックスにはとても嬉しいのだろう。最愛もそのことが雰囲気から理解できたのか、そのまま楽しそうに下の2人との会話のことを話してくるインデックスの言葉を笑顔で聞いていた。

少しの間そうやってインデックスの話を聞いていたが、解呪が遅れるとどんな影響が出始めるのかわからない。なので、そろそろ解呪しよう伝え、インデックスには神裂に服を届けてもらうことにした。

「インデックス、この服を神裂に届けてくれ。独房の近くにカゴがあるから、そこにある服も渡して着替えを済ましておくように伝えてな」

「うん。じゃあ、行ってくるけど鍵は開けても良いのかな？」

「いや、鍵はお前に渡してるカードじゃ開けられない。それはゲスト用のだから最低ランクのアクセス権しかないんだ。開けるのはこっちでやるから、それまでは話でもして待ってろ。ついでにステイルに『上条様、卑しきこの豚めに衣服をお恵みください。そして、無能な私にはできなかったインデックスを救うところをお見せください』と言えば連れて行くとやると伝えろ」

そういうと途端にインデックスと最愛が呆れたようなジト目で見てきた。急にそんな目で見られる理由がわからず、なんだってんだ？

と思っていると最愛が口を開いた。

「当麻さんって弱者に厳しいですね」

「そうか？ 自身の安いプライドよりも、優先すべきことがあると教えてやってるだけなんだが」

「しずりもちっとだけど、とうまはかなり酷いんだよ。そのうち神も見捨てるかも」

「そんなときは本気の幻想殺しでもお見舞いしてやるさ」

言いながら右手をプラプラと振ると、「むうー」と言いながらインデックスは下へと降りていった。そして、俺と最愛はみんなの居る2階へ上がった。

第四十話 一時帰宅（後書き）

思ってたんですけど、この作品って結構特殊ですよ。

文字数制限してるから話数がのびてんですが。インデックス編終了が50話に届くかどうかって感じなんです。

まさか、原作1巻終了に50話までかかった作品なんて。他にないんじゃないでしょうか？そう考えると、ある意味前人未到の境地に立ったなと思います。

……冗談ですけどね。

第四十一話 解呪（前書き）

やっと今回で解呪します、長かったですね。でも、先に予告すると自動書記がでるのは次話ですよ。

第四十一話 解呪

「あ、お帰りって訳よ」

「結構、遅かったわね。絹旗は変なことされなかった？」

2階に上がりリビングに行くなり、俺たちが帰ってきたことに気付いたフレンダが迎えてくれ、麦野はニヤニヤしながらそんなことを言ってきた。失礼なやつめ、俺が中学生に手を出すと思ってるのか？そう考えていると、最愛が麦野の質問に答えた。

「部屋で、私のことを女として扱ってやると超言われました」

「へえ…とうま、それどういう意味？」

話を聞きながらテレビを見ていたはずの理后は最愛の言葉を聞くと、ゆっくりとこちらを向いて立ち上がり近付いてきた。つか、朝も思ったが理后ってたまに暗黒面に堕ちてないか？なんて無駄なことを考えていると、目の前にきていた理后に顔を掴まれ至近距離でジッと目を合わせてくる。ちょ、少し恐いんですけど…。

「あ、あの、顔が近いし少し恐いんですけど…」

「いいから説明して？」

「えー…まあ、年下としてじゃなく対等な関係で接して欲しい、って言われたからわかったと言ったんだ。多分、そのことだろう」

有無を言わせぬ迫力の理后の問いに答えると、「そう、わかった」

と言って理后も解放してくれた。解放され「フウ…」と安心すると、他の3人が少し驚いた表情をしてることに気付いた。まあ、そりゃ理后が急にあんな雰囲気になったら誰でも驚くよな。そう考えながら最愛を抱き上げて肩に担ぐと、麦野のぬいぐるみを吊るす用に準備していたロープのところまで歩いて行く。今度はみんながポカーンとしているが、構わず足にロープを巻き始めると最愛が再起動した。

「ちよっ、なにしてんですか当麻さんッ。降ろしてください、それに超ロープを巻くのやめてください!」

「馬鹿野郎、これは駄だ。人を陥れようとした罪深い者を改心させるためのものだし、神もお許しになるさ」

「いやいや、こんなかわい少女にそんな事したら神はブチ切れますよ。てか、これ超フレンダのポジションでしょ? 私の役じゃありません」

「安心しろ、外には吊るさないから。まあ、その丈なら前にフレンダの足を掴んで逆さ吊りにしたときよりも、パンツ全開になると思うが気にするな」

そういうと「ヒイツ!？」と言ってさらに暴れ始めたので、床に置いて背中に乗ってロープを巻き続ける。すると、見ていたフレンダが最愛に近付きなにかしている。…あ、頬を引っ張りなにか言い始めた。

「ちよっと絹旗、なんでそれが私のポジションって訳よ?」

「いふあいだふ。だっへ、ふへんだっへちようぎやぐよういんで

ほ？（痛いんです。だって、フレンダって超ギャグ要員でしょ？）」

「違うっての！ 私はあきらかにヒロインポジな訳よ。ほら、金髪碧眼で可愛いし」

「自分で自分のこと可愛いとか言ってるんじゃないわよ……つか、上条も遊んでないでさっさと始めましょ」

「おう、わかった……よし、できたー！！」

フレンダの発言に呆れながらも冷静に突っ込みをいれる麦野。続けて俺にインデックスの解呪をするならさっさと始めようと言ってきいたので、俺もそれに答えながら最愛にロープを巻くのを完成させる。我ながらいい出来だと思いつつ背中から降りて、ロープを上につ張り上げる。すると、身長差の関係で全く地面に手がつかない“逆さ吊り最愛ちゃん一号”が完成した。

「結局、絹旗はピンクって訳よ」

「ちょー！？ 本気で見てるからやめてくださいってッ、いくら当麻さんでも警備員呼びますよ！」

「そんなときは地下のストーカー神父に罪を擦り付けるから良いんだよ。んじゃ、みんな地下に行くぞ。演習場で解呪するからついてこい」

「いや、自分で歩けますから超解いてくださいっ」

そんなことを言ってくる最愛を無視して俺たちは地下へと向かった。まあ、階段スレスレの恐怖を味あわせた後は玄関で解いて靴を履か

せてやったがな。そして、頭に血がのぼって少しフラフラしていた最愛をお姫様抱っこするとみんなは演習場へ向かわせ、俺たちは独房の神裂を出してから演習場へ向かった。

俺がインデックスたちと一緒に演習場へ行くとみんな暇そうにして、麦野がなんか新技の練習か腕を光のアームにしてブンブン振っていた。正直、いつものレーザーや前の円盤の状態でしか麦野の能力を見ていなかったのも、どうして腕自体が光のアームになっているのかわからない。なので聞いてみることにした。

「それどうなってんだ？」

「え？ ああ、普段レーザーとして撃ってるエネルギーを一定の形で固定化させてるのよ。もともと、盾として使ったりもしてたから、近接用の技としてやってみたってわけ。まあ、まだかなり低い出力でしか危なくてできないんだけどね」

「へえ。それなら翼の方でもやってみたらどうだ？ 背中の方で翼の形状で固定化させて先端をエネルギー状態に放出していけば飛べるだろ？」

「あー、確かにそっちの方ができるかも。こんどやってみるわ」

そういうと麦野は腕を振って光のアームを消した。てか、もし麦野が光の翼を完成させたら面白いだろうな。そしたら俺「むぎのん、マジ天使」って言ってやるんだ。名前も“天使の翹”とかにしてやるしな。いまから楽しみだと考えていると、抱っこしたままの最愛

がジト目でこっちを見ていたので話しかける。

「どうしたんだ最愛？」

「いや、おかしいでしょう。なんで、誰も私がお姫様抱っこされてることに突っ込まないんですか」

最愛がそう言うのと他のみんなが各々の考えを言い始めた。

「ああ、それは好きでやっていたことではなかったんですね。仲が良いなと思ってみました」

「あんなことを言われた僕に、そんなことを気にしてる余裕があったと思うかい？」

冷静に答える神裂と、いまだに少し疲れた表情をしているステイル。あいつ冗談なのに本当に苦しうにしながらも、インデックスに伝えさせた言葉を言ったからな。それぐらい自分よりインデックスを大切にしているのだろう。そう考えていると今度はインデックスが口を開く。

「とうまって遅い人をそう運んだりするんじゃないの？ 私も前に肩に担いで運ばれたんだよ？」

「間違っていないけど、そんなにしないよ？ 私もセブンスミストで1回されただけだし」

「私も運ばれるときは肩だったって訳よ。扱い違うくない？」

「そういや、この中じゃ私以外は運搬されてるのね。上条も絹旗

に運ばれてたし」

麦野がそういうと「へえー」と感心したり「そういえば」と納得しているみんな。自分が運ばれた記憶はないが、確かに気を失ってる人間は肩に担いでるし、急ぎのときや体調崩してる人間はお姫様抱っこで運んだりしてたな。なんて思い出しながら最愛を降ろしてやる。

「フウ…いや、ホント突っ込まれないんで私に変なのかなって超思っちゃいましたよ」

「まあ、とうまだと人を運んでるだけとしか思わないんだよ」

「僕にしてみればそれが普通って感覚が、すでにおかしいと思うんだけどね」

最愛の言葉に返事をするインデックスにさらに突っ込むステイル。まあ、突っ込んだら負けって場合もあるし、そこらへんは個人の感覚の問題だろう。そう思いながら解呪のために右手の手袋と包帯をとっていく。

すると、その下から出てきた右手の状態をみて驚くステイルとインデックス。神裂も自分がつけた傷を見てとても申し訳なさそうな表情をしている。別に俺は気にしてないし、わざわざ傷を付けてきたやつを慰めることもないので、放っておいて解呪を始める。

「よし、じゃあ始めよう。お前たちは少し離れといってくれ。インデックスは、ついてこい」

「…わかったんだよ」

みんなは言われた通り入口近くの俺たちから少し離れた場所に立ち、神裂とステイルはもしものときのために刀やルーンを取り出して構えている。俺も無事で済むかわからないので、あらかじめ元始種子を解放しておくことにする。

「んじゃ、そこに寝てくれ。服に俺の右手が触れたらやばいから、苦しくても動くなよ?」

「うん。とうまも気を付けてね?」

「ああ。んじゃ、いくぞ?」

「うん、お願い」

始めることを告げるとインデックスはそう言って口を開けて目を閉じた。なので、俺もゆっくりと右手をインデックスの口の中に入れていく。

苦しくないようになるべく手を細めて入れていくが、場所が少し奥の方なので結局は苦しくなるだろう。そう考え苦しい時間を短くするため少し急ぎめに手を入れ、喉の奥にある木星を表す呪印に触れた。その瞬間、呪いの解ける《バキン!》という音が聞えた。だがその直後、俺は突如襲った衝撃に吹き飛ばされた。

第四十一話 解呪（後書き）

インデックスの喉の奥にあるマークはこれです『?』

このマークは木星をあらわす記号で、木星は占星術的に保護を示し、儀式、宗教、研究、とかって意味もあります。まあ、そう考えるとこの文字が首輪に使われてたことも意味があるんだなって思えますよね。

第四十二話 自動書記（前書き）

原作上条「てめえらずと待ってたんだろ!? インデックスの記憶を消さなくてもすむ、インデックスの敵にまわらなくてもすむ……そんな誰もが笑って、誰もが望む最高のハッピーエンドってやつを。今まで待ち焦がれてたんだろ? こんな展開を……何のためにここまで歯を食いしばってきたんだ!? てめえのその手でたった一人の女の子を助けて見せるって誓ったんじゃないのかよ? お前らだって主人公の方がいいだろ!? 脇役なんかで満足してんじゃないやねえ、命を懸けてたった一人の女の子を守りてえんじゃないのかよ!? だったら、それは全然終わってねえ、始まってすらいねえ……ちよつとくらい長いプロローグで絶望してんじゃないやねえよ! 手を伸ばせば届くんだ! いい加減に始めようぜ、魔術師!!」

本作上条「……なんて言うと思ったか? 馬鹿野郎っ、てめえら脇役は黙ってみてろ! この俺が織りなすショーにプロローグなんてもんは存在しねえ、てめえらの物語が始まる前に俺が全て終わらせる! そう、最初から最後までクライマックスだぜ!」

というキャラで自動書記戦はいきたいと思います。

第四十二話 自動書記

上条がインデックスの解呪を行う間、他の者たちは緊張した様子でその光景をみていた。そして、床に寝たインデックスの口に上条が右手を入れていくと、少し離れた場所にいる他の者たちにも《バキン！》という音が聞えた。

理由は分からないが、さっきの音は呪印を破壊した音なのだろうと全員が思っていると。直後に上条が吹き飛び。インデックスが突如、まっすぐに立つように宙に浮いた。

「とうまっ！！」

「なっ！？ なにが起こったんだッ、解呪は失敗したのかっ！？」

「わかんないけど、ヤバそうな雰囲気ね。滝壺と絹旗はあれに近付かないように気をつけながら上条の回収。あんたらはインデックスをどうにかするのに協力しなさい」

麦野はそう言って他の者に指示を出すと、指示を受けた者もインデックスの方を見ながら動くタイミングを計る。すぐにでも吹き飛ばされ、地面に倒れている上条を助けに行きたいとは思うが。下手に動いて自分までやられては、助けることができなくなる。そのため、全員がインデックスの動向を見守っていると、浮き上がったインデックスが機械的な口調で話し始めた。

「――警告、第三章第二節。Index-Librorum-
Prohibitorum――インデックス禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再

生は不可能、現状、10万3000冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

そう言ったインデックスを皆を見るとその変化に戸惑う。瞳からは一切の感情が消え、代わりに真紅の魔法陣が宿っている。そこには感情だけでなく一切の人間らしさも感じられない。

「インデックスはどうなったって訳よ？」

「多分ですけど、複数のトラップが超仕込まれていたんじゃないですか？ 首輪を破壊しても、魔道書を奪われないよう自動迎撃機能が組み込まれてたって感じかと」

フレンダの言葉に絹旗が答えると皆もその考えに共感する。たしかに魔術師にとっては世界を手に入れられる物。そして、魔術師以外が手に入れば魔術師を無効化できる物。誰が手に入れたとしても悪意を持てばそのまま力と出来るのだ。そんな危険な物にたった1つしか安全弁を付けていないわけがない。冷静に考えればすぐに理解できた。

「――『書庫』内の10万3000冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術ローカルウェポンを組み上げます」

「おいおい、インデックスは魔術が使えないんじゃないの？ あきらかにヤバイ雰囲気になってるわよ」

「いえ、確かにあの子は魔術を使えないと「なら、それも嘘だったんでしょ」まさかっ!？」

「それすらも僕達や世界中の十字教徒を騙す嘘だったとはね……くっ」

インデックスの記憶のことだけでなく、インデックスが魔術を使えるということまで嘘だったことに驚く神裂。そして、自分たちを騙していた教会と言われてきたことを、すんなり信じていた自分に怒りを燃やすステイル。だが、いまはそんなことを考えている場合じゃない。インデックスが次々と何か言っている。

「――侵入者に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

インデックスがそう言った直後、バギン！と凄まじい音を立てて、インデックスの面目にあった魔法陣は拡大した。直径にして約2メートルほどの魔法陣が正面で重なるように配置されている。その様子を見ている者は全身にゾクリという嫌な感覚がした。

魔法陣が重なる部分、その一ヶ所からなにか嫌な気配がするのだ。そしてそれが何かは理解できない、だが間違はなく関わってはいけないものだ。と全員が理解する。魔法陣の重なる場所の空間が歪み、その向こうに何かがこちらを見て蠢いている。そして誰もが動けないままその歪みは亀裂となり開いた。直後、その亀裂より麦野の原子崩しでもありえない威力のレーザーのような光の柱が皆のいる方へ放たれた。放たれてから皆より早く気付いたステイルが思わず叫ぶ。

「全員避けろおおおっ！！」

その言葉で全員が正気に戻る。しかし、気付いてから避けるにはそ

の攻撃はあまりに強大で速すぎた。もはや、避けることは叶わないとわかると全員が身構える。だがその時、攻撃に一番近い場所にいた麦野の前に巨大な光の盾が現れた。

「―――アイギスアーテナーの楯」

全員が自分の無事を知り、インデックスの攻撃を防いでいる存在に気付くと声のした方を向く。そこにはボロボロの右手から血を流しながらも、腕を皆の方へ向けている上条の姿があった。だが、インデックスほどでないにしろ上条の様子もどこかおかしい。いつもは整髪料によってツンツンになっている髪が全て降りている。そしてステイルと神裂は気付く、いまの上条から感じるそれは。

「…まさか、上条当麻から漏れ出るこれは魔力ッ」

「馬鹿なっ、インデックスはともかくこの街の能力者が魔術を使えるはずがないッ」

「当麻はこの街の能力者じゃないって訳よ。あれの異能は生まれつきだって言ってたわ」

「「なっ!?!」」

フレンドの言葉に驚く2人。人工的に生み出された異能者だと思っていた存在が、全くの別の存在だったのだ。だが、そこで神裂はまた1つおかしいことに気付く。

「それでもです。彼が原石であろうと、異能を持つ者は魔術を使えないのです。そんなことすれば反動で肉体がやられます。今の魔神とも呼べるインデックスの攻撃を防ぐほどの魔術防壁なんて、展

開いた瞬間に全身から血を噴き出し死に至る：」

「そんなことどっちだって良い。とうまが守ってくれてる間になんとかしないと」

滝壺に言われ他の者もどうするかを考え始める。だが、次の瞬間自分たちのまわりの景色が変わった。突然のことで驚くがシステムのメンバーたちはすぐに上条の転移だと気付いた。だが、それを知らぬ魔術師2人はまたも驚く。

「っ！？ どこだここはっ、一体どうしてこんなところに？」

「上条の能力の1つよ。あそこじゃマズイと思って転移させたみたいね。おまけにインデックスと自分から距離をとった場所に移したみたい」

言われて気付けば少し遠くの方に、盾に向かって光の柱を放ち続けるインデックス。そして、それとはまた別の場所にゆっくりと立ち上がる上条の姿が見えた。ついでにまわりを見てみると、ここは以前、幻想猛獣と戦った場所であることにシステムの者は気付く。

あのような事件があったため、近くにあった原子力実験炉は閉鎖し、いまは全ての放射性物質の処理と回収が終わっているため、たしかにこの場所なら全力で戦って近辺の建物を壊しても問題はない。そう思っていると、魔術師2人がいまにも駆け出しそうになっているので、メンバーらは止めにはいる。

「ちょっと、どこ行くつもりですか？」

「決まっているだろう、あそこへさ。相手は魔神だ、最初の攻撃

を防げたとしても1人では倒せない」

「ですので、私たちも行ってあの子を止めてきます。最初から本気で行くのであなた達は離れておいてください」

そう言って戦いの場へ行こうとすると、2人の前に滝壺が立ちふさがった。

「ダメ、今行けばとうまの邪魔になる」

「素人がなにを言っているツ、君たちも分かっただろう。あれはこの街の能力者ではどうにもできないんだ」

「その通りです。時間ありませんし、すぐに「超待ってください」
「え？」

「当麻さんがなにかしようとしています」

言われて全員が上条の方を見ると、上条は天に手を向けるとそのまま今度は地面に手をかざし触れた。そして、そこから巨大な魔法陣が展開し魔術を発動する。

「――――エーリュシオン死後の楽園」

発動するとその場から透明な水色の壁が広がり他の者がいる数メートル手前で止まった。他の場所にも同じように広がり天井のようなものもあることから、ドームもすっぽりと納まるような広さがある部屋のようなものだと思われる。皆がそれがなにかとっていると滝壺が口を開く。

「……さっきまでの嫌な感じが消えた」

「ホントだ、インデックスの攻撃に感じてた暗いものがなくなっただけだよ」

「まさか、結界か？」

ステイルはそう言うのと近くにあった石を水色の壁に向かって投げる。すると、結界ならば弾かれると思った石はそのまま通過した。その様子を不思議に思った全員が壁に近付き触れてみると、手はそのまま通過し、中に入れてしまう。だが、それにもかかわらず中にいてもインデックスの攻撃から感じる嫌な気配が感じられなくなっている。その事から魔術師2人はある推測をする、だがそれは同時に上条当麻が信じられないことをやったことを意味する。

「あんたたち何か気付いたの？」

「……多分ですが、これは結界魔術の一種です」

「それはさっき超言ってたじゃないですか。でも、どうして結界なのに入れるんです？」

「信じられない事にやっは、魔神であるインデックスごと自分たちの居る場所を異相として切り離れたんだ。確かに似たような魔術は存在する。だが、あんな攻撃を続けている者ごとなど、なんの準備も無しに即興で展開した魔法陣でできるようなモノじゃない」

魔術について詳しくないシステムの者もその言葉である程度理解する。たしかに上条も魔術には準備が必要だと言っていた。そして、先の戦いで大量に貼られたルーンからステイルがイノケンティウス

を発動したのも見ている。あの大量のルーンで大型の炎人を出す程度だったのだ。だからこそ、あれが出力を抑えていたとしても、それを使っていた本人が信じられないというからその異常性がよく理解できた。

「：一体なんなんだ、君たちの知り合いは」

「さあ？ 能力は言えませんが、当麻さんは自分が使う力は神様の力って言ってましたよ」

「確かに触れるだけで呪印を破壊し、魔神の攻撃を防ぎきる魔術防壁を即興で展開できる。そんな存在はインデックスと同じ魔神か、本当に神の力を行使している者でしょうね」

自分たちにできることが無くなってしまったため、冷静な状態で神裂が答えるとステイルはつまらなそうな表情で上条を見た。そして、そのままインデックスの方を見ると先ほどまで放っていた光の柱“ドラゴンプレス竜王の殺息”を止めていた。

先ほどまで放っていた光の柱“ドラゴンプレス竜王の殺息”を止めていたインデックスは、そのまま、まわりを見まわすと口を開く。

「——突然の転移を確認。近辺の状況を把握し、危険は感知されず。先ほどの場所での戦闘を嫌がり、侵入者が転移させたものだと思います。同時に展開された結界魔術の術式を逆算……失敗。」

該当する魔術は発見できず。術式の構成の把握も不可能なことから直接の術式破壊も効果があるか不明」

そう言って先ほどまで攻撃していた盾の方から上条の方へと向き直るインデックス。同様にインデックスが攻撃を止め、自分の方を向いたことを確認した上条はアーテナーアイギスの楯を消して顔をあげた。

「……さあ、こいインデックス。いまお前を楽にしてやる。だが、その前に俺の名前を教えておいてやろう、Deus666《その身は主が力を揮うために存在する》だ」

「――警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を變更、戦場の検索を開始……完了。現状、最も難度の高い敵兵『上条当麻』の破壊を最優先し、展開する結界魔術の破壊を試みます」

他の者はその言葉をきき驚いていた。魔神であるインデックスが個人の破壊を最優先にする。それは普通ならばすなわち死刑宣告だ。魔神という存在を知り、その力を目の当たりにした者なら誰もが思うだろう、たった1人で魔神を相手にするなど不可能だと。

だが、他の者はそれよりも前の言葉により驚いていた。上条は先ほど何と言った？自身を『Deus666』だと名乗った。これは間違いない魔法名だ。だが、なぜ学園都市の能力者が魔法名を持ち名乗っている？そしてその前に、お前を楽にしてやるとも言っていた。

そう、殺し名を名乗り楽にしてやると言った上条は、大切なシステ

ムのメンバーを殺そうとした者を容赦せず殺そうとしているのだ。魔神であるインデックスに勝つことなど不可能。だが、同じく実力が未知数である上条が相手ではどうなるか分からない。そう思うとステイルは走っていた。

「やめろ上条当麻っ、その子を殺すんじゃない！」

「―――戦場に新たな敵兵を確認。感知する魔力より戦力の分析開始……失敗。現状、結界内と外にいた者で相互干渉ができないため、最優先の破壊対象である『上条当麻』との戦闘を再開します。警告、第三十五章第十八節。『硫黄の雨は大地を焼く』―――完全発動まで五秒」

インデックスがそう唱えると、インデックスの上空に多数の『灼熱の矢』が出現した。その様子にステイルは驚くが走って近付いてみると突然後ろから引っ張られた。

「くっ、離せ！ あの子を殺させる訳にはいかないんだッ」

「それはわかっています。しかし、貴方がいたところで出来ることはありません。現状、インデックスと戦える可能性があるのは彼だけです。その彼が倒れば、次は私たちが狙われます。あなたはあの子に私たちを殺させたいんですかっ！」

神裂が叫ぶように言うステイルも足を止めた。確かに自分たちは魔術師として生きる決め、いままでも何人もの魔術師を殺めてきた。だが、それは自分たちで覚悟した事だ。いまのインデックスは正気を失っている。だが、その間の記憶があるかどうか分からない。ならば、意識はなくても大切な者を手にかけたという重荷を彼女に背負わせるわけにはいかないのだ。

「――発動準備完了。警告、第三十五章第十八節。『硫黄の雨は大地を焼く』を対象に向け発動します」

インデックスはそういうと上条に向け多数の灼熱の矢を放った。それを見ていた者は上条に向かってゆくその攻撃に驚く。空中にあるため大きさが分からなかったが、降ってくるとその大きさを理解する。1つ1つが軽く軽乗用車並みの大きさがあり、異相にあるにも関わらず僅かに自分たち側の空気を揺らしていることから、その威力が途轍もないことを知る。だが、上条もまた異常だった。

「――薙ぎ払え、農耕神の鎚ミヨルニル」

静かにそう呟き振ってくる灼熱の矢へ腕を振るうと、上条の上空に巨大な魔法陣が展開しそこから雷が放たれた。放たれるだけで雷鳴が轟き、大気を震わせるそれはそのまま灼熱の矢へ向かい次々と迎撃してゆく。

ぶつかり相殺されるかと思われた上条の雷は広範囲に拡散し、1つまた1つと灼熱の矢を弾け飛ばす。弾けた矢の破片も逃さぬよう雷はさらに広がりインデックスの魔術を破壊する。そうした凄まじい魔法同士の衝突にさらに空気の震えが大きくなると、他の者は思わず口を開く。

「ちょっと、私たちと向こうじゃ異相として切り離されてるんじゃないかったの？」

「はい、間違いなく切り離されています。でなければ、あんな威力の魔法の衝突を冷静に見ているなんてできませんよ。結界がなければ吹き飛ばされているところですよ」

「てか、なんてデタラメって訳よ。超電磁砲でもあんな攻撃できないんじゃないの？」

フレンドの言葉に御坂を知る者は考える。たしかに序列3位は伊達じゃなく彼女は強い。しかし、これ程の威力の雷を出し続けることなどできるだろうか？それは誰も言わなかったが、答えは明白だった。

第四十二話 自動書記（後書き）

どうでしょうか、今までで一番強い上条さんは？

最強とかチートとか思わせておいて、実は地味にしか活躍してこなかった本作の主人公。しかし、そんな地味な強さというキャライメージも今回までです。魔術師・上条当麻として本気で魔神・禁書目録と戦う姿を数話に亘りご覧ください。

あ、それと昨日確認したんですが、木星のマークって携帯だと表示されないんですね。マークを言葉で説明するなら『2』の下棒をそのまま伸ばして、そこに縦棒を加えた感じですか。『4』のナナメ棒と横棒が縦棒とくっつかないで『2』の形になってると思ってください。そんな感じです。

第四十三話 魔神VS神の代行者（前書き）

インデックス編終了までは完全に書き溜めてあり、いったい何話になるか数えてみました。設定を除いた本編話数にしてちょうど50話までになりそうです。数え間違えてたら恥ずかしいですが、合ってるならキリが良いので気持ちが良いですね。

第四十三話 魔神VS神の代行者

皆が魔術同士の衝突に驚いている間も、魔神と神の代行者の戦いは続く。

「――警告、第二章第一節。雷の魔術の術式を逆算に成功しました。名称及びその効力から北欧神話の流れを汲む魔術と判明。対抗する術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。『豊穰神の剣』発動準備完了。即時実行します」

そういうとインデックスは背中に巨大な赤い翼を出現させ上昇し、自身の手元に1つと俺を囲むように4つの魔法陣を展開し、巨大な剣のようなものが現れた。その威力は魔法陣が展開した時点で痛いほど大気が震えている事で理解できた。なので、それを使われる前に叩く事にする。

「完全に発動する前に潰せ、ミョルニル農耕神の鎚」

「――対象の魔術を迎撃後、敵兵の破壊を実行します。『豊穰神の剣』」

俺が再び雷を放ち魔法陣を破壊しようとする、そこから現れた剣により容易く薙ぎ払われてしまった。相手は俺の魔術を破壊する用の術式を組んだと言っていた。そして、豊穰神の剣の名前からするとあれは北欧神話に出てくるフレイの剣を再現したものでだろう。

「さすがにミョルニルでは、フレイの剣に勝てないか。まあ、そこは神話の通りということだろう。なら――」

術が破られインデックスの攻撃が届きそうになると、俺はすぐに新たな術式を組み魔術を発動する。あれが俺に合わせて北欧神話の術できているならば、この術に勝てるはずはない。そうして、迫りくる剣に向け腕を振りながら魔法陣を展開し術を発動する。

「―――迎撃せよ、主神の槍」
グングニル

発動した瞬間、魔法陣より光の槍が現れ迫っていた剣を全て破壊する。その威力と速度を脅威だと思ったのか、インデックスは剣を持ったまま距離をとりこちらの様子を伺っている。

「どうした、魔神・禁書目録。如何に勝利の剣と呼ばれる豊穰神の剣とて、主神オーディンの攻撃は防げないか？」

「―――警告、『豊穰神の剣』を破壊した魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず、名称より北欧神話主神オーディンの槍・グングニルを再現した物と予測。しかし、名称及び効果からの術式の逆算は出来ず」

「当たり前だ、俺の魔術は全てオリジナル。術式を組むのではなく神話の再現をしてるだけだからな。農耕神ミヨルニルの鎚のように迎撃目的に簡易化された術でもない限り、そう簡単に逆算はできないさ。それじゃあ、喰らっておけ―――主神の槍」
グングニル

もう一度唱えると、浮いていた光の槍はインデックスに向かって飛んでいく。すると、インデックスも危険と感じたのか豊穰神の剣を自動迎撃に切り替え、自分は赤い翼で高速で距離をとった。だが、主神の槍はその自動迎撃で振るわれた剣を容易く破壊すると、そのままインデックスを追撃する。

インデックスは飛びながらいくつもの魔術防壁を展開するが、グングニルはそれを薄い紙のように次々と破っていく。インデックスも時速にして数百キロの速度で飛行しているようだが、必中の槍の前では意味がなく、徐々に差を詰めている。

「――警告、第二〇章九節。敵兵の術式『主神の槍』^{グングニル}の回避は不可、迎撃行動に移行。上記の術式に対し有効と思われる術式の構築を開始します。命名、『神よ、何故私を見捨てたのですか』《エリ・エリ・レマ・サバクタニ》』発動準備完了。即時実行します」

そう言ってインデックスはグングニルの方を向きながら後ろ向きに飛行を続け、赤黒く変貌した竜王^{ドラゴンブレス}の殺息のようなものを放つ。その魔術は初期の竜王の殺息とは全くの異質。歪んだ空間の亀裂からは先ほどよりも禍々しい気配が漂っている。だが、その攻撃を受けてもグングニルは突き進み、ついにインデックスは追い付かれた。

「――危険、最大魔法防壁の多重展開を開始」

そういった直後、幾重にも魔法陣が展開するが、今までと同じく光の槍は魔法陣ごとインデックスを貫いた。いかに歩く教会といえど、あの威力の攻撃をまともに受けて無事で済む訳もなく、そのまま地面へと落下し槍によって地面へ縫いつけられる。

「――警告、歩く教会の破損を確認。防御機能の40%が喪失、応急処置として防御魔術の重ねがけを実行します……完了。続いて、この魔術を破壊し敵兵『上条当麻』の破壊を諦め、禁書目録の安全を優先し逃走を開始します」

「逃がすと思うか？
――来たれ、^{ヴァジュラ・ヴァジュラ}金剛杵」

そういうと、俺の頭上に魔法陣が展開した。

上条とインデックスの戦いを見る者は驚いていた。インデックスの異相の気を震わすほどの威力の灼熱の矢を容易く迎撃した上条の雷。その雷をまた容易く薙ぎ払うインデックスの巨大な剣。それが迫りもう駄目だと思おうと上条は更に光の槍でそれを迎撃して見せた。

ただでさえ信じられない威力の魔術を放っていたのに、それらを破壊するためにさらに強大な魔術を放つという魔術合戦。すでに大気の振動を越え、地面も揺れるようになったため神裂と麦野以外は地面にしゃがみこんでいた。

「化け物かあいつは！？ 魔神の攻撃を全て破り、歩く教会を貫いただトッ」

「というか、ここ超ヤバいんじゃないですか？ 空気だけじゃなくて地面も揺れてるんですけど」

「そうですね、結界内から一度出ましょう」

神裂がそういうと皆はこけそうになりながらも、急いで結界内から出た。しかし、その揺れは結界内から出たにもかかわらず続いていた。

「ちよっ、結局、外も揺れてるって訳よ！」

「どうして、とうまは立っていられるのかな？」

「さあ？　今まででも一番異常な力使ってるし、その効果じゃない？」

遠くに見える化け物同士の戦いの中、平常時のような佇まいでいる上条を見て話すメンバーたち。その一方、ステイルが光の槍に貫かれたインデックスの身を心配していると、上条に動きがあった。天に手をかざすと新たな魔法陣が展開したのだ。だが、その魔法陣が展開した瞬間、辺りの空気が変化する。

「うぐっ、急に空気が超重くなりました」

「があ、なんだこれは。あいつはなにを始めるつもりなんだッ」

魔法陣が展開すると、突然空気が重くなり完全に立っていられなくなるメンバーたち。大地の震動もかなり激しくなっていることから、その異常性はさっきの比ではない。そうなりながらも、上条の様子を見ていると、魔法陣から細い棒状の物が降りてくるのが見えた。

「ぐっ。あれは……槍？　いえ、金剛杵こんごうしよでしょうか？」

「なんなのよ、その金剛杵ってのは？」

「チベット仏教などに見られる法具の一種です。ですが、なぜただの法具でここまでの……まさかっ!？」

「どうした神裂っ、あれの正体が分かったのか？」

上条が出現させた物が金剛杵だと分かると、なにかを考え始めた神裂。すると、彼女が突然驚きの声をあげたことで、あれの正体に気

付いたのかとステイルは尋ねた。尋ねられた神裂はいまだに冷静になりきれしていない様子だが、口を開いた。

「この異常な重圧から推測するにあれば、帝釈天の金剛杵を模した物だと思われます」

「帝釈天ってなんか聞いたことある」

「帝釈天。別名インドラといって、ヒンドゥー教や仏教にも出てくる存在です。もし、私の推測が正しければ上条当麻はここら一帯だけでなく学園都市をも吹き飛ばしかねない魔術を使うつもりです」

「帝釈天：インドラ：まさかっ!? ヤツはこんなところでインドラの矢を放つつもりか!」

滝壺に答えるように説明する神裂の話から推測し、同じ答えに辿り着くステイル。あれがインドラの金剛杵であればまず間違いない。上条は媒介を利用し、太古のインドでインドラが、アスラ族または羅刹の王ラーヴァナの大军を一撃で死滅させたという『インドラの矢』を放つつもりだ。

「ちよつと、それってヤバいんじゃないの?」

「ヤバいなんてもんじゃない。あんな物を使ってまで放つ攻撃だぞ? この結界がなければすでに僕たちは死んでいてもおかしくない。ああ、認めるよ。あいつは間違いなく僕たち側の情報を知っているし、世界でも五本の指に入る魔術師だッ!」

「そんなことを言っている場合ですか。インドラの矢など伝承以外では聞いた事がありませんが、あれは間違いなく霊装を超えた

言わば神具です。そんなものを使って起す、未知の大魔術を防げるものなど存在しません。死にたくなければ離れないと！」

その状況に焦り、すぐにでもこの場から離れようとする神裂。だが、それは不可能だった。なぜなら、聖人である神裂でも立ち上がるのがやっとで、歩く事などとてもじゃないができなかったからだ。他の者もなんとか移動しようとするが、せいぜいズリズリと地面を這う事ぐらいしかできない。

そして、ついに上条が動き出す。上条は金剛杵を棒術のように身体のまわりでまわして操ると、インデックスの上空に数キロはあるのではないかという巨大な魔法陣が現れる。インデックスもそれが危険だと理解しているのか、魔法陣を破壊しようと地面に縫いつけられたまま、上空に向け竜王の殺息を放っている。だがその攻撃は魔法陣を通過し、破壊は出来なさそうである。そして、上条がそのまま金剛杵を地面に突き立てると、今度は魔法陣が足元に展開しその魔法陣ごと上条は宙へと移動する。

「ね、ねえ。結局、あれっってもう攻撃するんじゃない？」

「そ、そんな攻撃を喰らって生きていられる訳がない。やめろ上条当麻っ！！」

そんなステイルの叫びも虚しく、上条はある高さまでくると魔法陣から飛び出し金剛杵を振った。

「――滅べ、インドラの矢」

上条が唱えると魔法陣は眩く輝き始め、地面と大気の揺れが激しさを増す。そしてインデックスは竜王の殺息^{ドラゴンプレス}を放ちながら幾重にも魔

法防壁を展開し始めるが、竜王の殺息は輝いている魔法陣にぶつかるバチバチと弾けている。魔術の中でも頭一つ飛び抜けた威力の竜王の殺息を、発動準備段階で弾くインドラの矢。その光景からステイルにはインデックスの最悪の結末しか予想できなかった。

「インデックスーッ!!」

そうしてステイルの言葉は、そのまま上空の巨大な魔法陣から放たれた光に呑み込まれた……。

第四十三話 魔神VS神の代行者（後書き）

関係ないですが、ローラの口調が難しくてわかりません。PCに現古翻訳ソフト入れてあるんでそれを参考に書いてるんですが。原作の時点で言葉の使いどころがおかしかったりするので、ノリでいいかなとか思ってます。

けど、下手するとコロ助みたいになりそうなので注意しないといけませんね。

ローラ「わたしが最大主教なり！」

上条「ははっ、ようコロ助。コロツケ食うか？」

ローラ「な、なにを言ひたるなりっ、わたしは最大主教と言ふ者なると言ひたるかしら！」

上条「あ、クリームコロツケは俺のな」

ローラ「ええい、話を聞けいっ！」

って、感じですね。翻訳ソフト使っても2割程度しか参考にならないとは。最大主教がすごいのか、土御門の教えるセンスがすごいのか……。まあ、自分の書くローラはこれぐらいの口調になります。

第四十四話 神の代行者の力（前書き）

一応言っておきますと、前回の時点で樹形図の設計者は破壊されます。地面に礫になつてゐる状態で、禁書目録が竜王の殺息を放ったのが原因です。

第四十四話 神の代行者の力

上条が禁書目録と戦っていたその頃、学園都市の第七学区では……。

「地震？ そんな予報ありましたっけ？」

「まあ、たまには予測外の地震もありますでしょ」

夏休みということでショッピングに来ていた超電磁砲組の4人は、公園のベンチに座りクレープを食べていた。すると、突然地面が揺れ出し佐天がみなに尋ねたのだ。そして、いかに樹形図の設計者として全ての自然現象を予測するのは無理だろうと答える白井。他の者も同じように考えていると、揺れは更に激しくなる。

「ちょ、これヤバくないっ!？」

「震度5どころじゃありませんよッ」

突然、激しくなった揺れに耐えられず地面に座り込むと、この地震の規模に驚く御坂。同じく、初春も地面に座り込み固定されたベンチに掴まりながらいう。すると、そのとき白井があることに気付いた。

「ちょっ、あ、あれを見てくださいまし!！」

「「「なっ!？」」「」」

皆が白井に言われた方を見ると全員が自分の目を疑った。その方向にはどれほどの大きさか分からない、光の柱が出現していたのだ。

かなり離れているにもかかわらず、その光の柱がかなり太いことがわかる。そして、それだけではなくその柱がどこまでも天へ続いているのだ。

「な、なんですかアレっ。どっかの衛星兵器の攻撃とか!？」

「……違う、あれは雷よ。なんでか分からないけど、少しぼやけてあれから雷の感覚を感じる」

「そんなこと言っても、あんなのできる電撃使いは御坂さんぐらいしかいませんよっ」

「私でも無理だって。てか、あれはそもそも能力者の攻撃なの？」

電撃使いである御坂が光の柱の正体を雷だと言うと、半泣きになりながら叫ぶ初春。だが、学園都市最強の電撃使いでも不可能というあの光の柱。それが能力者の攻撃なのか、それとも実験のなにかなのかはその4人には理解できなかった。

同じく第七学区のとある学生寮では……。

「おー、兄貴。地震だぞー」

「にゃー、危ないから気を付けるんだぜい」

夏休みになったため兄の部屋の掃除にきた土御門舞夏は、部屋の掃除機がけをしていると揺れを感じた。なので、掃除機を止めるとチ

ヤチャッと倒れたら危ない物を床において自分の兄に話しかける。
すると、ベッドでマンガを読んでいた兄・土御門元春もマンガを読むのを止めて座りなおした。

「おーおお？　こ、これヤバくないかー！？」

「とりあえず、ベッドに座れっ。物が倒れないとこにいるんだっ」

急に地震の揺れが激しくなると驚く舞夏。その様子をみて妹の安全を確保するため、すぐに立ち上がり舞夏を自分の座るベッドへと連れてくる土御門。そのまま激しい揺れに耐えていると今度は窓の外が眩しく光った。

「なんだあれー！？」

「なっ！？（あれは魔術か！？　しかし、魔術の気配など全く感じなかった…。現に今も肉眼で確認する以外、魔力を感じていない。それに、あんな規模の魔術など聞いた事もないぞッ）」

地震の揺れだけでなく、窓から見えるその光の柱に驚愕する土御門兄妹。妹の舞夏は純粋にその光景が理解できず、魔術師でもある兄の土御門は発動してからも一切魔力を感じないその魔術に驚愕し、そのまま動けなかった。

そして別の街中では……

「やっぱ、夏休みになるとガキどもも浮かれて、すぐ騒ぎ起こすじ

やん」

「まあ、私たちも学生の頃は似たようなもんでしたから」

警備員である黄泉川が呆れたように言葉をこぼすと、それに苦笑しながら答える鉄装。現在、2人は路地裏でスキルアウトがケンカしていると通報があり、その騒動を治めてきた帰りだ。帰りと言ってもまだ巡回パトロール中のため路地裏の方をみたり、騒ぎを起こしている者がいないか注意しながら歩いている。

「でも、さすがにこの暑さの中、騒ぐやつらの気持ちは分からないじゃんよ?」

「それぐらい今の子たちは元気ってことですよ」

「そんなもんかねえ」

こんな真夏日に騒ぐ馬鹿どもに黄泉川が呆れていると、楽しそうに答える鉄装。騒ぎや問題はない方がいいが、学生たちが楽しそうに夏を満喫する姿が見れるのが嬉しいそうだ。そんな鉄装の言葉に暑さに疲れているため、テキトーに答えるとあることに気付いた。

「ん? 地震じゃん?」

「あー、珍しいですねえ」

「い、いや、これかなりデカイじゃんよ!?」

黄泉川は地震に気付きそれを鉄装に伝えようと、のんきに答える鉄装。だが、その次の瞬間激しい揺れに襲われ思わず倒れてしまう。まわ

りの人間も同じように倒れ、走っていた車も急ブレーキを踏んで止まっている。見た感じ事故はまだ起こっていないが、これは怪我人や事故が発生してそうだと支部に連絡しようとする、鉄装があるものに気付いた。

「せ、先輩っ、あれ!!」

「んあ？ なっ!？」

言われた方に振り向くと思わず声を失う黄泉川。それもそのはず、見た方角には天へと伸びる光の柱があったからだ。その太さと高さに驚いていたが、これは緊急事態だと急いで警備員の本部の方へ連絡をする。

「こちら黄泉川。現在、学区のはずれに謎の光の柱が出現。能力者の能力か、兵器及びなにかの実験かは不明。地震がおさまり次第、現場へ急行するよう申請する」

『こちら本部、了解。だが、衛星からでは光の柱は確認できず。肉眼でのみ確認できることを伝えておく』

「こちら黄泉川、了解。……って、ことで地震がやんだら向かうじゃん。つか、なんだってんだありゃ？」

そう言った黄泉川の問いに答えられる者はいなかった。

上条の放ったインドラの矢に呑み込まれたメンバーたち。今もなお

光の中にいるが、彼女らは生きていた。

「ぐう…動けませんけど、なぜだか超生きてます」

「ええ…信じられませんが、上条当麻の張った結界のおかげでしょう。外にこれだけの影響を与えながらも、異相として完全に切り離しているため術の余波以外の被害を出さないようです」

地面に押し付けられながらも、冷静に答える神裂。他の者も動く事は出来ないが、生きていることからそれが正しいことなのだろうと理解する。そうして、光が止むのを待つ中1人だけ動こうと必死にもがいている者がいた。

「諦めなさいよ、動けるわけないでしょ」

「五月蠅いつ、どうやってでも僕は彼女の元へ行くんだ！」

地面に寝ている限り潰れはしないが、少しでも起き上がるとかなりの力を上からかけられるにも関わらず、インデックスを救いに行こうとするステイル。仮に辿り着けたとしても、インデックスに味方し上条の攻撃を受ければまず無事では済まないだろうとみなが思った。

「……インデックスも心配だけど、術者のとうまは大丈夫なのかな？」

「結局、もう5分以上はこうしてるって訳よ」

「……正直に言えば、無事とは思えません。ですが、これほどの魔術を使えるのであればもしかしたら」

お互いの姿はほとんど見えないが、そういう神裂の声の調子から暗い表情をしているのだろうと他の者は推測する。そうして、上条の放ったインドラの矢の重圧に耐えていると光が徐々に収束していることに気付いた。

「お、動けるようになってきたって訳よ。まあ、地面と空気はまだ揺れてるけど」

「結界内の光も消えてきましたね。中は超どうなってることやらフレンダと絹旗の言葉をきき、自分の身体を起して立ち上がるメンバーたち。神裂とステイルも同じく立ち上がるが、ステイルはそのまま結界内が見える所へと走っていった。他の者もゆっくりとだが、後を追うとステイルは結界の境界のところにいき腰を抜かすように倒れた。

「どうしたのよ？」

「あ、あいつは、なんて魔術を使ったんだっ！！」

そう叫ぶステイルに皆が追い付き結界内をみると、そこは先ほどまでと同じ場所とは思えない光景が広がっていた。

「じ、地面がなくなってる！？」

「ううん、かなり深いけど平らになってるみたい。あれが結界の底だったのかな？」

驚くフレンダに冷静に返す滝壺。だが、フレンダが驚いたのも無理

はない。先ほどまで自分たちが立っていた場所のようにそこには確かに地面があったのだ。だが、光が消えて中を見ると境界でキレイに断裂し、境界内の地面が消えていたのだ。その深さは数十メートルはいくと思われる。だが、その地面が平らであることから境界は地面の下にも張られていたようだ。

「あ、あの子はいったいどこに!？」

「いました。その傍らに上条当麻も立っています。しかし、インデックスの歩く教会は完全に破壊されているようでボロキレのようになっています。あの様子では息があるかどうか……」

確かに魔神となったインデックス相手に手加減してる余裕はない。なので、上条当麻のとった行動は規格外の威力とはいえ理解できる。だが、大切な親友のことを考えると、神裂は割り切れない気持ちがあった。

ステイルと神裂がインデックスの様子に衝撃を受けていると、他の者は上条の身が無事であることにホッとしていた。だが、そのまま見続けていると上条が距離をとり始めた。

「ああ？　上条がインデックスから離れていくわよ？」

「死んじやったんでしょか？　なら、殺したことに超耐えれなくて離れても無理はないかと」

「くう、絶対に許さんぞ上条当麻。あの子を殺された恨み絶対に晴らしてやる」

「そんなことしたら私たちがアンタを殺すって訳よ」

離れていく上条を睨みながら地面を強く握り抉るステイルを見て、システムのメンバーは暗部としての顔で立っていた。その一触即発の雰囲気の中、神裂が上条の方へ視線を移すと。上条は先ほどの金剛杵を破壊して、何かを始めるのが見えた。

「なっ、神具を容易く破壊した!？」

「……また、上に手を向けてる。まだ魔術を使うのかな？」

「さっきと似たようなのを取り出したわね。あれは、錫杖かしら？」

出現しただけであれほどの影響を周囲にもたらした神具を、上条が簡単に壊したことに驚く神裂。だが、システムのメンバーはそれがどういったことなのか分からないため上条を見ていると。上条は再び天に手を向け魔法陣を展開し、今度は錫杖を取り出した。さきほどの金剛杵と違い、それほど大気の震えを感じないことからいくらかランクが落ちる代物なのだろうと推測する。

「なんか、メチャクチャまわしてますね。錫杖ってそんな棒術みたいに超使う物じゃないでしょうに……」

「とうま上手いね。普段は素手で戦ってるけど、武器とかも使えるんだ」

「なに呑気なこと言ってるのよ。あいつが道具使って何かするつもりなら離れるわよ。さっきみたいになんかになりたくないでしょう？」

麦野がそう言うのと素直に言う事聞くメンバーたち。神裂もそれについて行こうとしたが、ステイルが動かないのを見て、その場に残ることにしたようだ。そうして距離をあけると上条の魔術の影響が異変が起き始めた。

「な、さっきとは魔法陣の出方が違うって訳よ!」

「四方を囲むようにして上にも1つあるってことは下にもあるわけ。自分らを囲むように6つ展開したってことかしら?」

フレンドの言葉に答えるように麦野がいうと、その通り6つ展開されている魔法陣の色が白から赤へと変わった。そのまま、その変化を見ていると急に魔法陣から炎が始める。

「ええっ!? 光の次は炎って、当麻さんもしかしてインデックスを超火葬するつもりですか!？」

「ここからじゃ、とうまが見えない。私やっぱり近くで見てくる」

滝壺はそういうと神裂たちのいる境界の方へ走っていった。メンバー1人を置いて行けるわけもなく、他の3人も滝壺のあとを追いついて、結界内は炎に包まれていた。

「あ、あいつはまだインデックスになにかしように言うのかッ」

「なんででしょう……このような炎の魔術はみたことがありません。炎が流れのように動いている?」

他の者が戻った事でそれを説明するように言う神裂。他の者にとっては魔術自体ほとんど知らないのも、神裂も知らないと言われても

さらに混乱するだけである。だが、聞くよりは見た方が早いとその様子を見ていると、炎は渦を巻きながら上空に集まり始めた。

「炎が集まってるわね。あれで一気に焼くつもりかしら？」

「なんか、塊になり始めたわよ」

麦野とフレンダがそういうと、他の者も上空を見上げた。たしかに言う通り炎を渦巻いて上空に集まりひとつの塊になり始めていた。だが、その分下の炎が消えたことで、上条とインデックスの姿が見えるようになった。

皆が、上の炎を見ながらも上条の動向に注目していると上条の舞のようなものが止まった。そうして上条は錫杖を地面に突き立てる。

「―――出でよ、孔雀明王」
オン・マユラ・キランディ・ソワカ

グングニルによってインデックスの動きを止め、インドラの矢で歩く教会ごと全ての防御術式を壊し、すでにインデックスは死んでもおかしくない状態になっていた。神の一撃とも言える雷に包まれた魔神は、攻撃を受けながらも回復魔術を施し続けギリギリのところまでその本体であるインデックスの命を守りきった。

だが、それに全ての魔力を使い、その最大の防御である歩く教会もすでに霊装どころか服としての機能も失っている。その本体であるインデックスの身体も全身が酷い火傷のようになり、いたるところから出血している。このような状態では動かす事もできず、たとえ

冥土返しでも処置のしようがないというだろう。

だが、上条当麻まだインデックスへ向け魔術を放つ。錫杖を地面に突き立てると、上空の炎の塊はなにかの形を成していく。先ほどの光の柱ほどでないにしろとてつもなく大きいことに変わりはない。また、それがあある形になっていくとすれば人々の驚きもより大きくなるだろう。そう、その炎の形は――――

「ほ、鳳凰ッ!? 炎の鳥、鳳凰です!」

「と、とうま流石にそれはやり過ぎだと思っ」

「やつはインデックスの亡骸さえも残さないつもりかッ」

「羽根の幅がさっきのインドラの矢と変わらないわよ!?!」

そう、上条が呼び出した炎は1つに集まり、巨大な炎の鳥“鳳凰”の姿となっていた。先ほどよりも地面の揺れは少ないが、大気の震えは先ほどよりも大きくなっているように感じる。ただ存在するだけで、ゴゴゴゴッ!という音を辺りに響かせる鳳凰は、インデックスの方を見ながら空中で羽ばたき留まっている。

皆が再び驚いていると、上条は錫杖を消しインデックスに近付く。その傍らに立つとそのまま天に手に向け言葉を発した。

「―――さあ、殺し尽くせ鳳凰よ」

上条が静かにいうと、鳳凰はそのまま上空から急降下し上条たちを
炎で包みこんだ。

第四十四話 神の代行者の力（後書き）

描写してませんが、鳳凰も街から見えています。なので、みんな「
今度はなんだ!？」とビックリしまくります。

第四十五話 魔神との決着（前書き）

竜王の殺息の羽根なんて、インドラの矢ですべて焼き払ってあります。

第四十五話 魔神との決着

インデックスは意識を失いながらも何かに包まれていることに気付く。先ほどまで痛んだ身体は、その温かいなにか包まれるとすぐに痛みがひいていった。その温かいなにかに身を委ねていると、近くに人の気配を感じる。その人物を見るためインデックスは目を覚ました。

「ん……あれ？　とうま？」

「なんだインデックス？」

「とうま、髪型がいつもと違う。それにこの炎はなに？」

インデックスは炎の中で自分を抱きかかえる人物が上条だと分かった、普段との違いを指摘し現状の説明を求めた。

「この炎は浄化の炎だ。瀕死のお前を回復するためのもあるが、お前に施されていた他の呪印を破壊するために使ったんだ」

「ふーん。喉以外にもあったの？」

「心臓と脳にな。さすがにそれは幻想殺しじゃ壊せないし、壊して防衛機能が出たらやっかいだから、お前が魔力を使いきるようにしてから解呪したんだ」

そういつて笑う上条の説明に納得するインデックス。喉の呪印を破壊されたあとのことは覚えていないが、きっと魔道書を守るために自動迎撃するよう魔術が組み込まれていたんだろう。

もしそうなら、上条は10万3000冊の魔道書を持ちありとあらゆる魔術を使える魔神と戦ったことになる。聖人だけでなく魔神すらもこのように倒してしまいう上条当麻という存在に、インデックスは驚いたが不思議と怖さは感じなかった。

「ねえ：聞きたいんだけど、どうして私は裸なのかな？」

「ああ、俺の攻撃で歩く教会を破壊しちゃったんだ。そこに残骸ならあるけど着れないだろ？ だから、地面に置くよりはマシってことで抱きかかえてるんだ。見えたら危ないから動くなよ」

「理由はわかったけど、納得できないかも。それなら当麻の上着を着せてくれるくらいしても良いんじゃないかな？」

「炎がおさまるまで待ってろ。これを浴びてたら身体中の傷や汚れも落ちるんだぞ？」

そういつてインデックスの頭を撫でる上条。言われたインデックスとしては、恥ずかしいのでさっさと服を着させて欲しいが大人しく言う事を聞いた。そうして待っていると徐々に炎がおさまってきたので上条はインデックスを地面に立たせ、完全に炎が消えるのを待った。

「よし。じゃあほれ、これ着ろ」

そういつて上条が何もない空間から取り出したのは間違いなく本物の歩く教会だった。そのことに驚いたが、インデックスはとりあえず服を着てから質問することにした。インデックスがいそいそと服を着てる間、上条はそちらを見ないようにして何かをしている。

「――結界解除、外の世界とのずれを修正し同期させる」

そういうと結界内の地面が揺れ、空や遠くに広がっていた水色の結界は解除された。渡された服を着たインデックスはその様子に驚いたが、トテトテと上条のもとに近付く。

「さっきの結界ってなに？ あんな魔術みたことないんだよ」

「俺のオリジナルだぞ。まあ、詳しくは教えないが神話をモチーフにしてるんだ。それより、あいつらが待ってるから戻るぞ」

そう言う上条とインデックスはその場から消えた。

「よっと、お前ら大丈夫だったか？」

「っ！？　とうま、それにインデックスもどうして無事なの？」

「よくわかんないけど、あれは浄化の炎なんだって」

急に後ろから話しかけられた理后は俺たちをみて驚いたみたいだが、インデックスは笑顔で近付くとそう説明した。他の者も驚いていたが、とりあえず俺らが無事であるかわかるとホッとしたような表情になる。まあ、魔術師2人はインデックスに駆け寄って本当に無事か確認し始めたがな。

「インデックス、本当に大丈夫のですかッ？」

「うん。戦ってる間のことは覚えてないけど、とうまが全部やってくれたから呪印ももうないんだよ」

「本当に良かった、本当に……」

地面に膝をつきインデックスの手を握りながらそういうステイル。まあ、あんだだけの攻撃見てたらそりゃ心配するよな。そう考えながら俺はメンバーたちのもとへいく。

「当麻さんやりすぎですよ。結界の外まで影響出てましたよ？」

「ああ、まあ手加減してられなかったんだ。変に手加減するところちがやられるし、そうになったら加減が効かなくなってホントに殺しちゃうからな。だから、短期決戦にしたんだよ」

「それはわかったけど、なんで髪の毛降りてるのよ？」

「ああ、魔術を使う時にこうなるんだ。身体を守るために内向きに幻想殺しの力を使うと、汚れや不純物を排除するんだ。だから、人工物の整髪料も落ちちゃうんだろう」

俺がそういうと普段とは違う髪型が珍しいのか、近付いてきて髪を触るフレンド。「おおー」とかいらないから、そんなに触るなよ。そう思いながらフレンドの帽子を奪って自分で被る。

「ちょ、人の勝手に取るな！」

「はいはい。まあ、ここにいたら人がくるから店に帰るぞ」

そういうと俺はすぐに全員を店内に転移させた。

音もなく店内に転移すると魔術師たちは再び景色が変わったことに驚いているが、構わず地下に向かう俺たち。と、その前に。

「インデックスも一緒にこい。最後に神の奇跡をみせてやる」

「神の奇跡ってなあに？」

「それは地下についてからのお楽しみだ。お前ら2人はもう帰って良いぞ、おつかれ」

そういつてメンバーらは先に地下に向かい、インデックスも俺の後ろついで移動する。だが、帰るよう言われた2人は急にそんなことを言われても困るのか、追いかけてくる。

「待て、いくらインデックスが無事とはいえ。あんなことをしたお前を僕は許さないぞッ」

「―――神デミスに仇なす者に罰を」

「があっ!!」

肩を乱暴に掴んできたステイルに向かって俺がそう言うと、ステイルは床に倒され起き上がれないでいる。まあ、デミスってのは古代

ギリシア語で『不変の掟』って意味だ。だから俺が使ったのは、人が神に逆らってはいけないうって意味で、俺に害を与えようとする者に効果のある一種の天罰術式だな。

「お前、勘違いしてないか？ インデックスを救ったのは本人のためであり、俺の自己満足だ。別にお前にどう思ってもらおうと関係ないんだよ。けどな、俺に手を出すってんなら話は別だ。さらに言うなら、俺の仲間であるコイツらに少しでも傷をつけてみる。そのときはお前を死より怖ろしい目にあわせてやる」

突然のことに驚くインデックスと神裂を無視して進むと、他の者は驚きながらも嬉しそうな顔になっている。どうしたんだ？ そう思っている、最愛が歩いてきて俺の手を引っ張ってきた。

「私たちのこと超仲間って言うてくれるんですね」

「なに言ってたんだ、当たり前だろ。ここだけの話し、最初のインデックスの攻撃の対象が神裂とステイルだけなら盾を展開しなかったしな」

そう言うときさらにニコニコとする最愛。理后とフレンダも笑顔になっているし、麦野も満更でもないって表情だ。そういや会ったばかりのときに「そんなときはお前らを仲間だって公に言っても良いし、命懸けで助けてだってやるさ」って言ったんだっけ。だから、信頼されてるって喜んでるのかねえ。なんて考えていると、後ろで少し落ち込んだ表情になった神裂が口を開いた。

「……あの、それは本人のいないところで言うて欲しいのですが」

「まだいたのか？ さっさとその赤毛と一緒に帰れよ。もうイ

ンデックスは死なないんだし、用はないだろ？」

「いえ、連れ帰るのが元々の任務です」

「いいって。お前らに預けるより、こっちにいた方が安全だからさ。それとも力づくでインデックスを攫っていくか？ そのときは俺への敵対行動と見なし、生物以外のイギリス全土を焼き払ってやるぞ？」

俺の言葉を聞き、どうすればと苦悶の表情を浮かべる神裂。俺と魔神・禁書目録の戦いを見ていただけに、その言葉が冗談ではないと理解したのだろう。その後ろでテミスから解放されたステイルも立ち上がり、悔しそうな表情を浮かべている。そうやって魔術師を敵として冷たい目でみていると最愛の握っている方と逆の手をインデックスが引っ張ってきた。

「とうま、今からやることまでは居させてあげちゃダメかな？」

「……お前が良いなら別にいいぞ。ただし、地下では目隠しをしてもらう。一応、基地なんてな敵に内部の構造を知られるわけにはいかないんだ」

「わかりました。それでも良いのでお願いします」

そういつて丁寧に頭を下げてくる神裂。後ろに立つステイルは全く頭を下げていないが、所詮はガキだしな。気にするだけ無駄だろうと、そのまま地下へと向かった。

第四十五話 魔神との決着（後書き）

こんな感じですがどうでしょうか？ 原作では自動書記との戦いで記憶を失いましたが、別の展開にしてみました。まだインデックス編は続きますが残りはオリジナルエピソードになります。

第四十六話 秘密の区画（前書き）

先に注意しておきますが、今回の上条さんはかなり性格悪いです。しかしそれは、魔術師2人をおちよくするためにやっているだけで、素の性格ではありません。なので、不快に思われるかもしれませんが、今後似たような状況以外ではやらないので安心してください。

第四十六話 秘密の区画

インデックスに神の奇跡をみせるため、俺たちは地下にきた。だがその前に魔術師2人に目隠しをするため地下への入り口のところ以待つようにいうと。フレンダの倉庫のとは別の武器庫から拘束用の道具を引っ張り出し、目隠しとロープだけ持って入り口に戻る。

「ほれ、2人ともつけろ。言っておくが妙な真似したら、それに仕込んである爆弾を爆発させて一生目が見えないようにしてやるかな」

「っ!？ ……わかりました、気をつけます」

「……了解」

魔術師2人はそういつて受け取ると、素直に目隠しを装備した。その2人にロープを握らせると、神裂は理后、ステイルは麦野に先導させた。まあ、ホントは学園都市製の光の透過率がゼロってだけの普通の目隠しなんだがな。脅して下手に動けない2人をからかうために、インデックスにちょっかいをかける。

「ほおら、インデックスー。低いひくーい」

「ちょっと、とうまっ。ホントに危ないんだよっ!」

「大丈夫だって。ほら、今度は高いたかーい」

「いたっ、ちょっと天井にぶつかったよ! 遊んでないで、降ろしてっ」

俺はまず、急に歩いているインデックスをお姫様抱っこすると、足だけ持って顔を地面すれすれまで降ろした。そして、それに文句を言われると今度は抱っこし直して天井に向けて放り投げた。歩く教会があるから大丈夫だと思ったが、最初の低いひくーいで帽子が脱げたため、頭が天井に当たると痛かったみたいだ。失敗失敗。

「ははっ、ちょっとしたミスじゃないか。ほら、最愛とフレンダにもやってやるからこいよ」

「超遠慮します」

「いや、年齢的に高校生の人にやろうとすんなし」

「言葉崩れてるぞ金髪。…という訳で、インデックスでしか遊べないんだよ」

そうしてインデックスを使って遊んでいると、神裂は心配そうな表情を、ステイルは菌を食いしばって耐える表情をしている。ふふふ、こういう地味な精神攻撃が一番きついんだよな。すると、ステイルがロープ先導係の2人に話しかけた。

「君たちの仲間は悪魔か、どうしてこんなにも人の《ドゴツ》ぐほっ」

「とうまの悪口は許さないよ」

「滝壺、歩くの遅くなるから腹はやめときなさい」

俺のことを悪魔と言ったステイルに表情1つ変えずに拳を決めた理

后。目隠しして全くガードできない人間に腹パンとは怖いことしやがる。やられたスタイルも「クソッ、ここにはまともな一般人はいないのか」とお腹をさすりながら立ち上がった。つか、麦野も攻撃自体は賛成なんだな。

「そーだ、今から神裂のシャツ解きゲームしようぜ。失敗して腕掴まれたら負けな」

「ま、待ってください。なんのためにそんなことするんですかっ」

「暇潰しに決まってるだろ。道順を分からなくするために、遠回りしないといけないんだ。そんな、いらぬ苦勞をさせるんだから暇潰しくらい付き合えよ」

「いえ、それとこれとは話が別じゃないですか」

「まったく、お前らは我儘ばかりだな。俺が床を舐めろと言えば便所だろうが床を舐め、俺が逆立ちしろと言えば電車内だろうが逆立ちするのが普通だろうが」

「どこの独裁者ですかっ！」

俺がやれやれといった雰囲気相手が相手に伝わるように言うと、神裂は目隠しをしていながらもちゃんと俺の方を向いて突っ込みをいれてきた。俺の知り合いには突っ込みキャラが不足してるからな。こんな突っ込みをしてくれるなら、こいつと友達になるのも良いかもしれない。そう考えながら神裂に返事をする。

「馬鹿をいうな、すでにフレндаとインデックスはそれぐらい馴れてあるぞ。この前のフレндаのパンツ全開で逆さになるのなんて

見せたかったくらいだ」

「いや、あれは当麻が無理矢理してきたって訳よ」

「インデックスも俺の盾となれと命じたら、学園都市最強のうちの1人である麦野の攻撃から俺を守ったしな」

「……急に人を盾にしたくせに」

俺自慢の従順な仲間のエピソードを話すとジト目で見てくる2人。自分は当たり前のことをしただけで、人に自慢する事じゃないってか？なんて素晴らしいやつらだ。そう思っていると、神裂とステイルが疲れた様子で話をしている。

「神裂、僕はこの男をインデックスの傍に置くのは反対だよ」

「……奇遇ですね、私もかなり不安になってきたところです」

「ふざけたこと言ってるって張り倒すぞ。ロリコンストーカーと露出狂女の方が問題ありまくりだろうが」

俺にそう言われ、言い返したいが爆弾があるし他のメンバーに攻撃されるおそれもあるので言い返せない2人。その様子を笑いながら見ていると目的の部屋の前についた。俺はカードを取り出すと読み込ませてドアを開ける。

「あれ？ 中にも通路があるんですね。私、こんなところがあるなんて超知りませんでした」

「私は部屋の前まではきたことあるけど、カード通しても反応な

かったから諦めたことあるわ」

いままでこの部屋の存在を知らなかったという最愛に、基地の探索でもしたのか謎の部屋として知ってはいた麦野。構わず中の通路を歩いてると、他のメンバーも話しかけてきた。

「とうま、なんでここは扉の中にも通路があるの？」

「ここは少し特別なんだ。だから、俺のカードじゃないと開かないってわけだ」

「ふーん。この先にはなにがあるって訳よ？」

「予想してみろ、当たったらなんかやるぞ。魔術師2人も参加しているからさ」

俺に言われて考え始めるメンバーらと魔術師の3人。まあ、他の部屋と違い、俺しか開けない区画は他にもいくつかある。そんな中でもわりと実用的な部屋なのだが、普通は予想できまい。そう考えていると、各々が自分の予想を言い始めた。

「金庫かな？」

「ブー、理后は解答権喪失な」

「じゃあ、拷問部屋とか？」

「……お前が望むなら今度創ってやるよ」

「いや、遠慮するって訳よ」

理后とフレンダが先ず答えたが、さすがに拷問部屋はないだろう。それにもし作るなら独房の近くに作って、捕まってるやつらに声が聞えるようにしてやるぜ。そう考えていると、今度はインデックスが答える。

「とうまの個人的な趣味の部屋」

「それをお前らに見せてどうなるんだ？」

「んー、それについていける人を可愛がるとか？」

首をかしげながら言うてくるインデックスに「ねえよ」と答えると、「そっかぁ」と残念そうにしている。悪いが残念なのはお前の頭の方だと言いたいのがグツと堪えると、神裂が口を開く。

「教会とか聖堂みたいなところですか？」

「んー、違うけど。他のやつよりはまだ近いな」

「では、映画館で」

「お前の趣味だろそれ…」

神裂の答えが近いと言ったのにすぐに映画館と答える最愛。それは流石にないだろうと思って見ると、「テヘッ」と言ってきたのでこちらも笑顔で返し肩に担いでやる。ごめんなさいと暴れてくるが、別になにも悪い事してないのになんで謝ってくるんだ？そう考えていると今度はステイルが答える。

「書庫というか図書館みたいなものかい？」

「あー、そういやここ書庫なかったな。今度創るか。お前アイデア賞でインデックス・ストラップ作ってやるよ」

「……それは喜ぶべきかな？」

「帽子のありなしは選ばせてやるけど、服装は歩く教会な」

「……だれもこだわらないよ」

疲れたように言うステイルを無視してどんなデザインにしようか考えていると、俺とステイルの声のする方に向かって神裂が口を開いた。

「いらぬならください」

「……出来によっては君にあげるよ」

「なんだかんだ、ステイルも欲しいのな」

「それより本人にまず許可をとってほしいかも」

インデックス・ストラップについて盛り上がっていると、リアル・インデックスが話しかけてきた。だが、あまりに些細なことを言ってきたのでスルーしているとポカポカと叩いてきたので、最愛と逆の肩に担いで運ぶ。そうして歩いていると、目的地のドアが近付いてきたので最後の解答者の意見をきく。

「さあ、お前で最後だぞ」

「上で神の奇跡っていったし、神殿とかじゃないの？」

「おお、かなり近いぞ。ニアピン賞だな。お前には当麻くんストラップを作ってあげよう。ヘアスタイルはいつもの方な」

「まあ、もらっておくけど。たぶん、第3位とか第5位が見たら喧嘩になるわよ」

なぜ喧嘩になるのかは分からないが、面倒そうに言ってくる麦野。まあ、喧嘩になったら幻想殺しで仲裁に入るからいいけどな。そうして話していると、何故か理后がステイルの足をゲシゲシ蹴っている。なにやってんだよ……。そう考えている間にドアの前についたのでインデックスと最愛を降ろすとカードを通してドアを開けた。

第四十六話 秘密の区画（後書き）

もうすぐインデックス編が終了します。前にも言いましたが、原作1巻の内容を書き終わるのに50話までいった作者が他にいたでしょうか？ きつと思いませんが、いたらその作者様とは仲良くなれそうです。「日常会話のグダグダっていいよね♪」的なノリで。

あ、関係あるかわかりませんが、インデックス編のラストにヒロイン的なキャラが決まります。しかし、そのキャラは理解者の立ち位置なので上条さんの恋人ではありません。まあ、読んでたら予想できてと思いますが、のんびりと掲載されるのを待つて予想と違ってたら「お前かいっ！」と突っ込んでやってください。

第四十七話 神の奇跡（前書き）

個人的にこの作品は、先の展開が予測しやすいものだと思っています。原作沿い（？）ですし、伏線とかがありませんので。ですんで、準主役級キャラが活躍することは少ないです。

第四十七話 神の奇跡

「もう目隠しとっていいぞ」

中に入りドアが閉まると魔術師2人に声をかける。言われた2人はロープから手を離すと目隠しを外した。そして少し眩しそうにしてから、部屋の中へ視線を向けると驚いた表情をする。

「た、多数の魔法陣だっ!?　だが、こんな魔法陣みたことがないっ」

「これ当麻さんが超用意したんですか?」

「俺が創ったんだから当たり前だろ」

中に進みながら部屋の中の様子に驚くメンバーと魔術師たち。広さ的には演習場より二回りほど狭いが十分広い部屋だ。その部屋の壁や天井などいたるところに魔法陣が描いてある。中でも一番目をひくのは天井と床の真ん中に描かれている大きくて複雑な魔法陣だろう。

「なにこれ、私の知識でもこの魔法陣の効果が分からないんだよ」

「では魔道図書館には存在しないものなのですね。上条当麻、これはなんの魔法陣のですか?」

「実際に見たほうが早いな。ステイル、右袖を腕まくりして魔法陣の中に立て」

俺に声をかけられると、不思議そうにしながらも言われた通りにするステイル。右手の肘辺りまで袖をまくって魔法陣の中に立つのを確認すると、次は麦野に指示を出す。

「麦野、ステイルの腕を焼け」

「…了解」

言われた麦野は、腕を肩の高さで横に伸ばしているステイルに向け、太さを抑えたレーザーを放ち命中させた。

「ぐあっ…な、なにを「黙ってみてろ」」

突然、腕をレーザーで焼かれたステイルは、その焼かれた腕を掴んで床に膝をついた。俺はその言葉を遮ると、そのまま見ておけという。すると、魔法陣が輝きだしステイルの腕が同時に光り出す。そして、その光がおさまると腕は元の状態に戻っていた。

「これは…時間回帰か？」

「いや、超速回復魔術だ。血液を失っていると腕を切断されるとかじゃなければ、瀕死でも元のキレイな状態に回復させる」

「しかし、どうして魔力を使っていないのにこんなことが？」

「ここは龍穴なんだ。だからそれを利用して魔術を使えるってわけ。今は回復用の魔法陣を描いているが、探査用とか攻撃用のを組んでもかなりの威力で使えるぞ。つーことで、正解は儀式場だ」

笑いながら皆に向かって言うが、他の人間は部屋の中の魔法陣やさ

っきの効果で回復したステイルの腕を見ている。なんだよ……人の話聞けよ。そう思っていると、神裂とインデックスが話しかけてきた。

「龍穴と言いましたが、私にはまったく何も感じないのですが？」

「うん、私も感じないよ。でも、あれだけの効果の魔術を使えるのなら本当だと思うし。どうしてなにも感じないの？」

「んじゃ、下がってる。少し見せてやるから」

言うど2人だけでなく、他の者も壁の方まで下がらせる。みんながちゃんと壁際に行ったことを確認すると、幻想殺しを通常状態にして魔法陣の1つに触れて破壊する。すると、途端に部屋を中心に光が発生し周囲に突風を起し始めた。

「なっ、これはテレズマですか!？」

「おう、お前が身に宿してる分くらいすぐに回復させれるぞ。まあ、ここに集まるようにいじったんだが、これがあるから霊装だって『自宅で簡単に作れます』状態だ」

言いながら幻想殺しを内向きにして壁に破壊したものと同じ魔法陣を刻む。すると、先ほどまで部屋の中心で暴れていた光が消え、突風も止んだ。そうしてから皆のもとに行くと魔術師3人は少し呆けていた。

「こんな少人数なのに世界と戦える力があるとは、学園都市とはなんて場所だ」

「いや、当麻さんが異常なだけで。学園都市はそんな超変態的な街じゃありませんよ」

「これは流石に報告しておかないと、敵対したらこちらもただじや済みません」

「いや、ばらしたら。その瞬間にお前らを敵とみなし攻撃するぞ。公式では無能力者で、裏では無効化能力・幻想殺しを持つ者って言われてるんだ。お前らが報告していいのはそこまでだぞ。インデックスの首輪の破壊も幻想殺しで行われたと言っておけ」

そう言われると、了承するしかない2人は苦しそうな表情をしながらも黙って頷いた。さて、お喋りはこのぐらいにして、用件を済ますか。

「それじゃあ、神の奇跡を始める。インデックスは帽子を脱いで、魔法陣の中に座ってくれ」

「……うん。理由は教えてくれないの？」

「まあ、期待させたくないからな」

「そっか。じゃあ、私も訊かないでおくね」

インデックスはそう言うと言帽子を脱いで神裂に渡すと、笑顔で魔法陣に向かった。俺も魔法陣に向かうが、他の者たちに先に注意しておく。

「いまから儀式が終了するまでは、何が起っても騒ぐな。今からやることは俺でもかなり難しく、集中する必要がある。失敗すれ

ば俺とインデックスは植物人間になるかもしれない。だから、絶対に騒がないでくれ」

それだけ告げるとなにか言いたそうにしている皆に背中を向け、インデックスの待つ魔法陣の中に入る。発動していなくても、大量のテレズマを受けているこの魔法陣は淡く発光していて、中に入ると温かく感じる。まあ、疲れをとる効果もあるからな。なんて考えながらインデックスの頭を撫でる。

「とうま、大丈夫？」

「ああ、俺は大丈夫だ。今からお前に魔法をかけるが、それは痛みを伴う。すぐに回復するが、次々と新しい痛みを受けるだろう。だが、それでも俺はこれを成功させたい」

「……わかった。どんなに痛くても我慢して声を出さないようにする。だから、私に魔法を見せてね」

「ああ、上手くいったときは皆でお祝いパーティーだ」

笑顔で言ってくるインデックスに俺も笑顔で返し、頭を撫でるとインデックスは嬉しそうに「パーティー、楽しみだなあ」と笑った。俺はこの笑顔を失わせないためにも絶対にこの儀式を成功させる。そう魔術によって完全に消されたインデックスの記憶を蘇らせるんだ。

「……始めるぞ」

「うん、よろしくね」

「ふう……対象を認識、存在を把握」

まずはインデックスという存在の把握から始める。記憶はなくともそれがどういったことをしてきたかは、情報として読み取り知ることができる。なのでまずはそこから始めるのだ。そして、全体を把握したあとインデックスがどこから記憶を持っていたかの解析に入る。

「記憶照合……始点の把握」

細かく読み取ることでインデックスがどこから記憶を持っていたかを探す。だが、俺はインデックスの能力を忘れていた。

「……生まれてすぐだと？　そうか、完全記憶能力だったな。想像より大変そうだ」

自我発生の前の記憶のため、本人にしてみればビデオを見ている感覚かもしれない。だが、そこから始まっているのであれば、それもインデックスの記憶だ。だから、そこから詳細な情報として読み込んでいく。

「よし……じゃあ、いまから本格的に始める。酷い頭痛がするだろうが耐えてくれ」

「ふふっ、痛くしないだね」

「エスコートはまかせろ」

インデックスと最後の軽口を言いあうと、インデックスはやや緊張した表情になる。その顔を見てから俺は集中し直し、脳のどこにな

にを創りだせば記憶が消える前と同じ状態にできるかを知っていく。
ただ映像として脳に書きこむ程度ならここまで集中する必要はない。
だが俺は、そのとき感じた気持ちや、食べた物の味、吹いた風の匂い、その日の日差しの暑さまでもインデックスに取り戻してあげたい。

確かに、本物はすでにこの世に存在しない。上手くいったところでそれは俺が創りだした贋物かもしれない。でも、誰もがそれを偽りだと気付かず、世界すら騙し切ることができれば。それはもう他の人にとっては幻想じゃない。だから俺は自分だけが幻想だと知る奇跡をこの手で創るッ。

「――創造開始」

そう告げると俺はインデックスの脳内を探る。そこに元始種子によって知った場所に、情報を持つ細胞を創りだしそれを引き出せるよう、ネットワークも創りだしていく。当然、脳を弄られているインデックスに影響がないわけがない。

「ぐ……ああッ!!」

「ゴメンなインデックス」

「これは……記憶？　とうま、もしかしてっアア!!」

脳に直接情報を書き込まれ、そのままネットワークを弄られる痛みで叫ぶインデックス。俺も少しでも痛みを減らしてやりたいが、いかに元始種子で方法を知っても活動している人間の脳にピンポイントで情報を持つ細胞を創り出すのだ。「砂漠の砂の中にこの砂粒を

置いてこい、場所はこの砂とこの砂の間な。まわりは動かすなよ」
…と無茶なことと言われるレベルだ。

「ぐう……俺にも影響が出始めたか」

そう、これだけ短期間に複数の元始種子の能力を使っているのだ。詳細な記憶の読み取りだけでも、それらはインデックスの感じた情報を直接知るため実質同じ痛みなどを受けることになる。そんなのを数年分受けながら、先に言った作業をしろというのだ。こちらの脳にも負担がかからないわけがない。だが、それでも俺はやめない。これが自分のエゴだとわかっているから。

「はあはあ……わかるか、インデックス。お前の子どものころの記憶だ」

「うん……わかるよ…あのとき食べたお菓子の味や……みんなの声も」

苦痛に顔を歪ませそうになりながらも俺に笑いかけてくるインデックス。脳に書きこまれ、ネットワークをいじった痛みはすぐに回復魔術で消えていく。だが、消えてもまたすぐに次の痛みがやってくるのだ。それなのに自分の記憶が蘇ることが嬉しいのか、インデックスは俺に笑いかける。

俺は脳に莫大な情報を送られながら作業をするため、脳の血管が破裂し始める。だが、俺のエゴに巻き込まれたインデックスが嬉しそうに笑いながら苦痛に耐えているのだ。ならば、俺が先に倒れる訳にはいかない。どうせすぐに回復するのだ、腕だろうが脳だろうがいくらでも傷つけばいい。そうなったとしても俺は最後までやりとげる。

「はあはあ……とうま、ありがとう…」

「なに言ってるんだ…まだ終わってっ!？」　　があっ!！」

「っ!？」　　とうま、そこまでいいよ……そこから先は…魔道書が!！」

もう少しで終わると思ったとき、急に情報量が上がった。そう、インデックスが禁書目録として魔道書を見始めた記憶に達したのだ。前にインデックスの呪印を探したときは幻想殺しで汚染を防いだ。だが、今は元始種子の操作だけで手いっぱい、幻想殺しはオンオフを切り替えるくらいしかできない。魔法陣を破壊しないためオフにしている以上、そのダメージはそのまま俺を襲う。

魔道書の影響で脳だけでなく腕や足にまでダメージが出始めた。ホントすごいよな、こんな物を読んで無事でいられるなんて。それだけで途轍もない才能だ。この街ならば確実に超能力者級^{レベル5}だろう。そう考えながら記憶を読み込んでいると、あるときのステイルとインデックスの記憶にさしかかった。

「なんだお前……自分が魔術を作れ…がはっ…はあ、作れないなんて気にしてたのか」

「とうま、もういいっ……このままじゃ、とうまが死んじやうっ」

「騒ぐなっ…俺は大丈夫だから、お前は自分の痛みに耐えてろ」

自分も苦しいくせに泣きながら俺の心配をしてくるインデックス。確かにこっちもかなりヤバイが、まあ怪我はすぐに回復するしなん

とかもつだろう。あとは意識を最後まで繋ぎとめ、無事にインデックスの脳に書きこみを終えられるかどうかだ。あと少しだ、踏ん張れよ俺。

第四十七話 神の奇跡（後書き）

前書きの続きですが、わかりやすく言うところと幻想御手のときとかですね。初のシステム出動ってことで全員にメインっぽい場面を書きましたが。滝壺は上条さんに絡む感じ、フレンドは一瞬、絹旗も飛び降りて初春キャッチぐらいとメインか際どいです。しかも、上条さんと麦野の活躍を増やすために御坂をフレームアウトさせるという暴挙。

魅せる話や惹きこまれる文章を書ける作者様が羨ましい……と、思いながらも別にそこまで気にしてないんですけどね。センスがないなら数をこなせば上達すると思いますから。

第四十八話 奇跡成す（前書き）

今話のテーマ…伏線回収

第四十八話 奇跡成す

上条とインデックスが魔法陣に入ると、他の者は静かにそれを見守った。上条は儀式といったが、失敗すれば自分もインデックスも植人物人間になるとは一体何なのか。そう疑問に思ったが、インデックス本人がそれを受け入れたなら他の者は黙って見守るしかなかった。

「いったい何が始まるんだ」

「静かに、始まったわよ」

麦野がそういうと皆が魔法陣の方に集中する。魔法陣の中心で座るインデックスの頭に上条が手を置くとそれは始まった。

「ぐ……ああッ!!」

上条がインデックスの頭に手を置くと彼女は突然叫び声をあげ始めた。見た目にはどうなっているのか分からない。だが、確かに魔法陣も反応し、実際にインデックスの頭部に光が集まっている。その様子を見ている者は状況がわからず混乱する。

「急に痛みだしたぞっ、やつは何をしてるんだっ!」

「静かにっ、騒ぐなら叩きだすわよ。2人を死なせたいの?」

「しかし、頭に手を当てているだけであの痛がりようは尋常じゃないありません」

麦野が静かにするように言うと、先ほどより冷静になるステイル。

だが、神裂もインデックスの様子が急変し、苦しみ出したのを心配そうに見ながらいう。皆がそのように心配しながら見ていると、今度は上条も光始めた。すなわち、彼もどこかに怪我をしてそれを回復させていることになる。

「結局、2人ともどこを怪我してるって訳よ？」

「インデックスはある程度超予測できます。当麻さんが頭に手を置いていることと、実際に光を発していることから頭。それも脳内ではないでしょうか？」

「じゃあ、とうまはどこを？」

「……上条も脳か？　もしかしたら、能力の使い過ぎで脳の血管が切れたりしてるのかも」

絹旗と麦野の予測に驚く他の者たち。確かにそれが本当ならば、失敗すれば脳に何らかのダメージを負って肉体的には健康だが意識が戻らなくなるかもしれない。だが、なんのためにそんな危険なことをしているのだろうという疑問が浮かぶ。その答えに最初に辿り着いたのはフレンダだった。

「もしかして、記憶の再生？」

「っ！？」　そんなことができるのですか？　インデックスは魔術によって完全に記憶が奪われているのですよ？　封印や記憶を取り出せないようにしているのではなく、記憶をごっそり削除したんです。再生するものにも、すでにこの世に存在していないものをどうやって」

「それでも当麻ならできるかもしれないの（他の皆も知ってるかわからないけど、当麻は自分の能力を“作る”ではなく“創る”だって言ってた。情報を読み取ることができるなら、それを創り出せば記憶を再生できるかもしれない）」

フレンダは皆に言いながらもそんな風に考えていた。それは引越してきたばかりのころ、部屋で新しいベッドを頼んだ冗談のように話をしたときのことだった。あのとき、確かに上条は自身の能力を製作ではなく創造だと言ったのだ。上条の能力を『つくる』という音でしか知らぬ他のメンバーと違い、それはフレンダだけが知っていることだった。

上条を知らぬ魔術師の2人だけでなく、上条の能力の本質を知らぬフレンダ以外の3人はフレンダの言った意味が理解できなかった。だが、理屈よりも実際にみることで上条の目的はインデックスの記憶の再生だと信じられる。苦しみながらも当の2人は笑っているのだ。こんな状況で笑えるなど、それこそ世界にすでに存在しない記憶を再生させるという奇跡を行っているからなのだろう。だが、そこでまた異変が起こる。

「があっ！！」

皆が、苦しみながらも笑って儀式を進める2人を見守っていると、インデックスの比ではないほどの叫び声を上条があげた。その声に驚いて上条に注目すると全員が言葉を失う。

「と、とうまの身体がっ」

「大丈夫なのか？　すぐに回復しているから分らないが、全身から血を吹き出しているぞ」

ステイルの言う通り上条は叫び声をあげたかと思えば、直後から全身が光に覆われ始めた。それはすなわち全身に治療を施しているということだ。そして、遠目からでもわかる。上条の腕からは何度も血が噴き出していた。だが、超能力について知る者は不思議に思っていた。

肉体強化系のように肉体そのものを変化させる能力や、発電能力や発火能力のように身体から直接能力を出す物ならば肉体に負担が出るのはわかる。しかし、上条はそのどちらの能力でもないのだ。ならば、情報処理の負担で脳にだけダメージがいくはずだと。

「なんで当麻さんは身体にもダメージが出ているんでしょう。普通は脳にだけ負担が超いくはずですよ」

「わかんない。でも叫ぶ直前、それまで笑ってたインデックスが苦しそうにやめるように言ってたわ」

「……あの、上条当麻の言っていた『認識』とは、情報を読み取ったり記憶を読むような能力ですか？」

メンバーたちが上条の肉体ダメージはおかしいと話していると、そういつて尋ねてくる神裂。メンバーたちは能力について話しているものかと悩んだが、なにか心当たりがあるのならと少しばかり教えることにした。

「断言はできませんが、それに近いことをやっている能力みたいですよ。ですが、それがなにか超関係するのですか？」

「くっ……ならば、上条当麻の急変は説明できます。きっと、イ

ンデックスが禁書目録となり始めた記憶を読んだでしょう。つまり、彼も魔道書に目を通してることになるのです」

「なっ!？ そんなことすればすぐに廃人になるぞっ」

「そのため全身に怪我を負っているのでしょう。本来なら1冊でも死ぬ可能性があります、いまだに耐えて儀式を続行していること自体が奇跡です。もしこのまま生きて儀式を終えたなら、彼もインデックスと同じ魔神と呼ばれる存在になったと言えます」

驚くステイルに冷静に返す神裂。メンバーらは魔道書がどれだけ危険かは知らない。そんな本を読んだくらいでなにが起こるというのだ、と普段なら思っていたかもしれない。だが、廃人やら死ぬやらと物騒なことという魔術師と、全身から血を流しながらも儀式を続ける上条の姿からそれを信じるしかなかった。

「その魔道書の影響を減らすことはできないの?」

「現物があればそれを読まなければいいだけです。ですが、記憶の中のものを読んでいるとなると、儀式を中断させるしかありません」

「中断させたら2人とも植物人間になるって訳よ」

「この儀式が終了すると同時にすぐに病院へ連れていき輸血するしかありませんね。彼の血液型と一致するものがあればいいのですが…」

そんな風に話している間も上条の下には血だまりが広がり、上条自身も全身が強い光に包まれているという状況になっていた。そして、

儀式を受けているもう1人の人間は泣きながら、上条の身を案じ儀式が早く終わるよう祈っていた。

——そしてついに2人を包むその光は止んだ。

「っ!？ ステイル、かおりっ!! とうまを早く病院へ連れてって!!」

インデックスは儀式が終わり上条の手が離れると同時に、彼を抱きとめそう叫んでいた。言われた2人とシステムのメンバーらはすぐに2人に駆け寄り状況を把握するために動く。見たところ外傷は全て回復されている。だが、上条も言っていた通りこの魔法陣では失血は治療できない。なので、すぐにでも病院へ搬送することが一番だと判断した。

「魔術師っ、アンタらはインデックスを連れてきなさい。私たちは上条を病院へ連れていくッ」

「それならば私がそちらを担当します。聖人の私の方が早く連れていけるでしょう。誰か、道案内を頼みます、私におぶさってください」

「絹旗、あんたが一番軽いからあんたが行きなさい」

「わかりました、お願いします」

神裂にいわれ絹旗がおぶさると、すぐに上条を抱きかかえ神裂は儀式場を出ていった。あの速度ならすぐに病院へ着くだろう。そうすれば冥土返しが何とかしてくれる。死以外ならば全てを治療するというほどの医者だ。彼に助けられなければ、どのみち助からないと

いうことだろう。ならば、いまここに残る者がまず気にするのは上条が命懸けで救った者だ。

「インデックス。あんたは大丈夫？」

「うん。少し疲れたけど、なんともないんだよ」

「結局、記憶は戻ったって訳？」

フレンドがそう尋ねると、他の者は少し緊張した様子でインデックスを見つめる。尋ねられた本人は皆の顔を見てから笑顔になり口を開いた。

「うん、昔のことも全部思い出した。私がどんなところに住んだとか、ステイルとかおりと写真を撮ったことも全部ね」

「っ！？ おお、神よ。この奇跡に感謝します」

そういつて地面に膝をつき十字を切るステイル。もう戻らないと思われていた大切な人の記憶が戻ったのだ、その奇跡を神に感謝せずにはいられなかったのだろう。だが、その奇跡を起こした張本人の関係者はそれを聞いて怒りを表す。

「馬鹿、神なんかより当麻に感謝しなさいよ。そんなこと言っていると後ろから撃ち殺すわよ」

「フレンド怒り過ぎ。でも、私も少し許せないかな」

「良いんじゃない？ どうせ魔法陣の中なら回復するんだし、少しぐらい痛めつけてもさ」

そういうとステイルを囲むように立つシステムの3人。その様子を見ていたインデックスは口元を引き攣らせながらイソイソと魔法陣から離れ、狙われた男は囲まれたことに気付くと座ったまま後ずさる。

「ま、待て。勿論、やつにも感謝している。本当だッ」

「いや、やつとか言ってる時点で嘘でしょ」

「最低でも敬語だよね」

「ま、間違えましたっ。あの方には感謝しています。本当ですッ」

麦野と滝壺に言われてすぐに訂正するステイル。いかにエージェントとして活動しているといっても所詮は14歳。同じく暗部として活動していた年上の女性に囲まれては、下手な行動を取れなかった。そして、その内の1人は楽しそうに鼻歌を歌いながら銃を取り出すとすぐさま撃った。

《ダンッ!》

「うわあっ!?! あ、危ないだろ! 本当に当たったらどうする」

「大丈夫って訳よ。私、射撃は得意だから」
《ダンッダンッ!》

「ひい!?! た、助けてくれインデックス。君の友達を止めてくれ!」

「御祈りはしてあげるんだよ。終わったらとうまのお見舞いにいくから少し急いでね」

インデックスはそういつて壁に手をつきながら立ち上がると、今度は壁に背中を預けてステイルへの肅正が終わるのを見守った。その後ステイルは2人の女性の銃撃とレーザー攻撃から必死に逃げ、疲れたところを最後の1人にぶん殴られ倒れた。そうして気を失い再び目覚めると、そこは懐かしの独房だったとか……。

第四十八話 奇跡成す（後書き）

突然ですが、自分は使える設定は使う派です。なので、引っ越しのときの会話をここで持つてきました。読んでいた人にとっては「ああ、そういえば言ってたな」という感じでしょう。まあ、こうやって改めて過去の設定や話を使うと伏線のように見えるので、今後も古い会話を再利用したいと思います。

第四十九話 はじまりの場所（前書き）

実は昨日の投稿は予約投稿でした。投稿された時間に自分がなにを
していたかというと、富士山の頂上を目指していました。無事に帰
ってこれたので、今日もまた投稿したいと思います。あと、インデ
ックス編は次の第五十話が最後です。今回も長編の終りは総括理事
長のお言葉です。

第四十九話 はじまりの場所

大量の血を失い意識不明に陥った上条は、2つの幸運によって一命を取り留めた。1つは神裂という聖人がいたことにより信じられない速さで病院へ搬送されたこと。もう1つは世界最高の医者であるヘブンキャンセラ¹冥土返し²が丁度休憩時間ですぐに処置にかかれたことだ。

輸血する際、上条の血液型は少し珍しい型だったが、そこは冥土返し²の戦場。彼はその戦場において不敗なのは技術だけではなく、患者を助けるためありとあらゆる物を揃えているからだ。そのため、上条と同型の血液も勿論ストックがあった。輸血後も障害が残らないようにいくつもの処置をし、全てが終わるころには日が変わろうとしていた。

そしてその日は医者に言われたため店に帰ったが、次の日はみな朝から病院へきていた。冥土返し²の元へ行き、目を覚ました上条が精密検査を終え問題がなかったことを聞くと。全員で上条のいる病室へやってきた。

「上条、入るわよ」

そういつて病室のドアを開ける麦野。その後ろに少し疲れた感じのメンバーらとインデックス、神裂がついてきていた。

「ん？ よう、まだ朝だつてのに皆きたのか」

「そりゃ、心配だし朝から来るって訳よ」

「当麻さんは無茶し過ぎです。この前のことといい、そんなに病^こ

室が好きなんですか？」

意識不明に陥り生死の境を彷徨ったにも関わらず、呑気にあいさつをしてきた上条に呆れるメンバーたち。そして絹旗に尋ねられたことに苦笑しながら否定すると、インデックスが口を開いた。

「とうま、本当に大丈夫なの？」

「ああ、まだ少し疲れてるけど問題ないよ。お前こそ大丈夫か？」

「うん。本当にありがとう。とうまのおかげで私は本当の自分を取り戻せた」

「俺のエゴでやったことだ。気にしなくて良いよ」

そういつて上条が優しく頭を撫でるとインデックスは嬉しそうに笑った。そして他の者も、そんないつも通りの上条の様子をみて彼が本当に無事であると確認することができた。そうして穏やかなときを過ごしていると、神裂が上条に対し口を開く。

「しかし、10万3000冊の魔道書を見てよく生きていられたね」

「そこは奇跡としか言いようがないな。まあ、これで俺もモグリ
の魔術師から、魔導師や魔神と呼ばれる存在になったってことだろ
う」

「けど、とうまは魔神のインデックスにも勝ててたんだし。最初
から魔神じゃなかったの？」

インデックスと同じく10万3000冊の魔道書を読み魔神に至った上条に、そういつて尋ねる滝壺。他の者も確かにと思ったが、本人はなんてことないという風に答えた。

「いや、あれは戦闘用の魔術に特化してただけだ。本当の魔神みたいなオールラウンダーじゃないんだよ」

「いくら戦闘に特化していたとしても、魔神を打ち破るほどの力を持つてゐるなんて普通じゃありませんよ。それが科学の街の学生というならなおさらです。：しかし、魔神となりましたが今後はどうするつもりですか？」

「別に。最初から普通の人間にカテゴライズされてなかったし、魔神と言つても肩書きが増えた程度だ。だから、今後もいままで通り生活するよ」

神裂の問いに何でもなしのことに答える上条。いくら魔術に詳しくないとはいえ、この数日で世界でもトップレベルの魔術を目にしてきたメンバーたち。その魔神という存在がいかに規格外のものかは理解していた。だが、それを肩書きが増えた程度といった上条には、みなポカンとするしかない。

「え、そんな軽くていいの？」

「肩書きつて言つても超能力者以上のものつて訳よ？」

「いや、お前らが言いたい事もわかるが。そもそも俺は『^{ザーパー}世界を監視する者』だつて言つたろ？ お前らを見てる側になんて呼び名をつけるんだよ。普通は逆だろうが」

麦野とフレンドがそんな簡単に済ませていい物ではないだろうと、暗に言ってくる。だが、上条にとってはそもそもその前提が間違えているらしい。そして、世界を監視する者という言葉は初めて聞いたインデックスと神裂はなんのことだと頭に『?』を浮かべている。

「あー、お前らには説明してないが、俺は普通の人間じゃないんだよ」

「いえ、それは見たらわかります」

「……まあ、いいか。んで、お前ら聖人が神に作られた人型の器だとしたら、俺は神によって選ばれた力の発現機なんだ。だから、最初から俺は世界に対しなにをやるかって選ぶ側であって、お前たち世界の枠内で生きてるやつらとは違うってわけさ」

そう説明すると、信じられないが言葉としては理解した様子になる魔術師の2人。詳しく説明しようにも概念的なものであるため、それ以上は説明できない上条にとってはそれだけでもありがたかった。そして、話をきいて疑問に思ったのかインデックスが口を開く。

「どうして、とうまはそんな存在になったの？」

「生まれつきだ。偶然なのか、なにか選ばれる要因があったのかはわからないがな」

「まあ、なんにせよ当麻さんは超規格外ですから。確かに魔神も肩書き程度の扱いでいいのかもしれませんがね」

絹旗はそういつて強引に話をしめた。時計をみると確かに結構な時間が経っている。無事だったとはいえ、いまだに疲れの残る上条に

これ以上相手させるのは悪いと思ったのだろう。皆も同じように考え今日はこれぐらいで帰ることにした。

「じゃあね、とうま。また明日もくるから」

「開店がまた延びるからさっさと元気になりなさいよ」

「それじゃあ、超休んでください」

「あ、赤毛を独房に入れておいたの忘れてたって訳よ」

そういつて挨拶をして病室を出ていくメンバーたち。続いて魔術師の2人も挨拶をして出ていく。

「インデックスのことは本当にありがとうございました。また改めてお礼をしに来ます」

「とうま、早く元気になって約束のパーティーしようね！」

「ああ、すぐに元気になるからお前もみんなに教わって1つ料理作れるようになって」

「わかった。それじゃあ、またねっ」

インデックスはそういうと笑顔で病室から出ていった。

皆がいなくなると疲れたのか、深く息を吐きながら1人苦笑する上

条。すると、病室のドアが開いた。誰か戻ってきたのかなと思い、そちらを見ると入り口には冥土返しが立っていた。

「調子はどうだい？」

「先生……そうですね。少し疲れましたけど、問題ないです」

上条が落ち着いたように言うと、「フム……」となにかを考えながらベッドの脇まで近付く冥土返し。なにか用があつてきたのかと上条が尋ねようとする、その前に相手が口を開いた。

「……君、本当は記憶を失ってるだろう？」

「っ!?!? そんなわけないじゃないですか。現に俺は「僕は医者だよ?」……」

「検査の結果たしかに傷はなかった。でもね、君の脳はぐちゃぐちゃになっていたよ? 傷ついた脳を無理矢理に怪我だけ治療したみたいだね?」

「……先生はなんでも分かるんですね」

そういつて観念したのか苦笑する上条。その様子をみながら冥土返しは話を続ける。

「どうして君は記憶を失ってるのに、以前の情報を持っているのか教えてくれないかな?」

「秘密にしてくださいね、それは俺の能力のおかげです。いくつか使い方がありますが、その1つに存在を知るというのがあるん

です。だから俺は、記憶がぐちゃぐちゃにもかかわらず、それを使って以前の記憶を見て知っていたんですよ」

「君の記憶なんだから、それなら昔のことを思い出したと思って問題はないんじゃないかな？」

「いえ、こうなった原因はある子の記憶を再現して創りだしたからなんです。映像だけじゃなくその時の気持ちや、食べた物の味の記憶なんてのも全部再現したんです。きっと本人はそれを本物としか思わないでしょう。でも、俺だけはそれが自分の創った幻想だ^{ニセモノ}って知ってる」

インデックスだけじゃない、他の仲間や新たに出会った魔術師の2人のことを騙している自分。それが申し訳ないのか、辛そうな表情をしながら話を続ける上条。

「だから、これは皆を騙した罰だと思っんです。力を与えられただけで神の代理人を気取った自分。そんな勘違い野郎が人を騙すなんて……」

「誰も不幸になっていないのに罰を受けるのかい？」

「はい、そのために俺はまた1つ嘘を吐きます。俺がみんなの知っている上条当麻であるという嘘を。だから俺は、自分の記憶を再現したりしないし、もし記憶が蘇っても自分を以前の上条当麻だとも言いません。残りの人生の全てを使って皆の上条当麻^{げんそう}を守るのが俺が自分に課した罰です」

そういつて拳を握りしめる上条。冥土返しはその言葉を聞いて考えていた。例え幻想だとしても誰もが笑っていられる幻想を彼は創り

だした。話を聞く限り相手の子は記憶を消失していたのだろう。それは医者である自分でもどうにもできない問題。

それを他人のためにわが身を犠牲にしてまで救った少年が、なぜ罰を受けねばならないのだろう。その罰も、他人のために自分という存在を捨てる行為だ。ただ人を救っただけで自分を失い、なんとか残った自分も人を救うために捨てる。なぜこの少年はそんなにも人のために生きるのだろうか。

「君は自分の人生を諦め切れるのかい？」

「未練があります。それに今後も苦しみ続けるでしょう。俺はお前らの知ってる上条当麻じゃない、本当の俺はここにいます。そんな風に叫びたくなることもあるかもしれませんが。でも、あの子たちを悲しませたくないんです……」

「……わかった。なら僕も、あの子たちには「当麻、今の本当？」

「————えっ？」

急に声がしたので上条と冥土返しがそちらを見ると、そこにはフレンドが立っていた。なぜ、帰ったはずのフレンドがここににいるのかはわからない。だがそれよりも、今の話を聞かれました。どうすればいい、いまからでも誤魔化しきれるか。そんなことを考えている間にフレンドは上条の目の前までやってきた。

「ね、ねえ……さっきの本当？」

「な、なんのことだよ？ それより帰ったん「誤魔化さないでっ

「!!」っ……」

「ねえ、記憶を失ったって本当なの？ 先生も知ってて黙ってたの？」

「僕は確信はなかったよ？ いや、医者としては確信していたけど、彼が君たちと普通に会話していたから不思議に思ったんだけどね？」

フレンダに聞かれて素直に答える冥土返し。確かにこのままフレンダを騙すことできないだろう。だが、ここであればいいのだろうか？ 元始種子の力を使えば記憶を消去することはできる。皆を騙す以上ここでフレンダにばれてはいけない。そう考えたが、記憶を失うことの怖さを知る上条にそんなことができるはずはなかった。

「……本当だ。俺は君たちのことは覚えてない。知識としては知ってる、能力で失う前の記憶を知ったからな。でも、それだけだ。君たちと過ごした間の思い出は俺の中に残ってない」

「っ……ほ、本当に忘れちゃったの？ わ、私たち当麻と戦って、それから仲間になって。一緒に料理したり、無理矢理だったけど2人で映画も観に行ったって訳よ？」

「覚えて……ない」

自身も辛そうにしながらも、その変わらない事実を告げる上条。本人の口から直接聞かされたフレンダは、呆然としながらペタンと床に座り込んでしまった。あまりのショックで心が耐えきれないので、と心配になったが、冥土返しは黙って部屋を出ていった。

「い、インデックス笑ってた。当麻のおかげで、自分の親の顔もちゃんと思ひ出せたって」

「……………」

「あの子の両親は流行病で死んじゃってたんだって。それは哀しいけど、忘れてる方がもっと哀しいからって。そう言って笑ったの」

俯いて顔は見えないが、涙声になりながらもフレンダは話し始める。上条は自分がやったことはわかるが、それを覚えていない。だが、本当の上条当麻が最後に救ったあの子は喜んでくれている。そのことが嬉しかった。

「ねえ、インデックスみたいに記憶を戻せるんでしょう？ な、ならさあ、自分の記憶も治してよ」

「それはできない」

「な、なんでよ？ だって、当麻は何も悪くないじゃん。罰って言ってたけど、そんなの受ける必要ないじゃないっ」

「……勝手に他人の記憶をいじくったんだぞ？ 本物にそっくり。でも、それは他人が作った精巧な贋物だ。勝手に与えて相手を喜ばせておいて、実は贋物だなんてそんな事が許されるわけがないだろ？」

感情を殺して極めて冷静に言う上条。確かにそうかもしれない、どんなに似ていてもそれは確かに本物ではない。だが、それで上条に罰を与えるのはインデックスの役目だ。騙され勝手に記憶をいじられた本人しかその罰を与える権利はない。フレンダはそう考える。

「そんなの当麻の勝手じゃないっ、インデックスがあんたを怨むって言った？ 贖物の記憶をイヤだって一言でも言ったの？」

「……言っていないよ。でも、俺はあの子に記憶が贖物だなんて教えるつもりはない」

「なら私がいうっ、それでインデックスが当麻の記憶を戻してって言えば、あんたは罰として自分の記憶を戻さないといけないって訳よ？」

「そんなことはさせない。上条当麻が最後に創った幻想をぶち壊すってんなら、たとえ君でも俺は許さない」

そういった上条をフレンドは本人ではないと理解した。自分のことを『君』と呼ぶ、話すときに他人のように気を遣いながら言葉を発する。そんな言葉の端々に違いが現れているが、なによりも違うのが今の上条がとても辛そうに見えるのだ。昨日までの上条は辛くても少しふざけて周りに気付けさせないようにしていた。

だが、いま目の前にいる少年はどうだ？ 表情は冷静で覚悟を決めているように見える。声も震えてないししっかりと言い切った。だが、どこか不安定な印象を受けるのだ。そうしてフレンドは1つの考えに至る。目の前の記憶を失った少年は、『上条当麻が救いたかったものを守る』それだけで自分を支えているのではないかと。

「……あんた、当麻の救いたかったものを守るつもり？」

「ああ、そのためなら俺は自分なんていらない」

俯きながらも拳をぎゅっと握り、そう言い切る上条。あれほど強かった少年はもういない。いるのは他人を救うためなら、全てを投げ出そうとする少年だ。だが確かにその中には消えてしまった上条当麻が生きている気がした。それを見てフレンダも覚悟を決め立ちあがる。

「……なら、私があんたを守ってあげる。当麻の残したものを守ることでは自分を支えられないなら、私があんたを支えてあげる。だから、私には嘘を吐かないで」

「っ!？　ど、どうして、そんな」

「私は当麻が死んだことを知った。そして、当麻の意志を継ぐとするやつが目の前にいる。なら、当麻が救おうとしたもの、守りたかったものを私も守るの。だから、私だけは本当のあんたを知ってあげる。それじゃあ、ここからはじめましょ？　私はフレンダⅡセイヴェルン。当麻と同じ年の仲間よ」

「お、俺は……上条、当麻。歳は15歳で高校一年生らしい」

自分のことだが記憶がないため、事前に認識で知っておいたことを自信なさげにいう上条。そんな様子にしようがないなと思いながらフレンダは上条を抱きしめた。

「大丈夫よ。私があんたを、ここにいる“上条当麻”を守ってあげる。だから、2人でいるときは無理しないで」

「ぐっ……うう……ああッ!」

本当は怖かったのだろう。記憶をなくし自分が誰かもわからない。

だが、能力によって自分に何が起きたのかを知った。そして本来の上条の性格なのだろう、自分の気持ちを隠して他人のために全力で尽くす。そのために自分を捨て上条当麻を演じ、彼を知っていた全ての人を守ろうとしたのだ。

そんな歩いたばかりの子供が綱渡りするようなことを、この弱い少年はやろうとした。なんて馬鹿なのだろう、そんな無茶なことを死ぬまで続けようなどとは。自分に抱かれ泣き続ける少年。身体の間たるところに怪我の痕がある。きつと前の上条も本当は弱かったのだろう。だが誰かを救うため血を吐くほど鍛え上げ、あの強さを手に入れた。ならばこの少年も手に入れられるだろう。弱さを隠してまで他人を救う強い覚悟を持っていたのだから。

第四十九話 はじまりの場所（後書き）

とまあ、言ってた理解者の立場のヒロインはフrendaでした。それと、記憶を失う過程を原作とは違う展開にしてみました。さらに、記憶を完全に失っているけど、記憶自体は能力チートで知ることができるため今後は以前の上条さんを演じていきます。

2人の上条当麻の違いを軽く説明しますと、素の口調と性格が違います。しかし、第五十話掲載後にキャラ設定も載せるので、大きな違いはそこで知ってください。

第五十話 アレイスターの計画 **【終】** (前書き)

今回の第五十話でインデックス編と第一章は終りになります。作品名は章のタイトルに合わせるので、新しい章の投稿が始まるごとに別タイトルに変える予定です。

第五十話 アレイスターの計画 【終】

フレンダに抱かれたまま泣き続けた少年は、目を赤くしながらもなんとか落ち着いたのか彼女から身体を離れた。そして、少し残っていた涙を手でぬぐいながら口を開く。

「はぁ……ごめん、それとありがとう」

「少しは落ち着いた？」

「ああ、君の「フレンダよ」：フレンダのおかげでね」

「雰囲気がいぶ違うのね。前の当麻は自信たっぷりって感じだったもの。今の当麻は優しいけど少し自信が足りないわね」

そう言いながら自分から離れた上条の髪の毛を、サラサラと触り頭を撫でるフレンダ。魔術を使用してそのまま運ばれたため、今の上条は以前のようなツンツンヘアーではない。今後は上条当麻を演じる以上、この髪型を再び見る機会は当分先になるだろう。ならば、いまの上条当麻としてこのサラサラな髪を降ろしている姿を記憶する。

「2人のときは俺でいいいんだろ？　なら、上条当麻を演じたらフレンダに失礼じゃないか」

「そうね、全然似てないモノマネを見せられるようなもんだって訳よ」

「それ口癖なの？　日本語上手いのに変な癖ついてるんだね」

「う、五月蠅いっ。いつのまにか口癖になってたんだからしょうがないじゃない。そんなこと言ったら前の当麻は『その幻想をぶち殺す』とか訳わかんない口癖だったって訳よ」

そういつて少し顔を赤くしながら言い返すフレンド。確かにフレンドはネイティブな日本語をペラペラと話す。彼女自身も自分を外国人などと強く意識することもないだろう。だが、それにしては日常ではあまり使うとは思えない口調が口癖になっている。別に悪い意味ではないが、そのことが上条には変に感じられた。

だが今度は、本物の上条当麻の口癖を言い返された。記憶を知ると確かに使っている。まあ、フレンドほど多用していた訳ではないが、口癖といって良いレベルだろう。今後、自分が上条当麻を演じるときは使うことになるだろう言葉。だが、あえてその言葉を使う事をやめようと上条は考えた。

「上条当麻っていう幻想だけはぶち殺しちゃいけないよね。だから、俺は代わりに幻想をぶち壊すことにするよ。みんなの知る上条当麻が消えたなんてふざけた幻想をさ」

「……いいんじゃない？　なら、その記念すべき第一回目を聞いたのは私って訳ね」

「……いや、微妙に違うけどさっきすでに言ったかもしれない」

「えー……なんか締まらないって訳よ。まあ、どっちにしろ私が最初なんだけど」

そんな風に少し呆れながら上条に笑いかけるフレンド。そしてその

後も2人は笑って話を続けた。上条がなぜフレンドがもどってきたのか尋ねると、どうやらフレンドが1人戻ってきたのは自分だけ別れの挨拶をしてなかったからだだったそうだ。そして、フレンドが帰る前、彼女には嘘を吐かないと約束した上条は、ここでは心配だから店に戻ってから自分の能力についても詳しく説明することを約束した。それを聞いたフレンドもわかったとだけ言って病室を後にした。

上条が病室でフレンドと話をしていたころ、とある窓のないビル――

「か、上条当麻が死んだだど？」

窓ないビルにいたアレイスター・クロウリーは上条とフレンドの話しだけでなく、その前の冥土返しとの会話から病室内の話を聞いていた。ここにいながらも会話を聞いたのは滞空回線アンダーラインを使っていたからなのだが、いまのアレイスターにとってそんなことはどうでもよかった。

「あんな脆弱な贋物が上条当麻を名乗るのか？ ……『上条当麻』とはあのような人形が気易く名乗っていい名前ではないっ！！」

そういつてこの封鎖された部屋の中に怒りの魔力を洩らすアレイスター。その、ビーカー内の液体が大量の気泡を作るほどの魔力とて外から感知されることはないが。魔術師たちから隠れているアレイスターが、自身の魔力を洩らすなど珍しいことだった。

『上条当麻』：名前自体は個体を区別するための記号でしかない。だが、彼の姿で他人がその名を名乗るということがアレイスターには許せなかった。以前の上条当麻は、まさしく神に選ばれた特別な存在。彼をここに呼んだのは彼が中学に入ってからだ。最初は他人が元始種子の力を知っていることに驚いていたが、自分のような人間とも真正面から付き合いお互いを親友だと認め合っていた。

あれだけの力を持っていながら世界への干渉は極力せず、自身の身1つで他人を救う姿にアレイスターも好感を持っていた。だが、アイテムと出会ってから彼は変わった。自分の目の前に困っている者がいたら手を差し伸べる。それだけだった彼が、他人を守ることを始めたのだ。最初はその変化に驚きもしたが、ついに神の代理人が救済を始めるのかと楽しみにも思った。

———だが

「なぜ、彼はたった1人の小娘のために自分を犠牲にしたっ！
たかが人間のために神が自らを犠牲にするなどあってはならないッ」

彼の基地にはさすがの滞空回線も侵入できていないため現場は見れていない。だが、話を聞いた限り上条当麻は、禁書目録の失われた記憶を再生したことによって死んだのだろう。確かに世界にとって禁書目録の方が重要度は高いだろう。しかし、それは上条当麻という存在を世界が知らないからだ。

幻想殺しは問答無用に異能の力を打ち消す。それは恐るべき能力だ。だが彼の身体は決して身体能力に優れているわけではない。凡人にしては耐久力が多少優れているが、運動性能はどちらかといえば劣っている。だから世界で幻想殺しを知っている数少ない人間たちも、いまは然程気にしていないのだろう。しかし、それは彼に封印され

た穢れた神を浄化する上での、ただの防衛機能であり副産物だ。

彼の本来持つ能力は、神と等しく存在そのものを操る異能である。存在を消し去り、存在を創り出す。さらには存在を知るというまさに全知全能と言える力。そんな力を持つ神がなぜ人間1人を救うために自らを犠牲にしたのだと、アレイスターは上条当麻の行動の理解に苦しんだ。

「私は認めんぞ、お前のような存在が上条当麻であるなど。私の親友である上条当麻であるなどっ！」

アレイスターは普段の冷静さは欠片もなく、怒りのままに上条当麻と同じ姿をする者の映像を見ながら叫ぶ。上条当麻は弱かった。だが、他人を救うために自らの限界を超え鍛錬に励み、その先でついに強さを手に入れた。それを知っているからこそ、いまあそこで女に抱かれながら泣く存在が許せなかった。

「……良いだろう。貴様が上条当麻の救いたかったものを守るといふならそれでいい。私もそれに協力してやる。だから貴様はせいぜい彼が戻るその日まで彼の居場所を守っている、私は彼を取り戻す。そして、彼が戻る時には貴様のような人形、跡形もなく殺し尽くしてみせようっ」

そういつてアレイスターは水中に映る映像に手を伸ばし握り消した。彼を蘇らせる方法はないわけではない。だからアレイスターはその準備ができるまで、贗物に上条当麻を演じさせることにした。そして準備ができ次第、あの人形には舞台から降りてもらおうと決めた。やつは上条当麻を蘇らせないと言ったがそんなものは関係ない。贗物ごときが神の再誕を拒むなど許されるわけがないのだから。

アレイスターは神をこの世に再誕させるため、人形がそれをしなければならぬ状況を作る準備に動き始めた。そう、いますぐにでもあの場に行ってやつを殺したいという気持ちを抑えながら……。

第五十話 アレイスターの計画 【終】 （後書き）

次の第二章からは主人公が変わります。と言っても、中身が別人と
いうだけで上条当麻とアイテム＋インデックス＋超電磁砲組が主役
とその仲間なのでメンバーに関しては大きな変更はありません。

設定4（前書き）

今回の設定は魔術師と重要キャラのみです

設定4

《魔術サイド》

魔術師・上条当麻

【設定】元始種子解放中に幻想殺しの効果を内向きにして発動するもの。内向きにした幻想殺しは、外からの異能を打ち消すことができなくなる代わりに、魔術の反動や汚染を防ぐ効果がある。また、その副次的な効果か人工物である整髪料は浄化され消えるため、髪型がサラサラな髪を降ろした大人しいものになる（見た目のイメージとしては灰村キョタカ氏のサイト内のVol. SS1～SS2にある削板軍覇の1枚目の案をやや凛々しくした感じ）。

魔神・禁書目録と魔術合戦できるほどの力を持ち、魔道図書館にも存在しない術式を多数使う。他の者からすれば魔神にしか見えないが、ただ戦闘術式に特化しているだけのため、魔神ではないらしい。魔術は魔法陣も含めて全て即興で展開するが、元始種子で出しているわけではなく。脳内で描いた陣に魔力を通すことで展開するという反則気味な発動方法。だがその分、思考を乱せば陣を構築できなくなるため、能力演算を必要とする超能力者のような弱点を持つ。

聖人と違いテレズマなどのエネルギーを持っていないにもかかわらず魔力が練れるのは、幻想殺しを内向きに行っている間は周囲のエネルギーを自分のものとして吸収・変換しているため。なので、枯渇した土地などエネルギーが少ない場所では、魔術もかなり制限されてしまう。

【魔法名】Deus666 《その身は主が力を揮うために存在する》
Deusはラテン語で『神』という意味。本来ならば魔法名は己の

信念をラテン語であらわし、その後ろに重複防止の数字をつけることになっている。なので、信念を言うべきところで神という名をあげるのはおかしいかと思うかもしれない。しかしこれは、神によって代行者（神の力を使う）として選ばれた存在ではあるが、自身は神がその力を揮うための道具に過ぎないという、本来あったであろう己の未来全てを神に捧げ『神の力』そのものになる覚悟をあらわしているのである。

【使用魔術】

アーテナーの楯《アイギス》…ギリシア神話の女神アーテナー（アテネともいわれる）で、あらゆる邪悪・厄災を払うと魔除けの力を持つと言われている。当麻はこれで竜王の殺息を防ぎメンバーたちを守った。

死後の楽園《エーリュシオン》…ギリシア神話に登場する死後の楽園。魔神との戦いで世界に影響を与えないために当麻が張った結界。自動書記はこれの破壊を試みたが術式の逆算ができず、持ちうる魔力で物量作戦もとれるか不明だったため諦めて術者である当麻を殺すことにした。実際は切り離れた空間内を異相とすることで、結界展開時の内外に存在していたものが干渉できないようにするためのもの。

農耕神の鎚《ミョルニル》…雷神トールの持っていた武器の力を再現したもので。高威力の雷を放つ技。しかし、神話の通り豊穰神の剣（勝利の剣）には勝てず、切り払われることになる。雷神の槌という表記でパターン魔術の理論として使われているが、この術はそれとは別物。

主神の槍《グングニル》…自動書記の放った豊穰神の剣を全て破壊した必中の魔法の槍。本来はこの2つに神話的な勝敗などはないが、

共に北欧神話を元にする魔術のため主神たるオーディンの持っていたグングニルが勝利した。だが、グングニルに持つ軍勢を必ず勝利させるという逸話もあるためそれが影響した可能性もある。霊装としても存在するがそれとは別の物で、力のみを攻撃魔術として用いたものがこれになる。よって、この魔法では天候を操る事はできない。

来たれ、金剛杵《ヴァジュラ・ヴァジラ》…帝釈天の武器である金剛杵を呼び出す魔法。非常に硬い金属やダイヤモンドでできており、雷を操ることができる。元始種子の力により神話そのものの力を引き出している真正銘の神具である。

インドラの矢・召喚した金剛杵によって強大な雷を落とす魔法。太古のインドでインドラが、アスラ族または羅刹の王ラーヴァナの大軍を一撃で死滅させたというものが元になっている。それ自体は雷だが遠くからではとてつもなく太い光の柱に見え、近くからでは光の壁のようにしか見えないため、それ自体を知らなければ雷とわからないと思われる。自動書記は幾重にも魔法防壁を張り、さらに竜王の殺息をぶつけ威力を弱めようとしたが、オリジナルと同等の神具を用いて放った神話級の威力を軽減させることは出来ず歩く教会も破壊された。

出でよ、孔雀明王《オン・マユラ・キランディ・ソワカ》…浄化の炎を呼び出す魔法。「人々の災厄や苦痛を取り除く功德」があるとされる孔雀明王の力のみを顕現させる魔法で、実際には孔雀ではなく巨大な炎の身体をもつ鳳凰を召喚し、その鳳凰で対象を包み怪我の治療や解呪をするという効果がある。癒しの力のため鳳凰の身体に触れても火傷はせず、少し熱いお湯に浸かっている程度に感じる。

インデックス 正式名称…Index—Librorum—Prohibitorium

【設定】魔法名“Dedicatus545”ネセサリウス《献身的な子羊は強者の知識を守る》”の、イギリス清教・必要悪の教会に所属する魔術師。完全記憶能力を持ち、その能力から世界中に存在する10万3000冊の魔道書を記憶している魔道図書館。イギリス清教が彼女を逃がさないため、首輪と自動書記の術式が施されていた。1年毎に記憶の思い出の領域を消さなくては生きられないというのは、この霊装が原因である。現在は上条によって全ての呪印が破壊されたため、自分でも魔力が練れるようになっていく。そのため、彼女はすでに魔神と呼べる存在。だが、魔力自体は歩く教会を着ているので感知されない。そのため、ステイルらはインデックスが狙われないう、首輪が破壊されたことは報告するが、魔術が使えるようになったことは報告しないと決めた。

いままで首輪のせいで記憶を消されてきたが、その心配は上条によって無くなった。だが、さらに上条は彼女自身を読み込むことで、インデックスがどう生きてきたかを認識する。そしてそれを感じまですべて再現し、彼女の脳内にその情報を持つ細胞とネットワークを創り出すことで記憶を復活させた。当然、自分の本名などとも思いついているが、修道女になり禁書目録となったときにIndex—Librorum—Prohibitoriumという名前をもらったので、それを今後も名乗り続けることにしている。年齢は15歳だが、学年的には上条の1つ下の中学3年。

ヨハネのペン
自動書記（魔神・禁書目録）

【設定】上条がインデックスの首輪を破壊した際に現れた、いわゆる

る迎撃モード。これを展開している間はインデックス自身の意識はなく、その間の記憶もない。自動書記状態のインデックスは表情が消え、まるで人形のような雰囲気になる。また、この間はインデックスの持つ魔術が使えるようになっていたため、多数の魔術によって首輪を破壊し魔道書を狙ったと思われる仲間らに向けて攻撃した。なお、インデックスの記憶再生時にこのときの記憶も再生させている。

【使用魔術】

- ・聖ジョージの聖域《セントじょーじのせいいき》
- ・竜王の殺息《ドラゴンブレス》
- ・硫黄の雨は大地を焼く
- ・豊穰神の剣
- ・神よ、何故私を見捨てたのですか《エリ・エリ・レマ・サバクタニ》
- ・その他…魔術防壁、回復魔術、赤い翼

スタイルII マグナス

【設定】魔法名“Fortis931”《我が名が最強である理由をここに証明する》の、イギリス清教・必要悪の教会^{ネセサリウス}に所属する魔術師。身長2メートルを越し、ヘビースモーカーな14歳で学年的には中学2年。ルーンを使った魔術が得意で、中でも炎の魔術に秀でている。2年前にインデックスに出会い彼女を結局救えなかったことから。そのときに誓った『たとえ君は全て忘れてしまうとしても、僕は何一つ忘れずに君のために生きて死ぬ』というものを、行動指針にしている。尊敬する女性はエリザベス一世で、好みのタイプは聖女マルタと言っているが、実際はインデックスのことが好き。それはまわりに鈍感と言われる上条にもばれるくらいわかりやす

さである。

【使用魔術】

- ・ 炎よ
- ・ 炎剣
- ・ 吸血殺しの紅十字
- ・ 魔女狩りの王イノケンティウス

神裂 火織《かんざき かおり》

【設定】魔法名“Salvare000《救われぬ者に救いの手を》”の、イギリス清教・必要悪の教会に所属する魔術師。長い髪をポニーテールに括り、Tシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、腰のウエスタンベルトには刀を差したかなり特殊な格好をしている。別にこれは本人の趣味ではなく、左右非対称が魔術的に意味があるらしい。記憶を失う前のインデックスとは親友で、ステイルとは当時出会った同僚である。記憶が消え敵と思われたとしても、親友の命だけ救ってみせると決め。インデックスを追っていた。年齢は18歳で学年的には高校3年。

世界に20人といないとされる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間である聖人の1人。そのため、身体能力がかなり高く魔術も即興でかなりの威力のものを放てる。だが、聖人として強力な力を受け継ぐ一方で、処刑と刺殺に弱いという神の子の弱点も受け継いでしまっている。そのため、上条にはその弱点をつかれて敗北した。まあ、本来ならば弱点をついたところで、常人ではついていけないレベルの体術を繰り出し負けることはない。しかし、上条は常人より優れた体術を使えることに加え、電気を纏う事で人間の限界を超えた反射スピード、相手の思考を知る

行動予測をすることで勝利した。

【使用魔術】

- ・七閃（実際はただの戦闘技能）
- ・炎よ
- ・地の槍
- ・唯閃

《科学サイド》

神の代理人・上条当麻

【設定】インデックスの記憶を蘇らせるため、元始種子をかなり無茶な方法で使用し死亡した。記憶を蘇らせる際、映像としてだけ蘇らせるならばもう少し簡単に済んだため、魔道書を見たときの負担も少なく済み死ななかった。だが、本人としては自分が勝手にやったことな上、そんな状況になったのは自分の見通しが甘かった故であると考えているので、これで自分がどうなろうが自業自得だと納得していた。最後に考えていたのは、システムのメンバー・超電磁砲組・学園都市の友達や知り合い・両親や親せき・インデックス・アレイスターのこと。自分はダメかもしれないが、その者らになにかあれば救いたいし守ってやりたかったと考えながら死んだ。

贗物・上条当麻

【設定】インデックスを救うときに脳がメチャクチャになり記憶を失った上条当麻。記憶は失ったが能力は使えるため、自分になにがあったのかを知ることができた。それを知った後は、今の自分はみんなを騙した罰を受けこうなったと思い、今の自分のまま上条当麻が望んだことを成し遂げようと決めた。そのため今後はみんなの前

では以前の上条当麻を演じ、1人でいるときやフレンダと2人のときなどは現在の自分で行くことになった。記憶がない事もあり少し自信なさげで、他人には優しめ。フレンダ的にはその違いがあるため、髪を降ろしてる方がいまの印象にじっくりくる。

戦闘技能や能力自体は問題なく使えるが、知識として知っている・身体が覚えている状態で本人的には微妙に慣れない感じである。そのため、自分の身体になれるため基礎鍛錬からスタートし、尚且つ今の自分としてじっくりくる戦い方を見つける方針にした。上条当麻の死の代償ではないが、インデックスの持つ10万3000冊の魔道書を全て手に入れた。以前の戦闘特化の魔術に加え、10万3000冊の魔道書の力が使えるためインデックス以上の魔神という存在になった。本人としては魔術も超能力も少し信じられないことなので、いまいちどうすごいのか分かっていない。

余談だが、魔法名というものを知った上条は、ならば自分もここに誓おうと『Somnium 467 《幻想の意志を継ぐ者》』に決めた。Somniumとはラテン語で『夢』という意味であり、「自分は上条当麻の望みを叶え、その救いたかった者たちにとっての上条当麻も守ってみせる」という要するに、皆の夢・幻想を守るといった意味である。名乗るときは意味までは説明しないのであればないし、変えた理由を聞かれれば「魔神になったからな」で済ます予定である。

フレンダⅡセイヴェルン

【設定】幻想御手事件以来、やけに精神的に年相応になってきた少女。別に上条に対して恋愛感情は抱いていなかったが、それでも大切な人的な位置づけにはなっているようだ。ふざけた態度をとった

スタイルには容赦なく攻撃している。お見舞いで病室を出る際にあいさつをし忘れたことを思い出し、戻ってきたところで上条と冥土返しの会話を聞いてしまう。そして今の彼が上条当麻の意思を継ぐのであれば、自分も一緒になってそれを守ると決めた。いまの上条にとっては理解者のポジションであり、フレンダとしては本当は弱く脆い彼を支え守る立場になる。

アレイスターⅡクロウリー

【設定】学園都市の最大権力者、学園都市総括理事長。男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える人間。窓のないビルに設置された生命維持槽の中で滞空回線を使い外の情報を得ている。生命維持槽のビーカーには弱アルカリ性培養液が満たされ、緑の手術衣のまま、その中に逆さまになって浮かんでいる。

上条当麻の持つ元始種子の存在を唯一知っていた男で、彼が学園都市にくることを大いに喜んだ。一応きた当時は不幸な少年としてテレビに撮られたことがあったので、彼が命の危険にさらされぬよう、密かに監視をつけ守っていた。そして、中学生になったときには自ら連絡をして窓のないビルに招き、初めて対面することになる。最初は能力を知っていることやビーカーに浮いていることに上条も驚いたが、その後もたまに会うようになった。年齢こそかなり離れているが、上条はアレイスターの深い知識と見解の広さに敬意を抱き、アレイスターは上条の生き様とその神聖さにとても惹かれ、お互いを親友だと認め合っていた。

しかし、それだけに親友である上条当麻が死に、残ったのが女に抱かれながら涙を流すような脆弱な存在であることが許せなかった。上条当麻とは『不屈の強者にして、神に選ばれし者』。その生き様

を汚すような人形をすぐにでも殺したいと思った。だが、上条当麻の記憶は蘇らすことができないわけではない。そのため、その準備ができるまではせいぜいその居場所を守っていると、いまの上条を殺すことをやめた。しかし、完全に見逃したわけではなく。上条当麻を復活させる際には欠片も残さず今の上条の人格を消し去ってやろうと考えている。

設定4（後書き）

本当は、記憶消失前後で上条さんの使う魔術には違いがあるって設定もあるのですが、それは実際に魔術を使ってから書きたいと思います。なので、二章で最初の設定で書くと思います。

第五十一話 苦悩（前書き）

今回より第二章になります。

第五十一話 苦悩

インデックスの記憶を蘇らせ、入院した日から3日が経った。皆がお見舞いに来た次の日に退院した俺は、現在、店の地下基地にある演習場で体術の型の基礎鍛錬を行っていた。

「ハッ！（こんなんじゃ駄目だ、上条当麻はもっと強かった）」

自分の中にある上条当麻の動きをトレースし、実際に動いてみる。だが、今の俺には本物にあったキレがない。それは当然だ、あれは上条当麻が鍛錬を積んで手に入れた力だ。鍛え上げられた肉体のみを手に入れた俺では、戦闘における感覚などが皆無と言っている。

「フッ、ハアッ！（同じ肉体を持っているからこそ思い知らされる。上条当麻は間違いなく、凡人でありながら非凡な高みへ登りつめた男だったと。こんなことでは誰も守れない……どうすれば）」

今の俺は『上条当麻の肉体・元始種子・幻想殺し・魔神級の魔術』のこれらが武器だ。確かに無駄のない筋肉や反射神経、動体視力など訓練によって鍛えられるものは全て鍛え上げてある。これでは並みの人間では勝てないだろう。だがそれは、自分が未熟で救えなかったと後悔したくなかったからこそ上条当麻が鍛え上げたものだ。

「……俺だって後悔したくない。上条当麻なら救えたなんて、絶対」

「なーに格好つけてるって訳よ」

「フレンダ？ どしたんだよ、こんなところへ」

声のした方を見ると、そこには呆れたような顔をしながらこっちに歩いてくるフレンドがいた。フレンドは俺に訊かれると、なに言っ
てんだという表情で話し始める。

「もう少しで準備が終わるから呼びにきたの。だから、もうシャ
ワー浴びた方が良くって訳よ」

「もうそんな時間か。ゴメン、気付かなかったよ」

「はいはい。それはいいからシャワー室の方行くわよ」

フレンドはそう言うのと、ついてこいとばかりに歩きだす。別に俺も
内部構造は事前に知っておいたし、来たときに一通り見て回ったの
で覚えている。だが、彼女はまだ俺があまり慣れていないと思って
いるのだろう。後を追うとすぐに歩調を合わせてくれた。

「悩んでるの？」

「まあね。上条当麻がいかにすごいかを思い知らされるよ。彼は
自分の身と幻想殺しのみで人を助けてきたんだ。普通なら少数の人
間しか助けられなかったと思う。でも、そうやって諦めたくなかつ
たから苦しい思いをしても、鍛え続けたくさんの人を救ってきたん
だ」

「……それって弱音入ってる？ 自分にはそんなことできないっ
て」

「そうだね。正直、彼みたいには出来ないと思う。けど、弱音は吐かない。できないじゃない、やるしかないんだ。だから俺もどんなに苦しくても諦めない」

そういつて俺は自分の拳を握りしめる。そう、中身は贗物だが。世界にとってはこの身体は上条当麻だ。なら、俺がそれを歪めるわけにはいかない。上条当麻が救いに失敗するなどあってはならないのだから。そんな風に考えてる様子を見てなにか考えたのか、やれやれという表情でこちらを見るフレンダ。そして彼女が口を開く。

「結局、あんたはあんたって訳よ。どんなに頑張ってもあいつにはなれない。だから、仕草や言動だけを真似しなさい。戦い方も拳がダメなら蹴りで、蹴りがダメなら棒で、棒がダメなら拳銃でって自分にあったものを探した方がいいわ」

「自分にあったものか……手っ取り早いのは、魔術なんだけどね。幻想殺しがあるから特に副作用もなく、土地が潤沢なエネルギーを持っていれば使い放題だし」

「そんなチート駄目にきまってるでしょ。あいつの基本は体術とか、物理攻撃ってわけよ」

「そうだよなあ……あ、じゃあ着いたし。俺、シャワー浴びてくるよ。先に上がってていいから」

「ううん、待ってるから大丈夫。身体が冷える前にパパッと行つてらっしゃい」

言われてフレンダからタオルと着替えを受け取ると、俺はシャワー

を浴びにシャワールームへ向かった。

シャワーを浴び終え、服を着替えてから外に出ると暇そうにしているフレンドが壁から椅子を引っ張り出して座っていた。向こうも俺が出てきたことに気付いたのか、立ち上がりよってきた。

「ちよつと、髪乾かしてきなさいよ。ほら、拭いてあげるからそこ座って」

「いや、すぐ乾くからいいよ」

「い・い・か・ら」

俺からタオルを奪うとフレンドは、さっきまで自分が座っていた椅子に俺を連れていき座らせてきた。そして、タオルを頭にかぶせるとワシワシと髪の毛を拭いていく。やはり女の子というのもあって、手慣れてるなあ。そう思っているとフレンドが話しかけてくる。

「あんたの姿を見るの当分先だと思ってたけど、案外すぐだったわね」

「俺の姿？」

「そう。私的にはツンツン頭は前の当麻で、今の当麻は髪を降ろしてるイメージな訳よ。だから、シャワーで整髪料が落ちた髪型になった当麻は、今のあんたの姿ってわけ」

言いながらフレンドは丁寧に毛先の方までタオルを滑らせて髪を拭く。けど、人に髪拭いてもらうのって気持ちいいな。こっちで風呂入ったらたまにやってくれないかな？なんて、考えながらフレンドの言ったことに逆に返してみる。

「ふーん。じゃあ、今度は逆にフレンドがいつもと違う髪型を見せてくれよ。キレイな髪の毛だし、上げたりしても大丈夫だろう？」

「えっ！？ あー、うーん……また今度ね。希望ある？」

「そうだなあ。最初だし、シンプルにポニーかな」

「最初って、どんだけやらせるつもりって訳よ……。はい、できたと。髪の毛は整える？」

「風呂上がりなら、どっちでもいい気がするけどな。まあ、一応ツンツンにしていくよ」

そうフレンドに伝えると、シャワーの前に着ていた服から整髪料をとりだし髪につけていく。どの程度がいいかはわからないが、フレンドも手伝ってくれるのですぐにセットは完了した。そうして立ち上がると、上条当麻に切り替えてから上を目指して歩き出す。

「そういうインデックスはちゃんと作れたのか？」

「あ、もう始めたってわけね……そうね、神裂って人が手伝おうとしてたけど、メニュー的に麦野の方が得意だったから監督されながら作ってたって訳よ」

「そっか。けど、赤毛のやつ喜び過ぎて泣くんじゃねえか？ 好

きな子の手料理が食べれるってな」

言ってハハッと俺が笑うと、フレンダも同じように思ったのか笑っている。だが急に笑うのをやめたかと思うと、フレンダが悪戯っぽい表情で口を開く。

「言っておくけど、あんたも泣いて喜んでいいのよ？ 毎日のように、こんな可愛い女子たちの手料理が食べられるんだから」

「……そうだね。ありがとう、フレンダ」

「こらっ、急に戻るな！」

「悪い悪い。でも、結構本気で感謝してるんだぜ？」

俺がそういうと「分かってるなら良いけどさあ」とぼそぼそ呟くフレンダ。呟きながら俺の少し前を歩くフレンダの背中をぼんやりと見て考える。皆俺が前の上条当麻と別人であることに気付いてない。正直、演じることはまだ慣れないのでインデックスには気付かれるかもしれないと思っていた。

彼女は完全記憶能力を持っている。だから、本物と贋物カレオレの動きの違いからばれるかもと考えていたのだ。けどま、ばれてないならこのまま騙し続けるだけだ。冥土返しとフレンダにはばれてしまったが、他の人には俺の演技が効いている。なら、死ぬまで上条当麻を演じる影になってやる。

第五十一話 苦悩（後書き）

今回みたいな感じで、今後は以前の上条当麻の口調を真似ながら裏では素の口調のしていきます。

第五十二話 約束のパーティー（前書き）

基本的にインデックスの記憶とか両親の設定はオリジナルです。

第五十二話 約束のパーティー

「あ、とうま！ もうすぐ出来るから座っててね」

そういつて厨房から顔を出したインデックスは地下から戻ってきた俺に声をかけてきた。今日は彼がインデックスと約束した記憶復活祝いのパーティーをすることになっている。参加者はあの現場にいた8人。本当なら俺ではなく彼が参加するはずだったんだけどな……。

「顔上げなさい。あんたも“当麻”なんだから気にしないで楽しめばいいって訳よ」

「フレンダ……そうだな。せっかく、インデックスの記憶が戻ったんだ。盛大に祝わないとなっ！」

「そうよ。それにあんたの退院祝いでもあるんだからねっ」

俺が少し暗くなっていると、フレンダそう言いながら笑いかけてくる。駄目だな俺は……。上条当麻を演じきるって決めたのに、すぐに自分に戻ってしまう。けど、いつまでも悩んではいられない。だから今も上条当麻を演じてみせる。そう決めると、カウンターを通って店内のテーブルに向かう。そこには暇そうにしているステイルが1人で聖書を読んで座っていた。

「なんだ、お前は手伝わないのか？」

「ほとんど君の仲間だけで済んでしまうからね。僕は取り皿やコップを用意するぐらいしか、やれることがないんだよ」

「ふーん、そっか。あっそうそう。ホラ、これやるよ」

俺は言いながらポケットからある物を取り出すとステイルに向かつて投げた。ステイルも一体何だと言う顔をしながら受け取ると、自分がキャッチしたものの正体をみる。すると、ステイルは見た瞬間に驚きの声をあげた。

「なっ、なんだこれは!？」

「なにつて。約束してたインデックス・ストラップだよ。結構、よく出来てるだろ？」

「たしかに：あっ、いや、しかしっ」

俺の渡したインデックス・ストラップをみて、その出来に驚くステイル。どうやら、上条当麻の趣味が物作りというのは本当だったらしく。軽くデザインを考えて素材を買ってきたら3時間ほどで作れた。歩く教会の色とデザインも本物を参考に作っているため、そのクオリティはなかなかのものだと自負している。

「結局、素直に受け取ればいいって訳よ」

「……人の気持ちを無下にするのもあれだしね。一応、受け取っておくよ」

「いや、そこまで言うなら返せよ。神裂にやるから」

「……いえ、ありがとうございます。大切にします」

若干、棒読みながらもステイルがそこまでいうとは……。まあ、本人が喜んでいるなら良かった。けど、俺らの目の前で携帯に付けるのはやめようぜ。さすがに、髑髏のストラップと並べて付けるのもおかしいしさ。そう思い伝えようとすると、絹旗と滝壺が料理を運んできた。

「あ、当麻さん。超退院したばかりですし、あんまり激しいトレーニングは駄目ですよ」

「ははっ、腕とか足にも怪我してただろ？　だから、回復したとはいえ問題ないか確かめてたんだよ」

「そうなんだ。調子はどうだった？」

「んー、全快ではないが。これといって問題ありってわけでもない。まあ、戦闘があれば普通に戦えるから安心しろ」

そういつて滝壺の頭を撫でる俺。だが今日の滝壺は少し不満げな表情をしている。どうしたんだ？　そう思っていると、滝壺はテーブルに料理を置いてから振り向いて話してきた。

「とうまは分かってない、私はそもそもとうまに戦ってほしくないの。だって、いつも大怪我して入院したりするから」

「ああ、それで不満げだったのか。大丈夫だって、怪我したって生きてるんだ。入院しても病院にきたら会えるだろ？」

「…でも、死んじやったら会えないんだよ？　だから、心配させるようなことしないで」

哀しそうに言う。滝壺は俺に抱きついてきた。やっぱ心配するよな。幻想御手事件とかいうの以降は結構、怪我とか入院とかしてたみたいだし。この子達を悲しませたくないから、気をつけないとな。そう考えながら、背中に手をまわして頭を撫でる。

「わかった。なるべく気をつけるよ」

「約束だよ？」

「ああ、前にフレンダにも言われたからな」

まあ、それは結局破られ彼は死んでしまったけど。意志は俺が継ぐって決めたんだ。なら、いました約束は彼宛てのものだが、俺が果たすと心に決める。なんて考えながら滝壺に笑いかけっていると、背中側が痛いことに気付く。え、これって……。

「あ、あのー理后さん？　少しばかりハグが情熱的すぎて痛いんですが……」

「あのね、とうま。いまは私と話してるんだよね？　なんでそこで他の女の子の名前を出すの？」

「え？　だって、前に神裂と戦ったあとに、フレンダにも同じこと言われて約束したからだけど？」

「そうじゃなくって……はあ、もういい。そんなとうまは応援できない」

滝壺はそう言うと、俺から離れて厨房の方へ戻っていった。一体なにが言いたかったんだ？　滝壺がフレンダのこと嫌いってのはないだ

ろうし……。結局考えてもわからず、首をかしげていると絹旗とフレンドが呆れた表情でこちらを見ていることに気付いた。なので、理由を尋ねてみる。

「どうした、2人とも変な顔して」

「あれは超なですよ。流石に滝壺さんが可哀想です」

「結局、当麻は当麻だって分かったってわけよ」

2人して何だって言うんだ？俺が滝壺になにかしてしまったようだが心当たりがない。呼び方だって本物が呼んでたように『理后』って呼んだぞ？なにがいけなかったのか分からないので、今度は具体的になにか訊いてみる。

「俺が理后になにかしたっばいが、もしかして背中に手をまわしたのがマズかったのか？」

「いや、そこと優しい笑顔で頭撫でるまではほぼ満点だったって訳よ」

「俺の笑顔が100点とかよせやい。褒めたって『当麻くんストリップ・髪下ろしver.』ぐらいしかやらねえぞ？」

「あ、超良いですね。けど、そういう話じゃなくてですね。問題はフレンドの名前を出したことです」

そういつて理解できますか？といった感じに俺を見てくる絹旗。うーん…滝壺も言ってたし、女子と話してるときに他の子の名前をいうのがマズかったってことか？でも、それだと会話しづらいだろ。

お茶してるときに最初の1人以外と話せなくなってしまう。

「女子との会話中に他の女子の名前出すなってことなら、お茶のときはどうするんだ？ 皆いるのに無視したら、可哀想だろ」

「大勢のときと一緒にしないでください。1人の子といい雰囲気
のときのみ、超気を付ければいいんです」

「ふーん。じゃあ、さっきのセリフを直すなら『ああ、前に金髪
にも言われたからな』なら良かったってことか」

絹旗に言われたことを踏まえ台詞を考え直す俺。そして、個人的に
納得しながらフムフムと言っていると、絹旗が呆れた表情から疲れ
た表情になっている。中学生だし料理して疲れてしまったのかと心
配しようとしたところで、後ろから頭を叩かれた。

《バシッ》

「いたっ」

「馬鹿。結局、それ私のことでしょうが。他の女子を表す言葉が
NGって言ってる訳よ。てか、金髪って呼ぶのやめろっていつてる
でしょ。そろそろ本気で撃つわよ？」

「……哀しいな。俺、フレンダの金髪が大好きなんだよ。だから、
つい言っちゃうんだ。でも、フレンダがイヤだっていうならやめる
よ。もう金髪を好きでいることも」

「えっ？ ああ、それなら別に……なんて言うわけないでしょ。
反省しないなら、そのウニ頭刈るって訳よ」

そういつて右手でチョキをつくり、ハサミで切るように指を動かすフレンダ。さすがにそれは上条当麻でいられなくなるので勘弁して欲しい。それに金髪って呼び方も彼を真似てのことだ。俺自身はフレンダのことは名前で呼ぶようにしているしな。

「悪い悪い。お詫びに『フレンダ・ストラップ』も作ってやるから機嫌直せよ」

「……なんで自分のストラップもらって喜ぶのよ。結局、それは当麻のケータイにでも付けとけばいいって訳よ」

「超姑息ですね、そうやって密かにペアストラップを付けようとするとは。当麻さん、そんな呪いのアイテムより、『ぷりてい最愛ちゃんストラップ』を作ってケータイに付けといてくださいよ」

「それだと俺が中学生好きのロリコンになるだろ。ロリコンは赤・青・金とカラフルな髪色の男共で十分だぜ」

そう言って、ハハッと俺は笑う。まあ、実際はステイルの場合、年上好きということになるんだが。まあ、インデックスの方が年下に見えるし問題ないだろう。そう考えていると、急に絹旗が泣き始めたっ!?

「グスッ……ひ、ひどいです……当麻さん、私のこと子ども扱いたくないって言うてくれたのに。こんな風に約束を破るなんてっ」

「お、おいおい。そこまで言っていないだろう？　だが、高校生が中学生に手を出すのは論理的に際どいんだ」

「ヒック……じゃあ、私じゃなくて食蜂だったらどうなります？」

「どうなるって……」

言われて、食蜂と言われたやつについての記憶を読み込んで姿を知る。そして、俺と絹旗が並んで歩いてるシーンと、俺と食蜂が並んでいるシーンを比較する。……あれ？食蜂って子だと大丈夫か？

「あ、いま食蜂だったら超大丈夫かもって思ったでしょう。やっぱり年齢なんて言い訳だったんですねっ。結局はスタイルが基準だなんて超見損ないましたッ」

「……それだとほとんどの女子がアウトだろ。つか、泣き真似はもっと上手くやれ」

「あれ？ バレました？」

「当たり前だ。俺は相手が女でも間違ってると思えば全力で顔殴る男だぞ？ いちいち、涙ぐらいで惑わされるか」

「いや、それ堂々と言っても。ある意味、超クズ野郎ってことにかわりないですからね？ でも、本当に子供や年下扱いはやめてください。自分に自信なくしますから」

そうやってばれたことはスルーして、頼んでくる絹旗。一体なんの自身をなくすのだろうかと考えたが、本人が嫌がっていることをするつもりはない。なので、頭を撫でながらなるべく気を付けることを伝える。

「わかったよ。変な言い方して悪かったな」

「…?? あっ、いえ、わかってもらえればいいんです。じゃあ、私もう少し料理の手伝いしてきますから。超座って待っててください」

「ああ、楽しみにしてるよ」

なにか一瞬不思議そうな顔をした絹旗だったが、そういうと厨房の方へ戻っていった。残った俺とフレンドは先にテーブルについておく。まあ、俺のあげたストラップを見てニコニコしてる神父からは対極の位置に座ってるけどな。

そうして、呆れたようにスタイルの方を見ると、右隣に座ったフレンドが小さい声で話しかけてきた。

「さっきの絹旗、もしかして違和感でも感じたんじゃない？」

「俺の演技はおかしかったか？」

「いや、金髪のくだりとかは上手かったって訳よ。そりやもう、憎たらしく思うほどに」

「本気で根に持ってたのか？ ちゃんと謝ったし、しょうがないだろ。それに俺がフレンドの髪が好きなのは本当だよ。光にあたるとキラキラしてて綺麗だからな」

言ってフレンドの髪に手を伸ばすと、その手をバシッとフレンドに掴まれた。なぜか頬が少し赤くなっているが、目はジト目になっている。俺はまたなんかしてしまったのか？ そう思っていると、フレンドが口を開いた。

「女の子の髪に気易く触らないで」

「あっ、ゴメン。そういうの全然知らなくて」

「はあー、戻ってるって訳よ。……本当に大丈夫？　もしかして、私がいるから緊張感なくなってるのかなら、少し距離あけるわよ？」

言いながら心配そうに俺の顔を見ってくるフレンド。確かに、結構危ない場面も出てきそうになるな。けど、それは慣れの問題だし。きつと大丈夫だろう。そう考えてフレンドに答える。

「いや、大丈夫だ。まだ慣れてないだけだし、フレンドがそばにいない方が余裕なくなつてキツイと思う」

「……それ、遠まわしに『ずっと、一緒にいてくれ』って言われてるみたいね」

「ん？　いてくれないのか？　まあ、フレンドも将来は家庭持ちたりするんだろうしな。それまでには精神的に自立しなきゃな」

「ぐっ、どっちの当麻にも、こういうのがあるから危ないって訳よ。メンバーとして最後の防衛線である私はなんとか耐えないと」

そういつてフレンドは、俺がハハッと笑っているのを無視してきた。危ないってのがなんのことか分からないし、メンバー最後の防衛線ってのも気になるが。厨房に行つたメンバーが全員料理を持って現れたので、話を中断する。そして先頭を歩いてきたインデックスが笑顔で俺らの前にスープを置いてくる。

「はい、どうぞ。言われた通り私も1品作ってみたんだよ。これ

は昔お母さんが作ってくれた、栄養のある野菜スープなの」

「へえ、コンソメスープ系か？ 色もキレイだし美味しそうだな」

「うん。特別美味しいってわけじゃないけど。家族の温かみっていうか、素朴な感じなんだよ」

皆が座る席にスープの皿を置きながらインデックスはそう教えてくれる。家族の温かみかあ、どういったものか覚えてないけど。いまの俺にとってはこの子たちが家族みたいなもんだからな。別に哀しいとかはないなっ。

なんて1人で皆と一緒にいられることを喜んでいると、料理の配膳がすべて終わったので全員が席につきコップに飲み物を注いでいく。ちなみに席順は

ソファ側	椅子側
ステイル○	— ○インデックス
神裂○	— ○絹旗
滝壺○	— ○フレンダ
麦野○	— ○俺

という風になっている。本来なら女性にソファ側を譲るべきだろうと言う所だが。ステイルは配膳の邪魔にならないよう、端に行っていたみたいだから許してやろう。そう考えながら全員のコップに飲み物が注がれていることを確認してコップを持ち立ち上がる。

「よし、みんな揃ったところで始めるぞ。えー、今回はインデックスが無事呪いから解放され、昔の思い出が戻ってきたことを祝うためのパーティーだ。魔術師のやつらは辛いこともあったとは思う

が、いまはこの幸せを噛みしめてくれ。そして今回のこの席が思い出の再出発になればと思う」

俺がそう言って魔術師のやつらの方を見ると、少し哀しそうな顔をしていたが。インデックスが笑顔で首振ると前の席に座る2人も笑顔になった。やっぱり上条当麻はすごいな、自分を犠牲にしても人を笑顔にしてみうんだから。そんな彼に向け、俺は心の中で追悼の意を込めながらも、笑顔で乾杯の音頭をとる。

「それじゃあ、インデックスの回復を祝って乾杯ッ！」

「」「カンパーイッ!!」「」

そういつて皆はコップをぶつけ合うと、インデックスの回復を祝い。みんなが作ってくれた豪華な料理とインデックスたちの思い出話を楽しんだ。敵として現れた魔術師たちもインデックスの記憶が甦ったことが嬉しいのか、本当に楽しそうに思い出話に花を咲かせみんなを楽しませた。

第五十二話 約束のパーティー（後書き）

現在は日常編と言いますか、原作なら一巻と二巻の間くらいの時期になります。とくに今後の展開を考えているわけじゃないので、少しの間は日常編が続きます。

第五十三話 ストラップができるまで（前書き）

今回も新たな地下施設の部屋が出てきます。店の間取りも含めて描いた方がいいかなあ：とか思うんですが。描く技量もないし、そこらへんは皆さんのイメージで自由に考えてもらった方が良いと思ってるので。描かないでいいかなと思います。個人的なイメージを言わせてもらおうと、地下基地の通路は『ガンダムSEED』に出てくる戦艦『アークエンジェル』と『ドミニオン』の通路をイメージしています。

第五十三話 ストラップができるまで

パーティーがお開きになり食器をさげると、魔術師3人は地下の居住区画に泊まるので先に行かせた。インデックスを追っていたらしい魔術師の2人は、通信だけでなく報告に戻る必要があるため明日の午後に帰国するそうだ。なので、帰るまで少しでも長くいられるように、泊まることを許可したのだ。風呂はトレーニングルームのどこについているシャワーで良いらしいが、大浴場があることを教えると驚いていた。

いくらあいつらがインデックスの友達と言っても、俺はその話を記憶を読み取ることでは知らない。まあ、今日のパーティーで話を聞いて本当に仲の良い友達なんだと思ったけどな。だが、一応基地のことをあまり知られると困るので、鍵はインデックスと同じゲスト用の居住区画や大浴場など生活関係の決まった場所にしか使えないものを渡した。大浴場へ行くのも居住区画をまっすぐ進むだけなので他を知られる心配もない。

そして、ないとは思うが魔術師が敵対行動に出た時のため、俺も今日はこっちに泊まる。最初、滝壺がいつも通り自分の部屋に布団をひくと言ってきた。だが、こっちとしては知識で知っているだけで、昨日今日会ったばかりの子だ。そんな子と一緒にの部屋に寝るのはマズイので、自分は地下の総司令室で休むと伝えた。そんな風にしてメンバーらと洗い物を終えて、暇になったのでいまは総司令室の机でストラップを作っている。

「はあ……楽しいけど、結構疲れたな。麦野にも彼が約束してた『当麻くんストラップ』をあげたけど、滝壺って子がやたら見てたっけ」

そんな風に言いながらパーティーのときのことを思い出す。

パーティーが始まって少ししてから、ステイルと同様に麦野にも渡す物があることを思い出した。なのでポケットから約束の物を取り出し麦野に渡す。

「そうだ、麦野。ほれ、約束の賞品だ」

「ん？ なによ……ああ、これか。へえ、結構ちゃんとできてるわね。本物よりかなり可愛く作ってあるけどね」

「リアルなフィギュアつけても気持ち悪いだろ？ だから、デフォルメしたんだよ」

俺の説明を聞きながら感心したように、「へえー」としきりに言っ
てストラップを見まわしている麦野。なにが面白いのかツンツンの
髪の毛を摘むようにして持ったりしている。ストラップにはしても
いいが、俺にはやるなよ？ やったら流石の俺も手が出ると思う。そ
う考えていると、ストラップに興味があるのか横に座っていた滝壺
が麦野のことをツンツンと突いて呼んだ。

「ん？ なによ滝壺」

「私もみたい」

「ああ。ほら、壊さないでよ」

麦野に言われながら受け取ると、滝壺はジッとストラップを見まわしてる。その集中力というのだろうか、まわりに緊張した雰囲気が出る。楽しそうに思い出話しをしている魔術師3人は気付いていないようだが、メンバーらはその様子をジッと見守る。すると、滝壺は「…うん」と1人で納得し、麦野にそれを返しながら話しかけてきた。

「ありがとう麦野。ねえ、とうま。これっていくら？」

「材料費か？ 工具とかはあるし、本体に使う分は何個も作れるようにデカイの買ったから、単価は500円もしてないと思うが」

「じゃあ、私にも作って欲しい。ちゃんとお金払うから」

「っていつでもなあ。イベント限定アイテム的な扱いだから、依頼されて作ったりはしないんだよ。アクセサリーとかじゃだめか？ そっちなら依頼でも作るんだが」

「じゃあ、ペアリ「超ストップです滝壺さん」……なに？」

ストラップではなくアクセサリーではダメかと訊くと、滝壺の目が一瞬光りなにか言おうとしてきた。だが、それを俺の2つ隣に座っている絹旗が遮った。見ると絹旗が少し真剣な表情で滝壺の方を見ている。それに対する滝壺も遮られたことに不機嫌になっているのか、目が真剣だ。

「先に当麻さんに言っておきますが、誰かにペアアクセサリーを超作ってくれと言われても作らないでください」

「どうしてだよ、友達と同じ物が欲しいって思うこともあるだろう？」

「では、作る前に誰とのペアなのか訊いてください。それが当麻さんとのペアだった場合は作らないでください」

「よくわかんないが、そもそも俺はアクセサリー着けないぞ？頼まれたとしても、そんなときだけだろうな」

絹旗の言ってくる理由は分からないが、素直に答える俺。アクセサリーを着けない理由はいくつかあるが、メインはなくすからだ。今後、上条当麻でいるならば喧嘩や騒動に巻き込まれるだろう。そんなときにアクセサリーを気にして戦ってはいられない。なので、リングでもネックレスでも着けないのだ。さらに言うなら、素手で戦うのにリングとか着けてたら怪我するだろう。

そんな風に着けない理由を考えていると。なにか言おうとしていた滝壺と、俺に作るなど言ってきた絹旗も少し落ち込んだ様子になっている。なんだってんだ？と思ったが、その話はそれで終わりあとは普通にパーティーを楽しんだ。

そうして、パーティーでのことを思い出し少し休憩していると、呼び出しの音が鳴った。ここは総司令室なので俺のカード以外では開かないようになっていた。なので用がある場合は、カード通して呼び出し音を鳴らして俺に開けてもらう必要がある。まあ、今はメンバーらと魔術師しかいないので、そのまま開けてやる。

「どうぞー」

「お邪魔しまーす…って、やけにこの部屋だけ豪華って訳よ」

「なんだ、フレンダか。どうしたんだ？」

部屋の内装に驚いているパジャマ姿のフレンダに俺が来た理由を尋ねると、「少し待って」と言っただけで答えがないフレンダ。そうして、ドアが閉まると「よし」と言っただけで俺の座っている机の方までやってきて口を開いた。

「なにやってるの？」

「ん？ フレンダに言った2つのストラップを作ってるんだよ。」

当麻くんの方は完成してるぞ、ほら」

「パーティーが終わってから、2時間も経ってないのにもう1つできたの？ ああ、ホントだ。ちゃんと出来てる」

そういつてフレンダは笑いながら、彼女いわく今の俺ver.の当麻くんストラップを見始める。麦野にあげた物は幻想殺しの右手を突き出してるポーズだったが、こっちは大人しそうに正面を見て立っているポーズだ。そして、いま作っているフレンダ・ストラップは腰に手を当てているようなポーズにしてある。フレンダがストラップに夢中になっている間、俺は色塗りの作業を続けているとフレンダが話しかけてきた。

「器用ねえ、記憶なくなってもできるもんなの？」

「最初はわからなかったけど、やり方を知ったらわりと出来たよ。」

身体が覚えてたんだろうけど、いまでは最初の3分の1のスピードで作れる」

「ふーん。あ、ちょっと、その私のストラップ少しスタイル控えめにしすぎじゃない？」

「え？ いや、デフォルメしてるしこんなもんじゃないの？」

急に言われて自分が色塗りしているストラップに目を移す。デフォルメしてるのに、変にスタイルよくしてもバランス悪くなるし個人的にはこんなもんだと思っている。だが、本人的には自分はもう少しスタイルが良いと言いたいらしい。なので、本人と見比べてみる。

「うーん…やっぱ、それぐらいならこんなもんだと思うよ」

「……どこ見て言ったか言ってみろって訳よ」

「えっ？ ああ、胸だ《バキッ》 いたっ。なんで殴ってくるんだよ？ 正直に答えたじゃないか」

「正直に言おうが、人の胸らへんをジロジロ見たって言って怒らないわけないでしょっ。それに『それぐらい』って何よ。人が気にしてんのに軽く言ってるじゃないわよ！」

そういつて怒ってくるフレンド。自分がストラップのスタイルに文句つけたのに、本人と比較してはいけないとは…。そんな理不尽な怒りをぶつけられた気分になりながらも色塗りを終え、学園都市製のコーティングスプレーをかけて完成させる。これをやるとタワシでゴシゴシ削ってもなかなか色が落ちないんだ。まあ、素材と科学的に反応して云々ってことらしいが、詳しいことはどうでもいいの

で乾いたのを確認すると本人に完成品を渡す。

「できたよ、フренда・ストラップ」

「はいはい。へえ、本物にはスタイルも可愛さも負けてるけど、よく出来てるわね。御坂にゲコ太の砂糖菓子人形作ったこともあったけど、こういう仕事向いてると思うって訳よ」

「そう？ まあ、彼の趣味の延長だしね。仕事に困ったらバイトとして考えてみるよ」

「結局、この店があるうちは大丈夫だと思うけど。ほら、ケータイ出しなさいよ」

そういつて俺に手を向けてくるフренда。俺のケータイなんてなんに使うんだと思ったが、言われた通りにケータイをポケットから出して手渡した。すると、フрендаは俺があげたばかりのフренда・ストラップを付け始めた。

「あれ、あげたのにいらないのか？」

「だから、自分の分身みたいなものを持っててどうするのよ。それなら、私がいないと駄目なあんたが、持ってた方がいいでしょ。代わりに私はあんたのストラップ付けるって訳よ」

言いながらフрендаは今度は自分のケータイに当麻くんストラップを付けた。あいては「よしっ」と満足げだが、これは絹旗って子が言ってたペアにはならないのか？

「なあ、これは絹旗って子が言ってたペアストラップにならない

のか？」

「え？ あっ！？ えっと、いやそんな深い意味は考えてなかったというか。ホントにそのお…」

「いや、別に言われてイヤじゃないなら良いんだ。変なこと言つてゴメン」

「う、うん。ストラップありがと、大切にするって訳よ」

顔を少し赤くしながら笑顔で言ってくるフレンダ。そしてフレンダから返された自分のケータイに付いているフレンダ・ストラップを確認してから。机の上を片付け始める。といっても、工具を棚の工具入れに戻して、出た材料の破片を手で集めてゴミ箱に捨てれば完了した。

第五十三話 ストラップができるまで（後書き）

一応、【現】上条さんについて説明しておきますと、口調やナレーション中の人の呼び名が変わってるのは仕様です。彼にとってはほとんど知らない子なので、理后や最愛ではなく滝壺や絹旗と呼んでいます。しかし、本人らの前では【前】上条さんのフリをしていますので以前の呼び方になっているのです。

第五十四話 能力の正体（前書き）

今回はオリジナル設定多めです。

第五十四話 能力の正体

ストラップができたので片づけを終え洗面所で手を洗い乾かすと、俺は寝室の方にあるベッドに腰掛けた。説明しておくけど総司令室は、入ってすぐの自分の机と応接用のソファとテーブルがある応接兼執務室の他に、簡易キッチン・バスルーム・トイレ・寝室がある。なのでココだけで普通に生活が送れるのだ。そう考えながらついてきたフレンダに話しかける。

「んで、ストラップを受け取りにきたわけじゃないだろ？」

「うん。当麻の能力についてそろそろ教えてもらおうと思ってね」

「ああ、約束したからね。まず、幻想殺しは知ってるよね？」

「たしか、均衡を保つために持って生まれた2つの力の抑止の方だっけ」

そういつて本物の上条当麻が伝えたことを思い出すフレンダ。まあ、それは本質ではないみたいだけど、だいたいあっている。

「そう。だが、その能力の本質は調和なんだ。異能という自然から外れた状態に調和し、自然な形に戻すっていうね。実際には発生したエネルギーに干渉するわけだから、能力者に触れて無効化するのエネルギー生成が出来なくなるからってわけ」

「ふーん。でも、それだともう1つの力と調和したら、無能力者になるんじゃないの？」

「幻想殺しの正体は能力じゃないんだよ。俺に封印されてる神様みたいな存在を浄化する上での、副産物とでも言えはいいのかな。だから、調和をしても本体に影響がなければ問題なく能力も存在し続けるんだ」

そう、幻想殺しの正体は俺に封印されている、天界から追放された者たちなのだ。俺を通じて世界を救済しないと、この封印は解けないらしい。なので、中にいるやつらも大人しくしてらってわけだ。だが、神や天使を空想上の存在としてしか知らないフレンドは、訳がわからないようで聞き返してくる。

「はっ？ 神様？ それ本気で言ってるの？ だって、当麻は神の力のみを宿してるからエネルギーは宿してないって」

「言ってしまうと、神様のエネルギーって世界中を満たしてるんだよ。そんな莫大なものを、身に宿したらクジラだって破裂してしまう。だから、この世界に存在する限りはその変換機を持ってるだけで十分なんだよ」

言われてややこしそうにしているが、一応は納得したのか「うんうん」と言っただけで俺の隣に腰掛けるフレンド。そこまで理解できたのなら、今度は元始種子の話に移る。

「で、もう1つの能力の話に移るけど。能力名は元始種子^{オリジン}。その能力は存在への干渉」

「元始種子……。存在への干渉って具体的にはなにができるって訳よ？」

「具体的に言えば、存在の認識・肯定・否定ができる。認識って

いうのはよく使ってるけど、それがどういったモノか理解出来るんだ。知識とか関係なくね。それで肯定は、いつてしまえば創造だな。新たに物質だろうがエネルギーだろうが創り出すんだ。そして最後の否定は、文字通り存在を否定し消し去ることができる。幻想殺しの上位互換的な能力とでも言えば分かりやすいかな？」

「うーん：だいたい分かったけど。結局、チート能力としか思えないって訳よ」

言ってフレンドは、ゴロンと後ろに倒れてこっちを見てくる。まあ、俺も反則だとは思うけどね。そんな風に思いながら苦笑していると、服をツイツイと引っ張りながらフレンドが声をかけてくる。

「で、その元始種子のリスクってなにして訳よ？」

「え？」

「だから、前の当麻が言ってたのよ。元始種子は便利だけどリスクがあるって」

俺がなんのことか理解できないと思ったのか、説明するように話してくるフレンド。だが、俺はリスクについては能力について理解したときに知っている。しかし、これを伝えればフレンドはきっと怒って能力を使うなど言ってくるだろう。言う訳にはいかない。けど、フレンドには隠し事をしないって約束した。俺はどうすれば……。

「言いたくないの？ そんなにヤバいリスクってわけ？」

「あ、その、そういう訳じゃなくて……」

「……当麻は私に隠し事しないって約束したわよね？　自分が言いたくないからって約束破るの？」

「ち、違う。でも、これを言ったら多分怒るから」

「結局、言わなくても怒るって訳よ」

そういつて先ほどの軽い雰囲気から、表情と雰囲気を真剣なものへ変え起き上がるフレンド。ジッと俺の目を見てくるが、俺は目を合わせる事ができない。けど、彼女とは隠し事をしないと約束した。俺を守り支えてくれると言ってくれた人との約束は破りたくない。そう思い、ゆっくりだが、話す覚悟を決める。

「オ、元始種子のリスクは植物を含めた生物に対する認識に限ってはない。けど、それ以外の能力を使用する場合。その能力の使用量に応じて俺のじゅ、寿命が減るんだ……」

「なっ!？　なんでそんなこと黙ってたのよッ！　馬鹿じゃないのっ、そんな危険な能力って分かってるなら使わせなかったって訳よっ!」

「けど、能力を使わないとみんなを守れないこともあったみたいだし」

「それであんたの寿命が減ってたら意味ないでしょッ！　そんな力使うんじゃないわよ。使って良いのは、当麻自身が命の危険になったときだけ。いいわね？」

「……それは約束できない。誰かを救うためならきつと躊躇いなく使うと思う」

フレンダは能力のリスクを説明すると怒って俺の胸倉を掴んで馬乗りになってきた。怪我をして血だらけになったときも心配してくれただ。寿命そのモノが減ると分かれば、そのときとは比べ物にならないくらい怒るのは分かってた。そして俺に能力を使わないように言ってくるが、それは約束できない。なぜなら、

「上条当麻は自分の命のことを考えてなんていなかった。救う時は全力で救うんだ。だから、俺も自分の命惜しさでそんなことはできない」

「だからって、他人の命を救うのに自分を犠牲にして良い訳ないでしょう。……ねえ、あと何年残ってるの？」

「あと、30年くらいだよ。もともと寿命は短かったみたいだからそんなに減ってないけどな」

「30年……45歳か。ねえ、私たちと長く一緒にいたいなら。なるべく使わないって約束して？ さっきみたいに絶対使うなどは言わないから。寿命が減るぐらいなら魔術を使ってもいいから」

「わかった、それなら約束する。俺もフレンダとずっと一緒にいたいから」

いいながら俺の上に乗ってるフレンダの頭を撫でる。能力のリスクと残りの寿命を知ったからか、フレンダは哀しそうな表情をしている。まあ、予想はしていたが、それでもこの子や他の子にもこんな顔をして欲しくない。だから、なるべく元始種子は使わないようにしましょう。そう思っていると、フレンダが少し後ろに下がりポスンと頭を俺の胸にあててきた。

「ねえ、当麻。私の寿命ってわかる？」

「フレンダの寿命？ いや、わからないよ。その肉体が最大何年まで生きれるかってのは、テロメアでわかるけど。他の人は世界の枠内で自由に動けるからね。よくいう運命ってのは存在しないから、君たちの寿命は確定してないんだよ」

「そっか。当麻ってやっぱり私たちとは違うってわけね」

「心も身体も人間なんだけどね」

そういつて苦笑しながら優しくフレンダの頭を撫でる。落ち着かせるように、背中をぽんぽんと叩き。サラサラとした綺麗な金髪を指で梳くのが気持ち良い。そうしていると、フレンダもリラックスして眠くなってしまったのかウトウトし始めた。この体勢のままではマズイので、そのまま身体を横に倒してベッドに寝かせると、スリッパを脱がせてタオルをかけてやる。

「おやすみ、フレンダ」

「おやしゅ…とうま…」

本当は「おやすみ、当麻」と言いたかったのだろうが、フレンダはそういうとスウスウと静かに寝息をたて始めた。女の子の寝顔をいつまでも見ている訳にはいけないので、最後に頭を撫でると電気を消して部屋を出てから寝室のドアを閉めた。

第五十四話 能力の正体（後書き）

実は今後の展開をほとんど考えていません。

第五十五話 自己鍛錬（前書き）

今回と次回で上条さんの魔術の変化を書きます。

第五十五話 自己鍛錬

「あの子も強いな、俺もいつまでも頼ってちゃダメだ。元始種子に頼らず、皆を守れるようにならないと。そのためには先ずは自分の戦闘型バトルスタイルを見つけないと」

言いながら俺は寝室から出ると、寝室から出るときに持ってきた運動用の服に洗面所で着替えた。そして、着替え終わるとカードキーのみ持って部屋を出る。自分だけの戦闘型：そう考えると、彼が残してくれた魔神の力はいいかもしれない。魔道図書館の持つ力は、現在、俺とインデックスしかフルに使えない。他にもかなりの魔術師が存在するが、原典を複数所持しているこちらの方が有利だろう。

考えながら歩いていくと演習場に着いた。ここは他よりも地下深くにあるため、まわりに音や振動が伝わらないから夜に鍛錬しても問題ない。なので、まずは魔術を使うため幻想殺しを内向きにする。途端に身体表面をピリッと何かが走る感覚がするが、それは身体が清められ汚れが落ちただけなので気にしない。

「周囲の気を魔力へ変換……」

そうして、魔術が使えるようになると。この地に満ちるエネルギーを吸収し、魔力へと変換する。変換し自身の中で魔力を練り上げると、まずはそれを身体強化にあてる。この状態だと幸運の加護がない聖人状態だな。

聖人のことを思い出すと、今度は認識を使い上条当麻と神裂とかいう人の戦いを知る。そうしてからその戦闘をイメージして高速体術を実際にやってみる。

「はあっ!!」

全身に満たされている強化の魔力を、地面を蹴る瞬間だけ足に集中し爆発させる。するとそれは、上条当麻の使っていた電磁加速ソニックボルトの反発を利用した加速と似た効果を生む。そのままカットの瞬間や、急な方向転換などに魔力を使っていると、徐々にだが動きに慣れてきた。やはり似た感覚を身体が覚えているのだろう。

「すごいな上条当麻は、これが彼の戦っていた世界か…」

動きの中に今度はフェイント的なものを入れたり、壁を走り強く蹴って跳んだりもしてみる。そうしてアップが済んだら、今度は普通に立ったまま魔力をさらに練り上げて術式を組む。最初だしあんまり強いものを出してもあれなので控えめの魔術にしておく。

「———豊穰神の剣」

頭の中で陣を描き魔力を通して発動すると、自分の右隣に巨大な黒い剣が浮いていた。それはどうやら自分の腕の動きと連動しているようで、右腕を縦や横へと振ってどれほど連動しているか確認する。

「（結構、正確に動くな。上条当麻の農耕神ミヨルニルの鋤を軽く払うだけはあるってことか）」

そう考えながら、今度は背中に翼を出し宙に浮く。記憶によるとインデックスは赤い翼だったが、俺のは何故か銀色っぽくて常に炎のように色が変化している。どうしてだろうと考えるが、多分術式が微妙に違うのだろう。まあ、飛ぶ分には問題ないのでそのまま剣を持って飛行訓練していると、誰かが演習場に駆けこんできた。

「あ、あなたはこんな時間になにをしてるんですかっ!!」

「ん？ 神裂か。お前こそどうしたんだ？（危なく素で返すところだった…）」

「どうしたんだじゃ、ありませんよっ。なに馬鹿みたいな魔力練ってるんですか。インデックスを狙う敵だと思ったでしょうッ」

そういつて怒ってくる神裂。俺は話をするため剣を消して銀翼で飛んでいく。その光景に少し驚いているようだが、そのまま目の前に降りると神裂が再び口を開いた。

「そ、それはインデックスが魔神のときに出していた翼ですか？」

「同じ物だと思うが何故か色が違うんだ。まあ、微妙に術式が違ってるんだと思うが、飛べればいいから気にしてないけどな」

「そ、そうですか。それより、時間を考えてください。こんな時間に馬鹿みたいな魔力を練ったら、それに気付いた魔術師は飛び起きますよ」

疲れているのか呆れているのか微妙な表情でそう言ってくる神裂。そういえば、魔力対策してなかったっけ。外からは感知されないが魔法陣の部屋とかじゃないと、地下で魔力練れば同じく地下にいて魔力に敏感なやつは気付くってわけだ。気付かなかったとはいえ、寝てた人に悪い事してしまったな。今度、歩く教会みたいに魔力を練っても外にはばれないようにするアイテム創るかな。

「悪いな、気付かなかったよ。けど、なんでお前以外は起きてこ

ないんだ？ インデックスは魔力に敏感だし、ステイルはエージェントだろうか？」

「……ステイルは別の部屋ですが、あの2人はぐっすり寝ています。インデックスは安心してきつて。ステイルはインデックスと昔話ができるのが楽しかったのか、はしゃぎ疲れて寝ています」

「…苦勞してんだな。露出狂って言って悪かったよ」

「いえ、境遇を理解して頂けただけでも嬉しいです」

そういつて少しがっくりする神裂。若いのに大人びてるってのは、こういう苦勞を普段からしているためだろうな。本来、年上にやるのは失礼だが勞う意味で少し浮き上がり頭を撫でてやる。

「なっ!？ きゅ、急にどうしたんですか？」

「いや、頑張ってるお前を褒めてやろうと思ってな。頻繁には無理でも疲れたらここに来ていいぞ？ インデックスもいるし、息抜きぐらいには付き合うからさ」

「…ありがとうございます。貴方は厳しい一面も持っていますが、基本的に優しいんですね。インデックスも含めこのの方が慕っていた理由がわかります」

「……いや、俺はそんな大した人間じゃないよ（そう、それは全て上条当麻へ向けられた信頼だ。贗物の俺じゃなくてな）」

柔らかな笑顔を向けてきた神裂にそう返すと、相手は少し不思議そうな顔にかわる。多分、俺の気持ちさが表情に出てしまったのだろう。

今度からはもつと気をつけようと決めると。気を取り直し、神裂に話しかける。

「じゃあ、俺はもう少し鍛錬を続ける。今度は結界を張るから安心して寝てくれ」

「いえ、よければ私も付き合いますよ。魔神との戦いはためになるものが多そうですから」

「そうか？ んじゃ、頼むわ」

「はい。では、刀を取ってきますので結界を張っておいてください」

そういうと神裂は演習場を出ていった。それを見送ると、俺は言われた通りに結界を張る。かなり万能っぽいし、上条当麻が使っていたものでいいだろう。そう決めると演習場と同じ大きさに設定して結界を張る。

「——————エーリュシオン死後の楽園」

俺が唱え空中だが下に手を向けると魔法陣が地面に描かれ、それが光ると透明な灰色の壁が演習場の壁や天井に沿うように広がった。だが、これでは神裂が入ってきても干渉できないため、入り口にゲート用の魔法陣を用意し、そこをくぐれば行き来できるようにする。そうして待っていると、寝巻用の浴衣から普段のシャツとジーンズに着替えた神裂が刀を持ってやってきた。

「ん？ これをくぐればいいのですか？」

「ああ、じゃないと異相だから干渉できないんだ」

俺がそう伝えると「わかりました」と言って神裂は魔法陣を通った。試しに水の魔術で小さな水の礫を作り、神裂に緩く飛ばすと神裂はそれを刀で斬った。よし、干渉できるな。相手もそれが分かったのか、刀を納めると準備運動を始める。なので俺も地面に降りて銀翼を消して近付く。

「ルールはどうする？ 今日には魔道図書館の術に慣れようと思ってるから、オリジナルの術は使わない予定だが」

「そうですね。では、前のインデックスと同じような戦い方をしてもらってもいいですか？ 本気できてもらって構いませんので」

「それはインデックスが操られたとき用にか？ なら、見た目も幻術でインデックスにしてやるよ」

そういうと俺は魔術で相手からは自分がインデックスの姿で見えるようにする。まあ、メンバーらで考えたらしい変幻自在カメレオンカラーって能力を使えば早いが、そっちだと寿命減るからな。魔術でもそんなに難しくないし、今日は魔術で相手には俺が魔神・禁書目録に見えるようにする。

「っ！？ お見事です。まさしく、魔神のときのインデックスにしか見えません」

「声も今はインデックスのものに聞えるだろ？ まあ、術の色がことごとく違ってるんだが勘弁してくれ。んじゃ、いくぜ？」

「……はい」

俺が伝えてから離れると、神裂は刀に手を添えた状態で真剣な表情になり構えた。

第五十五話 自己鍛錬（後書き）

少し分かりましたかね？キャラの書き分けというか、違いをつけるために魔術の色を変えてみました。まあ、文字でそう書いてるだけですが、脳内でイメージして違うんだと認識していただけだと思います。

第五十六話 模擬戦・魔神VS聖人（前書き）

今回の上条さんは見た目はインデックスの自動書記モードです。

第五十六話 模擬戦・魔神VS聖人

俺が戦闘を始めることを伝えてから離れると、神裂は刀に手を添えた状態で真剣な表情になり構えた。十分に距離をとったところで振り返り神裂の方を向くと、すぐに魔力を練り上げ術を発動する。

「————警告、第三章第二節。10万3000冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術ローカルウェポンを組み上げます——侵入者に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

「そこからですか。くっ、やはり怖い術ですね。しかし、私もただ呆けているだけではありません、聖痕解放ッ!!」

俺が禁書目録の真似をして目から魔法陣を展開すると、神裂は聖痕ステイグマを解放した。聖痕を解放した聖人の動きは人間を遥かに凌駕するが、その分負担もあるため戦闘可能時間が短くなる。それを分かっているからには、短期決戦に持ち込む気なのだろう。俺の発射前の竜王ラゴンプレスの殺息の射線から逃れるように、迂回すると神裂はそのまま斬りかかってきた。

「はあッ!!」

「————危険、回避行動に移行。最優先の破壊対象である『神裂火織』との戦闘を再開します。警告、第三十五章第十八節。『硫酸の雨は大地を焼く』————完全発動まで五秒」

「っ!?! やはり、空に逃げますか……」

神裂が斬りかかってきたとき、銀翼を出し高速で上昇して攻撃を避けるとすぐにそのまま迎撃に移る。組んだ術式は『硫黄の雨は大地を焼く』。広範囲にわたって灼熱の矢を降らせる技だ。いくら広いとはいえ、演習場ではそこまで逃げられないだろう。まともに喰らえばこれで終わりだ。

「―――発動準備完了。警告、第三十五章第十八節。『硫黄の雨は大地を焼く』を対象に向け発動します」

「はあっ、唯閃ッ!!」

「(なっ!?) そんな技を鍛錬で放つのかッ)」

俺は思わず神裂の攻撃に驚くが、すぐに目の前に多数の魔術防壁を展開して防ぐ準備をする。そうしてる間も神裂の唯閃は、俺の放ったインデックスとは色の違う黒炎の灼熱の矢を薙ぎ払いながら俺に迫ってくる。くそっ、やるしかないか!

「―――警告、第二〇章九節。敵兵の術式『唯閃』の迎撃行動に移行。上記の術式に対し有効と思われる術式の構築を開始します。命名、『神よ、何故私を見捨てたのですか』《エリ・エリ・レマ・サバクタニ》『発動準備完了。即時実行します」

そういつて俺はすぐに迫りくる唯閃へ向け、銀色の竜王の殺息ドラゴンブレスのよな光の柱を放つ。向こうもかなりの威力のため、こちらの攻撃と拮抗している。だが、拮抗しているのならば放射し続けているこちらが勝つことになる。しかし、相手はそんな甘い事をしてくるやつではないだろう。なので、すぐに次の行動へ移れるようにしておく。すると、やはり神裂は死角から迫ってきた。

「はぁぁぁあっ!!」

「————遅延術式解除、敵兵の破壊を実行します。『豊穰神の剣』」

「くっ、時間差で発動する魔術とはっ。やはり、この程度では無理ですか。しかし、私もただ向かってきた訳ではありません。七閃ッ」

飛び上がり上から斬りかかってきた神裂。その刀を黒い豊穣神の剣で受け止め弾くと、神裂は落下中にもかかわらず七閃を使って俺をワイヤーで囲んできた。そしてそのワイヤーが包囲するように迫ってくる。

だが、神裂は本物のインデックスが歩く教会を着ていることを忘れていたのではないだろうか？たしかに生身の俺には効くが、鋼鉄とはいえワイヤーではインデックスに傷を付けることはできないだろう。更に言うならこの銀翼は攻撃にも使える。なので、包囲されたところで問題なく防げるのだ。

「————翼の構成を変更、迎撃用に組み換え対象を切断します」

「∴便利な翼ですね」

言った直後に銀翼を大きく広げて回転し。迫りくるワイヤーを全て切断すると、苦々しげに神裂はそう言った。そして、弾かれ落下している神裂が着地する前に、こっちも次の攻撃をする。

「警告、第二十九章第三十三節。『ペクスチャルヴァの深紅石』」

——敵兵の着地直前に発動します」

「なっ!？」

「——発動、『ペクスチャルヴァの深紅石』」

「ぐああ!!」

俺が発動した魔術『ペクスチャルヴァの深紅石』は、対象の足から見えない力を這い上がるように体内へ浸透させる。そして、浸食された箇所は、骨の関節を強引にずらす痛みに近い激痛を発するというものだ。体術が得意な聖人にしてみれば一時的とはいえ足を潰されるのはかなりの痛手だろう。

そうして、動きの止まった神裂にさらに追い打ちをかけるため、両目の魔法陣を展開しもう一度さっきの魔術を使用する。

「——警告、第二〇章九節。敵兵の『神裂火織』の停止を確認。殲滅を開始します。命名、『一神よ、何故私を見捨てたのですか』《エリ・エリ・レマ・サバクタニ》」発動準備完了。即時実行します」

「っああああ!!」

激痛で動きが止まった神裂に向け『神よ、何故私を見捨てたのですか』をすると、神裂は激痛で咄嗟の動きができず、そのまま炎のように揺らめく銀色の光の柱の攻撃を受け壁まで吹き飛ばされる。だが、それでも攻撃は止まない。神裂はいつまでも攻撃を受け続け壁に押し付けられる形になっている。ガードしようにも威力と勢いが並みの術を遥かに凌駕しているため、一切身動きができず攻撃

が止むまで受け続けるしかないようだ。

そうして何十秒も攻撃を続けると、さすがにもう無理だろうと思い攻撃をやめる。俺が術をやめると光の柱は徐々に細くなり消えた。そして、攻撃を喰らっていた神裂は、押しつけられていた力がなくなり、そのまま床へと倒れた。一切動かないところをみると気を失っているのだろうか？ そう思い幻術を解いて普段の元の姿に戻り飛んで近付く。

「おい、大丈夫かあ？」

「……………」

「ああ、完全に気を失ってるな…」

見ると身体から蒸気のようなものが出て、ところどころから血が出ている。さらにいうと焦げのような匂いもすることから、かなりの火傷も負っているのだろう。そう思い、治療のためうつ伏せに倒れている神裂を上向きに寝かせ直す。しかし、上に向けるとかなり酷い怪我を負っていた。

「ああ、やり過ぎたか。————出でよ、蛇杖。彼の者を癒せ、
アスクレーピオス
蛇杖持つ医神」

神裂の息が弱くなっていたので急いで治療のために蛇杖を呼び出し、アスクレーピオスの加護を強化した。そうして威力をあげるとぐさま回復魔法陣を展開し、医療の神と言われるアスクレーピオスを降臨させ神裂を治療する。まあ、降臨といっても実物ではなく概念的なものだけだな。死者すら蘇らせたというだけあって、神裂の怪我はすぐに治った。

だが、あれほどの攻撃を受けたため、やはり服はボロボロになっている。そんな状態で怪我が治ると、当然危険な状態になるため俺は自分の着ている上の服を脱いで神裂にかけてやった。

「ふう…またいらぬ誤解を受けるところだったぜ」

「ん…あ、ここは…」

「気がついたか？」

「上条当麻…そうか、私は模擬戦に負けたのですね。やはり、いくら聖人でも魔神には勝てませんか」

「まあ、そんな簡単に勝てたら苦労しないだろ。つか、起き上がるとき注意しろよ。お前のシャツは焼けてボロボロになって、俺のかけてやったシャツの下は丸見え状態だからな」

俺に言われると、恥ずかしそうにシャツを押さえながらシユバツッと起き上がりこちらに背中を向けてきた。綺麗な背中だなぁと思っていると、神裂は俺のシャツを着て立ちあがった。

「これで貴方には2敗ですね。おまけに今回は治療までしていただいて」

「気にすんな。また服を駄目にしたお詫びも兼ねてんだから」

「いえ、服は安物なので気にしてません。それより…みてませんよね？」

そういつて少し顔を赤くして尋ねてくる神裂。なんのことだろうと思っただが、直前にシャツの話しかしてたし。たぶん、胸とか身体を見てないかってことだろうな。それだったら、治療が始まったら服をかけてやったので見ていない。なので、そのまま伝える。

「治療が始まったらすぐに服をかけたから大丈夫だ。流石に年頃の娘の身体を気易く見たりはしないさ」

「そうですか。気を遣わせてすみません、ありがとうございます」

「いいって。んじゃ、そろそろ2時になるし部屋に戻ろうか」

「はい。あ、服はどうすればいいですか？」

「今日はもう着ないから、明日インデックスに洗濯機まで持っていかせてくれ」

俺がそう伝えたと神裂は「わかりました」といつて先に出ていく。俺もすぐに結界を解除すると後を追ひ、途中で別れて総司令室へと戻った。その後、部屋でシャワーを浴びてから寝巻に着替え寝ようとする、フレンドがベッドで寝ていたことに気付いた。

「……どうしようかな。まあ、ソファでいいか」

そう考えると、フレンドにかけてあるタオルをちゃんと整え。風邪をひかないよう肩までかけ直してから、予備のタオルを持って自分は応接用のソファで寝た。

第五十六話 模擬戦・魔神VS聖人（後書き）

本当にこの後の展開を考えると…

第五十七話 パーティーの翌朝 その1 (前書き)

今回はわりと短めです

第五十七話 パーティーの翌朝 その1

昨日は、インデックスと魔術師たちを少しでも長くいさせてやろうという事で、神裂とステイルを地下の居住区画に泊めさせた。なので、俺も一応の監視の意味をこめ、地下の総司令室に泊まり。まさにいま、ソファで目を覚ましたところだ。

「んー…はあ、フカフカだとソファでもけっこう熟睡できるな」

そう言いながら身体を起すと、テーブルに置いていたケータイを取り時間を確認する。いまの時刻は8時前だった。この時間なら、滝壺と絹旗という子はきつともう起きているだろう。同じように神裂も規則正しい生活を心がけていそうだし、起きているに違いない。

そんなことを考えながら洗面所で服を着替えると、顔と髪を洗い整える。まあ、まだ起きたばかりだし、ツンツン頭にセットしなくても問題ないだろう。そう考えながらドライヤーで髪を乾かしていると、洗面所のドアが開いた。

「おはようって訳よお」

「おはよう。昨日はよく眠れたか？」

「まあね。他のベッドと違って、この部屋のだけやけに家具が高級な素材じゃない。あのベッドもフカフカ過ぎてやばいって訳よ」

「ははっ、まあ自分で使う物だし、一番良い物にしたんだろ」

言いながら、洗面台から少し離れフрендаに顔を洗うスペースを譲

る。すると、ゆるゆるとフрендаも近付いてきて、腕につけていたゴムで髪を結ぶと顔を洗い始めた。そういや、これ昨日に話してたポニーもどきだな。そう思い、乾かし終わったのでドライヤーを止めてフрендаの髪の毛を指で梳く。

「っ!?! ……ちよつと、気易く触るなって言っただでしょ? それも顔を洗ってるときに後ろからなんて、卑怯者ってわけよ」

「いや、別にそこまで狙ってないんだけど。まあ、嫌だったならゴメン」

「嫌じゃないけど、あんまりしちゃいけないの。優しい男にそうされると、勘違いしちゃう子だっているのよ?」

「…そっか、気を付けるよ」

正直、俺がそうしたところで勘違いを起こす子はいないと思ったが、せっかく教えてくれたので素直に聞いておく。そして、フрендаが顔を洗い終えタオルで拭くと、そのタオルと俺の持ってきていた着替えを洗濯機に入れるため、持って部屋を出た。

部屋を出て上へ向かっていると、ペタペタとスリッパの音をさせながら歩くフрендаが話しかけてきた。

「そういえば、当麻はどこで寝たの? ベッドは2人ぐらい寝れる大きさだったけど、私しか使ってない感じだったし」

「応接用のソファだよ。大きさもあるし、あれもフカフカだからかなり熟睡できた」

「ふーん。でも、ごめんね。ベッド占領しちゃって」

「気にしてないって。それに実際に寝かせたのは俺なんだから」

そういつて謝ってくるフレンダに笑って返すと、彼女もそれ以上は謝って来なかった。そうして雑談しながら歩いていると、ステイルがすたすたと歩いているのが見えたので声をかける。

「よう、ステイル。昨日は楽しめたか？」

「ん？ ああ、君か。まあね、まさかインデックスと昔の思い出話ができるとは思ってなかったよ。記憶が戻ったなんていまでも信じられないくらいだ」

「ちゃんと、当麻に感謝するって訳よ」

「そうだな。ありがとう、インデックスを救ってくれて。君のことはあまり好きになれないが、この恩は絶対に返すよ」

ステイルがそういうと、ここは素直に感謝しろよといった視線でフレンダは相手を見る。だが、彼もこれで本当に感謝しているのだろう。今回の件でステイルは味方を裏切ることになっても、1度は俺たちの力になってくれるに違いない。

上条当麻はステイルを楽々倒していたが、実際はかなり強い方だ。神裂もきつと力を貸してくれるだろうし。彼の死はみんなを救うだけでなく、こんな心強い仲間を俺たちにもたらしてくれた。そんな

風に彼の行動のすごさを理解していると、ステイルが話しかけてきた。

「…そういえば、君たちは昨日も一緒に現れたけど、しょっちゅう一緒にいるのかい？」

「ん？ まあ、俺はこっちに住んでるわけじゃないから、フレンドに限らず誰かしらと一緒にいることが多いと思うが」

「私は当麻に用があったりして会いに行ってるって訳よ」

ステイルの質問に俺とフレンドがそう答えると、相手も「ふーん」と言いながら何か考えている。なんだ、ステイルには俺とフレンドが一緒にいるのが珍しいのか？それとも逆で、頻繁に一緒にいることが気になったとかか？なんて考えていると、ステイルが再び質問をしてくる。

「でも、着替えもせずに朝から会いに行くなんて、そんなに急ぎの用でもあったのかい？」

「は？ 結局、昨日は当麻の部屋に泊まったから、いま一緒にいるんだって訳よ」

「と、泊まった？ ……少し安心したよ。あの子の近くに男がいるのが心配だったんだが、その男に恋人がいるなんてね」

なにを勘違いしたのか、そういつてホッとした表情をするステイルだが、言われた俺たちは2人で顔を見合わせて首をかしげる。こいつ本気でなに言ってるんだ？

「なに勘違いしてんだ、俺らはそんな関係じゃないぞ」

「は？　じゃあ、君たちは恋人でもないのにお互いの部屋に泊まるのかい？　日本人は若者の性が乱れていると聞いていたが、本当だったのか。やはり、こんな男のそばに彼女を置いておくわけには……」

「ふざけんなムツツリ神父。誰も同じ部屋やベッドで寝たとは言っていないでしょうが。私が寝室のベッドで寝ちゃったから、当麻は気を遣って隣の部屋のソファで寝たって訳よ」

「お前、フレンダをあばずれみたいに言うな。次そんなふざけた事言ったら、毛根焼き殺すぞ。つーか、フレンダは日本人じゃねえよ」

俺たちはそう言って後ろからステイルを蹴り飛ばす。2人の人間に同時に蹴られたひ弱な神父は、そのまま前のめりに転倒した。へっ、フレンダを馬鹿にした罰だ。上条当麻としてだけでなく、俺にとっても守りたい大切な人。そんな人物を侮辱して蹴り1発で済むなら安いもんだらう。そう思いながら、「痛た…」と立ち上がるステイルを見る。

「肝に銘じておくよ。魔神を超えた存在の怒りを買いたくはないからね」

「それ以前に、年上の私に対して失礼ってわけよ」

「まあ、中学生の男子って言えばガキだからな。上下関係ってのを後々教えてやろうぜ」

「逆に君らは、年下だからと大目に見ようと」「思わない」：仲が良いね」

揃って言われると、溜め息を吐きながら諦めたように言うステイル。この男は本当にエージェントなのだろうか？もう少し自分より目上の者へ敬意を払った行動をするべきだと思う。まあ、俺もそこまで気を付けている訳じゃないけどな。そうして、その後も俺たちは軽く話をしながら上の店へと向かった。

第五十七話 パーティーの翌朝 その1（後書き）

日常編を書くのはいいんですが、ストーリーに合流するのが難しいです。どうせなら漫画版みたいに省略しないで姫神のことだしてあげたいですね。けどうちの上条さんは、別に参考書買わなくても十分な学力を有してるからなあ。

第五十八話 パーティーの翌朝 その2 (前書き)

先に言っておきますと、今回の上条さんの詠唱に意味はないです。

第五十八話 パーティーの翌朝 その2

地下から出るとフレンドは着替えるために2階へ上がり、俺とステイルだけで店の方へ向かう。すると、厨房の方から何かを作る匂いがしている。それにカチャカチャという音も聞えることから、いままさに調理中なのだろう。そう思いながらステイルは店の方へ先に行かせ、俺は厨房に顔を出す。

「おはよう」

「おはよう、とうま」

「超おはようございます」

厨房に入ると中には早起組の滝壺と絹旗がいた。料理を作っているが、いくつも皿や御碗が出ていることから、インデックスたちも起きているのだろう。

「誰が起きてるんだ？」

「私たちと、インデックスとかんざきだよ」

「当麻さんも超起きてくると思ったので、朝食は多めに作ってます」

「そっか。んじゃ、ステイルとフレンドの分も頼むわ。2人も起きてるからな」

そういつて朝食のお願いをすると、俺はコップを準備しそこに冷蔵

庫から出したオレンジジュースを注ぐ。それを持って厨房から出ようとする、誰かに後ろから肩を掴まれた。誰だ？

「ゴメンとうま。もう1回言ってくれる？」

「ん？ ああ、お前ら4人に加えて俺・ステイル・フレンダの分の朝食も頼むって言ったんだ。もし足りないなら、俺も軽く作るぞ？」

「それは超大丈夫です。私たちが気になっているのは、どうして当麻さんがフレンダが起きていると知っているかです」

「なんでって起きてから会ったんだから、そりゃ知ってるだろ」

なぜフレンダが起きていることを、把握していたらいけないのか分からないが。俺が素直に答えると疑うような目で2人は見てくる。その視線の意味がわからず立っていると、厨房に新たに誰が入ってきた。

「おはようって訳よ」

「おはよう、フレンダ」

「おはようございます。突然ですが、フレンダにちょっと聞いたことがあるんです。フレンダは昨日の夜どこに超いました？」

「昨日の夜？ パーティーの片づけが終わったら、お風呂に入ってたわけよ」

絹旗に訊かれ昨日のことを思い出しながら答えるフレンダ。なぜそ

んなことを聞くんだと不思議そうな顔をしているが、今度は滝壺が問いかける。

「昨日ね。夜にフレンダの部屋に行ったら、フレンダいなかったんだ。どこに行ってたのかな？」

「どこってお風呂あがったら、その後は総司令室で当麻と話をしたくらいね。けど、それがどうしたって訳よ？ なにか用事あった？」

「……やっぱりですか。私たち、いつまでもフレンダが帰って来ないんで、気になって昨日は超寝不足なんです」

「気になったなら、お前らもくれば良かっただろ。俺は2時過ぎまで起きてたし、来たらいれてやったぞ？」

本当に少し疲れた様子の2人に俺がそういうと、相手はジト目でこちらを見てきた。なんだってんだ？ そう思っていると、滝壺が少し怒ったように口を開く。

「……行ったもん。0時過ぎても帰って来ないから、きぬはたと一緒にとうまの部屋に行ったけど。何回カード通して呼んでも、とうま出てきてくれなかった」

「大方、2人はお楽しみ中で、私たちのことなんてどうでも良かったんでしょ」

「なに言ってたんだよ……。ってか、0時過ぎならフレンダは寝てて、俺は演習場にいたころだな」

変なことを言ってくる絹旗を軽く流すと、俺は昨日のことを思い出しながら伝える。すると、今度は2人に加えフレンドもキョトンとした表情になった。そして、フレンドが俺に尋ねてくる。

「演習場でなにしたらって訳よ？ 私が寝た後、すぐにシャワー浴びて寝たんじゃないの？」

「少し鍛錬をな。インデックスの魔道図書館の力を得たから、それを試してたんだ。まあ、夜中になんて魔力練ってるんだって神裂に怒られたがな。んで、その後は2時前まで俺の力を試しがてら、神裂の希望に合わせて魔神・禁書目録になり2人で模擬戦してたんだ」

「へえ、フレンドとイチチャついていると思いきや、鍛錬してたとは当麻さんて超真面目なんですね」

「言い方は引かかかるが、基本的にそうだな。どうすればもっと強くなれるかとか、いつも考えてるよ（じゃないと、俺はみんなを守れないから…）」

俺がそういうと一応納得したのか、絹旗と滝壺は朝食作りを再開した。フレンドもその様子をみると、相手の話はもういいのだろうと思ったのか俺と一緒に厨房を出ようとする。だが、厨房から出る直前に静かに言われた。

「けど、とうまの部屋にフレンドが泊まったことに変わりはないよね…」

「ですね。そこところは、あとで超聞かせてもらわなくては」

「……………なあ、あとで出かけないか？」

「……………それはそれで、後で言われるってわけよ」

聞かれる前に逃げようと考えたが、フレンドが言った通り。たしかに、まとめてどころか威力が累乗していきそうだ。ならばと俺は咄嗟に思いついた事をいう。

「よし、みんなで出かけよう。インデックスの服とか日用品を揃えるんだ！」

「それなら大丈夫ってわけよ。たぶん、インデックスも喜ぶと思うし」

「そうか、んじゃ2人もそういうことでよろしくっ」

俺はそういうと、厨房の2人がなにか言う前にフレンドの手をひき厨房を出た。そして廊下に出るとそのままインデックスたちのいる店の方へ行き、まだあいさつをしていなかった2人にあいさつをする。

「おはよう、2人とも」

「おはようってわけよ」

俺たちが席に近付きながらあいさつすると、話をしていた3人はこちらを向きまだ会っていなかった2人が、あいさつを返してきた。

「あ、とうま、フレンド。おはようなんだよ」

「おはようございます。……なぜ、お2人は手を繋いでいるのですか？」

「ん？ まあ、いろいろあってな。もういいか」

あいさつをしてきた神裂に訊かれると、そういつて手を離す。まあ、いそいで厨房から出るためだったしとくに理由はないんだけどな。だが、そう考えていると、ステイルがまた余計なことを言ってくる。

「神裂、気を遣ってやらないか。彼女は昨日、上条当麻の部屋に泊まって寝たぐらいで、2人はとても仲がいいんだよ」

「「ええっ!？」」

ステイルが余計なことを言うと、それを聞いたインデックスと神裂は驚いた表情になる。そして、それだけではなく、なにを想像したのか耳まで赤くなり始めた。くそっ、この男のせいでいらぬ誤解を受けたじゃないか。そう思い制裁のために元始種子の封印を解き、幻想殺しを内向きにする。髪型は朝だしまだ良いかと降ろしてあったので丁度いい。

「――我を侮辱する者に苦痛を――乙女を辱めた者に裁きを――神に仇なす者に死を――深淵より出で、その業火により魂まで「当麻ストップ!」：なんだよ?」

「こんなところで魔術を放ったら私たちにも被害が出るってわけよ」

「ん？ ああ、大丈夫だ。これ罪人を内側から焼く術だから」

そういつてフレンダを安心させると、俺は愚か者に罰を与えるため

作業に戻る。途中まで詠唱してしまったから、詠唱し直すのは嫌なので新しい術にしよう。

「――セラフィムより堕ちしその者――地獄の「ま、待ってくださいっ」……こんどはなんだ、神裂」

「なんじゃありません、さっきと術が変わっているじゃないですか。それに、先ほどの術もありますが、そんな詠唱の術聞いた事ありません」

「だろうな、魔道図書館にもない術だし。けど、余計なこと言ったりつに罰を与えるには豪華すぎる術だしいいだろ？」

「……途中までしか聞いてないけど、詠唱が地獄や堕天使に関わるものだったんだよ。そんな術式、神に仕える十字教徒は使わないかも」

俺の詠唱から術式が地獄関係だとわかったインデックスは、そう言いながら呆れた表情で見ってくる。まあ、これは俺に封印されてるやつらの力を魔術的に一部再現するものだからな。神に仕える人間が、悪魔の力を使うわけがない。

「俺は十字教徒じゃないからな。魔道図書館を得たが俺の大切なものを傷つけるなら、この力は魔術を滅ぼすことにだって使うぜ」

「ムー。なら、そのときは私がとうまと戦って止めるんだよ」

「無理だな。お前ら十字教徒がやれば、その行動は神の教えを守るためにその神と戦うって矛盾をはらむから」

「あ、そうか。でも、とうまは神様本人じゃないでしょ？」

「お前らが神と崇める者の代行体だよ。自由意思まで任されたな」

言いながら椅子をひきフレンダを座らせると、自分もその横に座る。言われたインデックスは複雑そうな表情をしているが、まあ別に本気で魔術世界を滅ぼす気はないので放っておく。それよりも、その前で引き攣った顔をしている赤毛の神父に話しかける。

「お前、あんまりふざけた事言ってる、本気でやるからな。次はお前を人間ミサイルにしてヴァチカンに飛ばしてやるよ。そうすりゃ、イギリス清教とローマ正教の戦争勃発だ」

「……そんな術があるのかい？」

「ないけど。結界とか使って守りながら、燃やして飛ばせばそれで完成だ」

「そんなふざけた攻撃受ければ、誰だって超怒りますね」

そういつて笑いながら料理を運んできたのは絹旗だ。後ろでは滝壺もクスクスと笑っている。まあ、確かに赤毛の神父が単身人間ミサイルになって攻めてきたと言われれば、シュール過ぎて本当かどうか疑うだろう。その光景を想像しながら俺は立ち上がると、2人が運ぶのを手伝い配膳が終わると朝食にした。

第五十八話 パーティーの翌朝 その2（後書き）

そのうちローラを出そうかな…とか思っています。

第五十九話 禁書目録について（前書き）

この話も割と話数多くなってきましたね。自分は新規連載か割と話数の多い物を読むようにしているので、同じような選び方をしている人が読んでいたりするのかなあ…とか思っています。

第五十九話 禁書目録について

朝食をとり地下で鍛錬をしているとお昼になり、起きてきた麦野も含めた8人で昼食をとった。そして、いまは地下の会議室をあけて全員で今回の件をどう報告させるかを話し合っている。

「じゃあ、今回のことは俺が幻想殺しで首輪を破壊したことだけ伝えてくれ。インデックスの記憶が戻ったこと、自分で魔力を練れることは言うな。そして、俺のことは異能を消せる『幻想殺し』という右手を持っただけの日本の学生って言え。自信がないなら魔術でロックもかけてやる」

「いえ、大丈夫です。インデックスのことがばれたら、この子はきっと連れ戻されるか、最悪殺されるかも知れません。なので、私たちも秘密は絶対に守ります」

「僕も秘密は守る。だから、君はこの子を絶対に守ってくれ。そのためなら、僕も力を貸す」

「2人とも心配し過ぎなんだよ。私だって魔神になったんだから、自分のことは自分で守れるんだし」

そういつて魔術師2人に笑顔を向けるインデックス。まあ確かに、ここにいる者の強さで言えば俺の次に強いのはインデックスだ。次点で、神裂・麦野ときて絹旗とステイルはどっちが強いかわからない。んで、フレンダと滝壺も土俵が違うから比べられない。まあ、戦えば武器を大量に持つてゐるフレンダが勝つと思うが。

「それと、この地下の事もばらすな。インデックスは普通の喫茶

店で住み込みで働くことにしろ」

「…それもインデックスを守るためかい？」

「まあ、インデックスを含めた俺たちに被害が出ないようにするためだ。お前はこんな国家レベルと戦える施設を保持した者のところに、自軍の最終兵器を置けないだろう？」

「わかった。はあ…インデックスのためとはいえ、こんな一大勢力クラスが存在するという情報を組織に報告できないとは。エージェント失格だな」

ステイルは溜め息を吐いてそんな風に言うと、頭に手を置いて首を振った。まあ、組織よりも個人を優先しての行動だからな。あとでばれて、裏切り者として粛正されてもしょうがないくらいの話だ。その事がわかっていいる他のメンバーもステイルをみて苦笑している。

「まあ、話はそんなぐらいだな。一応、俺の番号は教えておくが電話は常に盗聴されてると思えよ。んで、学園都市内でも同様だ。ここは安全だが、他は常時どこかに耳があると思え」

「わかりました。ところで、話は変わりますが、ステイルの胸ポケットから出ている物を見せてもらってもいいですか？」

「ん？ なんだい急に。ただのケータイだよ。ホラ」

神裂に言われてステイルがケータイを渡すと、途端に神裂の動きが止まった。みなその様子にどうしたんだと、思っていると神裂が急に立ち上がり俺の元へやってきた。まあ、たぶんあれのことだろう。

「上条当麻、お願いがあります。私にも「断る」…え？」

「ストラップは受注生産してないんだ。それはイベント限定アイテムだからな。昨日も、理后に言われたが断ったんだ。だから、欲しくても我慢するか、ステイルと交渉するかしてくれ」

「…：そうですか。では、ステイル「断る、それは僕がもらった物だ」くっ」

俺にストラップの依頼を断られ落ち込む神裂。だが、彼女はすぐに立ち直りステイルに交渉しようとしたが、ステイルも気に入っているのかすぐに断った。ってか、2人はどれだけインデックスが好きなんだ…。そして、メンバーはメンバーでそれに触発され、昨日の続きを話している。

「むぎの、3日間お昼を鮭にしてあげるから、とうまのストラップ頂戴」

「いやよ、これ意外と気に入ってんだから」

「じゃあ、5日間では超どうですか？ 高級な鮭フレークも1瓶つけますよ？」

「いや。つか、なんであんたらは食事でしか釣ろうとしないのよ」

滝壺と絹旗にストラップをせがまれ拒否する麦野。交渉が全て鮭関係だが、他のメンバーにとって麦野は鮭をやれば言う事を聞いてくれるキャラなのだろうか？ そんな風に疑問に思ったが、考えても無駄なので関わっていない2人と話をする。

「……平和だよな」

「そうだね。でも、自分のストラップで友達が騒いでるのはちょっと複雑かも」

「前はそれもできなかったんだし、プラスに考えた方が良いつて訳よ。あ、当麻。髪の毛やってあげるから、ワックス貸して」

「ああ、頼むよ。軽くていいからな」

髪をセットしてくれるというフレンドの申し出を受け、俺はワックスをポケットから出して渡す。そういえば、食べ終わってからセットしようとして忘れてたんだよな。こっちの方が楽だからツイサボりそうになってしまふ。そう考えながら、セットが終わるのを待つと、他の人の話も終わったようだ。

「交渉は終わったか？」

「ステイルが、独占欲の強い男だということがわかりました」

「むぎのにも鮭より好きな物があるってわかった」

「まあ、途中からは超意地になっていた部分もあると思いますが」

交渉を失敗した3人はそういつて少し疲れた様子だ。まあ、別に誕生日とかにお願いしてきたら、作ってあげるんだけどな。そう思いながら笑って話を聞いていると、セットが完了したのでフレンドにお礼を言って立ち上がる。

「じゃあ、そろそろ出るか。お前たちも空港まで見送ってもらった方が嬉しいだろ？」

「あ、いえ。そこまでしていただかなくて結構ですよ。その分、この子との買い物を楽しんでください」

「そうか？ まあ、お前らがいいなら良いけどさ」

そうして話を終えると全員で会議室を出て、先になら向かっているように伝える。他の人間は不思議そうにしていたが先に行ったので、俺は総司令室に置いておいたお土産をとってから上へ向かった。

店の中で魔術師3人の集合写真をとったり、空港までの間に飲めばいいとお茶を渡したりしてから全員で店を出ると空港行きのバス乗り場に来た。ステイルと神裂は驚くほど持ち物が少なかったが、エージェントとして色んな場所を移動するには必要なもの以外は現地で買って済ませたりするそうだ。

「じゃあ、またね。ステイル、かおり」

「いつこっちに来れるかわかりませんが、来る時には連絡しますね」

「困ったことがあればすぐに連絡するんだよ。とくにその男に変なことをされた時とかね」

「……素直に別れを惜しめよ」

いちいち人のことを言ってくるステイルに呆れたように言うと、苦笑する神裂とインデックス。言われた本人は気にした様子もなくインデックスの頭を撫でている。まあ、せっかく前の関係に戻れたのに別れなければいけない哀しさを、こいつなりに紛らわせているのだろう。そう思いながら、神裂にお土産を渡す。

「ほら、神裂。これをお前らんとこの最大主教に渡してくれ」
アークビショップ

「え？ 貴方は、あの方と知り合いなんですか？」

「いや、知らないけどインデックスを預かるんだし、好印象を与えておいた方が良さそうだろ？ 中身は入浴剤と風呂で遊ぶオモチャだ。別に罠を仕掛けたりはしてないから、安心してくれ」

「そうですか。わかりました、渡しておきます。では、バスがきたのでいきますね。皆さん、本当にありがとうございました。インデックスのこと頼みます」

「じゃあ、インデックスまたね」

「うん。こっちからも電話とかするから、またね」

インデックスがそういつて手を振ると、2人も手を振ってから空港行きのバスに乗り去っていった。友達2人と別れたインデックスは少し寂しそうにしていたが、「よしっ」というと笑顔で俺たちの方を向き口を開いた。

「じゃあ、いこっか。久しぶりのお出かけだから楽しみなんだよっ」

「じゃあ、とりあえず服と雑貨を見に行きましょう。どこで超みますか？」

「営業再開したし、セブンスミストで良いんじゃない？」

絹旗が皆に聞くと麦野がそう答えた。セブンスミストは虚空爆破事件があつて一時的に営業中止していたが、犯人も捕まり店も修復できたのでこの前から営業を再開したところだ。今は、リニューアルオープンということで、いろいろと安くなっているため丁度いい。他の者もそれに納得すると、そこへ向かうことにした。

「じゃあ、いこうか。とうま、手繋ごう？」

「ん？ いや、暑いだろ。俺はいいから、道知らないインデックスと繋いでやれよ」

いざ、出発しようと思ったら滝壺が手を向けてきたのでそう言つて、テクテク歩こうとしていたインデックスを引っ張つて手を取り乗せた。急に引っ張られたインデックスは怒つて俺の足を蹴つてきたが、それ以上に滝壺はぶすつとした表情になり「…もういい、いこインデックス」といつて歩き始める。

別に俺が怒られるような要素はないと思う。以前の上条当麻はこんなもんだつたようなんだが、俺はどこか変なことをしてしまったのだろうか？ そう思っていると、絹旗は溜め息を吐いて歩きだし麦野も「そこは気を遣いなさいよ」と言つて歩き始めた。

「俺、なんか悪いことしたか？」

「……それ本気で言ってる？　だとしたら1度病院に行った方がいいってわけよ」

「いや、身体はいたって健康だと思うが」

「問題なのは頭の方だから大丈夫よ」

フレンドもそういうと、みんなの後を追うように歩き始めた。だが言われた俺は考える。頭？確かに記憶は失っているが、認識によって見たからある意味で記憶はあるぞ？それとも他になにか問題があるのだろうか……。まあ、考えてもわからないので、俺も考えることをやめみんなの後を追った。

第五十九話 禁書目録について（後書き）

前書きの続きとも違うのですが、そんな感じで割と話数の多い物や始まったばかりの作品をお気に入り登録して読んでいます。まあ、お気に入りには非公開にしますけど。理由は「こいつ〇〇系ばかり読んでやがる！」って思われたら恥ずかしいからです。

それと基本的に自分の作品に感想をくれた作者様や、お気に入り登録してくださっている作者様のものは読ませていただいています。まあ、後者の発見は難しいので「俺のも読んでくれ！」という方は感想に書いてくださればありがたいです。

第六十話 記憶で視た子たち（前書き）

この作品を読んでいる方の中にドイツ語やフランス語が分かる方はいますか？もしおられるなら、ツツコミは無しでお願いします。

第六十話 記憶で視た子たち

セブンスミストに着くとインデックスはその大きさと人の多さに驚いていた。まあ、夏休みだしセールで安くなっていると聞けば、学生たちも集まるだろう。この人の多さでは固まって移動するのはきつい為、他のメンバーらにインデックスについてもらうことにした。支払いはあとでするから、立て替えておいてくれと麦野に頼んでな。

「じゃあ、なにかあったら電話してくれ。俺は上の雑貨のフロアにいるから」

「わかった、また後で合流しましょ。多分、時間かかるから1人でお茶しといていいわよ」

「了解。みんなのこと頼むな」

麦野とそう話すと、女性陣はインデックスの着る物や日用品をみにいった。まあ、自分たちが欲しい物があればそれも買っていていいと、言っておいたので当分戻って来ないだろう。なので、俺はなにか面白いものがないか雑貨のフロアに行くことにしたのだ。

エスカレーターで移動すると雑貨を扱うフロアにきた。女性向けの服を置いているフロアに比べると、少しだけ人が少ない気がする。まあ、みんなの狙いは夏物と早めに出ている秋物なのだろう。そう考えながら、店内をまわりとりあえず工作に使うような物が置いてある棚をみると、上条当麻の記憶で知っていた子たちが数人歩いていた。

「ふう…このフロアは幾分か空いてるから、少しはマシね」

「まあ、セール中ですし夏休みということもあって。他の方も思い切り買い物を楽しんでいるのでしょう」

「けど、白井さんが選ぶような下着は、ほとんど買われてませんでしたね」

「初春も今度からああいうのにすれば？　そしたら、セールでも苦勞せずに買えるし」

「え、遠慮しておきます…」

えっと、認識してっと。あの茶髪が御坂美琴、超能力者の第3位か。んで、ツインテが白井黒子で呼び方は黒子。そしてあの花飾りは初春飾利で、ロングヘアが佐天涙子ね…確認終了。最近は寝る前などに以前の記憶を認識し、知り合いの顔などを把握するようにしている。なので、その中で見た事のある人物らを発見して、改めて確認したのだ。前の上条当麻はとくに御坂と白井と仲が良かったらしい。なので、俺もとちあえず白井にアタックをかける。

「だーれだ？」

「…あの、普通それって目を隠してやるものでは？」

「それなのですが、知り合いといえど急に抱きつくのは感心しませんわね」

「だーれだ？」と言っておきながら、白井に後ろから抱きつき頭に顎を乗せると。初春が普通に突っ込みを入れてきた。そしてやられた本

人も少し呆れながら、返してくる。まあ、冷房効いてるけどくっつけば暑いしな。そう考えながら、顎の起き場所のベストポジションを探していると、御坂が話しかけてきた。

「急に現れておいて、いつまで抱きついてるのよ。さっさと人の後輩を解放してくれる？」

「これにはルールがあつてな？ 捕まってる人間を解放するには他の人間が生贄にならねばなんのだよ」

「上条さんは誰かご希望はありますか？」

御坂に言われてルールを説明すると、佐天がそう言って希望を尋ねてきた。指名されることを恐れてか気にする他の3人と、下で少し疲れたようにしている白井がいるが。こちらとしては白井以外は抱く気はないので理由も含めそれを伝える。

「いや、黒子以外にする気はないよ」

「おおっ、大胆ですね。して、その理由は？」

「御坂と佐天じゃ身長差の関係で頭に顎置けないし、初春は花飾りがあるから無理だろ？ まあ、消去法だな」

「好みならまだしも、消去法とは失礼ですの。早く解放してくださいましっ」

そういつて白井は嫌がり始めたが、丁度ベストポジションをみつけたのでそのまま会話を続けることにする。その様子を初春と佐天は苦笑いしながら見ているが、御坂はおもしろくなさそうに少し不機

嫌になっている。まあ、このままでは時間が無駄になるので自分から話題を振ることにした。

「お前たちは服でも買いにきたのか？」

「はい。まだ暑いので夏服を少々と水着を買いにきたんです」

「んで、あんたはなんているのよ？ ナンパ？」

俺が尋ねると素直に答える初春に対し、やや喧嘩腰に返してくる御坂。この子はなんでこんなに怒ってるんだろう？ そんな風に相手の態度に疑問を持ったが、とりあえず相手の質問に答えることにした。

「まあそれは1人ゲットしたからもう達成したが、一応今日は買い物だ。下で麦野たちが買い物してるんだよ」

「あ、麦野さんたちもいるんですね。でも、上条さんは荷物とか持ってあげないんですか？」

「俺の手は2本しかなく、今は黒子を抱くのに使ってるだろう？ だから、5人分の荷物を持つことなどできないのさ」

初春の質問に俺がフフンとそういうと、「いえ、わたくしのことは離してくださいって結構ですよ？」と白井が言ってきたが無視しておいた。だが佐天は俺の言ったことが気になったのか、少し不思議そうに聞き返してくる。

「5人って誰か増えたんですか？」

「ん？ ああ、インデックスっていう外国人のシスターがな。今

日はそいつの服や日用品を買いにきたんだ」

「へえ、フレンダさんに加えて外国の方が増えるなんて、なんか国際派ですね」

「まあな。他のメンバーは知らないが、とりあえずフレンダと麦野は英語とかも話せるし。俺だってこれでも基本的にどこの言語でも喋れるんだぜ？」

そういうと驚いたような表情になる4人。まあ、白井の顔は見えないが、「まあっ」と言っていたので驚いているのだろう。けど、この子はなんでこんな口調なんだ？ 同じお嬢様でも御坂は普通の口調なのにな。なんて、そんな風に考えていると、少し真面目な表情の御坂が話しかけてきた。

「Wie hei? t das auf deutsch?」

「Es ist ein Bleistiftfall.」

「くっ……O? sont les toilettes?」

「Allez tout droit. Puis prenez? droite. : つーか、それならさっさと行ってこいよ」

「本当に分かってるのか、試しただけよっ」

俺に言われて少し恥ずかしそうに答える御坂。まあ、説明しておくで最初はドイツ語で「あれはドイツ語でなんでしょう?」って言われたんだ。んで、俺は「筆箱だろ」って簡単に答えると、今度はフ

ランス語で「トイレはどこですか？」と聞かれたわけだ。んで、上にある案内見て「まっすぐ行って、右に曲がればあるだろ」って教えてやったのに別にトイレに行きたいわけじゃなかったんだとき。つか、多言語で問題出すとか普通の中学生のやることじゃないだろ…。

「御坂さん、いま何語で話したんですか？」

「ビリビリ星の軍人が使う特殊言語だよ。この星のドイツ語とフランス語っぽく聞えるようになってるんだ。ちなみに最初に御坂が言ったのは『私のこと愛してる？』で、俺が答えたのは『まあ、ラーメンのナルト程度には』って意味だ。んで次の御坂のセリフは『じゃあ、今日はあなたの家に泊まって良い？』で、俺の答えは『ゴメン、うちペット飼えないから』な。理解できたか？」

「…ちなみに上条さんの好きなラーメンの味は？」

「味噌だ。だから、基本的にナルトは入ってない」

そう言って佐天の質問に真顔で答えると、御坂が「ちくしょうっ！」と膝を折って床をバンバン叩き始めた。つか、先に話の内容に突っ込めよ。そう考えながら奇行に走った御坂をみていると白井が話しかけてきた。

「あのー、あまりお姉様で遊ばないで頂けますか？」

「いや、会話の内容を捏造した時点で突っ込みがくると思ってたんだよ」

「え？　じゃあ、さっきの嘘なんですか？」

「本当は最初がドイツ語で『あれはドイツ語でなんというか分かりますか?』『筆箱です』。次にフランス語で『トイレにはどうやったらいけますか?』『まっすぐ行って、右に曲がってください』って言ったんだ」

本気で信じていたわけじゃないだろうが、本当の訳を説明すると初春と佐天は「ははっ…」と苦笑した。そして床をバンバン叩いていた御坂が立ちあがると、ポケットからハンカチを出して渡してやる。

「使うか?」

「別に汚れてないからいい。けど、本当にいつまで抱きついているのよ?」

「慣れてくると楽しいぞ? それに少し甘い匂いがするからオヤツ時には良いんだ」

「……絶対に食べたり舐めたりしないでくださいまし」

「じゃあ、オヤツにでも行こうぜ。上で有名ホテルのケーキを出張販売してるって書いてたし」

俺がそういうと佐天と初春は嬉しそうにし、御坂はそんな様子を見てやれやれ苦笑している。行くと決めると、佐天と初春がどんなのがあるかなあと楽しそう話しながら歩き始めたので、俺と御坂もその後ろをついていく。ああ、白井のことは少し持ち直して抱っこしたままだ。胸とヘソの間くらいのところをホルドし、俺の腕の上に白井がダラーンと腕をたらしている。

「いやいやいや、流石に突っ込み所が多すぎですの」

「御坂の短パンと初春の花飾りか？ それだったら、お前の口調も十分突っ込み所だと思うぞ」

「ほっといってくださいまし。まあ、確かにお姉様の短パンについては同意しますが、初春のあれは気にしたら負けですの」

「……なにか秘密があるのか？」

「いえ、それは知りませんが。季節によって花が変わったりはしていますわ」

そうやって初春の花飾りについて話しながら、俺たちは上の方にあるスイーツを販売しているフロアへと向かった。

第六十話 記憶で視た子たち（後書き）

あのお、実を言いますと自分が書いてるのってこれとペルソナ3の二次創作の2つなんです。

それで、ネタ詰まりとか息抜きのためにこれを書き始めて、それそろもう1つの作品への熱が再燃焼してきたので少しの間こっちを書くのを休みたいと思います。

といっても、書き溜め分が続く限りは更新も続くので一週間くらいは大丈夫だと思いますが、それが切れたらもう一つの作品の区切りのいいとこまで書けませんのでご了承ください。

てか、ペルソナ3もですがゼロの使い魔でも書いてみたいなあとか思ってるんですね。まあ、二作品でも両立できないほど遅筆なので、どっちかが終わるまではさらに増やすことはしませんが。

第六十一話 店員たちと超電磁砲組（前書き）

もう一個の作品を書いているんですが、2ヶ月近く書いてないと作品の雰囲気忘れますね…。

第六十一話 店員たちと超電磁砲組

上のフロアにつくと結構混んでいた。普段は行かないようなホテルのキーキが食べられるということ、それ目当てにきている客もいるのだろう。どこか空いてる席はないかと探すと、丁度大きめの席が空いたので俺たちはそこに座る。

「んじゃ、買ってきていいぞ。俺は荷物みておくからテキトーに俺の分は選んでくれ」

「わかりました。じゃあ、白井さんはどうしますか？」

「わたくしも行きますわ。ですから、離して頂けます？」

「しょうがないな。ちゃんと戻ってこいよ」

俺がそうやって送りだすと白井は「はいはい」とめんどくさそうに答えて皆についていった。ふう：疲れるな。気付かれないってことはこんなもんでいいんだろうけど、今の自分としては初対面だ。そんな相手に昔から知ってる仲の良い友人として接するのはとても疲れる。

正直に言えば別にあそこで話しかける必要はなかった。けど、彼がどんな人たちと付き合ってきたかを知りたかったのだ。まあ、知識として知ってたし、実際に話してみてもとても良い子たちという事が分かった。やはり彼はそういう人を集める、そういう人が集まるといった星の元に生まれたのだろう。そう考えていると、4人がキーキと飲み物を持って戻ってきた。

「お待たせしました。飲み物はコーヒで良かったですよね？」

「ああ、ありがとう。おっ、見た目からして美味そうだな。誰が選んでくれたんだ？」

「私よ。普段からケーキ作ってる人間に食べさせるなら、面倒で作らないようなのや普段は買わない素材を使ったのを選べばいいんじゃないかって」

「選び方は微妙だが、良いセンスだ。んじゃ、食おうぜ」

俺がそういうと他の4人も席について食べ始める。席は俺・白井・御坂で一行。その向かいに佐天・初春が座っている。佐天はティラミス、初春はミックスベリーのタルト、白井はチーズケーキ、御坂はザッハトルテ、俺は桜のムースケーキだ。ひと口食べてみるが、甘過ぎずふんわりと桜の香りがするのが楽しいケーキだな。とても気に入ったので、選んだ御坂にもひと口やろう。

「ほれ、御坂。あーん」

「ちょっ、急に何言ってるのよ!？」

「美味いから選んでくれたお前にもやろうと思ってな。ほら、早く」

「え、その…わかった…あーん…んぐんぐ。うん、美味しい」

そういつてなぜか顔を赤くして俯く御坂に「だろ?」というと、俺も食べるのを再開した。何口か食べて、せっかくなのでコーヒも温かいうちに飲もうと口を付けると他の人の手が止まっている事に

気付いた。どうしたんだと思い尋ねてみる。

「食べないのか？」

「あ、いえ。食べますけど、上条さんってときどき大胆ですね」

「これが超能力者^{レベル5}を圧倒する人の実力なんですネ。まさか精神攻撃系だったとは……」

そういつて初春と佐天は笑いながら食べるのを再開した。だが、初春の言ってた大胆とはなんのことだろうか？よくわからないが、考えても答えは出なさそうなので諦め食べ始めると白井と御坂がまだ再起動していないことに気付く。

「お前もどうしたんだ？　せっかくだし、早いうちに食べちまえよ」

「クケケケケ……私のお姉様にしょっぱなから、『あーん』などと羨ましいことするとは。上条さんを侮ってましたわ。これは私も本気を出す必要がありますわね」

「よくわからんが、御坂も手動かせて。まだ買い物あるんだろ？」

「わ、わかってるわよっ。もう……まったく……」

声をかけると2人もちゃんと食べ始めたので、安心して食べるのを再開する。そして雑談でもしながら食べようと思い、ファッシュンに詳しそうなこの子たちにある物について聞いてみることにした。

「なあ、お前らワックスが売ってるとこ知らないか？　ワックス
っていつでも天然由来成分のやつなんだが」

「ワックスというか、ケア用品も含めておいてるフロアはあるわ
よ。けど、なんで天然由来のやつなんて必要なの？　あんたそんな
デリケートな体質とは思えないんだけど？」

「こっちにも事情があるんだよ。まあ、あることをしたら人工物
のやつは落ちちまうんだ。だから、天然物使えば髪型を維持できる
んじゃないかってな」

「へえ…じゃあ、あとで案内しましょうか？　おやつを御馳走に
なるだけじゃ悪いですし」

そういつて紅茶に口をつけながら尋ねてくる初春。別に子供におや
つを買ってやっただけだし、なにかしてもらおうとは思っていない。
だが、本人らがそれでいいならその申し出を受けることにした。

「ああ、頼むよ。ここって女性物メインだろ？　だから、普段こ
ないし全然場所がわからないんだ」

「じゃあ、今度2人っきりで案内しましょうか？」

「んー、佐天の申し出は嬉しいけど、そこまで利用することもな
いからな。デートしたいなら、第六学区とかに行こうぜ」

言いながら笑って返すと佐天は「はう…」と顔を赤くして俯いた。
冗談のつもりだったんだが、佐天まで先ほどの御坂みたいになると
は…夏風邪でも流行ってんのか？　なんて考えながらコーヒーに口
をつける、後ろから頭を叩かれた。

《バシッ》

「いてっ…誰だよ？」

「あんた電話も出ないで、なに中学生口説いてんのよ」

「しらい、ういはる。このロリコン捕まえていいよ」

「うー、とうまってしずりたち以外の知り合いも全員女子なのかな？」

急に頭を叩かれそっちを向くと。イラついた表情の麦野、無表情だけど怒ってますオーラ全開の滝壺、ジト目で見てくるインデックス、無言で攻めるような視線を送ってくる絹旗、勝手にまわりこんで人のケーキを食べるフレンドがいた。つーか、最後なんだよ……。

「遊びの誘いを受けたから冗談で言ってみただけだよ。つーか、電話してたのか？ まったく気付かなかったよ」

「何回も鳴らしたけど、まったく返事がないので超探して上まできたんですよ」

「そっか、悪かったな。で、お前らもなんか食べるか？」

「うん、少し疲れたから休もうかな。でも、とうまはこれから風紀委員に連行されるんでしょ？ じゃあ、一緒に食べれないね」

「なんでそんなに怒ってるんだよ……」

まわりこんで食べているフレンドを行儀が悪いからと、膝の上に座

らせてから尋ねると。滝壺がやけに冷たい言い方をしてきた。怒られる理由がわからないので、とりあえずフレンダに頭を下げさせてその上でコーヒーを飲む。

「フウ：で、食べるなら選んでこいよ。荷物は見といてやるから」

「じゃあ、頼むわ。あんたたちも食べるなら来なさい」

そういつて麦野が売っている場所の方へ向かうと、滝壺・絹旗・インデックスはついていった。だが、約1名だけついて行っていないが、良いのか？

「おい、お前はいなくて良いのか？」

「んー、別にこれ食べてるから、そこまで欲しいわけじゃないって訳よ。あ、でも飲み物は欲しいかも」

「つーか、それ俺のдар。食った分お前も買ってきてわけろよ」

「正直、動くのが面倒なのよ。1回座っちゃうと特に」

そう言いながらも食べ続けるフレンダ。半分くらい残ってたんだが、この子だけで食べ終わりそうだ。まあ、美味しかったけどそこまで執着があるわけじゃないから良いけどさ。でもどうせなら、自分で選んで食べたいだろうに。と、そう思ったが他の4人の視線が気になったので、そっちに話しかけることにする。

「どうした？ 食べ終わったなら、あいつらが戻ってきてから買い物に行きたいんだが」

「…それは良いけど、あんたたち前より仲良くなってるない？」

「そうか？ 黒子にも似たような事してただろ」

「中学生と高校生を一緒にしないでほしいですの」

呆れたように白井がそう言ってくるが、個人的にはフレンドくらいしか素の自分を見せれない。なので、学年に関係なく一番仲が良くなるのは当然なのだ。そういった理由もあって高校生とはいえ自分の膝の上に乗せることに躊躇いはない。なにより、フレンド自身も別に気にしてないみたいだしな。そう考えていると、フレンドが話しかけてきた。

「ところで買い物ってなにをかうつもりって訳よ？」

「ああ、ワックスだよ。人工物だと取れちゃうだろ？」

「そういうことね。まあ、落ちてもセットくらいしてあげるわよ」

「頻繁に髪型が変わってたらばれて対策とられるって。第一、いつもお前がいてくれるわけじゃないだろ？」

「そりゃあね。けど、大体は一緒にいるから安心すると良いって訳よ。ってか、本格的に引越せば？ いつも行き来するの面倒ですよ？」

フレンドはそういつてケーキを食べ終え口を拭きながら聞いてきた。確かに面倒だし、快適さで言えば店の方が上だろう。自分の私室になる総司令室なんてグレードで言えば、この街のVIP御用達ホテルのスイートルームよりも良い素材の物を置いている。広さも今の

学生寮よりも広いから言う事はない。

だが、俺がまだあの学生寮を利用しているのには理由がある。まず第一に土御門からの監視だ。俺は数回会っただけだが、彼はそうとうな場数を踏んでいるプロだろう。それを相手にするなら一般人を装い続けた方が良いのだ。そして第二に地下の存在がばれないようにするためだ。

上の余った部屋を今度からインデックスの私室にするが、それは実はフェイク。確かに彼女の私室にはするが寝るのは今後も地下になる。そうすることでインデックスが安全に寝れるし、他の人間はインデックスも上で生活して寝てると思うから地下のことはばれないだろう。なので、地下がばれないようにするには、俺も上で生活してる風に見せないといけないのだ。

「やめとくよ、土御門とかもいるしさ。今の部屋、けっこう気に入ってるんだ」

「そう？ まあ、たまに泊まりにすれば良いって訳よ。他の4人も当麻が許可するなら来ていいわよ。プールとか温泉もあるしね」

「え？ あそこ、そんな施設もあるんですか？」

俺の返事をきいたフレンドは、次に俺たちの話を聞きながらお茶を飲んでいた4人に話しかけた。すると、地下の施設を把握していなかった佐天が少し驚いた表情をする。まあ、俺も認識で知ったとき驚いたからな。

「外であそこの話をするのは感心しないな。けどまあ、あるぞ。大浴場があるのは言ったよな？ そこのお湯は天然の温泉なんだ。

んで、プールは飛び込み台とかウォータースライダーっていうのか？ ま、そんな感じの滑り台もあるぞ。ついでに言うなら波も起こせるしな」

「ふえー…上条さんたちってすごい物、持ってるんですね」

「ってか、ホントにあんた何者なのよ……」

俺が地下の施設について説明すると。初春が想像もできないのか呆けたように言い、御坂が呆れた表情で俺のことをみながら言ってきた。まあ、彼が地下を創ったのはみんなを守るためだしな。地下での生活が続いてもメンタルに負担がかからないよう、色んなアミューズメント要素も盛り込んだのだろう。あらゆることを想定していた彼の思慮の深さに驚かされてばかりだ。そんな風に1人心の中で笑っていると、スイーツを買いに行ってた4人が戻ってきた。

「お、結構遅かったな」

「インデックスが超悩んでたんですよ」

「まあ結局、私たちのも少しずつ分けてあげるってことで決まったんだけどね」

「だ、だって、甘い物はお店で暮らすまであんまり食べた事がなかったんだもん。だからあれば、しょうがないんだよ」

そういつてインデックスは必死に言い訳をする。別に誰も責めたりはしてないんだけどな。そうして、隣の席に4人は座ると食べながら麦野が話しかけてきた。

「そうだ。ついでだし、インデックスのこと紹介しておきなさいよ」

「そうだな。まあ、下でちよろつと話したがこいつはインデックス。今は店で預かってるんだが、住み込みで働くことになってるぞ。といっても、料理はまだできないから主に接客とかだけだな」

「インデックスなんだよ。とうまのお店で暮らすことになったけど、これでもイギリス清教のシスターなんだよ」

俺に言われて笑顔で御坂たち4人にあいさつをするインデックス。自分で『これでも』って言ってたけど、所属はともかく見た目からはシスター以外の何者にも見えないと思う。そんなことを考えていると、あいさつされた4人もインデックスの方を向きあいさつをかえす。

「御坂美琴。世間では超電磁砲って呼ばれてるわ」

「白井黒子ですの。風紀委員に所属してますわ」

「初春飾利です。私も風紀委員に所属してるんですよ」

「佐天涙子です。元気なのが取り柄です！」

4人がそう言ってあいさつを返すと、インデックスは笑顔で「よろしくねっ」と言った。ステイルと神裂とは離れることになったが新たに友人ができたのが嬉しいのだろう。このまま彼女もこっちで普通に暮らせるようになればいいと思う。そうしてその後は、細々とした日用品と俺のワックスを買ってから御坂たちとは別れ店に帰った。

余談だが帰る前、あと2・3日もしたらプレオープンするので是非来てくれと言ったら4人は揃って行くと言ってくれた。そして、その後はどのような休日設定をするか決めてないが、休日の日に遊びにきたり泊まったりしに来るそうだ。まあ、かといって俺は別に泊まらないが、それなりにもてなしてやろうと思う。

第六十一話 店員たちと超電磁砲組（後書き）

次話ではローラを出したいと思います。ローラさんってば、マジコ口助。

第六十二話 最大主教（前書き）

今回はローラを出しましたが、口調は頑張った結果です。なので、おかしくても目を瞑っていただけるとありがたいです。

第六十二話 最大主教

上条たちが買い物していた日、ステイルと神裂は超音速旅客機でイギリスへと戻った。2人はイギリスへと戻るとすぐに聖ジョージ大聖堂へ向かい、最大主教であるローラスアーケビショップチュアートに今回の件を報告した。

「では、その男が禁書目録の呪印を？」

「はい。上条当麻の右手には幻想殺しという、異能を打ち消す力が宿っているそうです。彼がインデックスの喉の奥に触れると、そこにあった呪印は破壊されました」

「ふーん、そう。それは悔りがたし力ね、早々に排除したる方が後のためと思わんかしら？」

報告を受けたローラはそういつて笑いながら、上条当麻の抹殺に就いての意見を2人に求めた。だが、それを聞いた2人は必死にそれに反対する。

「そ、それには賛成できません。彼は科学側の能力者です。それが魔術側に殺されたとわかれば戦争になりますっ」

「それだけではありません。あの男の近くには超能力者^{レベル5}という科学側最強の7人に名を連ねる者がいました。さらに他にも超能力者の友人がいますと聞いています。もしその者たちが敵にまわれば、イギリス全土に戦火が拡がることにつ」

神裂とステイルが冷や汗をかきながら必死に反対するのには理由が

ある。あの男に手を出せばまず無事で済まないからだ。暗殺だろうが正面から殺しに行こうが、きっと返り討ちにされるだろう。それだけで済めばいいが、もし彼の仲間を手にかけてよしたり、人質にしようものならイギリスという国は地図から姿を消すかもしれない。そんなことにさせないよう、2人はいま必死に反対しているのだ。

「そうなの。科学側もその者を守らんとしたるため、然様なる者どもを近くに控えせたるのかしら？」

「いえ、元々は偶然のようなのでどこまで重要視しているかは不明です」

スタイルの話をきき少し慎重になるローラにそう答える神裂。実際にどこまで重要視されているかは知らないが、知っていたとしても同じように答えただろう。なぜなら、状況が分かっていなければそれを知るために、こちらも調査を行わなければならないからだ。

それだけである程度の時間は稼げるし、時間が稼げれば上条当麻は絶対に対策を取るだろう。そう考えながら神裂はローラに説明した。と、そうやって話をしていたがここでお土産のことを思い出し、神裂はそれを渡して話を逸らすことにする。

「そ、そうでした。実はその上条当麻からお土産を預かっているのです」

「お土産？　して、それはいかような物なるの？」

「上条当麻は入浴剤とお風呂で遊べるオモチャと言っていました。インデックスを預かるのでお近付きの印とか」

「学生にしては気が利きたるわね。ちょっと、テレフォンを貸してはくれぬかしら？」

ローラは神裂からお土産を受け取ると、2人に向かってそう言った。2人は一体何をするつもりだと思ったが、2人がいつまでも電話を貸さないのでローラは勝手にステイルの胸ポケットからケータイを奪い操作を始めた。

「ピッポッパッと♪」

「勝手に使わないでください。それにどこにかけてるんですか？」

「少々、待たれいなよ……あ、そなたが上条当麻であるにつき？」

ステイルと神裂はなにをしているんだと思ってみると、ローラは笑顔でそう言った。どうやら、相手は上条当麻のようだがなぜイギリス清教のトップが一学生に直接電話なんかをするのだ？そう疑問に思ったが、邪魔をせずにいると音量が大きいのか向こうの声も聞こえてくる。

『そうだけど、誰ですか？ 番号はステイルのケータイだけど』

「しばしの間、借りうけたるのよ。わたしはイギリス清教・最大主教ローラ・スチュアートと申す者にして。この度は土産の礼をばと思いついてテレフォンをかけたまです」

『ああ、最大主教って言うからジーサンとかを想像してたよ。声を聞く感じじゃ結構若いんだな。電話で自己紹介ってのもなんだが、

上条当麻だ。悪いな、お前がつけさせたインデックスの首輪を壊しちゃって』

「……気にすることなかれなのよ。けれど、わたしを老人と思っていたといふのは、嘘よね？ この土産は誰に見せたりても、若きおなご向けなもの」

そういつてフフッと笑うローラ。言葉や表情は笑っているが、その場にいる2人はどうしても彼女が笑っているようには見えなかった。また、上条当麻も同じように楽しそうな口調で話しているが、その言葉はあきらかに敵意を放っている。正直に言えば2人はこの歪な会話する者のいる空間から離れたいと思っていた。

『ハハッ、ばれたか。まあお前のことは、写真を見て知ってたからな』

「ならば、最初からそう言いたれば良しにつき。かような、言い方をすれば裏になにかあると勘繰られるものよ」

『ただの学生になにができるんだよ。俺に出来ることと言えば、異能を消すことぐらいだぜ？』

「そうね。『幻想殺し』、いと珍しきものだわ。学園都市では多用な能力があると聞きたるけど、そのように魔術まで消しえる力があるのならば——ただ見ておく事もできぬのだけど？」

『脅迫か？ それともデートの誘い？ どっちでもいいけど、それなら会って話そうぜ。招待してくれれば2人っきりで話しかけるからさ』

「フフッ、わたしの言葉を聞きてそのような軽口を叩ける者のどこが普通の学生か」

ローラがそういうと先ほどまでの緊張した空気は解けていった。別に本人たちも電話越しに腹の探り合いなどするつもりはないのだろう。だが、さっきまでの空気は目の前に相手がいれば、急に殺し合いが始まってもおかしくない程だった。最大主教であるローラがそういう空気を出せるのはまだ分かるが、世間的にはただの学生である上条当麻も平然と渡り合うのをみて2人は改めて彼が普通ではないと思った。

「まあ、此度のテレフォンは礼を述べるためにつき」

『わかってるって。そうだ、紙袋の下の方探ってみろよ』

「下の方？」

言われてローラはお土産の袋を床に置き、しゃがんでガサゴソと中を探る。一体何があるのだろうと思っていると、ローラは次々とアヒルやラッコのおモチャを出していく。本人は探し物に集中して気付いていないようだが、どうやらあの小さい紙袋に何十体ものおモチャを入れるのだろう。あれも学園都市製の不思議な道具なのだろうか？そう神裂が思っていると、ローラは1つの小さな包みを取り出した。大きさ的にはよくある指輪入れくらいの大きさだ。それを見つけると、ローラは話を再開した。

「この赤き包みのことかしら？」

『そうそう。開けてみるよ』

「では、しばし待たれいなよ……っ!？」

上条に言われローラは赤い包みを開け始めると、そこには本当に指輸入れのようなものが入っていた。それをみて何も変なところがな
いか確かめたローラは恐る恐るあけると、中には1つの指輪とロー
ラ自身をモデルにしたと思われるストラップが入っていた。

「も、もしかこれはわたし？」

『おう、お前の顔とか見た目は知ってたからな。密かにお土産用
に作っておいたんだよ。んで、指輪も優れ物だぞ。なんと着け
て撫でるとホログラフィの画面が出せるんだ』

「そ、それはまことなの？ おおっ、してこれはどこの映像か？
ん？ 上条当麻？」

『よっ、すごいだろ？ この指輪を持つてる者どうしなら、これ
でテレビ電話みたいになるんだぜ？ お互いの画面がそっちを見る
窓みたいになってるんだよ。だから、カメラとかいらないし、電気
代・通話代もいらないんだ。俺がデザインを頼まれて作ったんだが、
製品化しなかったから世界にこの2つしかないんだ』

そういつてハハッと笑う上条。一体どんな技術でそんな風になって
いるのかは分からないが、確かにすごい。あまりのことにローラも
少し呆けているくらいだ。だが、いつまでもそのままではいられな
いと、スタイルのケータイを切って今度は指輪の方で会話を始める。

「コ、コホン…では改めて、ローラスチュアートなのよ。此度
の土産は、げに驚きぬ」

『ハハッ、まあサプライズが成功したなら良かったよ。んで、気に入ってくれたか?』

「ええ、この人形はまこと可愛く思はるし。それにこの指輪も聖職者が着けるには少々あたらし気もすれど、とても今めかしていい好きよ」

『そうか、なら良かったよ。あ、でもそれ着けるときは着ける指に気をつけろよ?』

上条に聞かれ上機嫌になりながらお土産の感想を言うローラ。だが、それを聞いた上条は少し真剣っぽい表情でそう言ってきた。神裂とステイルはなにやら嫌な予感がしたが、ローラは「ふふふ、もしや結婚指輪と勘違いされぬかと気にしたるのかしら?」と思い。ここは年上の余裕でからかってやろうと考えた。まあ、その理由も着けたのが偶然にも左手薬指だったためなのだが、サイズも丁度だし本人は気にせず話しかける。

「フフフツ、もしやわたしにプロポーズしたと思われんかと、気にしたるの?」

『え? ああ、違う違う。これ本来はカップル用で着けたら外れなくなるんだよ。まあ、俺のはロック解除してるから大丈夫だけど、そっちは解除してないんだ。だから、間違って左手薬指に着けたりしたら、聖職者だしイギリス清教のトップだしで問題になるんじゃないかなって』

「なっー!?!? いかでかさることを先に言わぬのよっ!」

『もはや何言ってるのか分かんねえよ…。てか、もしかして着け

ちまったのか？ ……まあ、会ったときに解除してやるよ。それま
「とうまー、ご飯できたってさ」わかったすぐ行くー。つーことで、
こっちは晩御飯だからまた今度話そうぜ。お互い着けてるときに擦
れば宝石が光って着信が分かるからさ。そんなときは擦れば通話でき
るし、簡単だろ？ んじゃ、会うまでは解除できないし大変だと思
うが頑張れよ。またな』

そういつて上条は通話を切ってローラの画面は真っ暗になる。切る
直前にローラも焦りながら「ま、待ていっ！！」と言ったのだが、
その願いは叶わず今は「切れた…うう…」と落ち込んでいる。た
まに本当に抜けないか試しているようだが、ビクともしないらしく。
床に膝をつき絵文字の『OTL』状態になっていた。

第六十二話 最大主教（後書き）

次話もこの続きになりますが、自分の書いたローラはどうでしょうか？コロ助にならないよう注意したんですが、それっぽく書けているか少し心配です。てか、語尾に『ナリ』とは一度も使っていない気もするんですがね。

第六十三話 ローラ（前書き）

ローラはギャグ要員ですよね。

第六十三話 ローラ

ローラの哀しそうな後ろ姿を見ていた神裂とステイル。たぶん、上条はわざとやっただろうなと思ったが、あえて2人ともそれを伝えようとしないう。伝えたらきつと单身であるの店に乗り込む気がするからだ。どっちが勝つかは分からないが、この指輪の件が外に漏れて『イギリス清教・最大主教が学園都市の学生と婚約。さらに大規模な夫婦喧嘩まで』と言われれば、イギリス清教どころかイギリス自体にまで風評被害が出るだろう。

まあ、そんなことにさせないよう2人は黙ってその姿を見ていた。だが、紙袋から出していたお土産のオモチャで遊び始めると、さすがに声をかけないとマズイと思いステイルは話しかける。

「……あの、なにをしているのですか？」

「ん？　せっかく貰ひき夫からのお土産だもの。遊ばねば失礼と
思いてね、フフッ……」

「アヒルにシャチを追わせるのはやめてください。流石にシュールです」

「何言ひたるの神裂。此はわたしと上条当麻なのよ」

そういつて哀しそうに笑いながら、アヒルでシャチの人形を追いかけるローラ。見ている者にはどっちがローラでどっちが上条かわからないが、多分聞かない方が良さだろう。だが、このまま遊ばせておくのはマズイので再び話しかけようとする、急にローラが顔を輝かせ立ちあがった。見ると、指輪から画面が出ている。

「さすが我が夫、信じたりき！」

『何言ってんだ？ まあ、それはいいけど言い忘れたことがあったんだ。お土産の入ってる紙袋に封筒が入ってるだろ？』

「んん？ んー、あひき、あひき。此の事ね？」

『それぞれ、中に手紙が入ってるからちゃんと読んでくれ。もし受け入れられないなら、国際裁判所に連絡して通達送るからな。んじゃ、今度こそまたな』

「あっー！！ 待てと言うとろうに！！」

ローラは再び連絡がついたチャンスを逃すまいと必死に切るなどいうが、上条は軽くスルーして連絡を切ってしまった。今回は期待していただけに先ほどよりもダメージは大きそうだ。だが、一応言われたことは素直に聞くのか、封筒から手紙を出すと読み始めた。神裂とステイルからでは手紙の文面が見えないので何語で書かれているのかわからないが、英語でも日本語でもローラは読めるから大丈夫だろう。そう思って見守っていると、ローラが肩を震わせ始めた。

「な、な、な…」

「どうしたんですか最大主教。ついに言葉使いだけでなく、頭までおかしくなりましたか？」

「ステイル、神裂。これはどういふ事かしら！」

「?？」 少し見せてもらっていいですか？」

急に怒った口調で言われなんのことか分からない2人。なので、ローラから手紙を受け取りその内容に目を通して行く。するとそれは、2人が捕虜として生活していた間の食事代・洗濯代・水道代などの請求書になっていた。どうやらパーティーと今日の食事などは含まれていないようだが、結構な額といえる。さらにそれだけでなく、口座番号が書いてあり。そこにインデックスの給料と生活費を毎月振り込めというのだ。一応今回の件以降、インデックスは学園都市に十字教の教えを伝えるため滞在することになっているから間違いないのだが……。

「ここに書きたることは本当かしら？」

「まあ、本当ですね。インデックスを保護しに行ったら逆に捕まりましたから」

「神裂も相違ないかしら？」

「はい。そういえば上条当麻は、私たちを捕虜と言ってましたね。最初からこうやって請求するつもりだったのでしょうか。しっかりとしていますね」

言われた2人はそういつて書いてある事が本当だと確認する。まあ、捕虜ではなく学園都市側に捕まっていた方が面倒なことになっていと思うので、民間人の捕虜になっていたという方が手続きもなくて良かったと思う。だが、それに対し高額な料金を請求されるとなると話は別だ。必要悪の教会は一応国家宗教の関係組織にあたる。なので、今回のこの必要悪の教会宛ての請求書は個人ではなく必要悪の教会かイギリスとして払う必要があるのだ。

「いったい、如何なる食事をしたらばこれほどの額になるのよ！」

「まあ、キッチンと3食プラス食後のお茶。そして、オヤツ時と夜にはお茶に加えてデザートも出てましたから。ただの喫茶店と思いきや料理はプロ級でして。インデックスもあそこの人間に教わって、とても美味しいお茶を淹れられるようになりましたよ」

「そんな事を聞きたる訳じゃなしっ、このお金は誰が払ふと思ひてか！」

「誰って最大主教でしょ？ 必要悪の教会の下に小さく『親愛なる最大主教様へ』って書いてますし」

「ふえ？」

ステイルがそう言って手紙の下の方を指差すと、確かにそう書かれていた。しかし、それを言われたローラは信じられないという顔をしている。プルプルと震えながら手紙を受け取りもう一度目を通すがその文字は紛れもなく現実だった。大量のお土産、本人をモデルにした可愛いストラップ、いまだきの若い者向けだが公の場で着けても問題ないであろう上品なデザインの指輪。そう、それだけだったらローラは上条の事をとっても好意的に思っただろう。

しかし、指輪には外れなくなるというトラップ、部下が捕虜になっていた間の請求書、インデックスの生活費と給料、それらは全て想定外だった。特に請求書が自分宛てであることと、インデックスの生活費と給料だ。後者は「どうせ払わなくても面倒見てくれるよね？」という軽い気持ちだった。まあ、出すにしても税金からなので手続きの面倒だけで済む。しかし、なぜ組織の人間の不始末で自分の懐を痛めねばならないのだ。

文句を言おうと指輪を擦り画面を出すが一向に相手が出てくれない。だんだん、怒りと悔しさで泣きそうになると、急に画面に映像が映りそこには箸を咥えてジト目でこちらを見ている上条当麻の姿があった。先ほどまでかなりの怒りを持っていたローラだが、泣きそうになっているときに相手の顔が見えたのでペアッと笑顔になる。

「ま、待ちて『しつこいぞ?』え?」

『晩御飯だって言ってるだろ。なにか話したい事があるなら後にしろよ』

「で、でも、わたしは貴方の妻なりけるのよ?」

『なんの「とうま、妻ってなんの話し?」いや分からないけど。

「ってか、超誰と話してるんですか?」ん? インデックスの上司だよ。面白い日本語使うんだ』

「お、面白い? え、わたしの日本語ジャパニーズっておかしいの?」

『お、今のは普通だったぞ。まあ、どっちでもいいんじゃないかねえか? 面白いし似合ってるよ』

上条はそう言いながら食事に手を伸ばす。どうやら今日の晩御飯は餃子のようだ。手を動かすと画面も動くので見ていると酔いそうになるが、画面の端に白い修道服を着た女の子が映った。それに気付いてステイルと神裂はローラの横に立ち向こう側に話しかける。

「食事中にすみません。インデックス、連絡が遅くなりましたが

「私たちも無事帰国できましたよ」

『へ？ あっ、かおりー、ステイルー。無事に帰れて良かったんだよ』

「手紙に書いていた君の生活費と給料は、ちゃんと払われるようにしておくからね。安心してくれ」

『お給料？ なんの話かな？ 「俺が口座を用意してそこに払うように言っておいたんだよ」 そうなの？ じゃあ、お店のバイト代だけで暮らさなくていいんだねっ。ありがとうね、じゃあご飯中だからまた連絡するから。バイバイっ』

インデックスはそういつて手を振ると、ステイルと神裂も手を振り返し連絡を切った。そうして、インデックスに帰国したことを伝えられた2人は満足して帰ることにする。だが歩きはじめると、突然膨れ上がる魔力を感知した。そしてそちらへ向くと、そこには髪を発光させてプルプルと震えているローラがいる。いったいどんな魔術を使う気はわからないが、2人は急いで止めることにした。

「やめてください、最大主教！ ここを吹き飛ばす気ですかっ！」

「ええい五月蠅いつ、わたしのせいにてはなし！ 悪しきは、勝手なことばかりしたるお前らでしょう！」

「こ、ここでそんなことしたらお土産も吹き飛びますよ！（これで止まれば奇跡だっ）」

「っ！？ ……ふん。今日のところはここまでにしとかうかしら」

「「えっ？」」

そういつてローラは魔力を引っ込めると髪の毛の発光がおさまった。あまりに急なことでステイルと神裂はポカンとするが、魔力をおさめたローラが次になにをするのだろうか、2人は注意して見ておく。するとローラは、いそいそとオモチャを紙袋に入れ始めた。いったい、どうするつもりだと思っていると、オモチャを仕舞い終えたローラは紙袋を持って立ち上がった。そして部屋を出て行こうとするローラにステイルが話しかける。

「あの一、どこへ行くんですか？」

「そんなの、湯あみに決まりておるのよ。さっそく、この入浴剤といふのを使うてみるわ」

「はあ…けど、インデックスの給料と生活費、それから捕虜生活中の費用請求はどうされるおつもりで？」

「知らぬ。自分たちの食べた物の代金など、自分たちで払ふべきなのよ。振り込みも含め己らでしたれば良きに。禁書目録の方も手続きは任せるわ。したらば、わたしは夫のお土産を堪能してくるにつき〜♪」

ローラはそういうと楽しそうに部屋を出ていった。残された2人はその様子に呆けていたが、一応最大主教の許可は下りたので後でインデックスの給料と生活費の手続きを申請することにした。そして、捕虜生活中の費用の請求も別に払えるだけの給料はもらっているの、で、払う事自体は受け入れるつもりだ。だが、あの馬鹿な言葉使いをする最大主教は途中から上条当麻をなんと呼んでいた？そう思いステイルは神裂に尋ねる。

「なあ、最大主教はあの男を今後も夫と呼ぶつもりなのか？」

「……わかりません。しかし、指輪がとれるまではそうかと」

「普通に袖から手が見えているのに、あんなテンションで教会内を歩いたらすぐに噂が広まるぞ」

「きつと、気付いていないのでしょうかね。まあ、本人と上条当麻の問題ですし。私たちはインデックスの方の手続きを済ませに行きましょう」

神裂はそういうとステイルと共に、部屋を出て手続きに向かった。余談だが、その3日後には最大主教が左手薬指に指輪をはめているという情報が広まり。それは、英国女王の耳にも届いた。そしてそれについて電話で女王に聞かれた際、「ええい、五月蠅し！ これには深き訳があるにつき、黙っておれ。送り主を調べたるなどすれば、絶対に許さぬからな！」と怒ったという。まあ、勿論すぐに送り主を調べ、それが科学の街の学生と分かった女王は爆笑したとか……。

第六十三話 ローラ（後書き）

そろそろ残弾数が少なくなってきました。まだ、ペルソナの方も全然書けていないので、書き溜めがなくなりしだい更新ストップが確定しそうです。

第六十四話 プレオープン その1（前書き）

この作品内では具体的な日付は決めてません。インデックスと上条さんが出会ったのを夏休み初日にしてますが、原作通りの書き方をしただけで原作と同日に出会ったとかって設定は特にないので気にしないでください。

第六十四話 プレオープン その1

神裂とステイルが帰ったあの日から3日が経った。あの日からインデックスにもレジ操作や、注文を取った後のオーダーの伝達方法を教えた。そして、いつも歩く教会では唯一の制服といえる店の名前の入ったエプロンが着けられないので。インデックス監修の元、上質な木材を買ってきて十字架を彫った。細かい部分のデザインは任されていたので、天使の羽根などをイメージした細工も施し、それにテレズマを込めて十字架ネックス版の歩く教会を作ったというわけだ。

性能実験では、その十字架に向けて麦野がレーザーを放つと十字架には傷1つついておらず、次に俺が装備した状態で攻撃を受けても大丈夫だったことから、無事に完成したとインデックスは喜んだ。その十字架の効果は直接肌に身につけておけば、全身に対し結果を張り自分の身と身に着けている物を守るというものだ。なので、この装備者が誰かと手を繋いでおけば、手を繋いでいる間だけその効果を相手にも付加できるという歩く教会の上位互換的なものとなっている。しかし、完全に歩く教会の防御力を再現できたわけではなく、多少性能は落ちているのでそこは注意だ。

「当麻さん、そろそろ看板出しますよ？」

「了解。けど、出す前に厨房のやつらと呼んできてくれ」

「わかりました」

そうして絹旗が言った通り今から看板を出して、今日はプレオープンするのだ。実際のオープンとは明々後日にしてあり、今日は声をか

けた知り合いとその友人だけ来店できることになっている。まあ、招待しておいて何もサービスしないのはあれなので、今日は食後のドリンクとデザート1品が無料となっている。

現在の時刻は11時前。平常時は10時開店だが今日は11時開店だ。みんなにもそう伝えたので、きつとお昼頃に来てくれるだろう。そうやって時計を見ていると、みんなが店の方に集まったので声をかける。

「んじゃ、今日は知り合いだけだしそこまで緊張しないと思うが、接客はきっちりな。1日頑張ろう!」

「了解」

「OKってわけよ」

「がんばろうね」

「ミスだけはしません」

「任せてなんだよ!」

メンバーたちはそう言ってそれぞれ返事をして、持ち場についた。麦野と滝壺は調理メイン。フレンダと絹旗は料理を運んだり調理サポート。インデックスは注文を受けるのと料理運びと食器をさげることが仕事だ。そして俺は調理以外の運搬・食器洗い・オーダー受け・レジなど雑務を担当する。そうして皆が持ち場につくのを確認して、看板を『OPEN』にかえて来店を待つ。すると、髪型をポニーにして薄水色のワンピースの上にエプロンを着けているインデックスが話しかけてきた。その首には紐が見えているため、キッチン

と肌に触れるように十字架を着けているようだ。

「今日くるのは、とうまの知り合いばかりなんだよね？」

「まあ、俺以外に知り合いがいるやつがないからな。まあ、知り合いの知り合いもOKだから初対面の人もいるよ」

「ふーん。できればかおりとステイルにも来て欲しかったなあ」

「そうだな。そん代わり、あいつらが次に来るまでにお前も料理作れるようになって、最後に自分が作ったって言って驚かしてやろうぜ」

「それいいかもつ、じゃあ今度から料理の作り方教えてね！」

インデックスはそういつて楽しそうにしている。俺も笑顔でそれを了承すると、記念すべきお客第一号が入ってきた。ドアを開ける音と入店を知らせるベルの《カランカラン》という音が聞え、お客さんがカウンターの方まで歩いてきた。

「よう、カミヤン来てやったぜい」

「今日は兄貴と一緒に弟子の成長を見にきたんだぞー」

そういつて現れたのは土御門兄妹だった。舞夏は俺たちに料理の作り方や接客方法を教えてくれた師匠らしく、その師匠が最初の客とというのはとてもやりがいがある。なので、弟子の成長をみせるため一生懸命もてなそうと思う。

「いらっしやいませ。カウンターとテーブルはどっちがいい？」

正式なお客様第一号だから、座り放題だぞ」

「んじゃ、ゆったり座れるテーブル席を希望するにゃー」

「煙草は吸わないから禁煙席で頼むー」

「ははっ、最初から店内は全席禁煙だって。んじゃ、インデックス案内頼む」

「了解、こちらにどうぞなんだよー」

そういつてインデックスは2人をテーブル席へと案内する。俺はその間に水と手拭きを用意し、厨房の方に客がきたことを知らせる。

「客が来たぞ、第一号は土御門兄妹だ。弟子の成長を見に来たらしいから、お前らも頑張ってくれ」

「ふふっ、舞夏さんも面倒見がいいですね。超了解です」

「2人はなにを頼んでくるかな？」

「結局、土御門は定食系で舞夏は洋食だと思うってわけよ」

「じゃあ、私も滝壺も仕事ができるわね。それじゃあ、インデックスからオーダーが入ったらすぐに作り始めましょ」

そんな風に、メンバーらは笑って話をしながらオーダー来るのを待つ。俺はその間にお盆に載せた水と手拭きを持って厨房を出ると、インデックスとすれ違った。なにやら、やけに笑顔だが働くのが楽しいのだろうか？そう思いながらテーブルに向かい2人の前に水と

手拭きを置いた。

「水と手拭きになります。水のおかわりはこちらでいれますので、気軽に注文ください」

「ハハッ、普段と違って仕事モードだにゃーカミやん。ところで、なんで1人だけボーイの格好なんだ？ しかも、髪も降ろしてるし」

「ああ、誰か1人だけコスプレするかって話しになってな。ジャンケンで俺が負けたんだ。んで、変な格好してもあれだし、とりあえずボーイの服着て髪もそれっぽくしたんだが。みんな顔を逸らしてたし不評みたいだな」

「へえー。まあ、俺は似合ってると思うぜい（たぶん、普段とのギャップで魅力5倍増しに見えたんだろうにゃー）」

「わたしも似合ってると思うぞー（これは執事にしても化けそうだなー）」

「ははっ、お世辞でも嬉しいよ。んじゃ、料理がくるまでゆっくりしててくれ」

俺がそういうと2人は「おう、くつろがせてもらうにゃー」「これ、試してくれー」と言ってきた。あとのセリフは舞夏のものだが、離れる前に紙を渡されたので席を離れてからその紙を見てみる。

「えっと、『女性客の来店時に「お帰りのさいませ、お嬢様」と爽やかな笑顔で言え』……なんのこっちゃ？ まあ、あとでやってみるか」

そんな風に渡された紙を見終わるとズボンのポケットにそれをしまい、カウンターのレジ前に立っておく。この場所は厨房へ続く廊下への入口に近いし。来店して、店内まで入ってくるとその前を通ることになる。そして、店内の様子も見えるので、待機場所には丁度いいのだ。そう考えていると、インデックスと絹旗が料理を持って現れた。

「料理運んできますー」

「行ってくるんだよー」

「いいけど、気が抜けるから語尾を伸ばすな」

笑いながら後ろを通っていく2人にさういうと、2人は「超了解でーす」「わかったかもー」と言って運んでいった。たぶん、2人ともわかっていないだろう。まあ、ちゃんと仕事するならいいけどな。そう思っていると、入り口のベルが鳴り新たな客が来店した。

「上条ちゃん、お友達の先生と一緒にきたですよー」

「へえ、綺麗な店じゃん」

「ここ、本当に学生がやってる店なんですか？」

そんな風に話しながら来店したのは、俺のクラス担任らしい月詠つぐよみ小萌先生と友人の方2人だ。語尾が「じゃん」の人は同じ学校の先生で名前は黄泉川よみかわ愛穂あいほ。もう1人は名前は知らないが、幻想御手事件で上条当麻が守った中にいた人だな。そういつて確認すると、こっちにきたのでカウンターから出て案内をする。

「おかえりなさいませ、お嬢様方」キラッ☆

「はうっ!？ か、上条ちゃんですか？ その格好、一体どうしちゃったんです？ それにお嬢様って先生たちをからかってるんですか？」

「いえ、師匠からやってみろと言われたんで。試しにやってみたんです」

「むう、これが小萌先生のとこの悪ガキじゃん？ まったく別人にしか見えないじゃんよ」

「ははっ、まあこの格好は今日だけですんで」

言いながら笑いかけると、小萌先生は「ほえ〜」と言って目をパチパチさせながら俺のことを見てきて。黄泉川先生も学校での上条当麻との違いに驚いているようだ。もう1人の女性も上条当麻の姿を知っているためか、首をかしげて「なんか見た事あるような…」と言っている。まあ、ここで待たせてもあれなので、とりあえず席に案内しよう。

「カウンターとテーブル席。どちらか希望はございますか？」

「では、テーブル席でお願いしますー」

「かしこまりました、ではご案内します。あ、そうそう。いま一度、土御門兄妹も来てるんですよ」

言いながらテーブル席の方へ行くと、土御門たちも先生に気付いたのか兄の方が先生たちに手を振った。

「先生、終業式ぶりですよー」

「はい、土御門ちゃんも元気そうでなによりです」

「是非、隣の席にどうぞ。カミヤんも別にいいよな？」

「ああ。では、席にかけてお待ちください。すぐに水をお持ちしますので」

土御門に言われ先生たちを隣のテーブルに案内すると、メニューを渡してから水を用意するため厨房に戻る。呼ぶ場合は席に置いてある呼び出しボタンを押せばいいので、俺が気付かなくても厨房の誰かが行ってくれるようになっていたので安心だ。そう考えながら厨房に行ってメンバーらに声をかける。

「次の客きたぞー。第二号は俺の担任と友達の先生方だ」

「っ!?!? ちょっと、担任の先生にあいさつしてくるね」

「待てっ、その必要はないぞ理后。大人しくしておこうな」

「では、オーダーを超聞いてきますねー」

「お前も行く必要はないぞ。インデックスの仕事だからな」

なぜか急に先生のもとへ行こうとし始めた滝壺と絹旗。だが、なにか邪な考えを持っていそうなので、それを阻止してインデックスに水と手拭きを載せたお盆を渡す。阻止された2人はなにやら不満げだが、インデックスはその様子に苦笑し、麦野は呆れているようだ。

だがまあ、そのままでは仕事にならないので、インデックスをさっさと店の方へ行かせると、俺も厨房から出てレジのところ待機しておく。そうすると、また新たな客が現れた。今度の客は1人のような。

「よっすー、カミやん。お昼食ベにきたでー」

「いらっしやいませ。よく来てくれたな、青ピ。テーブル席の方に先生と土御門たちがいるぞ」

「そうなん？ んじゃ、そっちの席に行かせてもらうわあ」

「了解。んじゃ、すぐに水と手拭き持っていくから席は自由に座ってくれ」

「はいはい」

青ピを席の方へ行かせるとすぐに、水と手拭きの準備にかかる。他のメンバーはインデックスがきてきたオーダーの料理を作ってるようだ。なので、青ピがきたことだけを伝えるところにお盆に青ピの分の水と手拭き。そして、舞夏が注文したという紅茶を載せて持っていく。

「水と手拭きになります。っと、お待たせしました。ホットのダージリンになります」

「ほお、カミやんじゃないみたいやなあ」

「だにゃー。頑張ればホストにもなれそうですたい」

「ならねーよ。そういや、お前ら今日はヒマなのか？」

俺が苦笑しながら2人に言い返してから今日の予定を尋ねると、青ピが立ちあがり口を開いた。

「はっはー、今日はカミやんのお店の子たちに接客してもらうため、1日フリーにしてきたんやでえ」

「いや、接客は基本的に俺とインデックスだぞ。まあ、フレンダと最愛は接客もするが、麦野と理后は調理メインだ」

「あ、そうや。そのインデックスちゃん？　って、あの銀髪の子やんなあ。あの子どこの子なん？」

「ああ、ベランダで拾ったんだよ。本業はシスターさんだぞ、ちょっと待ってろ」

そう説明してから青ピの席の呼び出しボタンを押すと、「はーい」と返事をしてインデックスが厨房の方から出てきた。歩く教会を着ていたときはテトテトという感じの走り方だったが、今日はこの前買ってきたワンピースにスニーカーを履いているから足音も普通っぽく聞える。

「あれ？　とうまが呼んだの？」

「ああ、友達に紹介しておこうと思ってな。自己紹介しておけ」

「うん、インデックスっていうんだよ。ここで住み込みで働くことになったけど、本当はイギリス清教のシスターなんだ」

インデックスはそういつて笑顔でみんなにあいさつをする。先生たちは「シスターちゃんですねー」や「拾うってどっから拾ってくるじゃん…」などと言っている。そして、クラスメイトとその妹もインデックスに自己紹介をする。

「俺は土御門元春。カミやんのクラスメイトで寮のお隣さんだぜい（まさか、本当に接触していたとはな。禁書目録の呪印を破壊したと聞いたが、これで幻想殺しも魔術側と関わりを持ったか……）」

「私はその妹の舞夏だぞー。これはコスプレじゃなく、本物のメイドなのだー」

「僕は青髪ピアス、青ピって呼んでなあ。ところでインデックスちゃんも、カミやんに助けられたクチ？」

「そうだよ、死にそうになってるのを助けてくれたんだ。それにその原因を作ったっていう人にこっそり嫌がらせもしたんだって」

言いながら最後だけ少し不思議そうにするインデックス。まあ、インデックスが言っていたのはローラにロック解除してない指輪を渡したことだ。本当は解除することもできたけどあえて解除しないでおいたんだが、ここ2・3日のあいだ頻繁に着信があるんだよな。まあ、今日はポケットに入れてるからでないけど。そう考えていると、土御門が口を開く。

「にゃー、よくわからんが大変だったんだにゃー（上司に嫌がらせ？　もしや、最大主教の指輪のことか？　くくくつ、送り主がカミヤンだったとは、これは早速リークしておくにゃー♪）」

「まあ、大変な思いしたのはとうまたちだから、私はなにもして

ないんだよ」

「ふーん。まあ、なんにせよ無事で済んで良かったなあ。あ、ところどころ注文ええかな？」

「あ、はいはい。ご注文をどうぞなんだよ」

そうやってインデックスのあいさつも済み、青ピの注文を取り始めたので俺も軽くあいさつをしてレジの方へ戻った。そうして、その後は先生たちが食べ終わって帰ったり、他のクラスメイトたちが食事をしてきて帰ったりと夕方ごろまでバタバタとしていた。

第六十四話 プレオープン その1 (後書き)

よく考えたら小萌先生が初登場だったような……。舞夏と黄泉川先生たちはインドラの矢の目撃者として出していたっていうのに……。

第六十五話 プレオープン その2 (前書き)

他の人の恋愛事に関してはある程度理解できる。それが上条さんです。

第六十五話 プレオープン その2

呼んだお客もほとんどが来て、一段落したので現在俺たちは休憩がてら軽く食事している。本当は厨房を空にするのはよくないが、いまは1日フリーの青ピと土御門と話しているだけだから良いのだ。ちなみに、舞夏は仕事があるらしく3時すぎには帰っている。そのときに追加で「御坂たちが来たら席に案内するまで、執事っぽくしてみろー。面白いものが見れるぞー」と言ってたがな。

そうして、話をしているとドアの開く音とベルの音が聞えたので、席を立ち出迎える。客は女子数人のようだが、なにやら騒がしいな。

「結局、同じタイミングで来ちゃったじゃない」

「まあまあ、食蜂さんも別になにもしてないのですし。お姉様もそこまで気になさらずとも」

「っていうか、私は別に当麻先輩に会いにきただけなのよ。だから、心配しないでも一緒に座ったりはしないわあ。あ、でも当麻先輩は独占させてもらうからねえ♪」

そんな風に騒がしく入ってきたのは、この前会った超電磁砲組と確か食蜂とかいう子だ。前に絹旗が泣き真似したときに記憶で検索したから覚えてるぞ。呼び方はたしか操祈だったな。そうやって確認を済ませると、御坂たちの方へ行き笑顔で出迎える。

「あ、やつほー。約束通りみんなでき…た…」

「当麻先輩、お久しぶりで……す？」

「お帰りなさいませ、お嬢様方」キラッ☆

「「「「ブッフウー!!」「」「」」」」

俺の姿を発見しあいさつをしてきた御坂と食蜂だったが、なぜか俺のことを近くでみると固まった。だが、それを気にせず。師匠である舞夏に言われたことをやってみたら、なぜか5人に吹き出された。てか、5人中3人はお嬢様学校なのに人前で吹き出しているのか? そう思いながらも、仕事なので接客を続ける。

「お席はカウンターとテーブル席どちらになさいますか?」

「え、あの…テーブル席で」

「かしこまりました。では、ご案内させていただきます」

御坂が小さい声で答えたので、そういつて5人をテーブル席の方へ案内する。だが、案内をしていると、後ろの方で女の子たちがなにかボソボソと話をしているようだ。

「ね、ねえ。あれアイツよね?」

「間違いなく、上条さんだと思いますけど」

「キャラというか、雰囲気変わり過ぎじゃないですか?」

「セブンスミストで会ってからなにがありましたの……」

「でも私的には、かなりありだと思っただけだお」

「「「それには同意」」」

小さくだが聞えてきた話の内容の意味は分からないが、とりあえず5人をテーブル席に案内する。場所は最初に小萌先生たちが座っていた土御門の席の隣だ。用意されている状態だと4人しか座れないので、隣のテーブルと椅子を1つ移動させくつつける。

「さあ、どうぞ。席はこちらになります」

「あ、ありがとう」

「どうもですの…」

「失礼します…」

そう言って御坂と白井と初春がソファの方へ入っていったので。椅子側に座る残りの2人である佐天と食蜂の方へ行き。椅子を引いてやることにする。

「失礼します、どうぞ涙子お嬢様」

「えっ、あの……ありがとうございます」

「さあ、操祈お嬢様もどうぞ？」

「ふえ…ありがとうございますう」

「「「椅子にすれば良かったー!!」」」

「いえ。では、お水をお持ちしますので。メニューをご覧になってお待ちください」

言いながらそれぞれにメニューを配ると、笑顔を向けてから席を離れて水をとり厨房へ向かう。だが、それは従業員とクラスメイト2人によって阻まれた。

「ようカミやん。ちいとばかり、面かせや」

「奇遇やなつつちー。僕もちよつと、カミやんと話す事ができたわ」

「フレンダ、スタンガン貸してくれない？」

「少し窒素増量しましょうかね」

「新技のアームの練習でもしようかしら。あ、インデックスは水とかを客に運んでおいて」

麦野がそういうと言われたインデックスは、いそいそと立ち上がり厨房の方へと駆け足で去っていった。そして先に発言した者は席を立ち俺に近付いてくる。唯一座ったままなのはフレンダだが、そのフレンダもなぜか俺をジト目で見てくる。こいつらどうしたんだろう？ そう思い立ちあがった理由を尋ねる。

「急に立ち上がってどうしたんだよ？ 食事中に立つのは感心しないぞ？」

「男にはどうしても戦わなアカンときがあんねん」

「大丈夫、女にも戦わないといけないときはあるから」

「戦いはいいが、客が来てるんだから暴れるなよ？　んで、お前らは仕事入るから準備しろ」

俺に言われると渋々ながらテーブルを片付けて厨房に戻るメンバーたち。だが、クラスメイト2人はまだ何かあるようだ。

「まだなにかあるのか？」

「本気でわかってないのか？」

「カミヤん、自分がどんな行動したか思い返してみい」

どんな行動？青ピに言われて直前の自分の行動を思い返してみる。御坂たちがきたので笑顔で出迎えて、ちゃんとテーブルまで案内しただろ？　んで、気を利かせて椅子も引いたし、メニューも1人1人に手渡した。なにか問題あったか？

「なんかミスしたか？」

「いや、素人目に見た感じだがミスはない。しかし、カミヤん。さっきのあの対応はなんだ？」

「あの対応？　ああ、舞夏に渡された紙に書いてたんだよ。『女性客の来店時に「お帰りなさいませ、お嬢様」と爽やかな笑顔で言え』ってな。んで、帰る前にも御坂たちが来たら執事っぽくしてみろって言われたんだ。面白いものが見れるって」

さきほどの御坂たちに対する対応の説明をすると、途端に「むむむ

…」と言い始める土御門。それに対して青ピは「あー、舞夏ちゃんの差し金かぁ」となにか納得している。まあ、こいつらにも不評ならいくら師匠である舞夏に言われたからって、続ける気はないけどな。そう思いながら、水はインデックスが持ってくるらしいので、普通に御坂たちにあいさつをしに戻る。

「よう。水はインデックスが持ってくるから、注文決めて待っててくれな」

「そ、それはいいけど。その格好とさっきのはなんなのよ？」

「これはコスプレジャンケンで負けたんだよ。んで、さっきのは舞夏にお前らがきたらやってみろって言われてな。まあ、今日しか着ないから我慢してくれ」

そういうと御坂は「あいつ」と拳を握ってプルプルと震わせている。そんな怒るほど嫌だったのかな？それはそれで結構ショックなんだが……。なんて考えていると、食蜂がケータイを持って話しかけてくる。

「あのお、もう1回さっきみたいに呼んでもらっていいですか？
できれば、『朝ですよ』ってのもつけて」

「ん？ まあ、いいけど。んじゃ、言うぞ？ ——朝ですよ、操祈お嬢様。お目覚めください」キランツ☆

「『朝ですよ、操祈お嬢様。お目覚めください』：よしっ。ありがとうございます。これ目覚ましにさせてもらいますねえ」

食蜂はそういつてケータイで録音した俺の声を聞いて楽しそうにし

ている。サービスしておいてなんだが、俺の声で起されて嬉しいのか？自分だったら特に起きやすいとも思わないんだけどな。それはそうと、一緒の席に案内したが、食蜂が一緒とか珍しいな。そう思い尋ねてみることにする。

「そういや、なんでお前がこの4人と一緒にいるんだ？」

「それはですね。私は夕食をここで食べるつもりで寮を出たんですケド、途中で御坂さんたちがついてきたんですよ」

「……本当は遊んだあと夕食のためここに向かっていたら、バツタリ会っただけですわ」

「ふーん。まあ、歳も近いんだし仲良くしろよ？　せっかく知り合っただしさ」

言いながら食蜂の頭を撫でると、彼女は顔を少し赤くしながら嬉しそうに笑っている。そういえば、さっきからやけに俺を慕ってるけど、もしかしてこの子は前の上条当麻のことが好きだったのか？だとすれば俺はどうしたら良いんだろうな。俺にしたら初めて会ったから別になんか感情もない。まあ、良い子なのはわかる。けど、今後、上条当麻として接してるうちにどうなるかは分からない。

まあそれ以前に、食蜂に限らず上条当麻を好きだと思っている子がいっても、俺は彼じゃないからその気持ちには答えられないけどな。彼のフリをして付き合うつていう傷つけない方法もあるが、それは相手に対して失礼だ。傷つけないために相手を騙すなんて間違っている。それなら、傷つけても相手のその後の幸せを祈った方がマシだろう。そして、逆に俺も彼のフリをする以上、自分の幸せに走ってはいけない。別に誰かを好きになったりはしていないが、そうや

って考えるとかなりの制約があるもんだな。

「?？」
どうかしたんですか、先輩？」

「ん？ いや、なんでもな「邪魔するぞー上条!!」お、着たか。ちよっと行ってくるな」

考えていることが表情に出ていたのだろう。俺の様子をみて少し心配そうにする食蜂に何でもないと言えようとすると、新たな客がやってきた。なので、出迎え案内するために席から離れて入口のところにへ向かう。そしてそこにはさっきの声の主が堂々と立っていた。

「いらっしやい、よく来てくれたな」

「なに、店を開くというなら祝うため駆けつけるのが友というものだっ」

「ははっ、ありがとな。席はどうする？ 俺の友達とかと一緒に座るか？」

「ああ、任せるぞ」

そう言った相手に「あいよ」と答えると、他のみんなに紹介する意味も込めて土御門と青ピの座っている席の方へ連れていく。急に座らせるのもあれなので、一応紹介してから相席させることにする。

「お前らに紹介しておくよ。こいつが前に言ってたもう1人の知り合いの超能力者だ^{レベル5}」

「俺は削板^{そぎいた}軍覇^{ぐんぱ}。超能力者の序列7位だ、よろしくなっ」

「おお、俺は土御門。カミヤんとはクラスメイトで寮のお隣さんだ。よろしくにゃー」

「ボクは青ピ。同じくカミヤんのクラスメイトや。ちなみに最近ばれたから言っておくけど、君の1個上の序列やで」

俺が紹介すると、削板とあいさつを交わす青ピと土御門。前に説明してたからか、そこまで驚かずに打ち解けているみたいだ。だが逆に、中学生たちは急に現れた白学ランで番長スタイルの男に驚いているみたいだな。なので、一応そっちにも紹介しておく。

「お前らにも紹介しておくけど、コイツが前に言ってた削板だぞ」

「よろしくな、嬢ちゃんたちっ」

「よ、よろしく。私は序列3位の御坂美琴よ」

「白井黒子ですの」

「佐天涙子です」

「初春飾利です、よろしくお願いします」

「食蜂操祈よお。序列は5位」

そうやって削板がみんなに自己紹介すると、削板は土御門の向かいの席に着く。そうしたところで御坂たちの水を持ってきたインデックスが現れ、新たに増えている客に気付く。

「あれ？　新しいお客さん？」

「ああ、削板軍覇っていうんだ。この街最強の7人の話はしたよな？　その7位がこいつだ」

「そっか、私はインデックスっていうんだよ。すぐにお水持つてくるから待ってて欲しいかも」

「悪いな。んじゃ、ついでに注文もとっていつてくれ。オレはカツ丼定食で頼む」

「カツ丼定食だね、わかったんだよ。じゃあ、みことたちのお水はどうまに任せるね」

「おう、注文あったらそっちも俺が聞くから。厨房にも削板がきたこと知らせておいてくれ」

俺に言われると「了解なんだよー」と駆け足で厨房の方に戻っていくインデックス。それを見送るとインデックスに渡された水と手拭きを配っていく。

「お待たせしました。水とお手拭きになります」

「上条さんってそういうキャラも出来たんですね」

「まあな。なんでも出来といた方がいいからって、テーブルマナーとかも一通りはできるようにしてるからな」

「へえ、普段のふざけた態度からは想像ができませんの」

初春に返事をする、それに対し言いながら水を受け取る白井。つか、それって感心しながらも俺のこと貶してるよな。そう思ったが別に気にはしていないため、後ろでインデックスが削板に水と手拭きを渡すのをみてから、御坂たちにオーダーが決まったかどうか確認する。

「んで、注文は決まったか？」

「私、オムライスのMサイズ。中はバターライスで」

「じゃあ、私は釜めし膳で」

「御坂がオムライスで、初春が釜めし膳な。他のやつらは？」

注文を言ってきた2人のオーダーを復唱して伝票に記入し他の3人に注文を尋ねる。つか、初春の注文渋いな。いや、喫茶店でそんなメニューがあるのもおかしいんだが、ハッキリいうところはファミレス級にメニューがあるからな。そこは気にしないのだ。そう考えていると、佐天が手をあげて注文を言ってくる。

「私はミックスフライ定食。あ、ソースはタルタルソースでお願いします」

「では、わたくしはシーフードグラタンにサラダでリヨネーズをお願いしますわ」

「それじゃあ、私はあ……先輩のオススメはなんですか？」

「オススメか？どれも味に自信はあるけど。まあ、パスタかな。よく麦野が作ってくれるんだが、どんどん俺の好みの味になってき

てるんだよ」

「へえ、じゃあキノコのクリームスパゲッティをお願いします。私もこの機会に先輩の好みを知っておきたいんでえ」

「了解。佐天がミックスフライ定食、黒子がシーフードグラタンにリヨネーズ、操析がキノコのクリームスパゲッティだな。んじゃ、できるまで待っててくれ」

5人分の注文を確認し伝票に記入すると、そういつてからメニューを1つだけ残して他は邪魔にならないように回収する。そしてそのまま厨房へ行こうと思ったが、やけに御坂が俺のことを見ていたので頭を撫でてから厨房へと戻った。

第六十五話 プレオープン その2（後書き）

食蜂操析の公式設定がわからないので、この作品では御坂たちと同じ寮に住んでると思って書いています。

てか、読んでたら気付いたと思いますが、今回のプレオープンは一通り科学サイドの知り合いを出してしまおうって感じです。しかし、吹寄とかはよく知らないので作品内では名前も出てないし出さなくてもいいかなって感じで出ませんでした。

次で一応プレオープン編は終了です。最後のお客は……意外と人気のあるあの人です。第五話くらいの約束を果たしにきます。

第六十六話 プレオープン その3 (前書き)

地の文も改行してみればという意見を何度か聞いていたので、今回は試しにやってみました。句点で区切るようにしてみました。が、バランスがいまだに分からないので逆に読みづらくなっているかもしれません。読みづらくなったと言われたら戻しますので、そこら辺は遠慮なく言ってください。

第六十六話 プレオープン その3

御坂たちと削板たちがやってきてから結構な時間が経ち、時刻は午後8時前だ。

削板は食事を終えて少し雑談をすると帰ったが、御坂たちはいまも食後のお茶をしながら雑談している。

他の客ももう来ないだろうし、看板を閉店の方に換えようかと思ったところで新たな客がやってきた。

「じゃま、するよ」

「いらっしやいませ……って誰だ？」

ドアのベルが鳴ったので席を立て入り口に向かうと。

そこにはストレートの銀髪を前髪のところでセンターにわけている翠眼の少女が立っていた。

どんなに上条当麻の記憶を読み込んでもこんな知り合いはいない。一体誰なんだと思っていると、相手は笑顔で名乗りはじめた。

「ふむ、いまはローズⅡケリーとでも呼んでくれ。我が、親友よ」

「っ!?!? ……お前か。そんな見た目でくるとは思ってたな。なかったぜ。んじゃ、愛称はロゼってことで。よくきてくれたな、アレイスターⅡクロウリー」

そういつて俺は向こうには聞えないような声で、少女の偽体で来店してくれたアレイスターⅡクロウリーを迎える。

しかし、どうみたって本当の人間にしか見えないな。機械でもないし一体どういったものなのだろうか？

そう思ったが、とりあえず店の方に案内する。

「席はどうする？ みんなと一緒にじゃない方が良いつて言うなら、カウンターの方で相手をするが」

「いや、構わんさ。君がどんな人間と付き合っているのかを直接感じる良い機会だ」

「そっか。んじゃ、ついてきてくれ」

俺はアレイスターⅡクロウリー改めロゼにそういうと、入り口の方からカウンターの前を通り皆の座っている席の方へ案内する。すると、雑談していた他の者たちも俺とロゼに気付いたのか視線を向けてくる。

近付いてきた俺らに最初に口を開いたのは、青ピだ。

「カミヤん、また女の子の知り合い？ ホンマ、どこでそんな出会ってくんのか教えて欲しいわあ」

「はじめまして、私はローズⅡケリー。上条当麻とは古い付き合いで、いわゆる親友といったところだ」

「へえ、カミヤんにも親友とかいたんだにゃー。俺は土御門ですたい、よろしくにゃー（ん？ この姿だれかに似ている気がする…：いや、気のせいかな）」

あいさつをしたロゼに同じようにあいさつを返す土御門。

他のメンバーらも同じようにあいさつをすると、ロゼは通路を挟んで俺の横で、土御門の隣に移動した青ピの正面に座った。席を書くところな感じになる。

イ 絹 麦 青 土 御 白 初

— || || || || || — || || || || || — || || || || || —

フ 滝 俺 ロ 佐 食

そうして席に着き「紅茶だけいただく」と言われたのですぐに作り、ロゼの前に置いて俺も席に着くと他のメンバーが質問し始めた。

「ローズさんだっけ？ こいつと親友って言ったけど、どこで会ったの？」

「呼び方はロゼでいい。どこで出会ったか…と言われると難しいな。まあ、初めて会ったのは学園都市でだ。といっても、君のようにナンパされていたところを助けられたわけではないがね」

そういつて御坂に答えると「フフッ」と楽しそうに笑いながら紅茶に口をつけるロゼ。

まあ、確かに彼らの出会いを説明しようとすれば、土御門にもいろいろばれるからな。テキストに誤魔化さないといけない。

そんな風に考えていると、言われた御坂が俺の方をキッと睨んでいる。一体どうしたんだ？

「あんた、人との出会いを勝手に話してんじゃないわよっ」

「話してないっつの。こいつはいろんな情報網を持ってるから、俺関連の情報をみて知ってたただけだ。だろ？」

「ああ、勝手に知っていたことは詫びよう。しかし、あまりにも衝撃的な出会いだと思って記憶に残っていたんだ。フフッ、まさかナンパから救おうとした相手を狙って電撃を放つとは」

「あ、あれはっ……そいつが悪いのよ。人のことをお子様だとかなんだとか、貶してくるから」

言いながら顔を赤くしてプイッと顔を逸らす御坂。

まあ、御坂との出会いを読み込んでみると、確かにナンパしてたやつらに向かってそんなことを言っている。

目の前で人のことをそんな風に言ったら、別に御坂じゃなくても怒るかもしれない。

「しかし、上条さんは一応助けてくださったのでしょ？ 普通は見て見ぬふりをするのですから、多少のことは目を瞑ってもよかったんじゃないの？」

「い、いいのよ。結果的に怪我はなかったんだし」

「それでも助けてくれた当麻先輩に攻撃したって事実が消えないわよねえ」

「う、五月蠅いっ。私たちは普段からそんな感じだからいいのっ！」

白井と食蜂にまで言われると流石に話を濁す事もできず、やや無理矢理に話を終わらせる御坂。

まあ、実際に上条当麻も驚きはしていたが、御坂とのそういったじやれあいは楽しんでいたいみたいだ。

年上に対して甘えていると思っていたみたいだが、そういう頼りにされるのは嬉しかったらしい。

そうやって1人記憶を読んでいると、ロゼが口を開く。

「まあ、君に限らず。超能力者と上条当麻の出会いは何れもそれなりに劇的なものだ。第6位を除いてだがね」

「えっ？ も、もしかして、ロゼちゃんもボクのこと知ってるん？」

「ああ、上条当麻の交友関係は一通り知っている。超能力者ともなれば、特に記憶に残りやすいのだよ。加えて、君は変わった出会い方をする超能力者の中で、唯一普通の出会い方をしたという。逆に変わった出会いをした者だからな」

ロゼがそう言うのと「へえー」と感心するメンバーたち。

まあ、青ピは「なんでや：上手いこと隠せてるつもりやったのに：」と落ち込んでいるが、他の者はそれをスルーしているので俺も気にしないでおこう。

そう考えていると、今度は土御門の方から口を開き話し始めた。

「ところで、ロゼちゃんは能力者なのかにゃー？」

「いや、私は外の人間なのでね。能力者ではないのだよ。まあ、この街の情報をいろいろ知っているのは、仕事の関係で理事会との付き合いがあるためさ」

「へえ。ちなみに、お仕事の内容はきいてもいいですか？」

「フフツ、理事会との仕事の内容だ。身の安全を考えるのであれば、むやみに聞かない方が君のためだぞ。初春飾利」

笑って言いながら初春を軽く諷めるロゼ。

確かに理事会って言えば学園都市の上層部だからな。

下手に情報を手にいれれば狙われる可能性も出てくる。

そんなときは地下に匿って狙ってきたやつらを潰すから問題ないが、基本的には狙われない方が良いからな。

やはり、ロゼの言っていることは正しいと思う。

言われた初春もすぐに気付き少し顔を赤くして「そ、そうですね」と言っている。

「まあ、初春ではありませんが、わたくしも少々気になりますわね。上条さんと大して歳も離れていないようですし、その歳で理事会相手に仕事をなさってるとは信じられませんわ」

「コラ、黒子。会ったばかりで失礼でしょうが。ロゼさんもすみません、気分悪くしたなら謝ります」

「なに構わんよ。確かに十数歳の人間が理事会を相手に仕事するとは、普通考えられないだろうからな。しかし、ここはほとんどの人口を学生が占める街だ。そこで必要なのは名前や経歴よりも、単純な能力だとは思わないかね？」

ロゼがそう答えると少し驚きながらも納得したのか、「フムフム」と頷く中学生組と青ピとインデックス。

しかし、暗部を知っている者たちはその雰囲気にも別の意味で驚いているのか、表情が少し真剣なものに変わっている。

「ところで、インデックス禁書目録はなぜ上条当麻の店にいるのかね？　どうやら、ただの住み込みのバイトではないようだが」

「ふえ？　えっとね、とうまが死にそうになる前に助けてくれたからなんだよ。その後もここにいた方が安全だからって住み込みで働かせてもらってるの」

「ほう…しかし、仲間と共に必要悪の教会に帰るという選択肢もあったはずだ。むしろ、ここにいるより本来の仕事もできるだろう？」

「っ!？」　　そ、それはそうだけど。とうまがここが私の居場所って言うてくれたから、私はここにすることにしたんだよ」

急に必要悪の教会の話がされたインデックスは、ロゼが自分のことを知っていると驚いている。

しかし、危害を加えられたわけではないので、驚きながらも素直に答えた。

だが、システムのメンバーと土御門にとっては不信感を余計に抱く事になったようで緊張した様子になっているな。

まあ、これ以上危険な空気になる前にタイミングを計って話を変えるか。

「居場所か…：確かに上条当麻の近くは居心地が良いからな。しかし、それで彼に危険が「それぐらいにしておけ」フム…」

「別に俺はこいつらという危険な目に遭おうが気にしねえよ。それよりも、一緒にいない間にコイツらが危険な目に遭ってる方が辛い。だから、こいつらの事情は理解した上で一緒にいる。心配してくれるのは嬉しいが、いくらお前でも必要以上の干渉は許さないぞ」

「フフツ…：わかった。済まなかった、禁書目録。どうやら私は上条当麻に対し、過保護になってしまいうらしい。別に君を傷つけるために言った訳ではなかったんだ。許してくれ」

「うん。私も自分のせいでとうまが狙われることは、理解してる

んだよ。それに甘えちゃダメだってことも理解してるし。だから、ロゼの言ったことは何も間違っていないから、気にすることはないんだよ」

「そうか。しかし、彼も万能ではない。なので、良ければ彼の手助けをしてやってくれ。そちら側と関わったからには、君の知識が必要になることもあるだろうからね」

ロゼは笑いながらさういうと、言われたインデックスも笑顔になり頷いた。

話も一区切りつき、時間もそろそろ遅くなっているのでロゼはそろそろ帰るといって席を立った。

同じく他の者もいい時間なので帰るらしいので、清算をしてから店の前まで見送る。

「んじゃ、またにゃーカミやん（ローズIIケリーか、魔術側のことも知っているようだし。これは一度調べる必要があるな…）」

「本オープンしてから来るから、よろしゅうなあ」

「今日はありがとうございました。またデェトしましょうね先輩」

そういうと土御門と青ピは歩いて去っていき、食蜂は迎えの車に乗って帰っていった。

続いて、ロゼにも帰りのあいさつをする。

「今日は来てくれてありがとうな」

「なに、親友との約束を私が破るはずないだろう？ 今日私も楽しかった。機会があれば、本体でくるとしよう」

「ハハッ、そんなときは抑制装置でも着けてはれないような」

「ああ、勿論さ。では、次はお互い本当の姿で会おうとしよう。それでは」

ロゼがそう言って手を振ると、その場から姿が消えた。

突然目の前からロゼが消えた事に驚く他のメンバーたち。

滝壺も消えたにも関わらず、その瞬間にA I M拡散力場を感知できなかったから驚いているみたいだな。

そうして驚いたメンバーらが俺に尋ねてくる。

「ちょ、当麻さん。ロゼさん消えちゃいましたけど、超どうなってるんですか？」

「ああ、あれは本当の身体じゃないからな。意識表体とでも言えればいいのか、とりあえず歩きまわれるための仮初の身体だ。言っておくと、本人は男だぞ」

「な、なんでそんなものを使ってまでお店に来たんですの？」

「招待したからだろ？ 義理堅いっていうか、そういうやつなんだよ。まあ、それはいいから中に戻るぞ。お前らの寝る部屋も決めないといけないしな」

そういつて俺はメンバーらを店の中へ入れる。

今日は超電磁砲組はそのまま地下に泊まっていくからな。

食蜂も泊まりと言う事だけ聞いて羨ましがってたけど、用意もしてないし用事があるため泣く泣く帰っていったのだ。

青ピや土御門にばれるのはマズイが、食蜂も近いうちに地下へ招待

して匿えるようにしておかなきゃな。
そう考えながら俺たちは片づけをして、超電磁砲組を案内した。

——とある窓の無いビル

「フム……とても良い店だったな。全てのものを受け入れるといった、ひらかれた場所のように感じた」

アレイスターはそういつて、ビーカー内に浮かびながら今日の店の出来事を思い返していた。

偽体といっても記憶や五感は共有していた。

なので、この場にながら実際に向こうでの食事の味や人との触れ合いの感触を理解している。

「紅茶などいつ以来だろうか……久しぶりに飲んだが、悪くなかった」

店で注文し贗物が淹れた紅茶を飲んだ。

本当は所詮は贗物だと心の中で貶すつもりだった。

しかし、やつが淹れた紅茶は味も良かったが、なによりも人としての温かみに満ちていた。

演技だと分かっているにも、実際の上条当麻と話をしているように感じ。

彼の死を知って以来、一切感じることもなかった安らぎを感じてしまった。

「贗物とて肉体は上条当麻か……」

今日の来店は彼が戻ってきたときのためだ。

贗物の人格は消し去ってやるつもりだが、贗物として過ごしていた間の記憶をどうするかは決めていない。

いや、正確にはどうなるかわからない。

なので、記憶をもったまま人格が戻れば、プレオープンに来てくれなかったと悲しむだろう。

そうさせないために今日は店にいつてきたのだ。

「計画の概要はできた。幻想殺しに封印されし者たちの力を解放する。それを続けていけば、神の代行者としての存在に戻っていくだろう。やつらは神浄討魔にしか扱えぬからな」

そう、上条当麻の再誕は行為としては簡単だ。

贗物は禁書目録のような記憶再生を想像しているようだが、実際はそんなことをする必要はない。

上条当麻とはこの世界で唯一存在が確定しているモノ。

なので、その存在にしかできぬことをさせれば世界の修正力によって在るべき姿へと戻るというわけだ。

「贗物とて上条当麻の心の一端は受け継いでいよう。ならば、感情を刺激してやれば良いだけだ。圧倒的な感情に心が支配されれば解放するだろう。幻想殺しを……」

上条当麻は実に優秀な頭脳を持っていた。

演算力こそ上位能力者には及ばぬが、それは思考スピードや自身の知識から最も効率的な手を瞬時に割り出すことで勝るとも劣らぬ力を発揮していた。

しかし、思考とは別に情の面では相当に深い人間でもあった。

まわりに気付かせていなかったが、人を救えたときには本当に嬉しそうにしていたし。

人を傷つける者がいれば冷静に見えて心の中は怒りに満ちていた。そんな彼と同じ存在の贋物もきつと他人のために怒り悲しむ者なのだろう。

ならば、そうなるように仕組むまでだ。そう考えながら、アレイスターは1人さらなる思考の海へと潜っていった。

第六十六話 プレオープン その3（後書き）

一応、今回のローズⅡケリーという名前には意味があります。皆さんも知っているかと思いますが、アレイスターⅡクロウリーというのは実在した人物です。もちろん、見た目などは全然違いますが、エイワスに出会って法の書を書いたなどのエピソードもちゃんとあります。

そして、その現実のアレイスターの最初に結婚した相手の名前がローズⅡケリーなのです。なので、魔術側の人間なら気付いてもおかしくないんですが、そこは知らなかったという設定でお願いします。それと、今回のローズⅡケリーの見た目はハイムラキヨタカ氏のサイトにある原石の少女をイメージしてます。気になる方は一度ご覧ください。

第六十七話 水着お披露目（前書き）

一応、ヒロインズスタイルの良さは虚空爆破事件のときらへんの後書きに書いたものからあまり変化はないです。新たに加わったメンバーも入れると。

麦野＞滝壺＞食蜂＞＞佐天＞＞絹旗＞御坂＞＞フレンダ＞初春・インデックス＞＞白井

って感じですかね。『＞』の量が減ってたり、順位が入れ替わってるところはこの数週間で成長した感じですよ。まあ、成長した人の近くには上条さんがいたってのが、成長した理由だと思ってください。

第六十七話 水着お披露目

昨日のプレオープンから一夜が明けた。

本オープンまではもう少しあるため、今日は完全に休日だ。

そして、いまは昨日泊まっていた超電磁砲組たちも含めて地下のプールへとやってきた。

更衣室へ案内する前に先にどんなプールか見せると驚きで言葉を失っている。

「結構、広いだろ？ 走ってこけても大丈夫なように衝撃吸収素材を使ってるが、完全に吸収するわけじゃないから遊ぶ時は気をつけろよ」

「それはわかりましたけど、結構なんてもんじゃないじゃないですか……」

「普通のレジャー施設級に広いんですけど……」

「確かに第三学区に借りてたプライベートプールより大きいわね。けどまあ、そこまで驚くようなもんじゃないわ。遊ぶならさっさと着替えてきなさい」

俺に案内されて驚いたまま感想を言う初春と佐天に、そう言って更衣室へ向かうよう促す麦野。

そのプライベートプールというものがどんな所かは知らないが、滝や飛び込み台、おまけにウォータースライダーも複数あるしな。

設定をいじればプールに波や渦を作ることできるし、天井から雨や雪を降らすこともできる。

プール以外にもビリヤードやレーザー判定の射撃場など、レジャー

向けの施設は沢山ある。

数日泊まってもきつと遊びきれないだろう。

「んじゃ、私たちも超着替えてきますか。当麻さんは水着の希望があります？ 卒倒するくらいセクシーなのだって着てあげますよ」

「んじゃ、この場で脱いで裸で泳いでろ。御坂に頼んでプールに電撃放ってもらうから」

「ひ、酷いです。せつかく超気を利かせてみたのに…」

「馬鹿なこと言ってないで着替えて来い。似合ってれば褒めてやるから」

言いながら頭を撫でると、少し拗ねながらも絹旗は素直に着替えへと向かった。

そして他のメンバーも続いて更衣室へ向かったので俺も着替えることにした。

着替えが終わりプールに戻ると誰もまだ来ていなかった。

なので、準備運動を丹念にしていると入り口の方から騒がしく女性陣が登場した。

「おまたせ、とうま」

「あ、あんまジロジロみないですよ？」

「フッフ、お姉様ったら恥ずかしそうになさって。しかし、黒子は脳内フォルダにその御姿をつ《バキッ!》ぐはっ」

「気持ちの悪いこと言ってんじゃないわよ!」

滝壺を先頭にそうやって騒がしく現れたのは御坂たちだ。

滝壺は上は白で下はピンクのパンツスタイルのビキニ、御坂はカラフルな水玉模様のフリルチューブトップを着ている。

そして白井だが……なんだあれ? 紐と申し訳程度の布か? どっちにしろ、それ軽犯罪法に触れてる気がするぞ…

「なんか男の人の前に水着で出るのって恥ずかしいですね」

「初春よく似合ってるんだし、上条さんに見てもらった方がいいって」

その後ろから現れたのは初春と佐天だ。

初春は黄色地に朱色というのかピンクっぽくもある花柄のワンピース水着。

佐天は上は白のビキニで腰には水色のパレオを巻いている。

しかし、食蜂も中学生にしては発育が良いと思ったが、佐天もかなり発育いいんだな。

ってか、初春はプールでも頭の花とらないのか。

「こんな人数で遊ぶの初めてかも」

「私たちもそうだって訳よ」

そして、2人の後ろから現れたのはインデックスとフレンダだ。インデックスはピンクのワンピース水着で腰のところがスカートみ

たいにヒラヒラしている。

逆にフrendは黒を基調とした競泳水着をきている。

可愛い感じと綺麗な感じで対極だが、2人ともよく似合っていると思う。

「本当にそれで良いんですか？」

「今日はトレーニングする予定だから良いのよ」

言いながら最後に現れたのは絹旗と麦野だ。

絹旗はなにを着てくるんだと心配だったが、豹柄のビキニを着てきた。

そして、並んで歩いている麦野はインストラクターが着るようなパツと見、半袖ハーフパンツのトレーニングウェアみたいなのだ。

トレーニングするつもりと聞えたし、それなら脱げたりする心配のないそっちの方が良いだろうな。

そう思いながら、みんなの方へ近付いていく。

「みんな似合ってるじゃないか。正直、目のやり場に困るぜ」

「ふふっ、上条さんでもそんな事思ったりするんですね」

「当たり前だ。つーか、その前にお前はこれ着とけ」

そういつて初春に答えながら自分が着ていたTシャツを脱いで白井の頭から被せて着せる。

白井も急に着せられて「わぷっ」と言っていたが、ちゃんと腕も通して着替えを完了した。

そして、急にTシャツを着せられた白井は非難の目を向けて口を開いてきた。

「急になんなんですか？」

「お前は自分の格好を客観的にみてみる。軽く法に触れるぞ」

「ちゃんと隠すところは隠してるじゃありませんの。これでも大人しめにしたんですよ？」

「それで大人しめって、それ以上だと隠してる意味あんのかよ…」

白井の言葉に呆れて少し疲れる俺。

まあ、白井は肉体的な成長が遅いようなのでまだ大丈夫だが、今後成長して今のデザインの水着をきたらきつとアウトだろう。

風紀委員のくせに風紀を乱すとは不逞野郎だな。

そう考えていると、急に横から誰かに触られた。

そっちに目をやると佐天が人の身体を見て腹筋あたりをペタペタと触っている。

「……お前はなにをしてるんだ？」

「えっ？ ああ、すごい体だなあと思いました。上条さんって鍛えてるんですね。細くみえるのに脱いだら腹筋割れてるし、触っただけで無駄のない筋肉ってわかりますよ」

「まあそれなりにな。けど、言ってるお前もスタイル良いし水着もよく似合ってるよ。中学生とは思えないくらいだ」

「そ、そうですか？ ははっ、面と向かって言われると恥ずかしいな」

そういつて少し顔を赤くする佐天。

他の者からはジトつとした視線を送られてくるが、それを無視して俺は軽くストレッチをしながらプールに向かう。

みんなが入る前に水温を確かめておかないとな。

軽く手をつけるとひんやりしているが、水温としては問題ないのでみんなの方へ戻る。

「んじゃ、自由に遊んでくれ。途中休憩は各自でとって、昼休憩は時計があるからそれで12時半くらいにしようと思う。ちゃんと準備運動して、休憩もとりながら遊べよ？ 溺れたら人工呼吸すんの俺だかな。ファーストキスをこんなことで失いたくないなら、注意する事だ」

「「「「はい（それってある意味、チャンスだと思う）」」」」

俺に言われると、他の人に手伝ってもらいながら準備運動をするメンバーたち。

自分でやる以上に相手の手伝いを熱心にやってあげてるけど、良い子たちだな。

友達に万が一の事がないよう気をつけているのだろう。

これなら事故の心配はなさそうだ。

そう思っていると、準備運動を終えた麦野が近付いてきた。

「あのさあ、今日は前に言ってた翼の練習したいのよ。だから、ちょっと見ながらアドバイスとかくれない？」

「ん？ いいぞ。んじゃ、少し端の方でやるか。最初はプールサイドから水面近くを飛んで、慣れたら飛び込み台から飛んでみよう」

「了解。それじゃあ、頼むわ」

言いながら俺たち2人は皆のいるところから離れた場所で、翼の練習を始める。

まずは、背中側で翼を形成するところからだ。

麦野は数回深呼吸してリラックスすると、目を瞑って集中し始めた。すると、少ししてから背中の方に光が集まりなにかの形を形成しはじめた。

「ふう…結構、イメージするだけでも難しいわね」

「なら、具体的なキャラクターみたいなのでも想像してみろ。天使でもロボットでもこの前のインデックスでも何でもいい。背中に翼があるやつを思い浮かべて、やってみろ」

俺に言われると、実際にイメージをし始めたのか背中の光が徐々にだが翼のような形になってきた。

そのまま見ていると、光は少し抑えられ大きな二翼が形成された。どうやらモデルはインデックスか天使のようだな。そう考えながら、麦野に話しかける。

「翼の形成はできたな。んじゃ、先端部をエネルギーに戻し放出して浮上だけしてみろ。ヤバくなったら、幻想殺しで止めてやる」

「わかった、まかせるわ」

言いながら麦野はさっそく翼の先端部をエネルギー状に再変換し放出を始めた。

まだ加減が分かっていないのか、やけにバチバチと勢いよく放出している。

しかし、浮力を生み出すには充分なのかゆっくりと浮き始めた。

「よし、とりあえずそれを維持してみろ」

「了解…って、言っても結構キツイのよね」

「放出量が多すぎるんだ。徐々にエネルギーのロスを減らしてい
け」

「徐々にね……フウ、少しマシになったわ」

そういつて力を抜いて笑う麦野。

てか、適応すんの早いな。こういう所をみると、やっぱり超能力者^{レベル5}なんだなって思うよ。

そうしてロスを減らした状態で高度の維持ができるようになり、少しの間浮いてると麦野はゆっくりと降りてきて翼を解除した。

「よつと。やっぱりロスは減らせても慣れるまではキツイわ」

「最初だし当たり前だろ。一回休憩しておけ、再開するときに来るから」

「はい。んじゃ、少し座ってるからまた後で」

麦野そういうと近くのチェアまで歩いていき、ゆったりと寝転がった。

まあ、結構な時間を浮上と維持に使ってたから30分は休憩してるだろう。

なので、その間俺は他のやつらの監督をしておくことにした。

第六十七話 水着お披露目（後書き）

前書きに書きましたが、成長理由は上条さんが頻繁に作っているオヤツを食べていたら体重増加したためです。その分、胸にも脂肪がいったので本人たちのには結果オーライです。ちなみに上条さんも同じくらいオヤツを食べていますが、運動しているので体脂肪率は4%ちょいです。

第六十八話 上条さんの能力教室（前書き）

今回はオリジナル設定がでる話です。

第六十八話 上条さんの能力教室

「よう、楽しんでるか？」

「あ、上条さん。ここすごいですね、こんなところ貸切で遊べるなんて思ってたませんでした」

「ハハッ、まあレジャーも充実してないと秘密基地っぽくないだろう？」

麦野のそこから離れ、浮き輪にお尻だけ入れてプカプカと浮いている初春に話しかけると楽しそうに笑顔で返事をしてきた。

そして、こいつらには地下を秘密基地という遊戯施設のように言っているため、こんな施設がある本当の理由を話せるわけもなくテキトー返す。

すると、苦笑いしながら佐天が尋ねてきた。

「いやあ、私たちは秘密基地がどんなものか知らないんで。ってか、麦野さんとなにしてたんですか？」

「ん？ あれは新技の練習だ。原子崩しはエネルギーを一定の形で固定しておくことができるんだが。それを翼状にして先端だけエネルギー状態に再変換して放出すれば、ある程度の飛行能力を手に入れられるんじゃないかってな」

「へえ、だから麦野さんはさっき浮いてたんですかあ。やつぱり超能力者ってすごいんですね」

そういつて感心する佐天。

だが、少し間違ってる気がするな。

別に超能力者だからそんなことが出来る訳じゃない。

確かに麦野は天才タイプだが、実際は、そうやって色々できるように自分で工夫しているのだ。

なので、すごいと褒めるなら超能力者ではなく、超能力者になっても更に上を目指す麦野個人を褒めるべきだと思う。

「強度は関係ねえよ、あいつは自分でいろいろ試してできるようになってんだ。てか、空を飛ぶならお前の能力の方が向いてるだろ」

「え？ ま、まあ、確かにそうですけど。ほら、私あれから無能力者に戻っちゃったから」

「ふーん。んじゃ、ちょっと待ってろ」

佐天にそういうと俺は入り口の近くまで行き、機械を少し操作する。すると、プールの天井からキラキラと粉雪が舞い始めた。

いろんなギミックがあることは知っていたが、雪を降らせることが出来るとは知らなかったメンバーたちは、驚きながらも「プールで雪が見れるとは超思ってませんでした」や「すごく綺麗かもつ」と喜んでいる。

だが、これは佐天の能力を使う上で空気の流れを視覚で捉えられるようにするためだ。

みんながそうやって喜んでいる間に、一度更衣室へ行って新しいTシャツを着てカードキーを取ると。

俺は総司令室に置いておいた記憶媒体コピーカードの能力で出しておいたカードを取りに向かった。

必要なのは空力使用エアロハンドだが、ついでだし面白そうなのを何枚かカードホルダーに入れると、プールに戻った。

「すまん、待たせたな」

「あ、いえ。けど、雪降らせてどうするんですか？」

「これは空気の流れを分かりやすくするために降らせたんだ。ん
じゃ、見とけよ」

そういつて俺は密かに元始種子を解除し幻想殺しをオフにすると、
カードホルダーから空力使いのカードを出して握り潰す。

これで10分間分だけ空力使いの能力が使えるようになった。

あと、何枚かあるが勿体無いので、初歩的なものを見せて自分だけ
リアルティの現実を構築しやすくしよう。

そう思って、プールの上を舞っている粉雪を緩やかに渦巻かせる。

すると、見ていた佐天と初春が驚きの声をあげた。

「ええっ！？ 上条さんって空力使いだったんですか！？」

「ってか、これだけ大きめの竜巻起こせるなら強能力者^{レベル3}は、いつ
てますよね？」

「は？ いや、俺は空力使いじゃないし無能力者だけど。いいか
らちゃんと見てイメージ掴め。自分だけの現実を構築しやすいよう
にな」

俺が少し真剣にそういうと佐天は「は、はい」と真面目に雪の動き
を目で追い始めた。

単純に竜巻と言っても、別にずっと同じ場所を中心にグルグル回転
している訳じゃない。

下か上かに螺旋回転していたりするのだ。

それを分かりやすくするために、雪を竜巻に閉じ込めたんだが佐天は見ながら「あ、そうか…」といろいろと気付いているみたいだ。だが、そうやって実演していると、それを遠くで見えていたとある人物が走って近付いてきた。

「ちょ、アンタなんで空力使いの「うるせえ」《ブワツ》うぎやっ」

《ボツチャン！》

急に走って近付いてきた人物、つまりは御坂だが。

時間も限られているし、プールサイドを走るのは危険なため足元に風を起してプールに放り投げてやった。

それを見ていた初春と佐天はポカンとしているが、とりあえずここまでで感覚が掴めたか聞いてみる。

「どうだ、風の動きはわかったか？」

「は、はい。竜巻に関してですが、少しずつ上に向かって回転してるように見えました。けど、御坂さんにあんなこととして大丈夫ですか？」

「足を滑らせたただけだろ？ 最初に注意したのに、はしゃいじゃってまあ」

「んなわけあるかっ！ どう考えたってアンタの能力でしょうがッ」

そういつて戻ってきた御坂は俺に対して怒ってきた。

だが俺は「お、復活してたんだな」と軽く流して、佐天の能力講習を再開する。

「んじゃ、さっきのイメージをそのままに、自分の手の中で空気を渦にしてみろ」

「はい……風が上にいくように……ゆっくりと少しずつ……」

佐天は俺に言われるとプールからあがって、言われた通り目を瞑って集中し始めた。

俺は能力付加状態でも自分だけの現実なんて使わずに能力を使っている。

なので、この指導方法であっているかは分からないが、結局は自分のイメージを現実に起すものなのだろう。

能力が使えるようになればまた違うのだろうが、キツカケならこの方法で掴めると思う。

そうして見ていると、疲れたのか佐天が息を大きく吐いた。

「ぶはあっ……駄目です。イメージはなんとなく出来るんですが、なにも起こりません」

「んー、んじゃ少し手を貸してみろ」

そういつて近付き後ろから抱き締めるようにして、佐天の手をそれぞれの同じ方の手で持つ俺。

必要以上に密着しないようにしているが、佐天は「はわわ……」と少し俯いている。

なんでこれでそんな状態になっているのか分からないが、とりあえずそのまま佐天の手を持ちながら手と手の間に小さな渦を作る。

「さっきよりもイメージしやすいだろ？ 自分の手に触れてる風の感触を覚えろ」

「は、はい：けど、これ少し恥ずかしいなあ……なんて」

「そんなのは気のせいだ。いいか、別に最初から何もしないで風を生み出そうとしなくてもいいんだ。こうやって、手を動かして空気を回してみるとか初動だけ作って見たらもっと分かりやすいだろ？」

「そ、そうですね（うう：密着してるから、上条さんの鼓動が背中越しに伝わってくる。けど、この人鼓動が全然早くなったりしてないんですけど。本気で意識されてない？）」

そんな感じで佐天に自分の手の中で風が起こる感触を覚えさせると、もう少して空力使いのカード効果が消えそうなので1度やめる。

手を離して解放してやると、佐天は「ふう：」と大きく息をはいた。そんだけ集中してたなら、少しはいけるだろう。

そう思いさらに助っ人を呼んで、能力を使わせてみる。

「おーい、理后。いま、ネックレス持ってるかあ？」

「持ってるよー」

「んじゃ、ちょっと来てくれー」

言いながら手を振ると、絹旗たちと遊んでいた滝壺はスイスイと泳いでやってきた。

見てて思ったけど、この子泳ぐの上手いな。

首より上がぶれないでスイスイ泳ぐとか自分には出来ない気がする。そう思っていると、滝壺がプールサイドに上がろうとしていたので、手を貸して上へと引っ張り上げてやる。

「ありがとう、とうま」

「……お礼は良いから、抱きつくのやめてくれ。Tシャツが濡れるし、いろいろと当たってるから」

「フフツ、とうまもそういうの恥ずかしいんだね」

「そりゃ、こっちも健全な男子高校生だからな」

言われて笑いながら離れる滝壺に苦笑しながら答えると、さっそく呼んだ理由を説明することにする。

「いまから、佐天が能力を使おうとするから補助してやってくれ。必要があれば幻想御手のときに麦野とやった実験みたいにブースト効果つけていいから」

「わかった。じゃあ、さてんはやってみて。必要があれば最適化とかして能力を使いやすくするから」

「お、お願いします。じゃあ、いきます…」

いうと佐天は目を瞑って再び集中し始めた。

時折、茶道で御碗を回すような手の動きをしていることから、さつき俺が言った初動を掴もうとしているのだろう。

そうして見ていると、隣で佐天をみていた滝壺の表情が変わった。たぶん、能力を使い始めたのだろう。

「さてん、もっと強くイメージして。空気の流れじゃ分かりづらいなら、水が渦巻くイメージでも良いから」

「はい……手の中でまわる……雪……水……空気」

「少しブースト使うから能力が使えると思う。その間に実際の発現の感覚を掴んでイメージを固定して」

「了解です……っ!? ホントに能力が使えるっ、ようし!」

滝壺がブーストを佐天に使うと佐天の手の間に風が発生し始めた。能力が使えるのは幻想御手事件とかいうもの以来らしく、とても嬉しそうだが滝壺も長時間これ続けられるわけではない。

なので、少しの時間も無駄にしないよう佐天は何度も能力を発現させ、感覚を掴もうとしている。

そうやってブーストを使ってから10分は経っただろうか。

滝壺は「ふう…」と息を吐いて、ブーストを止めた。

だが、佐天はそれに気付いていないらしく、集中して能力の発現を反復練習している。

確かにブースト効果は切れているし、さっきよりも能力が弱くなっているがいまだに風を起こせてる。

これもう成功したんじゃないか?

「佐天、調子はどうだ?」

「はい。なんとなくですが、感覚が掴めて来ました。1回ブースト切ってもらっていいですか? 無しでも出来るか、やってみたいので」

「いいけど、私もう使ってないよ?」

「は? え…ホントですか?」

滝壺の言葉が信じられないのか、首だけをギギギ…とこっちに向けてくる佐天。

見てきた佐天に本当だとアピールするように、大きく頷いて答える滝壺。

てか、腕組んで人にもたれかかってくるのを止めてほしい。素なのかわざとなのか知らないが、胸が腕に当たっている。

そんな危険な状態を意識しないよう、佐天の方を向くと佐天は信じられないといった表情のままもう1度能力を使ってみた。

《ヒュー…》

「つ、使えてる…私、いま能力が使えてるっ！！ やったー、能力者になれたー！！」

「おめでとうございます、佐天さんっ！」

「ありがとう、初春ッ。 ありがとうございます、上条さん、滝壺さん！」

そういつて能力が使えるようになったのを喜び祝う初春に抱きつく佐天。

本当に嬉しいのか目の端に小さく涙が浮かんでいる。

その様子を笑いながら見ていると、さっき吹き飛ばされ、その後も俺にスルーされていた御坂が近寄ってきた。

「あんたすごいじゃない。滝壺さんの能力補助を含めても、1時間^{レベル0}から^{レベル1}に無能力者を^{レベル2}低能力者か異能力者にしたなんて聞いたら学園都市中が驚くわよ？」

「関係ないだろ。補助があってもできるかどうかはそいつ次第だ。

だから、すごいのは俺たちじゃなくて、この短時間でコツを掴んだ佐天の方だよ」

「……確かにそうね。んじゃ、ちょっとお祝い言ってくるわ」

「おう、一緒に喜んでやってこい」

言うど御坂は少し小走りでいまだに抱き合っど喜ぶ佐天のもとへと向かった。

そして、3人が騒いでいると他のメンバーもどうしたのかと集まっどきて、佐天が能力者になれたことを聞くと素直に喜び祝いの言葉をかけていた。

第六十八話 上条さんの能力教室（後書き）

今回ののはかなり設定いじってる感ありますね。佐天さんはレベル0じゃないとって思っている方も当然おられるでしょうから。

一応、設定としてはレベル2に近いレベル1で、扇風機の弱にも満たない風が起こせる程度です。なので風起こし対決なら団扇にも勝てません。しかも今は手の平からしか風を起こせないなので、遠距離技もできないって感じです。

第六十九話 記憶媒体の能力（前書き）

何気に上条さんと御坂って、この話だとかいよいよ絡んでないんですよ。本当に2人がメインってなかった気がします。

第六十九話 記憶媒体の能力

佐天が能力を使えるようになり、みんなでそれを喜んだあと軽くお祝いパーティーのような感じでお昼を過ごした。

といっても、普通のお昼の最後に大きめのケーキを用意しただけだな。

そのあと、食休みをして再び遊ぶのを再開すると俺と麦野はもう一度飛行訓練を再開した。

浮上と前進はある程度できるようになった。

だが、方向転換や後退に左右の移動と何度も繰り返した結果、翼の枚数は6枚にすることにした。

上段は風切り、中段の翼をスラスタにし、下段をバーニアとすること通常飛行や上昇下降は安定するようになった。

また、急な方向転換でもバランスを取りながら移動する方向への推進力を生むよう、6枚の中から瞬時に選び対応することで空中戦闘も今後可能と思われる。

「これでひとまずは完成かしらね」

「ああ、後は慣れてから微調整って感じだろうな」

「けど、まだ飛行できるようになったただけだね。これをやりながらレーザーも使うとなると、実質長時間の戦闘は無理ね」

言いながらバーニアを使ってゆっくりと降りてくる麦野。

まあ、確かに慣れるまでは無理だろうな。

それにこれは意外と使える場面が限られてくる。

エネルギーを放出して飛行するので火器厳禁の場所では使えないし、

その特性上電気系統のジャミングで乱されたら翼の形状を保てなくなる。

なので、飛べるからと安心はできないということだ。

まあ、水中でも使えるとかってメリットはあるけどな。

「今度から、お前用の耐ショックプロテクターでも開発するか？
飛行中にジャミング喰らったり、翼に直接攻撃されて落下するかもしれないし」

「そういうときは、地面すれすれを飛ぶからいいわ。別に空中戦をメインに想定してる訳じゃないし」

「そうか。んじゃ、使い捨ての衝撃吸収クッションみたいなだけ作っておくよ。落下時に展開すればいいってやつ。まあ、展開する余裕があるかわからないが、小型化して負担にならないようにするし他にも使える場面はあると思うからな」

「それぐらいなら持つておくかな。出来れば、ベルトに着けられるようなのかバリエーション作ってくれる？ そしたら、普段から身に着けておいても問題ないでしょ」

そう言って首や腕などを指差しながら言ってくる麦野。

確かにチョーカーやブレスレットなどバリエーションがあった方が、その日の服装に合わせて着けられるし良いだろう。

というか、そうしないと「今日の服には合わないからイヤ」と言っ
て麦野は拒否してくるに違いない。

大人というかお姉さん系なのに変なところで子供っぽいんだよな。

まあ、大した苦勞じゃないからあとで色々と考えてみようと思う。

「じゃあ、少し疲れたからお風呂入って部屋で休んでおくわ」

「おう。また、食事の時間になったら起しに行くから寝ていいぞ」

「ん、お願い。そんじゃ、おつかれー」

麦野は言いながら手をひらひらと振って更衣室の方へと帰っていった。

さて、麦野のトレーニングも終わったし、他のやつらの様子でもみるかな。

そう考え、みんなのいる方へとショートカットして向かうことにする。

ショートカットと言っても、さっきの残りの空力使いの能力を使うだけだ。

全力で走ってプールへと跳び、水面に着く瞬間に下へ風を出す事で水面を蹴って移動しているような感じになる。

「ふう…到着つと。意外とタイミングが難しいなこれ」

「いえ、タイミングとかの問題じゃないですよ。どこに水面を走って移動する人がいるんですか……」

「とうまの行動をいちいち気にしてたら負けなんだよ」

「結局、『またお前か』とか『まあ、当麻だしな』で全部解決ってわけよ」

みんなのいる方のプールサイドに着地すると、途端に呆れた表情で白井がなにか言っていたがインデックスとフレンドがフォロー（？）してくれた。

しかし、別に俺を庇っているわけでもないし。

むしろ、馬鹿にされている気がするのは気のせいだろうか…。

そう思っていると、御坂がプールからあがって話しかけてきた。

「そういえばさっきは聞きそこなったけど、あんたなんで空力使いの能力持つてるのよ？」

「いや、一時的に使えてるだけで持つてるわけじゃないぞ。言ってみれば簡易能力だ」
インスタントアビリティ

「簡易能力？　なによそれ？」

「んー、別に教えてもいいけど秘密にしておこうかな。その方が面白いし」

俺がそう言ってニカツつと笑うと、キョトンとしたあと拳を握ってプルプルと震えはじめる御坂。

ここで能力を使われても困るので、Tシャツをサツと脱いで濡れない場所に投げると御坂を抱きしめてプールに向かって走る。

そうして最後の空力使いの能力を使って全力で上に向かって跳ぶ。

「とうっ!!」

「ちょ、えっ!?!　なに!?!」

「必殺ッ脳天落とし!!」

「ぎゃーッ!!」

《ボツチャーン!》

まあ、脳天落としと言っても抱きしめた状態で頭からプールに落ちるだけなんだけどな。

結構な高さから身動きがとれない状態で落とされれば、普通は混乱するだろう。

案の定、御坂もプールに落ちた後も俺にギュッと抱きついている。けど、落ちる前に怪我しないよう俺の胸に頭を抱き寄せたからそこまでじゃないと思うんだけどなあ。

そう思いながら、スイスイと潜水した状態でみんなの元へ戻り浮上する。

「ぶはあっ、思ったより衝撃は少なかったな」

「げほっげほっ……人のことを殺す気か！ 急に人のこと抱きしめたかと思ったら、ホールドして頭から水中ダイブとかふざけんじやないわよ！」

「ちゃんと怪我しないよう頭を胸に抱いてやっただろ？」

「そうだけど、そういう問題じゃないでしょうがっ」

ちゃんと安全基準はクリアしていたとアピールするが、御坂にとっては別の問題があるらしい。

まあ、自分にはなんのことか分からないので、立たせていた御坂に足払いをかけてお姫様抱っこをすると再びスイスイと泳ぎ始めることにした。

「うわっ!？」

「まあ、細かいことは気にすんなよ」

「ちょっと、降ろしなさいよ！ セクハラで訴えるわよッ」

「はいはい。ここで能力使ったら他の人間にも被害出るからな、気をつけろよー」

そんな風に御坂の言葉を無視しながらも、釘をさして能力を使わせないようにする。

まあ、既に空力使いの能力の残量はゼロだから幻想殺しを復活させてるんだけどな。

なので、抱き上げて右手が触れている以上、御坂はどっちにしろ能力が使えないのだ。

「……ねえ、なんで空力使いの力が使えたか本当に教えてくれな
いの？」

「そんなに知りたいのか？ んじゃ、ちょっと待ってろ」

そういつて泳ぐのを止めて御坂を自分で立たせると腰のカードホルダーからカードを取り出す。

別にカードは水に濡れても大丈夫だし、ホルダーも田の字型と留めが上にあるデザインなので水は横から抜ける。

なので気にせず目的のカードを出すと残りは仕舞いなおした。

そうしてカードを1枚取り出すと、御坂にそれを渡す。

「ほら、これを握りつぶしてみろ」

「…カード？」

不思議そうに見ながらも素直にカードを受け取ると、御坂は感触を確かめながら見回している。

途中でカードに書いてある文字を読んだりしていたが、結局どんなものか分からないように「まあ、いっか」と呟くと言われた通りに力強くカード握りつぶした。

それを確認すると俺も幻想殺しをオフにして御坂の肩に手を置く。

「んじゃ、みんなの近くのプールサイドに移動するイメージを試してみろ。どこにどんな状態で移動するかをなるべく具体的に」

「はあ？ そんなことして「いいから騙されたと思って」…わかったわよ」

言われて疑わしげに俺を見てきたが言った通り騙されたものと割り切ったのか、目標地点を見てから集中するように目を閉じる御坂。そうして、少しの間待っていると周りの景色が変わった。

《シュンツ》

「えっ？」

「な、移動出来ただろ？」

「な、なんで空間移動できたの?? あんた多重能力者デュアルスキルだったの??」

「違うって、いまのはお前の能力で移動したんだ。さっきのカードが能力の正体でな、あれを握りつぶすとカードに記載された能力を一時的に得られるんだよ」

状況が理解出来ていない御坂に笑いながら説明すると、ポカーンとしながらも一応は理解したらしく。

御坂は手のひらを自分に向けてキョロキョロみたり、身体にも変化

がないかを確かめている。

そんな事をして身体には変化がある訳ないので無駄だと思うがな。そう思っ
て見ていると、急に御坂の後ろに何かが現れた。

《シュンツ》

「お姉様ーっ！！ 黒子と同じ能力を使えるようになったのですねっ。では、この黒子
がその能力の使い方をじっくりみっちりねっ」とりとレクチャーして《シュンツ》

《ボツチャーン！》

「…本当に使えるようになってる。けど、どれぐらいの間使えるの？」

「カードに数字が書いてあったろ？ さっきのカードは『20』だから、合計で20メートル移動させるだけ使ったらそれで終わりだ。まあ、元から持つて
る能力を使ったり他のカードで能力を付加したら残量があっても使えなくなるけどな。ついでに言う
と効果の付加時間はカードを潰してから12時間だから、それを過ぎても残量に
関係なく能力は使えなくなるぞ」

俺の説明を受けると御坂は「へえー」と感心しながら手をグーパーと握
ったり開いたりしている。

自分が普段使っている能力と別の能力が使えて嬉しいのか、その顔には笑
みが浮かんではいる。

まあ、超能力者^{レベル5}にもなると能力に関して新しい発見とかって少なくな
るだろうしな。

そう考えながら、御坂を見ていると急に御坂が顔をあげて話しかけて
きた。

「けど、なんであのカードにはそんな力があるの？」

「そういう能力なんだよ。記憶媒体コピーカードって言ってな、あのカードを自由に生み出せるんだ。まあ、カードに記憶させられる能力にも制限があるから万能とは言えないが、能力のレアさとカードを潰せば誰でも使えるってんで。能力研究の応用が生み出す利益も高く見込まれ、強度は大能力者レベル4程度だ」

「そうなんだ、あんた随分と変わった能力の知り合いがいるのね」

「超能力者のほとんど知り合いってのに比べたら、別に大した事ないだろ」
レベル5

苦笑しながら俺がそう答えると、御坂も「それもそうね」と言っ
て笑った。

その後、各々で休憩を取りながらも結局、5時過ぎまでプールで遊
んでいた。

プールでの遊びを終えるとその後、女性陣は大浴場で温泉やサウナ
を堪能したらしい。

あれだけ遊んでおいて、サウナまでやるとはよく体力が続くものだ。
そうして皆がお風呂からあがって来た時には7時をまわっていたの
で麦野を起してから夕食をとり、そんな感じで超電磁砲組のお泊り
2日目は終了した。

第六十九話 記憶媒体の能力（後書き）

普段使わないオリジナル能力は、設定の練りが甘くていいけませんね。

第七十話 靈装作り（前書き）

今回の話は場面変更で2話に分けようか迷ったのですが。前半部が2500文字程度と短くなってしまったため、そのまま長い状態で1話にすることにしました。

第七十話 霊装作り

今日も超電磁砲組は泊まっているため、保護者というか施設の責任者として俺もこっちに泊まっている。

そして、みんなが寝静まったあと、俺は1人で儀式場にいた。手にはインデックスのものは違う形の十字架“ケルト十字”が握られている。

これは自分が魔力を使用する際に周囲にばれないようにするために作ったものだ。

今からそれにテレズマを籠めて霊装として仕上げる。

「陣の形成を変更、回復魔法陣を破棄。新たな陣の形成開始」

そう言いながら床に描かれた陣の形成をいじっていく。

破壊して新しく陣を描きこんでも大丈夫だが、パズルのように組み替えるだけで色んな魔術が発動するようになっているからな。

ちよいちよいといじるだけでもすぐに終わる。

「……よし」

そんな風に考えながら陣をいじると、回復魔法陣は加護の陣に姿を変えた。

加護の陣とはインデックスの十字架を霊装にしたように、物や人に対して力を付加させるものだ。

霊装を作る場合はデザインで魔術的な意味を持たせ最後に力を付加させると完成する。

「んじゃ、きっちり定着してくれよ」

言ってケルト十字を陣の中心に置いてから、陣の外に出る。

そうして、加護が籠められるのを待っていると陣が強く光りはじめ十字架が宙に浮く。

空気がピリピリと緊張していることから、すでにテレズマが集まっていることがわかる。

「テレズマだけでも大丈夫そうだが、ついでだし術式を紛れ込ませておくかな…」

突如そう思い、場のテレズマを利用して魔力を練る。

やはり龍穴だけあってかなりの魔力が生成できるため、普段よりもさらに即興で魔術を組める。

このケルト十字は魔力を感知されないためだけのものだから、変に防御術式を組んでもあれだしな。

応急処置程度の回復術式を組み込んでおく。

「————ディアン・ケヒトの寵愛」

そう呟くとピンク色の魔法陣が展開しそれがテレズマとともにケルト十字に籠められる。

一応、説明するとディアン・ケヒトとはケルト神話の生命や医療を司る神だ。

まあ、その息子の方が優秀だったみたいだが、神の力を部分的に再現する場合に認知度というのも重要になってくる。

なので、神の実力の違いよりも認知度を優先しての術式選択だ。

回復術式を籠めてテレズマの充填が終わるのを待っていると、ほどなくして陣の光がおさまった。

空中に浮かんでいたケルト十字も光が消えるとゆっくり床へと降りていく。

それを確認すると俺は魔法陣へ進んで行って地面に置かれたケルト十字を手にとった。

「よし、出来てるな」

手にとって実際に魔力を練ってみると、周囲へ魔力漏れがなくなっている。

インデックスや探査術式を多重展開していた場合はばれるかも知れないが、普通に魔力を練って身体強化にあてたぐらいでは問題ないとおもわれる。

まあ、魔神・禁書目録戦で上条当麻が使っていた術式だと周囲に影響を与えるレベルなので、この十字架程度では誤魔化しきれない。てか、そんな事してる時点で誤魔化せないと思うけどな。

そんな風に考えながら十字架を首から下げると、俺は儀式場を後にした。

儀式場への通路がちゃんとロックされたのを確認すると俺は、こっちでの自分の部屋である総司令室へと戻ろうとした。

だが、その途中に演習場の明かりが点いていることに気づき静かにそちらの方へと向かう。

誰かいるのかと中をのぞいてみると、寝巻のジャージの上にパーカーを着た佐天が1人でなにかしていた。

手をブンブンと振ったり、自分の前で少し離して両手を開いたりと色々している。

まあ、近くに空き缶やプールで遊ぶときに使ったビーチボールが転がっていることから、能力の特訓なりなにかをしていたのだろう。

しかし、滝壺曰く異能力者レベル2に近い低能力者レベル1になっただけなのに、その日のうちに根をつめてどうするんだ。本人が思っている以上に疲労はあるだろうし注意しておくことにした。

「コラ、中学生がいつまで起きてる。いま何時だと思ってるんだ」

「あ、上条さん。こんな時間に偶然ですね」

「んな訳あるか。部屋に戻ろうと思ったら、明かりが点いてたから見に来たんだよ」

俺に声をかけられ笑いながらあいさつをしてくる佐天に呆れた表情で答えると、佐天は「ははっ、ですよ」と苦笑しながら頭の後ろに手を持っていた。

まあ、1人でいるときに倒れなくて良かったけどな。嬉しいのは分かるが、もう少し注意して欲しいものだ。

「んで、お前は特訓でもしてたのか？」

「そうです。手の間では強めの渦を作れるんですが、遠くに飛ばすタイプや片手で風を起こすのは全然できないんで」

「まあ、能力が使えるようになって色々やりたいのは分かるが、今日はちゃんと休め。明日、帰るって言っても夕方ぐらいまでは居ていいんだし。しっかりと休んでから訓練した方が良いだろう？」

「えーと…それは分かっているんですが。実を言いますと、なんか興奮して寝れなくて訓練してたんです」

そう言いながら少し顔を赤くして「あはは…」と笑う佐天。

能力が初めて使えるようになる感覚は俺に分からないけど、プールで御坂が違う能力が使えて笑顔を見せていたっけ。

つまり、他の人にとっては能力が使えるようになるのは、遠足前日のようなワクワク感があるのだろう。

ならば興奮して眠れなくなるのもしょうがないかもしれない。

「それはわかったが、プールで遊んだりもしてたんだし身体は自分が思ってる以上に疲れてるはずだぞ。特訓はそれぐらいにして眠くなるまでテキトーに時間潰しておけ。話し相手ぐらいしてやるから」

「はい。って、言ってもどこで話するんですか？ 私の部屋は初春が寝てるんで、起しちゃいますよ？」

「別に出の店でもいいが、俺の部屋来るか？ 総指令室はキッチンもあるからお茶ぐらいだすぞ」

言いながら空き缶やビーチボールを片付けるのを手伝うと、佐天もそれを了承し俺の部屋でお茶をしながら話をすることに決まった。前回はこんな風にいろんな場所に行っているときに、滝壺と絹旗が訪問していたらしいが今日はそんなことはないだろう。

そんな風に考えながら荷物を持って佐天と2人で、総司令室へと向かった。

総司令室に着くとカードを通してドアを開ける。

そのまま電気を点けて中に入ると、佐天が内装をみて驚きの声をあ

げた。

「うわぁ、なんか社長とか偉い人のいる部屋みたい…」

「事実そうだからな。総司令室って言っただろ？　つまり、一番偉い俺の部屋ってことだ」

「言ってましたけど、キッチンもあるとか言うから。学生寮の部屋みたいな生活空間っぽいのを想像してたんですよ」

そんな風に言いながら、落ち着かないのかキョロキョロと部屋の中を見回す佐天。

まあ、ここは応接室と執務室を兼ねてるからな。

机を作業台として使ってたけど、本来は生活スペースではなく仕事の部屋だ。

なので、落ち着かなくても無理はない。

「キッチンとかは奥の部屋だ。飲み物の準備してる間はテキストに見てていいぞ」

「あっ、はい。んじゃ、いろいろと探してみますね」

佐天はそういつて悪戯っぽく笑うとソファの下を見たり、本棚のラインナップをみたりし始めた。

この様子だと工具箱も調べたりしそうだが、刃物とかはケースに入れているし重い物は低い棚に入れているので大丈夫だろう。

そう考えながら、キッチンに向かい冷蔵庫から牛乳を出して片手鍋で温める。

そうして牛乳が沸騰してきたところでココアを入れて少しの間混ぜたら完成だ。

ココアを作り終えてカップに注ぐと、お菓子を入れている棚から何種類かクッキーを用意して紙を敷いたミニバスケットに並べてお盆に載せる。

そうして、それを応接室に持っていくとさっきまでそこらじゅうを漁っていた佐天が居なくなっていた。

「ん？ どこ行ったんだあいつ。寝室か？」

1人でそう呟くとテーブルの上にお盆をおいてから、寝室のドアを開けて中に入る。

すると、そこには予想通り1人で遊んでいる佐天がいた。なにやらベッドに寝転んで楽しそうにしている。

多分、フレンダも言ってたフカフカ具合を味わっているのだろうが、温かい飲み物を用意しているので声をかけることにした。

「おーい、準備できたぞ」

「あ、ありがとうございます。けど、このベッドすごいですね。こんなフカフカのベッド初めて知りました」

「まあ、一品モノだし、まだ2回しか使っていないからな。それより、飲み物が冷めるから早く来い」

「はーい」

佐天は返事をしながら素直にベッドから起き上がると、俺のあとをついてきた。

執務室の方へいくと照明のスイッチの下にあるパネルを操作して静かな音楽をかける。

曲は喫茶店の方でも流しているクラシックだ。

パッヘルベルの『カノン』やショパンの『別れの曲』など有名なのばかりを集めたCDアルバムで割と気に入っている。

「あ、私この曲知ってます」

「まあ、有名だからな。んで、なにを話す？ 雑談でも悩み相談でもなんでもいいぞ」

「そうですねー……それじゃあ、上条さんのベッドに落ちていた長い金髪の話とか！」

ニカツつと笑いながら若干探るような視線でそう言ってくる佐天。思わず口に含んでいたココアを吹き出しそうになったが、なんとか堪えて咳き込むだけに留める。

佐天はその様子をみてとても楽しそうだが、こっちは気管に入りかけてそれどころではない。

「ゲホッゲホッ」

「あれ？ そんな焦るようなこと言っただつもないんですけど。てか、上条さんってフレンドさんと付き合ってるんですか？」

「馬鹿、変な想像すんな。フレンドの髪の毛が落ちてたのは最初にあのベッドを使ったのがフレンドだからだよ。あいつが寝ちゃったから、俺はこのソファで寝たんだけ」

「そうなんですか。では、本命は誰なんですか？」

「本命？ なんの話だよ？」

楽しそうに笑いながら訊いてくる相手の言葉の意味が分からず聞き返すと、キョトンとした表情になる佐天。

そして相手はそのまま本当にわからないのかといった様子で口を開いた。

「なんのって恋愛というか好きな人の話ですよ。上条さんのまわりって女性がたくさん多いじゃないですか、だから誰か狙ってる人がいるのかなあ……って」

「かなり多いって言っても、みんな友達だぞ？　友達と恋人関係になったり、恋愛の対象としてみたりするわけないだろ」

「……あの、一応親切で言っておきますけど、その他の女性陣の前で言わない方が良いですよ。じゃないと、辛い事が待っているとします」

佐天はそんな風に呆れた表情をして、クッキーをポリポリと食べながら言ってきた。

けど、辛い事ってなんだろう……。

そもそも、佐天はどの部分に対して言ったんだ？

みんなを友達と言っちゃいけないってことか？

だとすれば結構キツイな。友達と思ってるのは俺だけってことになる。

んで、みんなは俺を友達だと思ってないわけだから、確かに結構どころかかなり辛い事だな。

「あ……答え辛いかも知れないが、お前もみんなと同じ考えか？」

「ふえっ！？」　あ、そのっ、まだ確信は持ててないっていうか。

けど、確かに少しどころか、かなり良いかなって思ってたりはするんですけど……。うん、そうですね。たぶん、皆さんと同じ気持ちだと思います」

「…そっか、友達だと思ってたのは俺だけだったのか。結構、仲良くしてると思ってたんだけどな」

佐天の答えを聞いてかなり落ち込む俺。

まあ、聞いた自分が悪いんだが、面と向かって肯定されるとさすがにへこむ。

てか、これは俺よりも前の上条当麻への話だろう。

ならば、彼は意外にも友達は少なかったってことか？

いや、それはないだろう。

記憶を読んだ限りでは学校のクラスメイトとも良好な関係を気付いていたようだし、なにより嫌いになる点が見つからない。

もし嫌われているなら、この前のプレオープンにわざわざ来てくれなかっただろう。

では、友達じゃないとは一体……。

「あ、あのー、勘違いしてませんか？ 別に友達と言っちゃいけないって事ではないですよ？ それとは別のまあ、こっちの事情なんです。乙女心は複雑なので恋愛対象として見てないとかって言っちゃダメなんです」

「そ、そうなのか？ てっきり、友達と思ってないから友達って言くなって意味かと思っただぜ。流石の俺も面と向かって言われてへこみかけた」

「そ、そんなことないです。頼れる先輩だとも思ってますし、もちろん友達だとも思ってますよ！」

「ははっ、ありがとな。そういつてもらえると嬉しいよ」

言いながら身を乗り出して力説してきた佐天の頭を撫でてやる。
すると佐天は、ハッとした表情になり顔を赤くしながらゆっくりとソファーに腰をおろし、そのまま「ははっ」と照れているのか軽く俯いて頭の後ろをかいている。

「んで、話は変わるがどうだ、本物の能力は？」

「フフッ、本物っていじわるな言い方しますね。けど、レベルアップバー幻想御手を使ったときは違った感動です。上条さんと滝壺さんのおかげで本物の能力者になりました。インチキ無しで使えるようになったので、後ろめたさがあったあの時とは違います。なんて言うかすごい清々しい上に誇らしいって感じですね」

「そうか、ならこっちも手伝った甲斐があったよ。俺には能力者になるって感覚が分からないから、他のやつとも同じ話題で盛り上がることは出来ないがな」

そんな風に言って、嬉しそうに笑っている佐天をみて笑いながらココアに口をつけると。

クッキーに手を伸ばしていた佐天が不思議そうな表情でこちらを見ている。

なにか気になる点でもあったのか？

「どうした不思議そうな顔して？」

「いえ、レベル0無能力者って言っても本当の無能力者って極僅かって話ですし、上条さんだって能力者になる可能性あるですよね？」

なのに、どうしてそんな事言うのかなって」

「なんだ、御坂たちから何も聞いてないのか？」

「あの無効化能力者って話ですか？　でもそれは上条さんが自分で否定してたじゃないですか」

クッキーを食べながらそういつてカップに口をつける佐天。

まあ、自分っていうか本物の上条当麻が言ったことなんだが、それを素直に信じるあたりこの子も純粹だな。

彼とシステムのメンバーはまず相手のいう事を全て鵜呑みにすることはないし。

インデックス・御坂・白井も同じように相手のいう事を自分の中で真実かどうか考えるだろう。

まあ、ここにいる連中は特殊な環境にいる人間だが、御坂や白井のようにほとんど表側の人間ですらそうなのだ。

この子や初春のように無条件で信じる人間の方がレアというものだろう。

それはとても素晴らしいことだが、一応注意しておくかな。そう考えて口を開く。

「あー、友達や知り合いだからって無条件に信じるのはよくないぞ。信じるってのは決めつけと同義だからな。プラスにもマイナスにもなり得るんだ」

「じゃあ、上条さんは私たちに嘘を吐いたってことですか？」

「さあな。別に友達だって恋人だって隠し事くらいするだろう？　別にそれで誰かを傷つけるってわけでもないんだ。何でもかんでも

正直に話すなんて馬鹿を越えて愚か者のすることだぜ」

「むー…良いじゃないですか、正直者だって。正直者は報われるんですよ？」

「なら俺は、自分に正直なだけだな」

相手の言ったことに屁理屈で返すと、佐天は気分を損ねたのか更に「むー!」と言っている。

けどま、正直者は俺も嫌いじゃないけどな。ある意味では上条当麻もそうだったと思う。

自分の中の正義に正直に生きて死んだ男。

さっき俺が言ったように彼を愚か者だというやつもいるだろう。

だが俺は彼の生き方をすぐ尊いものだと思っている。

見ず知らずの人間を救うために全力で生きるなんてヒーローみたいじゃないか。

憧れはするけど、真似なんて絶対にできないだろう。

「ま、そう怒るな。俺も正直者は嫌いじゃないから」

「いいですよーだ。そんなこと言っても、もう正直者同好会の仲間に入れてあげません」

「そんな同好会があるなんて初耳だよ…」

俺はそんな風に佐天の言う事に呆れながらも苦笑して答えると、佐天もつられるようにして笑った。

その後は佐天と学校の話をしたり、これからどんな風に能力を使いたいかなどを聞いて過ごした。

そうして時計の針が三時を過ぎると佐天も眠くなったのか、ウトウトとし始めたので泊まっている部屋まで運び寝かせてやり。俺も自分の部屋で休んだのだった。

第七十話 霊装作り（後書き）

さて、実は今回の話でストックは終了です。なので、以前から言っていたように更新を一時停止したいと思います。もう一つの作品を区切りのいいところまで書いたら再開する予定なので、具体的にいつ再開するかはわかりません。ですが、再開は絶対にするので、他作者様の素晴らしい作品を読んでお待ちいただけるとありがたいです。ちなみに再開初回から二巻の内容に入るつもりです。

第七十一話 家出（前書き）

更新停止って言ったんですが、そもそも不定期更新のつもりで始めた息抜き作品だということを思い出しました。ってことで、息抜きでたまに書いて小出しにするなら不定期ながらも更新可能かもしれません。

第七十一話 家出

昨日は佐天が眠くなるまで話しに付き合っていたため、眠くなった佐天を部屋に運んでやるなどしていたら寝るのが4時前という時間になってしまった。

まあ、本オープンは明日なので今日も休日ではあるので問題ないがな。

そんな風に朝になって目を覚まし、ケータイで時間を確認すると時刻は8時30分。
この時間なら滝壺と絹旗といった規則正しい生活組は起きているだろう。

「んー……うっし、顔洗って俺も上にあがろうかな」

大きく背伸びをしてそう呟くと、俺は顔を洗ったり髪をセットしたりして起きる準備を始めた。

「ふう、さっぱりした。ん？ そうだ、忘れてた忘れてた」

顔洗いかから歯磨き、着替えといった一通りのことを済まし、上へ行くかと思ったときケータイの横にあるものを見つけた。

それは昨日作ったケルト十字だ。

これを忘れては急な戦闘時に元始祖子を使う事になってしまう。フレンダとも約束したし、長生きするためには忘れちゃいけないよな。

そう思いながら首から下げ、シャツの中にしまおうと俺は総司令室を出た。

総司令室を出て地下基地内を歩いていると、今日は誰にも会わなかった。

なので、そのまま上へきた俺は厨房へ顔を出し、起きているやつに挨拶をする。

「よう、おはよう」

「あ、超おはようございます。当麻さん」

「おはよう、とうま」

「あ、おはよう」

厨房に挨拶しにいくと、そこにいたのはいつもの2人と制服の上に店のエプロンをした御坂だった。

なぜ御坂がいるのかは不明だが、どうやら手伝いをしているみたいだな。

そう考えながら近くまでいくと、話しかけることにした。

「お前も手伝いしてんのか？」

「まあね。泊めてもらってる上に、食事まで全部用意してもらってちゃ悪いし。簡単な事だけでも手伝おうと思って」

「中学生がそんなこと気にすんなよ。そんなんじゃ、素直に甘えられなくなるぞ？」

「べ、別に甘えようとか思っていないもの。それに私は、自分でや

りたいタイプだからいいのっ」

そんな風に言いながら少し顔を赤くする御坂。

別に顔を赤くする要素はなかったが、こいつにとって甘えるということは恥ずかしいことなのか？

この歳でそんな考え方してちゃ息苦しくなるだろうに。

そう思った俺は御坂の頭を撫でながら話しかける。

「自分が尽くすタイプって意味なら良いが。甘えることが恥ずかしいってんなら、誰も気にしてないぞ。だから、そう考えてるなら息がつまる前に相談しろよな」

「ふえっ！？　そ、その…うん…：…わかった」

御坂は俺に頭を撫でられると、さっきよりも顔を赤くして静かになる。

食蜂ってやつもそうだったみたいだが、超能力者^{レベル5}は年相応の子供扱いを受けていないんだな。

だから、こういった事への免疫がなくやられると反応に困ってしまう。

彼と出会った初期の麦野も似たような反応だったし、この推測は間違っていないだろう。

そんな風に顔を赤くしている御坂を撫でながらそう考えていると。背後に殺気を感じたので御坂を抱いて少し飛び退きながら振り返った。

するとそこには顔は笑顔なのに目が笑っていない滝壺が立っていた。

「り、理后か。どうしたんだよ？」

「……とうま、ここ厨房なんだよ？」

「わ、わかってるぞ。それがどうした？」

「私たちもいるのに、なんでイチャついてるの？　て言うか、とうまはやっぱり中学生が好きなの？」

言いながらジリジリと近付いてくる滝壺。

正直に言うとかかなり怖い。

恐いってどうか、怖いといった方が正しい。

さっきのやり取りが、イチャついてるように見えたなら怒るのも分かる。

俺だって近くでイチャつかれたら、青ピのように『リア充爆発しろ！』とまではいかないが他所でやれと思う。

けど、いまの滝壺の雰囲気はなんだ？

どう考えても相手から感じる気配は怒りのそれとは違う。

俺はそれを確かめようと思ったが勇気がなかったので、御坂を離すととりあえず滝壺の頭を撫でてみた。

「どうしたんだ、理后」

「むう……今回はこのよしよしに免じて許すけど、次は本気で怒るからね？」

「イチャついた覚えはないんだがな。まあ、厨房では気を付けるよ」

「……《ドゴッ》」

「痛えっ!?!」

俺が今後は注意すると謝りながら言うと、なぜか滝壺に殴られた。てか、頭を撫でているせいでノーガードの脇腹にスクリーブロウとか…

「な、なにすんだよ…」

「さっき自分が言ったこともう1回言ってみて」

「え? だから、イチャついた覚えはないけど、厨房では《ドゴッ!》痛ッ!?! だから、拳に回転付けて殴んなよ!」

自分がもう1度言えと言ってきたから言ったのに、さらに威力をあげて殴ってくる滝壺。

俺もさっきよりは警戒していたから、腹筋に力を入れたけど痛いことにはかわりはない。

その痛みと理不尽な行動に思わず抗議したが、滝壺の反応は冷たいものだった。

「そんな事はどうでもいい。とうま『厨房では』って言った。じゃあ、他の場所ならイチャつくつもりがあるって事だよね?」

「い、いや、そんなつもりはないけど」

「言い訳はいいの。とうま全然反省してないから朝ごはん抜きね」

「ちょ、ちょっと待「うるさい」……はい」

俺はなににも悪くないはずなのに、朝食抜きを言い渡してきた滝壺。

さっきの攻撃に続けて、再び理不尽な扱いを受けたので抗議しようとする。それは言い切る前に滝壺に遮られてしまった。

クソっ、俺が何したって言うんだ。

そう思ったが、これ以上なにをいっても無駄だと思った俺は、「…もういい、家出する」とだけ言って店を後にした。

家出すると言って店を出てから結構な時間が経ち、すでに時刻はお昼前となっている。

あの後から何度もメンバーや超電磁砲組から着信があるが、全部無視だ。

てか、最初から今日は出かけるつもりだったしな。いつもいつも店のことだけしている訳にはいかないのだ。

「さて、そろそろお昼だがどうす「おい、カミヤーン！」ん？」

名前を呼ばれたので、そちらの方を向くと青ピと土御門が手を振っていた。

相手はそのままこっちへ向かっているようなので、俺も2人に向かって歩くことにした。

「よう、2人とも奇遇だな」

「そうやね。ボクらは遊んでたんやけど、カミヤんは何してたん？」

「本屋とか回ってたんだよ。理后が勉強教えてくれて前に言ってきたから、その参考書選びにな」

「ほう。けど、手ぶらってことは良いのは無かったみたいだよー」

ポケットに手を入れたまま、「お疲れー」といった感じの笑顔でそう言ってくる土御門。

ま、確かにその通りだ。いろんな本はあったんだが、滝壺の基礎学力を知らないから選べなかったのだ。

そんな自分のうっかり具合に心の中で苦笑しながら、土御門に返事をする。

「ははっ、まあな。それで諦めて昼でも食おうと思ってたところなんだが、お前らも一緒にどうだ？」

「ボクは別に構わへんよ」

「俺もいいぜい。特に希望がないなら、近場のファーストフードでいいか？」

「おう。んじゃ、そろそろ混む時間だし。さっさと行くか」

土御門の提案に賛成すると、俺たち3人はそのままファーストフードの店へと向かった。

第七十一話 家出（後書き）

片方の作品のネタを考えながら、もう片方の作品を書きあげる。そんな感じでやってみたのが今回の話です。一番初期の息抜きで書いてる状態に戻ったわけです。

というか、この作品は『自動書記戦』『御坂戦』『アニエーゼ戦』『垣根戦』（※自分は原作7巻の途中までしか読んでいません）で妄想した上条さんの活躍が書きたくて始めました。なので、他は基本的に即興で書いてます。

掛け持ち中の息抜きでもいい、即興でもいい、不定期でもまあ許す……そんな寛大な御心でいていただけると、ありがたいです。

第七十二話 巫女さん（前書き）

お久しぶりです。まだ連載は再開できませんが、『この作品は〇ヶ月の間、更新されていません』を表示されたくないなので投稿します。

第七十二話 巫女さん

土御門の提案で近場のファーストフード店である『WASバーガー』に来たんだが、お昼時という事もあって店内は大勢の客でごった返していた。

「あちゃー、こりゃ座られへんな」

「つつても、こんな暑いのにテイクアウトなんてしたら、干からびてしまうにゃー」

言いながら土御門は本当に嫌そうな顔をする。

他の店に行くのも面倒だし。なにより一度冷房のきいた場所に入ったらせいで外に出たくない。

さて、どうしたもんかなと思っていると若いアルバイトらしき店員が話しかけてきた。

「お客様、相席という事でしたらご案内できますが？」

「相席？　って、どの人ですか？」

「あちらのお席のお客様です」

素晴らしい笑顔で相手が指差した方向を見ると、その一角だけ異様な雰囲気放っていた。

4人掛けの席、いや詰めれば6人は座れる席に1人で座っているやつがいる。

黒髪ストレートで美人と言って良い容姿の女の子だ。

だが、その服装がおかしい。なぜに巫女服？

「いや、あれはない。あんた、厄介払いを客に押し付けてるだろ」

「ごゆっくりどうぞー」

「おい、せめて案内までしてけよっ?！」

笑顔のまま案内もせず去っていった店員に向かって俺は抗議するが。

相手は本当に去って行ってしまった。

この店はどんな社員教育してんだよ。うちの店なら即行でオシオキしてるところだぜ。

そんな風に店員の対応に心の中で文句を言っていると、肩を叩かれた。

一体誰だ？

「じゃあ、カミヤん。いつてみようか」

「……は?」

「『は?』やなくて、早う話しかけてきてや」

「いやいやいや、おかしいだろ。この場合、全員で行くんじゃないのか?」

土御門と青ピが冗談拔きの表情で笑って言ってきたので、俺は聞き返した。

ただでさえ、店員に丸投げされてげんなりしているのだ。そこでさらに友人たちまで俺に投げてくる事はないだろう。

「お前らも一緒に行こうぜ。俺1人で行くとナンパみたいじゃねえか」

「いや、ここは数々の女子とお知り合いになっている、カミヤンのみで行った方が成功率が高いぜよ」

「そうやそうや。それにボクらまで行ったら相手が怖がるかもしれないへんやろ？」

「俺1人だって怖がる可能性は変わらないと思うがな…」

2人の言い分に呆れつつもこのままでは話が進まないと思い。俺は「頑張れにゃー」や「ふられてまえー」と言ってくるアホ共を無視して、テーブルに突っ伏している巫女服少女に話しかけた。

「ちょっと、ゴメン。相席してもいいか？」

「……食い倒れた」

「……は？」

今この子はなんと言った？

俺の聞き間違いでなければ『食い倒れた』と言ったはずだ。

しかし、この科学の街でそんな事があるのだろうか？

服装からしておかしいのに、その上食い倒れたなんてあまりに設定が濃すぎる。

いくらサブカルチャーの発達した日本に生まれたと言っても、こっちは普通の学生なのだ。

青ピのように萌えやらオタク文化に精通しているわけではない。

これは俺の手にはおえない。
そう判断し後ろへ振り返ると、2人がすでに立っていた。

「ほらほら、カミヤん。話しかけられたら、ちゃんと返事せな」

「話しかけたのは俺だが、相手と会話がかみ合っていない場合はどうすればいい？」

「諦めずに再度チャレンジせよ」

言いながらグツと親指を立ててくる土御門。

こいつ絶対に楽しんでるだろ。

だが、俺達が座って食事をするには避けてばかりはいられない。
そう思い覚悟を決めると、俺は再び少女に話しかけた。

「え、えーと、食い倒れたって何の話だ？」

「1個58円のハンバーガー。お徳用の無料券がたくさんあったから」

「ふむふむ」

「とりあえず。30個ほど頼んでみたり」

「お徳過ぎだ馬鹿」

俺が即座に突っ込むと、相手の子はピクリとも動かなくなってしまう。
った。

そしてさらにその無言で突っ伏す様子のせいで哀しいオーラこっちにも伝わってくる。

いや、確かに知り合いでもない俺に馬鹿と言われたからってそこま
で傷付かなくても…。

そう思い、とりあえず隣に座って慰めるように頭を撫でてみる。

「いやスマン。別に君を傷つけるために言った訳じゃないんだ。
けど、なんでそんなに食べたんだ？」

「やけぐい」

「な、なんだって？」

「帰りの電車賃400円」

相手は俺が聞き返すと、もももどと身体を起こしてそう言った。

いや、だからって何でやけ食いに繋がるんだ？

そう思ったので、頭を撫でていた手を止めもう一度きき返す。

「それで？」

「全財産。300円」

「ああ…、それはドンマイ」

「買い過ぎ。無計画。だからやけぐい」

少女はそういうと、いまだトレーに積み上がっているハンバーガー
を恨めしそうに見ている。

確かに可哀想だが、こればかりはなあ。

そもそものんで巫女服で電車乗ってこんな場所で食事してるのかが
謎だ。

それに巫女さんがジャンクフード食べていいのか？
そんな風に相手の子に色々と疑問を持ったがとりあえず助け船を出すことにした。

「なら、ハンバーガー2つを100円で買ってやるよ」

「冷めてるけど。いいの？」

「別に良いって。冷めてるけど、こっちも少し安くなって得してんだ。別に気にしなくていいさ」

言いながらトレーからハンバーガーを2つ取ると、財布から100円を出して相手に渡した。

相手は渡された100円をジッと見てみると、それを袖にしまった。まあ、これで問題解決だろうと思いハンバーガーの1つ食べ始める。

「なんだ、意外とまだ温かいじゃねえか」

「たぶん。積んでたから」

「そういう事ね。んで、お前はもう帰るのか？」

「君が帰るまではいようかな。まだ少し苦しいし」

そういうと少女は自分のお腹辺りを撫でる。

まあ、洋服なら苦しければベルトを緩めろと言えるが。

巫女服のような和服だとそうもいかないのだろう。

それなら楽になるまで休めるように一緒にいるくらいはお安い御用だ。

「んじゃ、なんか飲み物いるか？ それぐらい席のお礼に奢って

やるぞ？」

「それじゃあ。メロンソーダ」

「……巫女さんのくせに、随分と俗世間に順応してるんだな」

「これは。ただの私服だから」

キリッという感じで相手は言い切るが、もう突っ込まないぞ。

そんな事より俺には先にやることあるんだ。

そう思い席を立つと、俺は自分の昼食と相手の注文通りメロンソーダを買いに向かった。

第七十二話 巫女さん（後書き）

姫神可愛いですよ。声が脳内再生できないんですが、とりあえず可愛いのは正義だと思います。あと、連続更新はまだ先になりますが、たまにフラッと更新するかもしれないので。のんびりお待ちください。

P・S・モスバーガーはファーストフードではなく、レストランなんです。知ってましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6470u/>

とある偽典の元始種子

2011年10月1日08時37分発行